第５章　遺 物

今回報告する出土遺物の量は、遺物収納ケースで532箱、総数にして59,312点におよぶ。人工遺物では瓦・塼に次いで陶磁器、金属製品の順で出土量が多い。自然遺物は貝類・骨類のほか、シーリ遺構からは種実類や糞石が得られている。

本章では、まず遺物を前半に人工遺物、後半に自然遺物とに分け、人工遺物は通し番号を付し、種別ごとの解説、観察表、実測図、写真の順で報告する。次に自然遺物は、基本的に貝類、骨類として報告するが、シーリ遺構内の自然遺物については、一括遺物として第27節に独立させて報告する。また、遺構や層序に伴う遺物については、前章において実測図のみを掲載したが、本章において種別ごとにまとめた観察表・写真により、詳細を報告する。

なお、遺物の写真は、その特性をより詳細に見せる目的から、実測図の傾きと異なる場合がある。また、その縮尺も基本的に33％としたが、大型・小型の遺物に関しては必要に応じ縮小・拡大し、展開を追加した遺物もある。また、今回報告する各遺物の集計表は、別添のCD−ROMに収めた。

第１節　中国産青磁（第3〜10表、第48〜54図、図版35〜41）

中国産の青磁は総数2,019点出土し、時期的には14世紀〜15世紀に位置づけられる資料が多い。器種は碗・小碗・皿・盤・鉢・器台・壺・香炉・餌入れなどが確認されているが、碗や皿類が大半を占める。以下に各器種の分類概念を記し、個々の特徴は観察表に提示する。

１．碗（１〜40）

Ａ類：口縁部が斜上方に立ち上がるもの。外面に鎬蓮弁文を描く（１）。

Ｂ類：口縁部が外反するもの。白い素地に釉薬を厚く施釉するもの（２、３）と灰色又は褐色の素地にガラス質の釉薬を薄く施釉するもの（４〜10）があり、後者はさらに口縁部が舌状（４〜８）と玉縁（９、10）に細分される。

Ｃ類：口縁部が直口するもの。外面に雷文帯を巡らせるもの（11〜15）、細蓮弁文を描くもの（16〜20）、両面にラマ式蓮弁文を描くもの（21）がある。

Ｄ類：直口口縁だがＣ類より器高が低いもの（22、24）や、内底を露胎にする粗製の製品（25）などがある。

碗底部：口縁部欠損のため断じ難いが、底部形態や文様からＢ類（27〜33）、Ｃ類（34〜38）、Ｄ類（39、40）に相当する資料が確認される。

2．小碗（41）

直口口縁で端部が内側に傾く。底部形態は不明だが、おそらく碁笥底と思われる。

3．皿（42～62）

A類：口縁部を外側に折り曲げる鍔縁口縁のもの。外面に蓮弁文、内底に貼付の双魚文などを施す（42～47）。

B類：外反口縁のもの。口唇部の形態などから外反皿（48～52）、稜花皿（53、54）、八角皿（55）などに細分される。

C類：器形はB類に似るが薄手で素地も白く、高台内面に白磁釉を施釉するもの（57）。

D類：直口口縁のもの。法量の差異から大型（58）と小型（59～62）があり、後者には菊花皿（59、60）もみられる。

4．盤（63～75）

A類：口縁部を外側に折り曲げる鍔縁口縁で、口唇端部を上方に摘み上げるもの（63～65）とそのままのもの（68、69）がある。前者は内面に蓮弁文を描く。

B類：口縁部を外側に折り曲げ、口唇部を稜花状に成形するもの。内面にラマ式蓮弁文や蓮弁文などを描く（70～73）。

C類：直口口縁のもの。内面に蓮弁文や唐草文などを描く（74、75）。

盤底部：口縁部欠損のため断じ難いが、A類に対応する可能性が高い（66、67）。

5．鉢（76～79）

器形は碗C類を大型にしたもので、器面に雷文や蓮弁文などを描く。

6．器台（80～83）

いわゆる夜学形の器台で、花瓶などと組み合わせる大型のもの（80～82）と瓶類の蓋置と考えられる小型のもの（83）がある。

7．壺（84～94）

壺は酒会壺と呼ばれる胴部の張りが強いもの（84～90、93、94）と、二階殿地区（沖縄埋文2005）に類例のある大型壺（91、92）が確認されている。

8．香炉（95）

小型の三足香炉で、聞香炉として使用されたと思われる。

9．餌入れ（96）

口縁部が内湾する平底の餌入れで、外面肩部に輪状の把手を持つ。明代の磁器製餌入れは現在のところ類例が確認されておらず、貴重な資料といえる。

第３表　中国産青磁観察一覧１

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第48図 図版35 1	碗	直口	口縁部	15.9 － －	外面に 鎬蓮弁文。	明オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 13c後～14c前。	11	撹乱
第48図 図版35 2	碗	外反	口～底	17.4 8.5 6.9	外面にラマ式 蓮弁文、内面に 蓮花唐草文を 描くが不鮮明。	灰オリーブ色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 全面に荒い貫入。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。全体的に 被熱か。内面に銅製 品？が付着。龍泉窯 で14c後～15c前。	19	B－4基壇状遺構表 面＋B－4シーリ内 清掃中＋B－4黄褐 色土＋B－4東側炭 混粘土層＋撹乱
第48図 図版35 3	碗	外反	口縁部	16.2 － －	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後～15c前。	19	E－4 5層
第48図 図版35 4	碗	外反	口縁部	17.4 － －	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。	黄灰色で やや細かい。	轆轤成形で口縁部は 外側折り返し。 龍泉窯系で14c後～ 15c前。	19	E－5 6層
第48図 図版35 5	碗	外反	口縁部	－ － －	無文。	薄オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第48図 図版35 6	碗	外反	口縁部	－ － －	無文。	薄オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第48図 図版35 7	碗	外反	口縁部	－ － －	無文。	オリーブ灰色の釉 を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。龍泉窯系 で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第48図 図版35 8	碗	外反	口縁部	－ － －	無文。	薄オリーブ灰色の 釉を両面に施釉。 全面に細かい貫入。	灰色で やや細かい。	轆轤成形。釉下に白 土？を塗布。龍泉窯 系で14c後～15c前。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第48図 図版35 9	碗	玉縁	口～底	14.9 7.2 6.1	無文。	灰オリーブ色の釉 を全面に施釉後、 外底を釉剥ぎ。 全面に細かい貫入。	灰色で やや細かい。	轆轤成形で口縁部は 外側折り返し。龍泉窯 系で14c後～15c前。	19	C・D－4・5 3層表面 ＋D－4・2層 ＋撹乱
第48図 図版35 10	碗	玉縁	口縁部	18.0 － －	無文。	灰オリーブ色の釉 を両面に施釉。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形で口縁部は 外側折り返し。龍泉窯 系で14c後～15c前。	19	C－3野面石積 み南側栗石 ＋C－2・3野面 石積み南側栗石
第48図 図版35 11	碗	直口	口縁部	15.5 － －	外面に雷文＋ 唐草文、内面 に唐草文。	明灰黄緑色の釉を 両面に施釉。両面 に荒い貫入。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後～15c中。	11	J－11 20～30
第48図 図版35 12	碗	直口	口縁部	－ － －	外面に雷文＋ ラマ式蓮弁 文？、内面に 唐草文。	明灰黄緑色の釉 を両面に施釉。	灰白色で 緻密。	轆轤成形。龍泉窯で 14c後～15c中。	19	B－4 3層表面 ＋撹乱

第４表　中国産青磁観察一覧２

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第48図 図版35 13	碗	直口	口縁部	16.1 － －	外面に雷文、内面に雷文＋草花文(人形手?)。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c中。	19	B－4 基壇状遺構溝中
第48図 図版35 14	碗	直口	口縁部	17.0 － －	外面に唐草文＋細蓮弁文、内面に雷文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後～15c中。	19	撹乱
第48図 図版35 15	碗	直口	口縁部	15.0 － －	外面に雷文＋蓮弁文、内面に牡丹唐草文＋如意頭文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c中。	11	撹乱
第48図 図版35 16	碗	直口	口縁部	14.1 － －	外面に細蓮弁文、内面に唐草文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で15c。	11	撹乱
第48図 図版35 17	碗	直口	口縁部	－ － －	外面に細蓮弁文、内面に唐草文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で15c。	19	撹乱
第48図 図版35 18	碗	直口	口＼底	11.6 6.8 5.0	外面に細蓮弁文。内面に捻花文、内底に印花文(寿字)。	薄オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。外底に窯道具？が溶着。龍泉窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第48図 図版35 19	碗	直口	口＼底	12.1 7.6 5.1	外面に細蓮弁文。	灰オリーブ色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。畳付に砂が付着。龍泉窯系で15c後～16c前。	11	撹乱
第48図 図版35 20	碗	直口	口縁部	13.2 － －	外面に細蓮弁文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。全面に荒い貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で15c後～16c前。	11	撹乱
第49図 図版36 21	碗	直口	口縁部	14.4 － －	両面にラマ式蓮弁文。	オリーブ黄色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤+型打ち成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第49図 図版36 22	碗	直口	口＼底	12.3 5.6 4.3	内底に印花文(牡丹)。	オリーブ灰色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。部分的に被熱か。龍泉窯系で16c。	19	B－4 基壇状遺構溝中
第49図 図版36 23	碗	直口	口縁部	16.0 － －	無文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で15c後～16c前。	19	C－5方形落込内＋C－5方形礎石抜穴内
第49図 図版36 24	碗	直口	口＼底	13.2 5.3 5.9	両面に陰圏線。	灰オリーブ色の釉を内底から高台際まで施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。福建・広東系で16c。	19	B－1 石積み6西側上層＋撹乱

第５表　中国産青磁観察一覧３

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第49図 図版36 25	碗	直口	口～底	16.7 － －	無文。	オリーブ灰色の釉を内底から外面腰部まで施釉後、内底を釉剥ぎ。	鈍黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。釉下にオリーブ褐色の釉を塗布か。福建・広東系で16c後～17c初。	11	撹乱
第49図 図版36 26	碗	－	底部	－ － 4.8	外面、内底の文様は不鮮明。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に荒い貫入。	白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後～15c前。	19	C－4 2層
第49図 図版36 27	碗	－	底部	－ － 6.0	内底に陰圏線＋印花文(蓮花)。	暗オリーブ色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。外底に窯道具？が付着。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第49図 図版36 28	碗	－	底部	－ － 6.9	内底に印花文(蓮花)。	明オリーブ灰色の釉を内底から畳付まで施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第49図 図版36 29	碗	－	底部	－ － 7.2	内底に印花文(鹿?)。	灰オリーブ色の釉を内底から高台外面まで施釉。両面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	B－2 石畳4段目上面
第49図 図版36 30	碗	－	底部	－ － 6.2	内底に陰圏線。	灰オリーブ色の釉を内底から高台内面まで施釉後、内底を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。内底と外底に窯道具？が溶着。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第49図 図版36 31	碗	－	底部	－ － 6.2	内底に陰圏線＋印花文(牡丹)。	灰白色の釉を内底から高台外面まで施釉。	鈍赤褐色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第49図 図版36 32	碗	－	底部	－ － 6.6	内底に印花文を施すが不鮮明。	灰オリーブ色の釉を内底から高台外面まで施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第49図 図版36 33	碗	－	底部	－ － 5.2	無文。	灰オリーブ色の釉を内底から高台外面まで施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E－5 6層
第50図 図版37 34	碗	－	底部	－ － 6.2	外面に蓮弁文、内底に陰圏線＋印花文(菊花)。	明オリーブ灰色の釉を内底から畳付まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B－4 黄褐色土
第50図 図版37 35	碗	－	底部	－ － 6.9	外面に蓮弁文、内底に陰圏線＋印花文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉薬後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	撹乱

第６表　中国産青磁観察一覧４

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第50図 図版37 36	碗	－	底部	－ － 6.3	外面にラマ式蓮弁文､内面に花唐草文､内底に陰圏線＋印花文(蓮花)。	明灰黄緑色の釉を内底から畳付まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。外底に窯道具?が溶着。龍泉窯系で14c後～15c前。	11 ＋ 19	B－2 石畳4段目上面 ＋撹乱
第50図 図版37 37	碗	－	底部	－ － 5.5	外面に蓮弁文、内底に陰圏線＋印花文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第50図 図版37 38	碗	－	底部	－ － 7.0	外面に蓮弁文、内底に唐草文(捻花文?)。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B－4 黄褐色土
第50図 図版37 39	碗	－	底部	－ － 4.8	無文。	灰黄色の釉を内底から高台際まで施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。 福建・広東系で15c後～16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第50図 図版37 40	碗	－	底部	－ － 5.3	無文。	灰オリーブ色の釉を内底から高台際まで施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	袋物の可能性あり。轆轤成形。釉下に白土を塗布か。龍泉窯系で14c後～15c。	19	C･D－4･5 3層表面
第50図 図版37 41	小碗	－	口縁部	6.4 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。焼成不良か。龍泉窯系で14c後～15c。	19	E－3 5層
第50図 図版37 42	皿	鍔縁	口縁部	11.6 － －	外面に蓮弁文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。全面に荒い貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	撹乱
第50図 図版37 43	皿	鍔縁	口～底	12.4 4.3 5.5	外面に蓮弁文、内底に陰圏線＋印花文か。	オリーブ灰色の釉を内底から畳付まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後～15c前。	19	C－5 3層表面
第50図 図版37 44	皿	鍔縁	口～底	12.8 4.9 6.3	外面に蓮弁文、内面に雷文＋花唐草文､内底に双魚文か。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。外底に窯道具？が溶着。龍泉窯で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第50図 図版37 45	皿	鍔縁	底部	－ － 6.2	外面に蓮弁文、内底に陽圏線。	灰オリーブ色の釉を内底から高台外面まで施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	11	撹乱
第50図 図版37 46	皿	鍔縁	底部	－ － 4.7	外面に鎬蓮弁文､内底に陰圏線＋双魚文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c。	19	撹乱
第50図 図版37 47	皿	鍔縁	底部	－ － 6.2	外面に蓮弁文、内底に陰圏線＋双魚文。	オリーブ黄色の釉を内底から畳付まで施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	11	撹乱

第７表　中国産青磁観察一覧５

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第51図 図版38 48	皿	外反	口縁部	11.9 – –	内面に花唐草文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B–4 2層
第51図 図版38 49	皿	外反	口縁部	12.6 – –	無文。	オリーブ色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第51図 図版38 50	皿	外反	口縁部	11.6 – –	内底に陰圏線か。	灰白色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E–4 5層
第51図 図版38 51	皿	外反	口～底	8.2 2.2 4.6	内底に陰圏線。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。両面に荒い貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第51図 図版38 52	皿	外反	口縁部	– – –	両面に蓮弁文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B–4 2層
第51図 図版38 53	皿	外反	口縁部	13.2 – –	外面に弧線文。内面にラマ式蓮弁文か。	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形で口唇部は稜花状。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	撹乱
第51図 図版38 54	皿	外反	口縁部	13.6 – –	外面に弧線文。内面にラマ式蓮弁文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形で口唇部は稜花状。全体的に被熱か。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第51図 図版38 55	皿	外反	口縁部	– – –	内面に雷文＋雲文(瑞雲文?)。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤＋型打ち成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	撹乱
第51図 図版38 56	皿	–	底部	– – 5.8	内底に陰圏線＋印花文(菊花?)。	オリーブ灰色の釉を内底から畳付まで施釉。全面に荒い貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	11	撹乱
第51図 図版38 57	皿	外反	口縁部	16.6 – –	無文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形で口唇部は輪花状。景徳鎮窯で16c。	11	撹乱
第51図 図版38 58	皿	直口	口～底	13.2 3.7 7.4	内底に陽圏線＋印花文(牡丹?)。	明緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c前。	19	E–4 5層
第51図 図版38 59	皿	直口	口縁部	11.6 – –	両面に蓮弁文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後～15c前。	19	撹乱
第51図 図版38 60	皿	直口	底部	– – 5.9	外面に蓮弁文、内面に蓮弁文、内底に陰圏線＋格子文(四方襷文?)。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。全面に荒い貫入。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱

第８表　中国産青磁観察一覧６

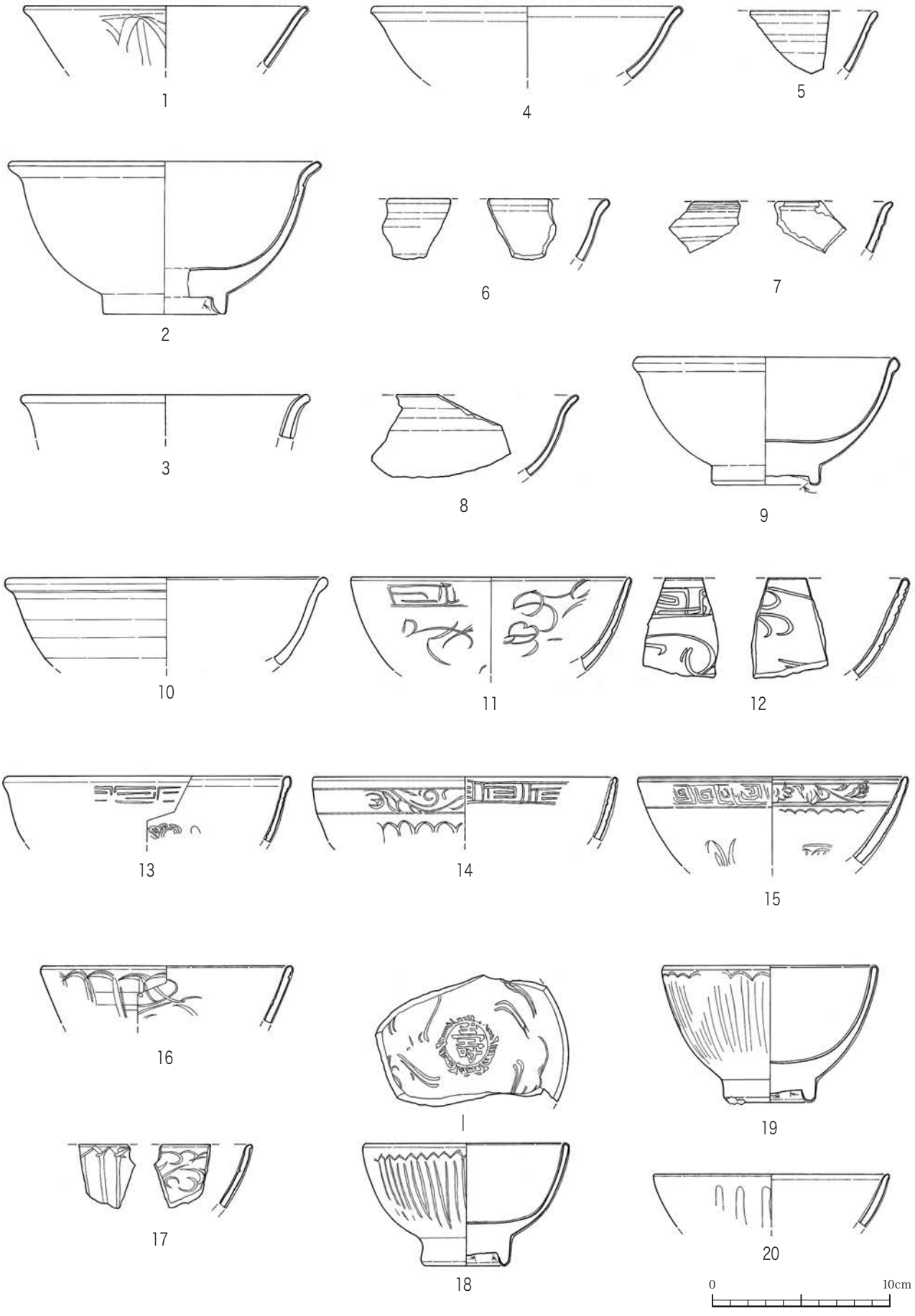
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第51図 図版38 61	皿	直口	口～底	9.3 2.8 5.7	内底に陽圏線。	明灰黄緑色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第51図 図版38 62	皿	直口	口～底	9.3 3.0 5.5	内底に陽圏線。	明緑灰色の釉を内底から高台外面まで施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。部分的に被熱か。龍泉窯系で15c後～16c前。	11	撹乱
第52図 図版39 63	盤	鍔縁	口縁部	24.4 － －	外面に陰圏線、内面に蓮弁文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c。	19	E－4 5層
第52図 図版39 64	盤	鍔縁	口縁部	20.4 － －	内面に蓮弁文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。内面に荒い貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c。	19	E－4 2層
第52図 図版39 65	盤	鍔縁	口縁部	－ － －	内面に蓮弁文。	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱か。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第52図 図版39 66	盤	－	底部	－ － 9.2	外面に陰圏線、内底に陰圏線。	オリーブ灰色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。底部形態は臥足か。龍泉窯系で14c後～15c。	19	E－4 5層
第52図 図版39 67	盤	－	底部	－ － 6.9	無文。	灰白色の釉を内底から畳付まで施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c。	19	撹乱
第52図 図版39 68	盤	鍔縁	口縁部	－ － －	無文。	オリーブ黄色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯系で14c後～15c。	11	I－9 南側
第52図 図版39 69	盤	鍔縁	口縁部	－ － －	外面に不明文、内面に弧線文(唐草文?)。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c後～15c前。	19	C－4 2層
第52図 図版39 70	盤	鍔縁	口縁部	－ － －	内面に弧線文(ラマ式蓮弁文?)。	暗オリーブ色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形で口唇部は稜花状。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第52図 図版39 71	盤	鍔縁	口縁部	－ － －	内面に弧線文＋唐草文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形で口唇部は稜花状。龍泉窯で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第52図 図版39 72	盤	鍔縁	口縁部	－ － －	内面に弧線文＋唐草文か。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形で口唇部は稜花状。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱

第９表　中国産青磁観察一覧７

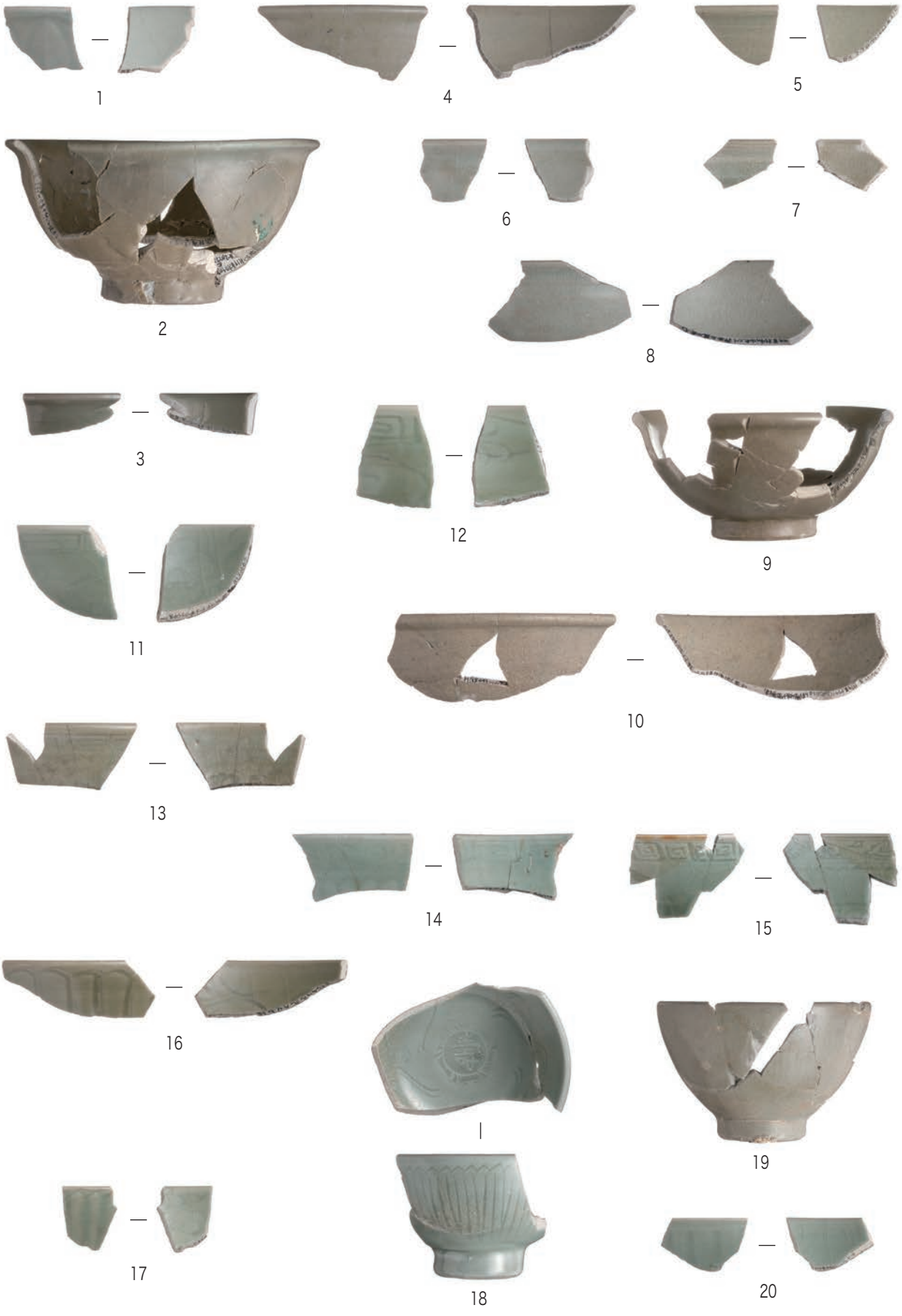
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第52図 図版39 73	盤	鍔縁	口～底	24.0 5.3 7.4	内面に弧線文(唐草文?)＋蓮弁文。	灰オリーブ色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c。	11	J－10 20～30 ＋撹乱
第52図 図版39 74	盤	直口	口縁部	24.4 － －	内面に陰圏線＋蓮弁文。	オリーブ色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B－4基壇状遺構表面 ＋B－4黄褐色土
第52図 図版39 75	盤	直口	口縁部	－ － －	内面に唐草文か。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c。	11	撹乱
第53図 図版40 76	鉢	直口	口縁部	－ － －	内面に陰圏線。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第53図 図版40 77	鉢	直口	口縁部	20.5 － －	外面に蓮弁文。内面に唐草文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B－4基壇状遺構表面 ＋B－4・3層表面 ＋B－4黄褐色土 B－5・3層表面＋撹乱
第53図 図版40 78	鉢	－	底部	－ － 12.5	外面に花唐草文、内面に花唐草文(蓮花?)、内底に陰圏線。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉薬後、外底を釉剥ぎ。外面に荒い貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第53図 図版40 79	鉢	直口	口縁部	20.3 － －	外面に雷文＋ラマ式蓮弁文、内面に雷文＋花唐草文(菊花・蓮花)。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	J－8 20～30 ＋撹乱
第53図 図版40 80	器台	－	口～底	21.6 19.9 18.2	外面に五葉文か。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形で口唇部は稜花状。龍泉窯で14c。	11	撹乱
第53図 図版40 81	器台	－	口縁部	27.7 － －	外面に唐草文か。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形で口唇部は稜花状。全体的に被熱。龍泉窯で14c。	11	撹乱
第53図 図版40 82	器台	－	胴部	－ － －	外面に五葉文か。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c。	11	撹乱
第53図 図版40 83	器台	－	底部	－ － 10.9	無文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉薬後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	夜学形器台か。轆轤成形。龍泉窯で14c。	11	撹乱
第54図 図版41 84	壺蓋	酒会壺	庇～袴	30.0 － 18.4	蓋甲に花唐草文。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、庇内面から袴外面を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	A－3裏込内 ＋A－4裏込内 ＋撹乱

第10表　中国産青磁観察一覧８

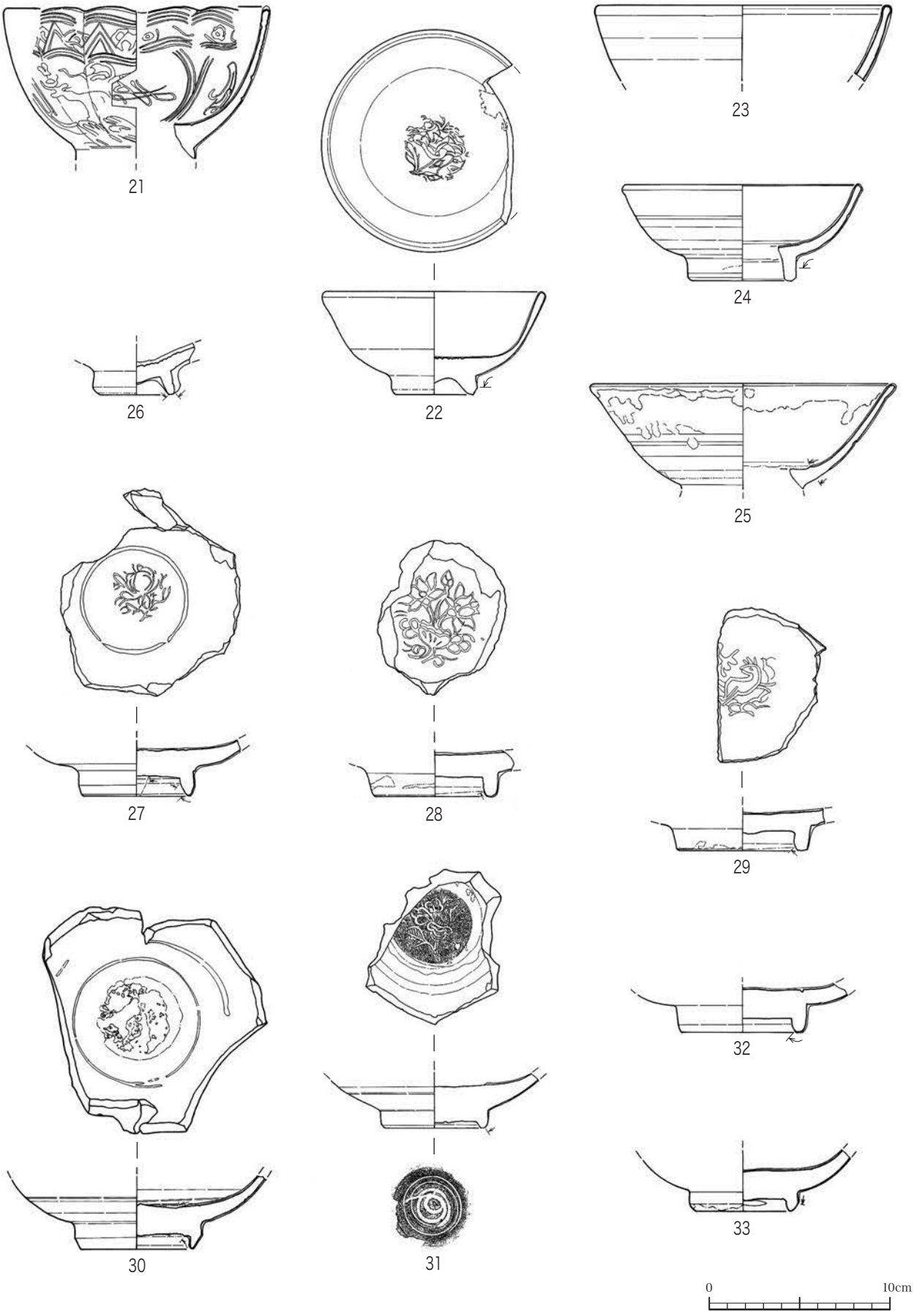
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第54図 図版41 85	壺蓋	酒会壺	袴	－ － 20.2	蓋甲に 蓮弁文。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、庇内面から袴まで釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	J－8 茶褐色灰混層
第54図 図版41 86	壺蓋	酒会壺	庇	－ － －	蓋甲に 花唐草文。	オリーブ灰色の釉を蓋甲から庇端部まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。龍泉窯で14c。	19	E－4 5層
第54図 図版41 87	壺蓋	酒会壺	庇	－ － －	無文。	オリーブ灰色の釉を蓋甲から庇端部まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c。	19	E－4 5層
第54図 図版41 88	壺蓋	酒会壺	庇	25.7 － －	蓋甲に 花唐草文。	オリーブ灰色の釉を蓋甲から庇端部まで施釉。外面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c。	11	撹乱
第54図 図版41 89	壺	酒会壺	口縁部	－ － －	外面に陰圏線 ＋花唐草文か。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	撹乱
第54図 図版41 90	壺	酒会壺	口縁部	－ － －	外面に陰圏線。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	11	J－10 20～30
第54図 図版41 91	壺	－	口縁部	－ － －	両面に陰圏線。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色で緻密。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第54図 図版41 92	壺	－	胴部	－ － －	外面に花唐草文(牡丹？) ＋唐草文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形で内面胴部に継ぎ目あり。全体的に被熱。龍泉窯で14c。	19	撹乱
第54図 図版41 93	壺	酒会壺	底部	－ － 20.0	外面に蓮弁文。	明灰黄緑色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c。	11	撹乱
第54図 図版41 94	壺	酒会壺	底部	－ － 17.0	外面に蓮弁文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。龍泉窯で14c後～15c前。	19	撹乱
第54図 図版41 95	香炉	－	口～底	8.8 4.6 －	無文。	明オリーブ灰色の釉を内面胴部から外面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形で外面に獣足を貼付。龍泉窯で14c後～15c中。	19	A－1 石積み6 西側上層
第54図 図版41 96	餌入れ	－	口～底	5.0 3.6 2.9	無文。	オリーブ灰色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱し溶着物多数。龍泉窯で14c後～15c前。	19	B－3基壇状遺構溝中＋B－4基壇状遺構溝中



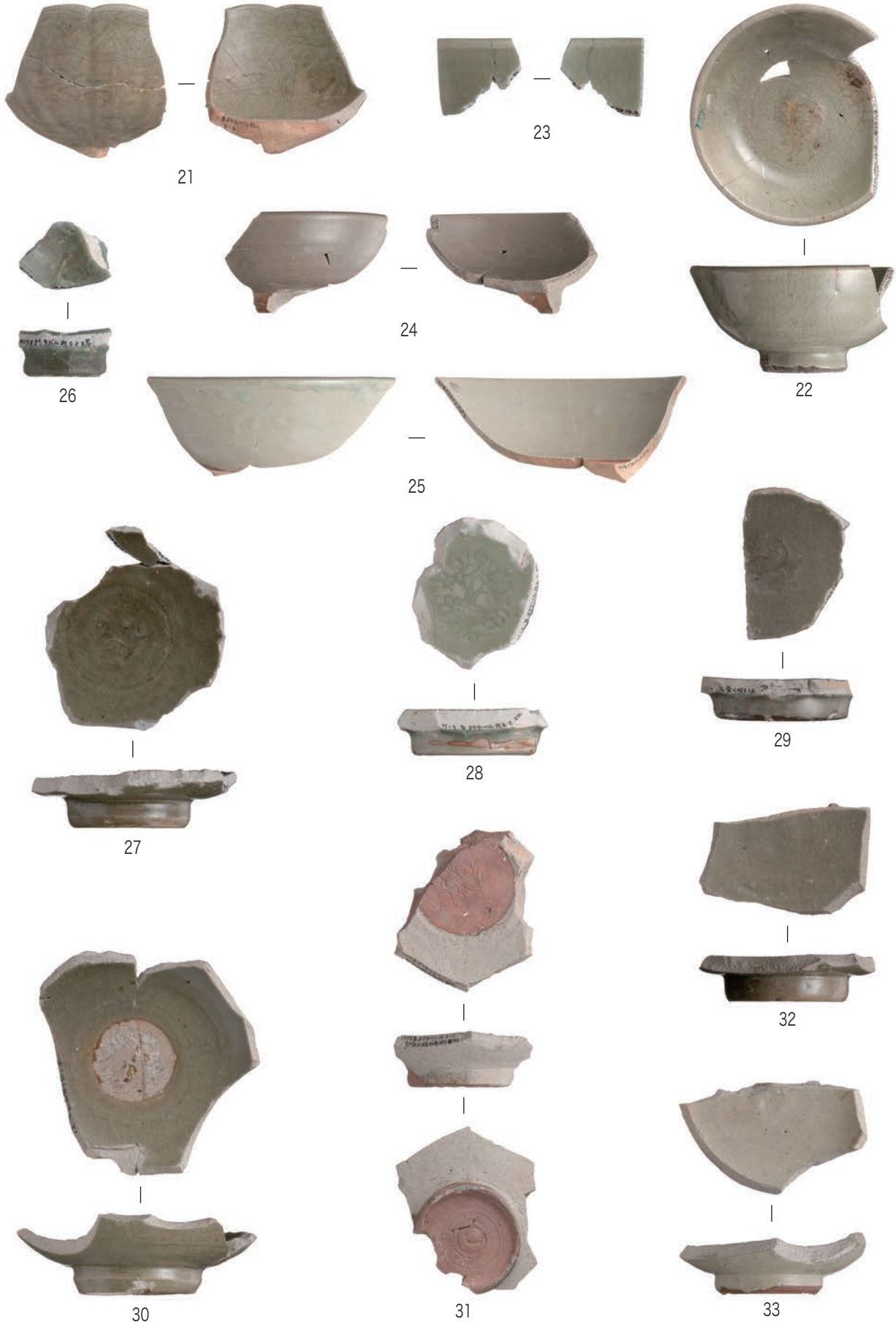
第48図　中国産青磁１



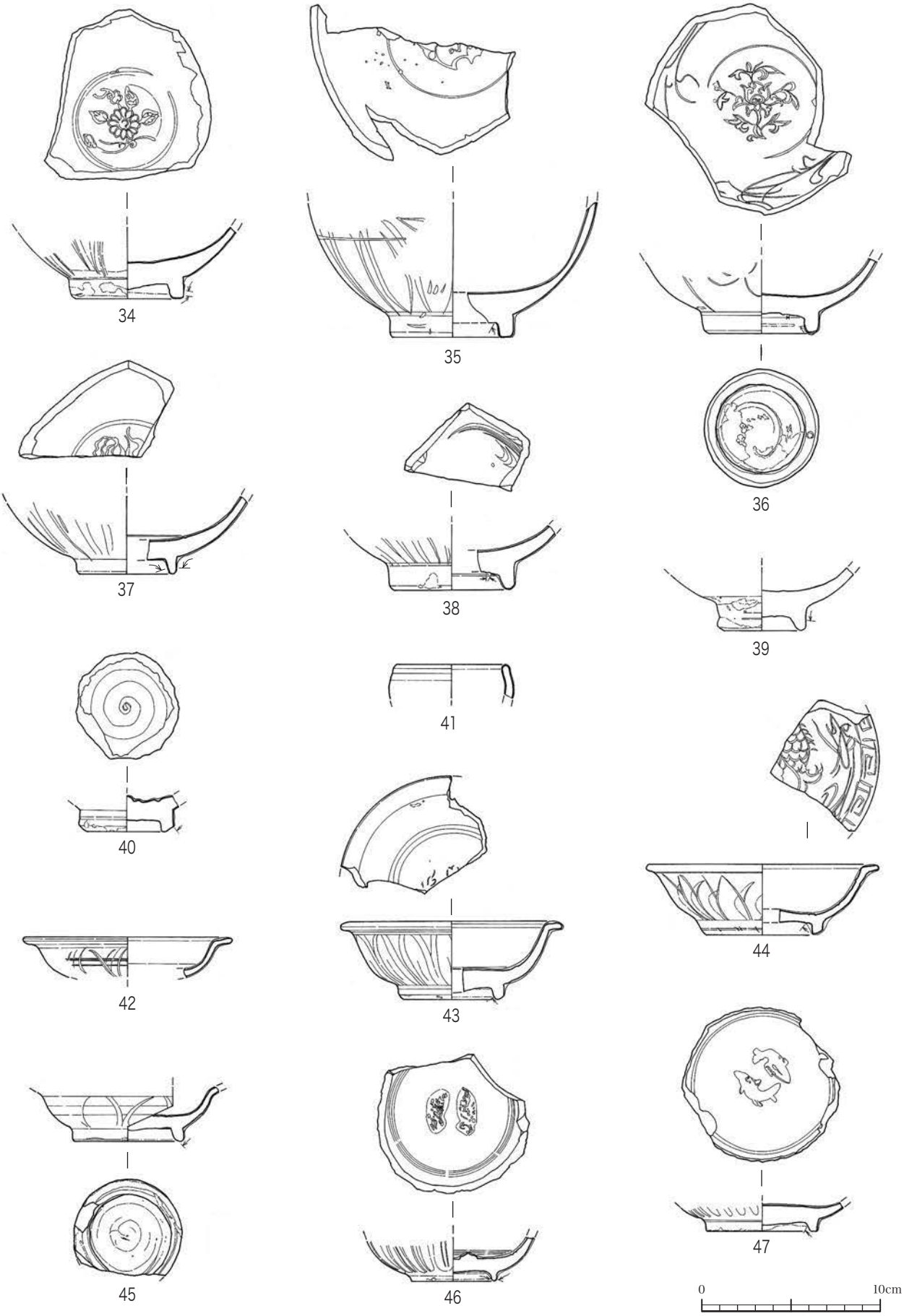
図版35　中国産青磁１



第49図　中国産青磁２

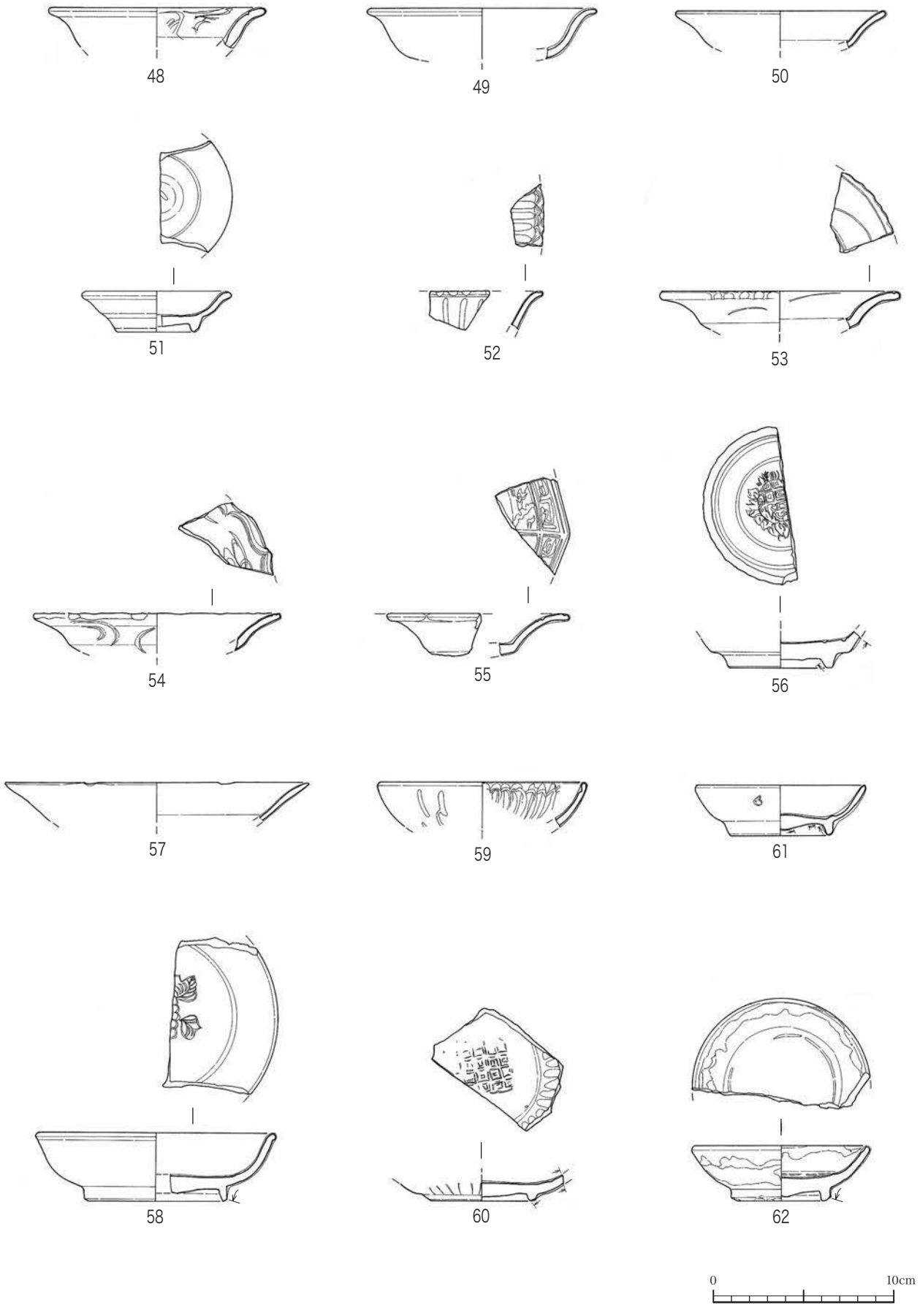


図版36　中国産青磁２

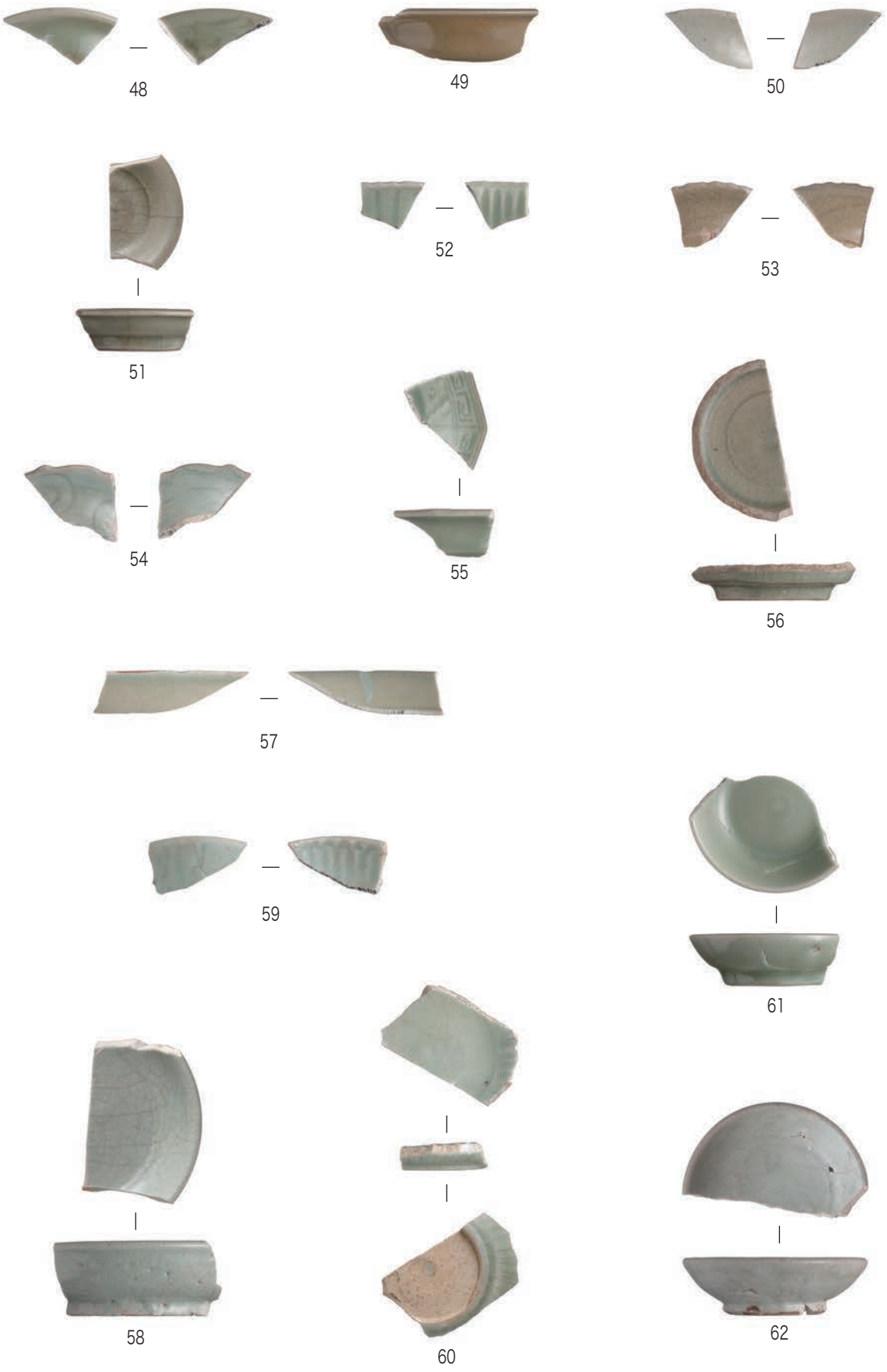


第50図　中国産青磁３

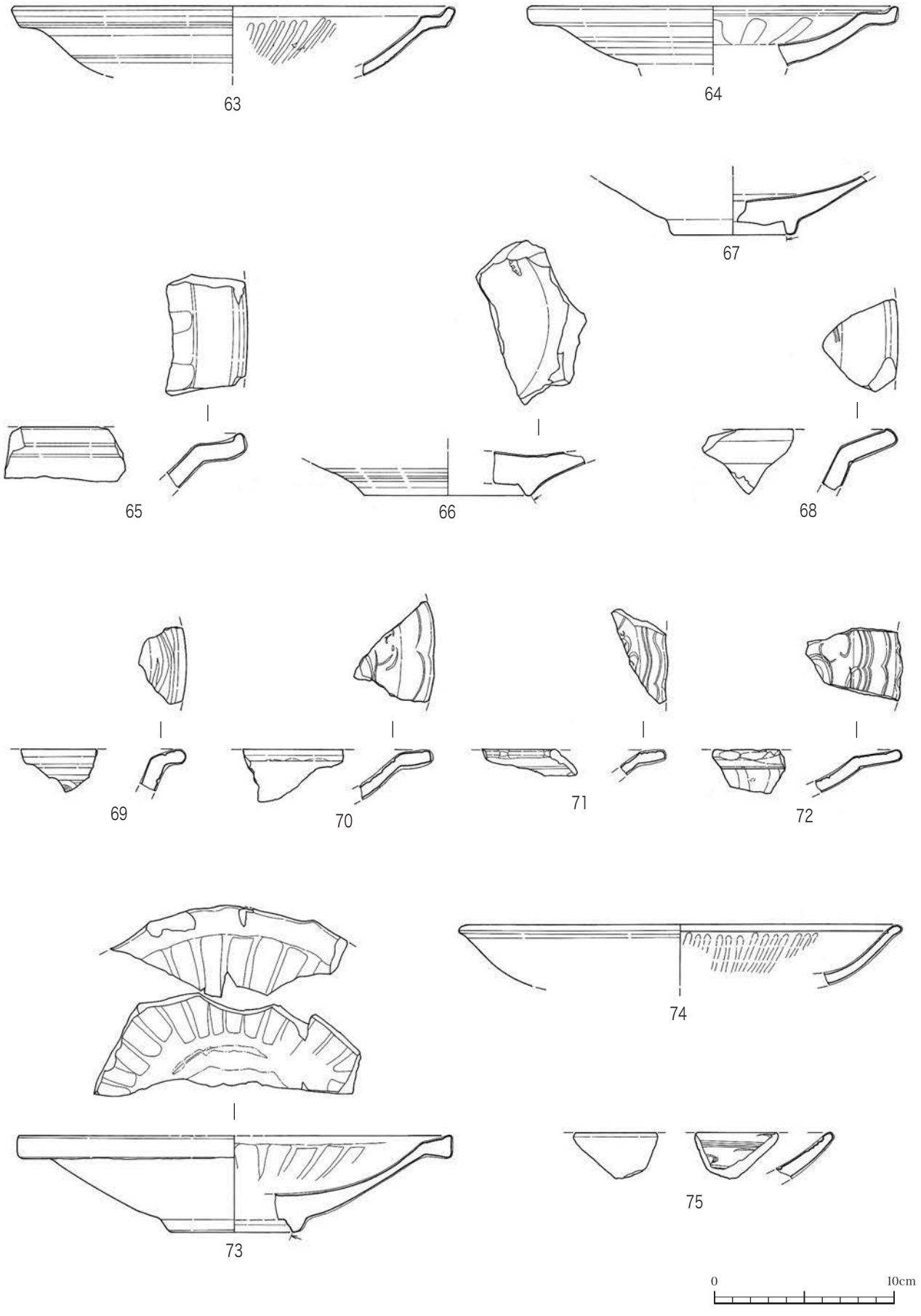
図版37　中国産青磁３



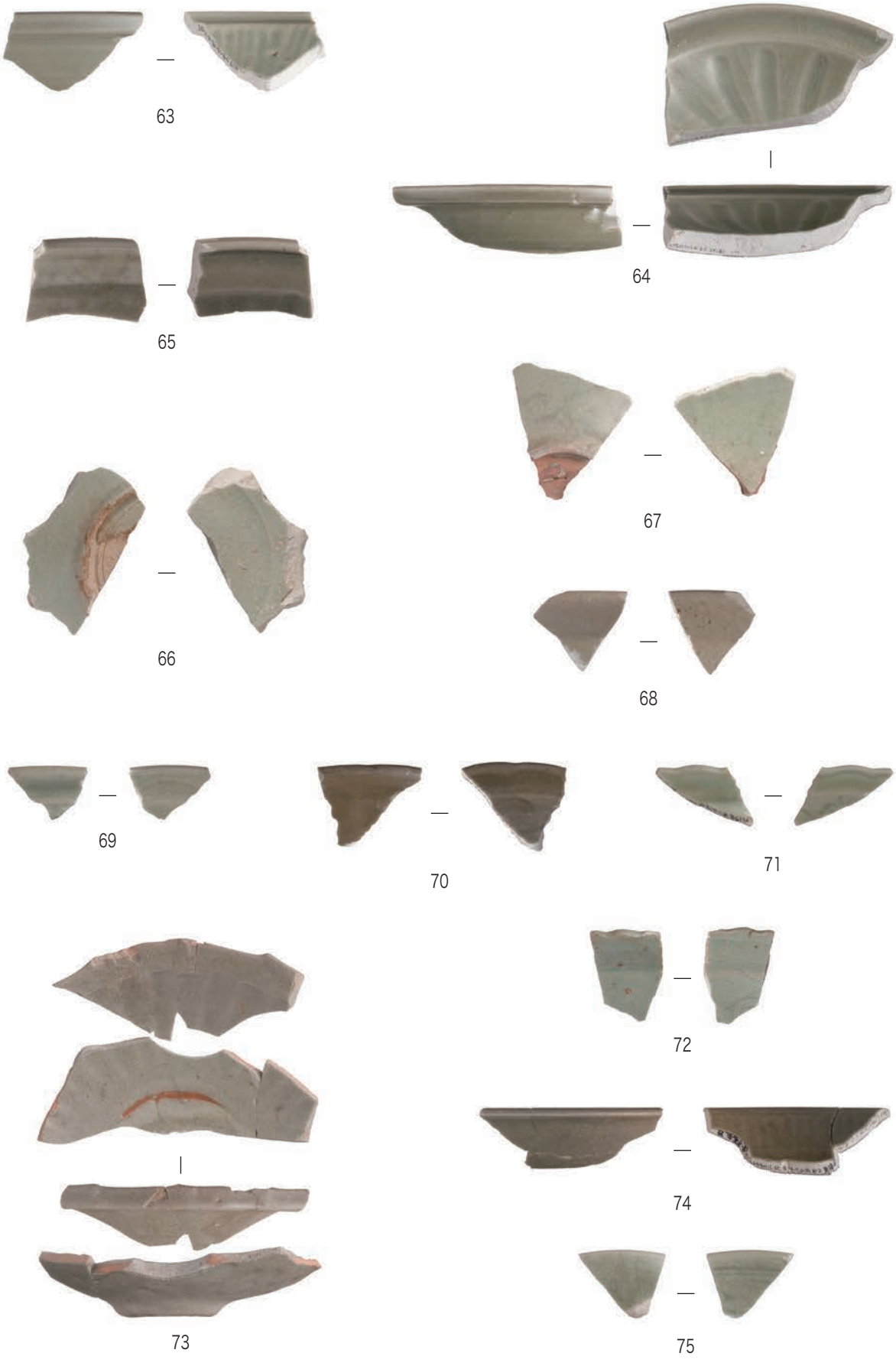
第51図　中国産青磁４



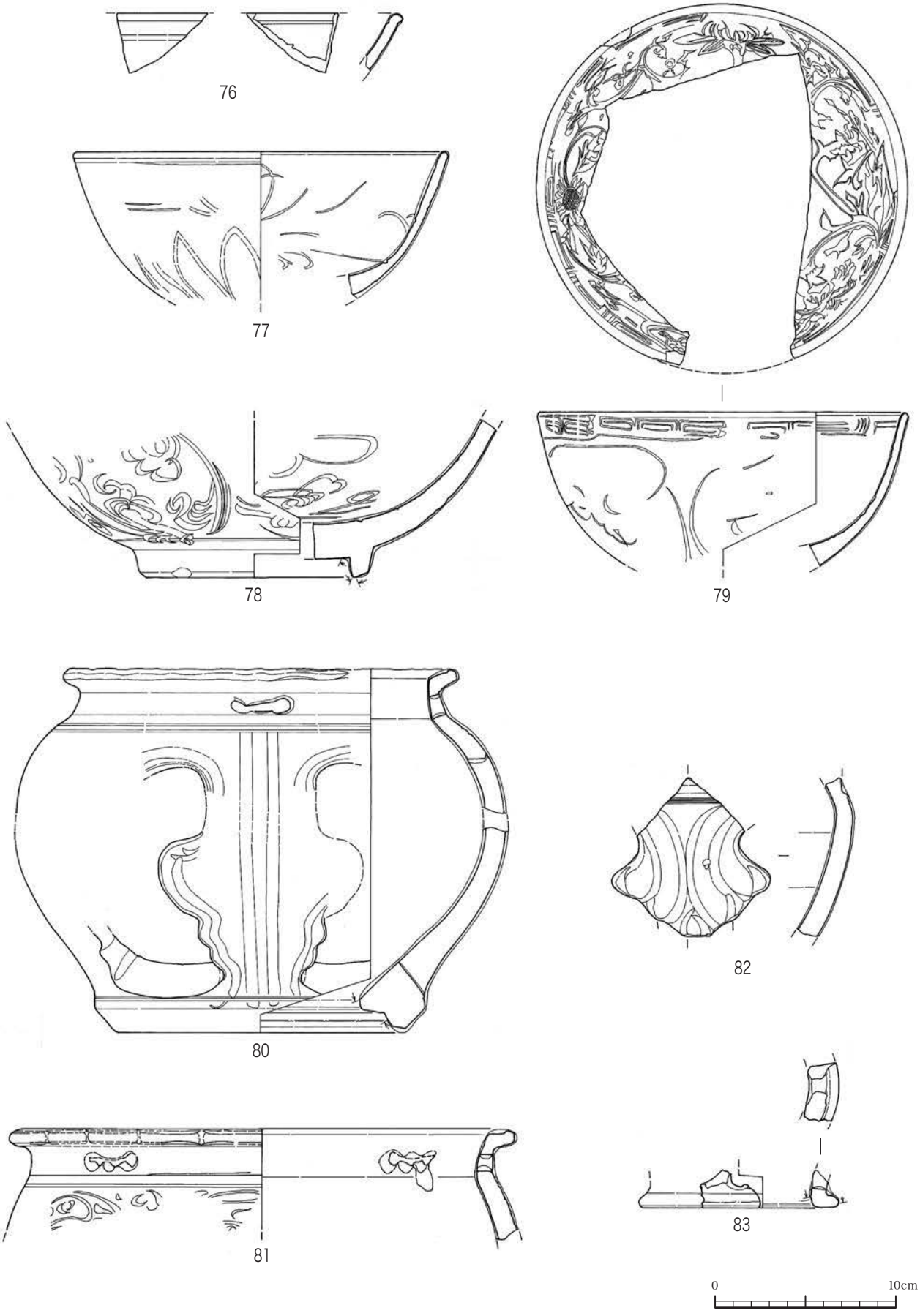
図版38　中国産青磁４



第52図　中国産青磁５

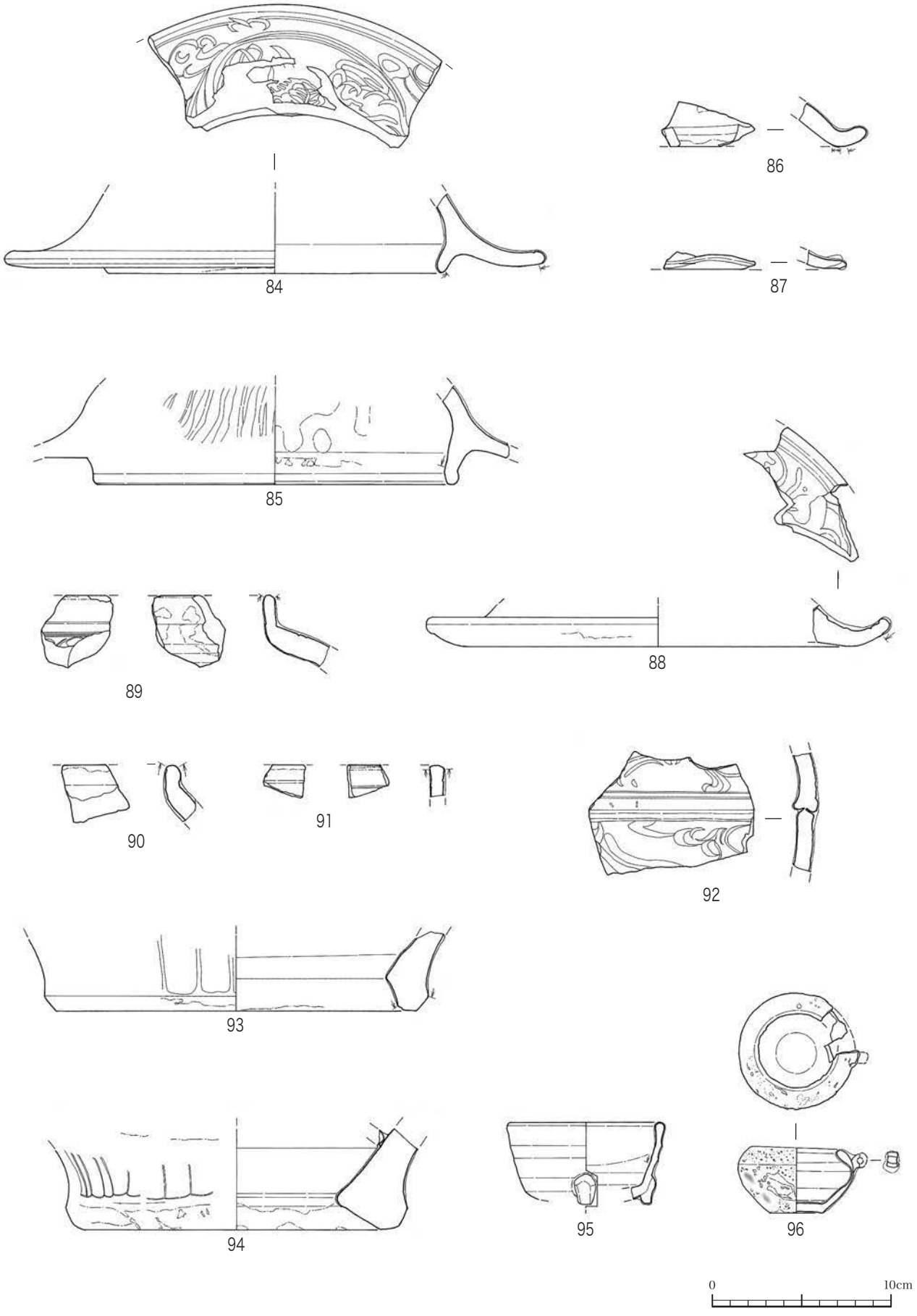


図版39　中国産青磁５



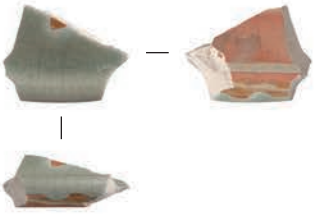
第53図　中国産青磁６

図版40　中国産青磁６



第54図　中国産青磁７

84



86

87

85

88

89

91

90

92

93

95

94

96

図版41　中国産青磁７

第２節　中国産白磁（第11～15表、第55～57図、図版42～44）

中国産白磁は総数592点出土しており、器種は碗・鉢・小碗・皿・小杯・瓶・壺・香炉・散蓮華が確認されている。年代は14世紀～19世紀頃まで幅広いが、碗及び皿類の大半や袋物は明代が多く、碗・皿の一部や小杯、散蓮華などが清代に位置づけられる。以下に各器種の分類概念を記し、個々の観察所見は第11～15表に譲る。

１．碗（97～105、110～116、118～120）

Ａ類：高台内刳りの浅い厚手のもの。いわゆるビロースクタイプである（97、98）。

Ｂ類：口縁部が外反するもの。器肉は薄く成形も丁寧である（100～105）。

Ｃ類：口縁部が直口する粗製の白磁。内底及び外底を露胎にする（110～115）。

Ｄ類：端反口縁を呈する型造りのもの。口唇部と畳付を釉剥ぎする（118、119）。

その他：上記分類に該当しないもの。清代の製品が多い。

２．鉢（106）

106は鉢の底部と考えられる。口縁形態は不明。外面に線彫りで文様を描く。

３．小碗（107～109、117）

小碗は腰折で直口口縁のもの（107、108、117）と、外反口縁を呈するもの（109）がある。

４．皿（121～147）

Ａ類：腰折で外反口縁のもの（121、122、141）。二階殿地区（沖縄埋文2005）に多数の類例がある。

Ｂ類：直口口縁を呈する粗製の白磁（124～127）。抉入高台の皿（125、126）もある。

Ｃ類：口縁部が外反する薄手のもので、碗Ｂ類に概ね対応する（128～139）。

Ｄ類：Ｂ類に後続する粗製のもの。碗Ｃ類に対応する資料もみられる（142～145）。

その他：上記分類に該当しないもの。清代の製品が多い。

５．小杯（148～150）

器形は端反口縁が多く、年代は明末～清代の製品がほとんどである。

６．袋物（151～154）

瓶（151、154）と壺（152、153）を袋物としてまとめた。明代の資料が多く、外面に線彫りで文様を描くものもある。

７．その他（155、156）

155は香炉、156は散蓮華である。いずれも清代の製品と考えられる。

第11表　中国産白磁観察一覧 1

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第55図 図版42 97	碗	外反	底部	－ － 5.8	内底に印花文(蓮花文)。	灰オリーブ色の釉を内底から外面腰部まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で14c後～15c前。	11	撹乱
第55図 図版42 98	碗	外反	底部	－ － 4.7	無文。	透明釉を内底から高台外面まで施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。福建産で14c後～15c前。	19	E－5 6層
第55図 図版42 99	碗	－	底部	－ － 6.8	無文。	灰白色の釉を内底から畳付に施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で14c後～15c。	19	B－4 基壇状遺構 表面
第55図 図版42 100	碗	口折	口縁部	13.6 － －	無文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c。	11	I－6 基壇東
第55図 図版42 101	碗	外反	口縁部	14.8 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c。	11	I－9 南側
第55図 図版42 102	碗	外反	口縁部	－ － －	無文。	白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c。	11	撹乱
第55図 図版42 103	碗	－	底部	－ － 5.2	無文。	白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第55図 図版42 104	碗	－	底部	－ － 5.6	無文。	透明釉を内底から畳付・外底に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c。	11	I－9 南側
第55図 図版42 105	碗	外反	口～底	12.4 5.8 4.8	無文。	灰白色の釉を内底から畳付・外底に施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	白色で緻密。	貫入は意図的か。 轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c初。	19	B－4 基壇状遺構 溝中＋撹乱
第55図 図版42 106	鉢	－	底部	－ － －	外面に蓮弁文と二重圏線。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。高台内に砂が付着。景徳鎮窯で15c～16c前。	11	撹乱
第55図 図版42 107	小碗	腰折	口～底	8.0 3.9 2.8	無文。	透明釉を全面に施釉後、畳付と内底を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c後。	11	撹乱
第55図 図版42 108	小碗	腰折	口～底	10.2 － －	外面に貼付の突帯文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c。	11	I－6 基壇東 ＋撹乱

第12表　中国産白磁観察一覧２

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 台径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第55図 図版42 109	小碗	外反	口縁部	8.6 － －	無文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c。	19	B－4 黄褐色土
第55図 図版42 110	碗	直口	口～底	13.3 4.6 5.4	内底に雷文＋「堂」銘。	浅黄色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。福建・広東系で15c後～16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第55図 図版42 111	碗	直口	底部	－ － 5.8	無文。	灰黄色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。福建・広東系で15c後～16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第55図 図版42 112	碗	直口	底部	－ － 5.7	無文。	灰黄色の釉を内面胴部から外面胴部まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。福建・広東系で15c後～16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第55図 図版42 113	碗	直口	口縁部	13.2 － －	無文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で16c。	11	撹乱
第55図 図版42 114	碗	直口	口縁部	14.4 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建・広東系で16c後。	19	A－1 石積み6 西側上層
第55図 図版42 115	碗	直口	口縁部	16.2 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建・広東系で16c後～17c前。	19	B－5 シーリ内 木炭層
第55図 図版42 116	碗	直口	口縁部	11.6 － －	無文。	透明釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。福建産で17c。	19	撹乱
第55図 図版42 117	小碗	直口	口縁部	8.5 － －	無文。	白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。福建産？で17cか。	11	J－9 西側
第55図 図版42 118	碗	端反	口～底	9.3 4.4 4.8	無文。	透明釉を全面に施釉後、口唇部と畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。徳化窯で18c後～19c。	11	撹乱
第55図 図版42 119	碗	端反	口縁部	8.9 － －	無文。	透明釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。徳化窯で18c後～19c。	19	B－1 石積み4 裏込内(黒)
第55図 図版42 120	碗	直口	口縁部	－ － －	外面に蓮弁文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。福建産？で清代か。	11	撹乱

第13表　中国産白磁観察一覧 3

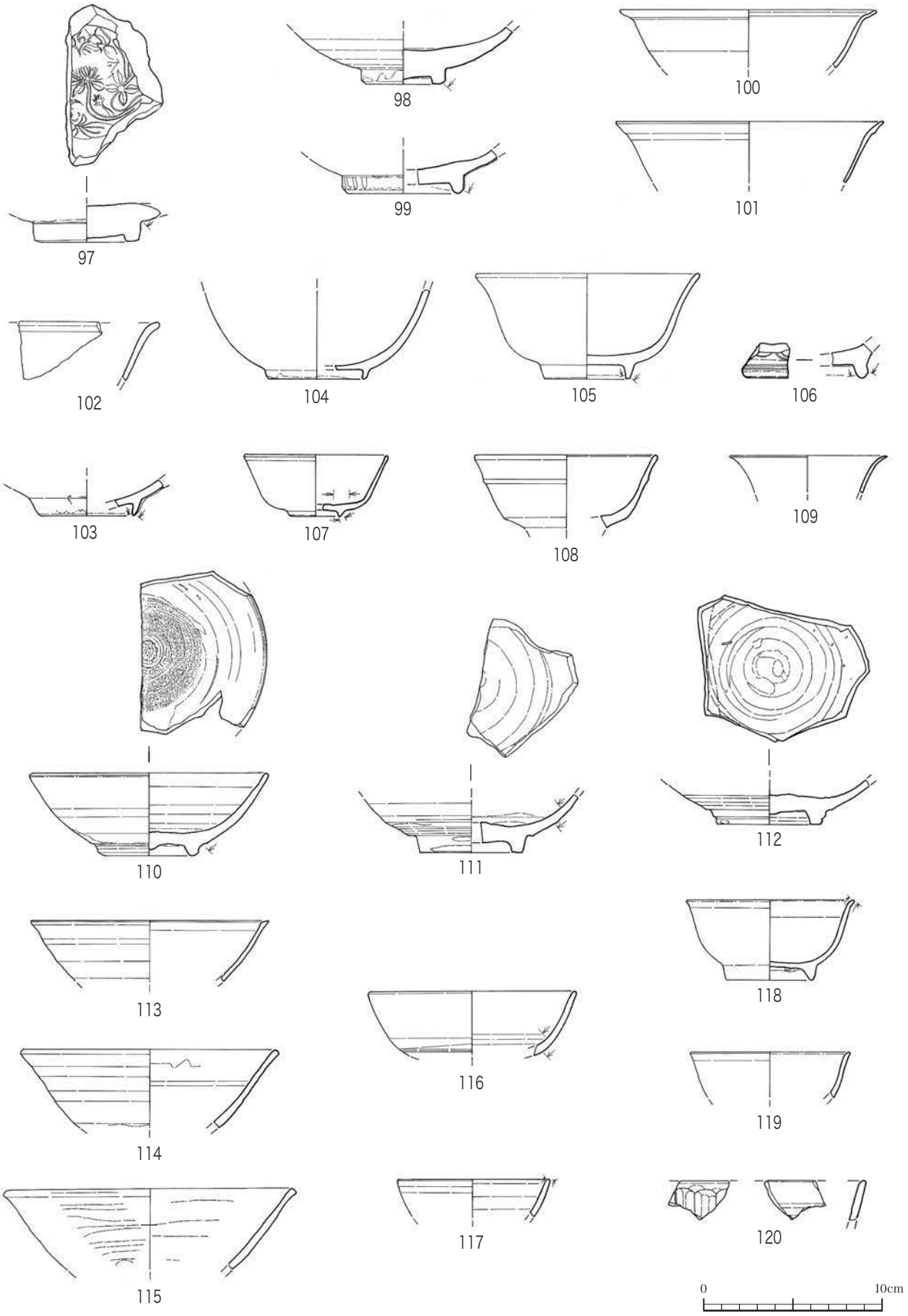
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第56図 図版43 121	皿	腰折	口縁部	10.8 – –	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。全体的に被熱。景徳鎮窯で14c～15c。	19	B–4 基壇状遺構 表面
第56図 図版43 122	皿	腰折	口縁部	13.8 – –	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で14c末～15c初。	11	撹乱
第56図 図版43 123	皿	端反	口縁部	13.6 – –	無文。	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で14c後～15c前。	11	撹乱
第56図 図版43 124	皿	直口	口縁部	14.4 – –	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎか。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で14c～15c。	19	A–1 石積み6 西側上層
第56図 図版43 125	皿	抉高台	口～底	9.4 2.1 4.3	無文。	透明釉を内底から外面胴部まで施釉。全体に細かい貫入。	白色で細かい。	轆轤成形。内底に目跡が２箇所残り、外面胴部に類品の破片が溶着。福建産で15c～16c前。	19	撹乱
第56図 図版43 126	皿	抉高台	底部	– – 4.6	無文。	淡黄色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。内底に目跡が４箇所残る。福建産で15c～16c前。	11	I–6 基壇東＋撹乱
第56図 図版43 127	皿	直口	口縁部	– – –	無文。	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で15c中～15c後。	11	撹乱
第56図 図版43 128	皿	外反	口縁部	– – –	内底に陰圏線１条。	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で15c中～15c後。	11	撹乱
第56図 図版43 129	皿	外反	口～底	15.6 3.5 9.3	無文。	灰白色の釉を内底から畳付・高台内面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で 緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第56図 図版43 130	皿	外反	口～底	11.2 2.2 6.4	無文。	白色の釉を内底から畳付・高台内面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。 畳付に砂が付着。 景徳鎮窯で16c。	11	撹乱
第56図 図版43 131	皿	外反	口縁部	15.0 – –	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。全体に細かい貫入。	灰白色で細かい。	貫入は意図的か。 轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	J–6 基壇東
第56図 図版43 132	皿	外反	口縁部	15.5 – –	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	19	B–1 石積み6 西側上層

第14表　中国産白磁観察一覧 4

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第56図 図版43 133	皿	外反	底部	– – 9.1	無文。	白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形（型成形の可能性あり）。景徳鎮窯？で15c後～16c前か。	11	撹乱
第56図 図版43 134	皿	外反	底部	– – 8.6	無文。	灰白色の釉を内底から畳付・高台内面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	貫入は意図的か。轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	19	撹乱
第56図 図版43 135	皿	外反	底部	– – 11.0	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。高台内に砂が付着。景徳鎮窯で16c。	19	撹乱
第56図 図版43 136	皿	外反	底部	– – 10.8	無文。	白色の釉を内底から畳付・高台内面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。畳付に砂が付着。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第56図 図版43 137	皿	外反	底部	– – 8.1	無文。	灰白色の釉を内底から畳付・高台内面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色で緻密。	貫入は意図的か。轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第56図 図版43 138	皿	外反	底部	– – 6.3	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。畳付に砂が付着。景徳鎮窯で16c。	19	A－1 石積み6 西側上層
第56図 図版43 139	皿	外反	底部	– – 6.6	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。内底と畳付に砂が付着。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第56図 図版43 140	皿	–	底部	– – 13.0	無文。	灰白色の釉を内底から畳付・高台内面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	貫入は意図的か。轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第56図 図版43 141	皿	腰折	口縁部	8.0 – –	無文。	白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第57図 図版44 142	皿	碁笥底	口～底	9.9 2.6 4.1	無文。	透明釉を内面胴部から外面胴部まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建産で16c。	11	J－6 基壇東

第15表　中国産白磁観察一覧 5

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第57図 図版44 143	皿	直口	口縁部	9.2 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 福建・広東系で16c後～17c前。	19	B－4 シーリ内 黒褐色土
第57図 図版44 144	皿	直口	口縁部	8.0 － －	無文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形（型成形の可能性あり）。 景徳鎮窯で15c～16c。	19	B－4 黄褐色土
第57図 図版44 145	皿	直口	口縁部	－ － －	無文。	灰白色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 福建・広東系で15c後～16c。	19	A－1 石積み6 西側上層
第57図 図版44 146	皿	端反	口縁部	8.6 － －	無文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	型成形。徳化窯で18c後～19c。	11	撹乱
第57図 図版44 147	皿	直口	口～底	12.0 2.2 7.0	無文。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。徳化窯（日本産の可能性あり）で19c。	11	撹乱
第57図 図版44 148	小杯	－	底部	－ － 3.1	無文。	灰白色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形（型成形の可能性あり）。景徳鎮窯で16c後～17c前。	11	撹乱
第57図 図版44 149	小杯	端反	口～底	6.2 3.5 2.4	無文。	透明釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	型成形。 徳化窯で17c。	11	撹乱
第57図 図版44 150	小杯	外反	口～底	3.5 1.9 1.6	無文。	透明釉を全面に施釉後、口唇部と畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。高台内面に砂が付着。徳化窯で18c後～19c。	11	J－9 灰混層
第57図 図版44 151	瓶	－	口縁部	6.0 － －	外面口縁部下位を蓮弁状？に成形。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形（型成形の可能性あり）。景徳鎮窯？で年代不明。	11	I－7 10～20
第57図 図版44 152	壺	酒会壺	口縁部	－ － －	外面肩部に蔓唐草文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。全面的に被熱。景徳鎮窯で15c～16c。	11	撹乱
第57図 図版44 153	壺	－	底部	－ － 6.5	無文。	薄明緑灰色の釉を内底から外面胴部まで施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。福建産で13c～14cか。	11	I－6 基壇東
第57図 図版44 154	瓶	玉壺春	胴部	－ － －	外面胴部にラマ式蓮弁文+宝相華唐草文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。内面頸部に接ぎ目あり。景徳鎮窯で15c中～16c前。	11	撹乱
第57図 図版44 155	香炉	－	口縁部	－ － －	無文。	明緑灰色の釉を内面頸部から外面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯？で清代。	11	撹乱
第57図 図版44 156	散蓮華	－	胴部	－ － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	型成形か。外底に砂が付着。福建産で17c～18c。	19	撹乱


97
98
99
100
101
102
104
105
106
103
107
108
109
110
111
112
113
116
118
114
119
115
117
120
0
10cm

第55図　中国産白磁１

97

98

100

101

102

99

106

103

104

105

109

107

108

110

111

112

113

118

114

116

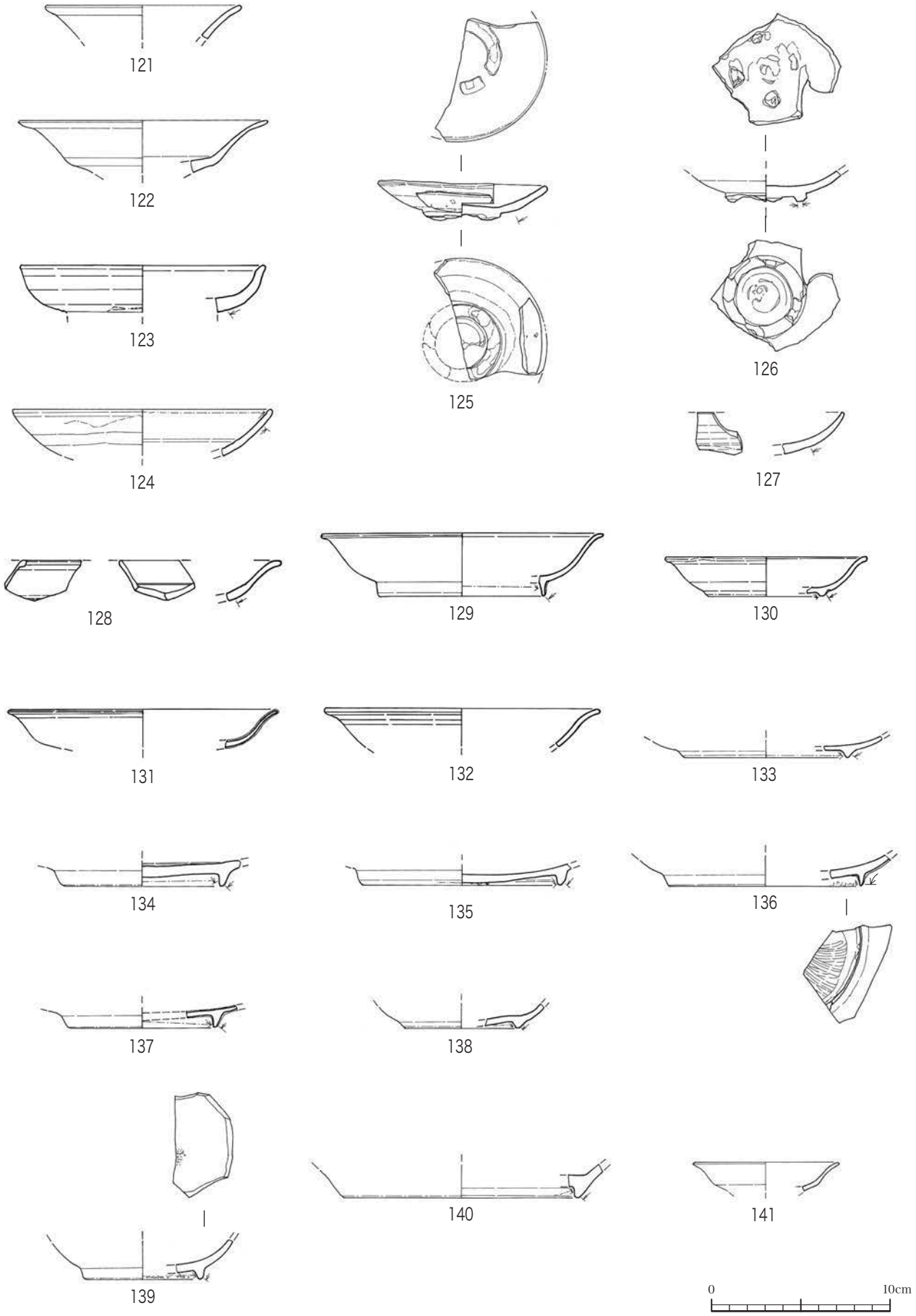
119

115

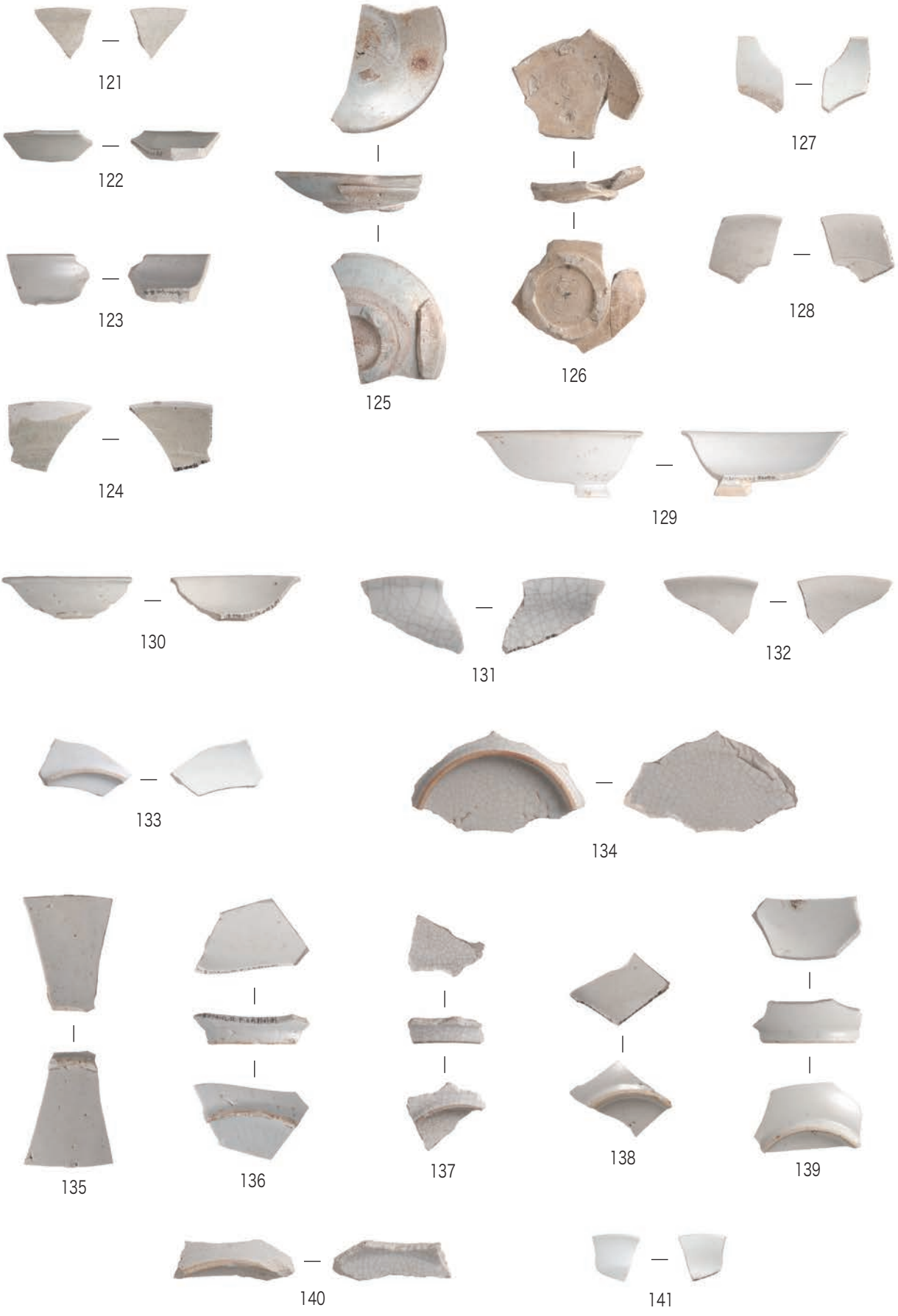
117

120

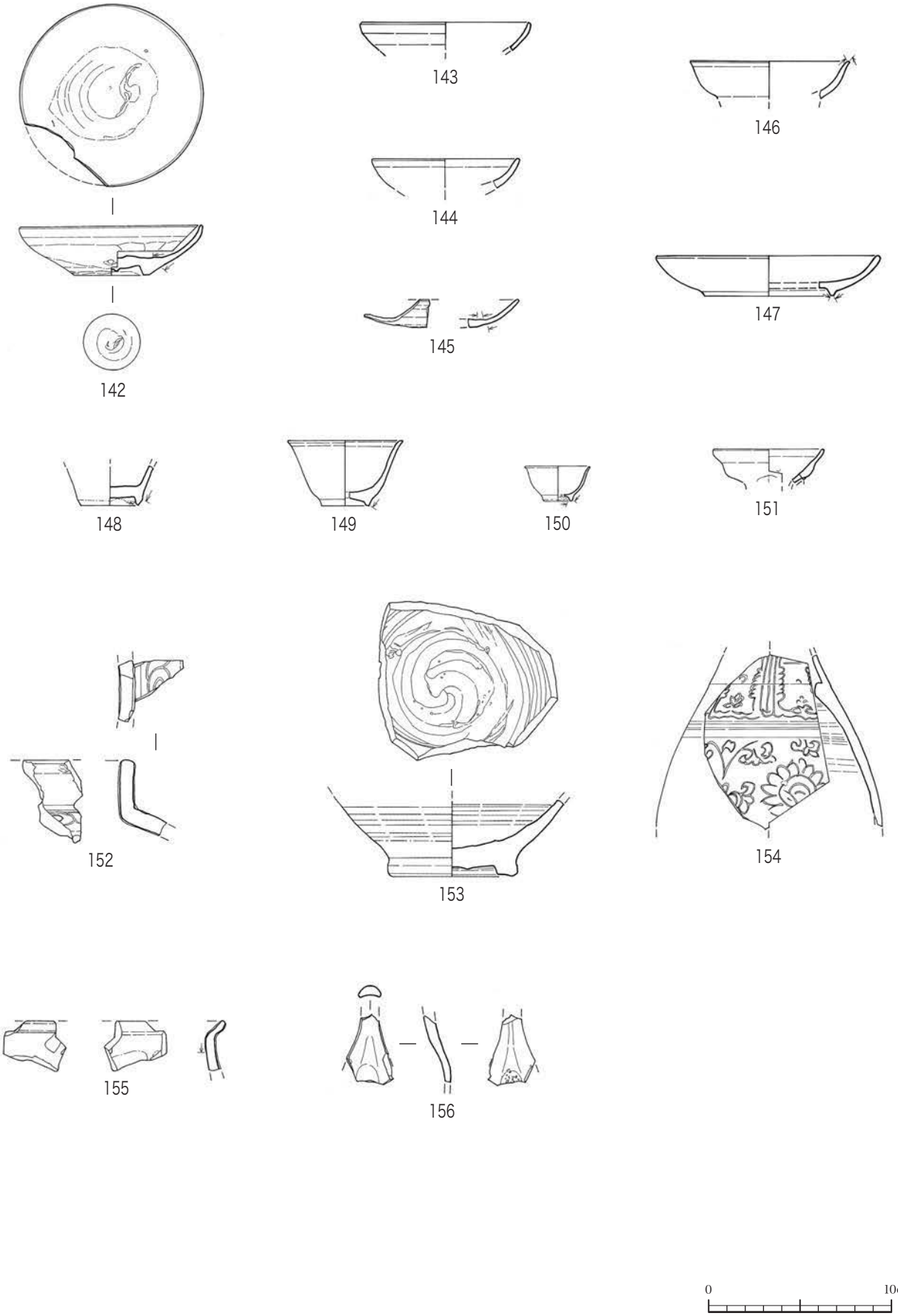
図版42　中国産白磁１


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
0
10cm

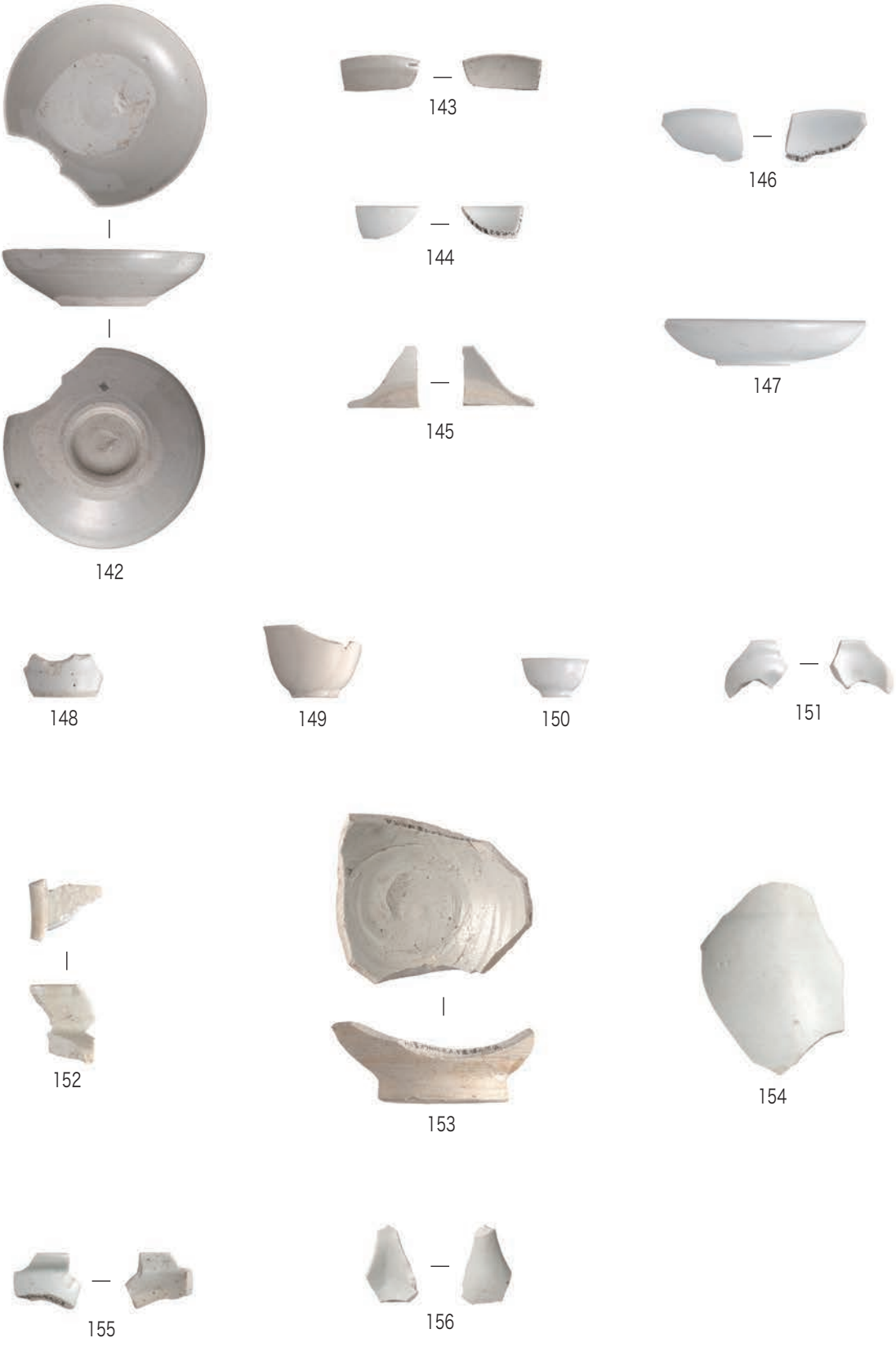
第56図　中国産白磁２


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141

図版43　中国産白磁２


142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
0
10cm

第57図　中国産白磁３



図版44　中国産白磁３

第３節　中国産染付（第16～24表、第58～64図、図版45～51）

中国産の染付は総数 2,249 点出土している。器種は碗・小碗・皿・小杯・鉢・瓶・散蓮華などがあるが、大半を碗類が占める。年代的には 15 世紀～ 19 世紀までのものがみられるが、いわゆる明末清初（16 世紀後半～ 17 世紀前半）に位置づけられる製品が一定量確認されており、当該期の陶磁器様相を知る上で重要と考えられる。以下に器種ごとの分類概念を記し、個々の詳細は観察表に提示する。

１．碗（157～196）

Ａ類：外反口縁のもの。景徳鎮窯産で明代（157～163、196）。

Ｂ類：口縁部が直口するもの（164～172）で、腰折（165～168、170）や饅頭心（172）を含む。景徳鎮窯産で明代。

Ｃ類：口縁部が直口する粗製品。漳州窯又は福建・広東産で明末清初（173～176）。

Ｄ類：口縁形態は様々だが総じて器肉が薄く、成形も丁寧なもの。景徳鎮窯産で明末清初（177、178）と清代（192～195）に大別される。

Ｅ類：福建・広東産の粗製のもの。清代（179～181）。

Ｆ類：徳化窯又は福建産のもの。清代（182～191）。

２．小碗（197～219、233）

Ａ類：直口口縁のもの。碗Ｂ類に対応する。景徳鎮窯産で明代（198、207）。

Ｂ類：外反口縁で蛇の目高台を持つもの。景徳鎮窯産で明末清初（199～201）。

Ｃ類：端反または直口口縁で轆轤成形と型成形がある。徳化窯又は福建産で清代（202～204、210、211、213～215）。

Ｄ類：薄手の端反または直口口縁。景徳鎮窯産で清代（205、206、208、209、212、216～219）。

３．皿（220～232、234、236～240）

Ａ類：外反口縁のもの（224～229、237）と、碁笥底で直口口縁（239、240）のものがある。景徳鎮窯産で明代。

Ｂ類：轆轤成形で端反もしくは直口口縁（220～223、236、238）のものと、型造りのもの（233、234）がある。徳化窯又は福建産で清代。

Ｃ類：上記分類に該当しないもの。明末清初の製品が多い（230～232）。

４．その他（235、241～256）

小杯（241～246）は端反や直口口縁が多く、景徳鎮窯産で明末清初。鉢（235、247）は外反口縁と考えられるもので、景徳鎮窯産で明代。瓶（248～252）はほとんどが景徳鎮窯産だが明代～清代まで幅広い。散蓮華（253）は徳化窯、蓋（254～256）は景徳鎮窯を産地とし、いずれも清代に位置づけられる。

第16表　中国産染付観察一覧1

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第58図 図版45 157	碗	外反	口～底	15.1 6.2 5.2	外面に花鳥文、内底に草花文か。	灰白色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c中～後。	11	撹乱
第58図 図版45 158	碗	外反	口縁部	15.0 － －	外面に宝唐草文?+如意頭繋文、内底文様は不明。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c中～後。	11	I－6 基壇東
第58図 図版45 159	碗	外反	口～底	13.4 6.6 5.8	外面に花卉文、内底に草花文。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c前～中。	11	撹乱
第58図 図版45 160	碗	外反	口縁部	16.8 － －	外面に鳳凰文。内面に四方襷文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c後。	19	B－1 石積み6 西側上層
第58図 図版45 161	碗	外反	底部	－ － 5.3	外面に霊芝雲文+折枝文、内底に牡丹文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c前～中。	11	J－10 (20～30)
第58図 図版45 162	碗	外反	口縁部	－ － －	外面に三友文?、内面に四方襷文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c後か。	11	I－6 基壇東
第58図 図版45 163	碗	外反	口縁部	12.0 － －	外面に花蝶文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で17c前。	19	B－4 シーリ内黒褐色土
第58図 図版45 164	碗	直口	口～底	13.6 6.5 5.0	外面に石榴唐草文、内面に四方襷文、内底に石榴文。	灰白色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c初。	19	撹乱
第58図 図版45 165	碗	腰折	口～底	12.8 6.3 5.4	外面に波濤文+花鳥文?、内底に法螺貝文。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c前。	11	I－6 基壇東
第58図 図版45 166	碗	腰折	口～底	13.0 6.3 5.2	外面に白抜き牡丹文、外底に「宣徳年造」銘、内面に四方襷文、内底に白抜き牡丹文。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c後。	11	撹乱
第58図 図版45 167	碗	腰折	口縁部	12.8 － －	外面に波濤文+アラベスク文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層

第17表　中国産染付観察一覧2

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第58図 図版45 168	碗	腰折	口縁部	12.4 – –	外面に波濤文+アラベスク文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c前。	19	A–1 石積み6 西側上層
第58図 図版45 169	碗	直口	口縁部	15.0 – –	外面に霊芝雲文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	19	B–5 シーリ内黒褐色土
第59図 図版46 170	碗	腰折	底部	– – 5.4	外面にアラベスク文、内底に渦花文。	灰白色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	橙色でやや細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯系で16c中～後。	19	B–1 石積み6 西側上層
第59図 図版46 171	碗	直口	底部	– – 5.0	外面腰部に蕉葉文、外底に銘款、内底に法螺貝文。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	11	撹乱
第59図 図版46 172	碗	直口	底部	– – 5.4	外面胴部に草花文?、外底に字款、内底に白抜き野菜文か。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c中～後。	11	I–6 基壇東
第59図 図版46 173	碗	直口	口～底	15.1 6.1 7.2	外面に花唐草文。呉須の発色は不良。	淡黄色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。内底に目跡?が残る。全体に細かい貫入。福建・広東系で17c前。	19	B–5 シーリ内黒褐色土
第59図 図版46 174	碗	直口	口縁部	15.3 – –	外面に花唐草文+宝文。呉須の発色は不良。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建・広東系で16c後～17c前。	19	B–4 シーリ内 炭混粘土層
第59図 図版46 175	碗	直口	口～底	15.0 6.0 6.5	両面に圏線。呉須の発色は不良。	灰白色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	灰白色で細かい。	外面全体に轆轤成形時の痕跡が残る。内底に砂?が付着。福建・広東系で16c後～17c前。	11	撹乱
第59図 図版46 176	碗	直口	口縁部	15.1 – –	両面に圏線。呉須の発色は不良。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建・広東系で16c後～17c。	19	撹乱
第59図 図版46 177	碗	端反	口縁部	14.6 – –	外面に白抜き菊唐草文、内面に葡萄文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で17c。	11	撹乱
第59図 図版46 178	碗	鍔縁	口縁部	12.4 – –	外面に鳥文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17c前。	19	B–5 シーリ内 黒褐色土

第18表　中国産染付観察一覧３

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第59図 図版46 179	碗	直口	口〜底	12.0 5.4 6.4	外面に草花文。	灰白色の釉を内面胴部から高台外面・外底まで施釉。内底中央にも施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 福建・広東系で17c後〜18c前。	11	I−9 南側
第59図 図版46 180	碗	直口	口〜底	13.2 5.8 7.2	外面に草花文。	明緑灰色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。内底中央にも施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。内底に目跡？が残る。 福建・広東系で17c後〜18c前。	11	撹乱
第59図 図版46 181	碗	直口	底部	− − 7.2	不明。	灰白色の釉を内面胴部から外面腰部まで施釉か。	灰白色で細かい。	轆轤成形。内底に目跡？が残る。 福建・広東系で17c後〜18c前。	11	撹乱
第60図 図版47 182	碗	端反	口縁部	14.5 − −	外面に梅花文+寿字文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	19	撹乱
第60図 図版47 183	碗	端反	口縁部	12.8 − −	外面に梅花文+寿字文+蓮弁文。	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱
第60図 図版47 184	碗	端反	口縁部	13.2 − −	外面に梅花文+鳳凰文+蓮弁文。呉須の発色は不良。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	I−7 30〜40 +撹乱
第60図 図版47 185	碗	端反	口縁部	11.6 − −	外面に鳳凰文?+蓮弁文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱
第60図 図版47 186	碗	端反	口縁部	13.3 − −	外面に雲龍文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	J−8 茶褐色灰混層
第60図 図版47 187	碗	端反	口縁部	12.0 − −	外面に雲龍文。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 徳化窯？で18cか。	11	撹乱
第60図 図版47 188	碗	直口	口縁部	12.6 − −	外面に人物文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 徳化窯？で18cか。	11	撹乱
第60図 図版47 189	碗	直口	口〜底	14.7 6.6 6.7	外面に丸文+折枝文?、外底に「仁」銘、内底に草花文か。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱

第19表　中国産染付観察一覧4

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第60図 図版47 190	碗	端反	底部	– – 6.6	外面に草花文+蓮弁文、外底に銘款、内底に草花文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱
第60図 図版47 191	碗	–	底部	– – 7.0	外面に玉取獅子文、外底に銘款、内底に玉取獅子文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 畳付に砂が付着。 福建産で18c。	11	撹乱
第60図 図版47 192	碗	外反	口縁部	12.4 – –	外面に 草花文か。	透明釉を両面に施釉。	白色で やや細かい。	轆轤成形。 景徳鎮窯で 18c後～19c前。	11	撹乱
第60図 図版47 193	碗	外反	口～底	14.6 6.5 5.7	外面に牡丹唐草文+ラマ式蓮弁文、外底に銘款、内面に花唐草文、内底に草花文。	明緑灰色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 全体的に被熱。 景徳鎮窯で19c前。	19	撹乱
第60図 図版47 194	碗	外反	口縁部	12.6 – –	外面に牡丹唐草文、内面に花唐草文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で19c前。	11	J－9 遺構上西+撹乱
第60図 図版47 195	碗	直口	口～底	14.1 6.9 5.4	外面に鳳凰文?+八卦文+波濤文。外底に「大清嘉慶年製」銘、内面に四方襷文、内底に波濤文+花文。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で19c前。	11	J－9 灰混層
第61図 図版48 196	碗	–	底部	– – 5.1	内底に 樹鳥文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 景徳鎮窯で 15c前～中。	11	撹乱
第61図 図版48 197	小碗	–	底部	– – 6.5	外面文様は不明、外底に銘款、内底に花弁文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 畳付に砂が付着。 景徳鎮窯で 16c末～17c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第61図 図版48 198	小碗	直口	口～底	10.0 5.4 4.2	外面に宝相華唐草文、内底に「福」銘。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入（被熱か）。 景徳鎮窯で15c後～16c前か。	11	J－10 (20～30)
第61図 図版48 199	小碗	外反	口～底	9.4 4.9 4.2	外面に野菜文。	灰白色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で1630～40年代。	19	B－5 シーリ内黒褐色土+B－5 シーリ内赤褐色土1（畦）

第20表　中国産染付観察一覧５

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第61図 図版48 200	小碗	端反	口縁部	10.6 － －	外面に 花卉文か。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯 で17c前。	11	J－6 基壇東+撹乱
第61図 図版48 201	小碗	端反	口縁部	9.2 － －	外面に 草花文か。	透明釉を両面に 施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯 で1630～40年代。	19	B－4 シーリ内黒褐色土
第61図 図版48 202	小碗	端反	口縁部	10.8 － －	外面に 線描きのみの 牡丹唐草文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で 細かい。	轆轤成形。徳化窯？ で18c。	11	I－8 20～30茶褐色 灰混層
第61図 図版48 203	小碗	端反	口縁部	9.4 － －	外面に 矢羽文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形（型成形の 可能性あり）。 徳化窯？で17c後 ～18cか。	11	撹乱
第61図 図版48 204	小碗	端反	口縁部	10.0 － －	外面に 梵字文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 徳化窯？で18c。	11	J－9 灰混層
第61図 図版48 205	小碗	直口	口縁部	－ － －	外面に連続文 +花唐草文、 内面に雷文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で 細かい。	轆轤成形。景徳鎮 窯？で18c～19cか。	11	撹乱
第61図 図版48 206	小碗	直口	口縁部	－ － －	外面に 草花文。	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮 窯？で18c～19cか。	11	J－9 遺構上西
第61図 図版48 207	小碗	腰折	口縁部	8.6 － －	外面に貼付の 突帯文 +牡丹文	灰白色の釉を 両面に施釉。	白色で 細かい。	轆轤成形。景徳鎮 窯で16c後～17cか。	11	J－11 (20～30)
第61図 図版48 208	小碗	端反	口縁部	－ － －	口錆(口唇部 に褐釉を施釉)。	灰白色の釉を 両面に施釉。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 景徳鎮窯で16c。	19	撹乱
第61図 図版48 209	小碗	端反	口縁部	－ － －	口錆(口唇部 に褐釉を施釉)。	灰白色の釉を 両面に施釉。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。 景徳鎮窯で16c後～ 17c前。	19	撹乱
第61図 図版48 210	小碗	直口	口縁部	7.8 － －	外面に梅文 +芭蕉文か。	灰白色の釉を 両面に施釉後、 口唇部を釉剥ぎ。	白色で 細かい。	型成形。徳化窯で 18c後～19c。	11	I－9 南側
第61図 図版48 211	小碗	直口	口縁部	8.4 － －	外面に草花 文?、内底文 様は不明。	透明釉を両面に 施釉。	白色で 細かい。	轆轤成形。 徳化窯で17cか。	11	撹乱

第21表　中国産染付観察一覧６

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第61図 図版48 212	小碗	－	底部	－ － 4.6	内底に 草花文か。	灰白色の釉を 両面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯 で15c後～16c前か。	11	撹乱
第61図 図版48 213	小碗	端反	底部	－ － 3.6	外面に仙芝祝 寿文、外底に 銘款、内底に 草花文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。徳化窯？ で18c。	11	撹乱
第61図 図版48 214	小碗	－	底部	－ － 5.0	内底に人物 文か。	灰白色の釉を 内底から畳付・ 外底まで施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 徳化窯？で17cか。	11	撹乱
第61図 図版48 215	小碗	端反	底部	－ － 5.0	外面に梵字 文、外底に銘 款、内底文様 は不明。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 徳化窯？で18c。	11	撹乱
第62図 図版49 216	小碗	－	底部	－ － 4.6	外面に白抜き ラマ式蓮弁文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で18cか。	11	撹乱
第62図 図版49 217	小碗	－	底部	－ － 4.6	内底に鳥文。	透明釉を両面に 施釉後、畳付を 釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17c。	19	B－5 シーリ内赤褐色 土１(畦)
第62図 図版49 218	小碗	外反	底部	－ － 4.6	外面に牡丹唐 草文?、外底 に銘款、内底 に草花文。	明緑灰色の釉を 両面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で19c。	11	撹乱
第62図 図版49 219	小碗	外反	底部	－ － 4.0	外面に牡丹唐 草文、外底に 銘款、内底に 草花文。	明緑灰色の釉を 内底から畳付・ 外底まで施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で19c。	11	J－9 遺構上西+撹乱
第62図 図版49 220	皿	端反	口＼底	16.2 3.4 7.8	外面に宝文?、 内底に 山水文か。	灰白色の釉を 全面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱
第62図 図版49 221	皿	直口	口＼底	15.4 3.9 7.8	外面に鳥文?、 内面に寿字唐 草文、内底に 寿字文。	明緑灰色の釉を 全面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱
第62図 図版49 222	皿	端反	口＼底	15.4 3.2 9.0	外面に宝文、 内面に折枝 文?、内底に 龍濤文。	灰白色の釉を 全面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	撹乱
第62図 図版49 223	皿	端反	口＼底	16.2 3.5 8.8	内面に花卉 文、内底に 草花文か。	灰白色の釉を 全面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	J－9 遺構上西+撹乱

第22表　中国産染付観察一覧７

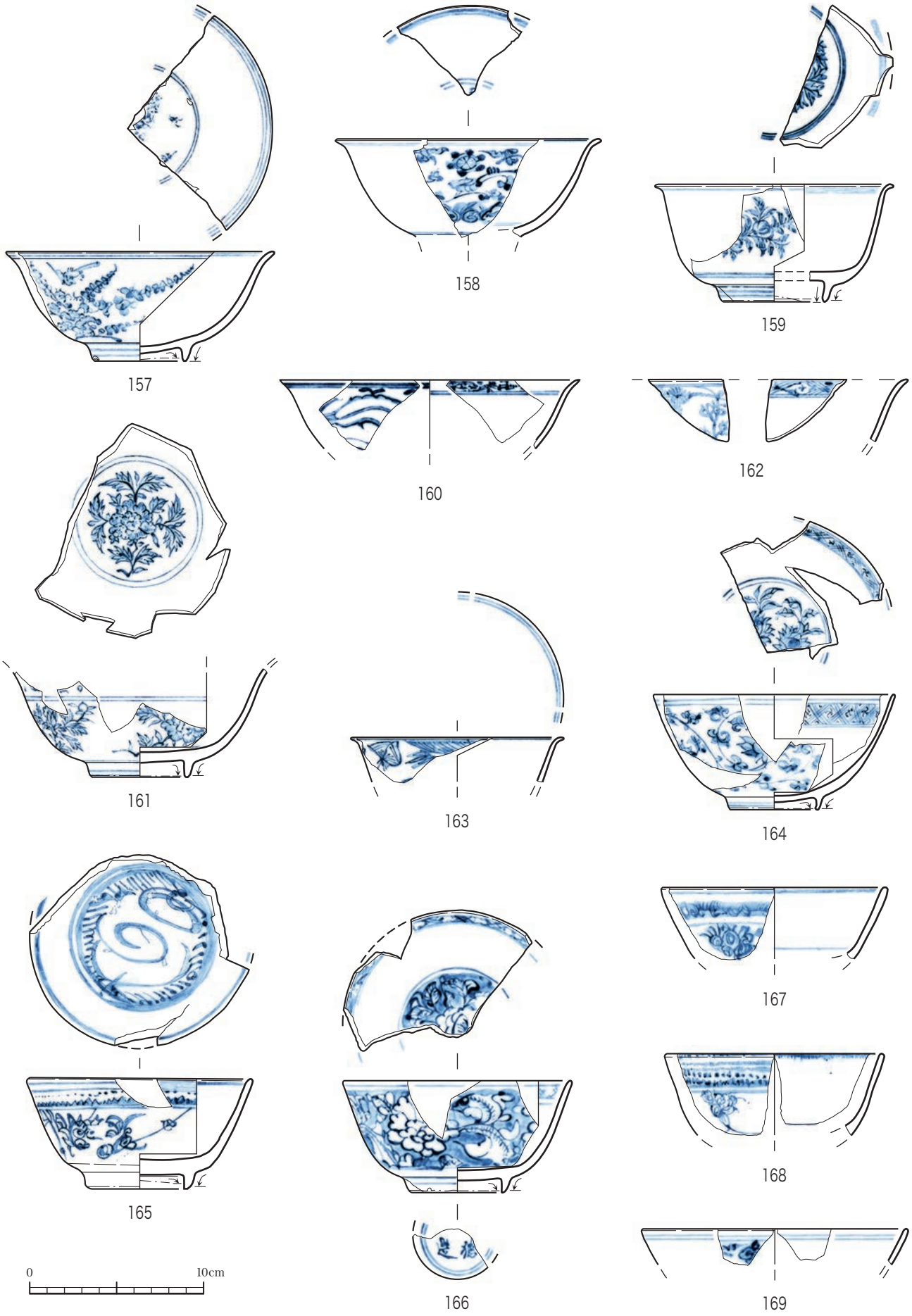
図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第62図 図版49 224	皿	外反	口縁部	14.0 – –	両面に宝相華唐草文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	J–10 (20～30) ＋撹乱
第62図 図版49 225	皿	外反	口～底	12.5 2.4 6.6	外面に宝相華唐草文、内底に玉取獅子文。	明緑灰色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	J–11 (20～30)
第62図 図版49 226	皿	外反	口～底	12.2 2.9 7.2	外面に宝相華唐草文、内底に玉取獅子文。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	J–11 (20～30) ＋撹乱
第62図 図版49 227	皿	外反	口～底	7.6 2.6 4.4	外面に宝相華唐草文、内底に十字花文。	明緑灰色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。釉下に白土を塗布か。全体に細かい貫入。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	I–6 基壇東
第63図 図版50 228	皿	外反	口～底	9.2 2.0 5.3	内底に花唐草文。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	碁笥底状。轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第63図 図版50 229	皿	外反	口～底	9.9 2.7 4.0	外面に宝相華唐草文、内底に十字花文。	明緑灰色の釉を内底から畳付・外底に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 畳付に砂が付着。 景徳鎮窯で16c。	19	A–1 石積み6 西側上層
第63図 図版50 230	皿	直口	口縁部	10.6 – –	両面に圏線。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底を釉剥ぎ。	鈍黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入。 漳州窯で16c後。	19	A–1 石積み6 西側上層
第63図 図版50 231	皿	兜鉢	口縁部	20.0 – –	不明。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤+型打ち成形。 景徳鎮窯で17c前。	19	B–5 シーリ内黒褐色土(畦)
第63図 図版50 232	皿	直口	口縁部	15.4 – –	内面に花弁文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤+型打ち成形。 景徳鎮窯で 1630年代。	19	B–5 シーリ内木炭層
第63図 図版50 233	皿	直口	口縁部	9.0 – –	外面に草花文?、内面に仙芝祝寿文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	型成形。徳化窯で18c後～19c。	11	撹乱
第63図 図版50 234	皿	端反	口～底	10.0 2.4 7.2	両面に雲龍文。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	型成形。畳付に砂が付着。徳化窯で18c後～19c。	11	撹乱
第63図 図版50 235	鉢	–	底部	– – 6.4	外面に花唐草文+如意頭繋文、内底に草花文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前。	19	A–1 石積み6 裏込内

第23表　中国産染付観察一覧８

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第63図 図版50 236	皿	直口	口～底	16.6 3.7 10.4	外面文様は不明、内面に梵字文、内底文様は不明。	明緑灰色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 福建産で18c。	11	J－9 灰混層 ＋撹乱
第63図 図版50 237	皿	－	底部	－ － 6.2	内底に楼閣文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯？で18cか。	11	撹乱
第63図 図版50 238	皿	－	底部	－ － －	外底に「上利」銘、内底に雲龍文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で やや細かい。	轆轤成形。 福建産で18c。	19	撹乱
第63図 図版50 239	皿	碁笥底	底部	－ － 4.0	外面文様は不明、内底に芭蕉文。	明緑灰色の釉を内底から外底際・外底凹部に施釉後、外底際を釉剥ぎ。	灰白色で 細かい。	轆轤成形。外底に砂が付着。景徳鎮窯で15c後～16c前。	19	A－1 石積み6 西側上層
第63図 図版50 240	皿	碁笥底	口～底	10.0 2.5 3.0	外面に波濤文＋蕉葉文、内底に芭蕉文。	明緑灰色の釉を内底から外底際・外底凹部に施釉後、外底際を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。外底に砂が付着。景徳鎮窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第64図 図版51 241	小杯	外反	口縁部	－ － －	外面に花鳥文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17c前。	19	撹乱
第64図 図版51 242	小杯	直口	口縁部	4.8 － －	外面に草花文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で細かい。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17cか。	11	撹乱
第64図 図版51 243	小杯	直口	口縁部	4.8 － －	外面に草花文か。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17c前。	19	B－5 シーリ内木炭層
第64図 図版51 244	小杯	－	底部	－ － 2.0	外底に「大明成化年製」銘。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17c前。	19	B－5 シーリ内黒褐色土
第64図 図版51 245	小杯	外反	底部	－ － 2.4	内底に跳魚文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形（型成形の可能性あり）。 全体的に被熱。 景徳鎮窯で17c。	11	撹乱
第64図 図版51 246	小杯	外反	底部	－ － 3.6	外面に草花文、内面に雷文、内底に草花文。	明緑灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で17cか。	11	撹乱

第24表　中国産染付観察一覧９

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・呉須	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第64図 図版51 247	鉢	－	底部	－ － 8.0	外面に蓮唐草文+如意頭繋文、内面に唐草文?、内底に団花文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で16cか。	11	J－10 (20～30)
第64図 図版51 248	瓶	－	口縁部	4.1 － －	口錆か。	灰白色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で清代。	11	撹乱
第64図 図版51 249	瓶	玉壺春	口縁部	4.8 － －	外面に蕉葉文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。景徳鎮窯で15c後～16c前か。	11	J－10 (10～20)
第64図 図版51 250	瓶	玉壺春	胴部	－ － －	外面に宝相華唐草文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形で内面胴部に継ぎ目あり。 景徳鎮窯で15c後～16c前。	19	B－4 シーリ内黒褐色土
第64図 図版51 251	瓶	玉壺春	底部	－ － 8.5	外面に波濤文+蓮弁文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。一部被熱か。景徳鎮窯で16c前～中。	11	撹乱
第64図 図版51 252	瓶	－	底部	－ － 1.4	外面に銘款。	灰白色の釉を外面全体に施釉後、外底を釉剥ぎ。	白色で細かい。	轆轤成形か。 福建産？で18c～19c前。	11	撹乱
第64図 図版51 253	散蓮華	－	－	－ － －	外面に草花文?、外底に銘款、内面に線描きのみの牡丹唐草文。	灰白色の釉を全面に施釉後、外底を輪状に釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	型成形か。 徳化窯？で18c。	11	撹乱
第64図 図版51 254	蓋	－	庇	11.6 － －	外面に梅花文+宝文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯で清代。	11	撹乱
第64図 図版51 255	蓋	－	庇～袴	5.6 1.9 5.6	蓋甲文様は不明、袴外面に鋸歯文。	灰白色の釉を外面に施釉後、袴端部を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 景徳鎮窯で清代。	11	撹乱
第64図 図版51 256	蓋	－	庇～袴	－ － －	外面に蕉葉文か。	灰白色の釉を両面に施釉後、庇端部内面を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 景徳鎮窯？で清代。	11	撹乱



第58図　中国産染付１

157

158

159

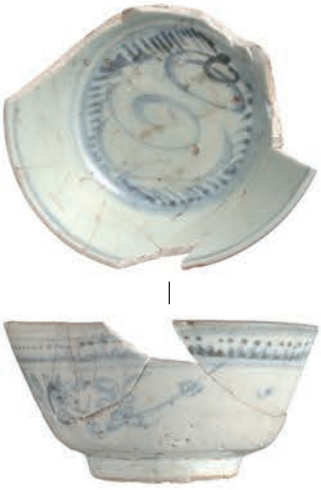
160

162

161

163

164


165

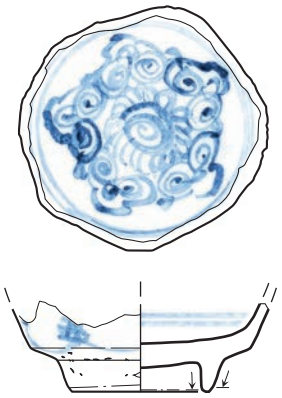
166

167

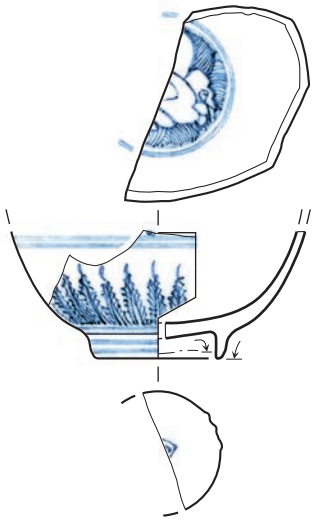
168

169

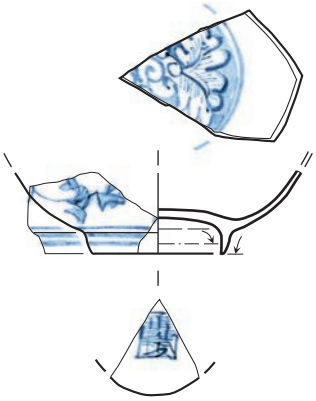
図版45　中国産染付１



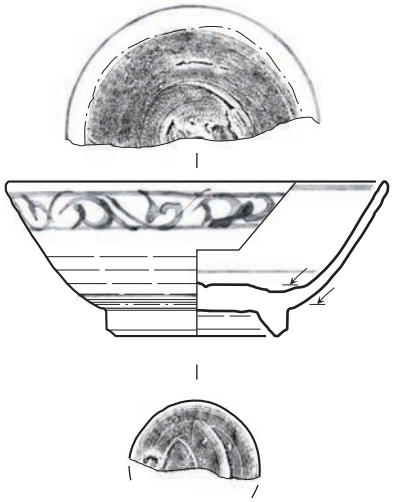
170



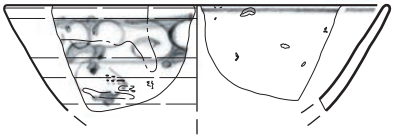
171



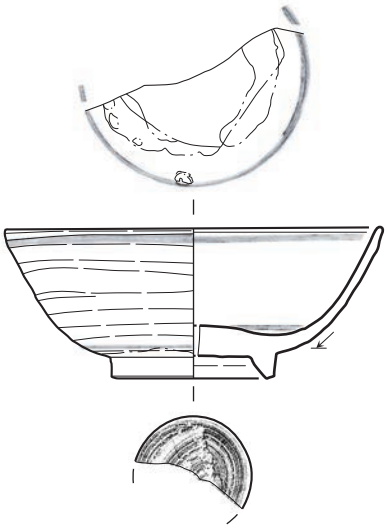
172



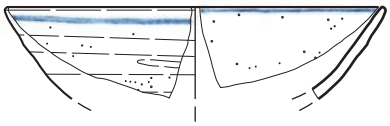
173



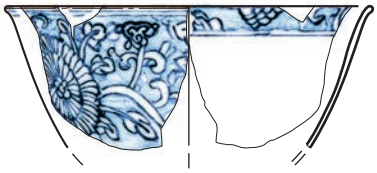
174



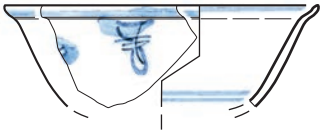
175



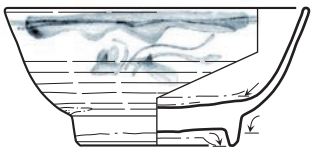
176



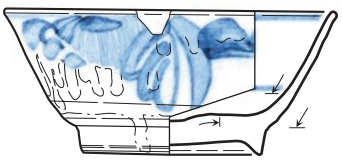
177



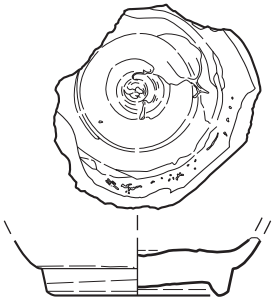
178



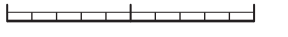
179



180

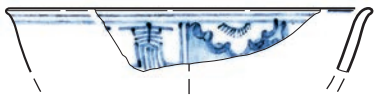


181

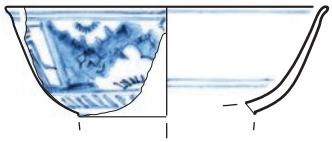


第59図　中国産染付２

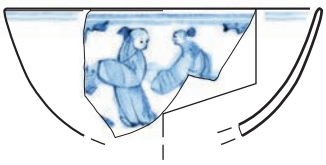
図版46　中国産染付２



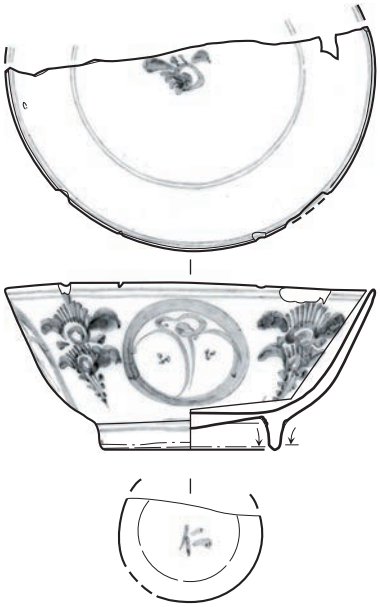
182



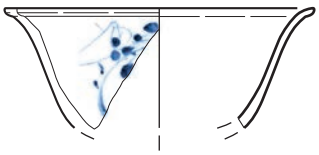
183



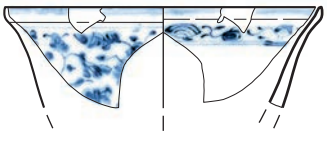
188



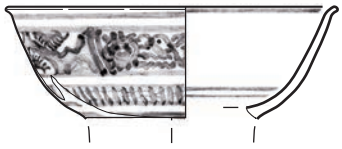
189



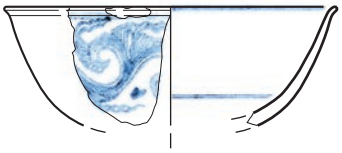
192



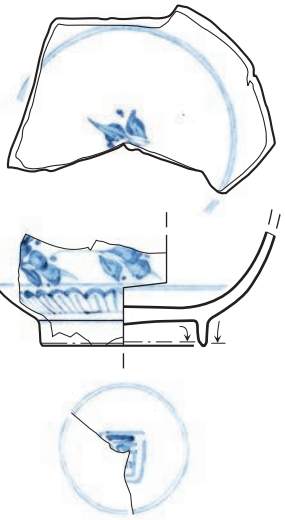
194



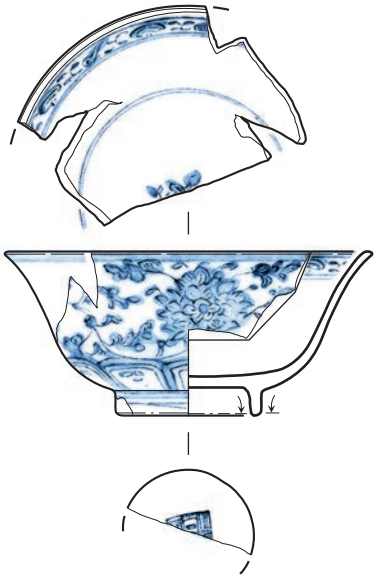
184



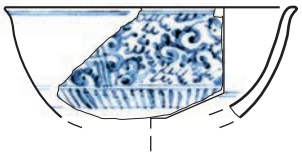
186



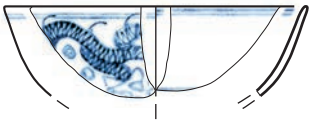
190



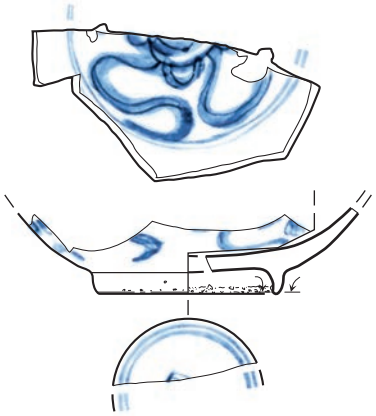
193



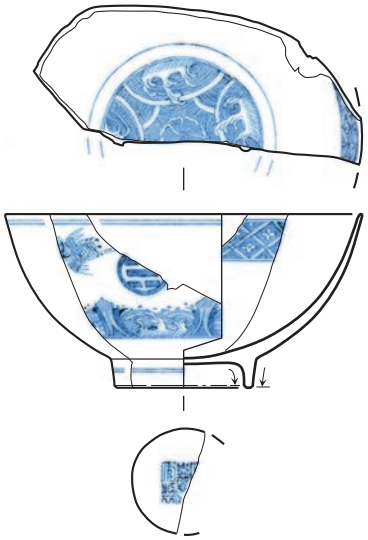
185



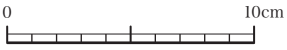
187



191

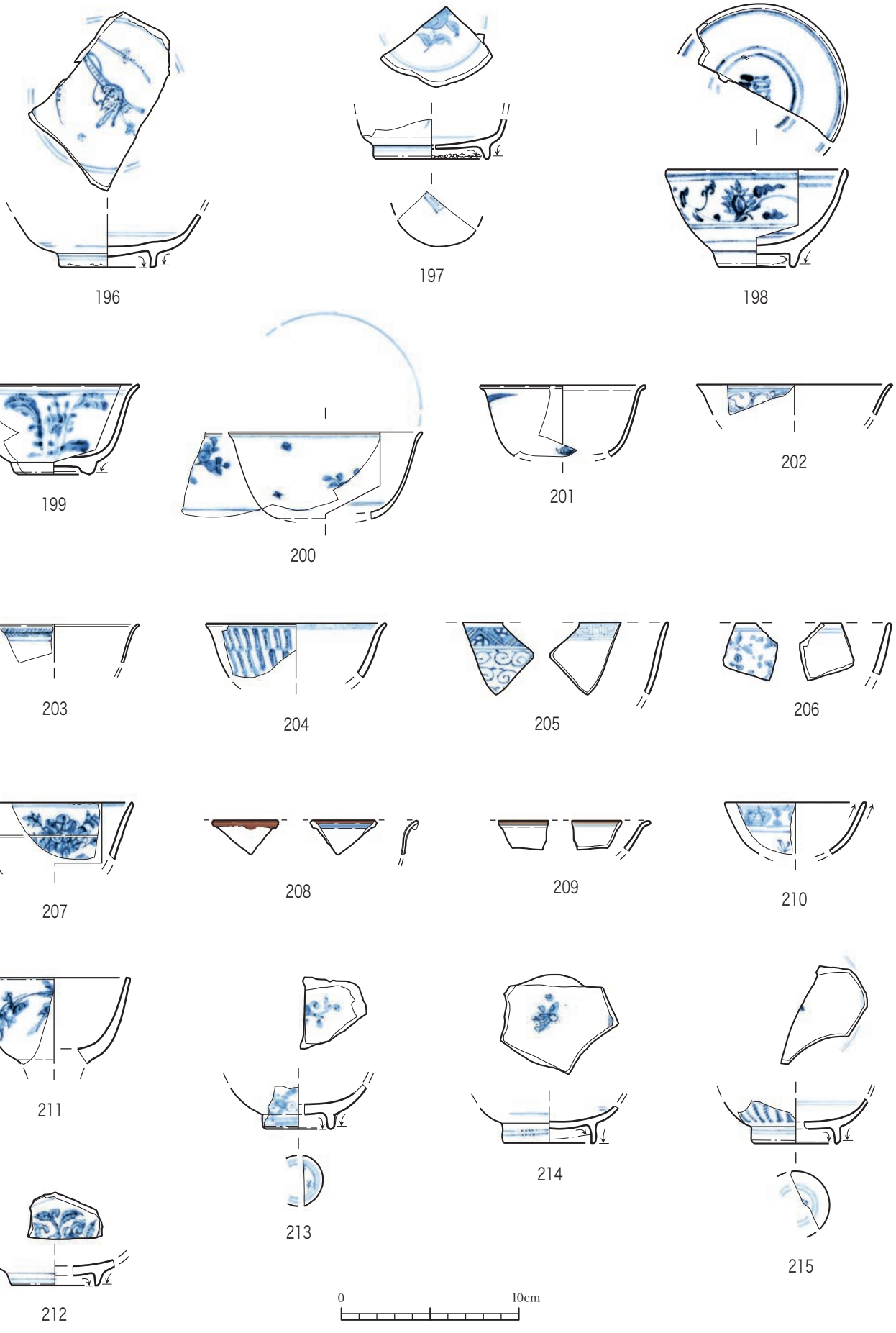


195

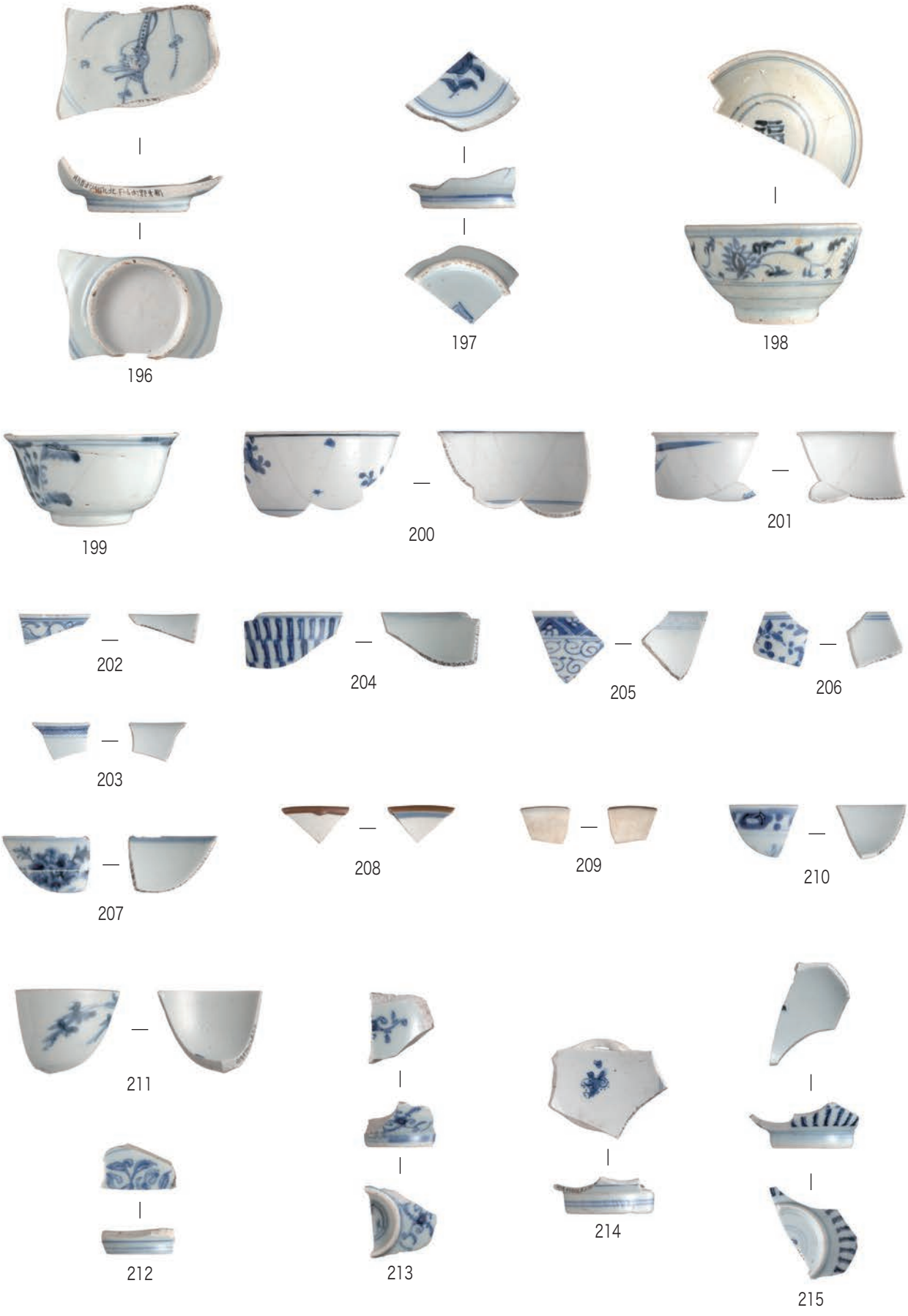


第60図　中国産染付３

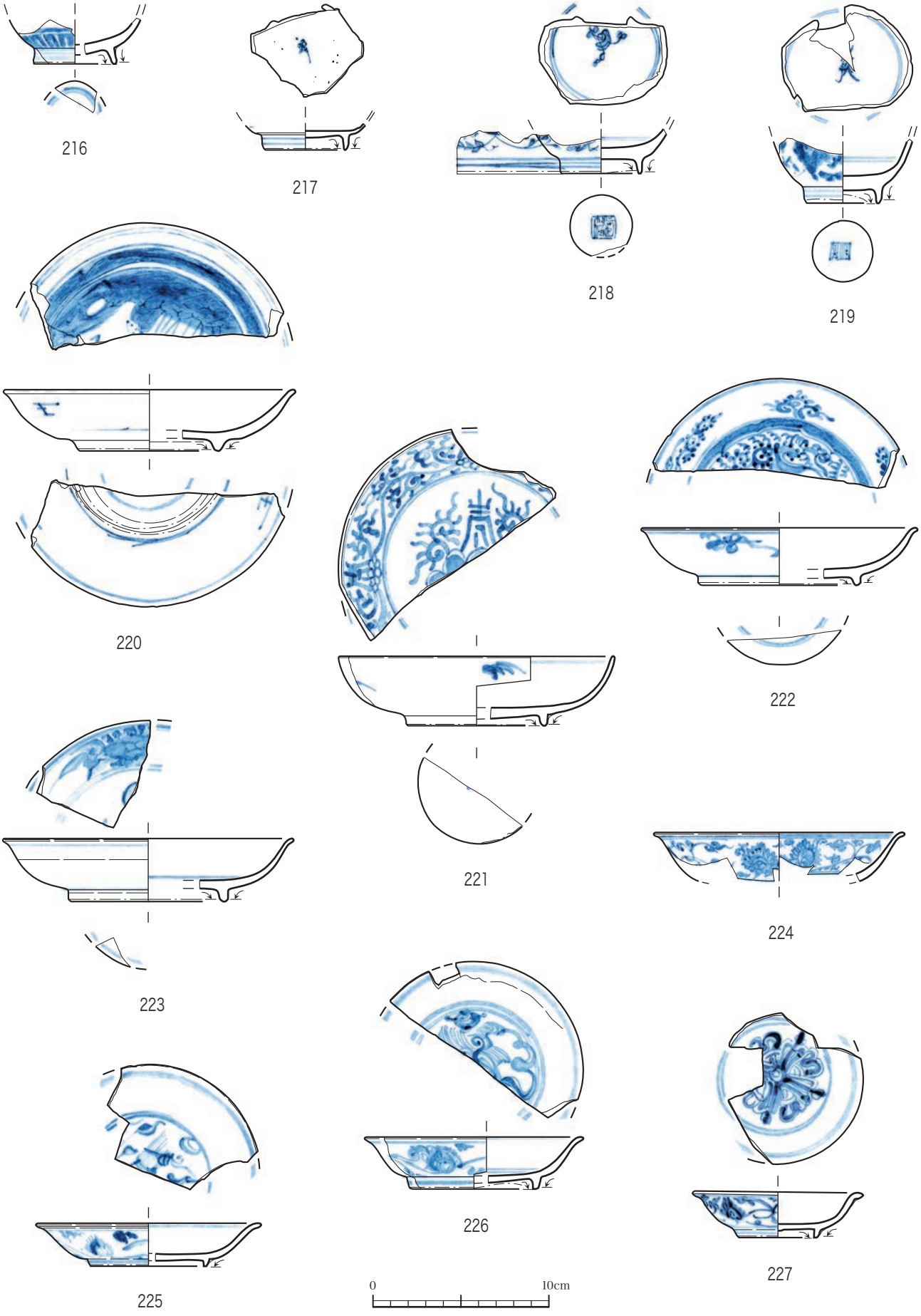
図版47　中国産染付３


196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
0
10cm

第61図　中国産染付４


196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215

図版48　中国産染付４



第62図　中国産染付５

216

217

218

219

220

221

222

223

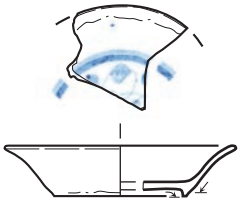
226

224

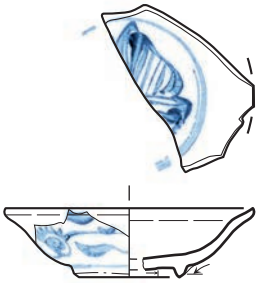
225

227

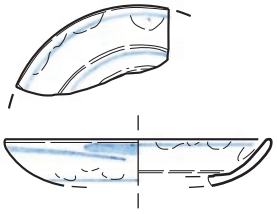
図版49　中国産染付５



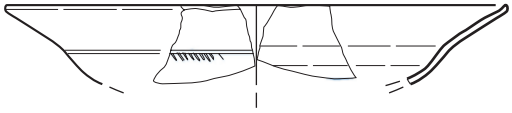
228



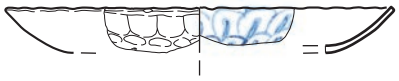
229



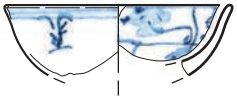
230



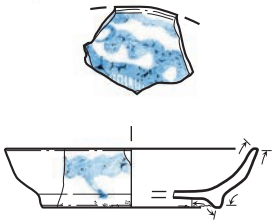
231



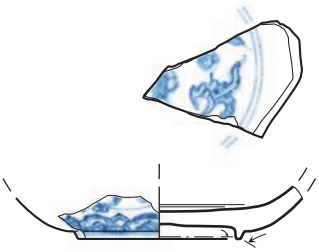
232



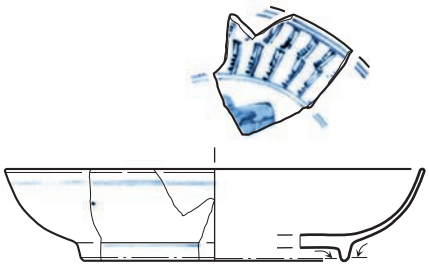
233



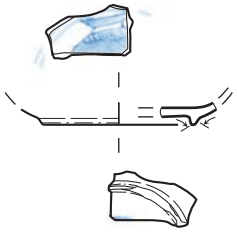
234



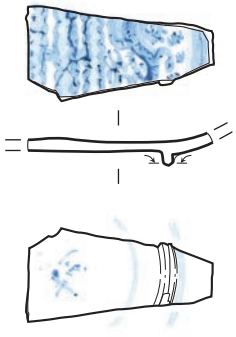
235



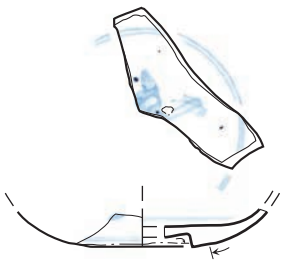
236



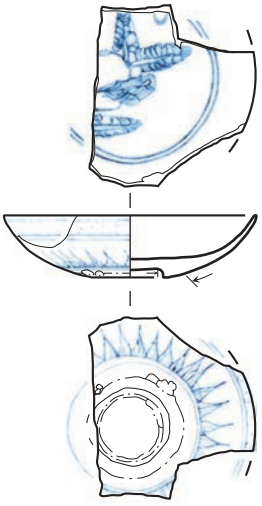
237



238



239



240

第63図　中国産染付６

228

229

230

231

232

234

233

235

236

237

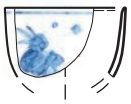
240

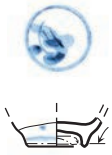
239

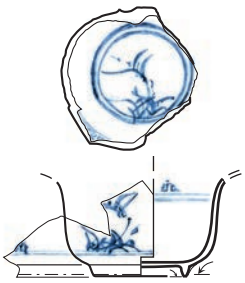
238

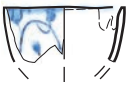
図版50　中国産染付６

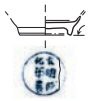
241

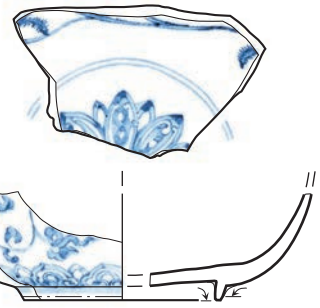

242

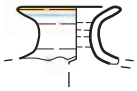

245


246

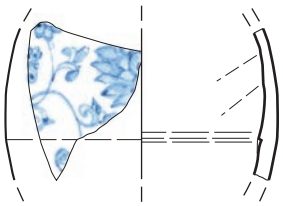

243

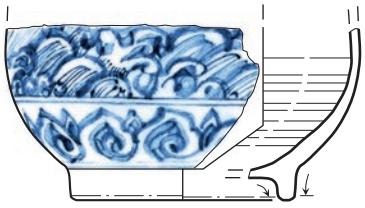

244

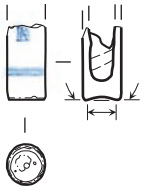

247

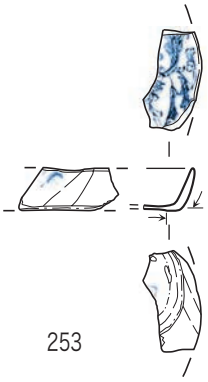

248

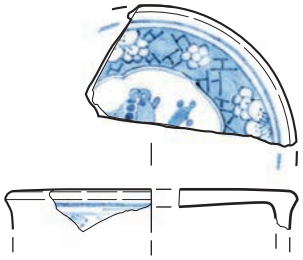
249

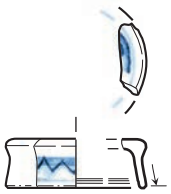

250


251


252


253

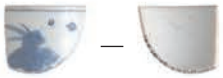

254


255

256

第64図　中国産染付７

241


242

245

246

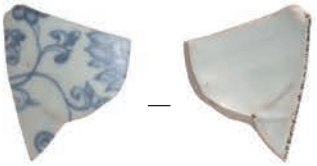
243

244

247

248

249


250

251

252

253

254

255

256

図版51　中国産染付７

第４節　中国産褐釉陶器・無釉陶器（第25～28表、第65～69図、図版52～56）

総数16,504点を数え（無釉陶器９点含む）、中国産陶磁器の中でも最も多く出土している。器種は壺・瓶・鉢が確認されるが、壺が圧倒的多数を占める。他の中国産陶磁器と同様に全形が窺えるような資料は少量だが、特徴的な資料を第65～69図に図示した。以下に器種別の分類概念を記し、個々の詳細は観察表に譲る。

１．壺（257～295、297、298、300、301）

Ａ類：最大径を肩部に持つ大型の四耳壺。素地が赤褐色を呈する厚手のもの（257～260）と、白濁釉を施す薄手のもの（277、278）がある。

Ｂ類：最大径を胴部上位に持つ大型の多耳壺。胴部に貼付の文様を施す（261、262）。

Ｃ類：最大径を肩部に持つ大型の無耳壺。肩部に焼成時の目跡が巡る（263～276）。

Ｄ類：Ａ～Ｃ類に比して小振りの壺。ほとんどが四耳壺になると思われる（279～293）。

Ｅ類：「茶入」と称される薄手の小型壺（294、295）。

２．瓶（296）

口縁部がラッパ状に開くもので、小型の長頸瓶と思われる。

３．鉢（299）

直口口縁の鉢で、口縁部を内側に折り曲げ断面形態が玉縁状を呈する。

４．無釉陶器（302）

中国産の無釉陶器は９点が得られている。第69図302に示したのは大型の甕で、出土例は非常に少ないが、首里城跡では一定量確認される資料である。

第25表　中国産褐釉陶器観察一覧１

図 図版 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第65図 図版52 257	壺	口縁部	21.2 － －	無文。	灰褐色の釉を両面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で14c～15c。	19	B－5 ３層表面 +C－4 炭混粘土層
第65図 図版52 258	壺	口縁部	21.6 － －	無文。	灰褐色の釉を両面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、赤褐色鉱物や白色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。外面肩部に目跡が残る。 中国産で14c～15c。	19	B－3 裏込内 +C－4 炭混粘土層

第26表　中国産褐釉陶器観察一覧２

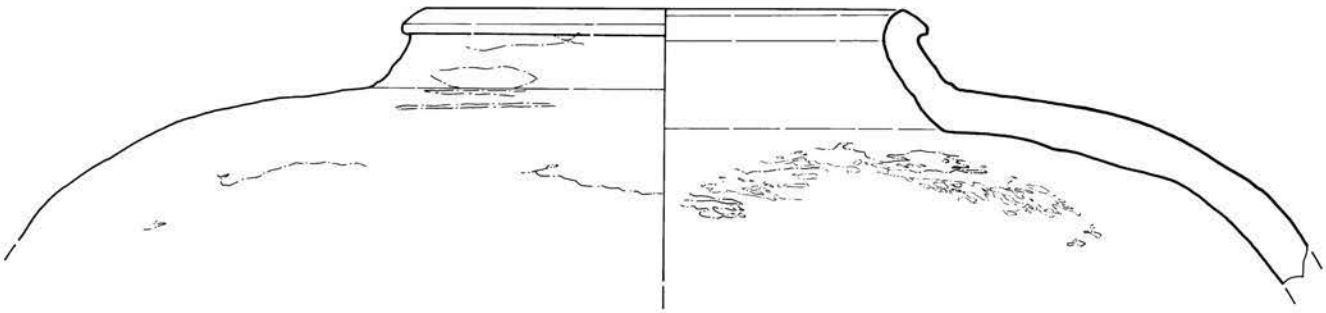
図 図版 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第65図 図版52 259	壺	口縁部	21.4 – –	無文。	暗褐色の釉を内面頸部から外面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、白色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。外面肩部に目跡が残る。中国産で14c～15c。	11	撹乱
第65図 図版52 260	壺	底部	– – 13.2	無文。	鈍黄褐色の釉を内底から外底際まで施釉。	褐灰色でやや細かく、白色鉱物や黒色鉱物を含む。	轆轤成形。 中国産で14c～15c。	11	撹乱
第65図 図版52 261	壺	口縁部	22.0 – –	外面に陰圏線。	オリーブ褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、白色鉱物や黒色鉱物を含む。	轆轤成形。口唇部に目跡が残る。 中国産で15c～16c。	19	E–4 5層
第65図 図版52 262	壺	胴部	– – –	外面に貼付の龍文。	鈍黄色の釉を外面に施釉。	橙色で細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形(叩き成形の可能性あり)。 中国産で15c～16c。	19	撹乱
第66図 図版53 263	壺	口縁部	22.9 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄橙色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。 中国産で15c～16c。	11	撹乱
第66図 図版53 264	壺	口縁部	21.9 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	暗灰黄色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。口唇部や内面口縁部に目跡が残る。 中国産で15c～16c。	11	撹乱
第66図 図版53 265	壺	口縁部	16.5 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で15c～16c。	19	B–1 石積み6 西側上層
第66図 図版53 266	壺	口縁部	21.5 – –	無文。	鈍黄橙色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰褐色で細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で15c～16c。	11	J–9 遺構上南 ＋撹乱
第66図 図版53 267	壺	口縁部	17.3 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色でやや細かい。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で15c～16c。	19	B–1 石積み6 西側上層
第66図 図版53 268	壺	口縁部	19.4 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で15c～16c。	19	D–4 2層
第66図 図版53 269	壺	口縁部	– – –	無文。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	橙色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で15c～16c。	19	B–4 黄褐色土
第66図 図版53 270	壺	口縁部	12.6 – –	無文。	オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色で細かい。	轆轤成形で口縁部は外側貼付。 中国産で15c～16c。	11	I–8 20～30 茶褐色灰混層
第67図 図版54 271	壺	底部	– – 16.5	無文。	暗褐色の釉を内底から外底際まで施釉。	鈍黄橙色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。外底に目跡が残る。 中国産で15c～16c。	11	撹乱
第67図 図版54 272	壺	底部	– – 18.4	無文。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色でやや細かく、黒色鉱物や白色鉱物を含む。	轆轤成形。外底に目跡が残る。 中国産で15c～16c。	19	B–4 黄褐色土

第27表　中国産褐釉陶器観察一覧３

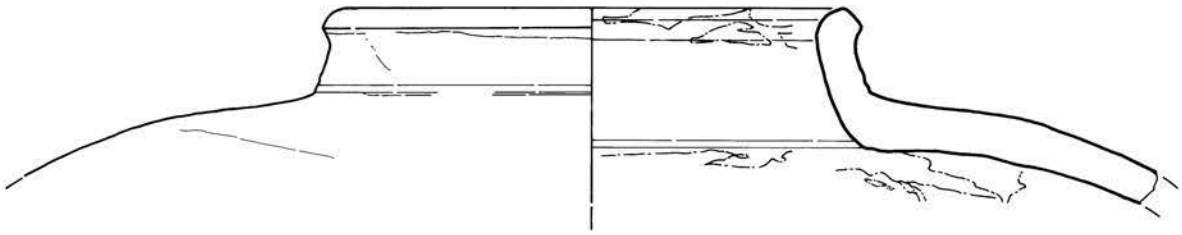
図 図版 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第67図 図版54 273	壺	底部	－ － 15.6	無文。	鈍黄色の釉を内底から外面胴部まで施釉。	灰黄色でやや細かく、黒色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16c。	11	撹乱
第67図 図版54 274	壺	底部	－ － 13.0	無文。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	灰黄褐色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16c。	19	B－4 黄褐色土
第67図 図版54 275	壺	底部	－ － 15.0	無文。	暗灰黄色の釉を両面に施釉。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16c。	19	B－4 2層＋B－4 黄褐色土
第67図 図版54 276	壺	底部	－ － －	無文。	灰オリーブ色の釉を外面胴部に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16c。	19	A－1 石積み6 西側上層
第67図 図版54 277	壺	口縁部	16.2 － －	無文。	浅黄色の釉を内面口縁部から外面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	黄灰色でやや細かく、黒色鉱物を含む。	轆轤成形(叩き成形の可能性あり)。中国産で15c～16c。	11	撹乱
第67図 図版54 278	壺	口縁部	15.8 － －	無文。	灰黄色の釉を両面施釉後に内面口縁部～頸部まで釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形(叩き成形の可能性あり)。外面肩部に目跡が残る。中国産で15c～16c。	11	撹乱
第68図 図版55 279	壺	口縁部	9.5 － －	無文。	浅黄色の釉を両面に施釉。	灰褐色で細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産？で15c～16cか。	11	撹乱
第68図 図版55 280	壺	口縁部	7.2 － －	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉後、内面口縁部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	撹乱
第68図 図版55 281	壺	口縁部	6.4 － －	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	褐灰色で細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第68図 図版55 282	壺	口縁部	9.3 － －	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第68図 図版55 283	壺	底部	－ － 9.8	無文。	暗褐色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第68図 図版55 284	壺	底部	－ － 11.4	無文。	暗褐色の釉を外面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。外面肩部に目跡が残る。中国産で15c～16cか。	11	J－10（10～20） ＋J－10（20～30） ＋撹乱
第68図 図版55 285	壺	口縁部	9.6 － －	無文。	黄褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄橙色で細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	B－4 黄褐色土
第68図 図版55 286	壺	口縁部	11.6 － －	無文。	褐灰色の釉を両面に施釉。	褐灰色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	撹乱
第68図 図版55 287	壺	口縁部	10.0 － －	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	橙色で細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	撹乱

第28表　中国産褐釉陶器4・無釉陶器観察一覧

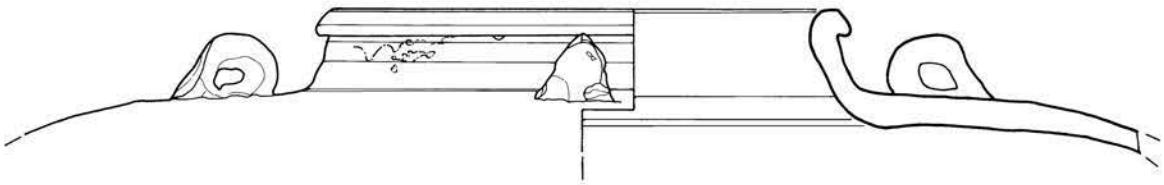
図 図版 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
				文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第68図 図版55 288	壺	口縁部	11.2 – –	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第68図 図版55 289	壺	口縁部	11.6 – –	無文。	オリーブ黄色の釉を両面に施釉後、内面口縁部を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	C–5・3層表面 +D–5・3層表面
第68図 図版55 290	壺	口縁部	– – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	黄灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第69図 図版56 291	壺	底部	– – 12.0	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。外底に目跡が残る。中国産で15c～16cか。	19	B–1 石積み6 西側上層
第69図 図版56 292	壺	底部	– – –	無文。	暗オリーブ色の釉を外面に施釉。	灰色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第69図 図版56 293	壺	口縁部	11.2 – –	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄橙色でやや細かく、白色鉱物を含む。	急須(罐)の可能性あり。轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第69図 図版56 294	壺	底部	– – 3.8	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄橙色で細かい。	茶入の可能性あり。轆轤成形。中国産で14c。	11	撹乱
第69図 図版56 295	壺	底部	– – 7.2	無文。	黒褐色の釉を内面に施釉。	灰色で細かく、白色鉱物を含む。	茶入の可能性あり。轆轤成形。中国産で14c。	19	A–1 石積み6 西側上層
第69図 図版56 296	瓶	口縁部	7.2 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	黄灰色でやや細かい。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	11	撹乱
第69図 図版56 297	壺	口縁部	20.6 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	甕の可能性あり。轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	撹乱
第69図 図版56 298	壺	口縁部	16.0 – –	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄橙色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。中国産で15c～16cか。	19	B–1 石積み6 西側上層
第69図 図版56 299	鉢	口縁部	– – –	無文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	鈍橙色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。中国産で14c～15cか。	11	撹乱
第69図 図版56 300	壺	口縁部	11.2 – –	無文。	不明。	灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	急須(罐)の可能性あり。轆轤成形。中国産で清代か。	11	撹乱
第69図 図版56 301	壺	胴部	– – –	外面に貼付の瓔珞文か。	褐色の釉を両面に施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。中国産?で15c～16cか。	11	撹乱
第69図 図版56 302	甕	口縁部	55.2 – –	外面に貼付の縄目。	無釉。	明赤褐色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	叩き成形で内面に当て具痕が残る。中国産で16c～17c。	11	J–10 (20～30)



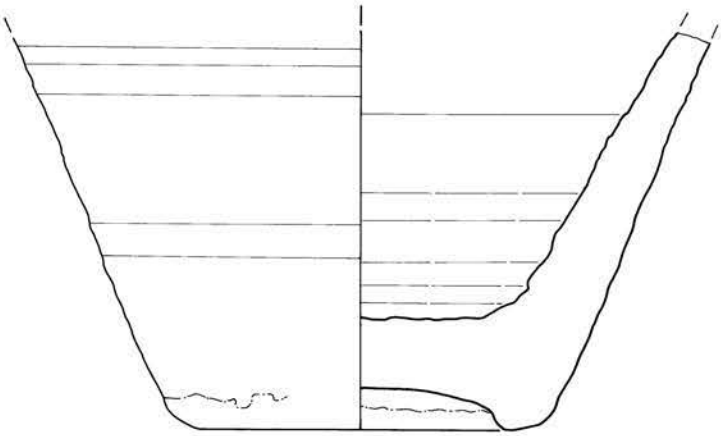
257



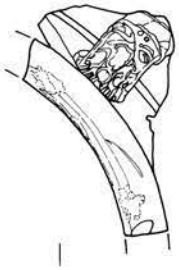
258

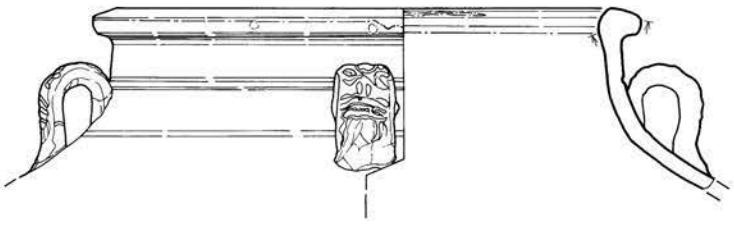


259

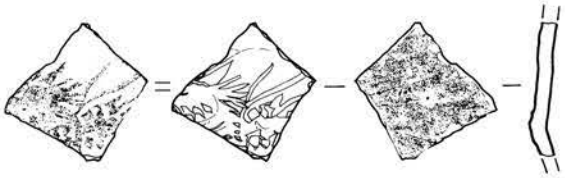


260





261



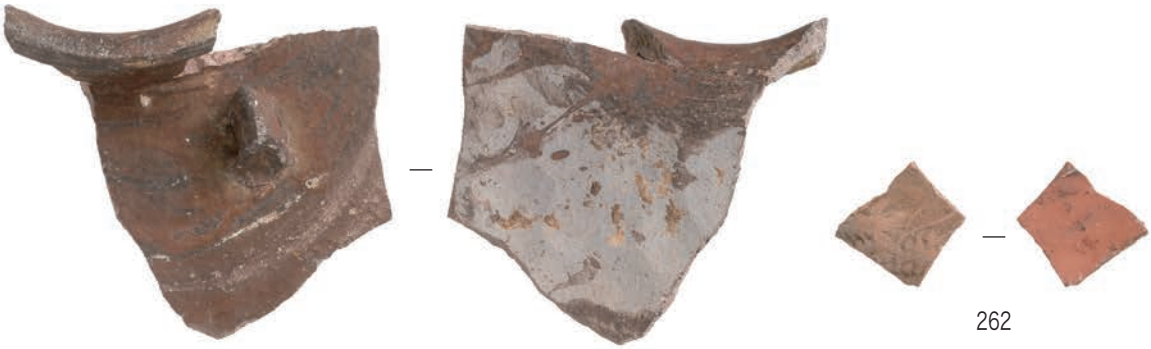
262

0 10cm

第65図　中国産褐釉陶器 1

257

258



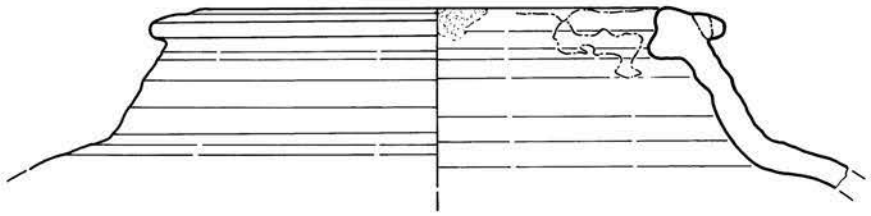
259

262

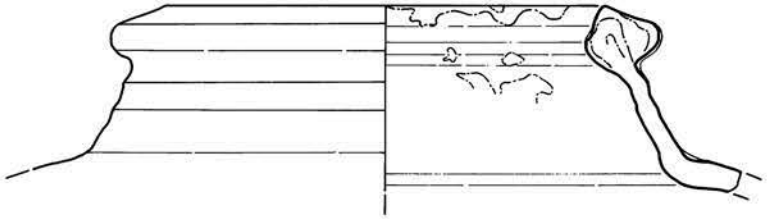
260

261

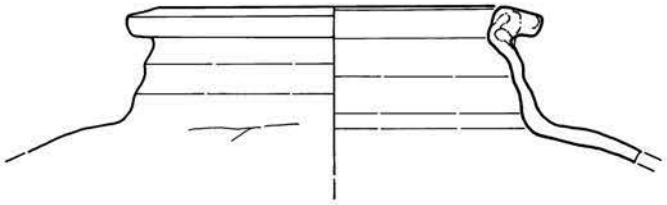
図版52　中国産褐釉陶器 1



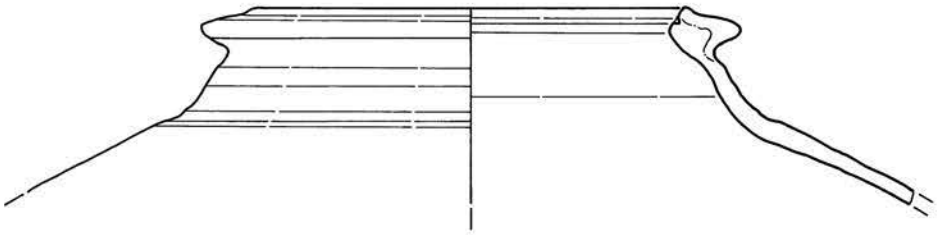
263



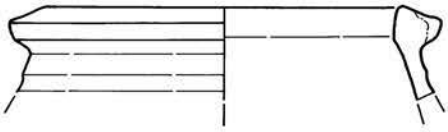
264



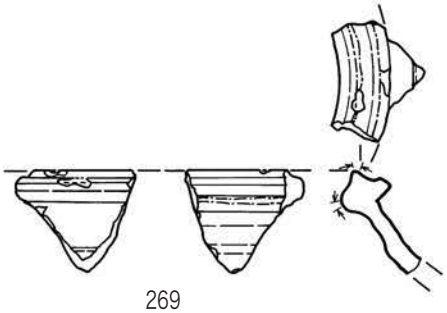
265



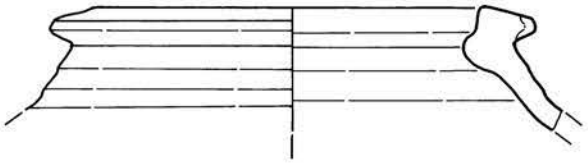
266



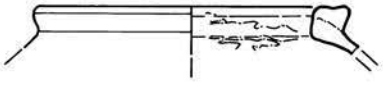
267



269



268



270

第66図　中国産褐釉陶器２

263

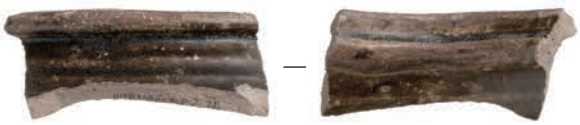
264

265

266

267

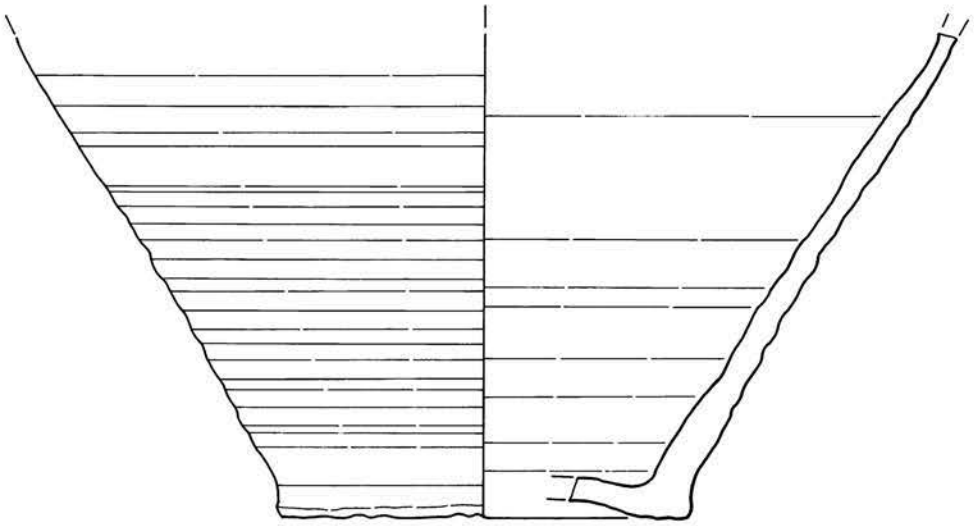
269



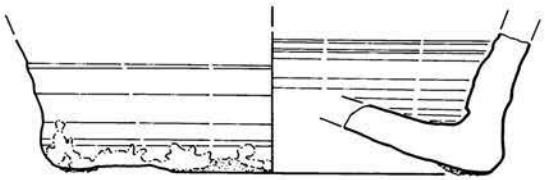
268

270

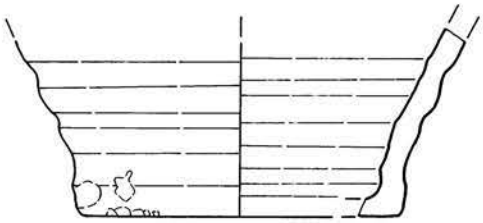
図版53　中国産褐釉陶器２



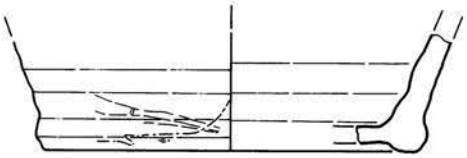
271



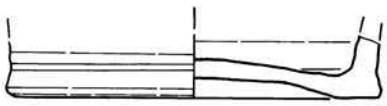
272



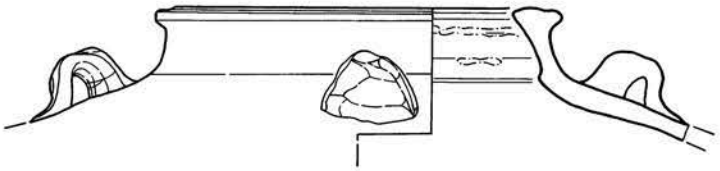
274



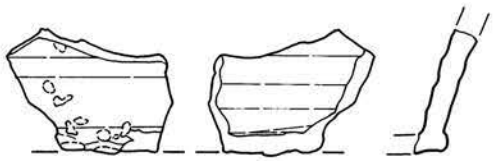
273



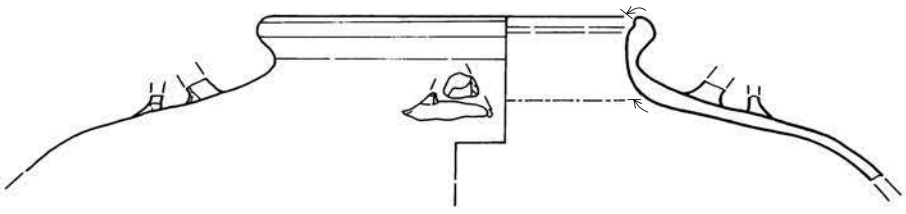
275



277



276

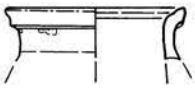


278

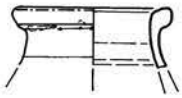
第67図　中国産褐釉陶器３

図版54　中国産褐釉陶器３

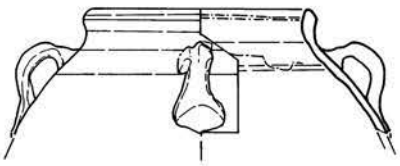
279



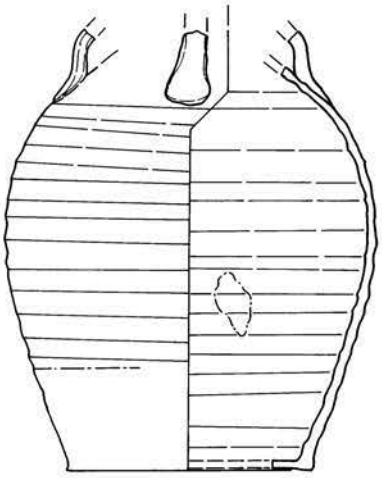
280



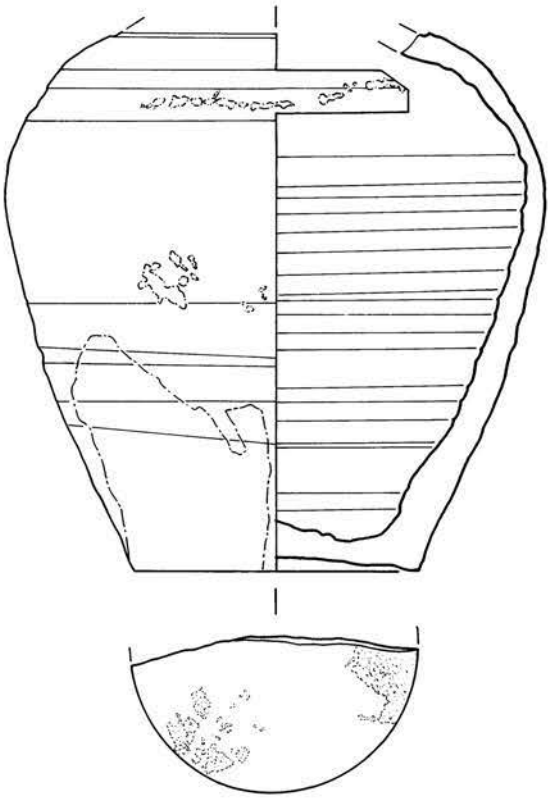
281



282



283



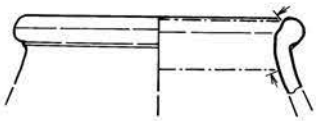
284

285

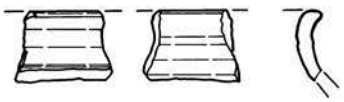
286

287

288



289



290

第68図　中国産褐釉陶器４

279

280

281

282

283

284

285

286

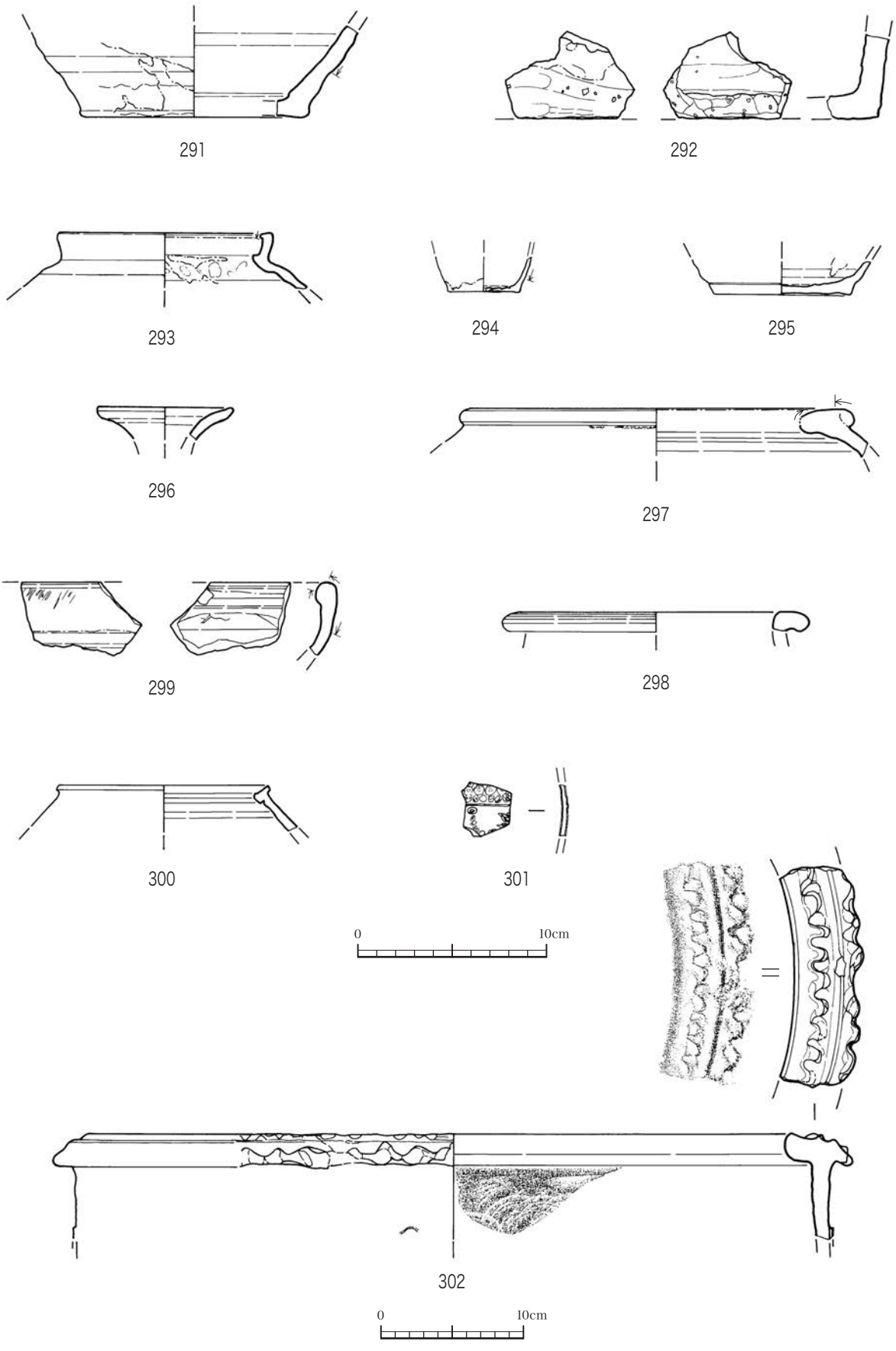
287

288

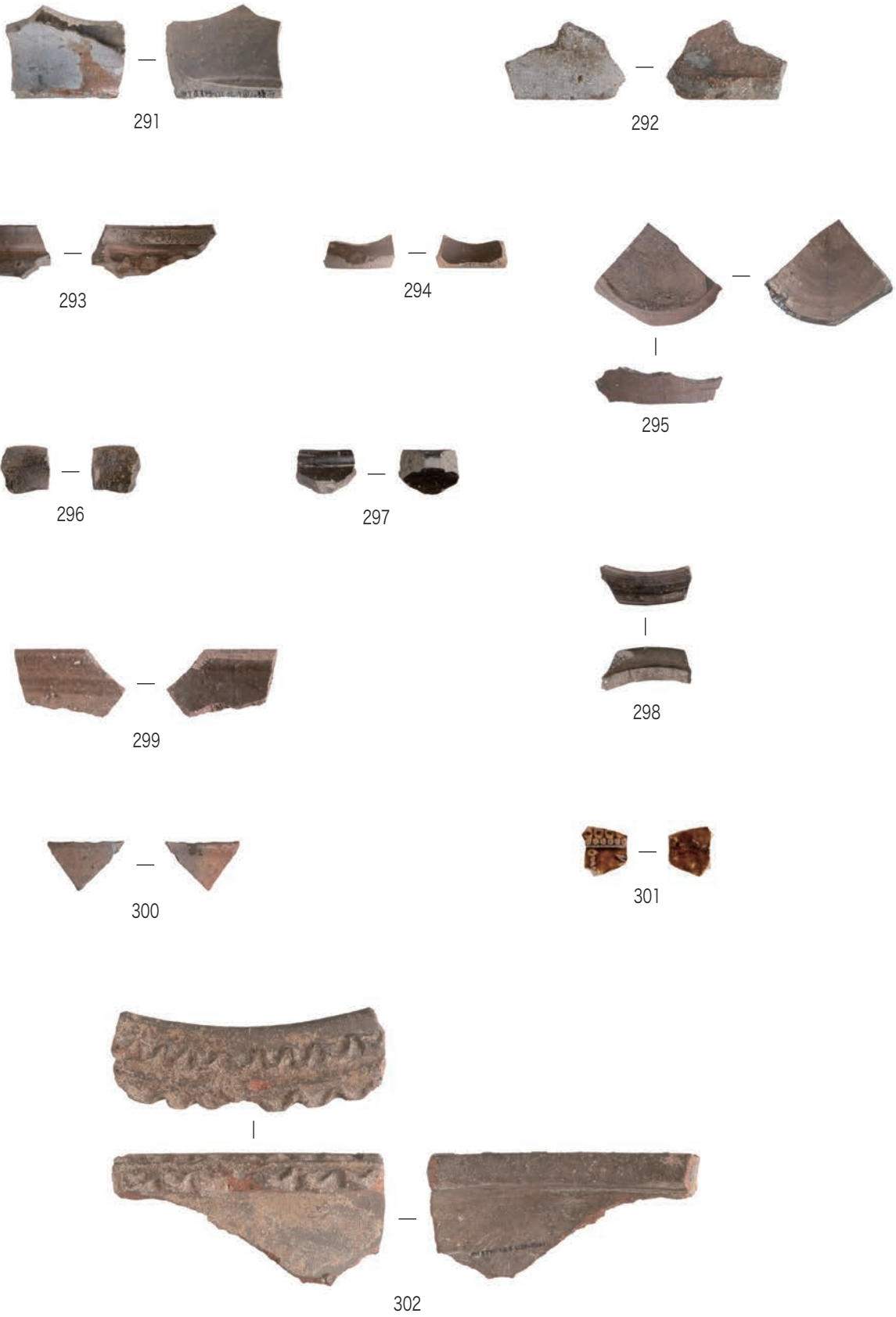
289

290

図版55　中国産褐釉陶器４



第69図　中国産褐釉陶器５・無釉陶器



図版56　中国産褐釉陶器５・無釉陶器

第５節　タイ産褐釉陶器（第29～32表、第70～72図、図版57～59）

タイ産褐釉陶器は総数3,407点出土している。確認された器種は壺のみだが、法量の差から大型と小型に大別され、大型も生産地で２種類に区分できる。以下に分類概念を記し、個々の所見は観察表に譲る。

１．大型壺（303～327）

Ａ類：口縁部をラッパ状に強く外反させ、端部をＴ字状に成形する四耳壺（303～310、325、327）。シーサッチャナライ窯で生産されたと考えられる。

Ｂ類：Ａ類に比して口縁部の外反が弱く、端部を玉縁状に成形する四耳壺（311～324、326）。メナムノイ窯で生産されたと考えられる。

２．小型壺（328、329）

長胴形の双耳壺である。シーサッチャナライ窯で生産されたと考えられる。

第29表　タイ産褐釉陶器観察一覧１

図版番号	器種	器形	部位	口径／器高／底径（cm）	観察事項 文様構成	観察事項 釉（色・範囲・貫入）	観察事項 素地（色・質・混和材）	観察事項 所見	調査年度（平成）	グリッド層
第70図 図版57 303	壺	－	口縁部	19.4 － －	無文。	オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	黄灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c。	19	B－4 黄褐色土＋撹乱
第70図 図版57 304	壺	－	口縁部	18.6 － －	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c。	19	D－3 5層
第70図 図版57 305	壺	－	口縁部	24.0 － －	無文。	黒褐色の釉を外面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c。	19	撹乱

第30表　タイ産褐釉陶器観察一覧２

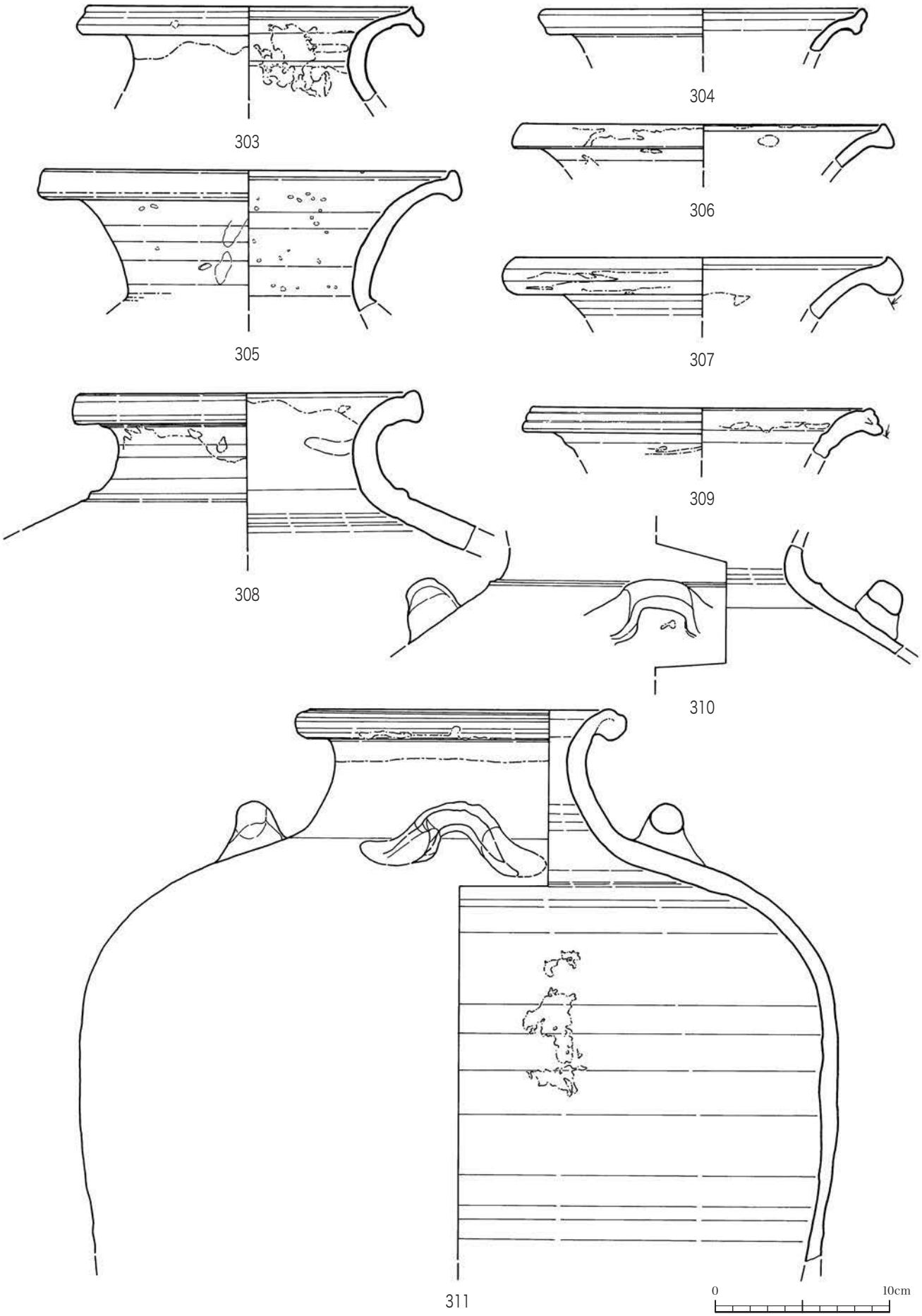
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第70図 図版57 306	壺	−	口縁部	21.6 − −	無文。	浅灰色の釉を両面に施釉。	灰黄褐色で細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c。	19	B−4 黄褐色土
第70図 図版57 307	壺	−	口縁部	22.6 − −	無文。	オリーブ褐色の釉を内面に施釉。	灰黄褐色で細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は外側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後〜16c前。	11	J−10 10 〜 20
第70図 図版57 308	壺	−	口縁部	19.8 − −	外面に陽圏線1条。	オリーブ褐色の釉を外面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後〜16c前。	11	J−10 20 〜 30 ＋撹乱
第70図 図版57 309	壺	−	口縁部	20.4 − −	外面口縁端部に陰圏線2条。	鈍黄橙色の釉を両面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後〜16c前。	11	撹乱
第70図 図版57 310	壺	−	胴部	− − −	外面に陽圏線1条。	黒褐色の釉を外面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で15c〜16c前。	11	J−6 基壇東
第70図 図版57 311	壺	−	口縁部	18.7 − −	外面に陽圏線1条。	浅黄色の釉を外面に施釉。	灰色でやや細かく、砂粒やガラス質鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後〜16c前。	11	J−9 遺構上南 ＋撹乱
第71図 図版58 312	壺	−	口縁部	17.2 − −	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄褐色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c中。	11	撹乱
第71図 図版58 313	壺	−	口縁部	17.0 − −	無文。	黒褐色の釉を内面から外面口縁部まで施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c中。	11	J−10 20 〜 30

第31表　タイ産褐釉陶器観察一覧３

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第71図 図版58 314	壺	−	口縁部	16.4 − −	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	鈍黄褐色でやや細かく、白色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c前。	11	撹乱
第71図 図版58 315	壺	−	口縁部	20.2 − −	無文。	不明。	鈍黄橙色でやや細かく、赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯産で15c後～16c前。	11	撹乱
第71図 図版58 316	壺	−	口縁部	16.2 − −	無文。	褐色の釉を両面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	撹乱
第71図 図版58 317	壺	−	口縁部	21.0 − −	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	J−10 20 ～ 30
第71図 図版58 318	壺	−	口縁部	19.6 − −	無文。	オリーブ褐色の釉を外面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	J−10 10 ～ 20
第71図 図版58 319	壺	−	口縁部	16.4 − −	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は外側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	19	B−4 黄褐色土
第71図 図版58 320	壺	−	口縁部	10.9 − −	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。タイ・メナムノイ窯で15c中。	11	撹乱
第71図 図版58 321	壺	−	胴部	− − −	外面に陽圏線1条。	鈍黄色の釉を外面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	撹乱

第32表　タイ産褐釉陶器観察一覧４

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第72図 図版59 322	壺	－	底部	－ － 26.2	無文。	鈍黄色の釉を両面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	11	撹乱
第72図 図版59 323	壺	－	底部	－ － －	無文。	鈍黄橙色の釉を外面に施釉。	鈍赤褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。タイ・メナムノイ窯で15c後～16c。	19	A－3 裏込内
第72図 図版59 324	壺	－	底部	－ － 22.7	無文。	浅黄色の釉を内面に施釉。	鈍赤褐色でやや細かく、白色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・メナムノイ窯？で15c後～16c。	19	A－1 石積み6 西側上層
第72図 図版59 325	壺	－	底部	－ － 27.0	無文。	浅黄色の釉を外面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒や赤褐色鉱物を含む。	轆轤成形。外底に胎土目積み跡が残る。タイ・シーサッチャナライ窯で15cか。	19	B－3 基壇状遺構内溝中 ＋C－4・2層 ＋C－4・3層表面 ＋C・D－4・3層表面＋撹乱
第72図 図版59 326	壺	－	底部	－ － 23.1	無文。	明黄褐色の釉を内面に施釉。	灰褐色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・メナムノイ窯？で15c後～16c。	11	J－10 20～30
第72図 図版59 327	壺	－	底部	－ － 18.4	無文。	不明。	鈍赤褐色でやや細かい。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で15cか。	19	A－1 石積み6 西側上層
第72図 図版59 328	壺	双耳	口縁部	2.8 － －	外面に陰圏線数条。	褐色の釉を内面口縁部から外面まで施釉。	灰白色でやや細かく、砂粒や黒色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で15c後～16c。	11	撹乱
第72図 図版59 329	壺	－	胴部	－ － －	無文。	オリーブ褐色の釉を外面に施釉。	灰白色でやや細かく、砂粒や黒色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	19	B－5シーリ内木炭層 ＋B－5シーリ内木炭層(畦)＋B－5シーリ内上層（黄色土・畦） ＋C－5・3層直上



第70図　タイ産褐釉陶器 1

303

304

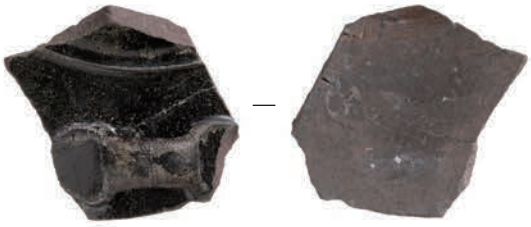
306

305

307

309

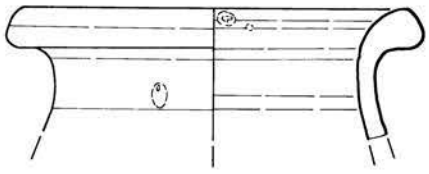
308



310

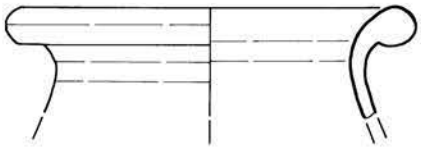
311

図版57　タイ産褐釉陶器 1



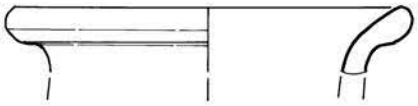
312

313

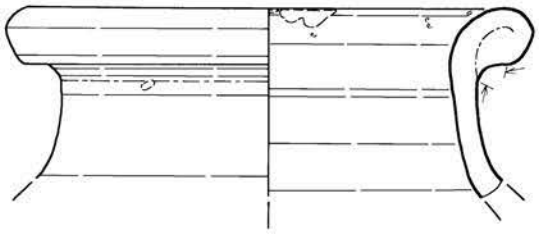


314

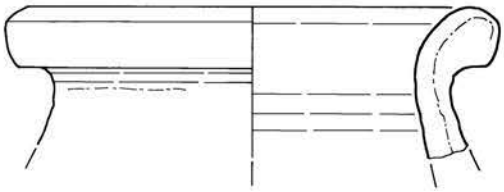
315



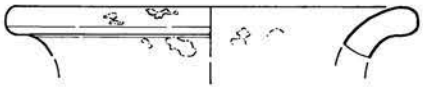
316



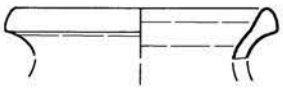
317



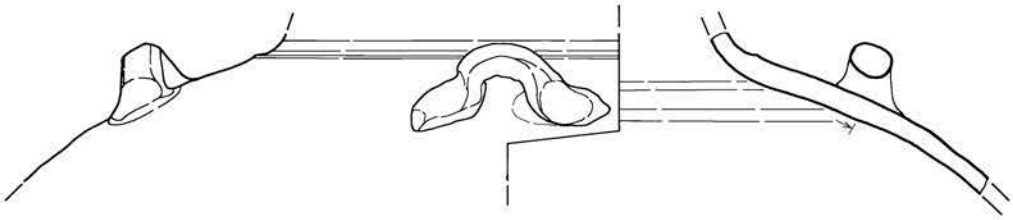
318



319



320



321

0 10cm

第71図　タイ産褐釉陶器２

312

313

314

315

316

317

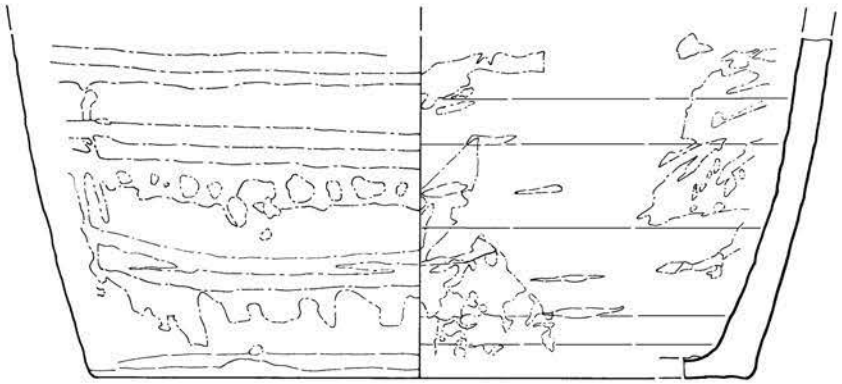
318

319

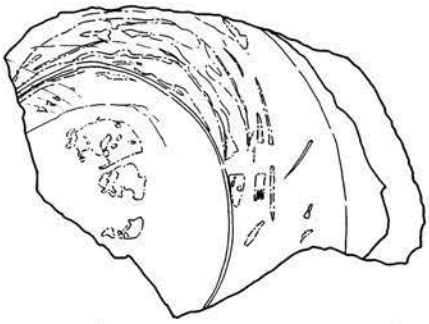
320

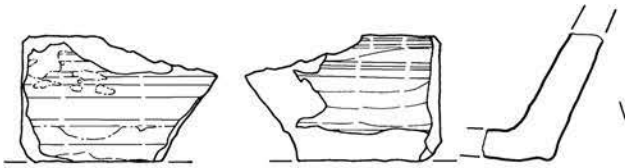
321

図版58　タイ産褐釉陶器２

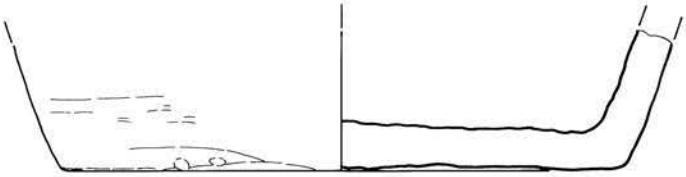


322

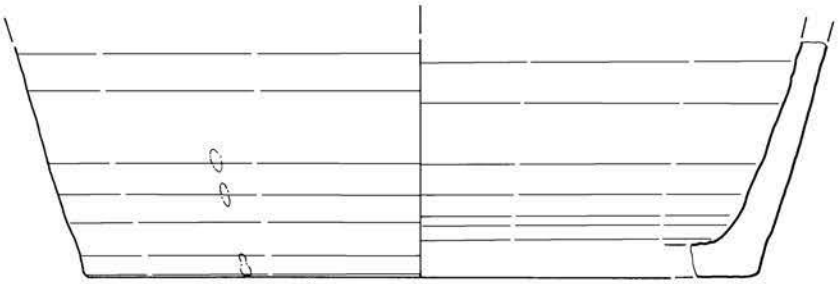




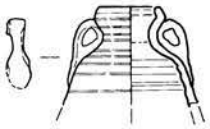
323



324

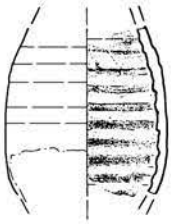


325



328

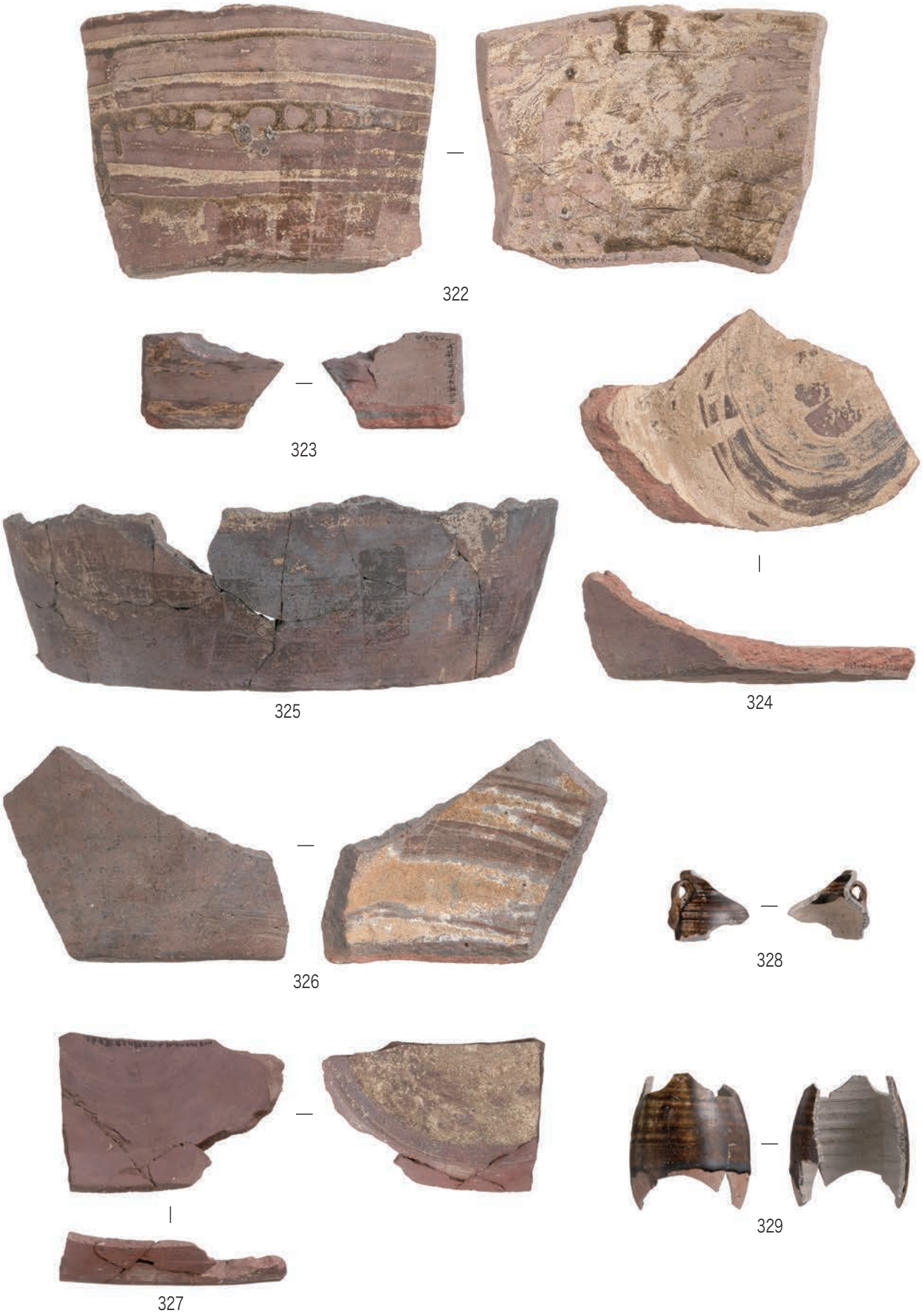
326



329

327

第72図　タイ産褐釉陶器３



図版59　タイ産褐釉陶器３

第６節　その他の輸入陶磁器（第33～37表、第73～79図、図版60～66）

その他の輸入陶磁器として、中国産は色絵・白磁餅花手・素三彩・褐釉染付・青磁染付・瑠璃釉・彩釉陶・黒釉陶器・土器、朝鮮産は象嵌青磁、タイ産は土器・鉄絵、ベトナム産は白磁・染付・色絵が出土している。以下に種類別に概観し、詳細は観察表に記す。

１．中国産陶磁器（330～366、370～372）

色絵は明代（330～333）と清代（334～338）に大別される。前者は施釉後に上絵付けを施す五彩が主体で、後者はいわゆる豆彩が多い。器種は碗類が中心となる。白磁餅花手としたものは340と341で、外面に白盛りで文様を描く。素三彩（342）は皿の底部が出土しているが、器形や文様の特徴から東のアザナ地区出土品（沖縄埋文2004・第28図16）と同種と考えられる。褐釉染付（343、344）は端反口縁の小杯、青磁染付（345）は端反口縁の小碗が得られており、いずれも内面に染付による文様が描かれる。瑠璃釉は明代（347～349）と清代（346、350）のものがあり、両者は成形や施釉方法などで違いがみられる。351～358は低火度焼成の彩釉陶の一群で、華南三彩の名で呼ばれる明代（351～355）のものと、清代（356～358）のものに大別される。黒釉陶器は天目と称される鼈甲口の碗（359～365）と、小型の壺（366）が出土している。土器（370～372）は円盤状の蓋で、撮や袴を持たない。中国産褐釉陶器の壺Ｃ類に対応すると考えられる。

２．朝鮮産陶磁器（367～369）

367～369は高麗後期に生産されたと考えられる青磁で、器種は碗と皿がみられる。いずれも器面に白土や黒土を象嵌して文様を描く。

３．タイ産陶磁器（373～384）

ここでは褐釉陶器以外の資料をまとめた。373～381はハンネラとも称される硬質の土器で、器種は全て落とし蓋である。褐釉陶器の大型壺に対応すると考えられる。鉄絵は合子の蓋（382）と身（383、384）が確認されている。

４．ベトナム産陶磁器（385～392）

白磁は碗（385、386）・小杯（387）・瓶（388）が確認されている。特に小杯は成形や施文が非常に丁寧であることから、いわゆる官窯クラスの優品と思われる。染付は高台を持たない平底の小碗（389）と、酒会壺の蓋（390）がみられるが、前者は鉄絵を併用しており古手と考えられる。色絵（391、392）は端反口縁の碗が出土しており、両面に赤や緑の上絵付けで文様を描く。

第33表　その他の輸入陶磁器観察一覧１

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成・形状	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第73図 図版60 330	碗	端反	口縁部	－ － －	両面に赤・緑で牡丹又は蓮唐草文を描くが殆ど剥落。	透明釉を両面に施釉。両面に荒い貫入。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	11	撹乱
第73図 図版60 331	碗	－	底部	－ － 5.2	外面に赤で圏線、外底に赤で二重圏線＋梵字文。内底は赤で二重圏線＋花弁文。花弁文は2色だが剥落で不明。	灰白色の釉を内底から畳付・外底に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c前～中。	19	撹乱
第73図 図版60 332	小碗	外反	口縁部	10.0 － －	外面に金で梅樹文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形(型の可能性あり)。景徳鎮窯で14c後～15c中。	19	C－5 方形礎石 抜穴内
第73図 図版60 333	碗	端反	口縁部	－ － －	外面に赤・緑で玉取獅子文を描くが大半は剥落。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形(型の可能性あり)。景徳鎮窯で16c。	11	I－9 南側
第73図 図版60 334	碗	直口	口縁部	－ － －	外面に染付で蓮唐草文。上絵付は剥落して不明。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形(型の可能性あり)。景徳鎮窯で18c。	11	J－8 灰混層 ＋撹乱
第73図 図版60 335	碗	端反	口縁部	－ － －	外面に金・赤・青で如意頭繋文と唐草文を描くが大半は剥落。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形(型の可能性あり)。景徳鎮窯系で18c～19c。	11	撹乱
第73図 図版60 336	碗	－	底部	－ － 6.6	外面は染付・緑・金で蓮唐草文＋如意頭繋文。外底は染付で二重圏線＋「大清雍正年製」銘。内底は染付・緑・赤・金で二重圏線＋蓮唐草文。両面とも上絵付は大半が剥落。	透明釉を全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で18c前。	11	I－9 南側 ＋撹乱
第73図 図版60 337	碗	端反	口縁部	－ － －	外面に赤・青・黄で鋸歯文？＋区画文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。徳化窯で18c。	11	撹乱
第73図 図版60 338	小皿	端反	口 ∫ 底	7.8 2.0 5.8	内底に赤と緑で花文？を描くが大半は剥落。	透明釉を内底から畳付まで施釉後に畳付と口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	型成形。徳化窯で18c後～19c前。	11	I－8 20 ～ 30
第73図 図版60 339	小碗	端反	口縁部	－ － －	両面に上絵付で文様を施すが殆ど剥落し不明。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形(型の可能性あり)。中国産？で年代不明。	19	B－2 埋ガメ直下
第74図 図版61 340	碗	端反	口縁部	－ － －	外面に白盛りで如意雲文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	11	I－7 10 ～ 20
第74図 図版61 341	皿	端反	口縁部	19.8 － －	外面に白盛りで如意雲文。	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	11	撹乱

第34表　その他の輸入陶磁器観察一覧２

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成・形状	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第74図 図版61 342	皿	－	底部	－ － 8.6	外面に陽刻の雷文＋雲文。高台外面に陰圏線。	透明釉を全面施釉後に畳付部分を釉剥ぎ。明青灰色の釉薬を外面のみ二度掛けするが殆ど剥落。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で17c～18c前。	11	撹乱
第74図 図版61 343	小杯	端反	口縁部	－ － －	無文。	外面褐釉・内面透明釉の掛け分け。	灰白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で17c末～18c初。	19	撹乱
第74図 図版61 344	小杯	端反	底部	－ － 3.8	内底に染付で二重圏線＋山水文。外底に染付で圏線+字款。	外面褐釉・内面透明釉の掛け分け。全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で17c末～18c初。	19	撹乱
第74図 図版61 345	小碗	端反	口縁部	－ － －	内面に染付で二重圏線＋八卦文。	外面青磁釉・内面透明釉の掛け分け。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で18c後。	11	J－8 茶褐色灰混層
第74図 図版61 346	碗	端反	口～底	9.6 4.9 4.2	無文。	外面瑠璃釉・内面透明釉の掛け分け。全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c末～17c。	11	I－9 南側 ＋撹乱
第74図 図版61 347	碗	直口	口～底	12.8 6.1 5.1	無文。	外面瑠璃釉・内面透明釉の掛け分け。外底は畳付を除き透明釉を施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	19	A－1 石積み6 西側上層
第74図 図版61 348	碗	端反	口縁部	－ － －	無文。	外面瑠璃釉・内面透明釉の掛け分け。	白色で緻密。	轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	19	撹乱
第74図 図版61 349	瓶	玉壺春	底部	－ － 6.5	外面に蔓唐草文?＋牡丹唐草文。	外面瑠璃釉・内面透明釉の掛け分け。全面施釉後に畳付部分を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形で内面胴部に接ぎ目あり。景徳鎮窯で16c後～17c前。	11	I－6 基壇東 ＋撹乱
第74図 図版61 350	小杯	端反	口～底	3.6 1.9 1.7	無文。	外面瑠璃釉・内面透明釉の掛け分け。瑠璃釉の発色不良。	白色で緻密。	型成形。外底に焼成時の溶着痕?が残る。徳化窯で18c～19c前。	11	撹乱
第75図 図版62 351	盤	－	底部	－ － 16.6	内面に黄で牡丹文。	緑釉を内底から外面胴部に施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。釉薬の下地に白土を塗布。福建産で15c～16c。	11	J－8 茶褐色灰混層
第75図 図版62 352	香炉	－	口縁部	12.6 － －	外面に貼付の突帯文(残存4条)。	緑釉を外面に施釉後、突帯部分を釉剥ぎ。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。中国産？で明代または清代。	11	撹乱
第75図 図版62 353	水注	－	把手	－ － －	無文。	緑釉を外面に施釉。	鈍橙色でやや細かい。	福建産で15c～16c。	19	A－1 石積み6 西側上層

第35表　その他の輸入陶磁器観察一覧３

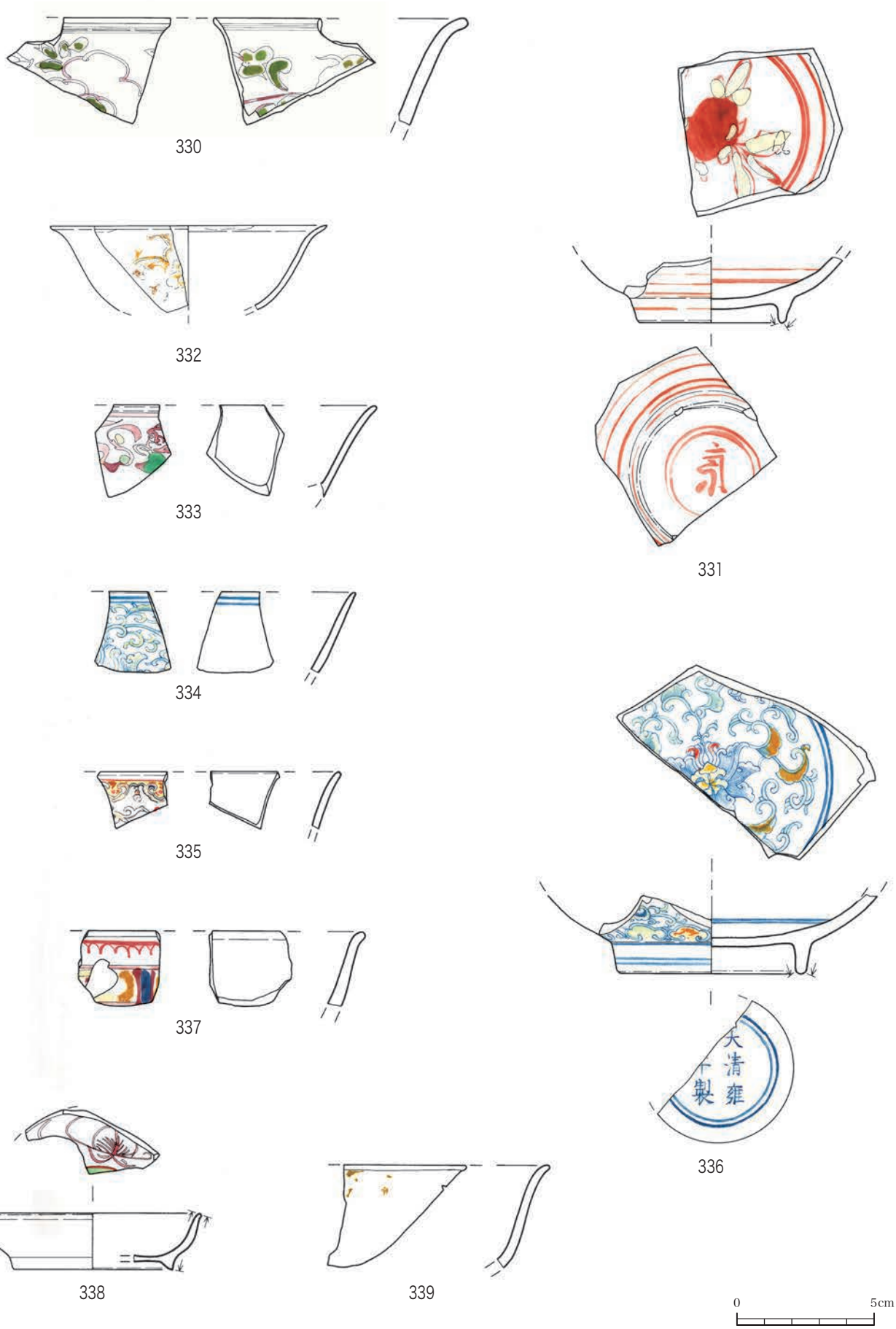
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成・形状	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第75図 図版62 354	蓋	－	撮	－ － －	無文。	藍釉を外面に施釉するが殆ど剥落。	白色で細かい。	型成形で下端に胴接ぎ跡あり。景徳鎮窯で15c～16c	11	J－10 10～20
第75図 図版62 355	瓶	玉壺春	胴部	－ － －	外面に霊芝唐草文か。	外面に翡翠釉を施釉するが殆ど剥落。	灰白色で細かい。	釉薬の下地に白土を塗布。轆轤成形で内面胴部に接ぎ目あり。景徳鎮窯で16c。	11	撹乱
第75図 図版62 356	鉢	稜花	口縁部	29.0 － －	無文。	外面紫釉・内面緑釉の掛け分け。	白色で細かい。	轆轤挽き後外面全体を花弁状に成形。中国南部で清代。	11	I－6 基壇東
第76図 図版62 357	壺	蓋	庇〵袴	12.7 3.6 13.0	無文。	外面に銅緑釉を施釉。全体に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。蓋甲端部の釉が青白く変色。中国南部で清代。	11	I－9南側＋J－8 茶褐色灰混層 ＋撹乱
第76図 図版62 358	壺	蓋	庇〵袴	11.9 － 9.4	蓋甲に折枝梅文を貼付、黄・紫で絵付。	緑釉を全面に施釉後、袴接地部を釉剥ぎ。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。釉薬の下地に白土を塗布。中国産で清代。	11	撹乱
第76図 図版63 359	碗	天目	口〵底	11.4 5.6 4.4	内面に禾目多数。	内底から外面胴部に黒釉と黒褐色釉を二度掛け。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形で高台脇を水平に切り、高台内刳りは浅い。高台と胴部の境に接合面あり。福建省で15c。	19	B－4 黄褐色土
第76図 図版63 360	碗	天目	口〵底	10.4 6.6 3.4	内面に禾目多数。	内底から外面胴部に黒釉とオリーブ褐色釉を二度掛け。	灰白色で細かい。	轆轤成形で高台脇を水平に切り、高台内刳りは浅い。外面一部が被熱。福建産で14c～15c。	19	撹乱
第76図 図版63 361	碗	天目	口縁部	11.4 － －	無文。	内底から外面胴部に黒褐色釉と鈍黄褐色釉を二度掛け。	灰白色で細かい。	轆轤成形で高台脇を斜めに切る。福建産で15c。	19	B－1石積み3裏込内＋撹乱
第76図 図版63 362	碗	天目	口縁部	12.3 － －	無文。	内底から外面胴部に暗褐色釉と黒釉を二度掛け。	淡黄色で細かい。	轆轤成形で高台脇を水平に切る。福建産で14c～15c。	11	撹乱
第76図 図版63 363	碗	天目	口縁部	13.3 － －	外面胴部に陰圏線1条。	内底から外面胴部に黒釉とオリーブ褐色釉を二度掛け。	淡黄色で細かい。	轆轤成形。福建産で15c。	19	A－3 裏込内
第76図 図版63 364	碗	天目	底部	－ － 4.6	無文。	内面に黒褐色の釉薬を施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形で高台脇を水平に切り、高台内刳りは浅い。福建産で14c～15c。	19	撹乱
第76図 図版63 365	碗	天目	底部	－ － 4.0	高台外面に陰圏線1条。	内面に黒褐色の釉薬を施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形で高台脇を水平に切り、高台内刳りは浅い。福建産で15c。	11	撹乱
第76図 図版63 366	壺	－	口縁部	5.5 － －	無文。	両面に黒褐色の釉薬を施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。中国産で明代か。	19	C－2・3 野面石積み 南側栗石

第36表　その他の輸入陶磁器観察一覧４

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第77図 図版64 367	碗	直口	口縁部	20.2 － －	外面に白土・黒土象嵌で雷文+花文+竹管文か、内面に白土・黒土象嵌で飛鶴文+不明文。	暗オリーブ色の釉を両面に施釉。	鈍黄橙色で細かい。	轆轤成形。朝鮮産で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第77図 図版64 368	碗	－	胴部	－ － －	外面に白土象嵌で蓮弁文、内面に白土象嵌で竹管文か。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	黄灰色で細かい。	轆轤成形。朝鮮産で14c後～15c前。	19	D－4 5層
第77図 図版64 369	皿	－	底部	－ － 5.8	内面に白土・黒土象嵌で波濤文？+連珠文。	オリーブ灰色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰色で細かい。	轆轤成形。朝鮮産で14c後～15c前。	19	E－4 5層
第77図 図版64 370	蓋	－	－	14.4 － －	無文。	なし。	橙色で細かく、赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形。下面に染料？が付着。中国産で明代。	11	J－10 20～30
第77図 図版64 371	蓋	－	－	－ － －	無文。	なし。	鈍黄橙色で細かく、赤褐色鉱物を含む。	ナデ＋削り成形。中国産で明代。	19	A－3 裏込内
第77図 図版64 372	蓋	－	－	－ － －	無文。	なし。	橙色で細かく、赤褐色鉱物を含む。	ナデ＋削り成形。中国産で明代。	11	撹乱
第78図 図版65 373	蓋	－	撮～庇	2.1 2.8 10.9	無文。	なし。	橙色でやや細かく、褐色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で庇端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	19	撹乱
第78図 図版65 374	蓋	－	庇	－ － 12.6	無文。	なし。	鈍黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で庇端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	11	撹乱
第78図 図版65 375	蓋	－	庇	－ － 14.0	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で庇端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	11	撹乱
第78図 図版65 376	蓋	－	庇	－ － 12.8	無文。	なし。	褐灰色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で庇端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	19	B－4 黄褐色土
第78図 図版65 377	蓋	－	庇	－ － 13.4	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形で庇端部は上面折り返し。タイ産で15c～16c。	11	撹乱
第78図 図版65 378	蓋	－	撮	3.0 4.7 －	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ+削り成形。タイ産で15c～16c。	11	撹乱

第37表　その他の輸入陶磁器観察一覧５

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項 文様構成・形状	観察事項 釉 (色・範囲・貫入)	観察事項 素地 (色・質・混和材)	観察事項 所見	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第78図 図版65 379	蓋	－	撮	3.3 (4.0) －	無文。	なし。	浅黄橙色でやや細かく、褐色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	ナデ＋削り成形。タイ産で15c～16c。	11	J－10 20～30
第78図 図版65 380	蓋	－	撮	2.9 4.3 －	無文。	なし。	鈍黄橙色でやや細かく、褐色鉱物を含む。	ナデ＋削り成形。タイ産で15c～16c。	11	撹乱
第78図 図版65 381	蓋	－	－	－ － －	無文。	なし。	橙色でやや細かく、褐色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	ナデ＋削り成形。タイ産で15c～16c。	19	B－1 石積み5 裏込内
第78図 図版65 382	合子	蓋	庇	－ － －	蓋甲に鉄絵で草花文か。	透明釉を蓋甲に施釉後、庇端部を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	19	B－5 シーリ内木炭層 (畦)
第78図 図版65 383	合子	身	口縁部	10.5 － －	外面に鉄絵で斜格子文＋圏線か。	透明釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で細かく、黒色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	11	撹乱
第78図 図版65 384	合子	身	底部	－ － 7.0	外面に鉄絵で圏線か。	灰釉を外面腰部まで施釉。	灰白色で細かく、黒色鉱物を含む。	轆轤成形。タイ・シーサッチャナライ窯で16c。	11	撹乱
第79図 図版66 385	碗	端反	底部	－ － 6.7	内面に波濤文、内底に花文。	灰白色の釉を内底から畳付まで施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形で釉下に白化粧。内底に目跡が3箇所残る。ベトナム産で15c後～16c。	11	撹乱
第79図 図版66 386	碗	端反	口縁部	－ － －	外面に花唐草文。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形で釉下に白化粧。ベトナム産で15c～16c初。	11	撹乱
第79図 図版66 387	小杯	端反	口～底	6.6 3.6 3.8	内面に牡丹唐草文、内底に花文。	透明釉を全面に施釉後、口唇部と畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形か。ベトナム産で15c前。	11	I－6 基壇東
第79図 図版66 388	瓶	－	胴部	－ － －	外面に蓮弁文＋鳳凰文か。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	轆轤成形で釉下に白化粧。ベトナム産で15c～16c初。	19	A－1 石積み6 西側上層
第79図 図版66 389	小碗	直口	口～底	8.6 4.2 4.0	外面に鉄絵・染付で蔓唐草文。内底に染付で不明文。	透明釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形で釉下に白化粧。内面に目跡が1箇所残る。全体的に被熱。ベトナム産で15c。	19	A－3 裏込内 ＋A－4裏込内
第79図 図版66 390	壺	蓋	庇	12.6 － 9.6	蓋甲に呉須でラマ式蓮弁文。	透明釉を両面に施釉後、内面庇端部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形で釉下に白化粧。ベトナム産で15c～16c前。	11	撹乱
第79図 図版66 391	碗	端反	口縁部	－ － －	両面に赤・緑で菊唐草文か。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形で釉下に白化粧。ベトナム産で16c。	11	撹乱
第79図 図版66 392	小碗	端反	口縁部	11.8 － －	外面に赤・緑で花唐草文、内面に赤で蔓唐草文か。	透明釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形で釉下に白化粧。ベトナム産で16c。	19	撹乱

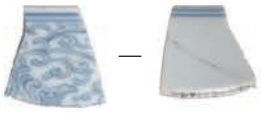


第73図　その他の輸入陶磁器１

330

332

333



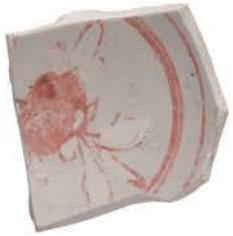
334

335

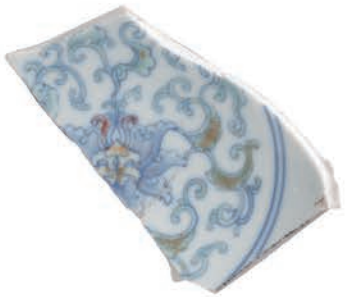
337

338

339

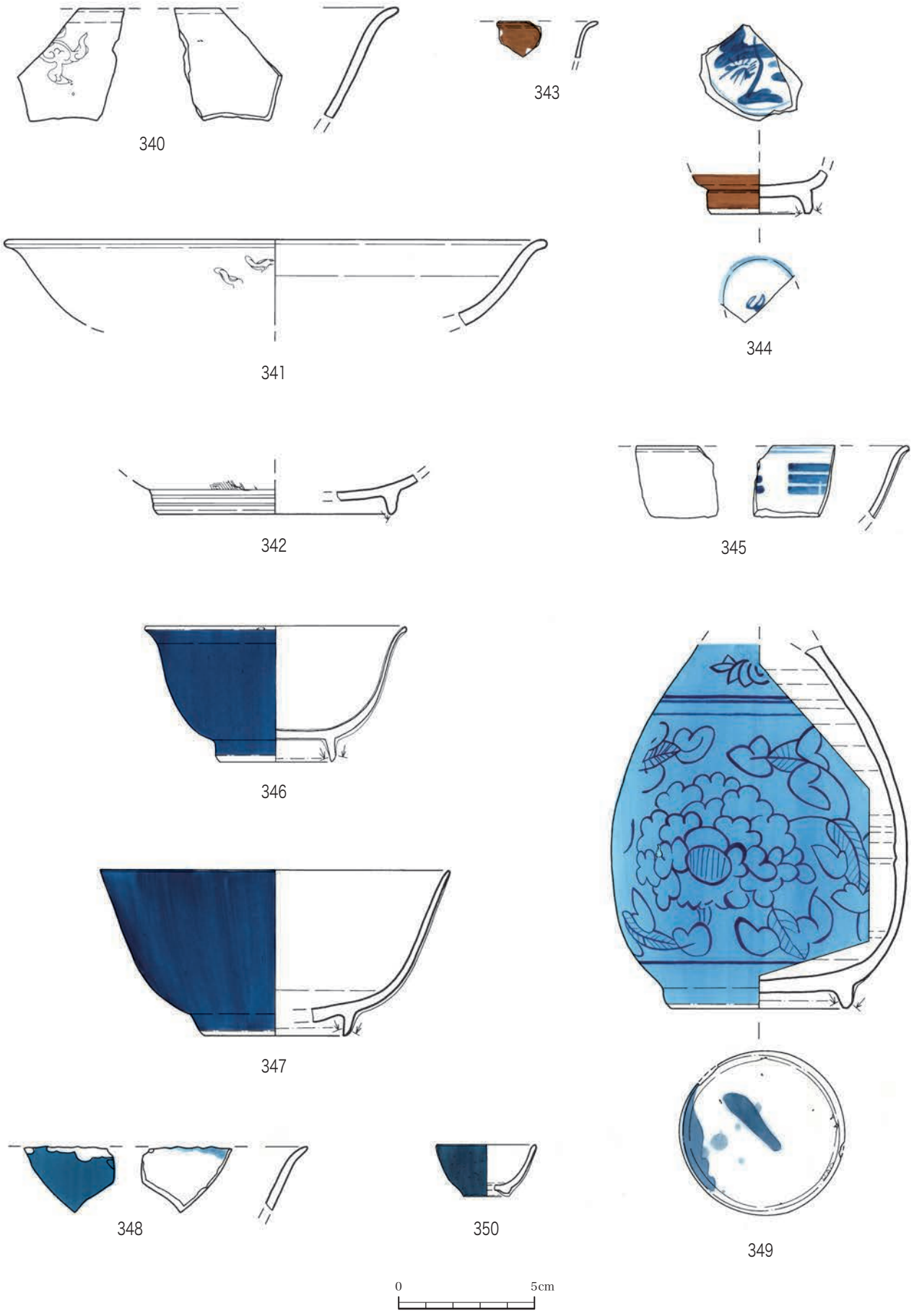


331



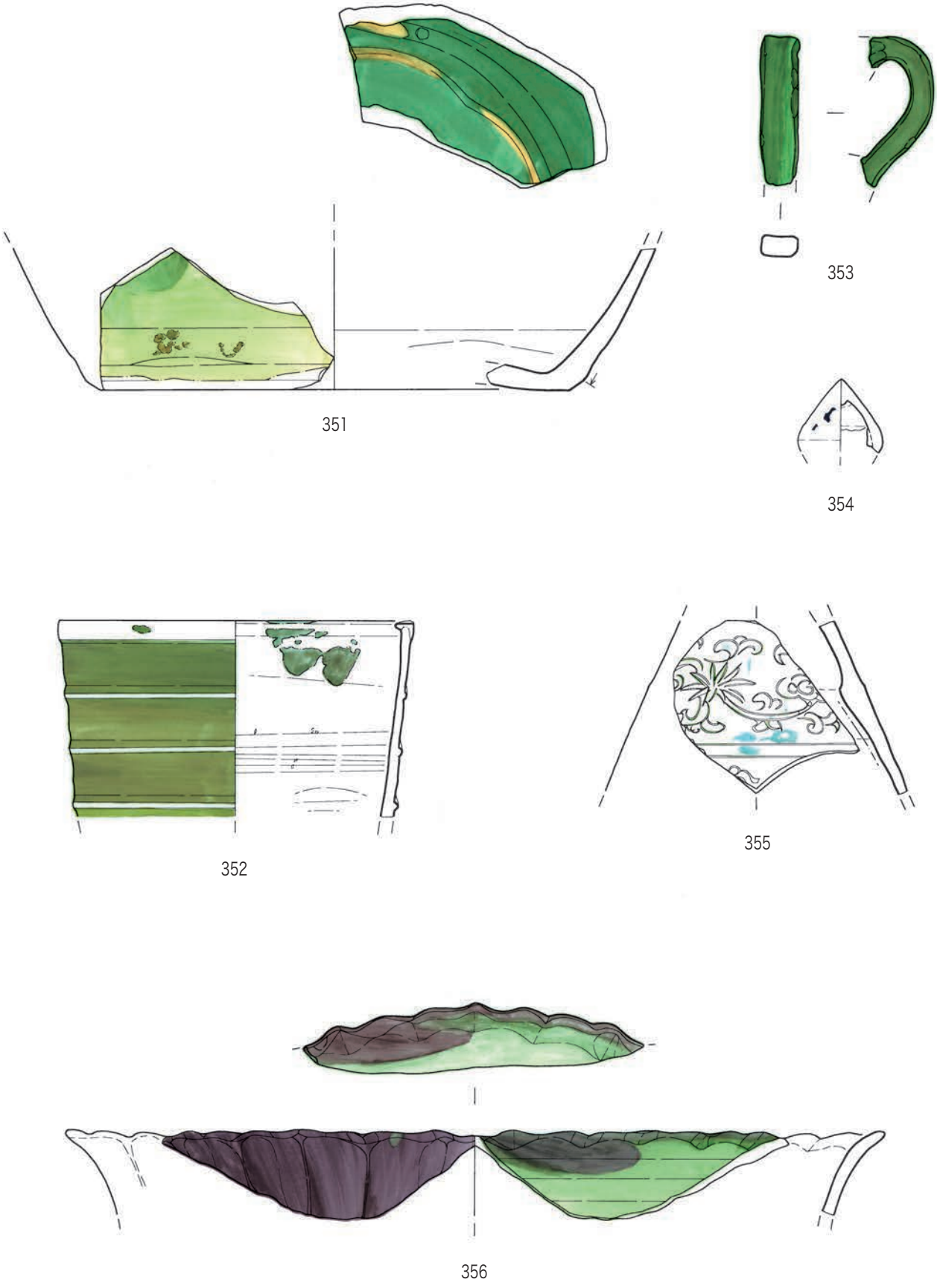
336

図版60　その他の輸入陶磁器 1

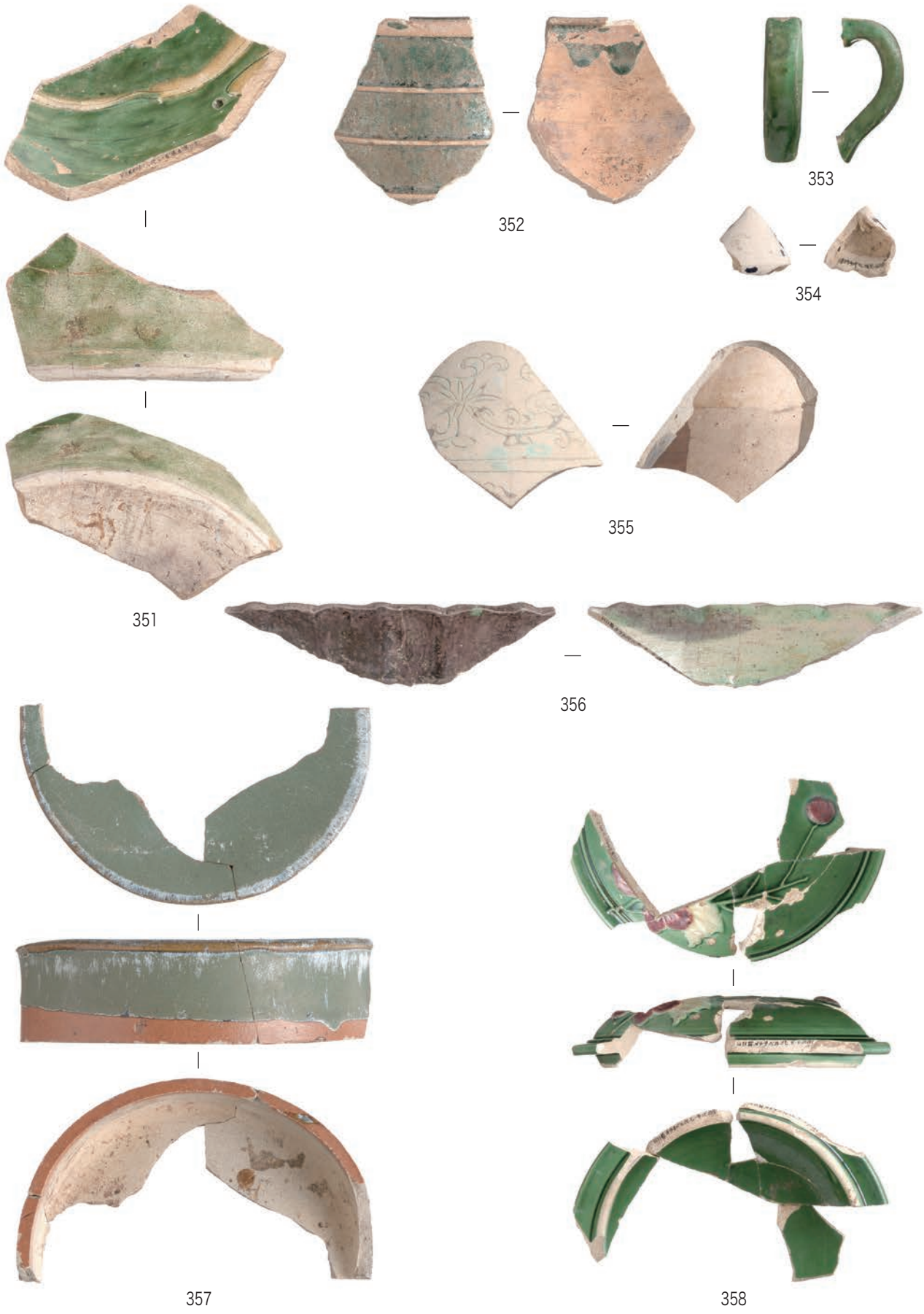


第74図　その他の輸入陶磁器２

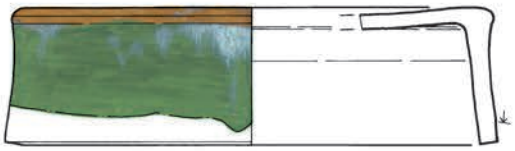
図版61　その他の輸入陶磁器２



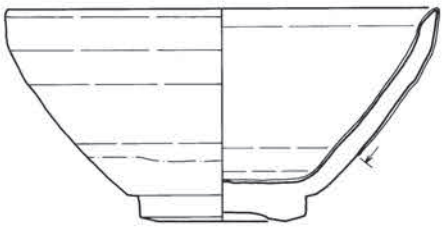
第75図　その他の輸入陶磁器３



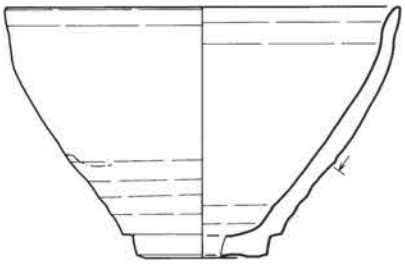
図版62　その他の輸入陶磁器３



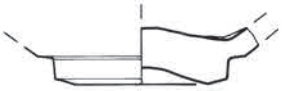
357



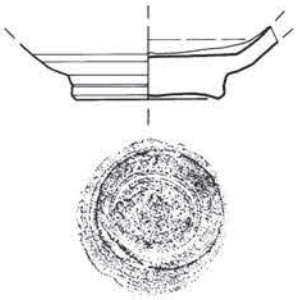
359



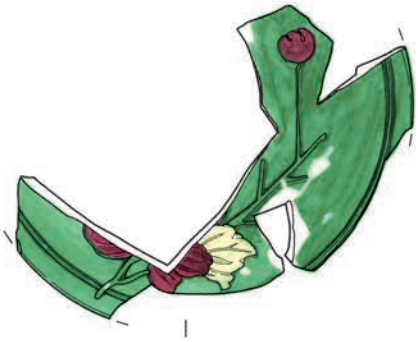
360



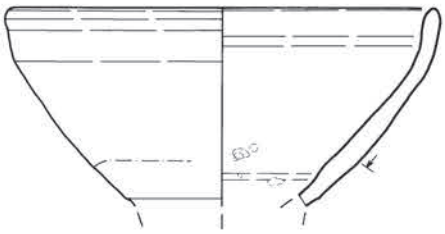
364



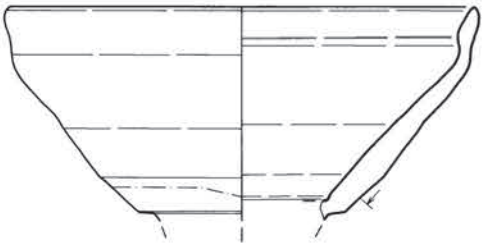
365



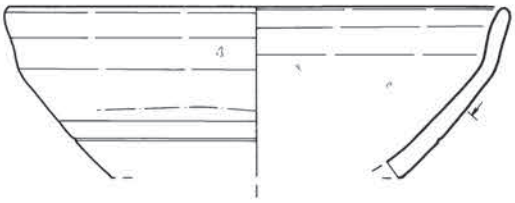
358



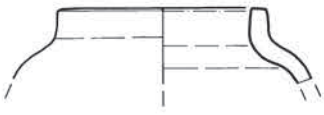
361



362



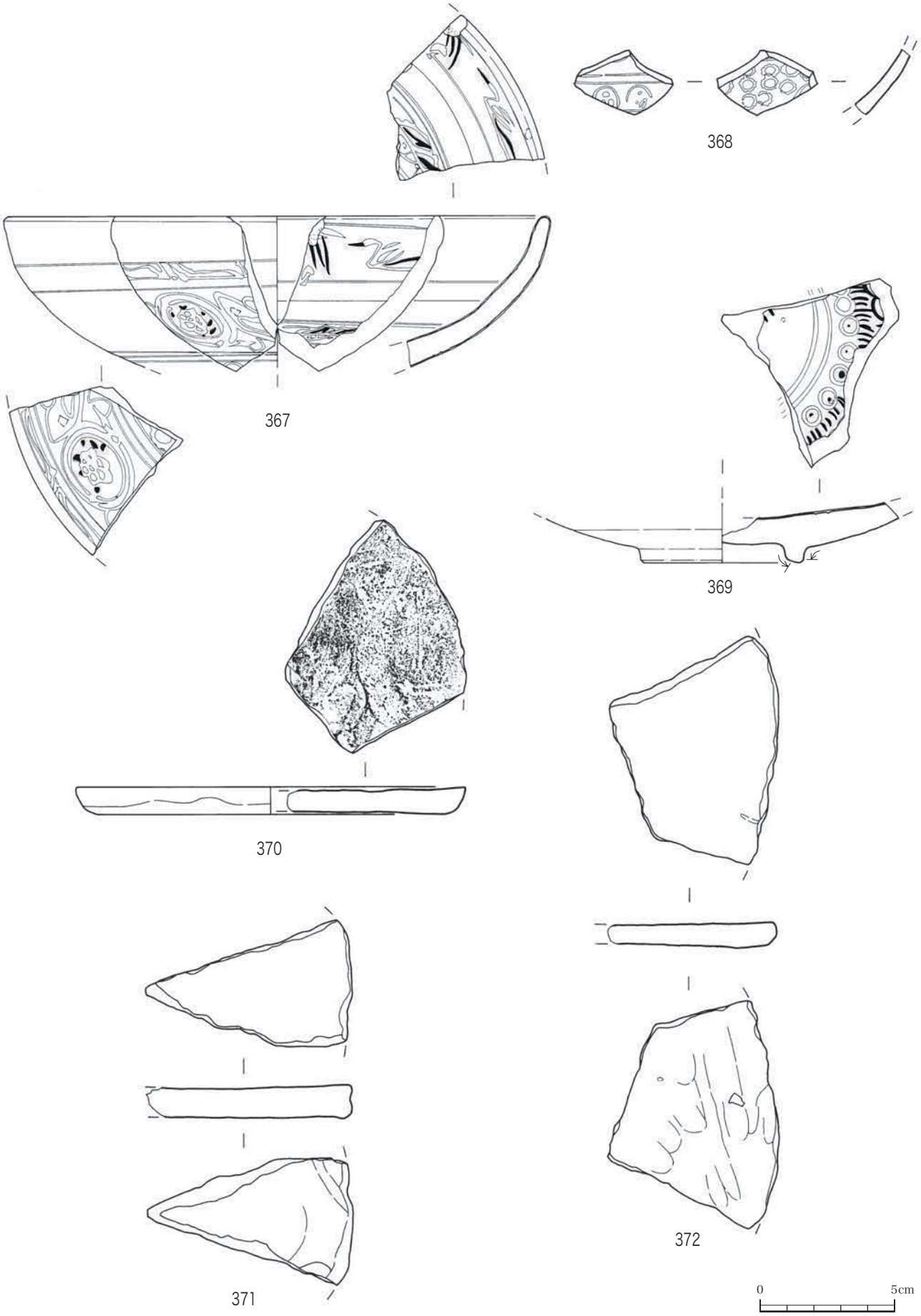
363



366

第76図　その他の輸入陶磁器４

図版63　その他の輸入陶磁器４



第77図　その他の輸入陶磁器５

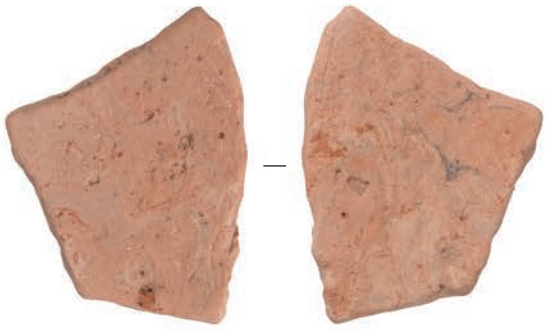
367

368

369

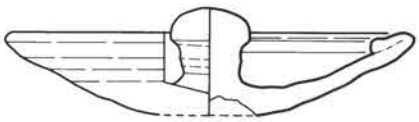
370

371

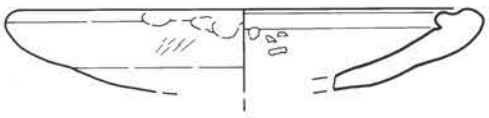


372

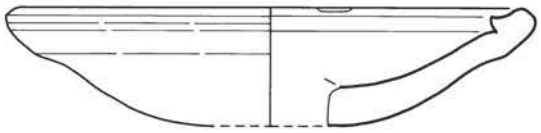
図版64　その他の輸入陶磁器５



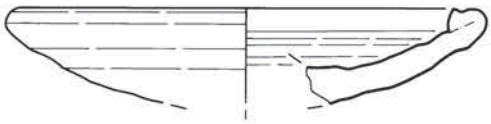
373

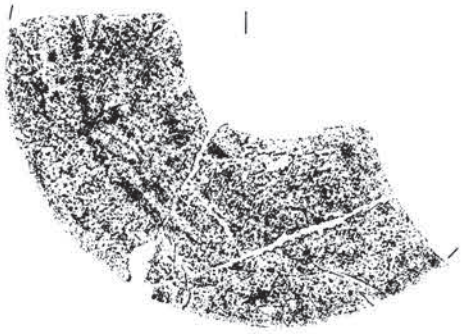


374



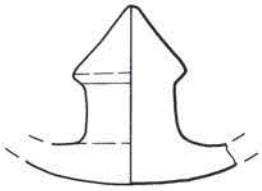
375



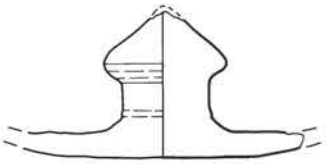


376

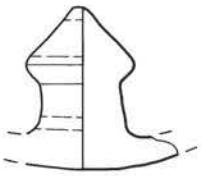
377



378

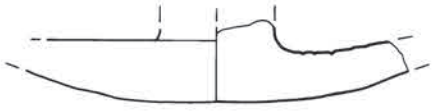


379

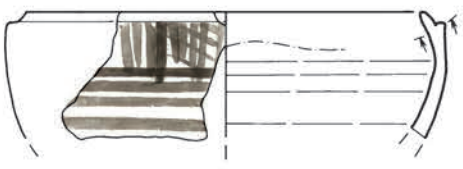


380

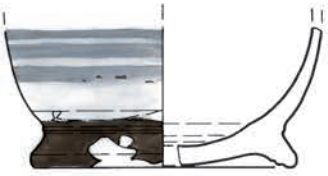
382



381



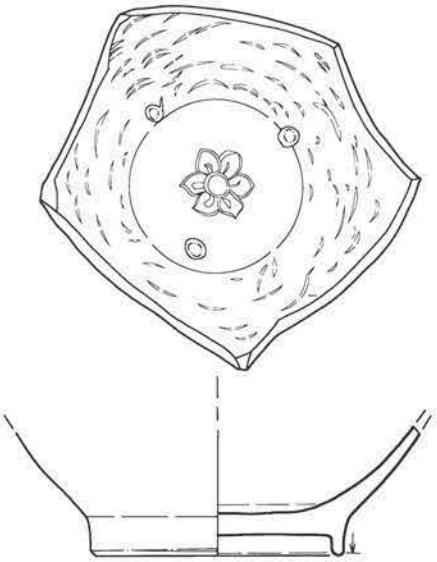
383



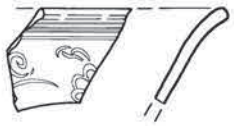
384

第78図　その他の輸入陶磁器６

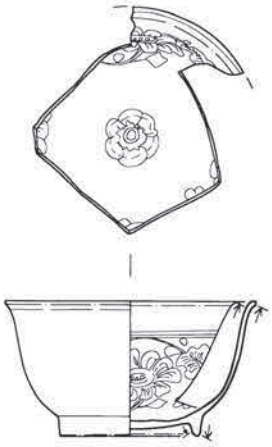
図版65　その他の輸入陶磁器６



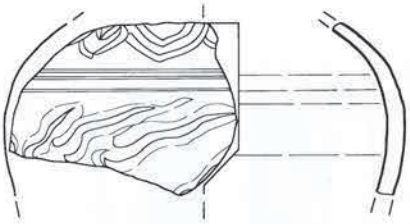
385



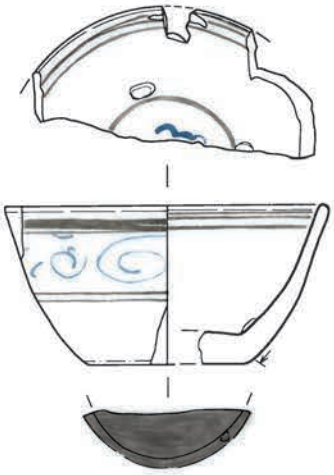
386



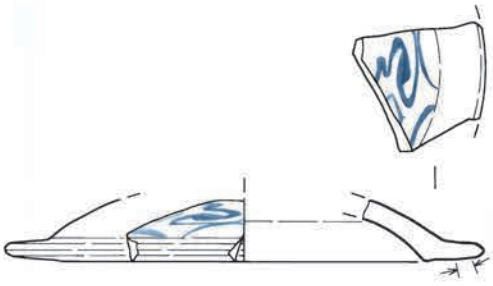
387



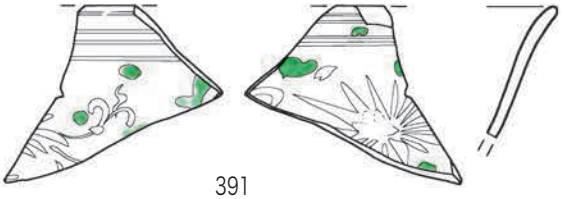
388



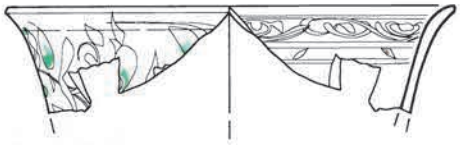
389



390



391



392

第79図　その他の輸入陶磁器７

385

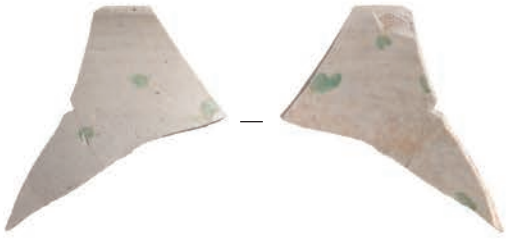
386

387

388

390

389



391

392

図版66　その他の輸入陶磁器７

第７節　本土産陶磁器（第38～44表、第80～85、図版67～72）

今回の調査で得られた本土産陶磁器は磁器（染付・色絵・白磁）と陶器に大別され、産地は肥前（肥前系含む）・関西系（京焼含む）・薩摩・備前・瀬戸などが確認されている。時期別にみると一部に16世紀代に遡る資料もあるが、数量的には近世以降が圧倒的に多い。出土傾向として17世紀～18世紀は肥前陶器及び磁器・薩摩陶器、18世紀～19世紀は肥前磁器や関西系又は薩摩陶器が目立つ。以下にそれぞれの分類概念を述べ、個々の観察所見は第38～44表に記載する。

１．磁器

①染付（393～414）

碗は器形から直口口縁（393～400）、端反口縁（401～404）に大別され、前者は時期的に17世紀後半頃と18世紀後半頃に細分できる。後者は蓋付碗が主体となる。瓶（405）は小型のラッキョウ形徳利で、沖縄地域で多く出土する。406はいわゆる蕎麦猪口で、外面に花唐草文などを描く。皿は内底蛇の目釉剥ぎを施す直口皿（407）と、蛇の目凹形高台を有する輪花口縁皿（408～411）がある。水滴（412）は箱形のもので、上面に型押しと呉須で文様を描く。合子も同じく箱形で、側面に文様を描く（413）。小碗（414）は青磁染付で、内面に呉須で文様を描く。

②色絵（415、416）

瑠璃釉に上絵付けを施した蓋付碗（415、416）。器形は端反口縁か。

③白磁（417～426）

碗は端反口縁（417）や蓋付（419）などがある。皿（418）は底部のみで器形は不明。瓶（420、421）は小型のラッキョウ形徳利と思われる。合子（423）・蓋物（424）・水滴（425、426）は素地や成形などの特徴から年代的に新しいと考えられる。

２．陶器（427～480）

碗は直口口縁（427～431）と端反口縁（475）に大別され、前者には銅緑釉が施釉される。皿は全て直口口縁だが法量や意匠で異なり、銅緑釉を施釉するもの（432、434、435）、上絵付けで文様を描くもの（445）、貼付高台のもの（476）などがある。鉢は鍔縁口縁（436、437、454～458）と端反口縁（438）があり、後者には植木鉢と思われる資料もみられる。擂鉢は口縁部を直立させる薄手のもの（439）と、口縁部外面に肥厚帯を有する厚手のもの（470～473）がある。小碗は丸碗（441）とせんじ碗（442）、香炉は聞香炉（448）と考えられ、いずれも喫茶に関係する製品であろう。鍋は行平と呼ばれる把手付の製品（450～453）が多い。壺（459～461）や瓶（463～466）は装飾のない小振りの製品がほとんどだが、急須には白象嵌を施したもの（468）もある。

第38表　本土産陶磁器観察一覧１

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第80図 図版67 393	碗	直口	口～底	14.0 7.8 5.0	外面に山水文、内底文様は不明。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。畳付に砂が付着。肥前で17c後。	11	撹乱
第80図 図版67 394	碗	直口	底部	-- － 5.6	外面に雲龍文、内底に荒磯文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。畳付に砂が付着。肥前で17c後。	11	撹乱
第80図 図版67 395	碗	直口	口～底	12.0 5.6 5.0	外面に桐葉文。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。内底に砂が付着。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 396	碗	直口	口～底	12.6 6.5 4.8	外面に折枝梅文。	明オリーブ灰色の釉を内底から高台外面・外底に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 397	碗	直口	口～底	11.8 5.4 4.4	外面に折枝梅文。	灰白色の釉を全面に施釉後、内底と畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 398	碗	直口	口縁部	13.6 － －	外面に雪輪草花文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 399	碗	直口	口縁部	11.8 － －	外面に折枝梅文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 400	碗	直口	口縁部	11.8 － －	外面に折枝梅文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 401	碗	端反	口縁部	－ － －	内面に連弧文。	灰白色の釉を両面に施釉。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。肥前系で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 402	碗	端反	口～底	10.6 6.0 4.5	外面に山水人物文？、内面・内底文様は不明。	灰白色の釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。肥前産で19c。	11	J－9 遺構上西
第80図 図版67 403	碗	－	底部	－ － 4.8	外面は区画内に花樹文？、内底に花卉文か。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。両面に細かい貫入あり。肥前で18c後。	11	撹乱
第80図 図版67 404	碗	端反	口縁部	9.2 － －	外面に山水文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱

第39表　本土産陶磁器観察一覧２

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項 文様構成・形状	観察事項 釉（色・範囲・貫入）	観察事項 素地（色・質・混和材）	観察事項 所見	調査年度（平成）	グリッド層
第80図 図版67 405	瓶	–	底部	– – 5.0	外面に圏線。	灰白色の釉を外面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。 肥前で17c後。	11	撹乱
第80図 図版67 406	猪口	–	底部	– – 5.9	外面に蓮花唐草文?+蓮弁文、内底に五弁花文。	灰白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。 肥前で18c後。	11	撹乱
第81図 図版68 407	皿	直口	口～底	12.5 3.2 4.7	内面に二重斜格子文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底と畳付を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。 肥前系で18c後。	11	撹乱
第81図 図版68 408	皿	直口	口～底	14.0 3.7 8.4	外面に如意頭文崩れの唐草文、内面に山水文か。	灰白色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。 肥前で18c後。	19	撹乱
第81図 図版68 409	皿	直口	口縁部	15.4 – –	外面に如意頭文崩れの唐草文?、内面は区画内に四方襷文・分銅繋ぎと三筋格子文。	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤+型打ち成形。肥前で18c後。	11	撹乱
第81図 図版68 410	皿	直口	口縁部	– – –	外面に如意頭文崩れの唐草文、内面に花唐草文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤+型打ち成形。肥前で18c後。	11	I–9 南側
第81図 図版68 411	皿	直口	底部	– – 9.4	外面に唐草文、内面に蛸唐草文、内底に連続文?+三友文。	灰白色の釉を両面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤+型打ち成形。肥前で18c後。	11	撹乱
第81図 図版68 412	水滴	–	口～底	– 1.7 縦:4.3 横:5.6	外面に型押しの玉取獅子文か。	灰白色の釉を全面に施釉後、一部側面と外底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	型成形。外底に布目痕が残る。肥前系で明治。	11	J–9灰混層 +撹乱
第81図 図版68 413	合子の身	–	口～底	– 2.0 –	外面に四方襷文。	灰白色の釉を内底から外面胴部まで施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	型成形。明治頃。	11	I–8 10～20 茶褐色 灰混層
第81図 図版68 414	小碗	–	底部	– – 4.5	内底文様は不明。	内面に白磁釉、外面に青磁釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。肥前で17c末～18c初。	19	B–4 2層
第81図 図版68 415	蓋	–	庇	– – 9.4	外面に牡丹文?を描くが剥落。上絵付は金か。	瑠璃釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。肥前で18c後～19c前。	11	I–7・10～20 +撹乱

第40表　本土産陶磁器観察一覧３

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第81図 図版68 416	碗	端反	口縁部	10.5 － －	外面に牡丹唐草文、内面に雷文を描くが剥落。上絵付は金か。	瑠璃釉を両面に施釉。	白色で緻密。	轆轤成形。肥前で18c後～19c前。	11	撹乱
第81図 図版68 417	碗	端反	口～底	12.9 5.1 4.6	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底と畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。肥前で18c後。	11	J－9 灰混層
第81図 図版68 418	皿	－	底部	－ － 3.3	無文。	白色の釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系で17c後か。	11	撹乱
第81図 図版68 419	碗	直口	口縁部	13.8 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前系?で19cか。	11	撹乱
第81図 図版68 420	瓶	－	底部	－ － 5.0	無文。	明緑灰色の釉を外面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。畳付に砂が付着。肥前で17c後。	11	撹乱
第81図 図版68 421	瓶	－	底部	－ － 6.7	無文。	灰白色の釉を外面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰黄色でやや細かい。	轆轤成形。外面に荒い貫入あり。肥前で17c後～18c前。	11	撹乱
第81図 図版68 422	瓶	－	底部	－ － 5.2	無文。	灰白色の釉を外面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第81図 図版68 423	合子の身	－	口～底	6.7 2.1 6.1	無文。	灰白色の釉を内底から外面胴部まで施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。肥前系で19c後～明治。	11	I－8 20～30 茶褐色灰混層
第82図 図版69 424	蓋物	筒形	口縁部	25.1 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。肥前系で19cか。	11	撹乱
第82図 図版69 425	水滴	－	口～底	－ 1.4 －	上面に型押しで菊花文か。	灰白色の釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	白色で緻密。	型成形。外底に布目痕が残る。肥前系で19c。	11	撹乱
第82図 図版69 426	水滴	－	口～底	－ 2.2 －	上面に貼付の菊花文。	灰白色の釉を外面上部に施釉。	灰白色で緻密。	型成形。外底に布目痕が残る。肥前系で18c～19c。	11	J－9 遺構上西

第41表　本土産陶磁器観察一覧４

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第82図 図版69 427	碗	直口	口縁部	12.1 － －	無文。	内面に灰釉・外面に銅緑釉を施釉。	浅黄色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第82図 図版69 428	碗	直口	口縁部	－ － －	無文。	内面に灰釉・外面に銅緑釉を施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第82図 図版69 429	碗	直口	底部	－ － 4.0	無文。	内面から高台際まで銅緑釉を施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第82図 図版69 430	碗	直口	底部	－ － 4.4	無文。	内面に灰釉・外面に銅緑釉を施釉。	鈍黄橙色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第82図 図版69 431	碗	直口	底部	－ － 4.5	無文。	内面に銅緑釉を施釉。	浅黄橙色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第82図 図版69 432	皿	直口	口縁部	－ － －	無文。	内面から外面口縁部まで銅緑釉を施釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c後。	11	撹乱
第82図 図版69 433	碗	－	底部	－ － 5.2	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、内底と畳付を釉剥ぎ。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。両面に細かい貫入あり。肥前?で18c前。	11	撹乱
第82図 図版69 434	皿	－	底部	－ － 3.7	無文。	内底から外面胴部まで銅緑釉を施釉後、内底を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c末～18c後。	11	I－7 30～40
第82図 図版69 435	皿	－	底部	－ － 4.1	無文。	内底から外面胴部まで銅緑釉を施釉後、内底を釉剥ぎ。	浅黄橙色で細かい。	轆轤成形。肥前で17c末～18c後。	11	撹乱
第82図 図版69 436	鉢	鍔縁	口縁部	－ － －	内面に白土で刷毛目の波状文。	灰黄褐色の釉を両面に施釉。	鈍橙色でやや細かい。	轆轤成形。肥前で17c後～18c前。	11	J－8 10～20
第82図 図版69 437	鉢	鍔縁	口縁部	29.6 － －	内面に白土で刷毛目の波状文。	灰黄褐色の釉(銅緑釉?)を両面に施釉。	褐灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。肥前で18c。	11	撹乱
第83図 図版70 438	鉢	端反	口縁部	13.2 － －	外面に鉄絵で草花文か。	灰褐色の釉を両面に施釉。	橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。肥前で1590～1610年代。	11	撹乱
第83図 図版70 439	擂鉢	－	口縁部	24.8 － －	無文。	暗オリーブ色の釉を両面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。肥前で1590～1610年代。	19	B－5シーリ内底面黒褐色土(畦) ＋B－5シーリ内黒褐色土
第83図 図版70 440	皿	兜鉢	口 ＼ 底	17.3 4.3 5.7	内面に鉄絵で草花文か。	灰黄褐色の釉を内底から外面胴部まで施釉。	橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。内底に胎土目積み跡が残る。肥前で1600～1620年代。	11	撹乱

第42表　本土産陶磁器観察一覧５

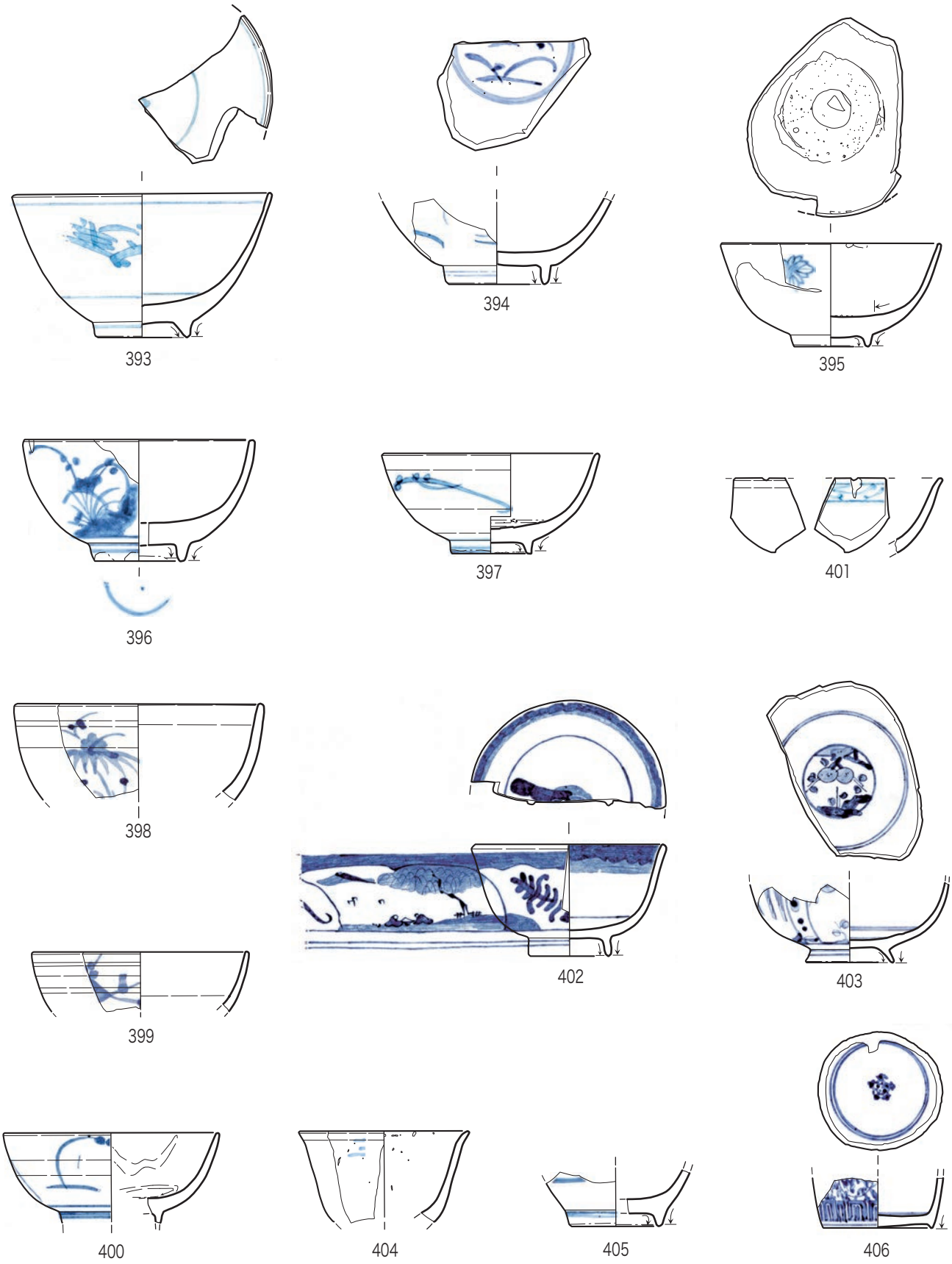
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成・形状	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第83図 図版70 441	小碗	直口	口縁部	8.8 － －	外面に緑・赤で笹文か。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。関西系で18c。	11	撹乱
第83図 図版70 442	小碗	せんじ	口縁部	8.8 － －	無文。	浅黄色の釉を両面に施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。関西系（肥前の可能性あり）で18c。	11	撹乱
第83図 図版70 443	皿	碁笥底	口＼底	6.6 1.5 2.2	無文。	無釉。	灰白色で細かい。	灯明皿か。轆轤成形。関西系で19cか。	19	撹乱
第83図 図版70 444	皿	碁笥底	口＼底	8.2 1.7 2.7	外面に鈍黄色の圏線数条。	無釉。	灰白色で細かい。	灯明皿か。轆轤成形。関西系で19cか。	19	撹乱
第83図 図版70 445	皿	－	底部	－ － 3.3	外面に橙・緑で笹文か。外底に「寶山」の刻印	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。京焼で18c。	11	撹乱
第83図 図版70 446	急須	－	底部	－ － 6.0	無文。	鈍黄褐色の釉を外面胴部に施釉。	浅黄橙色で細かい。	轆轤成形。関西系？で19c前。	11	J－9 灰混層
第83図 図版70 447	急須	－	底部	－ － 6.0	無文。	浅黄色の釉を内面に施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形で獣足？を貼付。内面に細かい貫入あり。関西系で18c～19c。	11	撹乱
第83図 図版70 448	香炉	筒形	口＼底	7.8 5.7 6.6	外面に黒・青で紗綾形文。	灰白色の釉を内面胴部から外面に施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。全体に細かい貫入あり。京焼で17c後～18c前。	19	撹乱
第83図 図版70 449	瓶子	蓋	庇	－ 2.4 5.0	無文。	無釉。	灰白色で細かい。	轆轤成形。関西系で近代。	19	撹乱
第83図 図版70 450	鍋	蓋	庇	－ － 15.6	蓋甲に陰圏線3条。	灰白色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	轆轤成形。関西系で19c。	11	撹乱
第83図 図版70 451	鍋	蓋	撮	4.2 － －	蓋甲に陰圏線4条。	灰白色の釉を内底から撮外面まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。関西系で19c。	11	撹乱
第83図 図版70 452	鍋	行平	口縁部	17.6 － －	無文。	灰白色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。関西系で19c。	11	撹乱
第83図 図版70 453	鍋	行平	口縁部	19.6 － －	無文。	灰オリーブ色の釉を内面から外面胴部まで施釉。	浅黄橙色でやや細かい。	轆轤成形。関西系で19c。	11	撹乱

第43表　本土産陶磁器観察一覧６

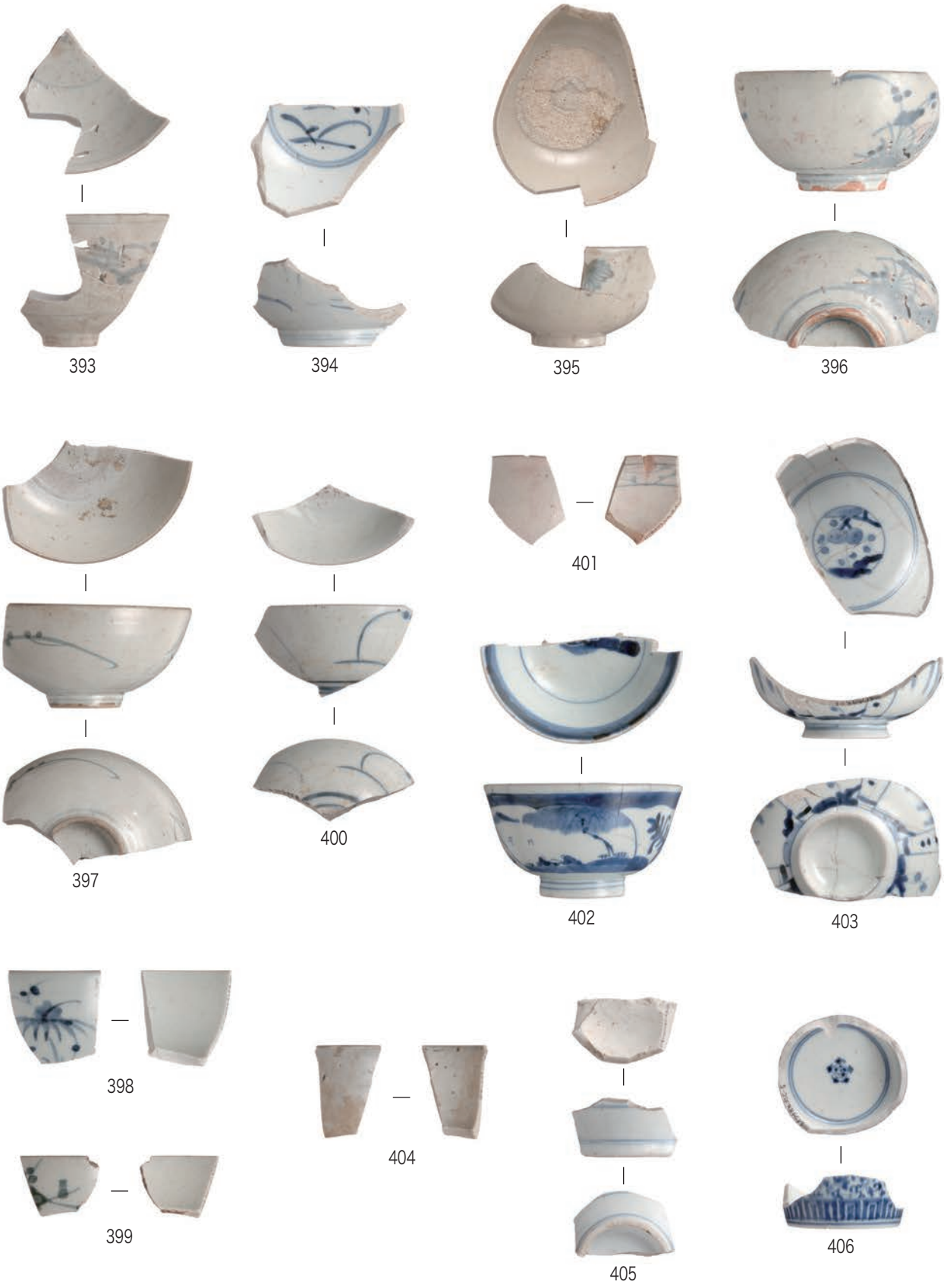
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成・形状	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	所見		
第84図 図版71 454	鉢	鍔縁	口縁部	31.4 － －	無文。	両面に泥釉を施釉。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返しか。薩摩?で18c前。	19	撹乱
第84図 図版71 455	鉢	鍔縁	口縁部	32.4 － －	外面口縁部に貼付の縄目状突帯。	暗褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	鈍褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。口唇部に貝目が残る。薩摩で17c後。	11	J－9 灰混層
第84図 図版71 456	鉢	鍔縁	口縁部	－ － －	外面口縁部に貼付の縄目状突帯。	黒褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	鈍褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。薩摩で17c後～18c。	11	撹乱
第84図 図版71 457	鉢	鍔縁	口縁部	29.6 － －	外面に多数の横位沈線(成形痕か)。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	鈍赤褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形で口縁部は内側折り返し。薩摩で18c～19c。	11	撹乱
第84図 図版71 458	鉢	鍔縁	口縁部	26.0 － －	無文。	両面に泥釉を施釉。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	口縁部は内側折り返し。沖縄の可能性あり。	19	B－4 黄褐色土 ＋2層
第84図 図版71 459	壺	－	口縁部	10.0 － －	無文。	黒褐色の釉(泥釉?)を両面に施釉。	鈍赤褐色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。薩摩で18c～19c。	11	撹乱
第84図 図版71 460	壺	－	口縁部	－ － －	無文。	暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。山茶家(急須)の可能性あり。薩摩で19c前。	11	撹乱
第84図 図版71 461	壺	－	底部	－ － 15.6	無文。	黒褐色の釉(泥釉?)を両面に施釉。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。薩摩で17c。	19	撹乱
第84図 図版71 462	鉢	－	口 ＼ 底	13.4 6.7 10.7	外面に暗オリーブ色の釉を流し掛け。	オリーブ灰色の釉を内底から外底際まで施釉後、外面腰部を釉剥ぎ。	灰色でやや細かく、砂粒を含む。	花器か。轆轤成形。薩摩で17c。	11	撹乱
第84図 図版71 463	瓶	－	口縁部	4.8 － －	無文。	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。	褐灰色でやや細かい。	轆轤成形。薩摩で17c前か。	11	撹乱
第84図 図版71 464	瓶	－	口縁部	2.5 － －	無文。	黒褐色の釉を内面頸部から外面に施釉。	鈍橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。薩摩?で近代。	19	撹乱
第84図 図版71 465	瓶	－	底部	－ － 5.2	無文。	褐色の釉を外面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	鈍褐色で細かい。	轆轤成形。薩摩で18c～19c。	11	J－8・10～20 ＋撹乱
第84図 図版71 466	瓶	－	底部	－ － 6.0	無文。	オリーブ褐色の釉を外面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	鈍褐色で細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。薩摩で17c後～18c。	19	撹乱

第44表　本土産陶磁器観察一覧７

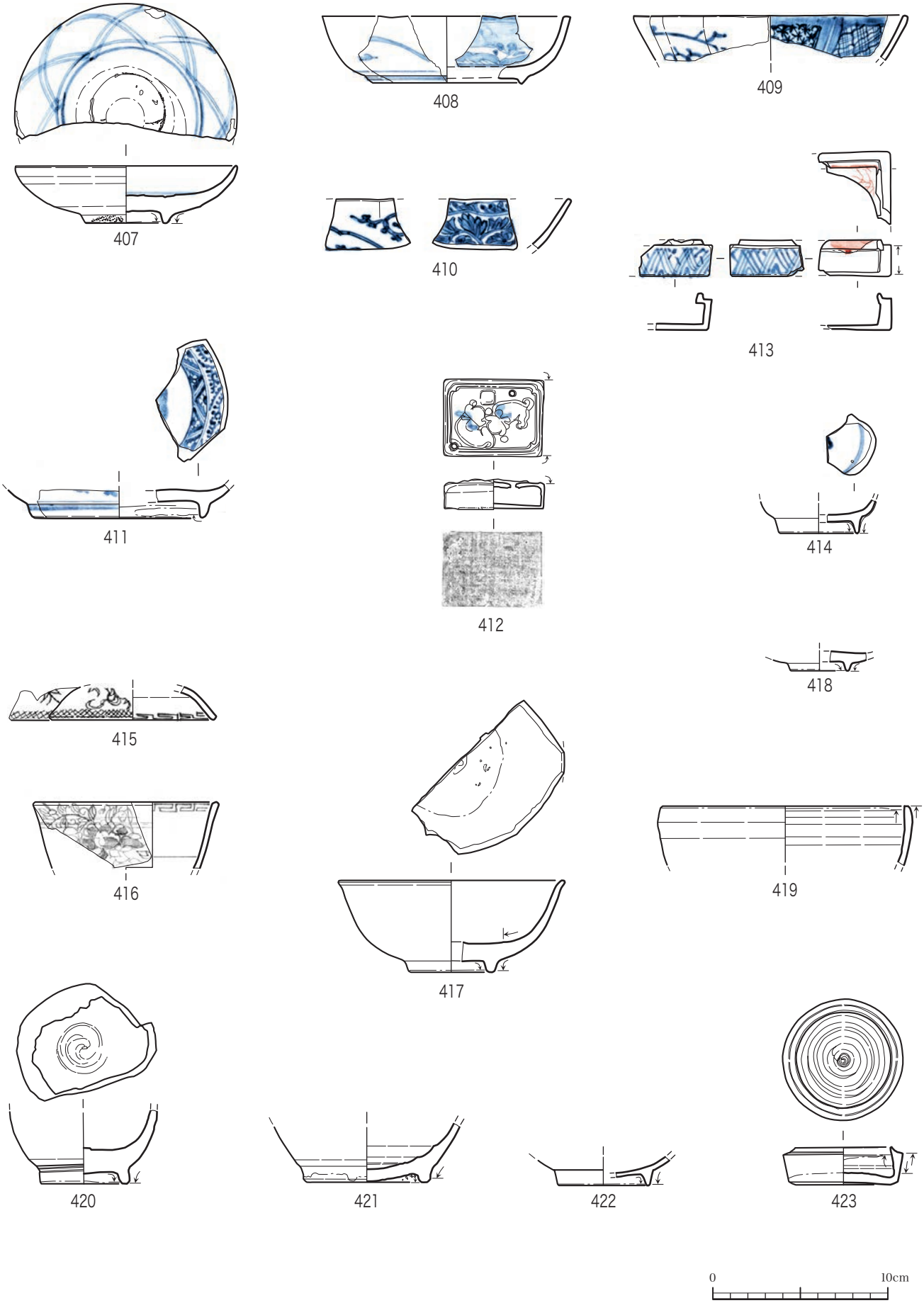
図版番号	器種	器形	部位	口径・器高・底径(cm)	観察事項 文様構成・形状	観察事項 釉(色・範囲・貫入)	観察事項 素地(色・質・混和材)	観察事項 所見	調査年度(平成)	グリッド層
第84図 図版71 467	急須	蓋	庇～袴	6.8 － 5.2	蓋甲に呉須で千鳥印。	灰白色の釉を蓋甲に施釉。	白色でやや細かい。	轆轤成形。蓋甲に細かい貫入あり。薩摩で18c後～19c。	11	I－9 南側
第84図 図版71 468	急須	身	口縁部	6.1 － －	外面に白土象嵌で縦・横・斜線＋菊花＋梅花か。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰褐色で細かい。	轆轤成形。薩摩？で近代か。	11	撹乱
第84図 図版71 469	急須	身	口縁部	8.5 － －	外面に多数の横位沈線（成形痕か）。	褐灰色の釉を両面に施釉。	赤橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。薩摩？で18c中。	11	撹乱
第85図 図版72 470	擂鉢	－	口縁部	－ － －	無文。	なし。	鈍褐色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。備前で16c。	11	撹乱
第85図 図版72 471	擂鉢	－	口縁部	－ － －	内面に単位不明の櫛目（残存４本）。	なし。	黄灰色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。備前で15c。	19	B－4 黄褐色土
第85図 図版72 472	擂鉢	－	底部	－ － －	内面に単位不明の櫛目（残存６本）。	なし。	黄灰色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。備前で16cか。	19	撹乱
第85図 図版72 473	擂鉢	－	底部	－ － －	内面に単位不明の櫛目（残存６本）。	なし。	鈍褐色でやや細かく、砂粒や白色鉱物を含む。	轆轤成形。備前で15cか。	11	撹乱
第85図 図版72 474	甕	－	口縁部	43.2 － －	外面に陰圏線２条。	浅黄色の釉を外面口縁部に施釉（自然釉か）。	灰赤色で細かい。	東南アジア産の可能性あり。轆轤成形。備前で16cか。	19	B－1 石積み6 西側上層
第85図 図版72 475	碗	端反	口～底	15.9 7.4 6.6	無文。	明黄褐色の釉を内底から高台際まで施釉。	浅黄色でやや細かい。	轆轤成形。関西系？で18c～19c。	11	J－9 灰混層
第85図 図版72 476	皿	直口	口～底	18.6 2.7 10.4	無文。	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄色で細かく、白色土がマーブル状に混ざる。	蓋の可能性あり。轆轤成形で焼成後に口唇部を削る。九州南部で18c～19cか。	19	B－5 シーリ内木炭層 （畦）＋撹乱
第85図 図版72 477	火鉢	－	胴部	－ － －	外面にスタンプの菊花文。	なし。	鈍黄橙色で細かい。	香炉の可能性あり。轆轤成形。内面に煤が付着。14c後～16cか。	19	D－3 5層
第85図 図版72 478	鍋	－	口縁部	－ － －	無文。	オリーブ黄色の釉を口唇部から外面に施釉。	灰白色でやや細かく、白色好物を含む。	轆轤成形。18c～19c。	11	撹乱
第85図 図版72 479	蓋	－	撮	4.8 － －	外面に陰圏線。	暗オリーブ色の釉を外面に施釉後、撮端部を釉剥ぎ。	鈍黄橙色でやや細かく、砂粒を含む。	轆轤成形。薩摩？で19cか。	11	撹乱
第85図 図版72 480	蓋	－	撮～庇	－ 3.4 15.4	無文。	黒褐色の釉を全面に施釉後、庇端部を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かく、白色好物を含む。	轆轤成形。九州南部？で17cか。	11	撹乱



第80図　本土産陶磁器 1

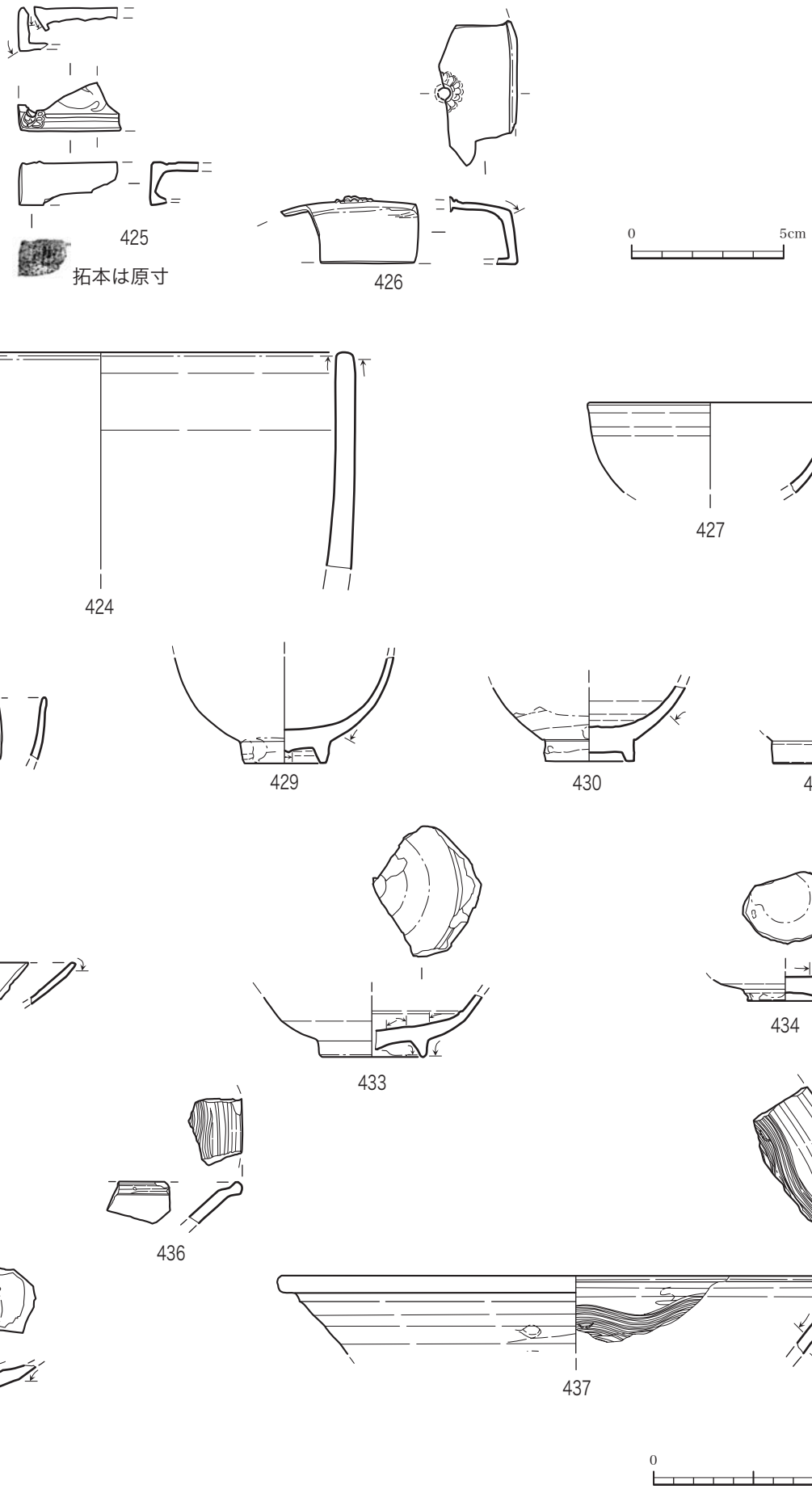


図版67　本土産陶磁器 1



第81図　本土産陶磁器２

図版68　本土産陶磁器２



第82図　本土産陶磁器３

424

425

426

427

428

429

430

431

432

434

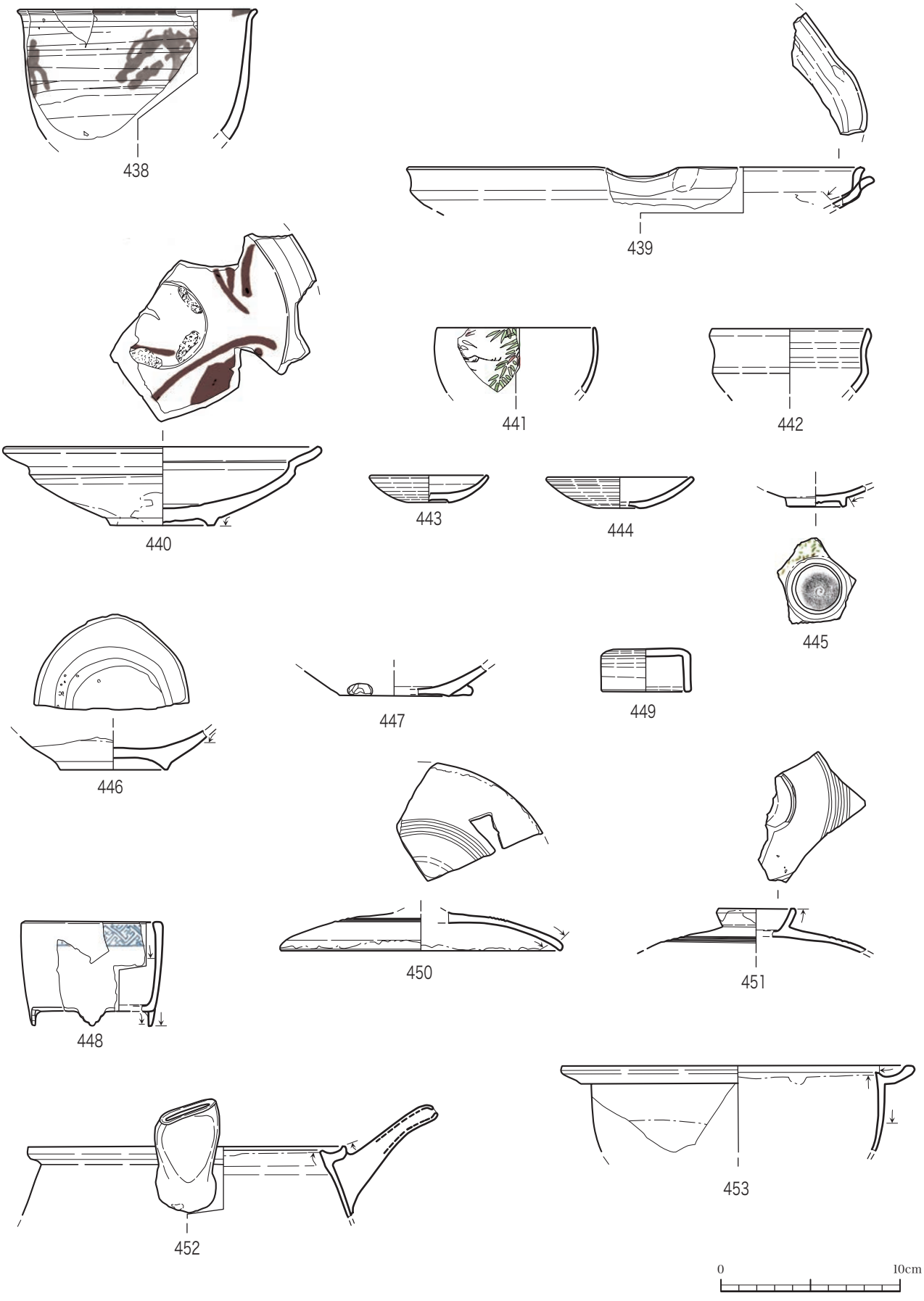
436

435

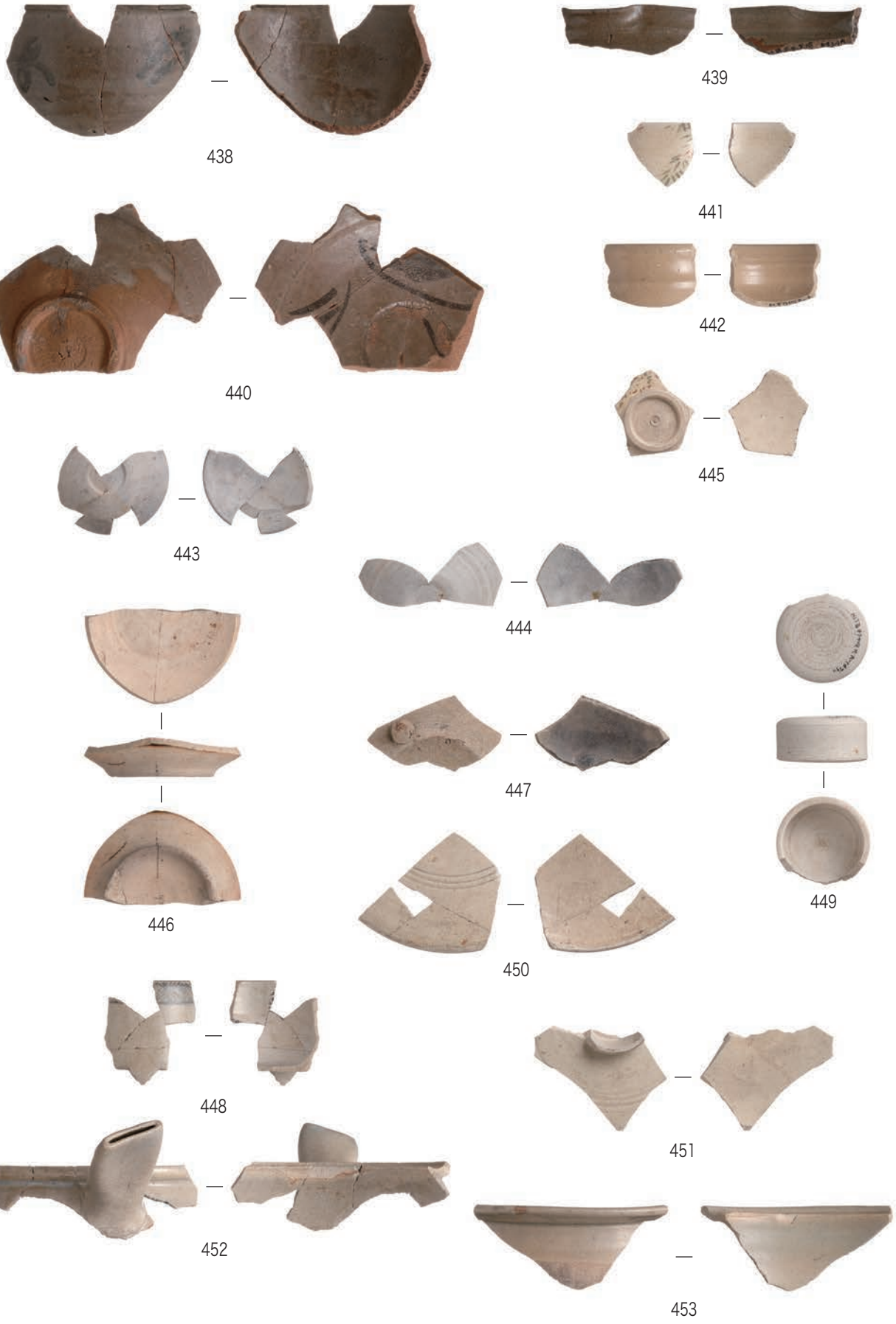
433

437

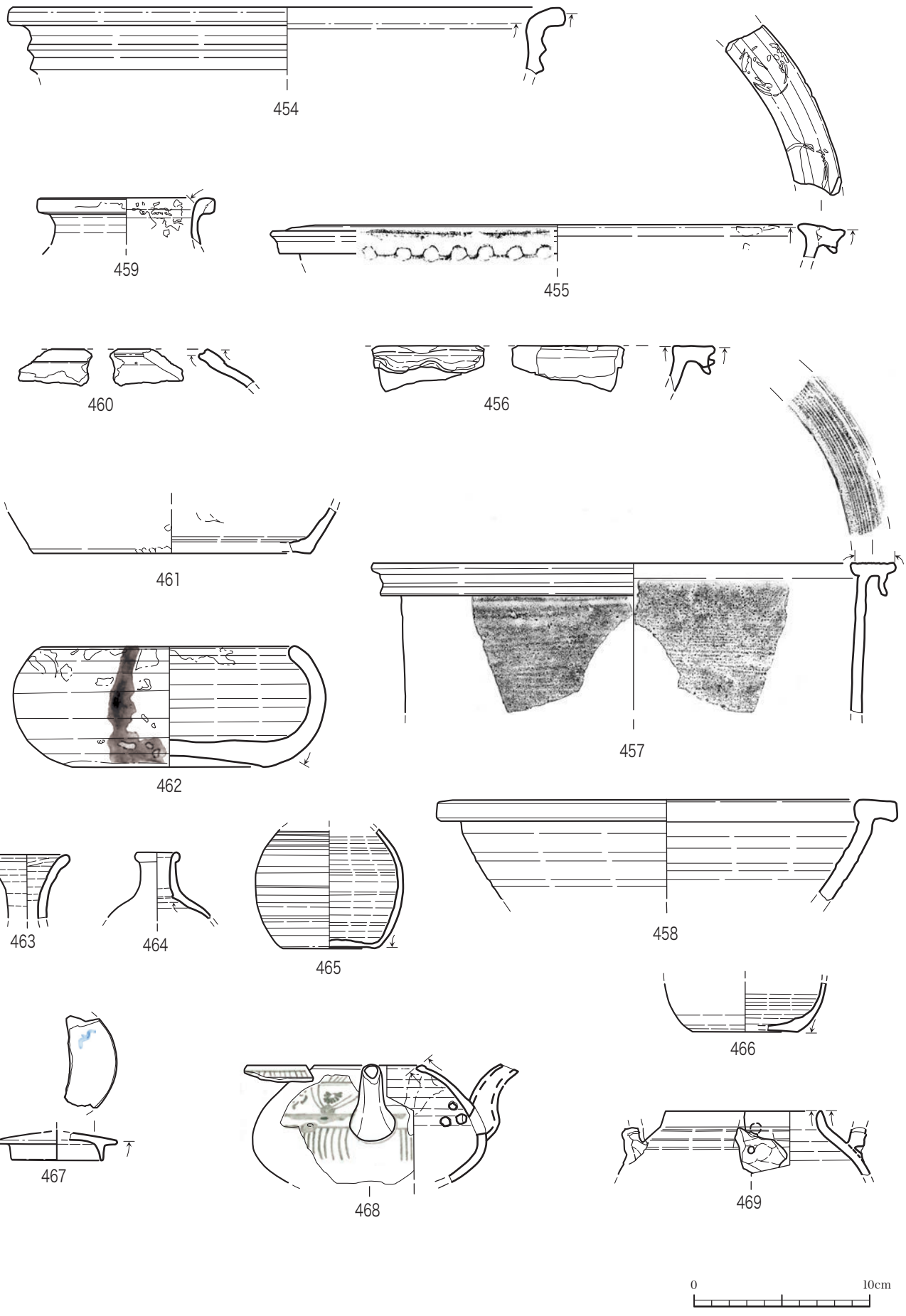
図版69　本土産陶磁器３



第83図　本土産陶磁器４

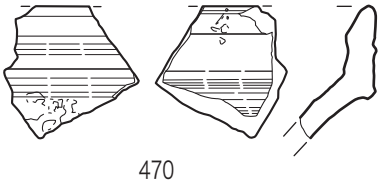


図版70　本土産陶磁器４

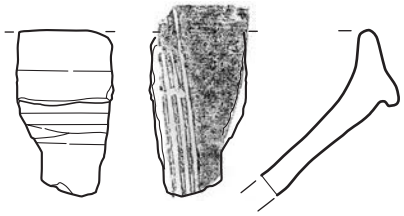


第84図　本土産陶磁器５

図版71　本土産陶磁器５



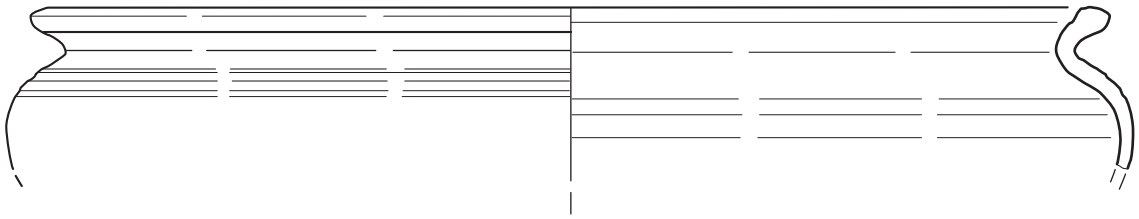
470



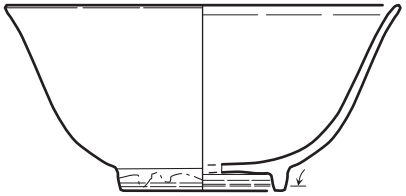
471

472

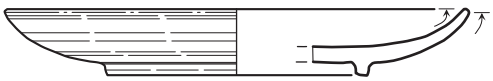
473



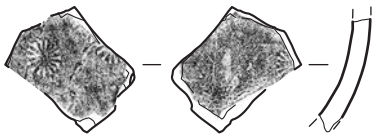
474



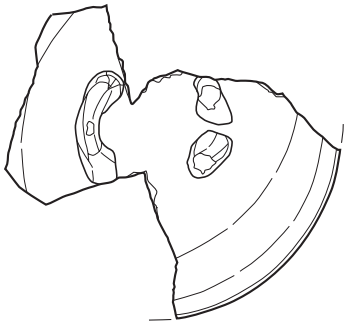
475



476

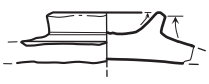


477



480

478



479

第85図　本土産陶磁器６

図版72　本土産陶磁器６

第８節　沖縄産施釉陶器（第45～48表、第86～90図、図版73～77）

沖縄産陶器の中で、「上焼（ジョウヤチ）」と呼ばれる、器面に釉を施す焼物の一群である。本地区では4,609点が出土しており、そのうち特徴的なもの55点を図示した。器種としては、碗、皿、鉢、小鉢、鍋、蓋、灯明具、甕、壺、急須、瓶などが出土している。個々の詳細については観察表に譲るが、以下に各器種の概要を述べる。

1. 碗（481～501）

直口口縁で胴半ばまで灰釉を施釉し、胴部から腰部にかけて逆「ハ」の字状に立ち上がる器形として481～484がある。外反口縁で胴部にやや丸みを持つ器形には、鉄釉のみを施釉するもの（487）、鉄釉と白化粧を掛け分けるもの（491）、内・外面を白化粧と透明釉で施釉し、鉄釉で丸文を描くものや（499）、線彫りで花文を描くもの（500）などがある。直口口縁で胴部に丸みを持ち、白化粧と透明釉を掛けるもののうち（497、498、501）、501は線彫りで丸文や花文などの文様を描く。

その他に特徴的なものとして、489、495のように外底に墨書の入る資料があるほか、493、494の資料は、外面に青釉を施釉後、密な雲文が線彫りされ、中国磁器の粉彩をモデルに丁寧に製作されており、製作にあたり中国の影響を受けたことがわかる。

2. 小碗（502～511）

口縁部が外反する資料が中心である。特徴的なものとして、外面に六角形の面取りを施すもの（504、505）、白化粧と透明釉に鉄釉を掛け分けるもの（507）、線彫りで丸文と十字文を組み合わせるもの（508）などがある。509は直口口縁で、内・外面に白化粧と透明釉を施し、内底に線彫りで巴文を描く。また、510のように内底に「神社」の文字が呉須で書かれた資料も見られる。

3. 皿（512～516）

外反口縁と稜花口縁が見られる。512、516は外反口縁で、512は内底に丸文を描く。514、515は稜花口縁で、514は内底に線彫りの二重圏線と「弓」状の文様を描く。515は線彫りで草文や斜沈線、印花文などを組み合わせている。他に特徴的な資料として、内底に「御内」の文字が墨書された底部資料（513）がある。

4. 鉢（517～521）

内彎口縁で内・外面に鉄釉を施すもの（519、520）、肥厚口縁で注ぎ口を持つもの（521）、その他に特徴的な資料として、外底に「寄・・」、高台脇に不明文字が墨書された底部資料がある（518）。

5. 急須（523～525）

灰釉と鉄釉を掛け分け、胴下部に丸みを持つもの（523）、胴部に丸文、巴文、方形文を組み合わせるものがある（524）。他に特徴的なものとして、胴上部に貼付された吊手に「天」の文字が印されたもの（525）がある。

6. 急須の蓋（526、527）

外面に白化粧と透明釉を施し、甲蓋端部に二重圏線と線彫りの星形文を描くもの（526）と、無文で鉄釉を施釉するものがある（527）。

7. 大型急須（528）

いわゆるアンビンと呼ばれるものである。内・外面に鉄釉を施す。

8. 壺（522）

頸部が長く、肩部が強く張り出す器形。内面に鉄釉、外面に黒釉を施釉。

9. 瓶（529）

いわゆるカラカラと呼ばれるものである。内・外面に白化粧と透明釉を施し、線彫りで文様を描く。

10. 鍋（530、531）

口唇の内側を窪ませ、底部から胴部にかけてゆるやかな丸みを持つ器形で鉄釉を施す。

11. 鍋の蓋（532）

鍋の蓋にあたると思われる。鉄釉を施す。

12. 灯明具（533、534）

足つきの灯明具で、鉄釉を施釉する。外底が平坦なものと（533）、高台が逆「ハ」の字形を呈するものがある（534）。

13. 甕（535）は口縁部が逆「L」字形を呈する。外面に灰釉、内面に白釉と透明釉薬を掛け、さらに緑釉を流し掛けている。

〈参考文献〉

沖縄県文化財調査報告書第111集「湧田古窯跡（Ⅰ）−県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査」沖縄県教育委員会

那覇市文化財調査報告書第23集 「壺屋古窯群Ⅰ−個人住宅建設に伴う緊急発掘調査−」1992 那覇市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集「天界寺跡（Ⅰ）−首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査」2001 沖縄県立埋蔵文化財センター

第45表　沖縄産施釉陶器観察一覧１

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様・形状	釉(色・範囲)	素地(色・質・混和材)	所見		
第86図 図版73 481	碗	直口口縁	口〜底	13.0 5.6 6.6	無文	灰釉を胴半ばまで施釉。	締まりが強く、色調は灰色。	胴部から口縁部へ逆ハの字に開く器形。胴下部にわずかに丸みを持ち、腰部に明瞭な抉りが入る。内底と畳付に砂目が付着。	11	J−9 遺構上西
第86図 図版73 482	碗	直口口縁	口〜底	13.2 5.5 6.4	無文	灰釉を胴半ばまで施釉。	締まりが強く、色調は灰白色。	胴部から口縁部へ逆ハの字状に開く器形。腰部に浅い抉りが入る。	11	J−9灰混層＋ J−9遺構上西
第86図 図版73 483	碗	直口口縁	口〜底	13.4 5.85 6.6	鉄釉で一筆書きの文様を施す。	灰釉を胴半ばまで施釉。	締まりが強く、色調は灰白色。	胴部から口縁部へ逆ハの字状に開く器形。腰部に明瞭な抉りが入る。畳付に砂目が付着。	11	J−9 遺構上西
第86図 図版73 484	碗	直口口縁	口縁部	− − −	口縁部下に抉りが入り、そこに白化粧土を施す。表面にも白化粧土がまばらにかかる。	灰釉を胴半ばまで施釉。	締まりが強く、色調は灰白色。	胴部から口縁部へ逆ハの字状に開く器形。	11	J−9 遺構上西
第86図 図版73 485	碗	直口口縁	口縁部	14.4 − −	口縁部下に抉りが入る。鉄釉で文様を施す。	灰釉を施釉。	締まりが強く、胎土は非常に密である。色調は灰白色。	胴部にやや丸みを持つ器形。	11	J−9 遺構上西 ＋I−7・30〜40
第86図 図版73 486	碗	−	底部	− − 6.6	外面に沈線が入る。	白化粧を胴下部まで施す。	白色粒混入、締まりは弱く、色調は乳白色。	胴部に丸みを持つ器形。高台が逆三角形を呈し、腰部に深く抉りが入る。	11	J−8 茶褐色灰混層 ＋撹乱
第86図 図版73 487	碗	外反口縁	口〜底	13.4 6.5 6.2	無文	鉄釉を腰部まで施釉。	締まりが強く、色調は灰色。	胴部にやや丸みを持つ器形。内底は蛇の目釉剥ぎを施す。腰部には浅い抉りが入り、内底と畳付に耐火粘土(メーガニク)が付着する。	11	J−8茶褐色灰混層＋撹乱
第86図 図版73 488	碗	−	底部	− − 7.0	無文	灰釉を腰部まで施釉。	締まりが強く、色調は灰色。	胴部にやや丸みを持つ器形。内底は蛇の目釉剥ぎを施す。腰部には浅い抉りが入る。高台は低い。	11	I−9 南側
第86図 図版73 489	碗	−	底部	− − 6.2	外底に人面に似た墨書が入る。	鉄釉を腰部まで施釉。	締まりは弱く、色調は乳白色。	腰部にやや丸みを持つ器形。腰部に明瞭な抉りが入る。	11	I−9 瓦溜まり
第86図 図版73 490	碗	外反口縁	口〜底	13.2 6.0 6.3	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は乳白色。	胴部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。内底面と畳付に耐火粘土(メーガニク)が付着する。	11	撹乱
第86図 図版73 491	碗	外反口縁	口〜底	13.0 6.5 6.3	無文	外面に鉄釉を腰部まで、内面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。畳付けに耐火粘土(メーガニク)が付着する。	11	I−7・30〜40 ＋撹乱
第86図 図版73 492	碗	外反口縁	口〜底	14.8 7.2 6.8	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施し、外面に緑釉を流し掛けている。	締まりが弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。内底と畳付けに耐火粘土(メーガニク)が付着する。	11	撹乱
第86図 図版73 493	碗	直口口縁	口縁部	11.6 − −	雲文を外面に線彫りする。	外面に鉄釉、内面に白釉を施し、外面にはさらに緑釉が掛けられている。	締まりが強く、色調は乳白色。	口縁がわずかに内湾する器形。	11	撹乱

第46表　沖縄産施釉陶器観察一覧２

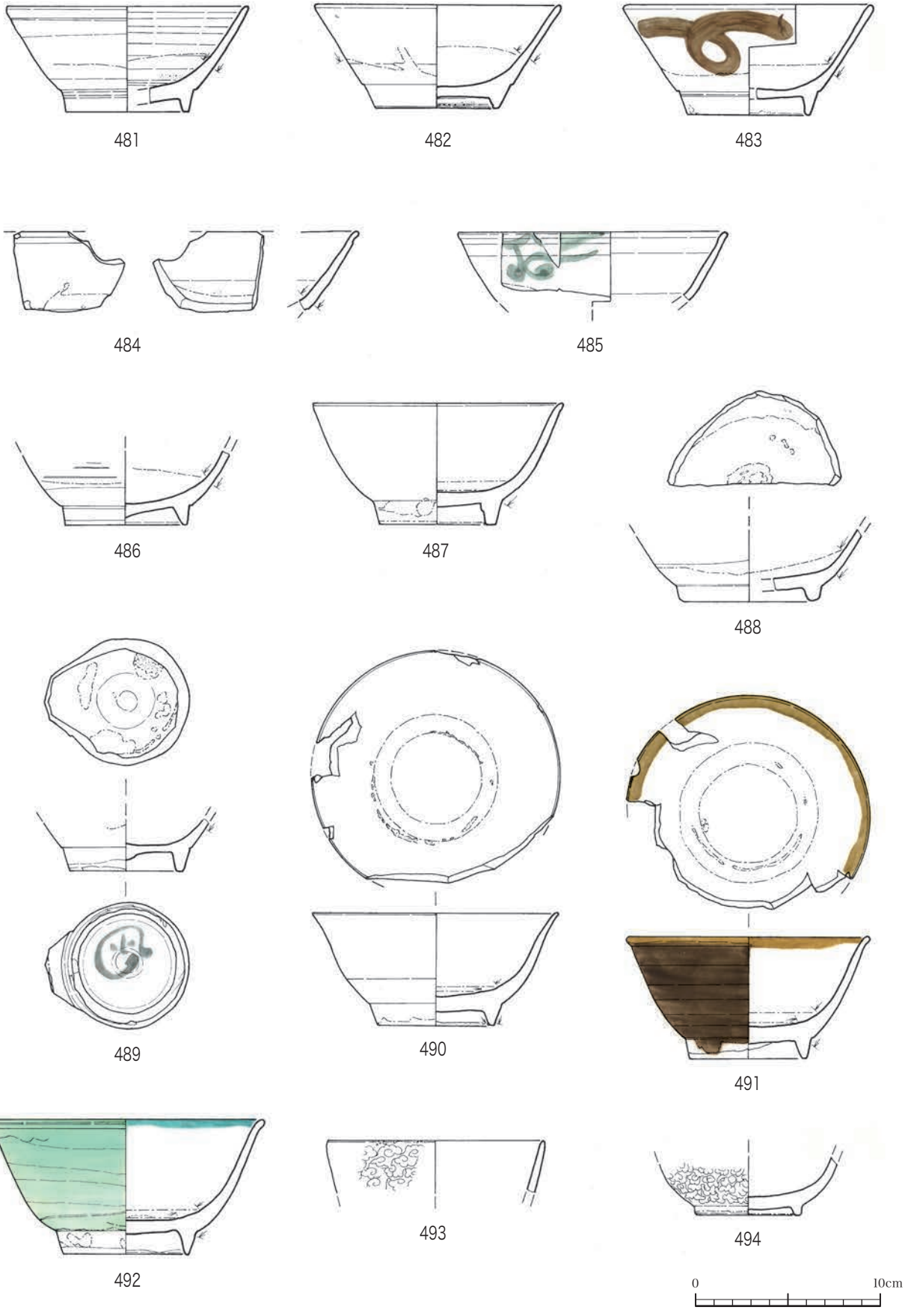
図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査 年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第86図 図版73 494	碗	－	底部	－ － 5.7	雲文を外面に線彫りする。	外面に鉄釉、内面に白化粧と透明釉を施し、外面にはさらに緑釉が掛けられている。	締まりが強く、色調は乳白色。	胴部に丸みを持つ器形。畳付けを釉剥ぎする。493と同一個体になると思われる。	11	J－9 遺構上西
第87図 図版74 495	碗	－	底部	－ － 6.3	外底に丸文の墨書がある	鉄釉を内・外面の腰部まで施釉し、内底にも塗布。	白色粒が混入。締まりは弱い。色調は薄茶色。	やや丸みを持つ器形。畳付けに耐火粘土（メーガニク）の跡が残る。	11	J－9 遺構上西
第87図 図版74 496	碗	外反口縁	口＼底	12.6 6.0 6.0	無文	鉄釉を内・外面の腰部まで施釉し、内底にも塗布。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底と畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着。	11	撹乱
第87図 図版74 497	碗	直口口縁	口＼底	12.4 6.6 6.2	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施釉し、口唇に鉄釉を施す。	白色粒が混入。締まりは弱い。色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。外面口唇下部に浅い抉りが入る。畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着。内底は蛇の目釉剥ぎ、外底は畳付けのみ釉剥ぎする。	11	撹乱
第87図 図版74 498	碗	直口口縁	口＼底	12.0 6.45 5.8	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりが強く、色調は白色を呈す。	胴部にゆるやかな丸みを持つ器形。腰部に明瞭な抉りが入る。畳付けを釉剥ぎし、内底は蛇の目釉剥ぎ。	11	J－9 遺構上西 ＋撹乱
第87図 図版74 499	碗	外反口縁	口＼底	12.4 6.0 6.1	鉄釉で丸文の中に十字文を描く。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱い。色調は薄茶色。	口縁が強く外反し、腰部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着する。	11	J－9 遺構上西 ＋J－9遺構上南
第87図 図版74 500	碗	外反口縁	口＼底	13.2 6.5 6.4	線彫りで花文を描き、文様上に呉須を施す。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ器形。内底は蛇の目釉剥ぎする。畳付けも釉剥ぎされ、耐火粘土（メーガニク）が付着。	11	I－8・20～30 茶褐色灰混層 ＋J－8茶褐色 灰褐層＋撹乱
第87図 図版74 501	碗	直口口縁	口＼底	12.2 6.0 6.0	線彫りで丸文の中に花文を描く。中央に孔があるためコンパスで描いたと思われる。四角とS字形の線彫り文を組み合わせる。文様の上に薄い緑釉が掛かる。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底は蛇の目釉剥ぎする。畳付けも釉剥ぎされ、耐火粘土（メーガニク）が付着。	11	撹乱
第87図 図版74 502	小碗	－	底部	－ － 4.4	無文	灰釉を胴部下端まで施釉。	白色粒が混入。締まりが強く、色調は乳白色。	腰部に明瞭な抉りが入る。内底と外底に砂目が付着。	11	J－9 遺構上西
第87図 図版74 503	小碗	外反口縁	口＼底	8.9 3.9 4.2	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりが強く、色調は乳白色。	胴部に丸みを持つ器形。畳付けのみ釉剥ぎする。	11	J－8茶褐色灰褐層＋撹乱
第87図 図版74 504	小碗	外反口縁	口＼底	8.4 4.5 3.6	外面に六角形の面取りを施す。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱く、色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ器形。内底は蛇の目釉剥ぎする。内底と畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着する。	11	I－9 瓦溜まり
第87図 図版74 505	小碗	外反口縁	口＼底	7.8 5.4 3.7	外面に六角形の面取りと五角形の面取りを組み合わせる。	内・外面に白化粧と透明釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	口唇が強く外反し、やや筒形を呈する器形。畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着。	11	J－8 茶褐色灰混層
第87図 図版74 506	小碗	直口口縁	口＼底	8.4 4.35 4.0	無文	内・外面に白化粧と透明釉を施す。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。内底と畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着する。	11	撹乱
第87図 図版74 507	小碗	外反口縁	口＼底	9.1 4.8 4.2	無文	内面に白化粧と透明釉・外面に鉄釉を施釉。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。畳付けに耐火粘土（メーガニク）が付着する。	11	撹乱

第47表　沖縄産施釉陶器観察一覧３

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第87図 図版74 508	小碗	外反口縁	口～底	9.4 4.55 4.0	外面に線彫りで丸文の中に十字文を描き、四つの区画に崩した渦巻き文?を描く。	内面・外面に白化粧と透明釉、口唇に鉄釉を施す。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ器形。釉剥ぎした畳付けに耐火粘土(メーガニク)が付着。	11	J－9 遺構上西
第87図 図版74 509	小碗	直口口縁	口～底	8.6 4.7 3.8	内底に線彫りで巴文を描き、緑釉を施す。	内面・外面に白釉、口唇に鉄釉を施す。	締まりは弱く、色調は薄茶色。	胴部に丸みを持つ器形。内底は蛇の目釉剥ぎし、耐火粘土(メーガニク)が付着。畳付けを釉剥ぎする。	11	撹乱
第87図 図版74 510	小碗	－	底部	－ － 3.6	内底に「神社」の文字が呉須で書かれる。	内・外面に白化粧と透明釉を施す。	締まりは弱く、色調は焦茶色。	胴部に丸みを持つ器形。畳付けのみ釉剥ぎする。	19	撹乱
第87図 図版74 511	小碗	－	底部	－ － 3.8	無文	内面に灰釉・外面に鉄釉を施す。	締まりは強く、色調は灰白色。	畳付けのみ釉剥ぎする。	19	B－1 石積み４裏込内 (黒)
第88図 図版75 512	皿	外反口縁	口～底	13.2 4.0 7.3	鉄釉で内面口唇下部に圏線を１条、胴下部に２条巡らせる。内底には丸文を描く。	外面は胴上部まで、内面は胴下部まで灰釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱く、色調は薄茶色。	腰部に丸みを持つ器形。	11	撹乱
第88図 図版75 513	皿	－	底部	－ － 6.2	内底に「御内」の文字が墨書されている。	外面に灰釉を高台まで施釉。	締まりは強い。色調は灰白色。	胴部に丸みを持たない、平たい皿になると思われる。	11	撹乱
第88図 図版75 514	皿	稜花口縁	口～底	9.8 2.7 5.8	内底に線彫りで二重圏線を描き、その中に線刻で文様を描く。文様の上に呉須を施す。口唇外面の一部に鉄釉を施す。	内・外面に白釉を施釉。	締まりは強い。色調は灰白色。	内彎する器形。畳付けを釉剥ぎする。	11	I－7・20～30 ＋撹乱
第88図 図版75 515	皿	稜花口縁	口～底	11.5 2.8 6.6	外面に線彫りで草文を描き、内面胴部に草文、内底に印花文と斜沈線を組み合わせる。	内・外面に白釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱く、色調は乳白色。	内彎する器形。高台内側まで施釉。	11	J－8 茶褐色灰混層
第88図 図版75 516	皿	外反口縁	口～底	13.4 4.1 6.0	無文	内・外面に白釉を施釉。	—	腰部に丸みを持つ器形。内底を蛇の目釉剥ぎする。内底と畳付けに耐火粘土(メーガニク)が付着。	11	J－8 茶褐色灰混層
第88図 図版75 517	小鉢	外反口縁	口～底	9.8 4.2 4.0	無文	内・外面胴半ばまで灰釉を施釉。	締まりは強い。色調は灰白色。	胴上部に丸みを持つ器形。腰部に明瞭な抉りが入る。	11	撹乱
第88図 図版75 518	鉢	－	底部	－ － 11.6	高台の墨書は判読不明、外底には判読不明な二文字と「寄」の字を墨書する。	外面腰部まで鉄釉を、内面に灰釉を施釉する。	締まりは弱く、色調は乳白色。	高台が高く作られている。内底を蛇の目釉剥ぎし、畳付けと内底に耐火粘土(メーガニク)が付着する。	11	J－9遺構上西 ＋撹乱
第88図 図版75 519	鉢	内彎口縁	口～底	22.8 10.9 12.3	無文	内・外面に鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは弱く、色調は薄茶色。	内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付けを釉剥ぎする。内底と畳付けに耐火粘土(メーガニク)が付着する。	11	J－9遺構上西 ＋撹乱
第88図 図版75 520	鉢	内彎口縁	口～底	27.4 13.2 15.0	無文	内・外面に鉄釉を施釉。	締まりは弱く、色調は灰色。	胴上部に丸みを持つ器形。底部は碁笥底になっており、畳付けを釉剥ぎする。外底の一部に砂目が付着。	11	J－8茶褐色灰混層＋撹乱

第48表　沖縄産施釉陶器観察一覧４

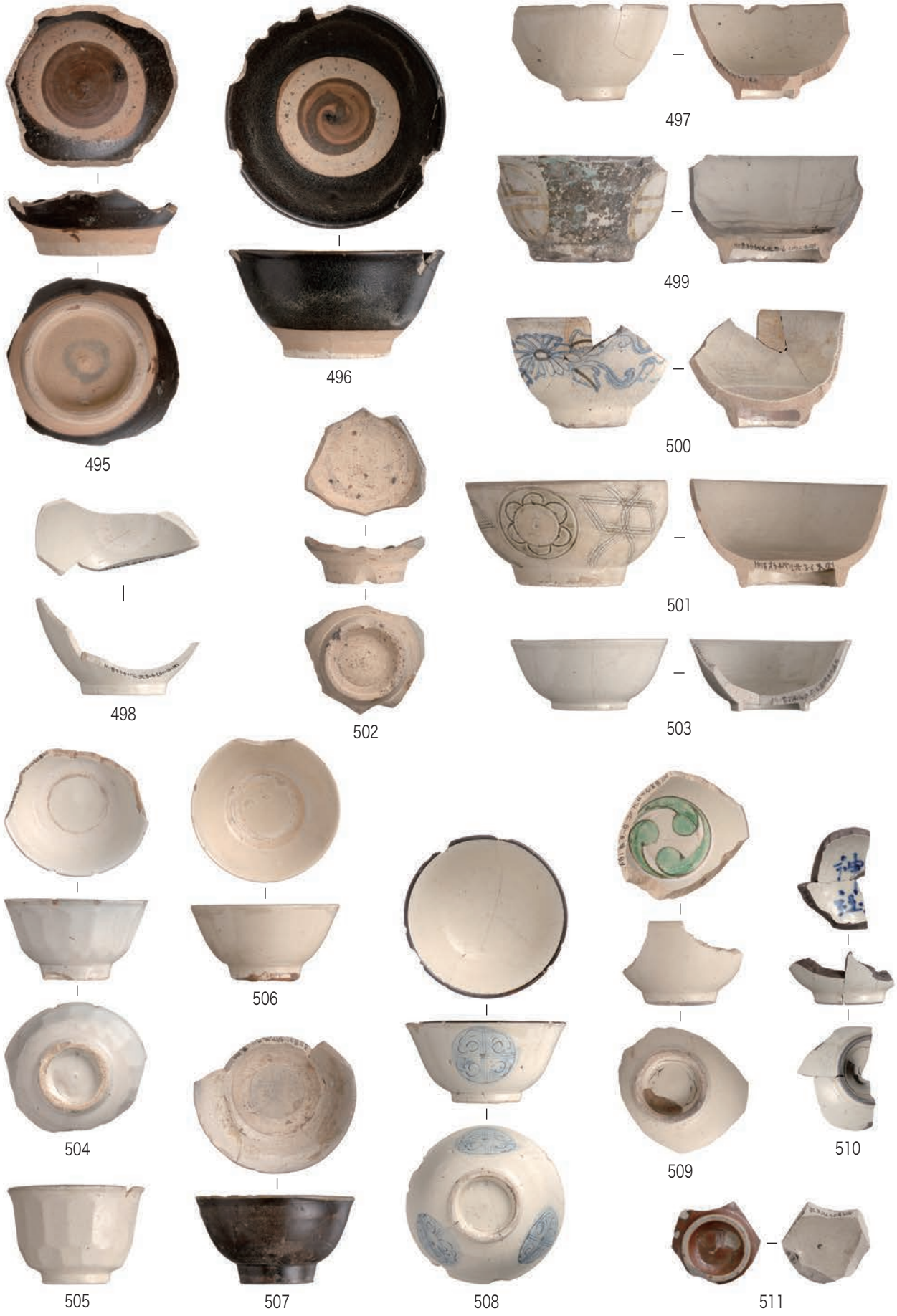
図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様・形状	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見		
第88図 図版75 521	鉢	肥厚口縁	口＼底	30.0 14.7 12.8	無文	外面・内面に鉄釉を施釉。内面は胴上部まで施釉。	締まりは強く、色調は灰色。	腰部に丸みを持つ器形。畳付けを釉剥ぎする。	11	J－9遺構上西 ＋撹乱
第89図 図版76 522	壺	外反口縁	口＼胴	7.4 － －	無文	内面に鉄釉・外面に黒釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は灰茶色。	頸部が長く、肩部が強く張り出す器形。	11	J－9 遺構上西
第89図 図版76 523	急須	－	口＼底	5.4 8.4 －	無文	内面に灰釉・外面に鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は灰色。	胴下部に丸みを持つ器形。底部に円錐状の脚を３カ所添付する。	11	撹乱
第89図 図版76 524	急須	－	口＼底	6.0 9.2 7.4	胴部に丸文を描き、その中に二つの巴文と方形文、丸文を描く。	内・外面に白釉を施釉。一部に緑釉を掛ける。	白色粒が混入。締まりは弱く、色は薄茶色。	胴部に大きく丸みを持つ器形。円錐形の脚を三カ所添付する。注口には孔が2カ所穿たれている。	11	撹乱
第89図 図版76 525	急須	－	胴部	－ － －	胴部に線彫りで圏線がめぐらされ、上から鉄釉が施釉。	外面全体と内面の一部に灰釉を施釉。	締まりは弱く、色は薄茶色。	耳に「天」の文字が印されている。	11	J－9 茶褐色灰混層
第89図 図版76 526	蓋	－	完形	6.6 2.95 4.4	甲蓋端部に二重圏線をめぐらせ、内側に線彫りで星形の文様を描き、呉須、鉄釉を施す。	外面に白化粧と透明釉を施釉。	—	急須の蓋にあたる。撮み器部に４㎜の孔を１個穿つ。	11	撹乱
第89図 図版76 527	蓋	－	撮＼袴	5.7 3.3 4.2	無文	外面の甲蓋端部まで鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は薄茶色。	急須の蓋にあたる。撮み器部に1.9㎝の孔を１個穿つ。	11	撹乱
第89図 図版76 528	大型急須	－	口＼胴	10.4 － －	無文	内・外面に鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は灰色。	大型の急須（アンビン）にあたる。口唇部を釉剥ぎする。内面に石灰が大量に付着。	11	J－9遺構上西 ＋J－8茶褐色灰混層
第89図 図版76 529	瓶	－	口＼底	4.6 10.1 7.5	頸部と胴部に線彫りで二重線をめぐらせる。その内側に放射線状に13本の線を入れる。	内・外面に白釉を施釉。	締まりは弱く、色は薄茶色。	カラカラと呼ばれる酒注である。口縁内側を窪ませ、口唇を立ち上げる。外底を蛇の目釉剥ぎする。外底に砂目が付着。	11	撹乱
第90図 図版77 530	鍋	－	口＼胴	16.2 － －	無文	外面胴下部・内面胴上部まで鉄釉を施釉	白色粒・黒色粒が混入。締まりは強く、色は灰色。	口唇の内側を窪ませ、底部から胴部にかけて、ゆるやかな丸みを持つ。口唇に紐状の耳を添付する。	11	J－9灰混層 ＋撹乱
第90図 図版77 531	鍋	－	口＼胴	13.0 － －	無文	内面胴部全体（一部無釉）・外面胴下部まで鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は赤茶色。	口唇の内側を窪ませ、胴部に丸みを持つ器形。口唇に紐状の耳を添付する。	11	I－9南側 ＋撹乱
第90図 図版77 532	蓋	－	撮＼庇	8.0 5.1 15.9	無文	外面口蓋胴部・内面口唇部まで鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は赤褐色。	鍋の蓋にあたるものか。撮みの上面に砂目が付着。	11	J－9 遺構上西
第90図 図版77 533	灯明具	－	口＼底	4.5 4.95 3.8	無文	外底をのぞいた全体に鉄釉を施釉。	締まりは強く、色は灰色。	足付きの灯明具。外底は平たく、轆轤跡が明瞭に残る。	11	J－9 遺構上西
第90図 図版77 534	灯明具	－	口＼底	9.8 5.1 4.8	無文	畳付けをのぞいた全体に鉄釉を施釉。	白色粒が混入。締まりは強く、色は茶色。	足付きの灯明具。高台は逆ハの字形を呈す。	11	J－9灰混層 ＋撹乱
第90図 図版77 535	甕	外反口縁	口＼胴	40.6 － －	無文	外面に灰釉、内面に白釉を施釉し、上から緑釉を流し掛ける。	白色粒が混入。締まりは強く、色は灰白色。	口縁部は逆「L」字を呈する。頸部に3条、胴部に1条圏線をめぐらせる。胴部に丸文を添付する。	11	撹乱



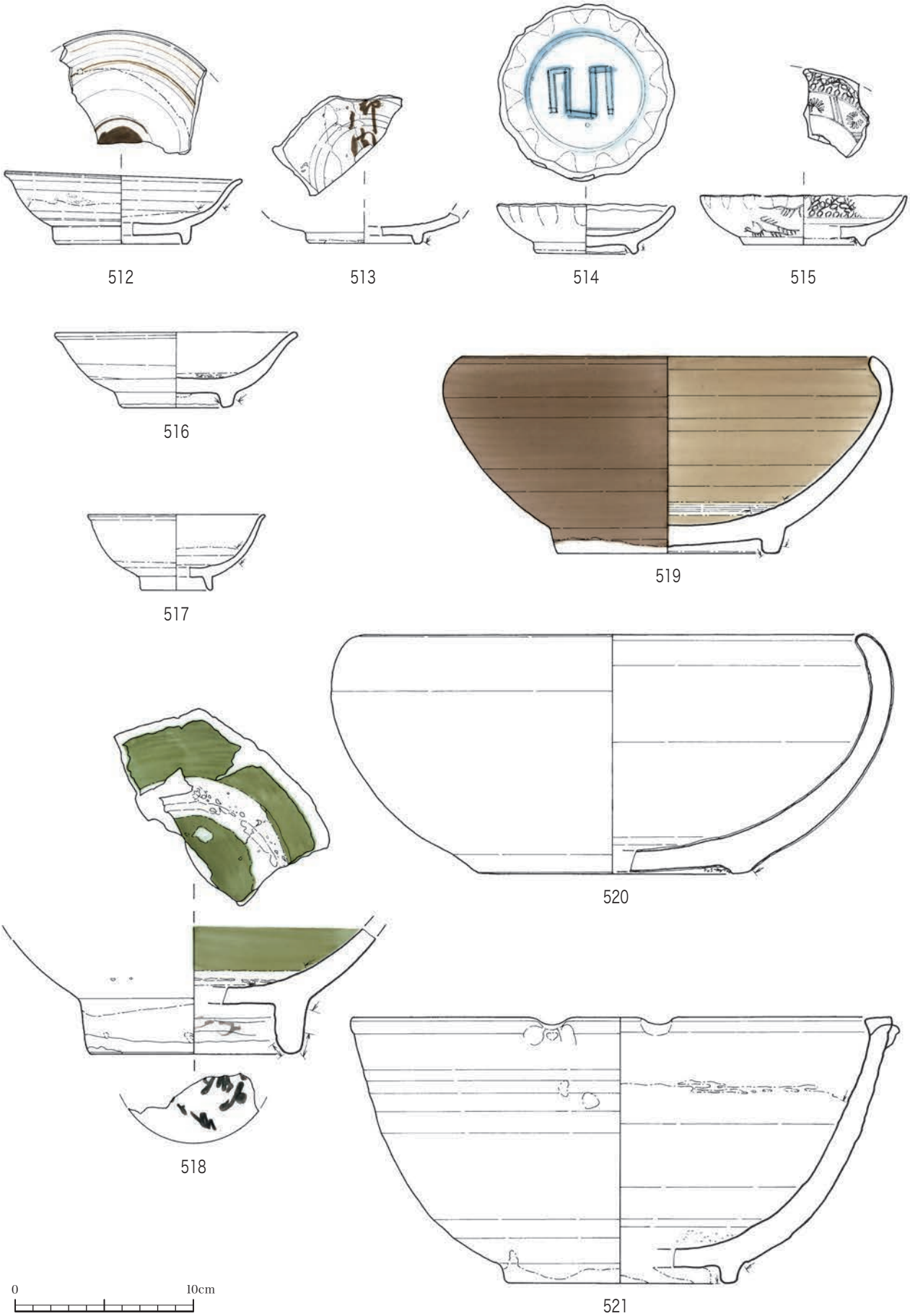
第86図　沖縄産施釉陶器 1

図版73　沖縄産施釉陶器 1

第87図　沖縄産施釉陶器２

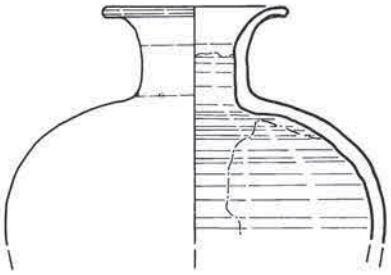


図版74　沖縄産施釉陶器２

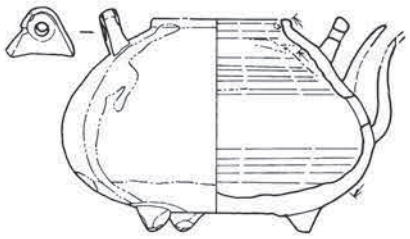


第88図　沖縄産施釉陶器３

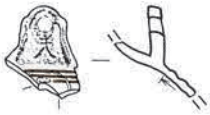
図版75　沖縄産施釉陶器３



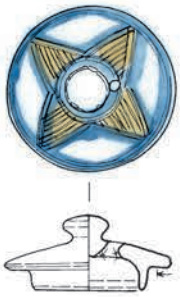
522



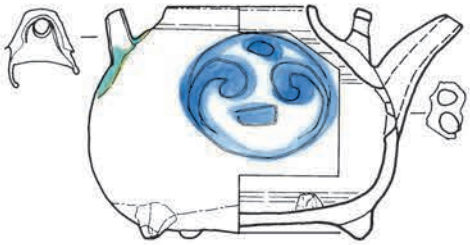
523



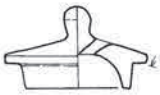
525



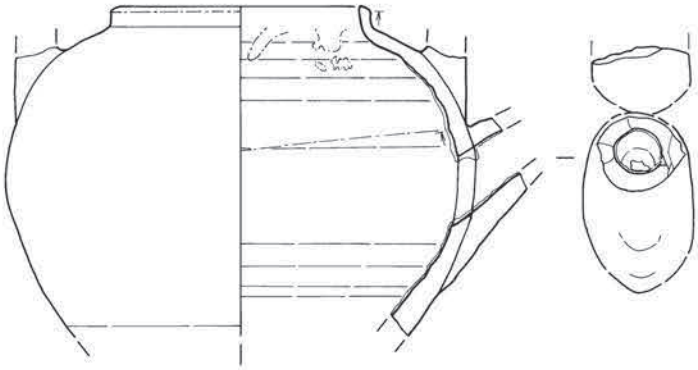
526



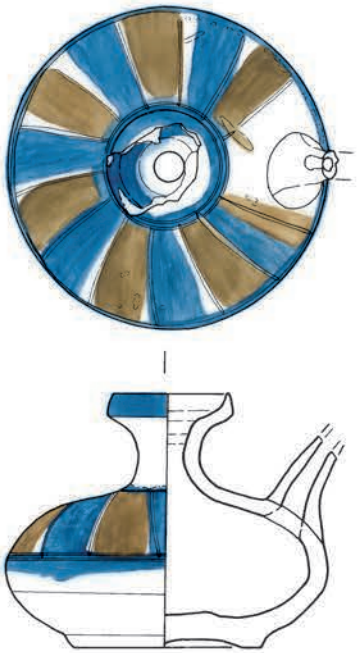
524



527

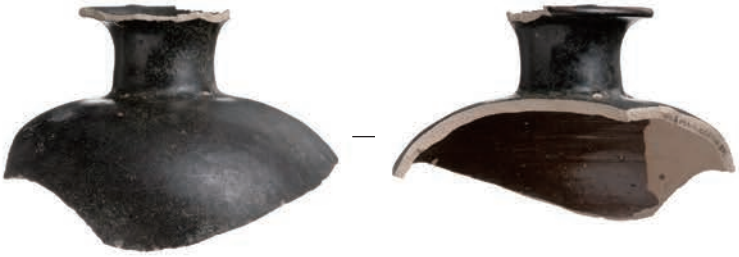


528



529

第89図　沖縄産施釉陶器４



522

525

526

523

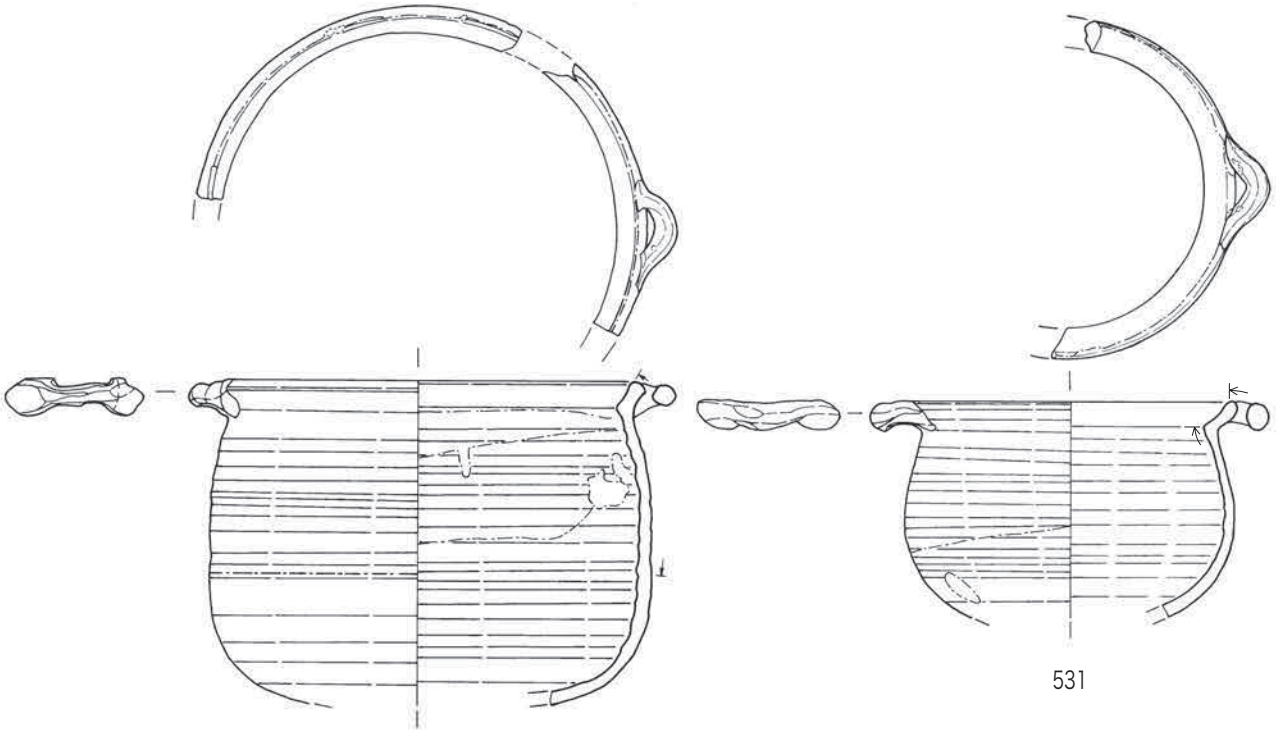
524

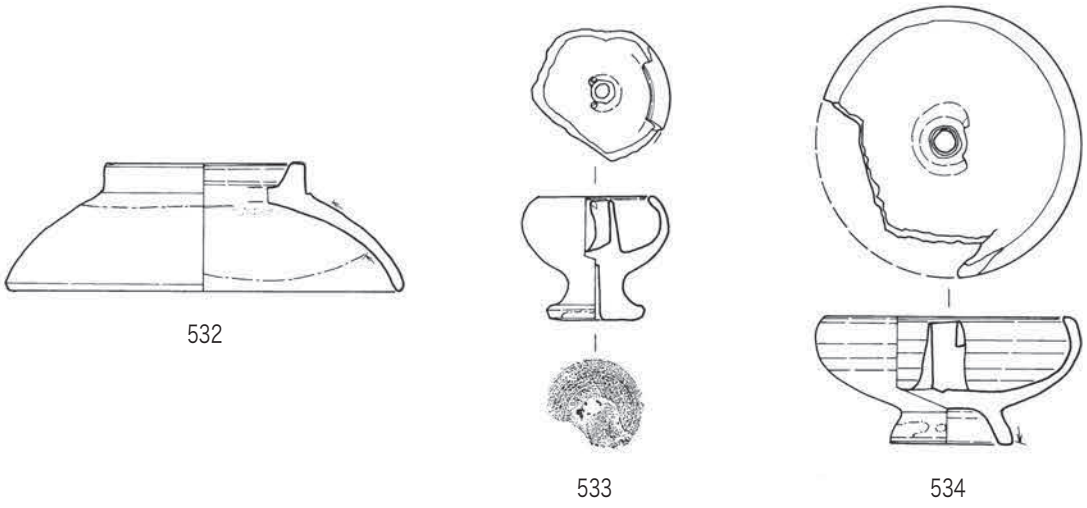
527

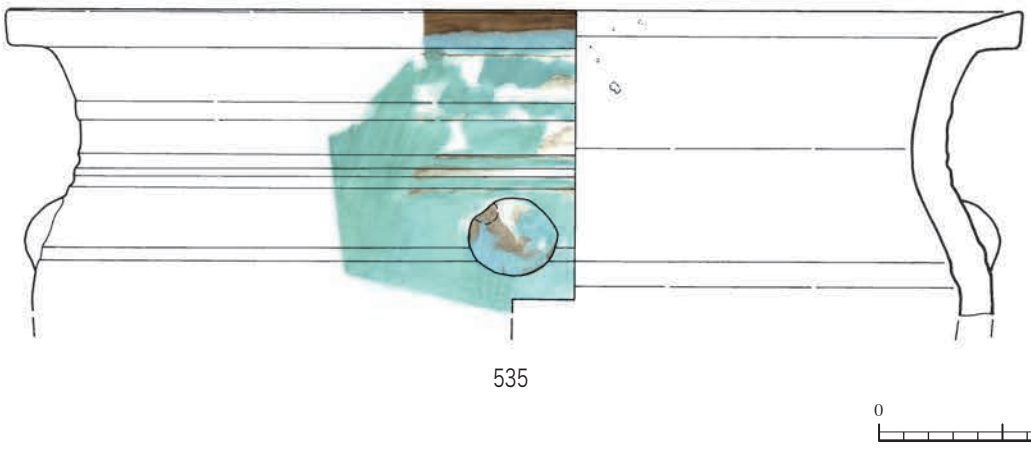
528

529

図版76　沖縄産施釉陶器４







第90図　沖縄産施釉陶器５

図版77　沖縄産施釉陶器５

第９節　沖縄産無釉陶器（第49～54表、第91～98図、図版78～85）

本報告で取り扱う沖縄産無釉陶器は、年代や作法から大きく２種に大別できる。ここでは、前半に17世紀段階の製品と思われる焼締め陶器の一群を初期無釉陶器として掲載し、後半に18世紀以降の無釉陶器をまとめて報告する。

初期無釉陶器（第49・50表、第91・92図、図版78・79）

荒焼（アラヤチ）とも称される無釉焼締陶器のうち、特に高火度で焼成され器面に泥釉などが施釉される一群を指す。これらは湧田古窯跡（沖縄県教委1993・1999）で生産されたと考えられ、同遺跡及び首里城跡木曳門地区（沖縄埋文2001）や淑順門地区（沖縄埋文2006）の出土例から17世紀頃に位置づけられる。御内原北地区ではシーリ遺構内からまとまって出土しているため、本報告書では「狭義の沖縄産無釉陶器」として別に取り扱う。以下に各器種の分類概念などを記し、個々の詳細は観察表に譲る。

１．甕（536～542）

器高が15㎝以下で最大径を口縁又は胴部に持つ小型のもの（536～539）と、器高が20㎝を超え最大径を肩部に持つ大型のもの（540～542）とに大別される。大型品には貼付の縄目文を巡らせるもの（542）もある。

２．擂鉢（543、544）

口縁部を外側に折り曲げ肥厚帯を持つもの（543）と口縁部が内湾するもの（544）がある。いずれの形態的特徴も安里氏らの擂鉢編年（安里・上原・家田1987）に当てはまらないことから、喜名焼又は知花焼と称される一群とは異なると思われる。

３．火炉（545）

肩部を内側に屈曲させ、口縁部の上面観が三葉形をなすもの。

４．筒物（546～549）

円盤形の蓋（546、547）と筒状の身（548、549）でセットになると考えられるもので、他器種に比して丁寧に成形されている。用途は不明だが、茶の湯に用いる建水の可能性などが考えられる。

無釉陶器（第51～54表、第93～98図、図版80～85）

本地区では1,660点が出土しており、そのうち特徴的なもの46点を図示した。器種としては、碗、皿、灯明皿、鉢、急須、蓋、擂鉢、壺、火入れ、火炉、植木鉢、甕などがある。以下に各器種の概要を述べる。個々の詳細については観察表に譲る。

1. 碗 (550～552)

直口で胴下部にやや丸みを持ち、高台がベタ底になるものと (550) 、口唇下部に稜を持つもの (551) とがある。他に特徴的なものとして、喜名焼と思われる底部資料がある (552) 。

2. 皿 (553～556)

小皿(553)と灯明皿(554、555)、大型の皿(556)がある。このうち553、555は喜名焼にあたると思われる。

3. 鉢 (557～565)

口縁部が内彎し、口唇が舌状を呈するものに557、558がある。うち558には、底部に「○」の印が刻まれている。口縁部が肥厚し、胴上部に波状文が施されるものに559、560がある。うち560は喜名焼にあたると思われる。口縁部が逆「L」字状を呈するものには562、564、565がある。562は浅鉢、564、565は深鉢である。

4. 蓋 (566～568)

壺の蓋にあたるものと思われる。宝珠状の摘みを持つもの (566) 、脚部が長く、上面を水平に成形するもの (567) 、平坦な上面に端部が丸みを持つものがある (568) 。

5. 急須 (569)

胴部資料である。胴下部に膨らみを持ち、注口は太く短い。

6. 擂鉢 (570～577)

口縁部が「く」の字形を呈するものと (570～575) 、逆「L」字状を呈するものがある (576) 。「く」の字形を呈するものには、胴部から逆「ハ」の字形に立ち上がる器形と (570、572) 、胴部に丸みを持つ器形がある(571、573～575) 。また、口縁下部に稜を持つもの (571、572) のうち、572は薩摩焼の擂鉢に類似している。573は口唇部が広く、胴部に丸みを持つ器形である。574は注口を持つ資料、577は脚部を持つ底部資料である。櫛目は間隔を開けて施すもの (570、572～575) と、全体に密に施すもの (571、576、577) がある。

7. 壺 (578～583)

口縁部が外反するもの (578) と肥厚するものとに分けられる。また肥厚口縁には、玉縁状に肥厚するもの (579) と方形を呈するもの (580～583) がある。特徴的な資料としては、581の小型の四耳壺、胴上部に解読不明線刻が見られる580の資料などがある。

8. 火入れ・火炉 (584・585)

火入れは直口口縁で、口唇にやや丸みを持つ。底部は平底 (584) 。火炉は口縁部が「く」の字状に屈曲し、方形状の横耳が貼付される (585) 。

9. 植木鉢 (586～588)

口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口縁部に波状の凸帯を貼付するものと (586、587) 、口唇部に縄目状の刻み目を入れるもの (588) がある。

10. 甕 (589～595)

大甕は淑順門の南側にて、底部が現位置を保った状態で出土した。大型の甕で器壁が分厚く、底部から胴部へ逆「ハ」の字形に立ち上がる器形。

甕は口縁部が逆L字状を呈し、口唇の幅が広いもの (590、591、595) と口唇の幅が狭いもの (593、594) 、口縁部が逆三角形に肥厚するもの (592) がある。また、特徴的な資料として波文や丸文を施したり (592、595) 、胴上部に「十」の印が刻まれた (593) ものなどがある。

〈参考文献〉

沖縄県文化財調査報告書第111集「湧田古窯跡（Ⅰ）−県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査」1993 沖縄県教育委員会

那覇市文化財調査報告書第23集 「壺屋古窯群Ⅰ−個人住宅建設に伴う緊急発掘調査−」1992 那覇市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集「天界寺跡（Ⅰ）−首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査」2001 沖縄県立埋蔵文化財センター

第49表　沖縄産無釉陶器観察一覧１

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第91図 図版78 536	甕	−	口～底	16.2 11.7 9.2	外面肩部に陰圏線1条。	器色は褐灰色。素地は鈍赤褐色で細かい。	叩き+ナデ。内面に当て具痕が残る。	口縁部は内側折り返し成形。全体に泥釉を施釉。	19	B−4シーリ内黒褐色土+B−5シーリ内黒褐色土+B−5シーリ内灰白色土（畦）
第91図 図版78 537	甕	−	底部	− − 10.6	無文。	器色は灰褐色。素地は外側が灰色・内側が鈍赤褐色で細かく、砂粒を含む。	叩き+ナデ。内面に当て具痕が残る。	両面に泥釉を施釉。外底に貝目が残る。	11	撹乱
第91図 図版78 538	甕	−	底部	− − 10.8	無文。	器色は黒褐色。素地は灰赤色で細かい。	叩き+ナデ。内面に当て具痕?が残る。	全体に泥釉を施釉。外底に貝目が残る。	19	B−5シーリ内黒褐色土（畦）+B−5シーリ内黒褐土
第91図 図版78 539	甕	−	口縁部	10.7 − −	無文。	器色は灰褐色。素地は灰色でやや細かく、砂粒を含む。	ナデ（轆轤の可能性あり）。	口縁部は外側折り返し成形。両面に泥釉を施釉。	19	撹乱

第50表　沖縄産無釉陶器観察一覧２

図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第91図 図版78 540	甕	－	口縁部	21.5 － －	無文。	器色は褐灰色。素地は鈍赤褐色で細かい。	ナデ（轆轤の可能性あり）。	外面に泥釉を施釉。肩部上位に窓状の穿孔があるため、別器種（風炉など）の可能性あり。	19	B－5 シーリ内底面 黒褐色土（畦）
第91図 図版78 541	甕	－	底部	－ － 13.7	無文。	器色は暗赤灰色。素地は外側が灰色・内側が鈍赤褐色で細かく、白色土がマーブル状に混ざる。	ナデ。	外面に泥釉を施釉。両面に部分的に火ぶくれあり。	19	B－5 シーリ内底面 黒褐色土
第91図 図版78 542	甕	－	口縁部	24.8 － －	外面肩部に貼付の縄目文1条。	器色は赤灰色。素地は鈍赤灰色で細かく、砂粒を含む。	叩き+ナデ。 外面に成形具・内面に当て具痕が残る。	口縁部は内側折り返し成形。外面から口唇部外側まで泥釉を施釉。口唇部に貝目が残る。	11	撹乱
第92図 図版79 543	擂鉢	－	口縁部	30.6 － －	内面胴部に単位不明の擂目（残存5本）。	器色は外側が灰褐色・内側が明褐色。素地は灰色で細かく、白色土がマーブル状に混ざる。	叩き+ナデ。 内面に当て具痕？が残る。	口縁部は外側折り返しで肥厚帯を成形。外面に泥釉を施釉。	19	B－4 東側炭混粘土層
第92図 図版79 544	擂鉢	－	口縁部	21.6 － －	外面口縁部に陰圏線3条。内面胴部に8本櫛の擂目。	器色は外側が暗赤灰色・内側が灰色。素地は灰赤色で細かい。	ナデ（轆轤の可能性あり）。	両面に泥釉を施釉。口唇部に貝目が残る。	19	B－5 シーリ内木炭層 （畦）
第92図 図版79 545	火炉	－	口縁部	－ － －	無文。	器色は外面が暗赤灰色・内面が灰赤色。素地は灰赤色で細かく、白色土がマーブル状に混ざる。	ナデ。	外面から内面口縁部まで泥釉を施釉。全体に小さな火ぶくれあり。	19	B－5 シーリ内赤褐色土2（畦）
第92図 図版79 546	筒物	蓋	庇	17.4 － －	無文。	器色は上面が暗赤灰色・下面が灰色。素地は灰赤色で細かく、砂粒を含む。	ナデ（轆轤の可能性あり）。	上面に成形時の痕跡が残る。両面に自然釉が施釉。	19	B－4 シーリ上層
第92図 図版79 547	筒物	蓋	庇	17.4 － －	無文。	器色は上面が赤灰色・下面が灰色。素地は灰赤色で細かく、砂粒を含む。	ナデ（轆轤の可能性あり）。	上面に成形時の痕跡が残る。両面に自然釉が施釉。	19	B－5 シーリ内上層（黄色土・畦）
第92図 図版79 548	筒物	身	口〵底	17.4 9.0 16.8	外面に陰圏線多数。	器色は外面が灰赤色・内面が赤灰色。素地は灰赤色で細かく、砂粒を含む。	轆轤。	外面胴部から内面口縁部に泥釉を施釉。外底に貝目？が残る。547とセットになる可能性あり。	19	B－5シーリ内木炭層（畦） +B－5シーリ内黒褐色土
第92図 図版79 549	筒物	身	口縁部	18.0 － －	外面に陰圏線多数。	器色は外側が鈍赤色・内側が暗褐色。素地は外面側が灰色・内面側が灰黄色でマーブル状に堆積。	轆轤。	外面に部分的に泥釉を施釉。素地は軟質で瓦や瓦質土器に類似。	11	撹乱

第51表　沖縄産無釉陶器観察一覧３

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第93図 図版80 550	碗	直口口縁	口～底	15.2 6.7 5.6	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	胴下部にやや丸みを持つ器形。腰部に抉りが入る。高台はベタ底。口唇部と底部の一部が被熱で黒ずんでいる。	11	撹乱
第93図 図版80 551	碗	直口口縁	口縁部	14.1 － －	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が残る。	口唇下部に稜が入る。	19	C－4 2層
第93図 図版80 552	碗	－	胴～底	－ － 6.0	無文	器色:暗茶褐色 素地:暗茶褐色と茶色がサンドイッチ状になっている。	轆轤跡が明瞭に残る。	喜名焼にあたると思われる。胴部に丸みを持つ器形。高台は低い。	11	撹乱
第93図 図版80 553	皿	直口口縁	口～胴	10.4 － －	無文	器色:茶褐色 素地:暗褐色と茶褐色がサンドイッチ状になっている。白色粒を含む。	表面をナデ調整している。	小型の皿。喜名焼にあたると思われる。泥釉が掛けられ、全体に光沢がある。	19	B－1 石積み4裏込内 (黒)
第93図 図版80 554	皿	直口口縁	口～底	10.8 3.0 4.4	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭に残る。	灯明皿。口唇部に煤が付着。内外面の胴下部まで比熱で黒く変色している。	11	J－9 遺構上西
第93図 図版80 555	皿	直口口縁	口～底	10.4 2.4 5.1	無文	器色:茶褐色 素地:暗褐色と茶褐色がサンドイッチ状になっている。白色粒を含む。	表面胴下部をナデ成形、轆轤跡も残る。	灯明皿。喜名焼にあたると思われる。口唇部に煤が付着。泥釉が掛けられ、表面に光沢が見られる	11	撹乱
第93図 図版80 556	皿	直口口縁	口～底	20.8 4.48 9.9	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	大型の皿。器壁が厚く、高台が低い。腰部に抉りが入る。	11	J－9 遺構上西
第93図 図版80 557	鉢	内彎口縁	口～底	15.0 8.2 9.2	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭に残る。	口唇部は舌状を呈する。	11	撹乱
第93図 図版80 558	鉢	内彎口縁	口～底	21.2 12.3 12.0	口縁部に2条の圏線をめぐらし、その間に波状文が施される。	器色:胴上部は褐色、胴下部は赤褐色 素地:赤褐色	表面をナデ調整している。	口唇部は舌状を呈する。底部に「○」の印が刻まれている。	11	撹乱 ＋J－8茶褐色灰混層
第93図 図版80 559	鉢	肥厚口縁	口～底	24.2 12.9 10.2	胴上部に波状文が施される。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	胴上部に張りを持つ器形。	11	撹乱
第93図 図版80 560	鉢	肥厚口縁	口～底	13.6 6.9 7.8	胴上部に波状文が施される。	器色:茶褐色 素地:暗褐色と赤褐色のサンドイッチ状	表面をナデ調整している。	喜名焼にあたると思われる。泥釉が掛けられ、胴半ばに張りを持つ器形。	11	撹乱
第93図 図版80 561	鉢	肥厚口縁	口縁部	12.6 － －	無文	器色:表面は赤褐色、裏面は暗褐色 素地:赤褐色	表面をナデ調整している。	口唇がやや肥厚する。胴部からハの字状に開く器形。	11	撹乱

第52表　沖縄産無釉陶器観察一覧４

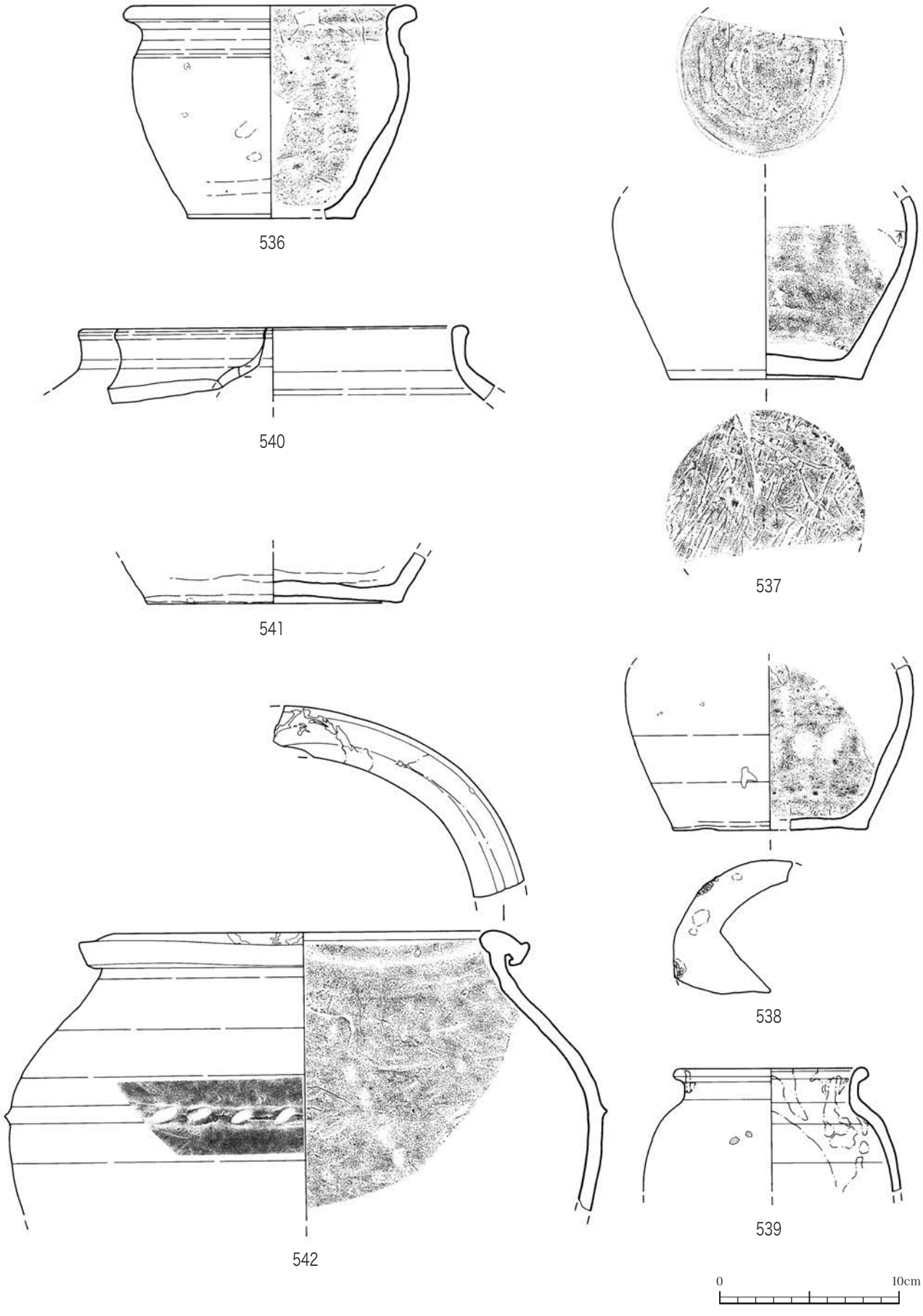
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第94図 図版81 562	鉢	外反口縁	口縁部	25.8 － －	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部は逆L字状を呈す。口唇上部に圏線をめぐらせる。	11	撹乱
第94図 図版81 563	鉢	－	底部	－ － 13.8	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭に残る。	ベタ底の高台を持つ器形。	11	撹乱
第94図 図版81 564	鉢	外反口縁	口～底	37.4 20.0 13.8	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部は逆L字状を呈す。口唇上部に圏線をめぐらせる。	11	撹乱＋I－7・10～20＋I－7・20～30＋I－7・30～40
第94図 図版81 565	鉢	外反口縁	口～底	29.4 14.0 10.8	無文	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部は逆L字状を呈す。口唇上部に圏線をめぐらせる。	11	撹乱
第94図 図版81 566	蓋	－	撮～袴	－ 3.85 10.9	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	壺の蓋だと思われる。宝珠状の撮みを持ち、口蓋端部が外側にやや反り返る。	11	撹乱 ＋I－9南側
第94図 図版81 567	蓋	－	甲蓋部～端部	－ 4.3 7.6	無文	器色:赤褐色 素地:灰褐色	ナデ調整と轆轤跡が残る。	壺の蓋にあたるものか。上面を水平にし、端部を斜めに成形する。脚部が長い。	11	撹乱
第94図 図版81 568	蓋	－	甲蓋部	17.0 － －	無文	器色:橙色 素地:橙色	ナデ調整と轆轤跡が残る。	壺の蓋にあたるものか。上面にヘラ状の道具によるナデ調整の跡が明瞭に残る。	11	撹乱
第94図 図版81 569	急須	－	口～胴	11.6 － －	無文	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	胴下部に膨らみがある。注口は太く短い。	11	撹乱
第95図 図版82 570	擂鉢	－	口縁部	32.0 － －	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が「く」の字状に屈曲する。胴部から逆「ハ」の字状に立ち上がる器形。8～9本単位の櫛目を、間隔をあけて施す。	11	撹乱
第95図 図版82 571	擂鉢	－	口縁部	26.4 － －	口縁下部に稜を1条めぐらす。	器色:暗褐色 素地:赤褐色	表面はナデ成形、裏面は轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が「く」の字状に強く屈曲する。胴部にやや丸みを持つ器形。櫛目を密に施す。	11	I－9 南側
第95図 図版82 572	擂鉢	－	口縁部	26.2 － －	口縁下部に稜を1条めぐらす。	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が「く」の字状に強く屈曲する。胴部から逆「ハ」の字状に立ち上がる器形。10本単位の櫛目を、間隔をあけて施す。	19	撹乱

第53表　沖縄産無釉陶器観察一覧５

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第95図 図版82 573	擂鉢	－	口縁部	－ － －	無文	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が「く」の字状にゆるやかに屈曲する。口唇は分厚く、丸みを持っている。器面に圏線を４条めぐらせる。５本単位の櫛目を、間隔をあけて施す。	11	撹乱
第95図 図版82 574	擂鉢	－	口縁部	－ － －	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が「く」の字状に屈曲する。注口がある。９本単位の櫛目を、間隔をあけて施す。	11	撹乱
第95図 図版82 575	擂鉢	－	口縁部	38.4 － －	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が「く」の字状に屈曲する。胴部にやや丸みを持つ器形。器面に圏線を２条めぐらせる。６本単位の櫛目を、間隔をあけて施す。	11	撹乱
第95図 図版82 576	擂鉢	－	口～底	30.1 13.0 10.6	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部に圏線を１条施す。胴部に丸みを持つ器形。内面に櫛目を密に施す。	11	J－9 遺構上西
第95図 図版82 577	擂鉢	－	底部	－ － 16.8	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	脚付きの擂鉢。脚上部に2カ所穴がある。脚下部に２条の凹線がめぐらされる。櫛目は全体に密に施す。	11	撹乱
第96図 図版83 578	壺	外反口縁	口～胴	20.0 － －	頸部に８本の沈線をめぐらせる。	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が外反し、肩部がゆるやかに張る器形。頸部は長く、表面に光沢がある。	11	撹乱
第96図 図版83 579	壺	肥厚口縁	口縁部	11.8 － －	無文	器色:茶褐色 素地:暗赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部を外側に折り曲げて玉縁状に肥厚させる。外面には泥釉が施され、光沢がある。	19	B－1 石積み４裏込内(黒)
第96図 図版83 580	壺	肥厚口縁	口～胴	12.8 － －	頸部に3本の沈線が施され、その下には線刻が刻まれている。	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が方形を呈する。頸部は長く、肩部がゆるやかに張り出している。表面には泥釉が施され、光沢がある。	11	撹乱
第96図 図版83 581	壺	肥厚口縁	口～胴	9.8 － －	無文	器色:茶褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	小型の四耳壺。口縁部が方形を呈する。頸部は長く、胴半ばに膨らみを持つ。	11	撹乱
第96図 図版83 582	壺	肥厚口縁	口縁部	13.4 － －	無文	器色:橙色 素地:暗褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が方形を呈する。頸部は長い。	19	C－3 野面石積み南側栗石
第96図 図版83 583	壺	肥厚口縁	口縁部	12.7 － －	無文	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が方形を呈する。	19	B－4 2層
第96図 図版83 584	火入れ	直口口縁	口～底	8.1 5.35 6.6	胴部に沈線を１本めぐらせる。	器色:明褐色・茶褐色 素地:－	ナデ成形の跡がみられる。	口縁部がやや丸みを持つ。形はいびつで、底部は平底。腰部に削りがはいる。焼成時の温度差によるものか、色調はまだら。	11	撹乱

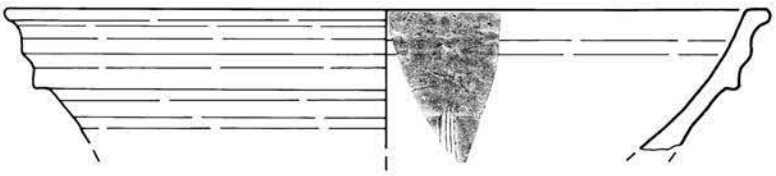
第54表　沖縄産無釉陶器観察一覧６

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第96図 図版83 585	火炉	－	口 ＼ 底	16.8 17.6 12.2	肩部に沈線を２本めぐらせる。	器色:橙色 素地:橙色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部がくの字状に折れる。底部は平底で、方形状の横耳がつく。	11	撹乱
第97図 図版84 586	植木鉢	外反口縁	口縁部	51.0 － －	口縁部下に波形の凸帯を貼付、胴部に草文を貼付する。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部が広い。口唇側面に沈線を一本めぐらせる。胴部にわずかな丸みを持つ器形。	11	撹乱
第97図 図版84 587	植木鉢	外反口縁	口縁部	46.8 － －	口縁部下に波形の凸帯を貼付、胴部に草文を貼付する。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部が広い。胴部から垂直に近い形で立ち上がる器形。	11	撹乱
第97図 図版84 588	植木鉢	外反口縁	口縁部	45.4 － －	口唇部に縄目状の刻み目を入れる。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇上面及び側面に沈線を一本めぐらせる。胴部から逆「∧」の字状に開く器形。	11	撹乱
第97図 図版84 589	甕	－	底部	－ － 33.2	無文	器色:茶褐色 素地:茶褐色	ナデ調整と轆轤跡が残る	底部から胴部へ逆ハの字形にたちあがる。器壁が分厚い	19	B－2 埋甕
第98図 図版85 590	甕	外反口縁	口縁部	53.6 － －	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部は広く、口唇側面に３本沈線がめぐらされ、胴部にも3本の沈線が残っている。	11	I－9 南側
第98図 図版85 591	甕	外反口縁	口縁部	45.6 － －	無文	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇部は広く、口唇側面に3本沈線がめぐらされ、口縁下部には抉りが入れられている。胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる器形。	11	撹乱
第98図 図版85 592	甕	肥厚口縁	口縁部	42.8 － －	口縁下部に波文が施される。その下には凸帯が一本貼付される。	器色:暗褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆三角形状に肥厚する。口唇側面に２本沈線がめぐらされている。	11	撹乱
第98図 図版85 593	甕	肥厚口縁	口縁部	10.8 － －	胴上部に丸文を貼付し、「＋」の刻み文をいれる。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に肥厚する。口唇の幅は狭い。口唇側面に沈線を１本、胴上部に２本めぐらせる。胴下部に丸みを持つ器形。	11	撹乱
第98図 図版85 594	甕	肥厚口縁	口縁部	－ － －	無文	器色:暗褐色 素地:暗赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に肥厚する。口唇の幅は狭い。口唇上部に沈線を１本めぐらせる。	11	撹乱
第98図 図版85 595	甕	外反口縁	口縁部	93.4 － －	口縁部に1条、胴上部に3条の凹線をめぐらせ、その下に丸文と凸帯を貼付する。	器色:赤褐色 素地:赤褐色	轆轤跡が明瞭に残る。	口縁部が逆「L」字状に屈曲する。口唇は広く、胴部にゆるやかな丸みを持つ。	11	I－9瓦溜まり ＋J－9遺構上西

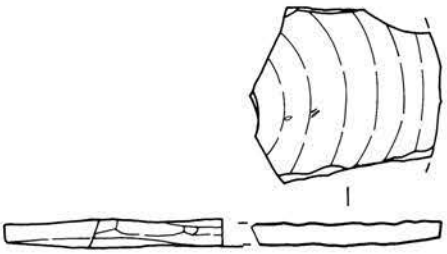


第91図　沖縄産無釉陶器１

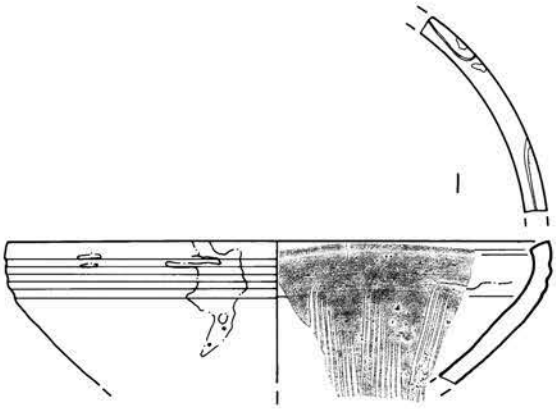
図版78　沖縄産無釉陶器 1



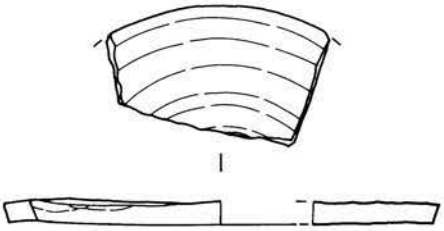
543



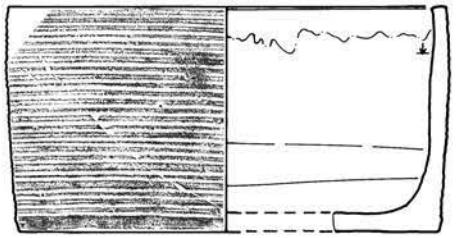
546



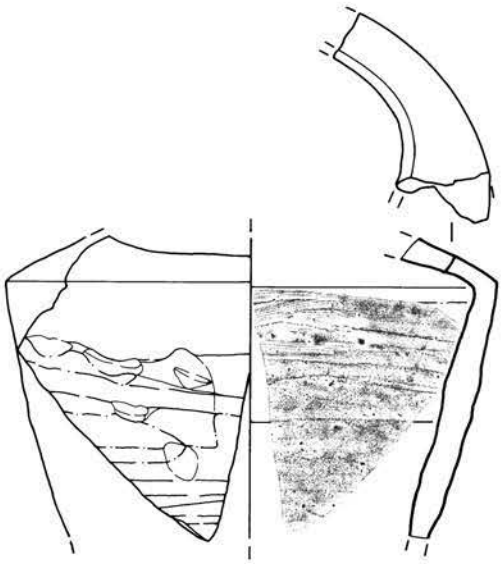
544



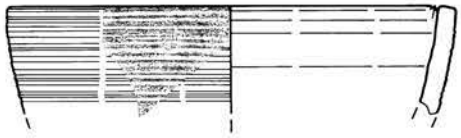
547



548



545



549

第92図　沖縄産無釉陶器２

543

546

544

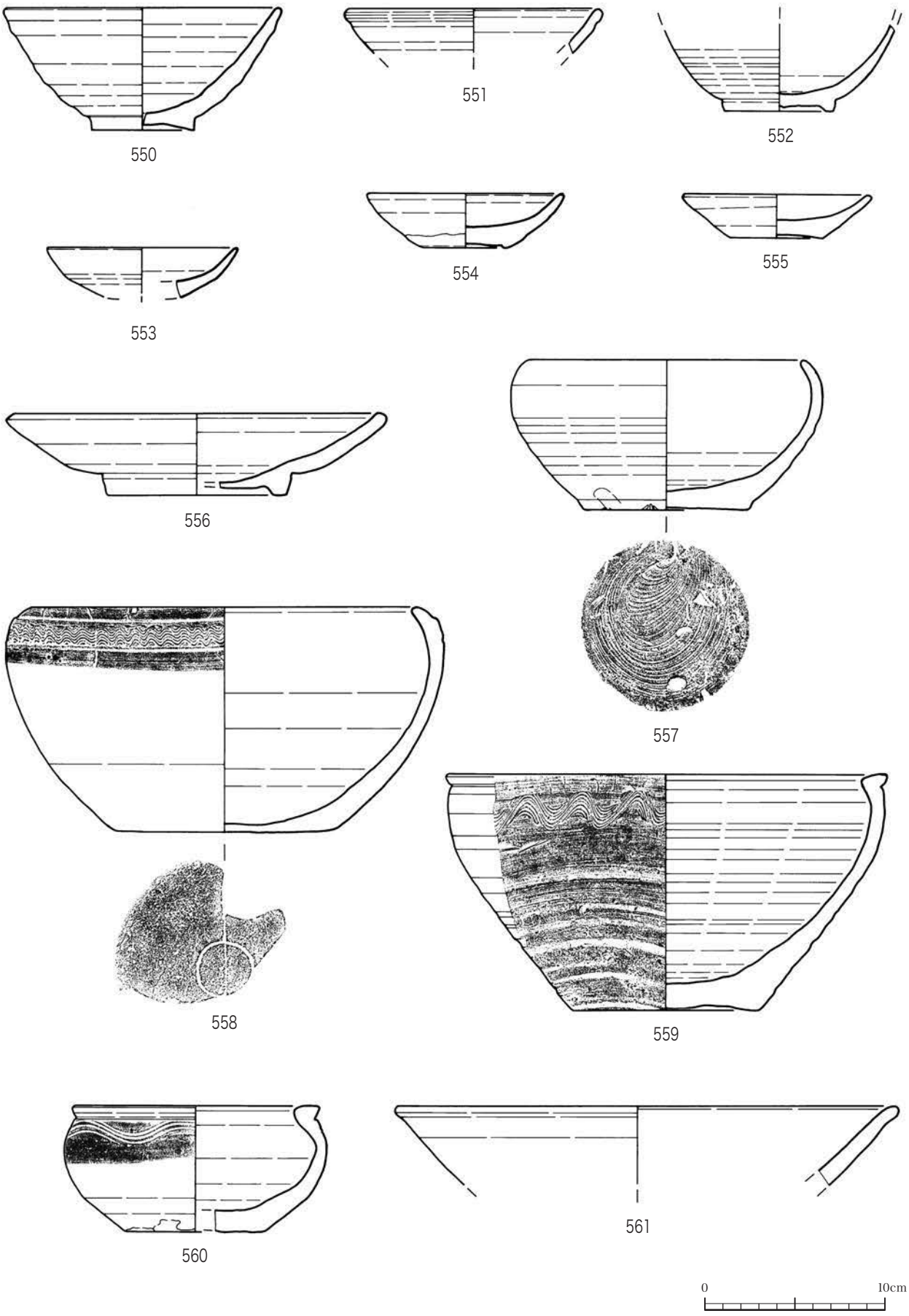
547

548

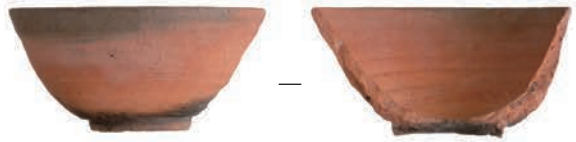
545

549

図版79　沖縄産無釉陶器２



第93図　沖縄産無釉陶器３



550

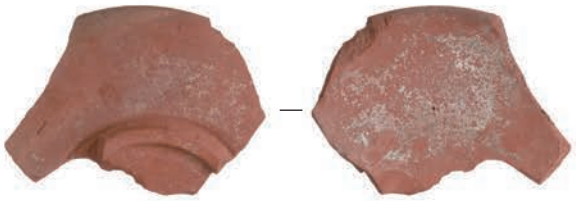
551

552

553

554

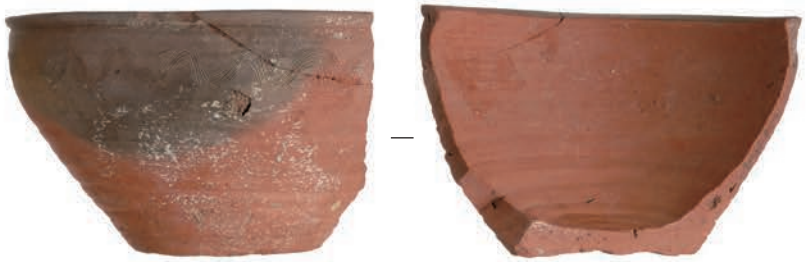
555



556

558

557

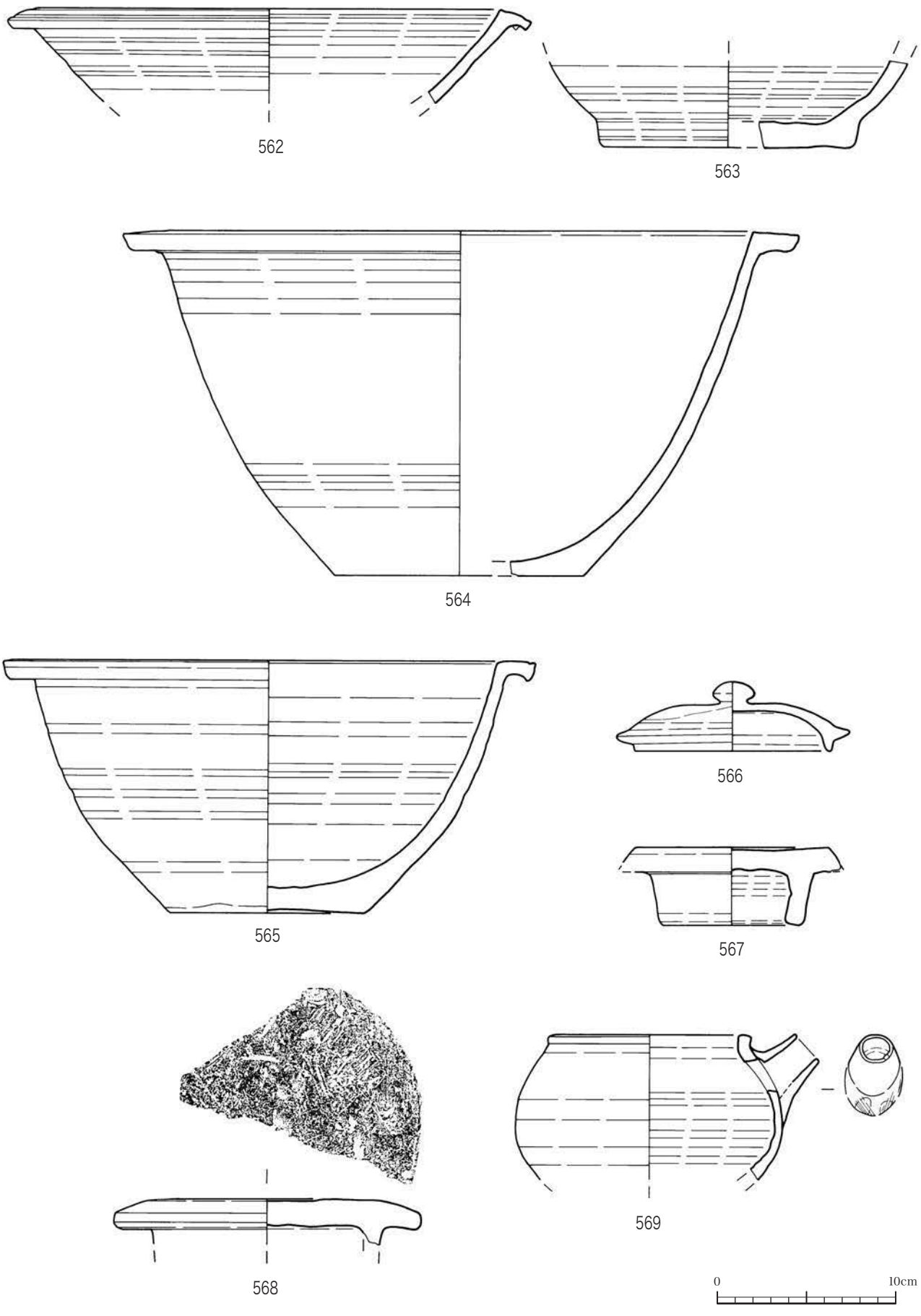


559

560

561

図版80　沖縄産無釉陶器３



第94図　沖縄産無釉陶器４

562

563

564

565

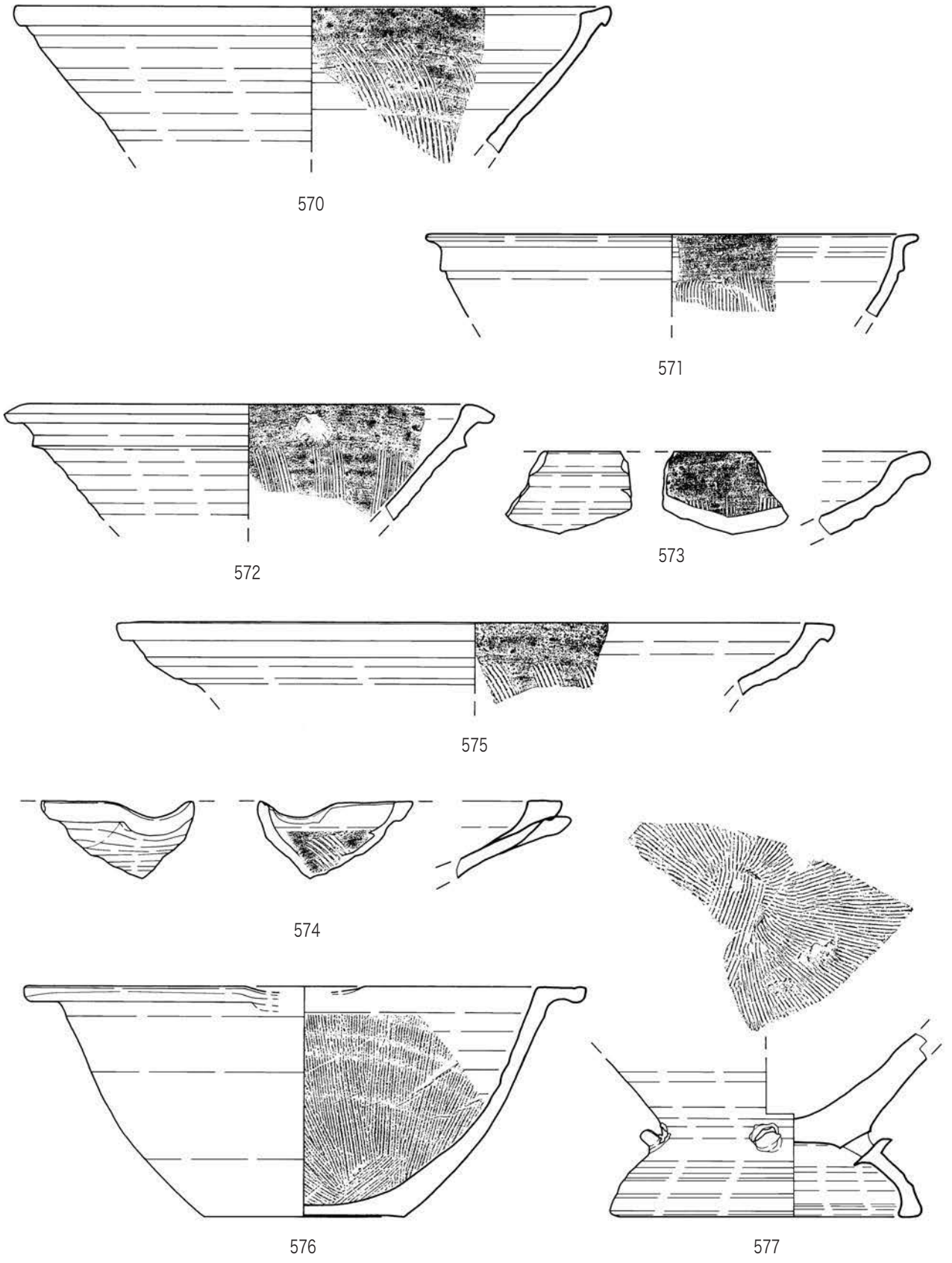
566

568

567

569

図版81　沖縄産無釉陶器４



第95図　　沖縄産無釉陶器５

570

571

572

573

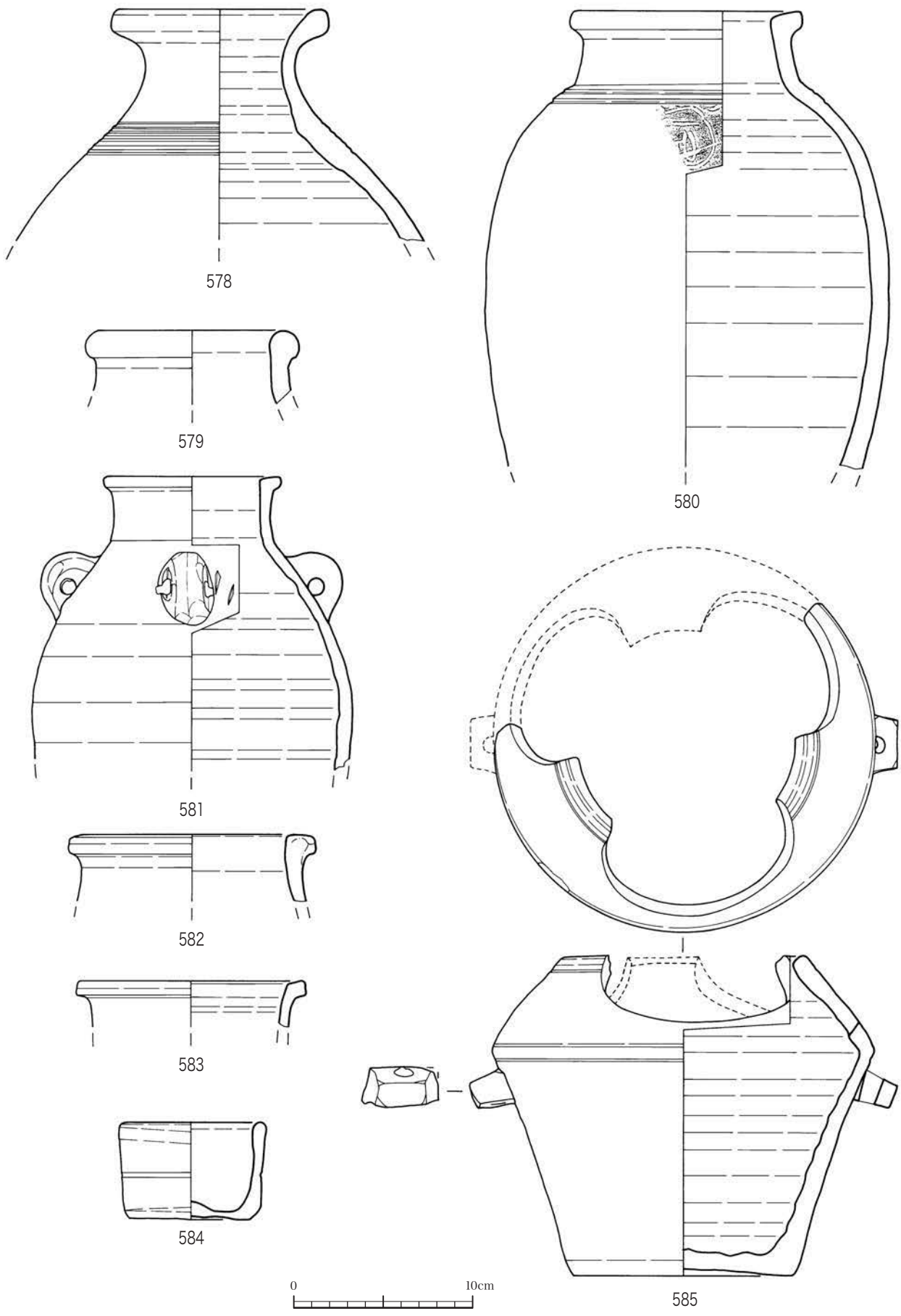
574

575

576

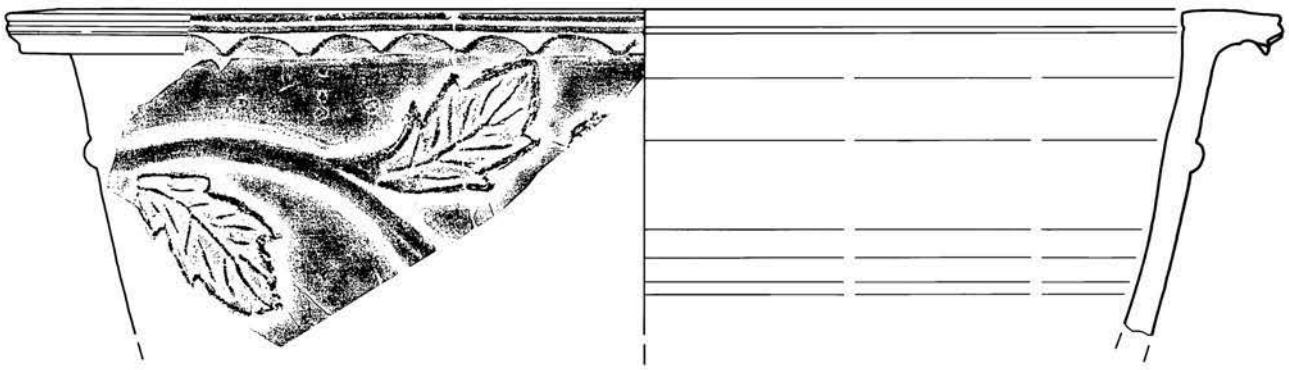
577

図版82　沖縄産無釉陶器５



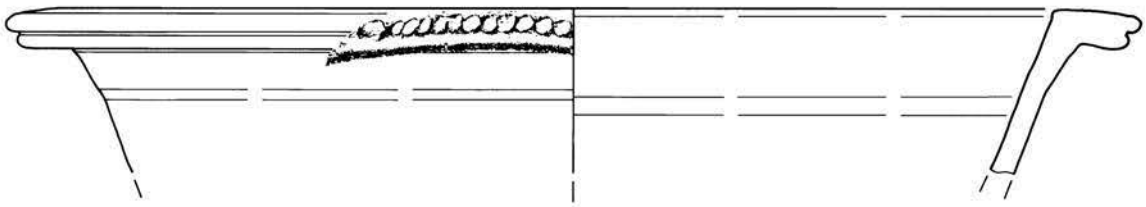
第96図　沖縄産無釉陶器６

図版83　沖縄産無釉陶器６



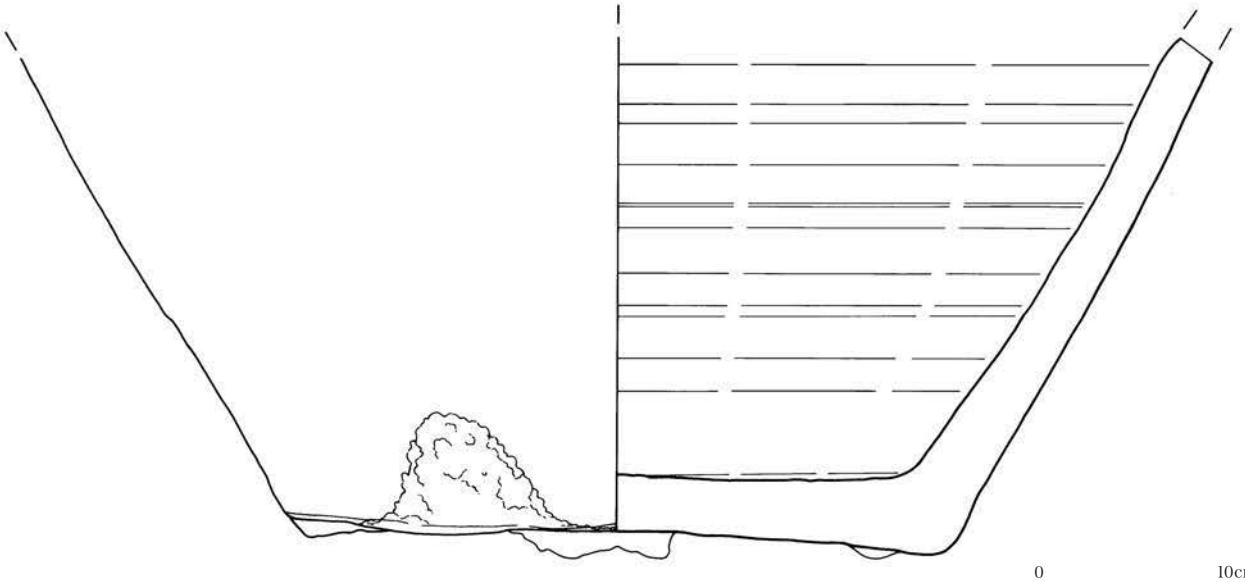
586

587



588

0 10cm

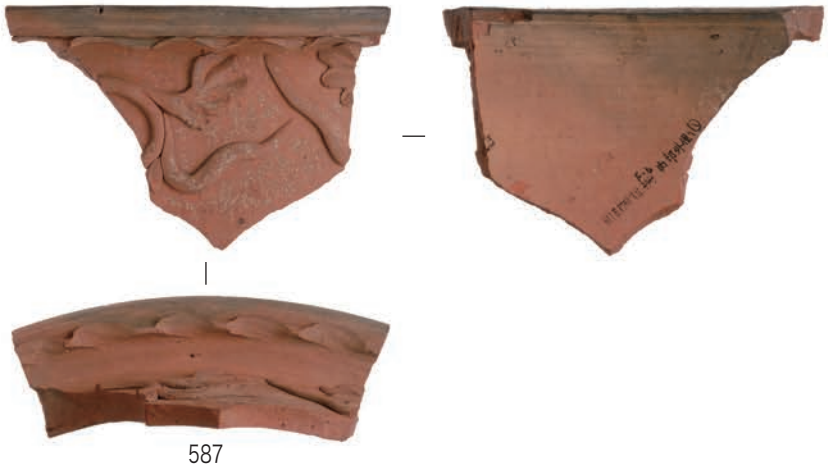


589

0 10cm

第97図　沖縄産無釉陶器７

586

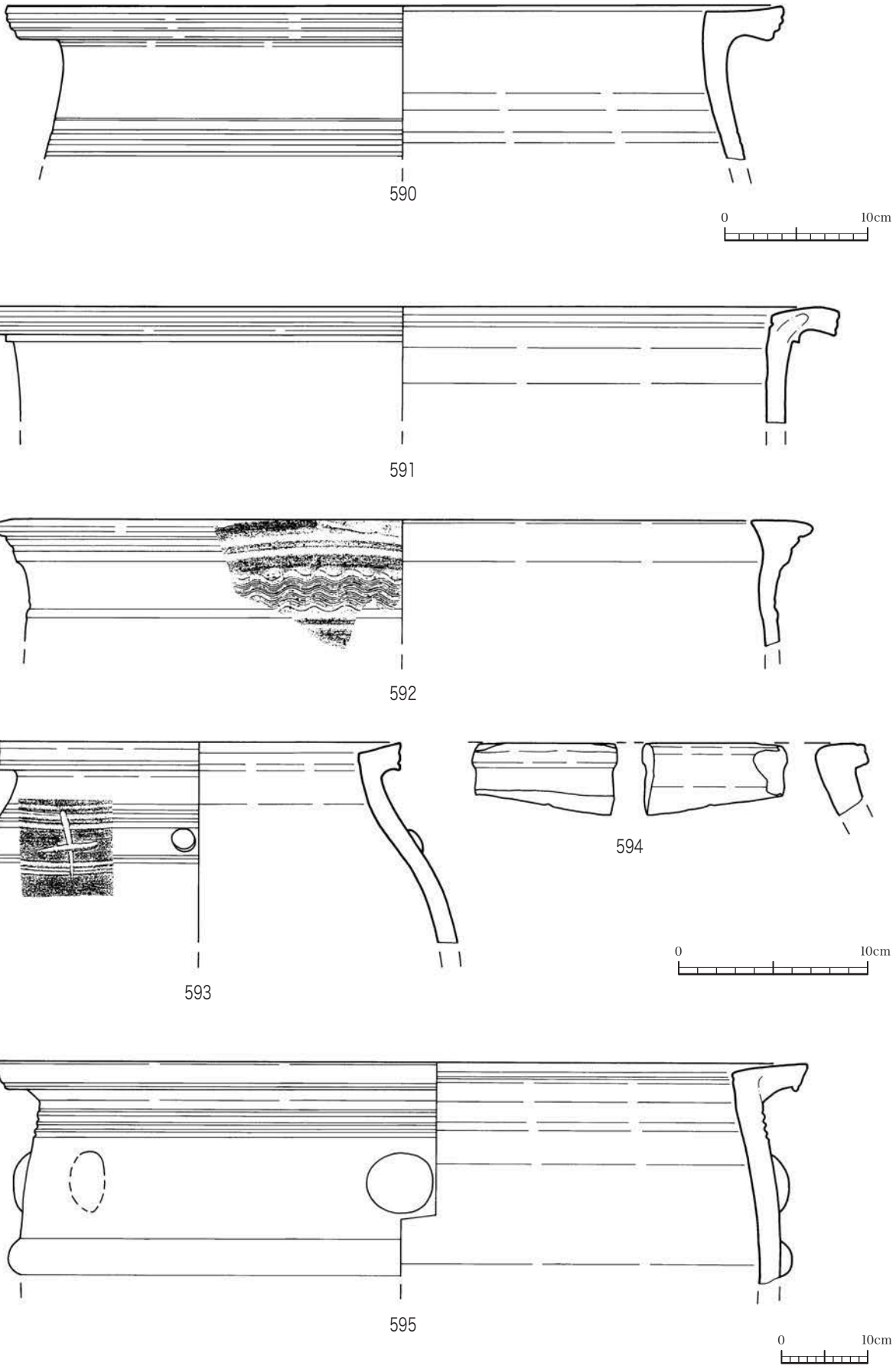


587

588

589

図版84　沖縄産無釉陶器７



第98図　沖縄産無釉陶器８

590

591

592

593

594

595

図版85　沖縄産無釉陶器８

第10節　陶質土器（第55～57表、第99～101図、図版86～88）

陶質土器は、壺屋において「アカモノ」などという呼び名で呼ばれているもので、胎土は細かく、白色粒・黒色粒・赤色粒などを含み、轆轤引きや輪積みにより成形される。器色は橙色や黄褐色のものがある。焼成は弱くもろいものが多い。本遺跡においては3,139点が出土している。器種は浅鉢、鉢、壺、甕、蓋、フライパン状製品、急須の蓋、灯明皿、火炉、サナなどが見られる。以下に器種の概観を述べる。個々の詳細は観察表に譲る。

1. 浅鉢（596）

596に示したものである。口縁が内彎し、口唇が舌状を呈する。

2. 鉢（597～599）

口唇が逆三角形を呈し、肩部が張り出す器形と（597）「ミジクブサー」と呼ばれる水鉢で、内彎口縁に口唇が舌状を呈し、胴部に丸彫りの圏線と櫛書きの波状文を施すもの（598、599）がある。

3. 壺（600・601）

小型で直口、頸部が短いもの（600）と、外反口縁で肩部が強く張り出すもの（601）がある。

4. 甕（602）

胴部に沈線がめぐらされ、胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる器形。

5. 鍋の蓋（605、606）

鍋の蓋にあたり、高台状の摘みを持つ。

6. 鍋（603、604）

口縁部がくの字形を呈し、口唇部に紐状の耳を貼付する。

7. フライパン状製品（607～610）

口唇部が舌状に肥厚するもの（607、608）、口唇部が平坦に成形されているもの（609）がある。（610）は把手部分にあたる。フライパン状製品は壺屋古窯群でも出土している。

8. 急須の蓋（611）

宝珠状の摘みを頸長につくる。

9. 急須（612）

頸部が短く、胴下部を屈曲させている。

10. 灯明皿 (613、614)

口縁部が肥厚し、胴部に削りが入るもの(613)と、底面に左回転による糸切り痕が残るものがある(614)。

11. 火炉 (615～618)

肩部をくの字形に屈曲させるもの (616) と、胴部に膨らみを持ち、胴半ばに方形の把手を貼付するもの (615、618) 、口縁部が逆三角形状に肥厚し、円筒形の器形を呈するもの (617) がある。

12. サナ (619)

七輪の内部に設置し、灰おとしとして用いられる部品である。

〈参考文献〉

沖縄県文化財調査報告書第111集「湧田古窯跡（Ⅰ）−県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査」1993 沖縄県教育委員会

那覇市文化財調査報告書第23集 「壺屋古窯群Ⅰ−個人住宅建設に伴う緊急発掘調査−」1992 那覇市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集「天界寺跡（Ⅰ）−首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査」2001 沖縄県立埋蔵文化財センター

第55表　陶質土器観察一覧１

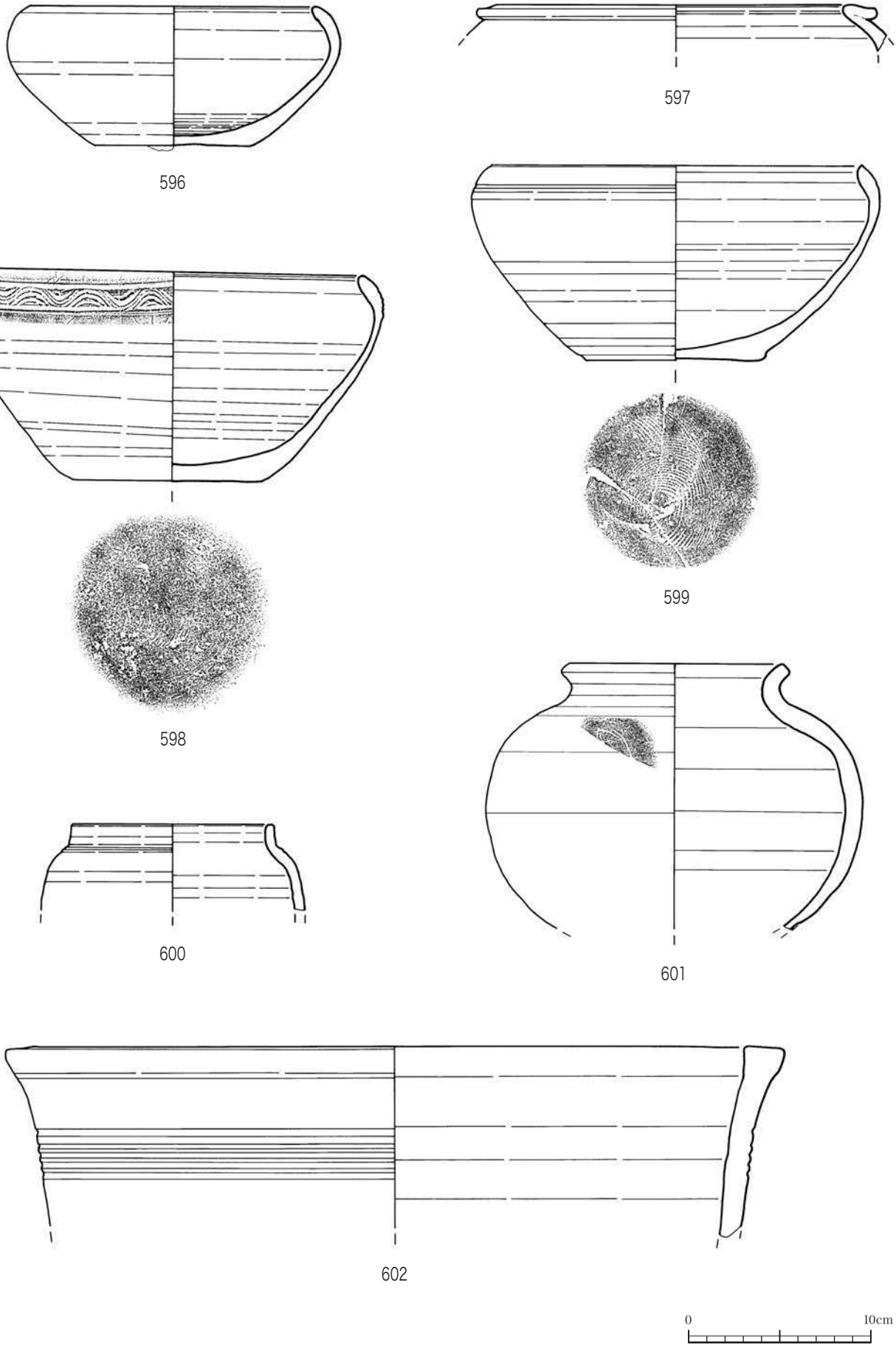
図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項					調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見		
第99図 図版86 596	浅鉢	内彎口縁	口縁部～底部	15.4 7.5 8.4	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁が内彎し、口唇が舌状を呈す。	11	撹乱
第99図 図版86 597	鉢	内彎口縁	口縁部	21.6 − −	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁が内彎し、口唇部が逆三角形を呈する。肩部が強く張り出す器形。	19	B−4 2層
第99図 図版86 598	鉢	内彎口縁	口縁部～底部	20.3 11.4 10.5	胴上部に丸彫りで圏線を2本めぐらせ、その間に櫛書きの波状文を描く。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁が内彎し、口唇が舌状を呈する。	11	J−9 遺構上西
第99図 図版86 599	鉢	内彎口縁	口縁部～底部	20.0 10.6 8.8	胴上部に丸彫りで圏線を１本めぐらせる。	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁が内彎し、口唇が舌状を呈する。	11	J−9 遺構上西 ＋撹乱
第99図 図版86 600	壺	直口口縁	口縁部～胴部	11.0 − −	頸部に凸帯を１本削り出す。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	小型の壺。直口で頸部が短く、肩部ナデ形になっている器形。	11	撹乱

第56表　陶質土器観察一覧２

図版番号	器種	器形	部位	口径・器高・底径(cm)	観察事項 文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見	調査年度(平成)	グリッド層
第99図 図版86 601	壺	直口口縁	口縁部～胴部	12.4 – –	胴部に の印が刻まれる。	器色:茶褐色 素地:明褐色	赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母	表面をナデ調整している。	頸部が短く、肩部が強く張り出し、胴部に丸みを持つ器形。	11	撹乱
第99図 図版86 602	甕	肥厚口縁	口縁部	42.2 – –	胴部に5本の沈線がめぐらされる。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁部が逆三角形状に肥厚する。胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる器形。	19	撹乱
第100図 図版87 603	鍋	外反口縁	口縁部～胴部	12.9 6.5 2.9	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。腰部から底部にかけて篦削りによる調整。	口縁部がくの字形を呈する。口唇部に紐状の耳を貼付する。	11	J－9 遺構上西
第100図 図版87 604	鍋	外反口縁	口縁部～胴部	20.9 11.7 3.2	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁部がくの字形を呈する。口唇部に紐状の耳を貼付する。腰部から底部にかけてスス痕が付着。	11	J－9 遺構上西
第100図 図版87 605	蓋	－	撮～庇	13.5 3.6 –	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	鍋の蓋。高台状の撮みを持つ。	11	撹乱
第100図 図版87 606	蓋	－	撮～庇	17.8 4.5 –	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	鍋の蓋。高台状の撮みを持つ。	11	I－7 30～40
第100図 図版87 607	フライパン状製品	肥厚口縁	口縁部	– – –	無文	器色:乳白色 素地:乳白色	黒色粒・白色粒	ナデ調整	口唇部が舌状に肥厚する。焼成が弱い。	11	撹乱
第100図 図版87 608	フライパン状製品	肥厚口縁	口縁部	20.0 – –	無文	器色:乳白色 素地:乳白色	黒色粒・白色粒	ナデ調整	口縁部が舌状に肥厚する。焼成が弱い。	11	撹乱
第100図 図版87 609	フライパン状製品	直口口縁	口縁部～底部	24.7 – –	無文	器色:橙色 素地:橙色	赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	口唇部が平坦に成形される。内底・外底にスス痕が付着。	11	撹乱
第100図 図版87 610	フライパン状製品	－	把手	– – –	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	指によるナデ調整	上面から約8㎜の孔を穿つ。	11	J－8 茶褐色灰混層

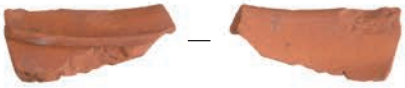
第57表　陶質土器観察一覧３

図版番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項					調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見		
第101図 図版88 611	急須の蓋	－	撮～袴	撮:2.1 3.6 6.2	無文	器色:薄橙色 素地:薄橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	宝珠状の撮みを首長につくる。甲蓋部を底近くまでヘラ削りで調整。	11	J－9 遺構上西
第101図 図版88 612	急須	－	口縁部～底部	7.8 － －	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	頸部が短く、胴下部を屈曲させる。胴部に方形の耳を貼付する。底部にはスス痕が付着している。	11	撹乱 ＋J－9遺構上西 ＋J－9灰混層
第101図 図版88 613	灯明皿	直口口縁	口縁部～底部	11.3 2.1 3.8	無文	器色:灰褐色 素地:灰褐色	白色粒・黒色粒・赤色粒	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁部がわずかに肥厚する。腰部に削りが入る。	11	J－9 遺構上西
第101図 図版88 614	灯明皿	－	底部	－ － 4.0	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	内・外面にスス痕が付着。底面に左回転による糸切り痕が残る。	11	撹乱
第101図 図版88 615	火炉	内彎口縁	口縁部～底部	15.5 10.7 8.2	肩部に丸彫りで２本の沈線を施す。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕が明瞭に残る。	胴部に膨らみを持ち、胴半ばに方形の把手を貼付する。口縁部内面には器物をのせる突起を貼り付ける。	11	撹乱 ＋J－8茶褐色灰混層
第101図 図版88 616	火炉	内彎口縁	口縁部～胴部	12.0 － －	肩部に丸彫りで２本の沈線を施す。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒	轆轤痕が明瞭に残る。	肩部をくの字状に屈曲させ、底部から胴部へ逆ハの字形に立ち上がる器形。口縁部の外側と内面胴上部にスス痕が付着している。	11	撹乱
第101図 図版88 617	火炉	内彎口縁	口縁部～胴部	21.3 － －	白化粧土による横線をめぐらせる。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒	轆轤痕が明瞭に残る。	口縁部が逆三角形状に肥厚する。器形は円筒形を呈す。口縁部内面には器物をのせる突起を貼り付ける。	11	撹乱
第101図 図版88 618	火炉	－	胴部	－ － －	白化粧土による横線をめぐらせる。「小」「第」と一文字判読不明の墨書あり。	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒	轆轤痕が明瞭に残る。	肩部をくの字状に屈曲させる器形。折れ曲がった肩部には方形の把手が貼付される。	11	I－9 南側
第101図 図版88 619	サナ	－	－	－ － －	無文	器色:橙色 素地:橙色	白色粒・黒色粒・雲母	ナデ調整	七輪の灰おとしに用いられるサナという器具。器壁は厚みがあり、孔が穿たれている。	11	撹乱



第99図　陶質土器１

596



597

599

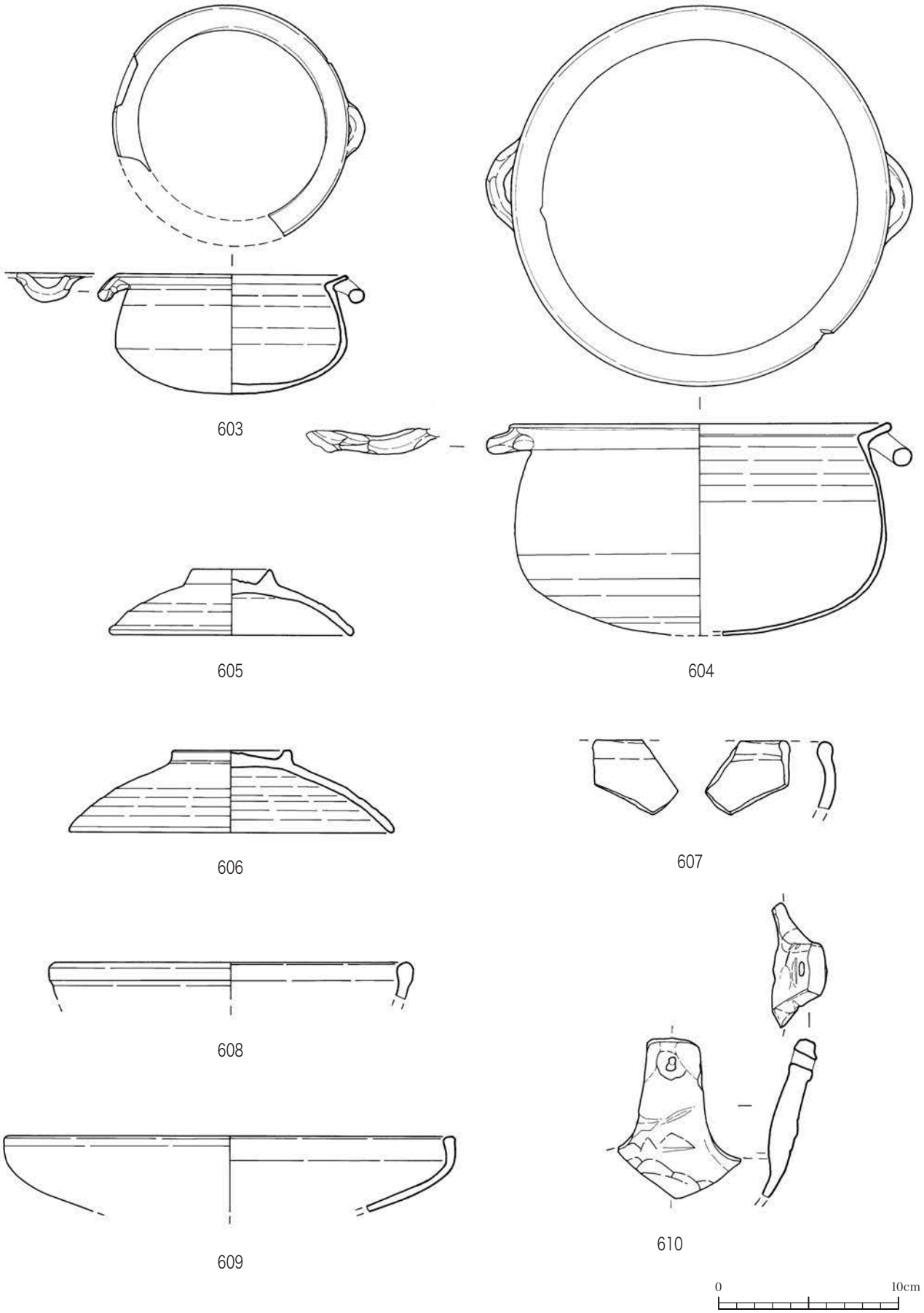
598

601

600

602

図版86　陶質土器 1



第100図　陶質土器２

603

605

606

604

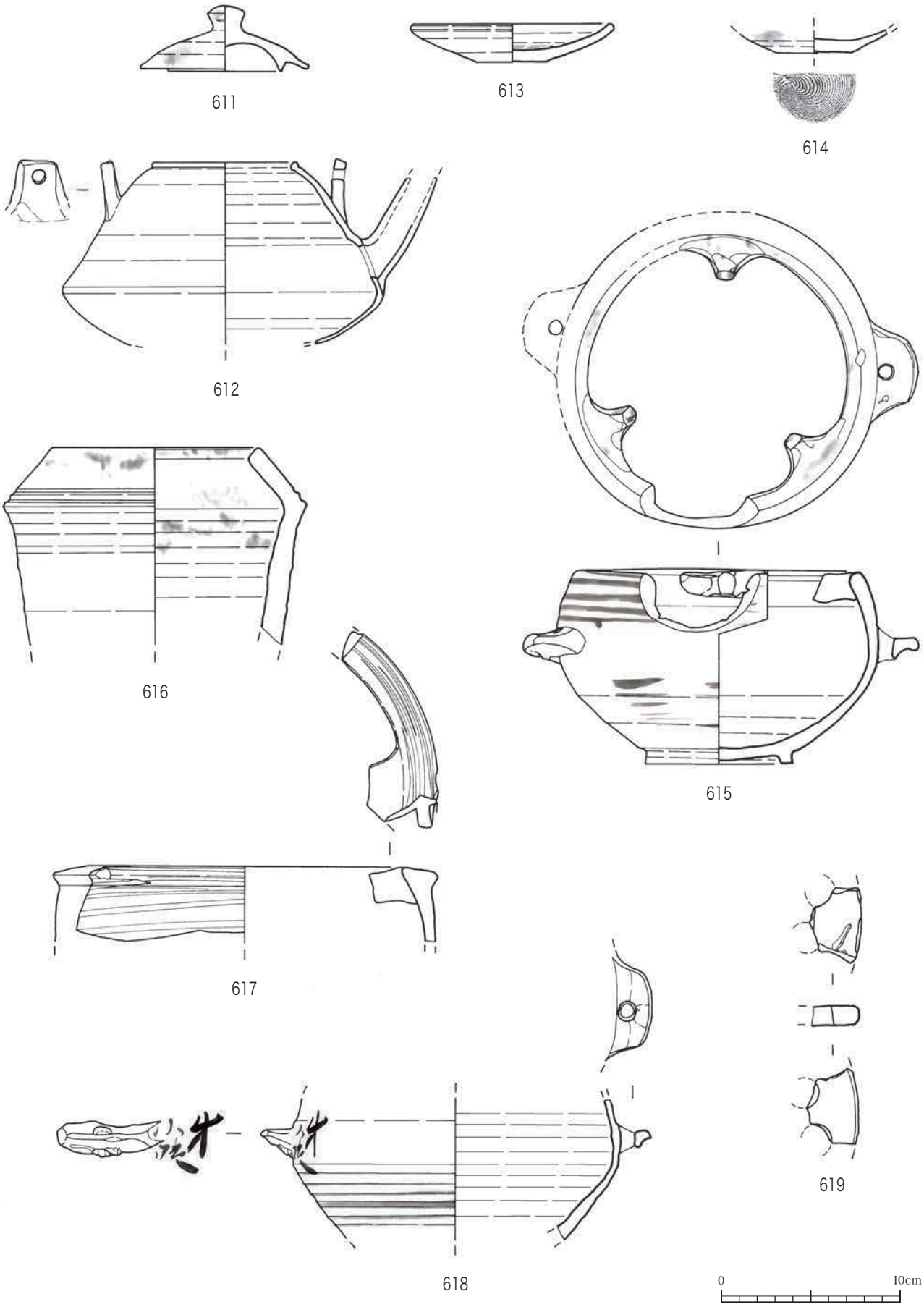
607

608

609

610

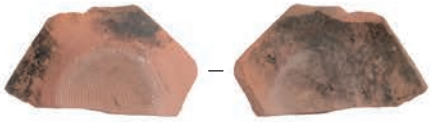
図版87　陶質土器２



第101図　陶質土器３

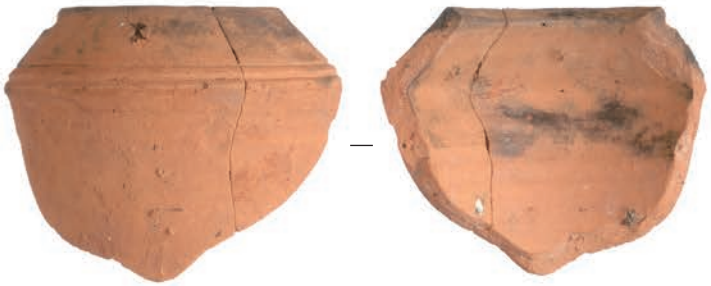
611

613



614

612



616

615

618

619

617

図版88　陶質土器３

第11節　瓦質土器（第58表、第102～105図、図版89～92）

本遺跡で瓦質土器は87点が出土している。うち特徴的なもの20点を図示した。器種別にみると、植木鉢、火鉢、七輪、火炉、浅鉢、竈、焜炉、甕が出土している。以下に各器種の概要を述べる。個々の詳細は観察表に譲る。

1. 植木鉢（620～628）

口縁部が内彎し、口縁部や胴上部に波状の凸帯をめぐらせるもの（620～622）、胴部に菊葉文を施すもの（623～625）などがある。また、特徴的な資料として脚付きの植木鉢がある（628）。脚の中央部に孔を穿ち、底部から胴部にかけて丸みを帯びた器形である。

2. 浅鉢（630、636）

口縁部を広くつくり、胴部を屈曲させて胴上部に菊花文をめぐらせるもの（630）、底に砂目の付着した底部資料などがある（636）。

3. 火炉（631、632）

口縁資料で器形は円筒形を呈し、菊花文と菱形文を組み合わせるもの（631）、底部資料で胴部に丸みを持つもの（632）とがある。

4. 七輪（633、634）

口縁が外反し、口縁外面に雷文帯を施すもの（633）と、口唇部を平たく成形するもの（634）がある。

5. 火鉢（635）

胴部にゆるやかな丸みを持つ、円筒形の器形である。

6. 竈（637）

類例資料が湧田古窯から出土している。形状は方形を呈し、外面には補修に用いたものか漆喰が付着している。

7. 焜炉（638）

焜炉と思われる資料で、楕円形の器形を呈する。

8. 甕（639）

底部資料である。底部から胴部にかけて斜め上方へストレートにたちあがる器形。

9. 器種不明（629）

器物の脚と思われる。縦横の沈線を組み合わせて文様を描く。

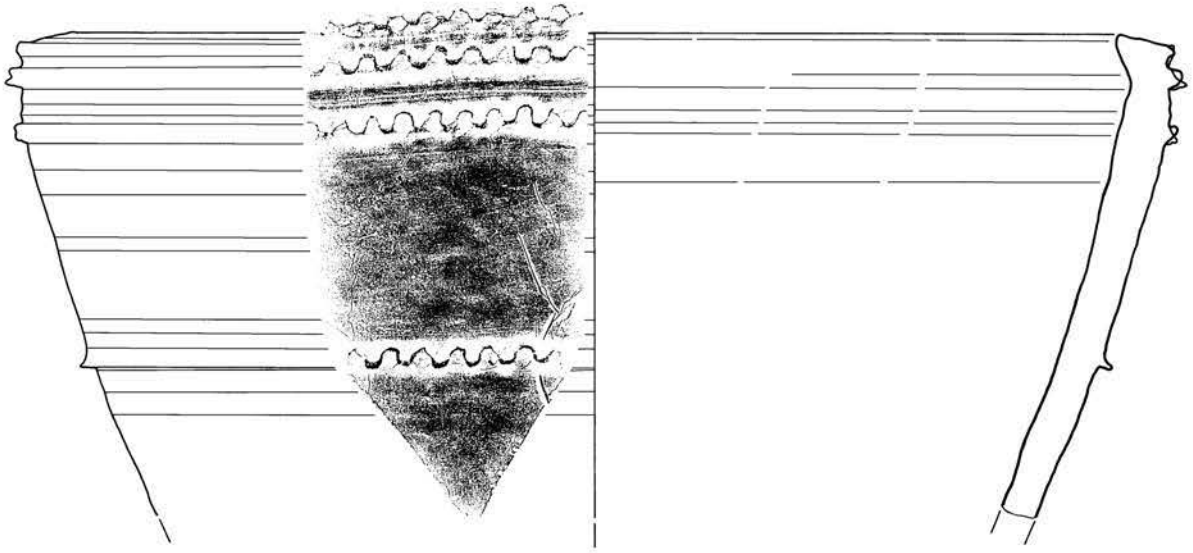
〈参考文献〉

瀬戸哲也 2004「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える –世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録–』今帰仁村教育委員会

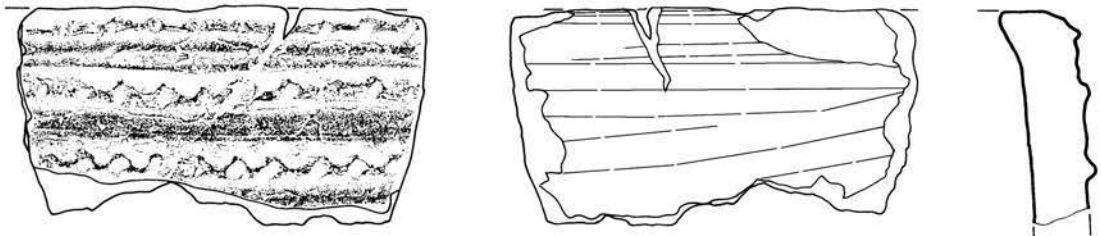
新垣力 2000「モデルとコピーの視点から見た窯業開始期の沖縄」『南島公庫20号』沖縄考古学会

第58表　瓦質土器観察一覧

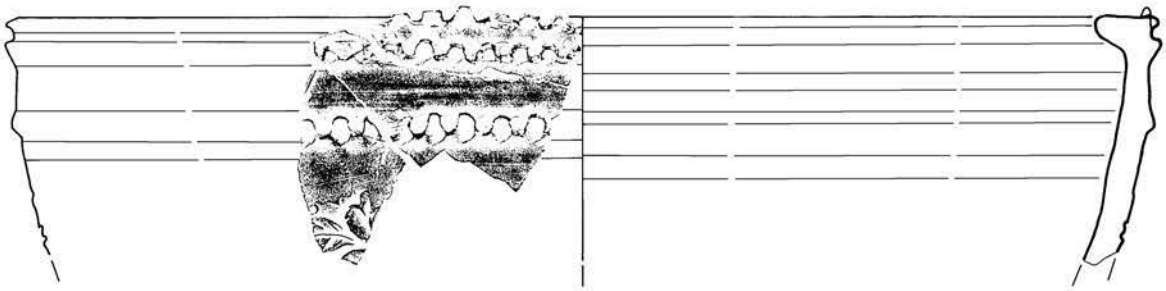
図 図版 番号	器種	器形	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項					調査年度 (平成)	グリッド 層
					文様構成	器色・素地	混和材	調整法	所見		
第102図 図版89 620	植木鉢	内彎口縁	口～胴	76.2 － －	口縁部に波状の凸帯を1条、胴上部に2条、胴下部に1条めぐらせる。	器色：灰色 素地：灰色	黒色粒・白色粒	ナデ調整	口唇部は舌状を呈する。底部から斜め上方にむけてほぼストレートに立ち上がる器形。	11	撹乱
第102図 図版89 621	植木鉢	内彎口縁	口～胴	－ － －	口縁部に波状の凸帯を1条、胴上部に2条めぐらせる。	器色：灰色 素地：灰色	黒色粒・白色粒・雲母	轆轤痕、ナデ調整	口唇部は舌状を呈する。胴上部にやや丸みを持つ器形	19	A－1 石積み6 西側下層
第102図 図版89 622	植木鉢	内彎口縁	口～胴	60.9 － －	口縁部に波状の凸帯を1条、胴上部に2条めぐらせる。凸帯下に菊葉文を施す。	器色：暗灰色 素地：灰色	黒色粒・白色粒・雲母	轆轤痕、ヘラ削り	口唇部は舌状を呈する。胴上部にやや丸みを持つ器形	11	撹乱
第102図 図版89 623	植木鉢	－	胴部	－ － －	菊葉文を施す。	器色：暗灰色 素地：灰色	黒色粒・白色粒・雲母	ヘラ削り	やや丸みを持つ胴部。	11	撹乱
第103図 図版90 624	植木鉢	－	胴部	－ － －	胴上部と胴半ばに波状の凸帯をめぐらせ、凸帯下には菊葉文を施す。	器色：灰色 素地：灰色	黒色粒・白色粒・雲母	ナデ調整	やや丸みを持つ胴部。	11	撹乱
第103図 図版90 625	植木鉢	－	胴部	－ － －	胴部に波状の凸帯を1条めぐらせ、その直上に菊葉文を施す。	器色：暗灰色 素地：灰色	黒色粒・白色粒・雲母	轆轤痕、ナデ調整	ほぼストレートに立ち上がる器形。	11	撹乱
第103図 図版90 626	植木鉢	－	底部	－ － 41.6	無文	器色：灰色 素地：暗灰色	白色粒・雲母	ヘラ削り・指圧	底部から胴部にかけて斜め方向へストレートに立ち上がる器形。	11	撹乱
第103図 図版90 627	植木鉢	－	底部	－ － 45.0	無文	器色：灰色 素地：暗灰色	黒色粒・白色粒・雲母	叩き痕	底部から胴部にかけて斜め方向へストレートに立ち上がる器形。	11	撹乱
第103図 図版90 628	植木鉢	－	底部	－ － 22.0	無文	器色：赤褐色 素地：赤褐色	白色粒・赤色粒・雲母・黒色粒	轆轤痕・ヘラ削り・ナデ痕	脚付きの植木鉢。脚の中央部に孔を穿つ。底部から胴部にかけて丸みを帯びた器形。	11	J－9遺構上西＋撹乱
第103図 図版90 629	器種不明	－	脚部	－ － －	側面に縦横の沈線を組み合わせて文様を施す。	器色：暗灰色 素地：灰色	白色粒	ナデ調整	器物の脚。	11	撹乱
第104図 図版91 630	浅鉢	内彎口縁	口～胴	－ － －	胴上部に菊花文をめぐらせる。	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・雲母・赤色粒	ナデ調整	口縁部を広くつくり、胴部を屈曲させる。	11	撹乱
第104図 図版91 631	火炉	直口口縁	口～胴	17.2 － －	胴部上段に菊花文と菱形文を交互にめぐらせ、下段には菊花文をめぐらせる。	器色：赤褐色 素地：赤褐色	雲母・白色粒	ナデ調整	口縁部が肥厚し、器形は円筒形を呈する。口縁内側に突起を貼付する。	11	撹乱
第104図 図版91 632	火炉	－	底部	－ － 18.6	無文	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母	轆轤痕・ヘラ削り	胴部に丸みを持って立ち上がる器形。底面に糸切り痕を残す。	11	I－9 南側
第104図 図版91 633	七輪	外反口縁	口～胴	24.0 － －	口縁外面に雷文帯を施す。	器色：茶褐色 素地：茶褐色	白色粒・雲母・赤色粒	ナデ調整	口縁部が逆「L」字状を呈する。口唇部は広い。内外面の広い範囲にスス痕が残る。	11	撹乱
第104図 図版91 634	七輪	直口口縁	口～胴	－ － －	無文	器色：橙色 素地：橙色	白色粒・黒色粒・雲母	轆轤痕・ナデ痕	口唇部を平たく成形する。器形は円筒形を呈する。	11	撹乱
第104図 図版91 635	火鉢	内彎口縁	口～胴	34.6 － －	無文	器色：茶褐色 素地：暗褐色	白色粒・雲母	ヘラ削り・ナデ調整	口唇部がわずかに肥厚する。器形は胴部にゆるやかな膨らみを持つ円筒形。	11	撹乱
第104図 図版91 636	浅鉢	－	底部	－ － －	無文	器色：赤褐色 素地：赤褐色	白色粒・雲母・黒色粒・赤色粒	ナデ調整・ヘラ調整	底部外面に砂目が付着している。	19	E－4 5層
第105図 図版92 637	竈	直口口縁	口～底	－ 24.2 －	無文	器色：赤褐色 素地：灰褐色	白色粒・雲母・黒色粒・赤色粒	ナデ調整	形状は楕円形を呈する。外面に漆喰が付着。	11	撹乱
第105図 図版92 638	焜炉？	－	口～底	－ － －	無文	器色：赤褐色 素地：灰褐色	白色粒・雲母・黒色粒・赤色粒	ナデ調整・轆轤痕	形状は楕円形を呈するかと思われる。	11	撹乱
第105図 図版92 639	甕	－	－	－ － 32.6	無文	器色：赤褐色 素地：灰褐色	赤色粒・白色粒・雲母	轆轤痕・ヘラ削り	底部から胴部にかけて斜め方向へストレートに立ち上がる器形。	11	撹乱



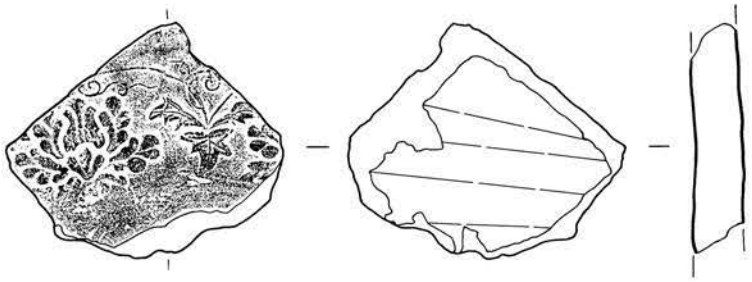
620



621



622



623

第102図　瓦質土器１

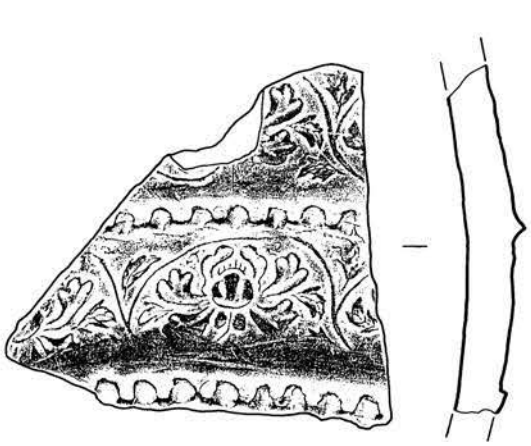
620

621

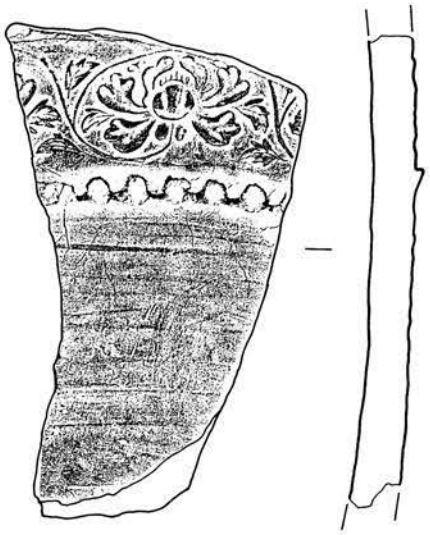
622

623

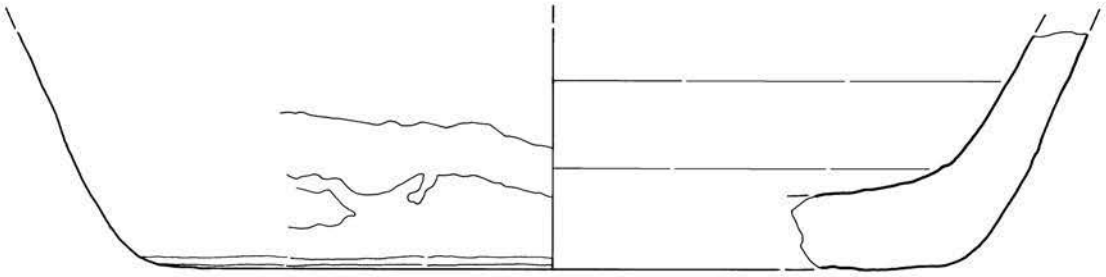
図版89　瓦質土器 1



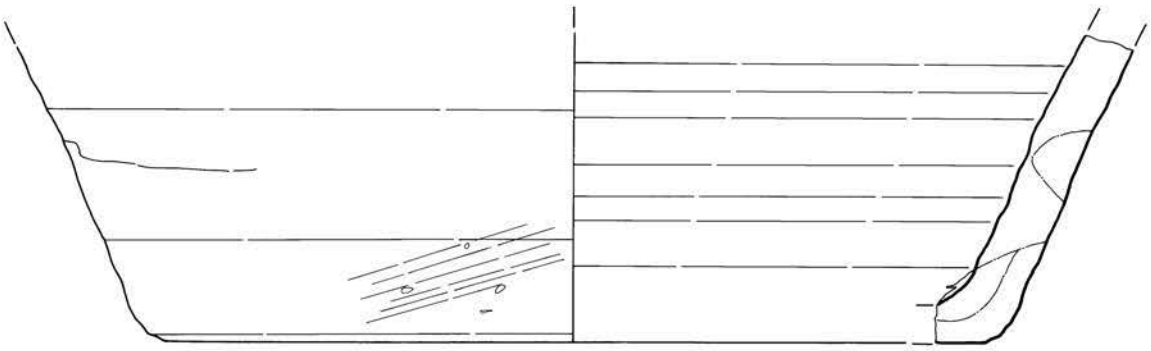
624



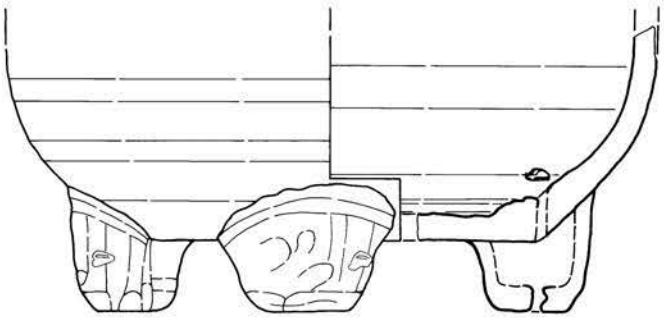
625



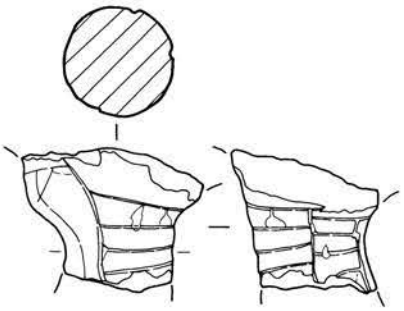
626



627



628



629

0 10cm

0 5cm

第103図　瓦質土器２

624

625

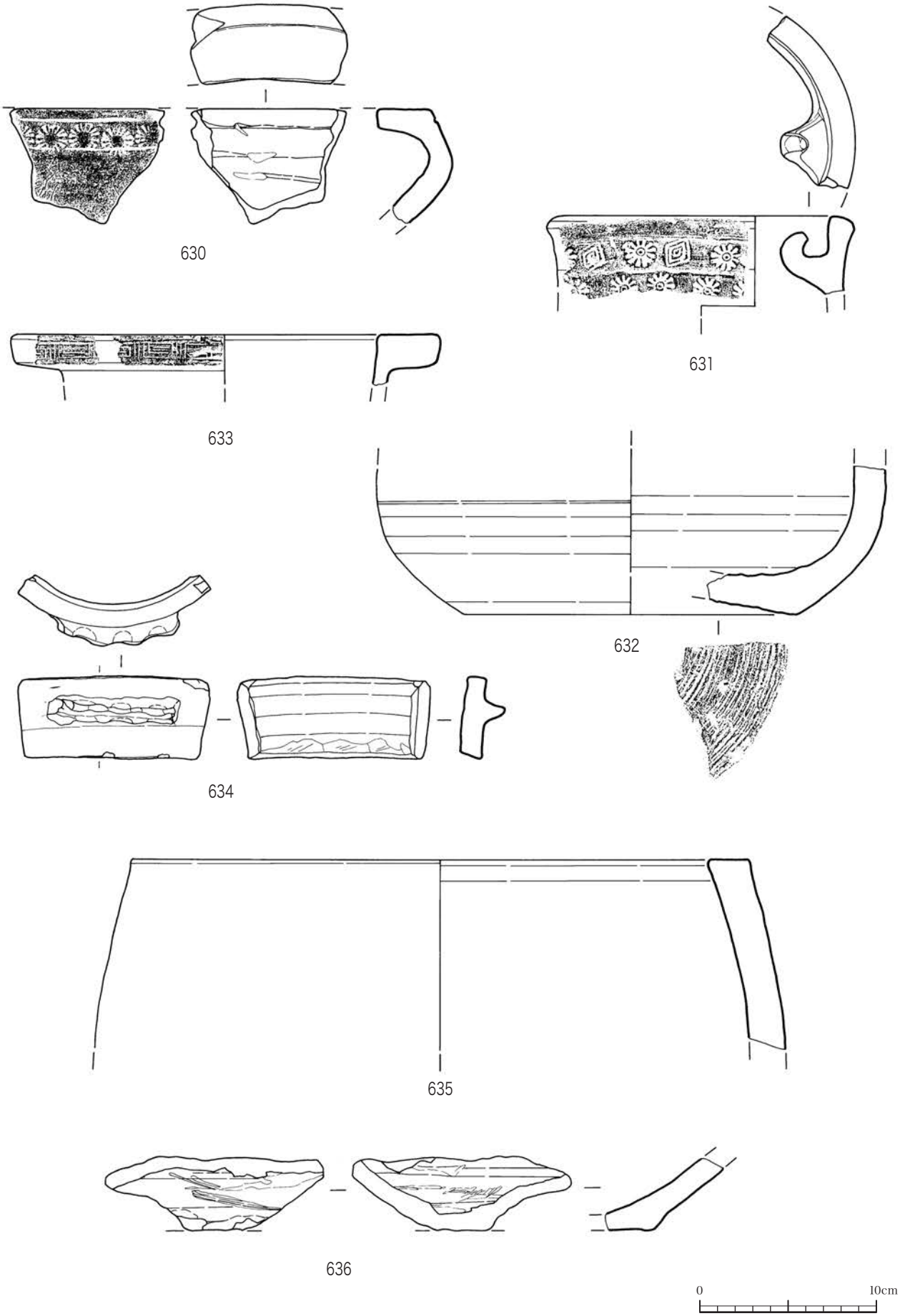
626

627

628

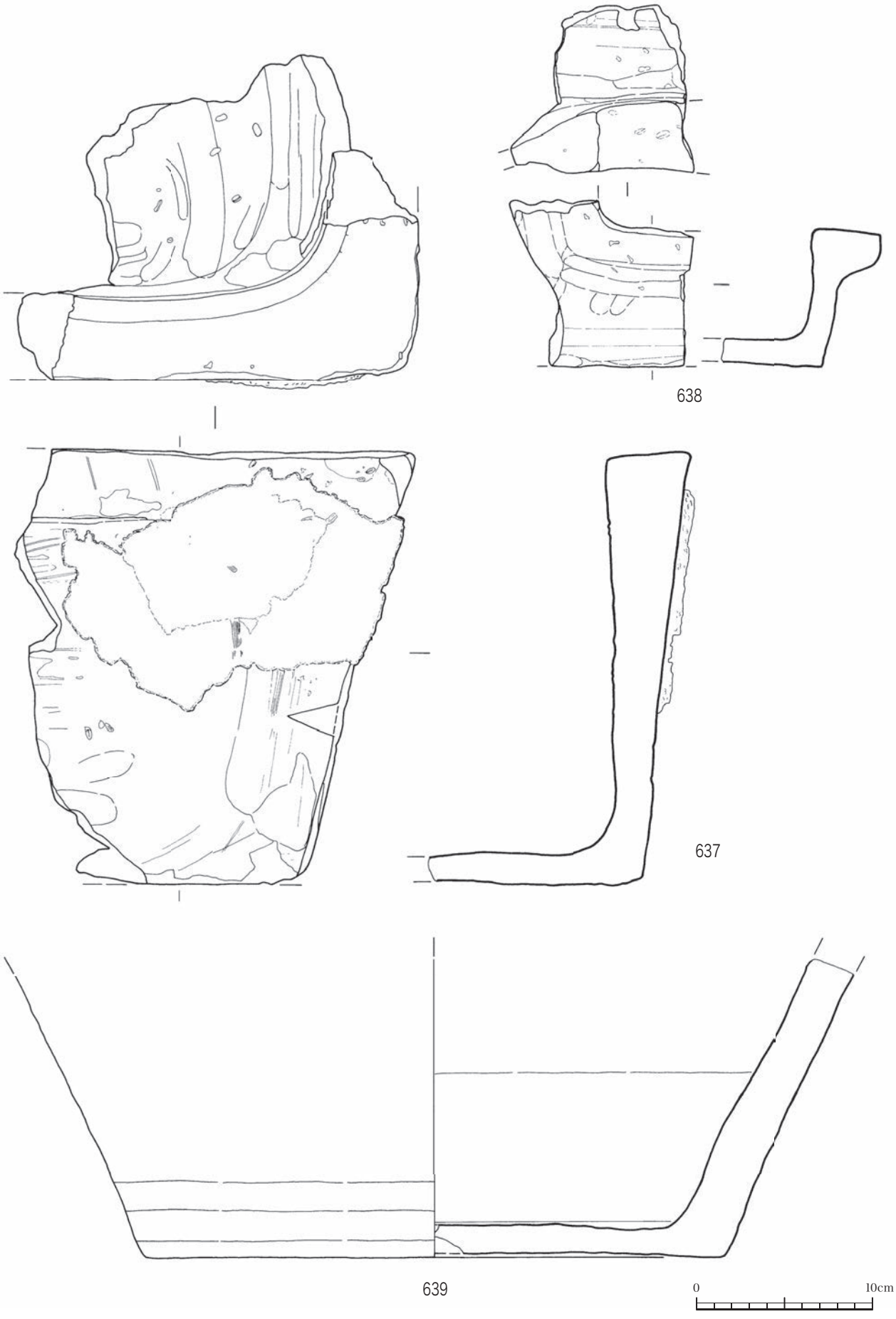
629

図版90　瓦質土器２



第104図　瓦質土器３

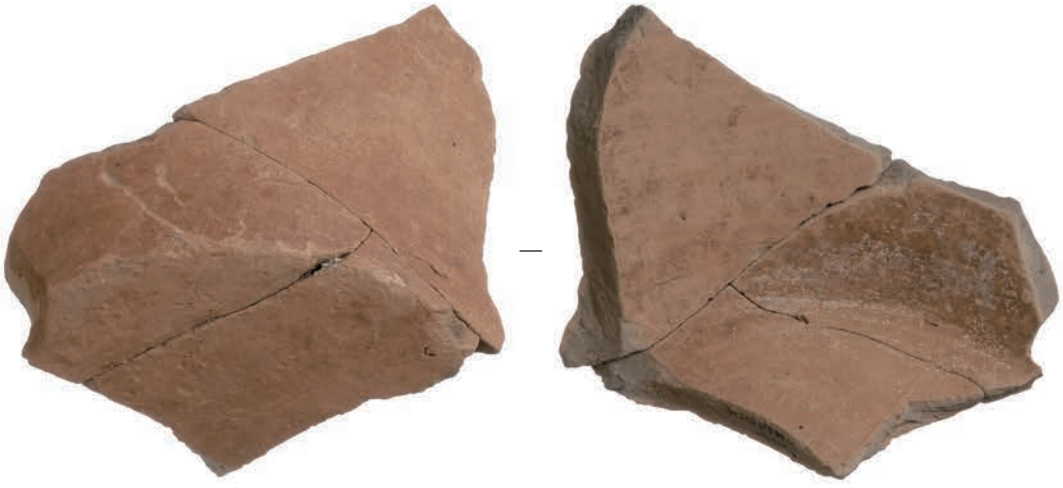
図版91　瓦質土器３



第105図　瓦質土器４

637

638



639

図版92　瓦質土器４

第12節　土器・カムィヤキ（第59～61表、第106・107図、図版93・94）

当地区では全70点の土器と２点のカムィヤキが出土している。そのうちで特徴的な22点を図化した。

第106図640は、当地区で唯一の先史時代の土器である。やや肥厚した口唇部直下に沈線が巡り、その下には横位に列点文がみられる。その下には左上から右下方向へ２条の沈線文が区画される。口唇部の列点文から大山式と考えられるが、列点文下の鋸歯状沈線文は室川式に特徴的である。大山式から室川式への漸移的な段階に位置づけられる資料とみられる。

第106図641～654はグスク土器である。643～645は壺の口縁部で、643は横ミガキや直線的な形状で他の資料とやや趣を異にしている。一部が二次焼成を受け炭化している。644、645はともに雑なナデ調整である。特に644は、今帰仁城Ⅱにみられる壺bと形状的に類似する。641は碗の口縁部で、内外ともにナデ調整されるが外面は雑である。口縁部は平坦に削られ、同じく碗bに比定される。646～653は壺の底部資料である。646、647、649、650は平底、653のみ丸底である。総じて器面調整は雑である。また、654は鍋とみられる資料である。

第107図655～658は、貝殻片が密に混ざることから宮古式と考えられる資料である。655は半割された中皿で、内外面には轆轤痕が残る。656～658は表面が黒色の一群である。658は壺底部、657は壺の胴下半部、656は壺の肩部である。ともに器面は轆轤痕が残るとともに、ナデ・ミガキ調整がなされている。

第107図659、660は厚い器壁や胎土中の大粒な貝殻砕片から八重山土器とみられる資料である。659は壺の口縁部で、八重山式の典型的な資料であるが、残存部位が少ないため中森式とパナリ焼の判別には至らなかった。660は659にも増して厚い器壁からパナリ焼とみられる。内面に欠損しているが蓋置きの突起がみられることから火炉と思われる。外面には型押しにより木葉が施される。

カムィヤキは破片で２点得られた。図化したのは壺の胴部片で、外面は磨かれるも雑で、格子目文の当て具痕が残される。

〈参考文献〉

伊藤慎二 2008.6「琉球縄文土器（前期）」小林達雄（編）『総覧縄文土器』p814-821 アム・プロモーション

金武正紀・宮里末廣・松田朝雄 1991.3『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集　今帰仁村教育委員会

今帰仁村教育委員会（編）2009.11『グスク土器展–県内のグスク時代主要遺跡より–』

第59表　土器・カムィヤキ観察一覧１

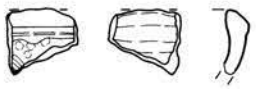
図版番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第106図 図版93 640	先史土器	鉢？	口縁部	－ － －	口唇直下に横位に沈線、さらにその下に横位に列点文がある。口縁部から胴上部には斜方向に数条の沈線文が配置される。	内外ともに赤褐色 素地は粗粒	内外・口唇ともにナデ	口唇は平坦でやや肥厚。胎土中に石灰岩粒をまばらに含む。大山式？	11	J－8 茶褐色灰混層
第106図 図版93 641	グスク土器	碗	口縁部	－ － －	無文	内外橙色 泥質	内外ナデ。ただし外は雑。口縁削り	混和材にやや粒の大きな粘板岩や赤色粒。	19	E－3 5層
第106図 図版93 642	グスク土器	鉢	口縁部	－ － －	無文	内外：橙色 泥質	内外口ともに横ミガキ	平口縁で胴も直線的。胎土中には石灰岩・石英粒が含有。二次焼成を受けて炭化している。	11	撹乱
第106図 図版93 643	グスク土器	壺	口縁部	－ － －	無文	内外とも橙色 泥質	内外ナデ、外には縦横にハケ目残る	混和材に粒の大きい石灰岩。頸部が外反し、内外とも丁寧なナデ調整。	19	D－3 5層
第106図 図版93 644	グスク土器	壺	口縁部	8.8 － －	無文	内外：黄橙色 泥質	内外雑ナデ 指頭圧痕残 外頸部のみ横ミガキ	混和材に千枚岩・石灰岩・砂岩片（名護層近辺の胎土か？）直口縁で短頸、ナデ調整雑。	19	E－4 5層
第106図 図版93 645	グスク土器	壺	口縁部	14.4 － －	無文	外：橙色 内：褐灰色 泥質	外：ナデ 内：雑ナデ 口唇の外反は手づくね	断面サンドウィッチ構造で、混和材には赤色・黒色粒・石英。内外とも轆轤痕残る。口唇の指頭圧痕は横位に連続して残り、手づくねで成形されたことがわかる。	11	J－9 遺構上西
第106図 図版93 646	グスク土器	平底壺	底部	－ － 12.6	無文	内外：橙色 泥質	内：横ミガキ 外：斜ミガキ 底：粗削り	混和材に粘板岩・マンガン・石灰岩粒。焼成良好。	19	E－5 7層

第60表　土器・カムィヤキ観察一覧２

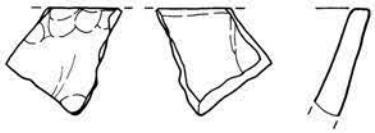
図版番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第106図 図版93 647	グスク土器	平底壺	底部	－ － －	無文	外:鈍橙色 中:黒色 内:橙色 泥質	内外：ナデ 外面にハケ目残る。	混和材に石灰岩・マンガン小塊・粘板岩粒。内面・底部に轆轤痕。一部が二次焼成を受けて表面炭化。	11	撹乱
第106図 図版93 648	グスク土器	壺	底部	－ － 15.8	無文	外:赤色 内:鈍黄橙色 泥質	外：雑ナデでハケ目残る。 内：雑ナデで指頭圧痕残る。	混和材にチャート、石英、砂岩、マンガン粒。底部に凹みが２条。外は平底だが内は丸底。	19	撹乱
第106図 図版93 649	グスク土器	平底壺	底部	－ － －	無文	外:褐灰色 内:鈍黄褐色 泥質	外：荒れ肌 内：雑ナデ 指頭圧痕と縦方向のハケ目残る。 底：削り	混和材に石英・千枚岩粒多量。外面は荒れ肌だが焼成良好で硬質。	19	E－5 7層
第106図 図版93 650	グスク土器	平底壺	底部	－ － 15.6	無文	内外:橙色 泥質	内外：雑ナデ、ハケ目残る。	混和材に千枚岩・マンガン粒。外面にはスス付着。	11	撹乱
第106図 図版93 651	グスク土器	壺	底部	－ － －	無文	内外:鈍黄橙色 泥質	内外：雑ナデ、指頭圧痕・横位に擦痕残る。 底：粗削り	混和材にマンガン大粒・小粒のチャート?。内外とも、器面ナデ調整後に擦痕が付く。	19	D－4 5層
第106図 図版93 652	グスク土器	壺？	底部	－ － 23.4	無文	内外:明黄褐色 泥質	内外：雑ナデでハケ目・指頭圧痕残る。	混和材に千枚岩・石灰岩・マンガン粒・石英。内面底面と胴下部にスス付着。	19	E－5 7層
第106図 図版93 653	グスク土器	丸底壺	底部	－ － －	無文	内外:鈍褐色 泥質	外：横ヘラミガキ 内：ナデ 底：雑ヘラミガキ、指頭圧痕・条線残る。	混和材に石灰岩・石英・マンガン小塊。外面にスス付着。	19	C－3 野面石積み南側 栗石

第61表　土器・カムィヤキ観察一覧３

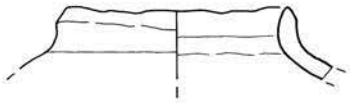
図版番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項				調査年度(平成)	グリッド層
					文様構成	器色・素地	調整法	所見		
第107図 図版94 654	グスク土器	鍋	底部	－ － －	無文	内外：橙色 中：鈍黄橙色 泥質	内外：雑ナデ、指頭圧痕・ハケ目残る。	混和材に石灰岩・チャート大粒。混和材の抜け穴無数。焼成悪く器面は吹粉。	19	撹乱
第107図 図版94 655	宮古式	中皿	口縁部～底部	20.0 2.3 17.8	無文	内外とも橙色 土師質	内外ナデ。口縁は削り。底部外に指頭圧痕、内にはハケ目残る。	混和材に貝殻片が密。内外に轆轤痕。	11	撹乱
第107図 図版94 656	宮古式	壺	肩部	－ － －	無文	外：黒褐色 中：鈍黄褐色 内：橙色 砂質	内外ともナデ・ミガキ。	混和材に石灰岩密で僅かにマンガン塊。内面に轆轤痕	11	I－6 基壇東
第107図 図版94 657	宮古式	壺	胴下半部	－ － －	無文	外：黒褐色 内：鈍黄褐色 砂質	内外ナデ、外はミガキも。	混和材に石灰岩密で僅かにマンガン塊。外に轆轤痕。	19	A－1 石積み6 西側上層
第107図 図版94 658	宮古式	壺	底部	－ － －	無文	外：黒色 中：鈍黄色 内：橙色 砂質	内外：ナデミガキ。	混和材に石灰岩粒密。マンガン小塊まばら。内面に轆轤痕。	19	A－1 石積み6 西側上層
第107図 図版94 659	八重山式	壺	口縁部	14.2 － －	無文	内外とも明赤褐色 土師質	雑横ミガキ、ハケ目残る。	器壁が厚く、胎土中には粗く砕かれた貝殻片が密に含まれる。口縁は外反。	19	撹乱
第107図 図版94 660	パナリ焼	火鉢（火炉）	胴上部	－ － －	無文	内外：赤褐色 中：鈍赤褐色 砂質	内外：ナデ	混和材に貝殻片・頁岩片？。外面には型押しで木葉を施す。焼成良好。	11	撹乱
第107図 図版94 661	カムィヤキ	壺	胴部	－ － －	叩き・当て具痕	内外：褐灰色 須恵質	外：雑ミガキでハケ目残る。 内：雑ナデで指頭圧痕残る。	混和材に石灰岩・黒色粒（頁岩？）。外面のミガキは雑で、格子目状の当て具痕が残る。	19	E－4 5層

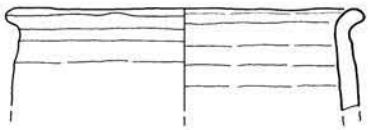

640

641


642

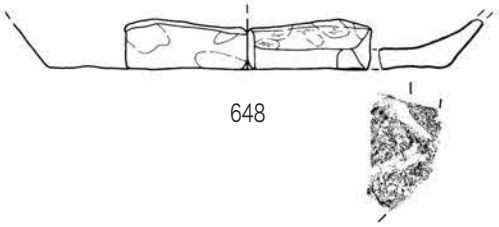
643


644

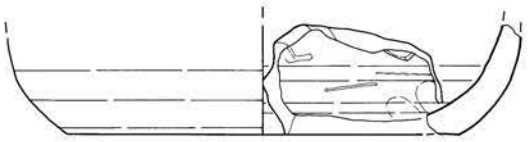

645

646

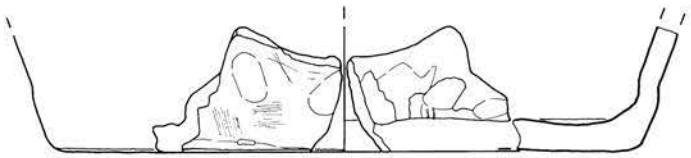
647


648

649


650

651


652

653

第106図　土器１

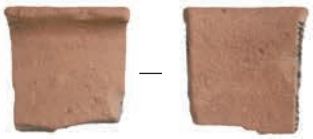
640

641

642

643

644



645

646

647

648

649

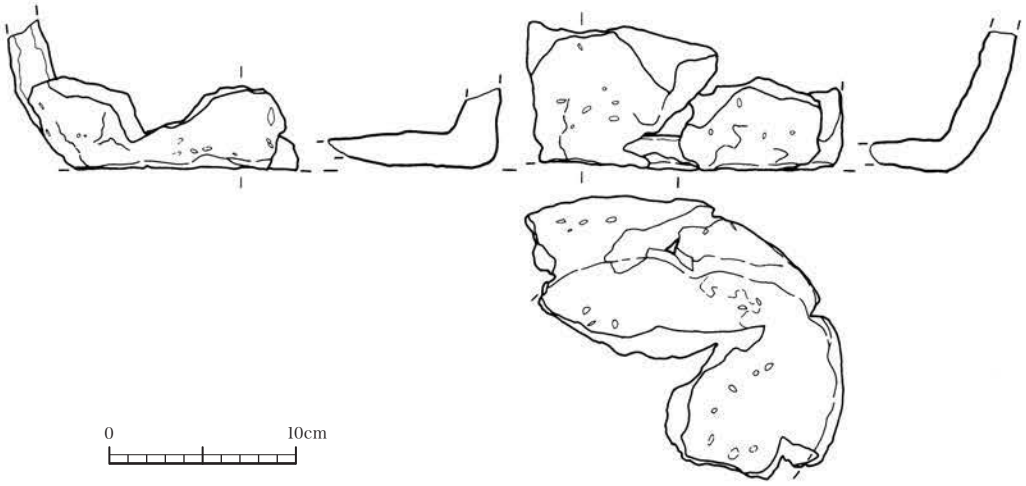
650

651

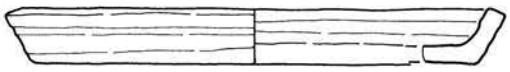
652

653

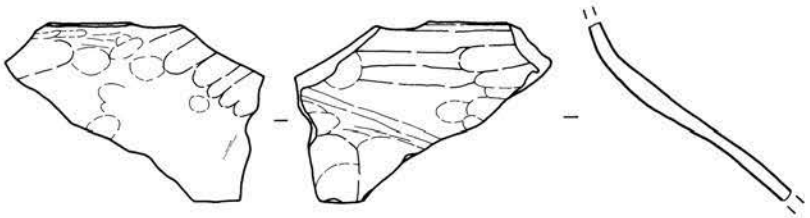
図版93　土器 1



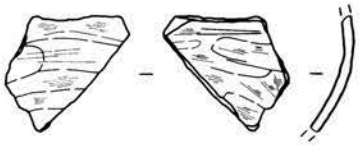
654



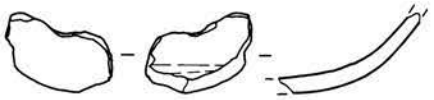
655



656

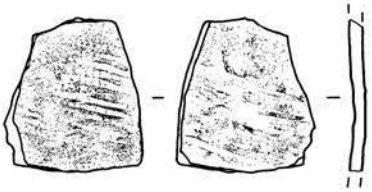


657

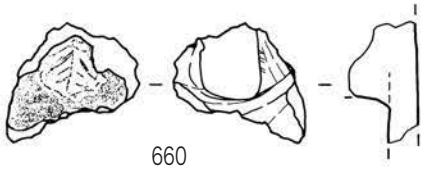


658

659



661



660

第107図　土器２・カムィヤキ

654

655

656

657

658

659

660

661

図版94　土器２・カムィヤキ

第13節　土製品・坩堝（第62表、第108図、図版95）

土製品は16点が得られており、人形４点、羽口１点、ミニチュア製品１点を図化した。

第108図663～666は土人形である。666は太夫をモチーフとした人形である。前後で型合わせがされており、側面中央部に接合部のバリを削り取った痕が残る。また下部には穿孔がみられ、成形時の支えと考えられる。太夫人形は、本土では裃雛などとともに18世紀頃からみられるようになる節句関連の人形と考えられている（安芸2000）。

第108図664は翁像の頭部で、髷や残る衣服の特徴から唐の老人をモチーフとしたと思われる。下面に孔がみられるが、これは胴部との接合部と思われる。前後で型合わせがされており、下面には接合部が顕著に残される。

第108図665はモチーフが判然としないが、衣服から唐人像と思われる。頭部と右手をはめ込む凹みの奥には錆が付着しており、接合に鉄芯が用いられることがわかる。また内部にはヘラ調整の痕が顕著に残る。接合部がみられないため、一枚型から型抜きされたとみられる。

第108図663は中空の人形で、型合わせで製作される。接合部で半割された状態で、ほぼ表面のみが残る状態である。底面には削り痕も残る。モチーフは不明だが、服装は琉球・日本人とは異なる。

第108図667は鞴の羽口で、内面のみが被熱によって炭化している。片側のみ端部が残り、製作時における切り取り痕が残る。

ミニチュア製品は１点得られている。第108図662は釜蓋のミニチュアで、型押しで製作されるが、バリが残るほか歪みも激しい。合い口は貼付けされている。江戸遺跡ではこのような生活雑具のミニチュア品は飯事遊びの遊具とされている（江戸遺跡研究会（編）2001）。

坩堝は口縁部片１点を図化した（第108図668）。表面はカラミが付着するほか、激しい被熱により脆くなっている。鞴の羽口も出土していることからも、金属鋳溶の存在が考えられる。

今次調査において特筆されるのは、太夫人形やミニチュア製品といった江戸遺跡において散見される土製品の出土である。沖縄における人形は、婦人・女児・漁民・僧侶・武人などが挙げられるが（上原2004）、比較的唐人をモチーフとされるものが多い。当地区出土資料もその例に漏れないが、第108図666の太夫像は例外として注目される。これらがいかなる経緯をもって御内原に至ったか、またその性格が江戸遺跡と同様に民間信仰や遊具に関するものと位置づけられるのか現時点では判然としない。

〈参考文献〉

安芸毬子 2000.６「出土した人形と玩具」西秋良宏編『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学コレクションX p102−116　東京大学総合研究博物館

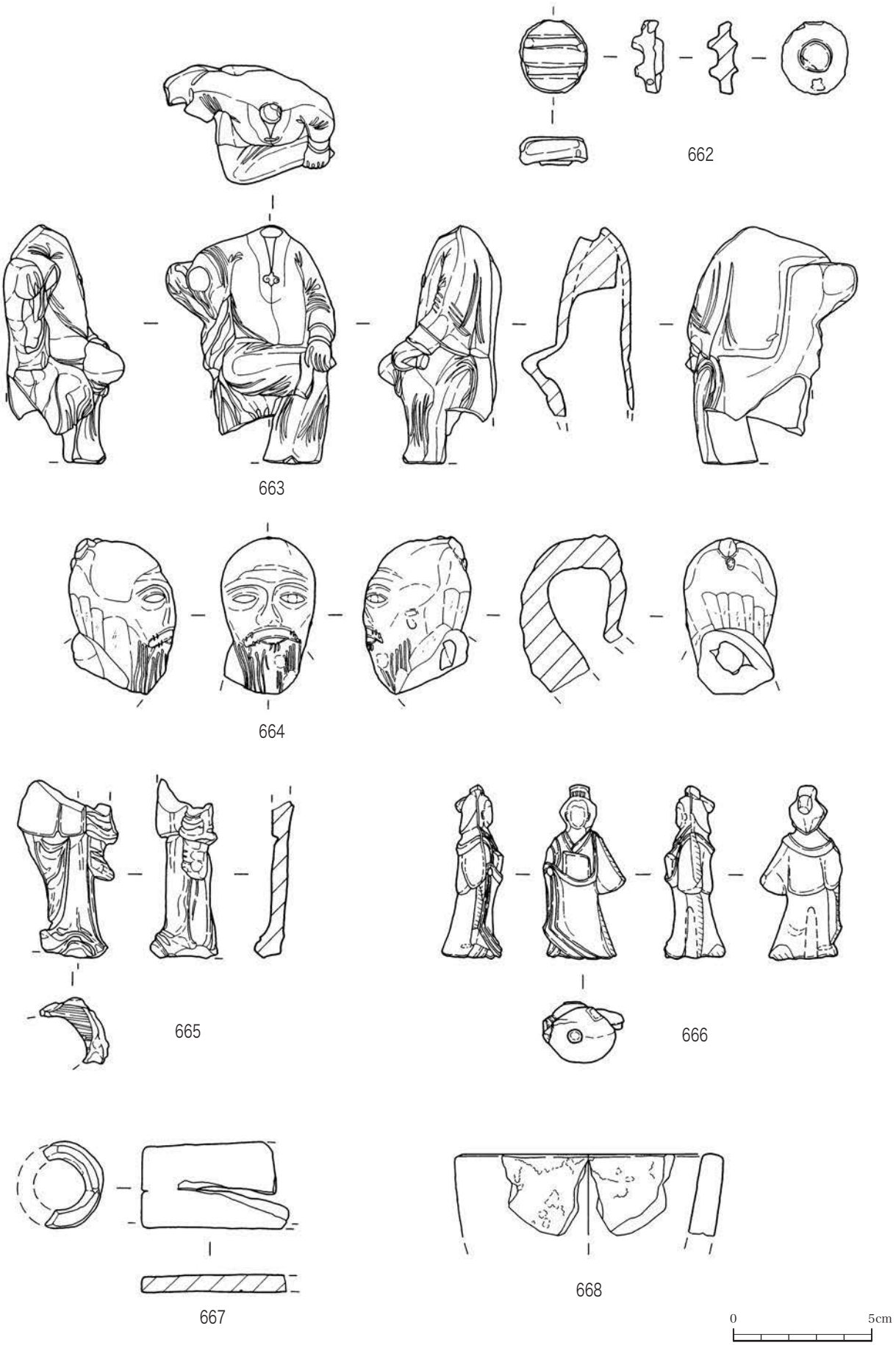
上原静 2004.３「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』p371−400 今帰仁村教育委員会

江戸遺跡研究会（編）2001.４『図説江戸考古学研究事典』柏書房

第62表　土製品・坩堝観察一覧

（　）は破損

図 図版 番号	名　称	器色・胎土	製作方法	法量（㎜・g）		観　察　事　項	調査 年度 （平成）	グリッド 層
				縦 横 高〔厚〕	重量			
第108図 図版95 662	ミニチュア 製品	橙色 土師質	型押し・貼付	26.0 24.0 11.0	5.0	釜蓋のミニチュア製品。バリが残り歪みも激しい。合い口は貼付。	11	I－8 20 ～ 30 茶褐色灰混層
第108図 図版95 663	土人形	黒灰色で硬質 泥質	一枚型で型抜き？	85.0 60.5 －	58.1	唐人人形？頭部と右手部に芯の錆が付着。内部にはナデ調整の痕が顕著に残る。型合わせの接合部がみられない。脚を組んで腰掛ける人物だが、具体的なモチーフは判別不能。	11	I－9瓦溜まり ＋撹乱
第108図 図版95 664	土人形	黄褐色で粗粒の胎土 土師質	前後型合わせ	(56.0) (38.5) －	51.2	唐人人形の頭部。下面に芯孔がみられる。下面には接合部が顕著に残る。	11	撹乱
第108図 図版95 665	土人形	黄灰色 陶質	前後型合わせ	(64.0) 35.5 －	14.4	モチーフ不明。側面の型合わせ、底面には削り痕が残る。	11	J－8 茶褐色灰混層
第108図 図版95 666	土人形	褐色の軟質 土師質	前後型合わせ	62.0 29.0 21.0	19.7	太夫人形。バリを削り取った痕や棒の差し込み孔など、製作時の痕跡を多く残す。	11	撹乱
第108図 図版95 667	羽　口	鈍橙色で赤色粒まばら 泥質	粘土帯の張り合わせ	(53.0) 28.0 5.4	19.2	鞴の羽口と思われる資料で、内面のみ二次焼成を受けて激しく炭化する。片側は端部も残り、面には切り取り痕が残る。	11	J－8 茶褐色灰混層
第108図 図版95 668	坩　堝	被熱により 黒色化する。	不明	口径： 95.0	10.6	口縁部。表面はカラミが付着するほか、激しい被熱によって脆くなっている。	19	撹乱



第108図　土製品・坩堝

662

663

664

665

666

667

668

図版95　土製品・坩堝

第14節　金属製品（第63～69表、第109～115図、図版96～99）

金属製品は1,104点が出土している。これらは鉄製と銅製とに大別でき、鉄製の比率が高い。中でも鉄釘の量は膨大で、調査中も常に出土する遺物のひとつであった。その他目立つ遺物としては、武具類があげられ、鎧の古札や兜の前立て鍬形が得られている。次に、種別ごとに解説を行い、遺物ごとの特徴は観察表にて行う。

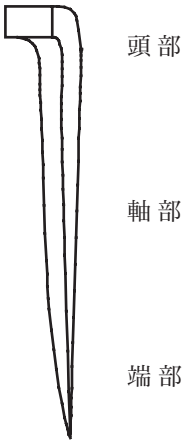
1. 釘 類（669～685）

平成19年度調査においては、特に第３層の火災面、石積み1の周辺裏込め、シーリ遺構内からも多量に得られており、これらは火災で焼け落ちた建造物に使用されていたことが想定できる。この釘は大小様々なサイズが見られ、それは建築材の大きさや、部位・用途により、使い分けがされていたことが考えられる。この観点から集計を行った（CD-ROM参照）。

その結果、破片を含む総点数は2,203点であった。その中で個体数は、完形資料合計と、破片資料の頭部か端部の多い方の数量を合算したところ、870点となった。この内、完形資料では、長さを６段階に分けて集計を行い、Ⅱ（674）の４～7㎝が144点と最も多く、続いてⅠ（675・676）の４㎝以内が82点、次にⅢ（672）の７～10㎝が60点、Ⅳの10～15㎝が41点、Ⅴ（670）の15～20㎝が16点と続き、Ⅵ（669）の20㎝以上は６点得られている。この結果から、分類Ⅰ～Ⅳまでの小型～中型に位置するサイズの釘が多く出土している傾向が読める。

次に遺構・層別で見ると、シーリ遺構では小規模な遺構ながらも総数336点、個体数だと106点が得られており、その中でも木炭層から多量に出土している。また、３層表面（礎石建物跡）や基壇状遺構の被熱面からも、総数で120点、個体数で51点が得られ比較的多い。その他第５層や黄褐色土、石積み２周辺の裏込め内からも多く出土している。これらの平成19年度調査分撹乱以外の遺構・層序から得られた釘のサイズは、Ⅱの４～7㎝が83点と最も多く、続いてⅠの４㎝以内が51点、次にⅢの７～10㎝が19点、Ⅳの10～15㎝が８点、Ⅴ及びⅥの15㎝以上のサイズは得られていない。この結果は、全体の集計結果と調和的であるが、Ⅳの15㎝以下でまとまることから、より小型の釘が遺構や層に伴って出土している傾向にあると言える。

今次調査では、平成11及び19年度に調査を実施し、平成11年度では主に近世からそれ以降の段階と思われる遺物が得られ、平成19年度調査においては、一部で近世段階の遺構・遺物が含まれるものの、主体となるのは14世紀後半から15世紀前半及び、16世紀の遺物を含む遺構や堆積層であった。この観点から年度別に集計すると、平成19年度調査分では、Ⅰ～Ⅲの10㎝以内が占め、中でもⅡの４～7㎝が多く出土している。平成11年度調査分においては、Ⅱ～Ⅴまでの釘が占めているが、Ⅴの15㎝以上の資料も21点含まれており、大型の釘が多い傾向にある。このことから、15㎝以上の大型の釘は、撹乱を含む近世以降に多用されていた可能性があり、対して10㎝以下の中型・小型の釘は、



第109図　釘の部位名称

中世段階に多く利用していたことが考えられる。この鉄釘のほか、鉄製鋲や銅製の釘及び鋲、鎹が得られているが、出土量は多くない。

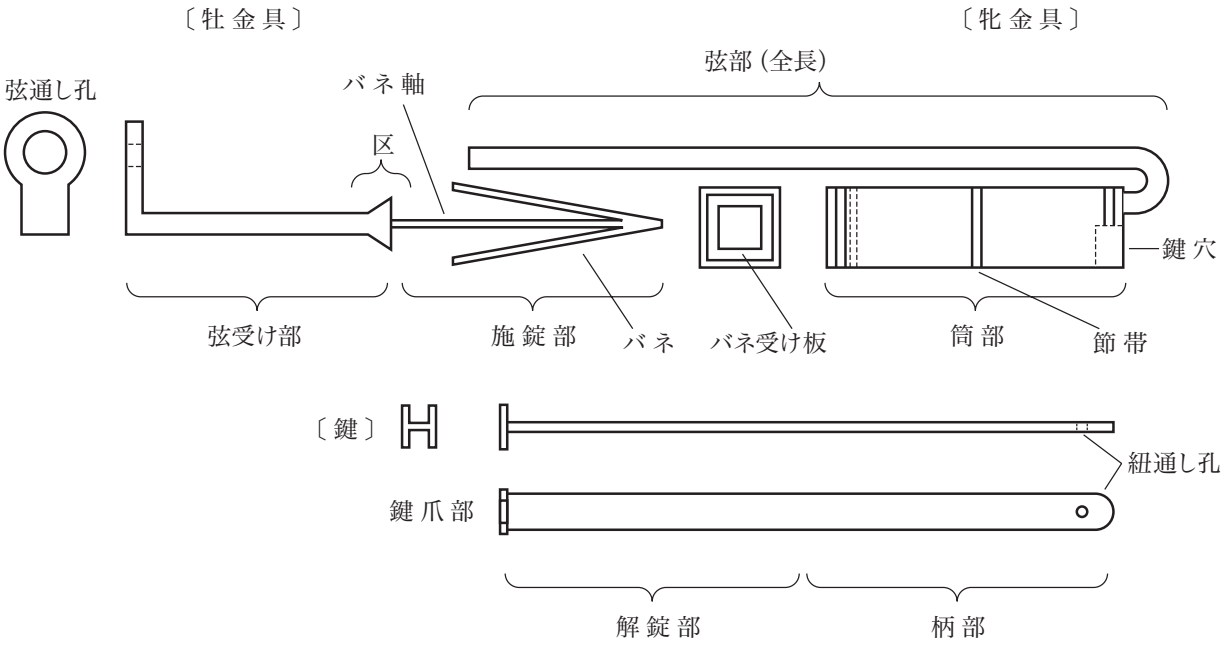
2. 飾り金具・道具・工具類 (686～699、730～735)

飾り金具は、釘隠しのほか、家具・調度品に用いたと考えられる覆輪等の製品、鐶座金具等が得られている。これらの中には、武具に関する部品も含まれていると思われるが、ここではこれらを含む用途不明の飾り金具も報告の対照とした。

3. 錠前・鍵 (700～705)

金属製品の中でも特異な遺物として、錠前の部品及びその鍵が断片的に得られている。これらは機械部品に似た形状から、当初は現代遺物に仕分ける予定であったが、第113図700の鍵が出土したことにより、関連する部品が含まれている可能性が高まり、この観点で遺物の抜き出しを行い、数点を抽出することができた。断片的な資料であることから詳細は不明であるが、第110図のような構造で、複数のバネにより施錠するタイプの錠前が存在していたことがわかる。また、鍵の先端にあたる鍵爪部の形状は、「H」字状を呈すことから、2段のバネ軸を解錠する機能が考えられ、扉等を厳重に施錠する目的が考えられる。なお、鍵は今帰仁城跡でも出土例があり、鍵爪部の形状は「コ」字状である（今帰仁村教育委員会1991）

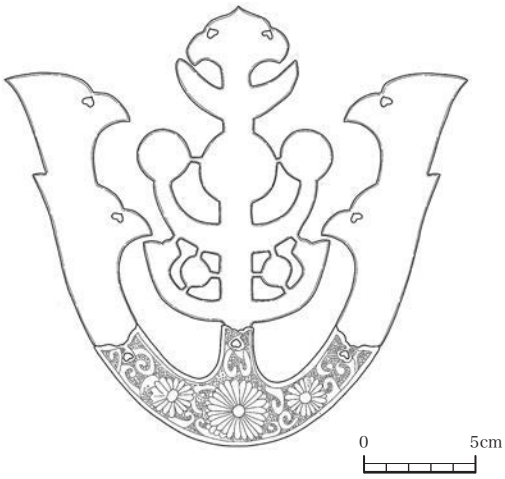
その用途及び使用箇所について、出土した地区に近接して淑順門が存在しており、その門扉を施錠していたことが推察できる。淑順門は、御内原と表とを仕切る門のひとつで、常に門番が配置され、出入りを厳重に取り締まっていたとされる。しかし、錠前に関連する記録が見あたらないため、門を施錠していたかは判然としない。



第110図　錠前・鍵の部位名称（合田1998をもとに作成）

4. 武器・武具類 (706～729)

その他、比較的多く得られた金属製品として、武具類があげられる。この中でも特に銅板を加工した兜の前立て鍬形が目立つ（706～712）。立物の左右を構成する鍬形の形状は、銀杏葉形の意匠を２段用い、この２段の１箇所ずつに猪目透かしが入る。下部の鍬形台に差し込むソケット部はわずかに幅を狭く成形する。また、円形の立物中央飾りと思われる製品も数点出土している。これらの鍬形は、類似する製品が京の内跡でも数多く出土しており、図上復元がされている（第111図）。小札類も多量に得られ、これらは14世紀後半から15世紀前半の陶磁器に伴って出土しており当時の時代背景を考える上で興味深い。



第111図　兜の立物復元図（金城ほか2009）

なお、覆輪や切子頭についても鎧の部品の可能性があるが、今回は飾り金具として扱った。また、その他の製品についても武具か否かの検討を要するものが含まれるが、今回は判明する範囲で報告を行った。

5. 装身具 (736～741)

装身具と思われる遺物は、簪や指輪が中心となっており、いずれも近世以降の層及び撹乱層からの出土である。中でも第115図738に示した指輪と思われる製品は、銅線をコイル状に巻き付け、重ねることで装飾としており、手が込んだつくりになっている。本資料は17世紀前半とするシーリ遺構からの出土であり、上限の年代が明確な資料として貴重である。

6. その他の金属製品 (図版 742～745)

石積み1・2間栗石内を中心として、銅板をタガネあるいはハサミにより切断したような破片が多数出土している。これらは形状が不定形で、切断面を調整した痕跡も確認できないことから、何らかの製品を加工した際に生じた破片か未成品と考えることができる。その中には、同栗石内より出土している兜の前立て鍬形に近似する形状の資料も見られ、その未成品の可能性も考えられるが、詳細は不明である。

〈参考・引用文献〉

合田芳正 1998『古代の鍵』考古学ライブラリー66　ニューサイエンス社

金城亀信ほか（編）2009『首里城跡 –京の内跡発掘調査報告書Ⅱ–』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集　沖縄県立埋蔵文化財センター

金武正紀ほか（編）1991『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集　今帰仁村教育委員会

第63表　金属製品観察一覧１

（　）は破損

図 図版 番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査年度（平成）	グリッド 層
			頭部径	頭部厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第112図 図版96 669	釘 Ⅵ	鉄製	1.84	1.41	20.9	1.06	1.15 0.71	98.9	約6寸。頭部に打痕が見られる。先端部分は楔形になる。	11	撹乱
第112図 図版96 670	釘 Ⅴ	鉄製	1.72	1.24	17.8	1.39	1.08 0.46	94.8	5寸。頭部の角に変形が見られる。先端部分は楔形になる。	11	撹乱
第112図 図版96 671	釘 Ⅳ	鉄製	1.77	1.14	(11.16)	1.28	1.24 0.77	45.7	全体的に錆化が著しく、錆瘤、錆脹れが全体に見られる。残存部分からの推定で3寸前後。頭部上面は方形。	19	B－3 裏込内
第112図 図版96 672	釘 Ⅲ	鉄製	1.16	0.48	(8.0)	0.84	0.6 0.5	11.1	頭部以下は錆化が著しく、錆瘤が見られる。残存部分から2寸半前後。頭部上面は丸みのある方形。	19	B－4 黄褐色土
第112図 図版96 673	釘 Ⅱ	鉄製	0.91	0.52	4.75	0.71	0.55 0.33	4.5	約1寸半。全体的に錆瘤、錆脹れが見られる。頭部上面は丸みのある方形。先端部は楔形。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第112図 図版96 674	釘 Ⅱ	鉄製	0.77	0.35	5.3	0.5	0.47 0.35	4.0	2寸前後。胴部分から先端部分は錆化が著しい。先端部分も錆化が著しいが楔形と思われる。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第112図 図版96 675	釘 Ⅰ	鉄製	0.89	0.38	(3.6)	0.63	0.53 0.35	2.8	全体的に錆化が著しく、錆脹れが見える。頭部上面は錆化が著しい。先端部分は欠損。	19	B－3 裏込内
第112図 図版96 676	釘 Ⅰ	鉄製	0.6	0.16	3.6	0.32	0.37 0.18	1.5	約1寸。錆化が著しく、錆瘤も見える。頭部上面は丸みのある方形。先端部は錆化が著しいが楔形と思われる。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第112図 図版96 677	鋲	鉄製	1.32	2.7	2.5	0.56	0.34 0.26	2.6	頭部は笠状。錆化が著しく、全体に錆瘤が見られる。先端部は楔形と思われる。断面は方形。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第112図 図版96 678	角釘	銅製	1.51	0.86	(3.9)	1.01	1.05	30.8	胴部から先端部分は欠損しており、一方向から鏨で切れ目を入れ、切断したと思われる跡が見られる。	19	C－5 3層表面
第112図 図版96 679	角釘	銅製	－	－	(6.93)	0.65	0.61 0.34	11.4	所々に錆瘤が見られるが状態は良好。頭部は欠損。	19	B－5 3層表面
第112図 図版96 680	釘	銅製	0.67	－	5.8	0.45	0.42 0.35	7.9	約2寸。頭部は鍛造時に鎚で敲いて成形した稜が見られる。先端部分で四角錘形になる。	11	撹乱
第112図 図版96 681	鋲	銅製	0.44	0.08	2.75	0.26	0.28 0.13	0.6	約1寸。断面は円形に近い方形。胴部に鍛造と思われる稜が見える。先端部は楔形。	11	撹乱
第112図 図版96 682	笠釘	銅製	1.81	0.41	7.2	0.7	0.68 0.43	18.6	約2寸半。錆化が進む。頭部は笠状。笠状の上面と側面、胴部に鍛造の稜が見える。断面は円形に近い多角形。	11	撹乱
第112図 図版96 683	笠釘	銅製	1.57	0.24	6.9	0.68	0.61 0.35	13.7	約2寸。頭部は笠状。胴部と頭部の接続部は中央よりずれる。頭部付近の断面は円形に近い多角形が先端部付近になると方形になる。先端部は楔状になっている。	11	撹乱
第112図 図版96 684	鋲	銅製	0.84	0.19	2.4 Ø= 0.95	0.3	0.31 0.15 0.06	2.1	頭部上面と座金の上面に金鍍金が残る。胴部から先端部に鋳造時の稜が見られる。	11	撹乱

第64表　金属製品観察一覧２

（　）は破損

図 図版 番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査年度（平成）	グリッド 層
			頭部径	頭部厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第112図 図版96 685	鏃	銅製	2.93	0.43	1.24	4.3	0.24 0.1	3.1	約1寸。断面は長方形。両端が曲げられ先端にいくにつれて薄くなる。両端とも外側に開いているが、先端部は片方が外側に開き、片方は内側に曲がる。	11	撹乱
第113図 図版97 686	鐶座	銅製	－	－	2.59	3.12	0.55	13.5	鍛造。鐶が付属する鐶座。座は、平面観菱形を呈す。微かに裏面方向に湾曲が見られる。座をとめる割鋲は一本の銅を扁平し、半分に折り曲げている。針は二手に分れ、片方は欠損しており、もう片方は外方向に直角に曲がる。割鋲の折曲げ部分は輪をつくり、鐶を通している。鐶は接続部分の間に玉を挟みこみ輪の中に通している。玉と環の接続部付近は細くなり、次第に太さが増していく。	19	撹乱
第113図 図版97 687	鋲	銅製	－	－	3.49	1.55	0.28	3.4	鍛造。平面観は菱形の笠を持つ。線刻が施され、側面は内側に曲がっている。裏側は青錆に砂が付着しているが、中央に鋲がつくのが観察できる。頭部との接続部分付近の胴部は捻じれており、先端にいくにつれ扁平になる。	19	B－3 裏込内 （石積み２北側）
第113図 図版97 688	鐶座	銅製	－	－	2.3 Ø= 1.21	2.3 Ø= 1.15	0.04 0.15	1.7	鍛造。鐶が付属する鐶座。平面観は五枚の葉、もしくは五弁花か。座の中心部から少しずれて穴が開いている。葉は一枚ずつ膨らみを持つ。割鋲は一本の銅を薄く敲き扁平にして半分に折り曲げ、折り返した部分に輪を作り、環を通している。環の断面は楕円形に近い多角形。	11	撹乱
第113図 図版97 689	飾り金具	銅製	0.72	0.67	1.9	0.25	0.11	20.0	切子頭。熱による変形が見られる。釘部分は頭部に差込み、外側から溶接してると思われる。錆化が進んでる為、釘に座金が付着している。	19	B－3 裏込内
第113図 図版97 690	切子頭	銅製	1.9	1.6	2.1	3.1	0.44	30.0	総角付の鐶に付く切子頭。立方体の角を面取りしている。横位に鐶座が入る孔を有し、下面には鋲の基部が残る鋲は２枚の板を重ね、薄い銅板を挟んで切子頭に貫通する。	19	C－5 方形礎石 抜穴内
第113図 図版97 691	切子頭	銅製	2.0	1.52	2.15	－	－	29.4	総角付の鐶に付く切子頭。立方体の角を面取りしている。横位に鐶座が入る孔を有し、下面には鋲の孔が残る。	19	撹乱
第113図 図版97 692	輪金具	銅製	－	－	3.58	3.3	0.3 0.6	10.7	切口は角がとれ、丸みがある。摩擦によるものか、全体に鍛造時についたと思われる稜が残る。切口付近は細く、中央部は太くなる。断面は細い部分が円形に近い多角形。太い箇所は多角形の楕円になる。鐶座に付属する鐶と思われる。	11	撹乱
第113図 図版97 693	止め金具	鉄製	－	－	(3.35)	1.68	0.45	7.5	全体的に錆化が進行し、錆瘤、錆脹れが見られる。環座が付属する環台か？	19	C－5 方形礎石 抜穴内

第65表　金属製品観察一覧３

（　）は破損

図版番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査年度（平成）	グリッド層
			頭部径	頭部厚	縦長縦径	横長横径	厚さ	重量			
第113図 図版97 694	鉄製品	鉄製	－	－	Ø= 2.45 Ø= 1.51	Ø= 2.38 Ø= 3.08	0.59 0.46	8.3	全体的に錆化が著しく、環とフック?が錆で付着している。	19	B−3 裏込内
第113図 図版97 695	覆輪	銅製	－	－	(2.2)	2.2	0.28	5.1	全体的に錆化が著しく、土や小石が付着する。 コの字状に曲がる。	19	B−3 裏込内 （石積み２北側）
第113図 図版97 696	銅製品	銅製	－	－	3.05	(4.40)	0.66	41.7	全体的に土や石が錆に付着。 両端、斜めに切落とされたと思われる跡が見られる。	19	C−4 3層表面
第113図 図版97 697	鍋	鉄製	－	－	3.61	(5.05)	0.77	19.2	鉄鍋の釣り手を通す把手。 鍋の本体部と蝋付けされ、半円状の把手に半円形の孔があく。	11	I−9 南側
第113図 図版97 698	扉（破片）	鉄製	－	－	(5.1)	(8.8)	1.34	152.4	大型の蝶番が付く扉の破片か。 錆化が進行し、錆瘤、錆脹がみられ、部分的に表面が剥れ落ちている。割口は、鑿か鋸で切落としたと思われる。 芯棒が一部刺さったまま残っている。	11	撹乱
第113図 図版97 699	工具	鉄製	－	－	1.17	4.69	0.85	28.5	正面観は長方形。 側面に錆瘤が付着するが、状態は良好である。 側面片方に約5㎜の穴がある。貫通はしていない。 長方形の片端は楔形に狭まる。 頭部正面は丸みのある長方形を呈す。 全体的に打痕がみられる。	11	撹乱
第113図 図版97 700	鍵	銅製	－	－	11.0	0.74	0.15	8.0	青銅の板を加工した錠前の鍵。 上半部の柄部には径2.5㎜の紐通し孔が開けられ、頂部は丸く成形される。 解錠部の先端にあたる鍵爪部はH状を呈し、バネ軸が2本2段の錠前牡金具に対応する。	19	撹乱

第66表　金属製品観察一覧４

（　）は破損

図 図版 番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
			頭部径	頭部厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第113図 図版97 701	錠前	銅製	－	－	1.45	(4.7)	0.2 0.3	7.0	錠前の牡金具で、施錠時に牝金具の弦を受ける弦受け部。欠失しているが図の上部にはバネ軸及びバネが付く。 弦通し孔は円形の板端部に方形に加工され、その裏側下部には縦位に細長い板状の部位が連なる。	11	撹乱
第113図 図版97 702	錠前	銅製	－	－	0.9 0.6	(6.7)	0.28 0.14	7.6	錠前の牡金具。牝金具の筒部内で広がることで施錠する施錠部。1㎜厚のバネ軸に0.8㎜厚の２枚のバネが付く。内１枚は基部で破損。バネ軸とバネの接合部は、方形に開けた孔に金属を入れ敲き広げて接合。図の下部には欠失するが弦受け部が付く。	11	撹乱
第113図 図版97 703	錠前	銅製	－	－	0.95	(4.4)	0.5 0.23	10.1	錠前の牡金具。 牝金具の筒部内で広がることで施錠する施錠部。 径４㎜のバネ軸に２枚のバネが付くが、それぞれ基部及び端部で破損している。	19	B－3 裏込内
第113図 図版97 704	錠前	銅製	－	－	1.85	5.4	0.05	3.1	錠前の牝金具である筒部をふさぎ、バネを止めるバネ受け板か。薄い銅板にバネ部を差し込む孔が方形に設けられ、その左右に径１㎜の孔が4点見られる。	11	撹乱
第113図 図版97 705	錠前 ？	銅製	－	－	0.67	(5.7)	0.3	6.0	錠前牡金具の施錠部か。 図の上部がバネ軸で、下部がバネと思われるが、歪みが強く疑問が残る。	19	B－3 裏込内
第114図 図版98 706	鍬形	銅製	－	－	(9.7)	(5.9)	0.12	17.8	立物鍬形。 銀杏葉様の意匠を２段で構成し、それぞれ猪目透かしが２箇所ずつ入る。下端部は破損。鍍金は見られない。	19	B－3 裏込内
第114図 図版98 707	鍬形	銅製	－	－	(12.8)	6.2	0.2	18.8	立物鍬形。 銀杏葉様の意匠を２段で構成し、それぞれ猪目透かしが１箇所ずつ入る。下端部は鍬形台に差し込むソケット部で、本体部より若干段差を付けて細く成形される。 鍍金は見られない。	19	A－4 裏込内
第114図 図版98 708	鍬形	銅製	－	－	(4.6)	1.4	0.13	2.4	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられていたと思われる立物の破片。 先端は銀杏葉様の意匠で、下部は破損、軸部には円形文をつないでいたと思われる幅1.5㎜の枝が残る。	19	撹乱
第114図 図版98 709	鍬形	銅製	－	－	(2.8)	3.3	0.07	3.9	形状から三鍬形台中央の祓立台に取り付けられていた立物と思われるが、３点の透かしが猪目でなく円形であることから、何らかの飾り金具の可能性もある。 頂部・下端部は破損。	11	撹乱
第114図 図版98 710	鍬形	銅製	－	－	(5.4)	(5.1)	0.18	27.3	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられていた立物中央部分の破片。 日輪を表すとされる円形文で、上下に幅24㎜、左右に幅３㎜の枝の痕跡が残る。二次的に敲いて曲げられている。	11	撹乱

第67表　金属製品観察一覧５

（　）は破損

図 図版 番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
			頭部径	頭部厚	縦長 縦径	横長 横径	厚さ	重量			
第114図 図版98 711	鍬形	銅製	－	－	(3.3)	3.1	0.13	5.7	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられていた立物の破片。 日輪を表すとされる円形文で、縁辺の２箇所に幅11㎜と３㎜の枝の痕跡が残る。	19	撹乱
第114図 図版98 712	鍬形	銅製	－	－	(3.2)	(3.2)	0.1	5.4	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられていた立物の破片。 日輪を表すとされる円形文で、縁辺の２箇所に幅11㎜と３㎜の枝の痕跡が残る。	11	撹乱
第114図 図版98 713	袖の金物	銅製	－	－	1.9	(9.4)	0.3	22.8	鎧の袖部、大袖等の上部に付けられた金具と思われる資料。 厚手の銅板を用い、先端は如意頭状に加工する。	19	B－3 裏込内
第114図 図版98 714	金具廻り	鉄製	－	－	2.25	6.65	0.66	11.0	鎧の金具廻りか。 鋲孔と思われる孔が１箇所認められる。	19	B－3 裏込内
第114図 図版98 715	鎧金具廻り	銅製	－	－	1.9	5.4	0.17	5.2	鎧金具の部品と思われる製品。 八双金具等とともに化粧板に付けられる金具か。	19	B－3 裏込内
第114図 図版98 716	小札	鉄製	－	－	5.6	1.9	0.55	8.6	全体に錆化が進む。 札頭は斜め状になる。 紐孔は7孔と6孔の2列。計13孔。並札。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第114図 図版98 717	小札	鉄製	－	－	6.25	2.8	0.44	7.1	全体的に錆化が進んでおり、錆脹れ、錆瘤も目立ち、一部錆で孔が塞がっている。 札頭は斜め状になる。紐孔2列。	19	B－4 基壇状遺構溝中
第114図 図版98 718	小札	鉄製	－	－	5.75	2.05	0.4	7.4	全体的に錆化が進んでおり、錆脹れ、錆瘤も目立ち、一部錆で孔が塞がっている。 札頭は斜め状になる。紐孔2列。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第114図 図版98 719	小札	鉄製	－	－	6.2	2.0	0.5	7.7	全体的に錆化が進行しており、一部錆で孔が塞がる。 所々に錆瘤も見られる。 札頭はふたつの半円からなる、2山碁石頭伊予札。 紐孔2列、14孔。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）
第114図 図版98 720	小札	鉄製	－	－	6.3	1.6	1.14	14.9	全体的に錆化が進行している。 錆瘤や錆張れで観察は困難。 札頭も錆に覆われ確認できず。	19	B－3 裏込内（石積み2北側）

第68表 金属製品観察一覧６

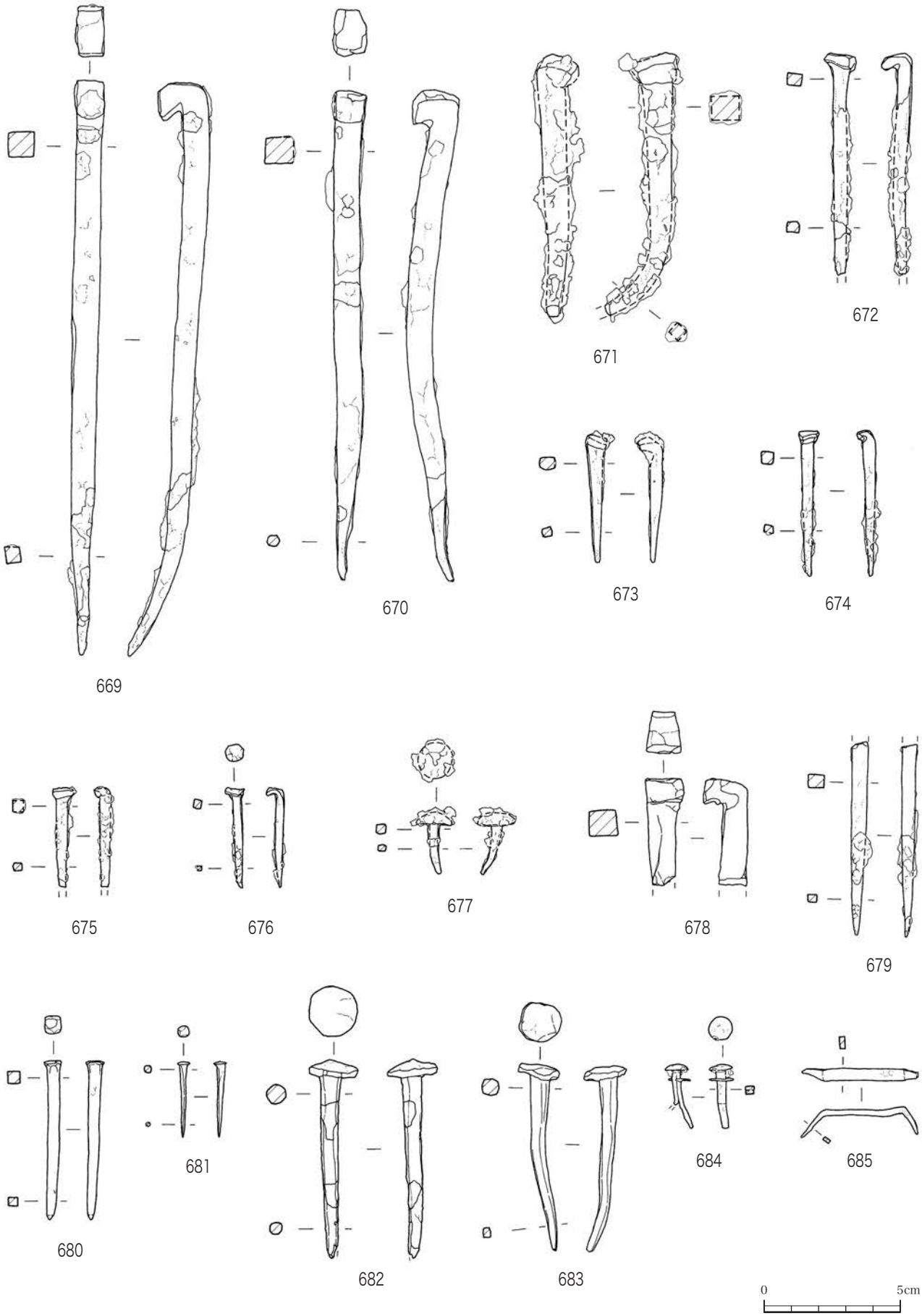
（ ）は破損

図版番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査年度（平成）	グリッド層
			頭部径	頭部厚	縦長縦径	横長横径	厚さ	重量			
第114図 図版98 721	鎧胴部	鉄製	－	－	5.46	6.7	1.08	32.5	胸板や脇板等の鎧胴部の部品と思われる資料。半欠品のため全形は覗えないが、方形をした鉄板の縁辺５箇所に孔が穿たれている。	19	B－3 裏込内
第114図 図版98 722	鎧胴部	鉄製	－	－	8.40	6.44	0.7	48.8	胸板や脇板等の鎧胴部の部品と思われる資料。錆が進み全形は覗えないが、方形の鉄板を皿状に凹ませ、角部は丸く成形している。	19	B－3 基壇状遺構 溝中
第115図 図版99 723	覆輪	銅製	－	－	10.4	0.66	0.2	13.4	両端部がわずかに弧を描く形状の覆輪。 錆化した鉄釘が付着している。	19	B－4 基壇状遺構 表面
第115図 図版99 724	覆輪	銅製	－	－	(2.39)	(6.2)	0.2	10.2	鋲孔を有する覆輪。 形状から胸板を縁取る覆輪と思われる。鋲孔に近い端部は角を丸く、鋲孔部は隅丸台形状に成形する。	19	撹乱
第115図 図版99 725	覆輪	銅製	－	－	0.9	(1.9)	0.015	1.2	鋲孔を有する覆輪。 鋲孔部は楕円形状に成形する。	19	B－3 裏込内
第115図 図版99 726	切羽	銅製	－	－	(4.7)	(2.5)	0.48	5.4	木瓜形切羽の半欠品。 刀剣を通す茎孔から破損する。緑青が覆う。	11	撹乱
第115図 図版99 727	はばき	銅製	－	－	4.1	(2.1)	0.85	16.1	刀身を鞘に固定する役目を持つ部品。 被熱により溶解・破損する。刀身を通す茎孔は、長軸で２２㎜、短軸で７㎜を測り、小型の刀が想定できる。	19	C・D－4 ３層表面
第115図 図版99 728	鏃？	鉄製	－	－	3.7	1.0	0.5	4.8	両端が破損しているが、先端が撥状に広がるタイプの鏃と思われる資料。 矢柄に差し込む部分も扁平に造られている。	19	B－4 黄褐色土
第115図 図版99 729	弾丸	銅製	－	－	Ø=2.7	Ø=2.4	－	54.7	直径約2.７cmの球。 表面は凹凸が多く、成形も粗く被熱による付着物も多い。	19	C－4 ３層表面
第115図 図版99 730	飾り金具	銅製	－	－	(3.75)	(6.7)	0.2	17.1	鋳造。輪花状に模る。錆による付着付着物が多く、正面からの模様の観察は困難。表面の一部に線刻が確認できる。裏面から見ると陽刻で縁側に波状、中央に向かって線が延び、中央には円が描かれていたと思われる。鋳造。	19	B－3 裏込内
第115図 図版99 731	飾り金具	銅製	－	－	(7.5)	(5.7)	0.1	23.6	鍛造。半欠品。圧迫による変形が著しいが、錆化はほとんど見られず良好。基材から切抜き、切口は鑢などで調整した痕が見られる。葉の幹や葉脈は鋭く線彫りされ、縁側のみに施されている。中央に孔があったと思われ、線刻の中に金箔が残る。	11	撹乱
第115図 図版99 732	飾り金具	銅製	－	－	(3.36)	(3.47)	0.1	6.5	鍛造。全体的に錆化が進み模様の観察は困難。 ３㎜弱の鋲が刺さったまま残っている。	19	撹乱
第115図 図版99 733	飾り金具	銅製	－	－	(3.8)	(2.07)	0.39	5.4	鍛造。錆化が進行しており観察は困難。	19	B－3 裏込内

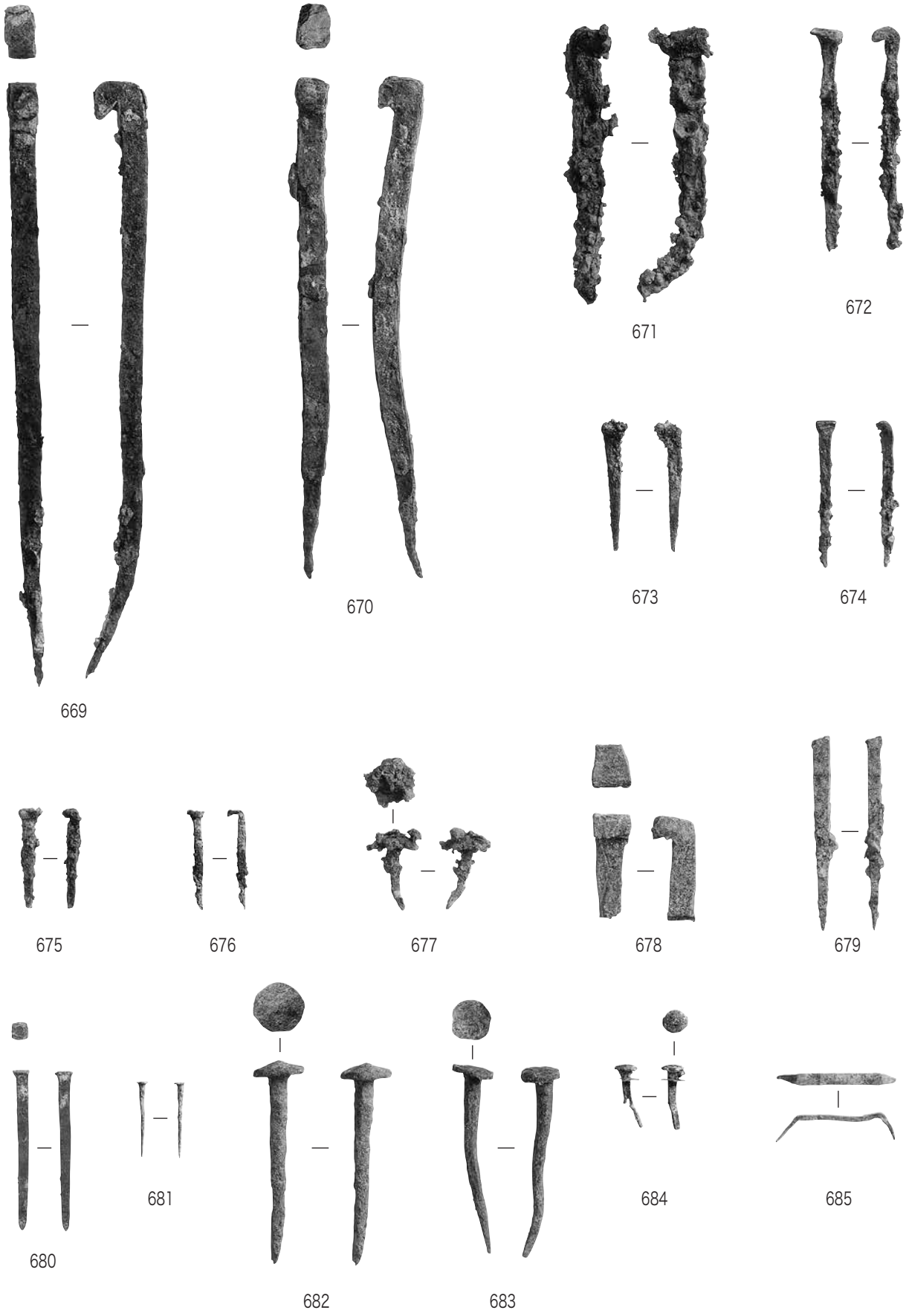
第69表　金属製品観察一覧７

（　）は破損

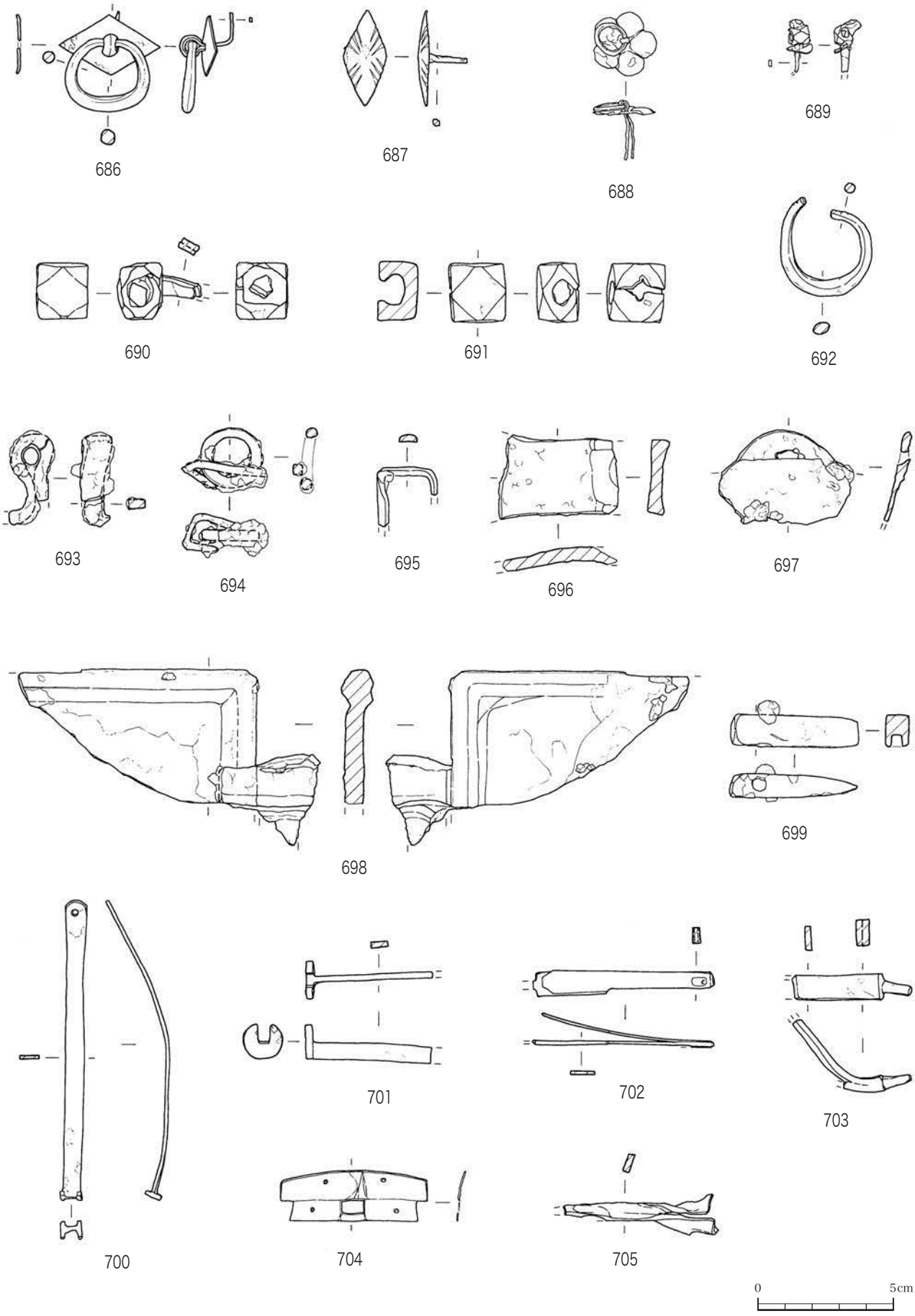
図版番号	種類	材質	法量（cm・g）						観察事項	調査年度（平成）	グリッド層
			頭部径	頭部厚	縦長縦径	横長横径	厚さ	重量			
第115図 図版99 734	銅製品	銅製	－	－	(4.5)	(7.9)	0.1	20.6	全体的に土や石が錆に付着。模様は表裏見られない。 縁側はやや湾曲し、釘頭4㎜弱の鋲が付く。	19	B−3 裏込内
第115図 図版99 735	蝶番	銅製	－	－	(1.4)	2.65	0.1	2.3	鍛造。輪花状に唐草模様の間に魚々子文が見える。 模様の上に孔が開く。	19	撹乱
第115図 図版99 736	簪	銅製	－	－	0.25	14.65	0.25 0.2	4.8	鍛造。カブが耳掻き状の簪。 カブは細長く、浅い刳りがみえる。 くびれはほとんどなく、竿の断面は六角形。先端は角錐。	11	撹乱
第115図 図版99 737	簪	銅製	－	－	0.4	10.3	0.4	2.8	鍛造。カブは小さく、刳りは見えない。 頸は細くくびれる。 竿の断面は楕円になり、先端にいくにつれ平たくなり、徐々に細くくびれ、鋭くなる。	11	撹乱
第115図 図版99 738	装身具	銅製	－	－	0.4	1.35	0.35	0.6	1本の針金にコイル状に細い針金を巻きつけてるのが切断面から観察できる。2本の針金をまとめる様に渦状に巻き、さらに端で2本の針金をまとめている。	19	B−5 シーリ内 木炭層
第115図 図版99 739	指輪	銅製	－	－	Ø=2.3	Ø=2.3	0.2	4.7	成形時に鍛造の稜がみえる。 接合部が見えない事から鋳造と思われる。 断面は半円形。 幅は細い部分で5㎜前後、太い部分で約7㎜。	11	撹乱
第115図 図版99 740	指輪	銅製	－	－	0.4	Ø=2.35	0.07	1.0	細板を環状に成形。 厚さは約0.7㎜で均一。 端部と中央部の板幅が異なり、端は3～4㎜幅、真中で約2㎜幅になる。圧迫が原因か一部切れ目が入る。	11	撹乱
第115図 図版99 741	鈴	銅製	－	－	(2.1)	(3.2)	0.1	2.3	下部半分が欠損。 全体的に錆化が進み土や小石などが付着する。 割鋲を頭部の穴に入れ、先端を二つに割る。	19	B−3 裏込内


669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
0
5cm

第112図　金属製品1


669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685

図版96　金属製品 1


686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
0
5cm

第113図　金属製品２

686

687

688

689

690

691

692

693

694

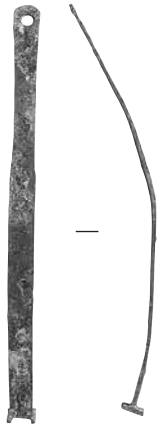
695

696

697

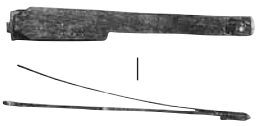
698

699



700

701



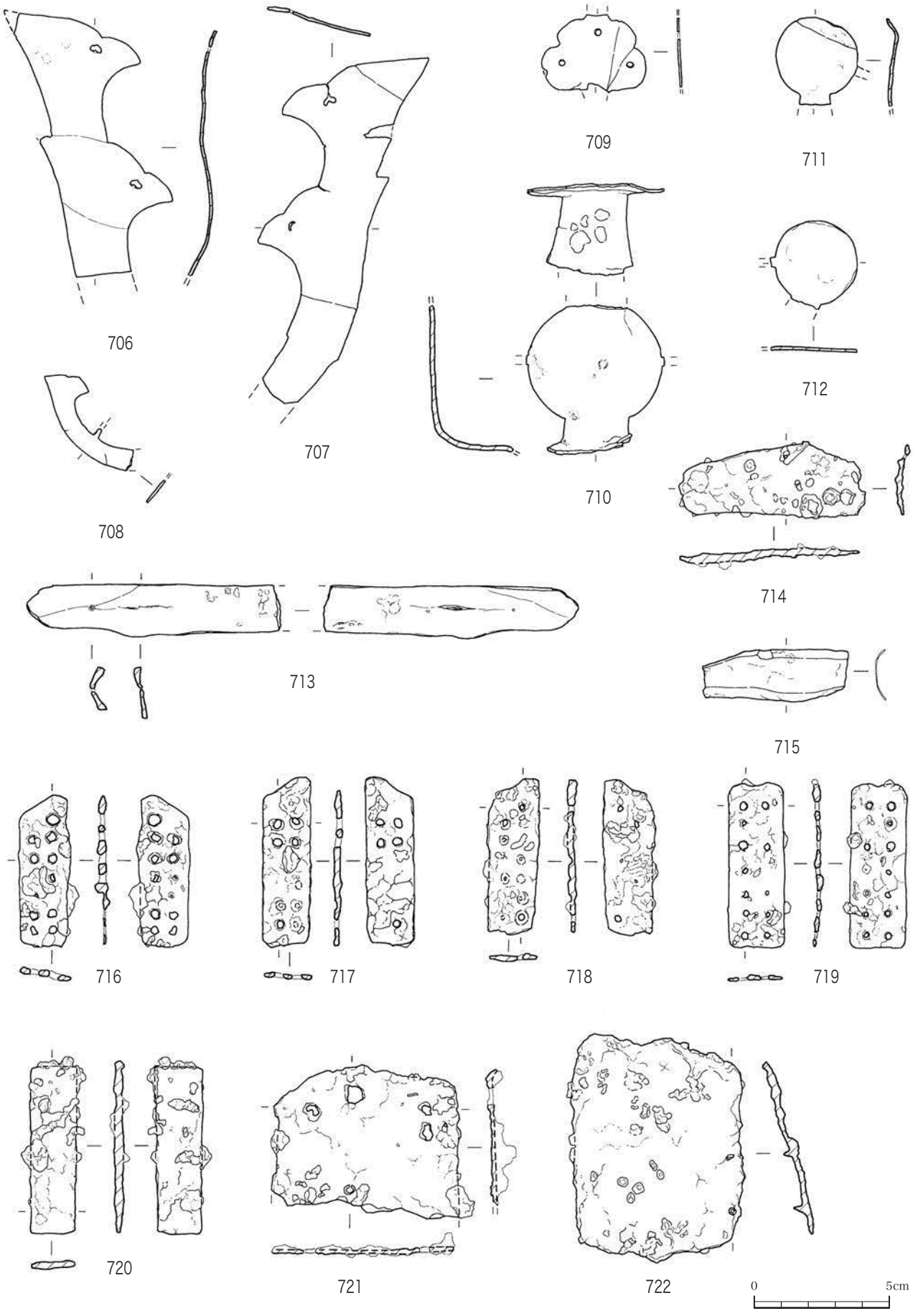
702

703

704

705

図版97　金属製品２

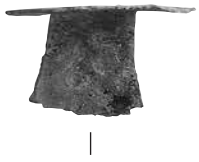

706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
0
5cm

第114図　金属製品3

706

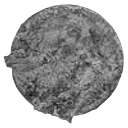
707

709



710

711



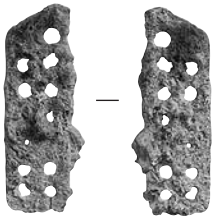
712

708

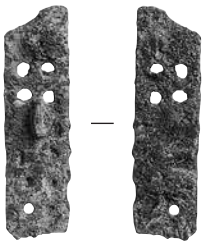
714

713

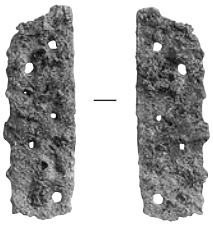
715



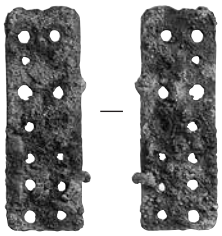
716



717



718



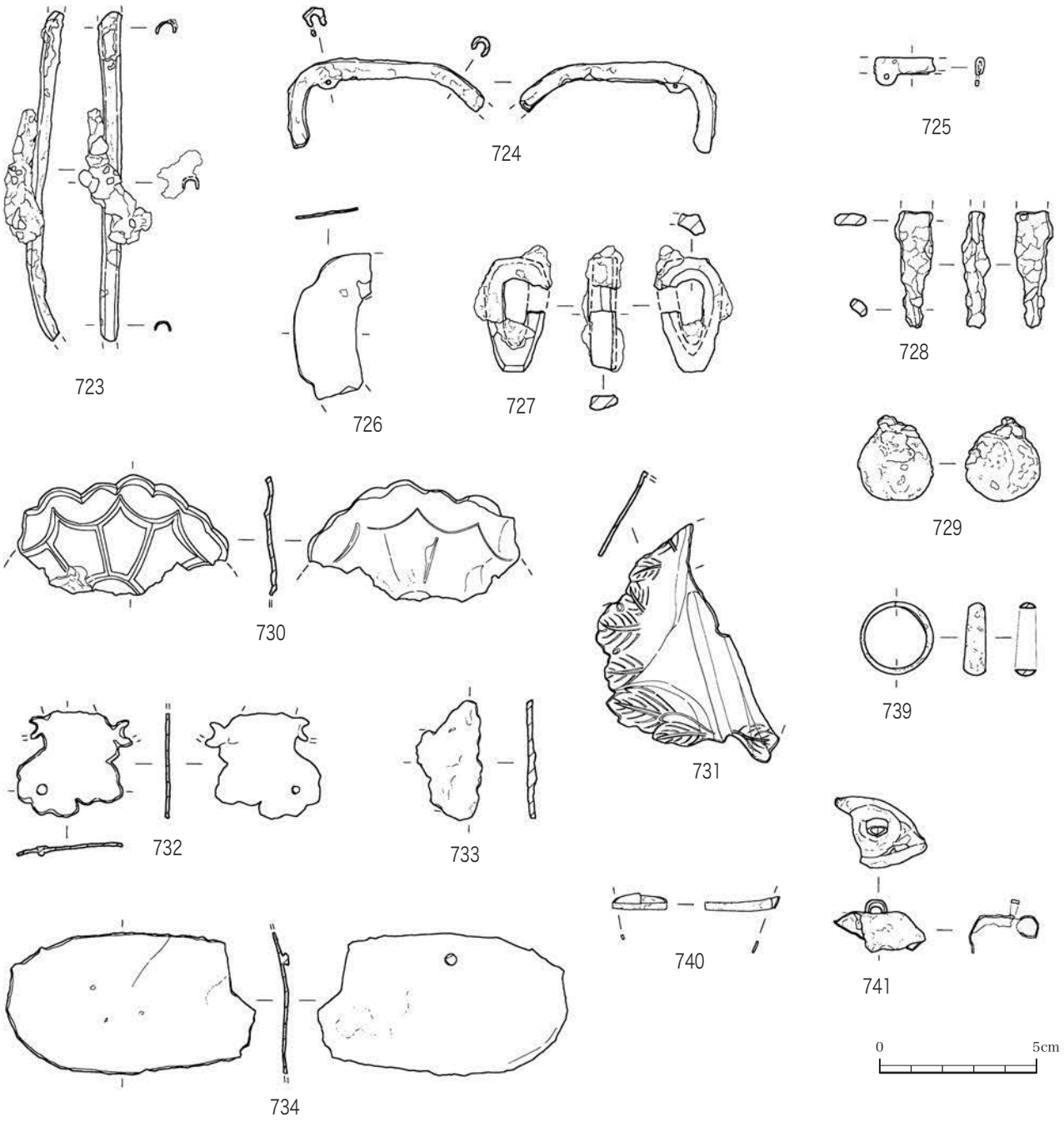
719

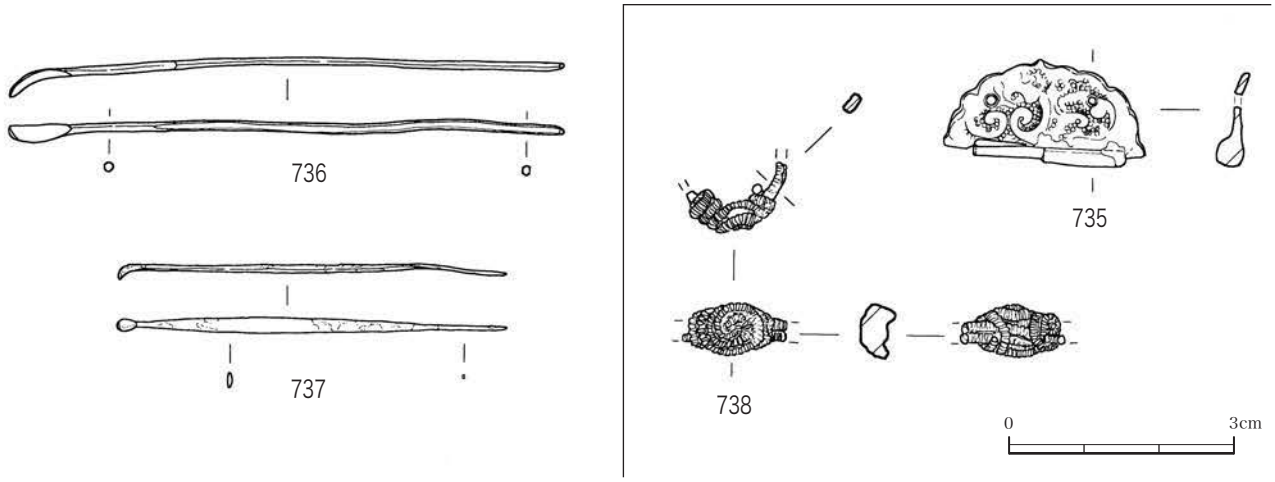
720

721

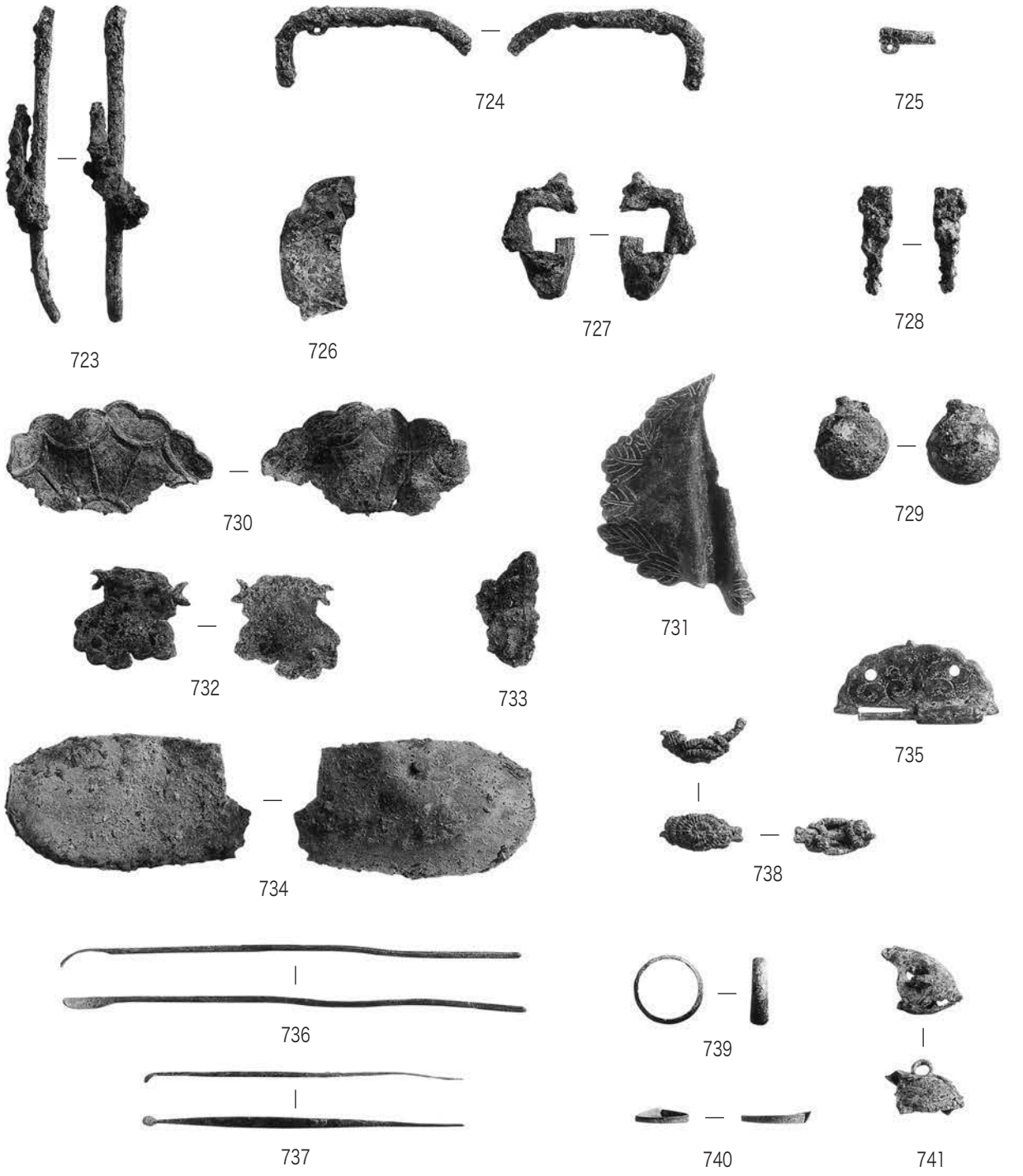
722

図版98　金属製品3


723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
739
740
741
734
0
5cm


736
737
735
738
0
3cm

第115図　金属製品4


723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
0
5cm

図版99　金属製品4

第15節　銭貨（第70～72表、第116～118図、図版100～102）

1. 銭種及び特徴

銭貨の銭種判断は、実見及び拓本以外にX線を用いて行い、集計に際しては、欠損部があるが、銭種の特定が可能なものは計上している。なお、二分の一以下の残存状態のもので、銭種不明のものは、破片として計上している。

特定されたのは24種（近代銭除く）あり、銭種が特定できるもので最も数量が多いのは洪武通寶であり、永樂通寶、開元通寶と続く。鋳銭された国・王朝としては、北宋のものが多く、その他に唐、前蜀、南宋、明、清及び徳川幕府のものがあり、不明なものとして無文銭及び輪銭がある。

その他の特徴を列挙すると下のとおりである。

・洪武通寶、永樂通寶及び輪銭が他の銭よりも多い。

・出土箇所は、洪武通寶及び永樂通寶はB-３グリッドからの出土が多く、輪銭はB-4・5グリッドのシーリ遺構に集中している。

・破片は遺構に伴うものとしてB-４グリッドの基壇状遺構内溝中から多く出土している。

・近代銭は、撹乱からの出土が多く、遺構内からの出土はC-３グリッド野面石積南側栗石からの１点だけである。

・南宋以前の銭貨の出土数が多くない。

・寛永通寶が少ない。

・二分の一以下の残存状態の破片が多く、中には輪のみが破片となっているものもある。

・熱を受けて溶着したものがある。

2. 小結

前記した銭種及び特徴から、若干の考察をしてみたい。洪武通寶及び永樂通寶が多く出土しているB-３グリッドは、14世紀後半～15世紀前半の陶磁器が出土する基壇状遺構及び造成土が検出された地点であり、その中で1368年初鋳の洪武通寶及び1408年初鋳の永樂通寶が出土している。また、輪銭が多く得られたシーリ遺構では、17世紀前半の陶磁器がまとまって出土している点で、双方の出土陶磁器の年代と概ね符合する年代値が得られており、これが遺構年代を示しているものと思われる。さらに、被熱により溶着している資料が多いのは、本遺構上面が火災により焼失したことを示しているものと思われる。

なお、C-３グリッド野面石積南側栗石から出土した近代銭は、15世紀前半とする遺構年代と異なるが、隙間の多い裏込め内からの出土であり、上層からの混入であることが考えられる。

〈参考文献〉

永井久美男（編）1998『近世の出土銭Ⅱ－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』

日本貨幣商協同組合 2002『日本貨幣型録 2002年度版』

長濱健起 2006「首里城跡出土銭貨の銭種構成について」『紀要 沖縄埋文研究』4 沖縄県立埋蔵文化財センター

上原靜 2009「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鋳造工房」『紀要 沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター

第70表　銭貨観察一覧1

図 図版 番号	銭 文	国・王朝	初鋳年	法量(㎜・g)				そ の 他	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				外径	孔	厚さ	重量			
第116図 図版100 746	開元通寶	唐	621	21.6	6.1	1.9	2.3	輪が欠け、銭文が潰れる	19	撹乱
第116図 図版100 747	景祐元寶	北 宋	1034	25.1	5.4	1.2	3.2		19	B−4 2層
第116図 図版100 748	熙寧元寶	北 宋	1066	23.1	6.2	1.7	3.8	銭文が潰れる	19	B−4 2層
第116図 図版100 749	熙寧元寶	北 宋	1066	25.2	6.4	1.3	3.7	銭文が潰れる	19	B−4 2層
第116図 図版100 750	聖宋元寶	北 宋	1101	23.9	6.7	1.6	3.3	銭文が潰れる	19	撹乱
第116図 図版100 751	大観通寶	北 宋	1107	25.1	5.0	2.1	5.5		19	B−3 基壇状遺構 溝中
第116図 図版100 752	淳熙元寶	南 宋	1174	25.2	6.4	1.4	3.5		19	撹乱
第116図 図版100 753	洪武通寶	明	1368	23.4	4.6	1.5	3.4		19	撹乱
第116図 図版100 754	洪武通寶	明	1368	23.6	4.6	1.5	3.7		19	撹乱
第116図 図版100 755	洪武通寶	明	1368	24.1	5.4	1.8	4.3	銭文が潰れる。背に「月」?	19	撹乱
第116図 図版100 756	洪武通寶	明	1368	23.8	5.6	2.2	3.7	銭文が潰れる	19	B−4 基壇状遺構 溝中
第116図 図版100 757	洪武通寶	明	1368	30.1	6.5	2.5	8.3		19	E−4 5層
第116図 図版100 758	洪武通寶	明	1368	23.1	5.7	1.7	3.5		19	C−4 炭混粘土層

第71表　銭貨観察一覧２

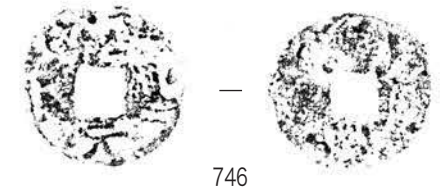
図 図版 番号	銭 文	国・王朝	初鋳年	法量(㎜・g)				その他	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				外径	孔	厚さ	重量			
第117図 図版101 759	洪武通寶	明	1368	27.0	6.4	1.8	5.6	孔は丸みが強い。	19	B−4 3層表面
第117図 図版101 760	洪武通寶	明	1368	23.0	5.4	1.9	3.9	銭文が潰れる。特に「武」が不明瞭。	19	C−4 炭混粘土層
第117図 図版101 761	洪武通寶	明	1368	24.0	5.5	1.7	3.9	−	19	C−4 2層
第117図 図版101 762	永樂通寶	明	1408	26.3	5.2	1.7	3.3	−	19	撹乱
第117図 図版101 763	永樂通寶	明	1408	25.6	5.1	1.3	4.3	−	19	C−5 3層表面
第117図 図版101 764	永樂通寶	明	1408	25.2	5.6	1.7	4.6	−	19	B−3 基壇状遺構 溝中
第117図 図版101 765	永樂通寶	明	1408	25.8	5.1	2.0	4.5	−	19	B−4 基壇状遺構 溝中
第117図 図版101 766	永樂通寶	明	1408	25.2	5.7	1.4	3.4	−	19	B−4 2層
第117図 図版101 767	元豊□寶	−	−	24.5	7.0	1.4	3.1	銭文が潰れる。	19	B−4 2層
第117図 図版101 768	元豊○○	−	−	−	−	1.3	1.8	−	19	A−2 淑順門内西 側溝内
第117図 図版101 769	元豊○○	−	−	−	−	2.2	4.4	−	11	I−6 基壇東
第117図 図版101 770	大□通寶	−	−	24.8	6.1	1.4	3.3	銭文が潰れる。「大観通寶」か。	19	B−4 2層

※□は銭文が不明、○は欠損を表す

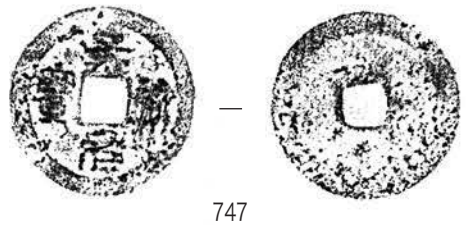
第72表　銭貨観察一覧３

図 図版 番号	銭 文	国・王朝	初鋳年	法量(㎜・g)				そ の 他	調査 年度 (平成)	グリッド 層
				外径	孔	厚さ	重量			
第118図 図版102 771	寛永通寶	江戸幕府	1636	22.9	6.8	1.3	2.4	－	11	撹乱
第118図 図版102 772	寛永通寶	江戸幕府	1697	22.0	6.6	1.3	1.6	－	11	撹乱
第118図 図版102 773	－	－	－	22.6	6.9	1.4	2.5	銭文跡あり、輪を削る。	19	B－4 黄褐色土
第118図 図版102 774	－	－	－	19.2	8.3	0.7	0.8	無文銭。孔の方向が僅かにずれる。	11	撹乱
－ 図版102 775	－	－	－	12.3	8.6	0.4	0.2	輪銭。バリが残る。方形を意識した痕が残る。	19	D－4 2層
－ 図版102 776	－	－	－	7.0	3.5	1.1	0.2	輪銭。バリが残る。	19	撹乱
－ 図版102 777	－	－	－	－	－	－	146.0	塊。	19	A－4 裏込内
第118図 図版102 778	一錢	－	－	16.0	－	1.4	0.5	近代銭。富士1銭アルミ貨。	19	撹乱
第118図 図版102 779	一錢	－	－	23.0	－	1.4	3.6	近代銭。桐1銭青銅貨。	19	撹乱
第118図 図版102 780	二錢	－	－	31.8	－	2.2	13.5	近代銭。2銭銅貨。「明治八年」。	19	撹乱
第118図 図版102 781	一錢	－	－	23.3	－	1.4	3.6	近代銭。桐1銭青銅貨。「大正十一年」。	19	撹乱

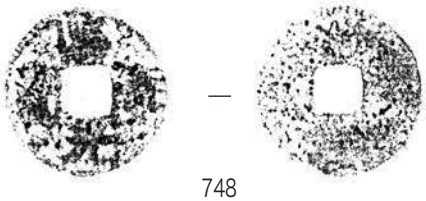
※□は銭文が不明、○は欠損を表す



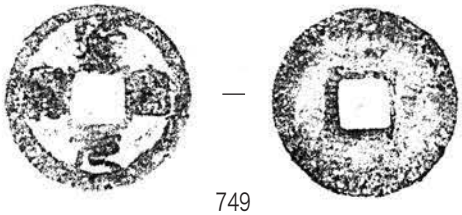
746



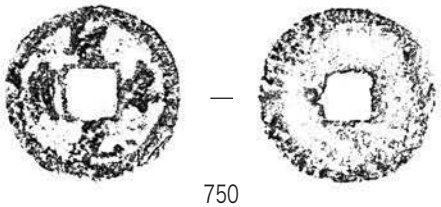
747



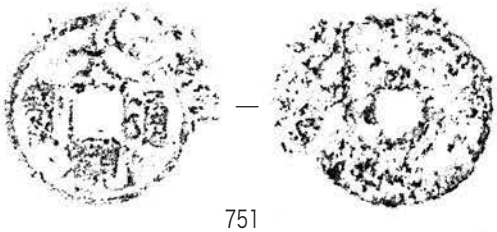
748



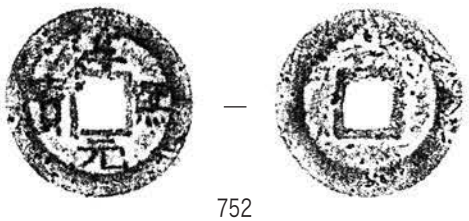
749



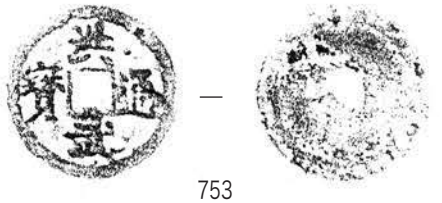
750



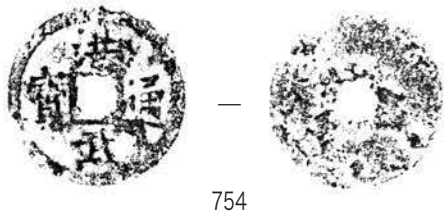
751



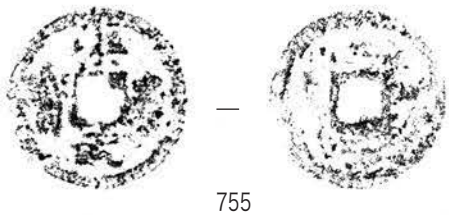
752



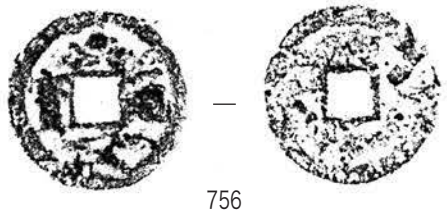
753



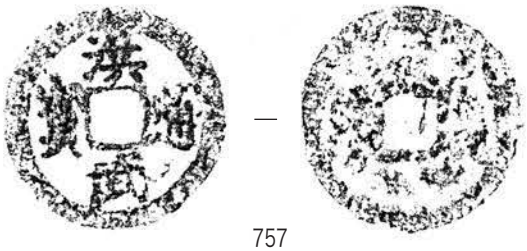
754



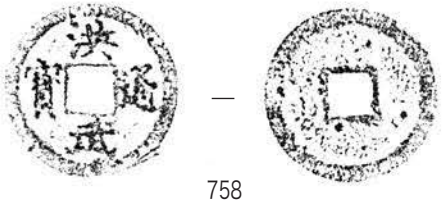
755



756



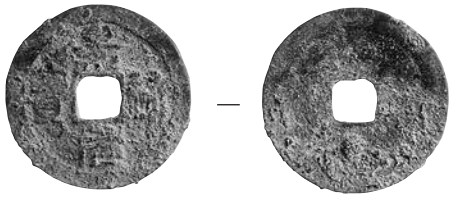
757



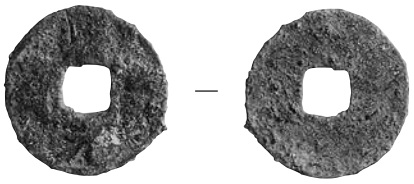
758

第116図　銭貨1

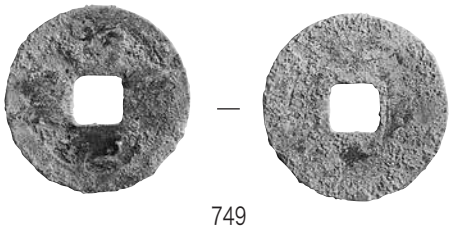
746



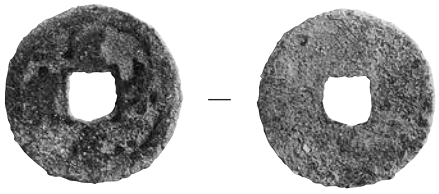
747



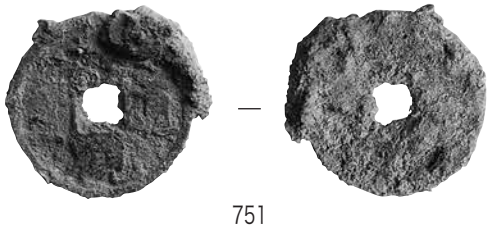
748



749



750

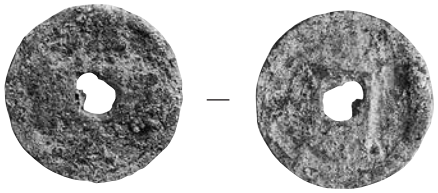


751

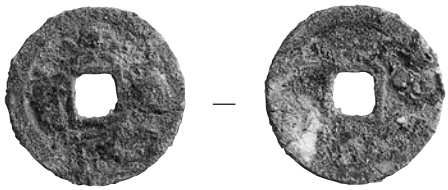
752

753

754

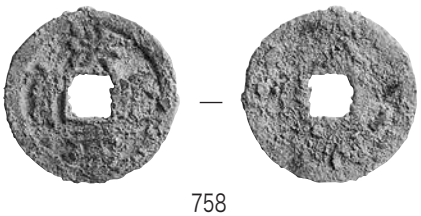


755



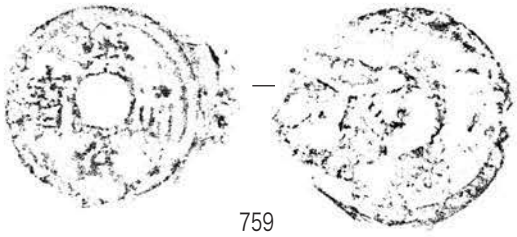
756

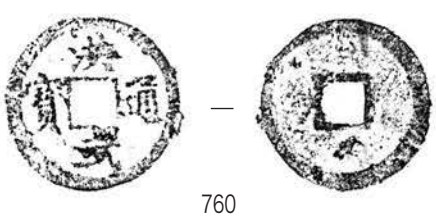
757



758

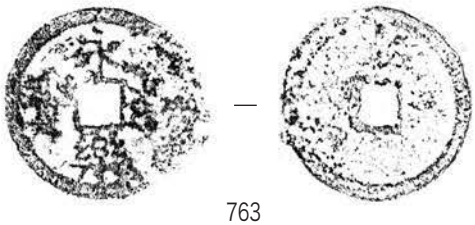
図版100　銭貨１

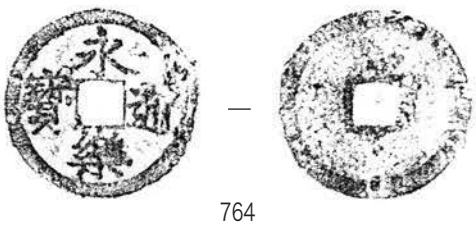

759


760

761

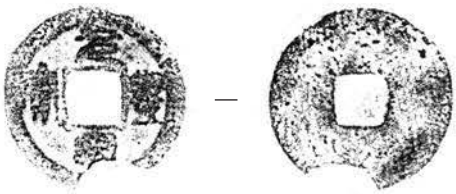
762

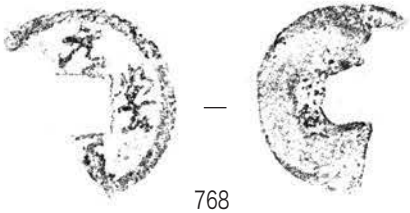

763

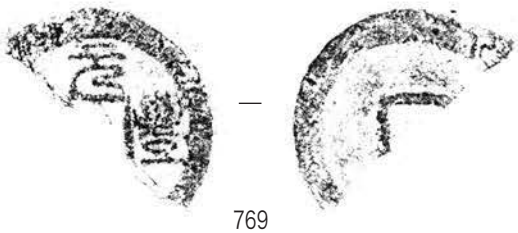

764

765

766

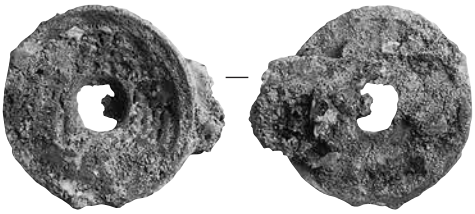

767


768

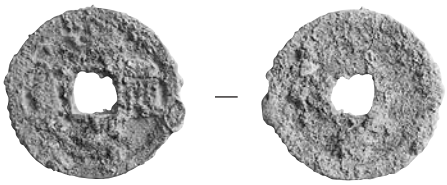

769

770

第117図　銭貨２



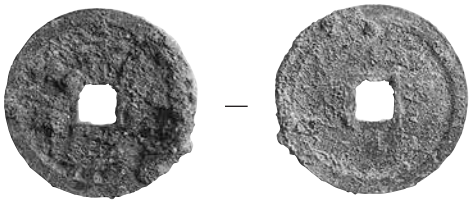
759



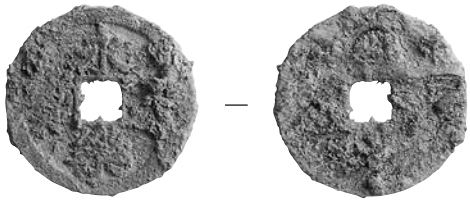
760

761

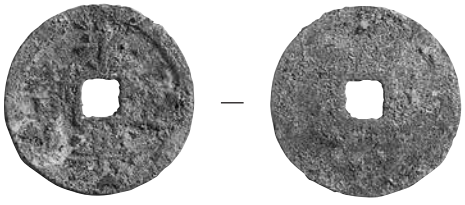
762



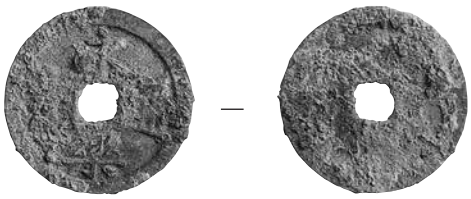
763



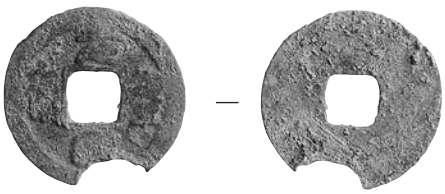
764



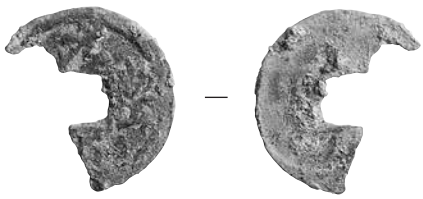
765



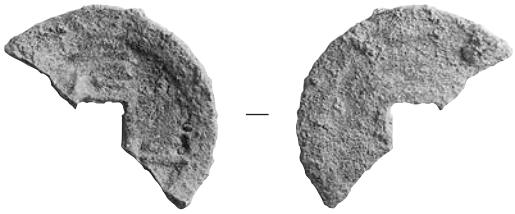
766



767



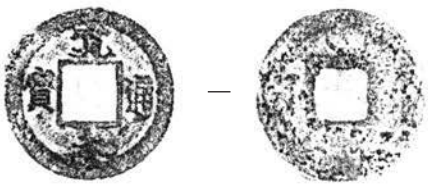
768



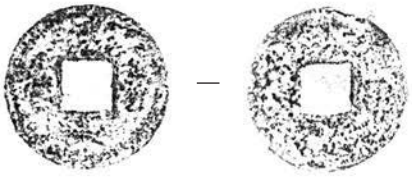
769

770

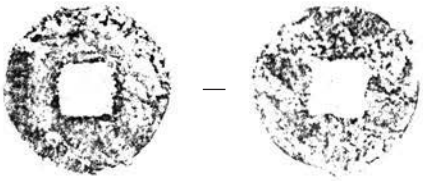
図版101　銭貨２



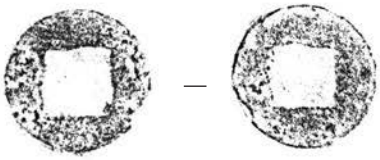
771



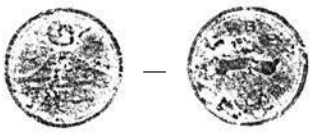
772



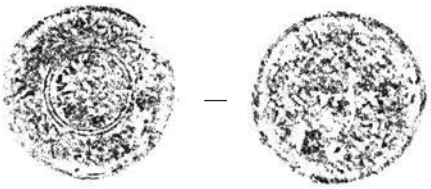
773



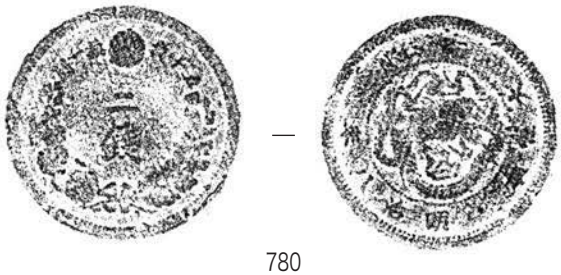
774



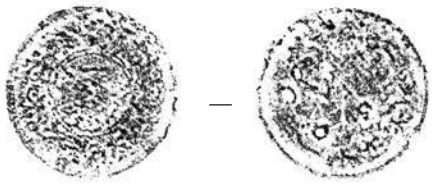
778



779

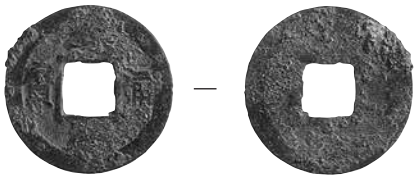


780

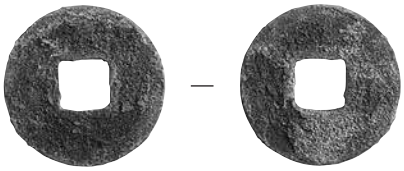


781

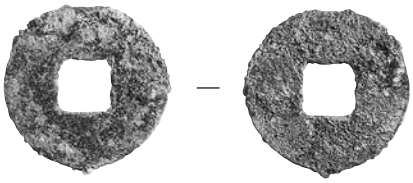
第118図　銭貨３



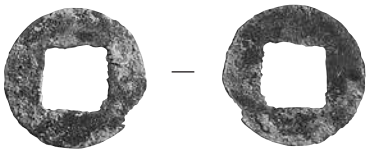
771



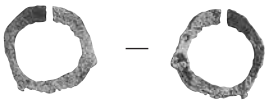
772



773

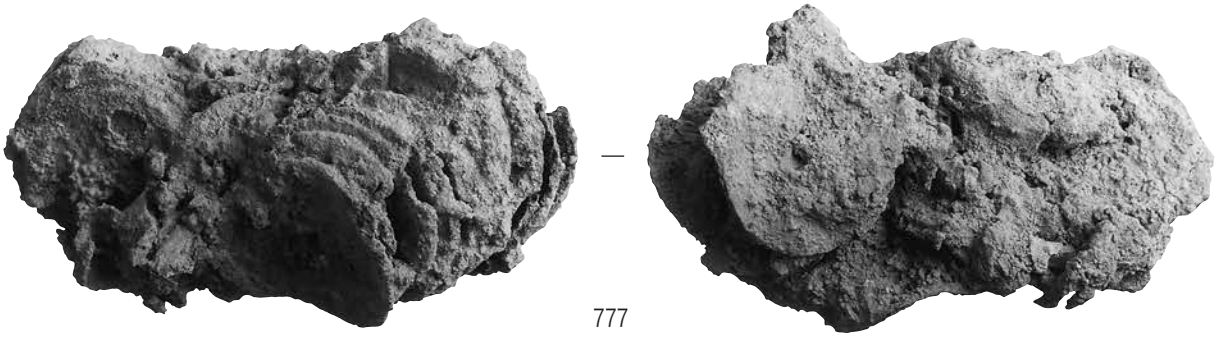


774



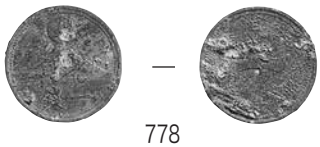
775

776



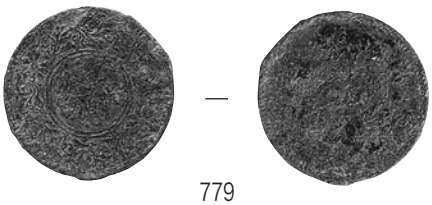
777

0 3cm



778

780



779

781

図版102　銭貨３

第16節　煙 管（第73表、第120図、図版103）

喫煙の風習は新大陸から欧州、東南アジア・中国南部を経由して16世紀に日本に伝わった文化である。物質文化上で確認できるようになるのは17世紀からで、近世を象徴する遺物の一つである（古泉2006）。沖縄においても年代的には近世以前と思われる遺跡・遺構から出土するが、史料的な制約もあり、本土ほど喫煙風習の展開が詳細でないのが実情である。

今次調査では、雁首・吸口が計97点出土し、その内13点を図示した。これらは素材から陶製・金属製に、さらに形状で細分することが可能であった。本稿では煙管の分類と各型式の年代的位置付けについて試み、それを踏まえて当地区出土資料の評価を検討した。なお各資料については第75表を参照されたい。

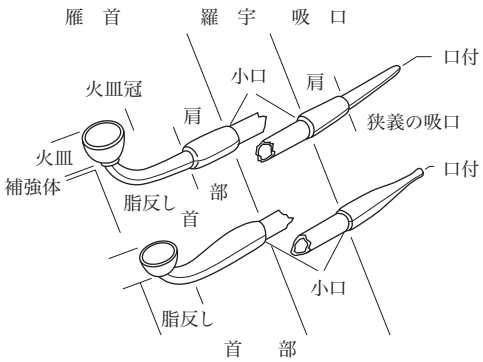
A. 陶製・瓦製（782～794）

陶製煙管は、ナーチュー毛古墓群及び銘苅古墓群Ⅲ報告書において雁首を２種に大別する分類案が提示されている（玉城2000、仲宗根2001）。この分類は当地区出土資料においても概ね適用することが可能である。しかし出土資料上、この分類に含まれないタイプも存在することから、那覇市の分類を補足する形で３種に分類した。

また吸口は雁首との一連性を見出せないとのことから分類案が提示されていないが、本稿では雁首との関連性を一旦保留し、吸口の形状のみで分類を試みた。しかし年代的な特徴は得られず、吸口のバリエーションを提示するに留まった。

①雁首（782～787）

陶首Ⅰ類：円筒型で火皿のみでなり、側面の孔に羅宇を装着して使用する。古我地原内古墓や天界寺遺構30などでは底面に紐を結ぶための耳のもつタイプもみられ、古我地原内古墓報告書では、耳の有無によって釣鐘形・柱状形に分類されている（太田1987）。また陶製以外にも瓦質や瓦の再利用品、石製品も確認されているが、金属製品は管見の限りみられない。釣鐘形・柱状形ともにグスク時代から確認できるが、近代の遺跡・遺構からは認められず、他のタイプに比べて古手と思われる。当地区では第120図782、783の柱状形のみが出土している。



第119図　煙管の部位名称
（江戸遺跡研究会（編）2001）

陶首Ⅱ類：全体的に角のない丸形の雁首で、脂返しに湾曲や角がみられず首もなく全長も短い。このタイプは首里城の各地区をはじめ、近世・近代の遺跡で頻繁に出土する。またヤッチのガマでは石製のものが１点、湧田古窯跡では蠟石製のものが１点出土しているなど、稀に石製品もみられる。当地区でこのタイプは第120図786、787の２点が出土している。

陶首Ⅲ類：六角形や八角形をはじめ直線的で角をもち、多面体形を呈するタイプである。脂返しは角をもち、首と肩が分かれない。このタイプは近世・近代を通じて出土する。無釉がほとんどだが、ナーチュー毛古墓群では施釉のものもみられるため一概に無釉とはいえない。当地区では第120図784、785の２点が得られている。特に784はシーリ遺構から出土している点で注目される。

②吸口（788～794）

陶口Ⅰ類：小口から口付にかけて内湾するタイプである。口付の突起の小さいものと大きいものとがみられる。当地点では第120図788、789、790の３点が出土している。

陶口Ⅱ類：このタイプは口付から小口までの内湾が小さく、直線的で細長い形状をしている。これも口付の突起の小さいものと大きいものとがみられる。第112図791～794の４点が出土している。特に794は華南三彩系緑釉の製品で、均整のとれた形状の精製品である。

B．金属製（795・796）

本土では喫煙の習慣が伝来した中近世の頃より金属製煙管が用いられており、大名墓などでも出土事例がみられる。金属製煙管についても那覇市が陶製煙管と同様に分類案を提示しているが（玉城2000、仲宗根2001）、金属製煙管は本土においても東大構内遺跡出土資料を用いた分類案が存在している（原2006）。前者は形状による分類に対し、後者は製造方法（溶接か鍛造か）を加味したものとなっているため、本稿では両者を折衷する形での分類を行った。本土では煙管の形態について、その大まかな変遷過程が明らかになっている。17世紀前葉では、大きな火皿、脂返しの大きな湾曲、肩付の３点が特徴である。これが江戸時代中期になると、火皿の小形化と脂返しの湾曲の縮小化がみられるようになり、19世紀から幕末の頃には小さな火皿、脂返しの湾曲・肩が消滅するという傾向がある（古泉2006）。これを上記の分類に照らし合わせると、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳという変遷過程となる。

①雁首（795）

金首Ⅰ類：火皿がやや大きく、脂返しが湾曲した長い首をもつ。火皿・首・肩があり、これらは溶接もしくは鍛造されて作られる。当地点ではみられず、また管見の限りでは県内での出土事例は得られていない。

金首Ⅱ類：Ⅰ類と類似した形状だが、肩がないものをⅡ類とした。県内では出土遺構より概ね18世紀初頭から19世紀にかけて確認されるが、出土数は後述するⅢ・Ⅳ類に比べて少ないように思われる。第120図795の１点のみ出土している。

金首Ⅲ類：小形の火皿をもち、脂返しの湾曲がほとんどみられなくなり首も短い。肩は溶接もしくは鍛造されて作られる。当調査区内では出土しなかったが、17世紀末頃の遺構を初現に近代まで出土している。

金首Ⅳ類：Ⅲ類と類似した形状だが、肩をもたないもの。当調査区では出土しなかったが、県内では18世紀頃の遺構を皮切りに、近代まで出土する。

②吸口（796）

金口Ⅰ類：吸口と肩からなるタイプ。肩は溶接もしくは鍛造によって造られる。当調査区では出土していないが、県内では近世の遺跡から出土している。

金口Ⅱ類：肩がなく、小口から口付にかけて内湾するもの。当地区では出土しなかったが、これも近世の遺跡から出土例がみられる。

金口Ⅲ類：肩がなく、小口から口付にかけて直線的なもの。ヤッチのガマ、天界寺東地区遺構30、潮原古墓群、山川原古墓群、古我地原内古墓群、ナカンダカリヤマ古墓群３号墓などに類例がみられる。

当調査区では796の１点が得られている。この資料は断面がほぼ正円形で、吸口は平坦をなしている。

C．小結

当地点に出土した煙管は古手とみられる陶製雁首Ⅰ類から、近世の初頭から中葉に、本土から流入してきたと思われる金属製雁首Ⅱ類が、そして近代まで使用されるその他のタイプまで幅広い年代の煙管が認められることが分かった。このことは、喫煙の庶民への普及以前から喫煙が行われていたと想定され、御内原地区の特異性が改めて確認される。一方で庶民の近世墓出土と同様の製品も多く、御内原で働く女官の出自や平時の生活レベルが庶民階級と変わらないことを示唆する。一方で華南製の良品も出土することから、王家は渡来の精製品を用いることも多く、しかもそれら良品の下賜も行われていたと想定される。

〈**参考文献**〉

江戸遺跡研究会（編）2001.4『図説江戸考古学研究事典』柏書房

太田宏好 1987.12「ロ. 煙管」『古我地原内古墓 –沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）–』沖縄県教育委員会

熊野正也・川上元・谷口榮・古泉弘 編 2006.12『歴史考古学を知る事典』東京堂出版

玉城京子 2000.3「第13節 煙管」『ナーチュー毛古墓群 –那覇新都心土地区画整備事業に伴う緊急発掘調査報Ⅶ–』那覇市教育委員会

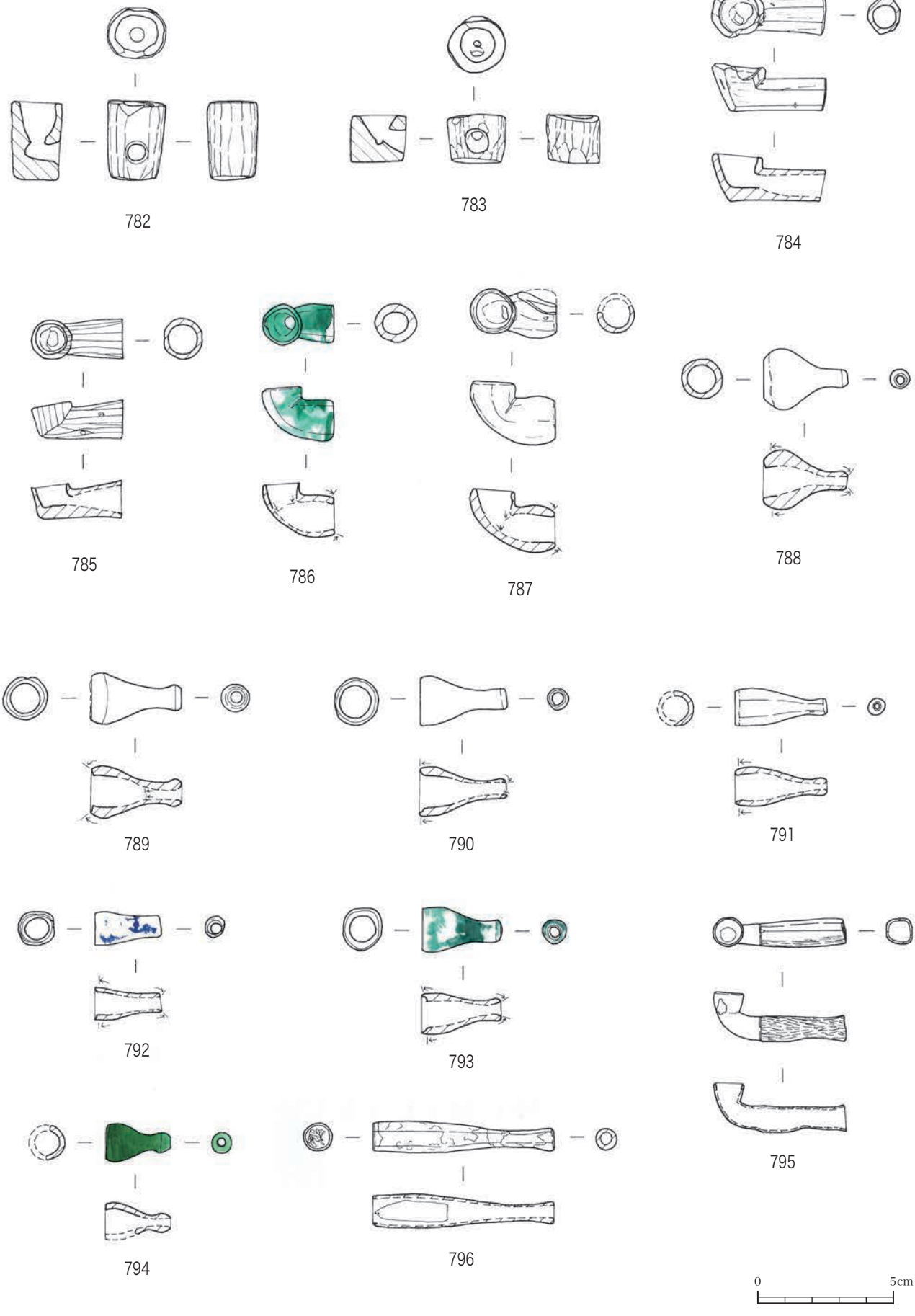
仲宗根啓 2001.3「第5節 煙管」『銘苅古墓群（Ⅲ）–那覇新都心土地区画整備事業に伴う緊急発掘調査報Ⅸ–』那覇市教育委員会

原祐一 2006.3「第5節 金属製品」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

第73表　煙管観察一覧

（　）は破損

図 図版 番号	種類	部位	材質	分類	法量（cm・g）					観　察　事　項	調査 年度 （平成）	グリッド 層
					火皿 外径 内径	小口 外径 内径	吸口 内径 外径	長高	重量			
第120図 図版103 782	羅宇 煙管	雁首	沖縄産 瓦質製	陶首 Ⅰ類	2.15 1.6	0.8 0.7	－	1.85 2.9	10.4	陶製の煙管雁首。全面を研磨して整形。小口には炭が付着。	11	撹乱
第120図 図版103 783	羅宇 煙管	雁首	沖縄産 瓦質製	陶首 Ⅰ類	2.1 1.3	0.8 0.4	－	2.0 1.8	7.3	陶製の煙管雁首。全面を研磨して整形。小口下半部に炭が付着。	11	撹乱
第120図 図版103 784	羅宇 煙管	雁首	沖縄産 無釉陶製	陶首 Ⅲ類	(1.85) (1.4)	1.4 0.9	－	4.15 1.8	8.06	八角形の煙管。小口が一部欠損。全面を研磨して面取りされる。煤の付着なし。	19	B－5 シーリ内 黒褐色土
第120図 図版103 785	羅宇 煙管	雁首	沖縄産 無釉陶製	陶首 Ⅲ類	1.4 0.9	1.5 1.05	－	3.3 1.4	5.74	多面形の煙管。完形。全面を研磨して多面形に面取りされる。煤の付着なし。	11	撹乱
第120図 図版103 786	羅宇 煙管	雁首	中国産 彩釉陶製	陶首 Ⅱ類	1.5 0.5	1.9 0.8	－	2.6 2.0	4.47	稜を持たず円形。火皿が僅かに剥落。煤の付着なし。	11	撹乱
第120図 図版103 787	羅宇 煙管	雁首	沖縄産 施釉陶製	陶首 Ⅱ類	1.6 1.3	(1.4) (1.0)	－	3.1 2.3	7.78	円形の煙管。火口が一部欠損。火口以外は施釉。	11	撹乱
第120図 図版103 788	羅宇 煙管	吸口	沖縄産 施釉陶製	陶口 Ⅰ類	－	1.4 1.0	0.7 0.5	3.05 2.2	9.22	褐色の胎土で、小口以外は施釉されるが剥落が著しい。小口は平坦。内面は割れが残る粗製品。	11	Ⅰ－8 20 ～ 30 茶 褐色灰混層
第120図 図版103 789	羅宇 煙管	吸口	沖縄産 施釉陶製	陶口 Ⅰ類	－	1.55 1.15	1.0 0.6	3.35 1.9	6.12	灰白色の胎土で表面全体が透明の施釉。吸口は大きく膨らむ。小口は凹状。	11	Ⅰ－7 20 ～ 30
第120図 図版103 790	羅宇 煙管	吸口	沖縄産 施釉陶製	陶口 Ⅰ類	－	1.75 1.2	0.6 0.5	3.2 1.8	5.08	灰白色の胎土で表面全体が透明の施釉。内面には煤が残る。小口は凹状。	11	J－9 遺構上西
第120図 図版103 791	羅宇 煙管	吸口	産地不明 施釉陶製	陶口 Ⅱ類	－	(1.25) (0.9)	0.6 0.3	3.35 1.4	3.53	表面淡黄色、内部灰白色の胎土で吸口と小口を除く中央部に透明の施釉。小口は研磨されて平坦。吸口の口径が小さい。小口が一部剥落。胎土や施釉箇所、吸口の口径などの特徴から、沖縄産でない可能性がある。	11	撹乱
第120図 図版103 792	羅宇 煙管	吸口	中国産 彩釉陶製	陶口 Ⅱ類	－	1.2 0.8	0.7 0.45	2.45 1.2	2.64	灰白色の胎土で小口を以外に藍色に施釉されるが剥落著しい。小口は研磨され凹状。吸口が僅かに剥落。形状がかなり歪であり、かなり粗末な製品。	11	J－9 遺構上西
第120図 図版103 793	羅宇 煙管	吸口	中国産 彩釉陶製	陶口 Ⅱ類	－	1.55 1.45	0.85 0.6	2.9 1.65	4.02	淡黄色の胎土で小口以外に翡翠釉が施されるが剥落が激しい。小口は唇部のみ研磨され、凹状。楕円形だがやや歪む粗雑な作り。内面に穿孔時の線条痕が残る。	11	撹乱
第120図 図版103 794	羅宇 煙管	吸口	中国産 彩釉陶製	陶口 Ⅱ類	－	(1.25) (0.9)	0.75 0.3	2.4 1.35	1.94	表面淡黄色、内部灰白色の胎土で緑釉が施されるが吸口部は薄くなっている。小口は研磨され平坦。小口が破損している。吸口が大きく膨らむ。均整のとれた形状の精製品。	19	撹乱
第120図 図版103 795	羅宇 煙管	雁首	銅製	金首 Ⅱ類	1.05 0.9	0.9 0.8	－	4.8 1.8	8.46	羅宇装着部のソケットが方形。片側側面一体に細い溝が刻まれる。ソケット部は上下とも敲打痕。内面に煤が僅かに付着。	11	撹乱
第120図 図版103 796	羅宇 煙管	吸口	銅製	金口 Ⅲ類	－	1.0 0.85	0.8 0.45	6.6 1.2	10.35	ほぼ正円形。吸口は平坦。	11	J－9 遺構上西



第120図　煙 管

782

783

784

785

786

787

788

789

790

791

792

793

795

794

796

図版103　煙 管

第17節　円盤状製品（第74表、第121図、図版104）

円盤状製品は陶磁器や瓦の周縁を剥離して円盤状に整形されたもので、おはじきや石蹴り遊び、もしくは盤上遊戯の駒と想定されている（上原2004）。当地区では62点の資料が得られたが、加工の差異から３種に分類した。遺物個々の観察所見は第76表を参照されたい。

A. 素材について

原材となった素材は施釉陶器・無釉陶器・磁器・土器・瓦と多彩で、中国産をはじめタイ産・肥前産・薩摩産・沖縄産と産地も幅広い。素材となった器種と部位には、碗底部・胴部、壺胴部、蓋、擂鉢胴部、瓦筒部が認められた。これらの傾向に何らかの傾向や指向は見出し得ない。また今次資料のうち、800・805・806・807には二次加工されていない破損面が認められることから、破損した製品を素材とすることが確認される。原材の商品価値を問わず、破損品全てが材料の候補であったことが確認された。

B. 加工法について

①片面調整（797、803、805）

内面ないし外面からの一方向からのみ剥離調整を行って整形される。今次報告では797の中国産染付の碗底部、803の肥前磁器の碗底部、805の沖縄産施釉陶器の碗底部の３例がみられ、これらはいずれも底部を素材としたものだった。

②両面調整（798、799、802、804、806、807）

内外面両方向から剥離調整を行って整形されたもので、最も点数が多かった。両面調整は、一方向から大きな剥離によってほぼ形状を作り、逆方向からの微細な調整剥離によって整形される。しかし実際は個人の技量によって左右され、内外両面からの規則的な剥離によって整形されるものもみられる。

③研磨調整（800、801、808）

おそらく剥離調整が行われたが、剥離加工後、側面を研磨して整形されたものである。今次調査では800の中国産褐釉の壺胴部、801の中国産土器の蓋、808の明朝系瓦の筒部の３点の資料が得られている。素材に何らかの傾向は見出せないため、加工方法の選択は素材に基づくわけではないようである。なお、808はその他の製品に比べ球状に近いことから、用途が異なる可能性が挙げられる。

C. 小 結

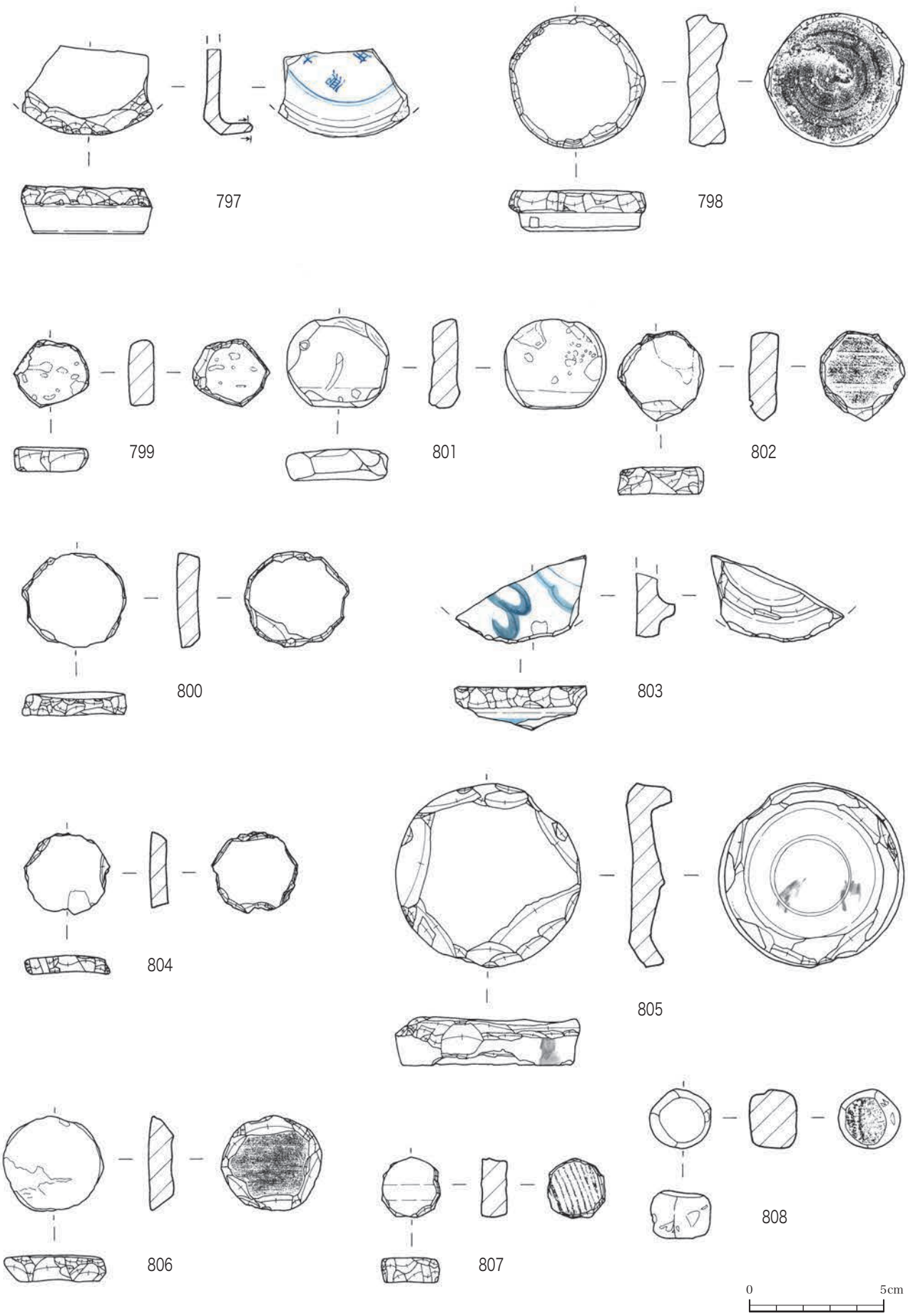
以前より円盤状製品の素材が出土遺跡の性格に対応することが指摘されるが、今次調査においても素材に中国産陶磁器などの良品が含まれていた。加えて加工法にみるように、御内原でも製作上での個人の技量が大きく反映されている。用途は依然確定できないが、完成度の技量差、素材と出土地との相関性を踏まえると、概ね使用者自身が製作主体者であるとみられる。

〈参考文献〉

上原静 2004.3「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』p371-400今帰仁村教育委員会

第74表　円盤状製品観察一覧

図 図版 番号	素 材	使用部位	法量(cm・g) 縦 横 高〔厚〕	重量	観　察　事　項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第121図 図版104 797	中国産染付	碗 底 部	– – 1.8	20.0	底部を外面底部方向より打剥。打剥には胴部除去のための大きめな剥離と調整の微細剥離とがみられるが、剥離順序は不規則。	11	撹乱
第121図 図版104 798	中国産 黒釉陶器	碗 底 部	4.8 5.1 1.2	43.3	内面より打剥した後、角の残る部分を外面より微細剥離して成形される。一か所のみ角が除去され残るが、全体的に均整が整い、円形を呈す。	11	撹乱
第121図 図版104 799	中国産 黒釉陶器	壺or鉢胴部	2.5 2.8 0.9	8.6	内外面両方より不規則な剥離がされるが、その後研磨調整がなされており剥離面はほとんど残っていない。楕円形を意識したと思われるが角が残る。	19	撹乱
第121図 図版104 800	中国産 褐釉陶器	壺 胴 部	3.5 3.8 0.9	15.0	外面より打剥し、次に内面より微細剥離して調整される。剥離順序は不規則。円形だが調整は粗めで角が残る。	11	撹乱
第121図 図版104 801	中国産土器	蓋	3.3 3.75 1.1	12.7	内面より剥離されるが、その後側面を研磨して整形されるため剥離面はほとんど残っていない。形状は楕円形をなす。	19	撹乱
第121図 図版104 802	タイ産 褐釉陶器	壺胴下半部	3.3 3.2 1.0	13.5	内面より打剥し、さらに外面から微調整して整形される。剥離順序は不規則。一部に剥離面に切られる研磨された平坦をなす面があり、これは打剥調整前の準備作業の可能性がある。円形だが下部は剥離が大きくなってしまい、直線形になっている。	11	撹乱
第121図 図版104 803	肥前産磁器	碗 底 部	– – 0.8	16.1	素材は荒磯文の肥前碗。これを内面より剥離したのち、内面から微細調整を行って整形している。全体の過半が欠損するが、剥離の大きさもおよそ一定で形状は略円形と想定される。技量をもった人物の手による良品である。	11	撹乱
第121図 図版104 804	薩摩産陶器	壺 胴 部	3.0 3.15 0.6	8.0	基本的には外面→内面の順序で剥離されるが、一か所内面からの剥離が大きくなり角を作ってしまっている。円形を意識したと思われるが、角が残り多面体を呈している。	11	撹乱
第121図 図版104 805	沖縄産 施釉陶器	碗 底 部	6.8 6.85 1.7	65.8	外面から大きく打剥されるが、入念さを欠き剥離されていない角が残されている。微調整もなされておらず、粗製である。他の製品は剥離角度が90°に近いが、この製品は素材形状を反映してか、剥離角度が小さめである。	11	撹乱
第121図 図版104 806	沖縄産 無釉陶器	壺 胴 部	3.5 3.7 0.9	15.0	内面から打剥して整形され、外面から微細な調整剥離をすることで完成されたもの。一か所のみ剥離されずに残った角が残るが、形状は略円形をなす。	19	撹乱
第121図 図版104 807	沖縄産 無釉陶器	擂鉢胴部	2.2 2.1 0.95	6.9	擂鉢を素材としている。調整は内面から剥離したのち、外面より微細調整を行って整形される。略円形をなすが、一か所外面からの微細調整が大きくなってしまっている。	11	撹乱
第121図 図版104 808	明朝系瓦	筒 部 ?	2.2 2.3 1.7	10.1	小形の円盤状製品。一部裏面からの剥離調整を残すが、側面は研磨調整がなされ剥離面はほとんど残っていない。	11	撹乱



第121図　円盤状製品

797

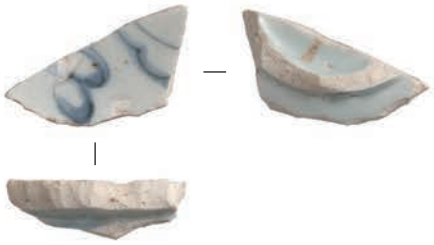
798

799

801

802

800


803

804

805

806

807

808

図版104　円盤状製品

第18節　玉類・玉製品・ガラス製品（第75表、第122・123図、図版105・106）

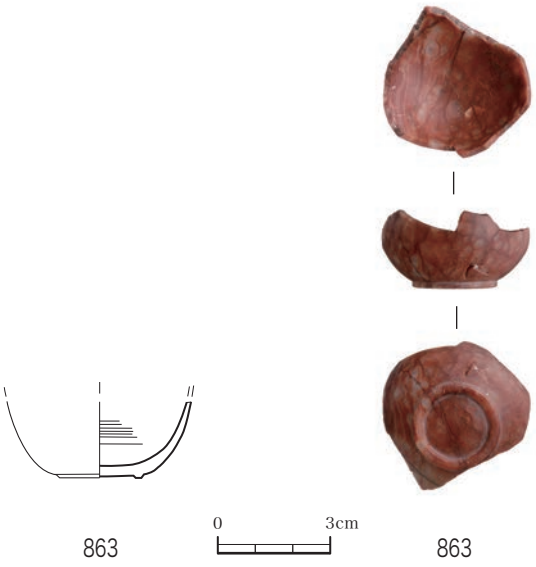
当地区において、玉類は77点、玉製品は３点、ガラス製品は４点出土しており、うち特徴的なもの23点を図化した。種類別にみると、玉類では管玉、勾玉、丸玉が出土しており、材質は石製とガラス製があり、その他玉製品には、玉髄を加工した製品が得られている。ガラス製品は、ビーズ以外の製品を指す。次に主な資料について報告する。

第123図826の管玉と824の勾玉は、色調・材質が類似しており、同一の材質である可能性が考えられる。また、丸玉は臼形、球形、扁平形など形状にいくつかのバリエーションがみられ、大きさは最大径が約３～５㎜に収まるものと、約５～12㎜の間に収まるものとがある。色調は、被熱や風化などにより本来の色調を保っていない資料も見受けられるが、現状で確認できる色調として白・黒のまだら状や灰色、白色、青色、緑色、赤色、半透明などがみられる。

玉製品では、玉髄を素材とした口縁部の欠損する小杯が１点得られた（第122図・863）。素材となる礫を粗く削って粗加工したと思われるが、底部に螺旋状に粗い研磨による線条痕が残ることから、粗加工の後に荒砥による研磨加工がなされている。さらに全体的に薄く線条痕が確認でき、目の細かい砥石によって丁寧に仕上げられたことが確認できる。このように粗加工後の２段階の研磨調整によって底部2.5㎜、胴部１㎜の薄さに仕上がった、製作者の技術と手間が投下された良品といえる。

なお、玉を加工した製品は首里城跡においてしばしば出土している。瑪瑙製品には黄金御殿地区に唐草文が線刻される石製品、城郭南側下地区１層では研磨・穿孔のみられる瑪瑙製品が出土している。翡翠製品には木曳門跡地区・用物座跡地区よりボウル状製品が合計３点出土しており、これらは台湾製と報告されている。翡翠製品は詰所地区砂礫土層からも研磨等の加工面の残る石製品が６点集中して出土している事例や、城の下地区表採資料の不明石製品には丁寧な切断面が残ると報告されている。また蠟石製品には右掖門地区から外面に唐草文が線刻されるシャーレ状容器と皿状製品、城の下地区客土より容器が出土している。

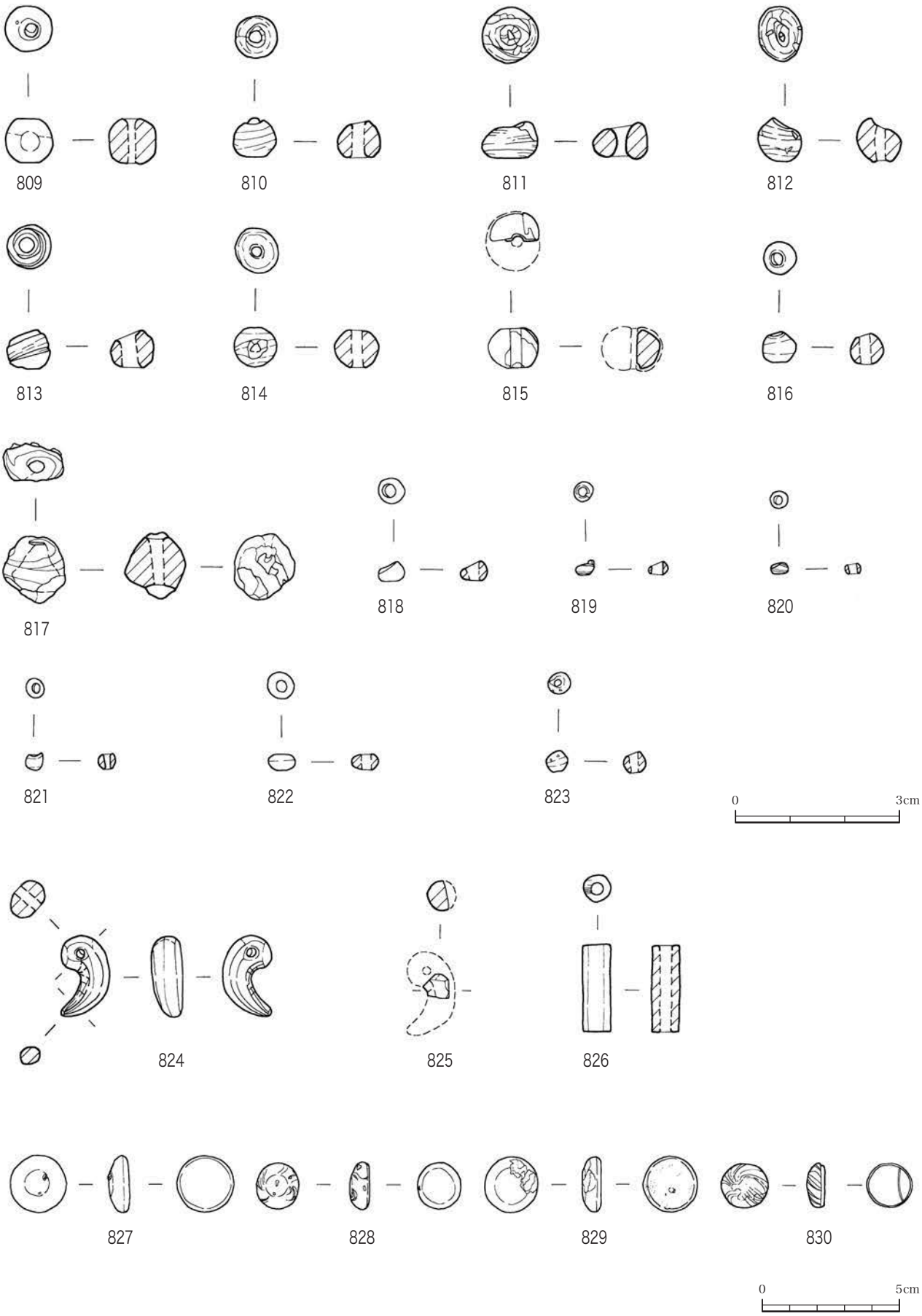
ガラス製品は４点を図化した（第123図827～830）。形状は平面が円形で、碁石の片面を扁平にしたような丸餅形を呈する。直径は15～20㎜、厚さ６～７㎜で、サイズは大小の２種が認められ、小型の資料が厚手に造られている。色調は黒色と緑白色の２種があり、風化した表面は、細かい流文状の筋が確認できる。この特徴から、製造にあたり溶解したガラスを鉄板のような平坦な場所に落とし、冷却させたことが想定できる。用途については、形状や色調から碁石やおはじきを考えることができるが、詳細は不明である。



第122図　玉髄製小杯　　図版105　玉髄製小杯

第75表　玉類・玉製品・ガラス製品観察一覧　　（　）は破損

図 図版 番号	名称	材質	完破 部位	法量（㎜・g） 高さ／最大長 幅／最大径 孔径	重量	観察事項	調査 年度 （平成）	グリッド 層
第123図 図版106 809	丸玉	石製	完形	8.0 9.0 2.0	1.0	形状はやや縦長で、いびつな球形を呈す。色調は灰色。	19	B−3 裏込内 （石積み2北側）
第123図 図版106 810	丸玉	ガラス	完形	6.0 8.0 2.0	0.5	形状は臼形を呈す。表面に螺旋状の筋が明瞭に残る。縦に筋が入っている。色調は白色。	19	C−4 炭混粘土層
第123図 図版106 811	丸玉	ガラス	完形	6.5 10.0 3.0	0.68	形状はいびつな扁平形を呈す。被熱により一部が溶けていると思われる。螺旋状の筋が残る。色調は白色。	19	C−5 方形落込内
第123図 図版106 812	丸玉	ガラス	完形	8.0 8.0 1.0	0.58	形状はいびつな球形を呈す。被熱による変形だと思われる。螺旋状の筋が明瞭に残る。風化による白色化が進んでいるが、色調は青色。	19	C−5 3層表面
第123図 図版106 813	丸玉	ガラス	完形	7.0 8.0 3.0	0.43	形状は臼形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。 風化による白色化が進んでいるが、色調は青色。	19	C−4 炭混粘土層
第123図 図版106 814	丸玉	ガラス	一部 破損	7.0 8.0 2.0	(0.63)	形状はややいびつな球形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は緑色。	19	B−3 裏込内（石積み2北側）
第123図 図版106 815	丸玉	ガラス	半欠	7.0 (5.0) 1.0	(0.62)	形状は臼形を呈す。風化により黒の素地が露出している。色調はにごった緑色。	19	E−4 5層
第123図 図版106 816	丸玉	ガラス	完形	5.5 6.0 2.0	0.29	形状はややいびつな球形を呈す。色調は緑色。	11	撹乱
第123図 図版106 817	丸玉	ガラス	−	12.0 11.0 2.0	1.13	被熱により溶け、形が変形していると思われる。螺旋状の筋が残る。色調は青色。	19	B−3 裏込内
第123図 図版106 818	丸玉	ガラス	完形	3.5 5.0 2.0	0.08	形状はややいびつな扁平形を呈す。風化により表面がアバタ状を呈す。螺旋状の筋が残る。色調は青色。	19	B−4 シーリ内 黒褐色土
第123図 図版106 819	丸玉	ガラス	完形	2.5 3.5 1.5	0.04	形状は扁平形を呈す。下端の一部が尖り、螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は青色。	19	C−5 3層表面
第123図 図版106 820	丸玉	ガラス	完形	2.0 3.0 1.0	0.01	形状はややいびつな扁平形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は青色。	19	C−5 3層表面
第123図 図版106 821	丸玉	ガラス	完形	3.0 3.0 1.0	0.07	形状は臼形を呈す。上端の一部がとがる。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は半透明。	19	B−5 シーリ内 黒褐色土
第123図 図版106 822	丸玉	ガラス	完形	3.0 5.0 1.5	0.12	形状は整った扁平形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。色調は赤色。	19	B−5 シーリ内 木炭層
第123図 図版106 823	丸玉	ガラス	完形	4.0 4.0 1.5	0.08	形状は整った球形を呈す。螺旋状の筋が明瞭に残る。 色調は赤色。	11	撹乱
第123図 図版106 824	勾玉	石製	完形	29.0 17.5 4.0	6.87	丁寧に整形され、非常になめらかな表面。尾部がとがり、頸部に研磨痕が明瞭に残る。色調は白と黒まだら模様。	19	B−4 2層
第123図 図版106 825	勾玉	石製	頸部	− − −	(1.22)	頸部に研磨痕が残る。色調は灰白色。	19	B−4 黄褐色土
第123図 図版106 826	管玉	石製	完形	31.5 10.0 4.0	5.89	丁寧に整形され、非常になめらかな表面。色調は白と黒まだら模様。	19	B−4 2層
第123図 図版106 827	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ：6.7 20.5 −	4.54	黒色で丸餅状の扁平な形状。表面はざらつき光沢はない。下部に流文状の筋あり。	11	I−9 南側
第123図 図版106 828	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ：6.9 15.9 −	2.67	黒色で丸餅状、小型のタイプ。表面はざらつき光沢はない。全面に流文状の筋あり。白砂状の粒子が混入する。	11	撹乱
第123図 図版106 829	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ：6.6 18.8 −	4.15	緑白色の製品。表面はやや光沢を発するが、微細な気泡が確認できる。一部に鉄錆が付着する。	11	撹乱
第123図 図版106 830	ガラス 製品	ガラス	完形	厚さ：6.6 17.0 −	2.09	緑白色の小型製品。表面は風化により白濁するが、流文状の筋は全面に明瞭。	19	B−1 石積み4 裏込内（黄）
第122図 図版105 863	玉杯	玉髄	破片 底部	胴部厚：1.0 底部厚：2.5 底径：22.0	(10.25)	玉髄の小円礫を剝り貫いて杯状にし、荒砥による整形、細砥による研磨によって光沢を出したとみられる。底部に荒砥による線条痕が残る。	11	J−9 灰混層



第123図　玉類・ガラス製品

図版106　玉類・ガラス製品

第19節　貝・パイプウニ製品（第76表、第124図、図版107）

当地区では、貝匙や貝匙作出後の残核、研磨製品、穿孔製品、独楽、碁石など18点の貝製品が得られている。

第124図831、832は貝匙と思われる製品である。831は全面が研磨されている製品で、特に外面は全面に真珠層が露出して光沢をなしている。柄部は欠損している。第124図832は、形状こそ貝匙に類似するが、表層が一部剥がれているのみで全面とも研磨が確認されないため、人工物ではない可能性がある。これも柄部に当たる部位が欠損している。

第124図833はイモガイ科の貝を穿孔した製品で、貝頭部以外を切り取り、中央を穿孔している。第124図834はヤナギシボリイモを研磨した製品で、全面が研磨される。特に表裏面は研磨によって平坦をなしている。第124図835は貝製の独楽である。マガキガイ体層部を打ち欠いて螺軸を露出させている。頭部の突起には使用によると思われる摩耗が認められる。首里城黄金御殿地区など各地に出土事例がみられる。第124図836は背面中心に研磨を施し、上下２つの穿孔が施される。上のものは背面より、下のものは表面より打撃によって穿孔される。破損は成品後とみられ、右半分が欠損する。

第124図838はパイプウニの棘を研磨したもので、研磨によって凹みが形成された製品である。端部が欠損しているため詳細は不明である。第124図837は貝を素材とした碁石で、表裏とも丁寧に研磨され光沢をなす。剥離調整の影響で、背面が内反している。首里城右掖門及び周辺地区などに出土事例がみられる。

図版107−839、840は、製作・使用に伴う痕跡がみられないことから、貝製品の残核とみなされる資料である。839はヤコウガイ貝殻に楕円形の孔と円形の孔が体層から打ち欠かれている。前者のものは形状から貝匙素材の割り取りによるものと思われる。後者の孔は紐をとおして海中に貝殻を飼育ストックするための孔とみられている。840も明確な製作・使用痕はないが、839と同様にヤコウガイ貝殻体層の平坦部に直径1.5㎝の円形の孔が打ち欠かれ、同様の用途が想定される。多くの近世遺跡で出土し、首里城城郭南側下地区など首里城内にも類例は多い。同様に御内原地区においても貝製品が製作されていたことを窺わせる。

当地区から出土した貝製品は、首里城の各地区やその他の近世集落跡の資料と大きな差異は見出されなかった。これは当地区が御内原の中でも女官居室に該当することが考えられ、女官達が日常使用する道具自体は平民階層と大差ないものであったことが反映されたものと思われる。

〈参考文献〉

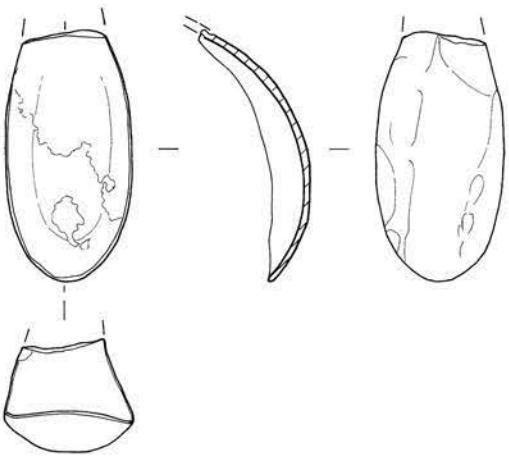
金城達 2004.3「第22節 貝製品」『首里城跡 −城郭南側下地区発掘調査報告書−』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集 p109-111 沖縄県立埋蔵文化財センター

羽方誠 2007.3「第２節 黄金御殿地区の遺構と遺物」『首里城跡 −黄金御殿地区発掘調査報告書−』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第45集 p26-78 沖縄県立埋蔵文化財センター

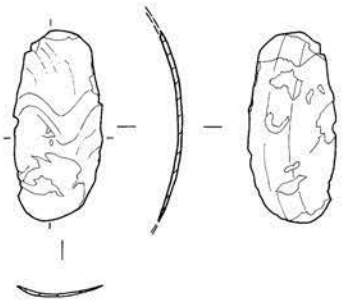
第76表　貝・パイプウニ製品観察一覧

（　）は破損

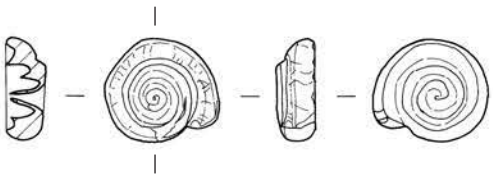
図 図版 番号	名称	貝種	完・破	法量（㎜・g） 縦 横 高〔厚〕	重量	観察事項	調査 年度 （平成）	グリッド 層
第124図 図版107 831	貝匙	ヤコウガイ	破	(66.0) 34.0 2.0	9.97	全面研磨。特に外面は全面真珠層が露出して光沢をなす。破損した製品。柄部欠損。	19	撹乱
第124図 図版107 832	貝匙？	ヤコウガイ	破	(50.0) (23.0) 1.0	2.0	表層が一部剥がれているのみで全面とも研磨が確認されないため、人工品でない可能性がある。柄部欠損	19	B－5 シーリ内木炭層（畦）
第124図 図版107 833	イモガイ 研磨製品	イモガイ科	完	27.0 30.0 10.0	9.26	全面研磨。特に表裏面は研磨によって平坦をなしている。完形品。	19	E－4 5層
第124図 図版107 834	イモガイ 穿孔製品	ヤナギ シボリイモ	完	30.0 32.0 17.0	14.86	貝頭部以外を切り取り、中央を穿孔したもの。完形品。	19	E－4 5層
第124図 図版107 835	独楽	マガキガイ	完	－ 26.0 31.0	10.87	マガキガイ体層部を打ち欠いて螺軸を露出させている。頭部の突起には使用によると思われる摩耗が認められる。完形品。首里城黄金御殿地区など各所に出土事例。	19	E－4 6層
第124図 図版107 836	穿孔製品	ウミギク科	破	－ － －	5.34	背面中心に研磨を施し、上下2つの穿孔が施される。上のものは背面より、下のものは表面より打撃によって穿孔される。破損は成品後である。右半分が欠損。	11	撹乱
第124図 図版107 837	碁石	—	完	21.5 21.0 4.0	2.87	貝を素材とした碁石。表裏とも丁寧に研磨され光沢をなす。剥離調整の影響で、背面が内反している。完形。首里城右掖門及び周辺地区などに出土事例。	11	撹乱
第124図 図版107 838	パイプウニ 棘研磨製品	パイプウニ	完	(60.0) 9.0 －	3.37	ウニの突起に研磨によって凹みが形成された製品。端部が欠損しているため詳細不明。	11	撹乱
図版107 839	貝匙残核	ヤコウガイ	破	140.0 177.0 －	828.8	ヤコウガイ貝殻に円形の孔と楕円形の孔が体層から打ち欠かれている。おそらく前者は直径1.5㎝、後者は貝匙製作のための素材剥片の割り取りによるものと思われる。首里城城郭南側下地区に孔直径1.9㎝の出土事例。	19	B－1 石積み6 西側上層
図版107 840	穿孔された ヤコウガイ	ヤコウガイ	完	159.0 175.0 －	1010.4	ヤコウガイ貝殻体層の平坦部に直径1.5㎝の円形の孔が打ち欠かれている。これは紐に吊るして海中にストックしておくためのものとされる。首里城城郭南側下地区に孔直径1.1㎝の出土事例。	11	撹乱



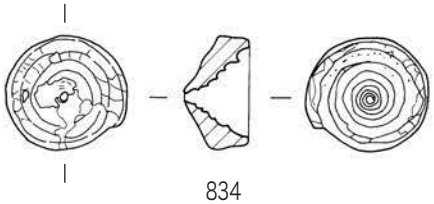
831



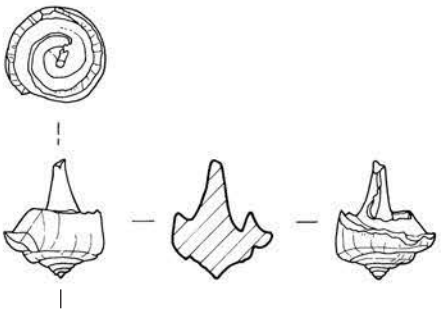
832



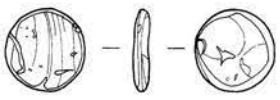
833



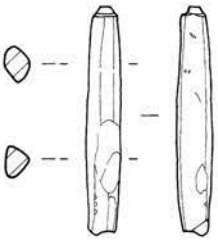
834



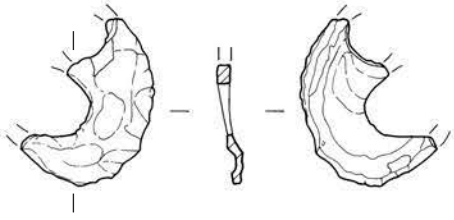
835



837

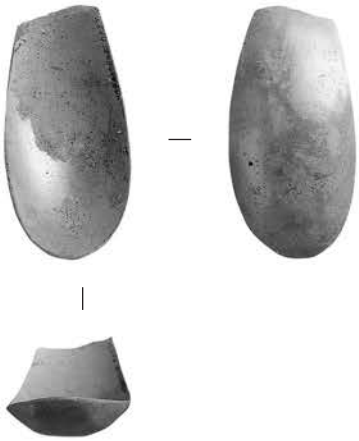


838



836

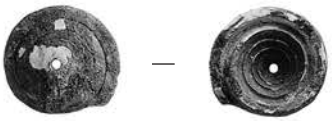
第124図　貝・パイプウニ製品



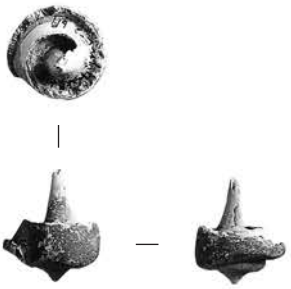
831

832

833

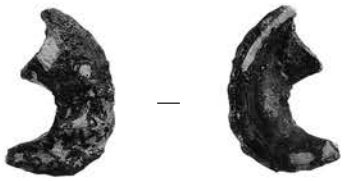


834



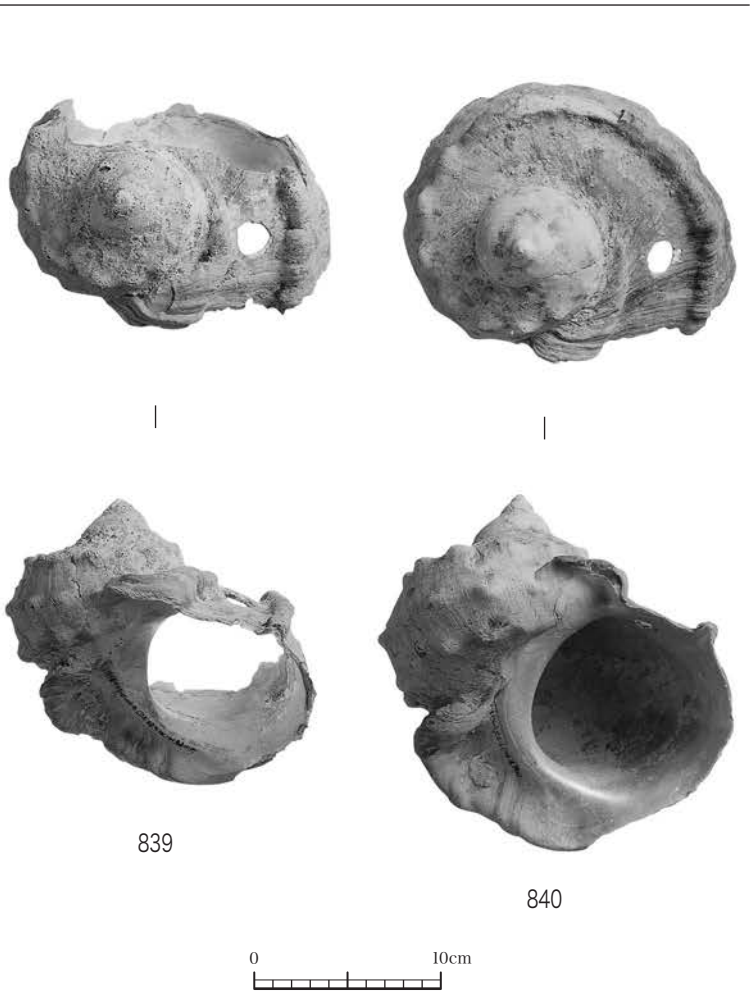
835

837



836

838



839

840

図版107　貝・パイプウニ製品

第20節　骨製品（第77表、第125図、図版108）

当地区では38点の骨製品が得られており、その内9点を図化した。

第125図841は完形の菱形式骨鏃で、茎部は円形、舌部は方形をなし、刃部は断面菱形である。削ったのち丁寧に研磨され、表面は光沢をなす。おそらくは実用的な製品であり、グスク時代に類例が多い。842は彫刻の施された骨製品である。表面に線刻で文様が施され、内面部は断面三角状に切られ、さらに研磨して整形される。線刻は鳳凰や草木が線刻により描かれている。用途は不明。843は骨製のビードで、サメの椎体を素材とし、中央が穿孔される。孔には紐ずれを残す。

第125図844～846は篦状骨製品である。844は半円形をなし、全体に研磨調整がなされる。孤をなす部分には中央部を除いて刃縁に対して垂直方向の線条痕が顕著に残る。845は全体的に研磨される。かなり使用されたらしく、刃縁が鈍くなっている。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯がはまり、その周囲は錆が付着している。846は板状の製品で、全体的に研磨される。両端には短軸方向に線条痕が残る。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯がはまり、その周囲は錆が付着している。おそらく845、846と同様に本来は半円状の製品で、下半が欠損したものと思われる。勝連城跡や渡地村跡など、篦状骨製品は近世よりグスク時代の遺跡において多く類例が得られ、特に骨鏃との伴出例が多い。そのことから比較的古い時期から用いられた道具であったと思われる。第125図847は用途が判然としない製品で、骨を長軸方向に研磨し、中央に溝を刻んでいる。

第125図848、849は近代以降の遺物である。848は歯ブラシで、ブラシ部と柄部が接合可能な個体。ブラシは植毛のための穴が3列組まれ、両端は17、中央は18、ブラシ頭部に3個開いている。柄はブラシに対し外反している。ともに丁寧に研磨され、光沢をなす。首里城御内原地区でも同形状の柄が出土している。849はボタンで、表面中心に研磨され、さらに糸通しの孔が5ヶ所穿たれている。首里城御内原地区でも出土している。

以上のように、出土骨製品の組成は概ねグスク時代と大差ないものであった。これは当地区の年代観とともに、骨製品が実用品としてグスク時代から近世にかけて変わることなく使われていたことを示唆する。一方で近代以降の骨製品もあり、この場所の土地利用の変遷を窺わせる。

〈参考文献〉

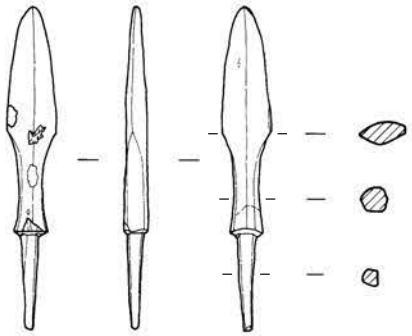
上原静 1990.3「第1節 遺物」『勝連城跡 –北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査–』勝連町の文化財第11集p18-114 勝連町教育委員会

喜多亮輔 2004.3「第18節 骨製品」『首里城跡 –御内原地区発掘調査報告書–』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集p131 沖縄県立埋蔵文化財センター

喜多亮輔 2007.7「33節 骨製品」『渡地村跡 –臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告–』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集p205-206 沖縄県立埋蔵文化財センター

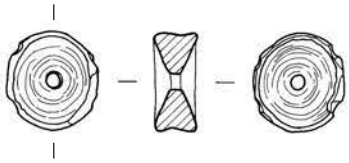
第77表　骨製品観察一覧

図 図版 番号	名称	材質	部位	法量（㎜・g） 縦 横 高〔厚〕	重量	観察事項	調査 年度 （平成）	グリッド 層
第125図 図版108 841	骨鏃	ジュゴン	肋骨	85.0 12.0 7.0	4.30	完形の骨鏃。茎部は円形、舌部は方形をなし、刃部は断面菱形をなしている。削ったのちに丁寧に研磨されており、表面には光沢をなす。	19	E−4 6層
第125図 図版108 842	彫刻製品	ウシ？	肋骨？	14.5 47.0 6.0	2.73	表面に線刻で文様が施され、内面部は断面三角状に切られ、さらに研磨して整形される。線刻は草木が彫られる。	11	撹乱
第125図 図版108 843	ビード	サメ	椎体	26.0 24.0 11.0	3.88	中央が穿孔された製品。表面に紐ずれ痕を残す。	11	J−9 遺構上西
第125図 図版108 844	篦状骨製品	ウシ？	肋骨	35.5 18.0 1.0	1.07	半円形で、全体に研磨調整がなされる。孤をなす部分には中央部を除いて刃縁に対して垂直方向の線条痕が顕著に残る。	19	B−5 3層表面
第125図 図版108 845	篦状骨製品	ウシ？	肋骨	41.0 12.0 2.0	0.89	半円状の製品で、全体的に研磨される。かなり使用されたらしく、刃縁が鈍くなっている。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯がはまり、その周囲は錆が付着している。	19	B−5 シーリ内木炭層（畦）
第125図 図版108 846	篦状骨製品	ウシ？	肋骨	42.5 8.0 2.0	0.74	板状の製品で、全体的に研磨される。両端には短軸方向に線条痕が残る。また中央部に3つの穿孔がなされ、そこにはおそらくジョイントと思われる鉄芯がはまり、その周囲は錆が付着している。おそらく844と同様に本来は半円状の製品で、下半が欠損したものと思われる。	19	B−5 シーリ内木炭層
第125図 図版108 847	有溝製品	ウシ？	肋骨	− 12.0 3.0	2.08	骨を長軸方向に研磨し、中央に溝を刻む製品。	11	撹乱
第125図 図版108 848	ハブラシ	ウシ？	肋骨？	138.5 10.0 5.0	6.05	ブラシ部と柄部が接合した個体。ブラシは植毛のための穴が3列組まれ、両端は17、中央は18個、ブラシ頭部3個開いている。柄はブラシに対し外反している。ともに丁寧に研磨され、光沢をなす。	11	J−8 茶褐色 灰混層
第125図 図版108 849	ボタン	—	—	16.0 16.0 3.0	0.83	洋服ボタンで、表面中心に研磨され、さらに糸通しの孔が5か所穿たれている。	11	撹乱



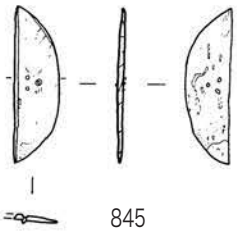
841

842

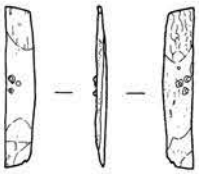


843

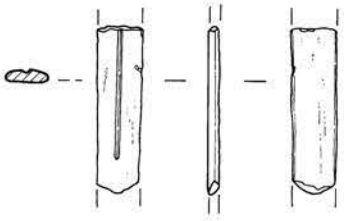
844



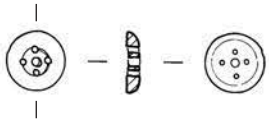
845



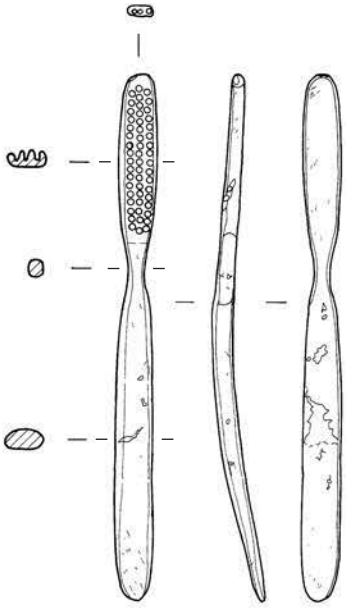
846



847



849



848

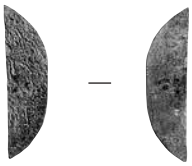
第125図　骨製品

841

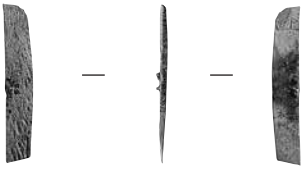
842

843

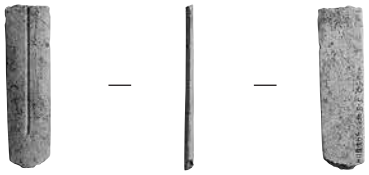
844



845

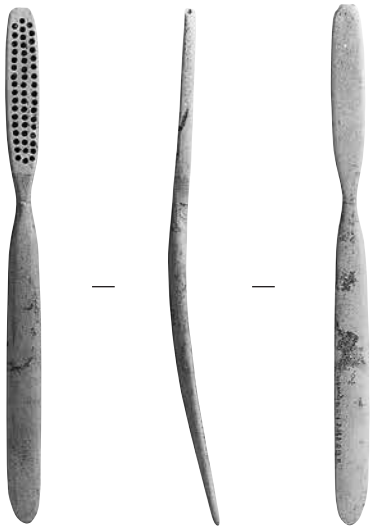


846



847

849



848

図版108　骨製品

第21節　石製品・石造製品（第78表、第126～128図、図版109～111）

当地区では53点の石製品・石造製品が得られている。個別の観察所見は第78表に譲り、ここでは特徴的な14点を図化し、概括的な見解を述べることとする。

第126図850、851は硯である。ともに山口県の赤間石と想定される赤色頁岩を素材とし、形状は今日使われる硯と同様である。この型の硯には裏面によく文字が刻まれるが、双方ともその例に漏れない。これらは「赤間」「赤間関」と刻まれ、赤間硯であることを窺わせる。

第126図852～855は砥石である。大きさや重量から852～854は手持ち砥石、855は固定砥石と思われる。852～854は、いずれも形状に共通点がみられず、石材も砂岩・頁岩・流紋岩と異なる石質のもので、規格性はみられない。使用箇所もある程度の面積を持つ平坦面であれば使用しており、消費的な道具であることが窺える。対して855は、側面に整形の痕跡を残すなど製作にも手間が加えられている。この両者の差は、使用期間やモノの価値などが反映したものと思われる。

第126図856は石球である。球状で全周に敲打調整によるあばた痕が覆っている。石球は遊具や石弾などが推定されている。後者に関しては首里城下之御庭地区で2.3kgの大形品、渡地村跡において192.2gのやや小形の石球に煤の付着しているものがみられ、大小に関わらず石火矢の石弾の可能性のある有力な資料である。本資料も形状・重量からみる限り後者のものとほぼ同じ形状であることから、遊具よりは石弾とする方が妥当と思われる。

第127図857～859は七厘である。3点とも被熱によって脆くなっており、また赤褐色化や炭化物の付着がみられる。857、858は石材・形状から同一個体と思われるが、接合しなかったため別個体として扱った。凝灰岩は沖縄本島内でも主に南部で採集可能であるが、859のグリーンタフは久米島に特有の石材である。いずれにせよ、用途を想定した石材選択といえよう。

石造製品では、勾欄の羽目板・部材、持送り石が得られている。第128図860の勾欄の羽目板、同861は勾欄の部材と想定され、共に細粒砂岩（ニービ）を丁寧に加工・装飾している。類例に首里城正殿跡出土資料が挙げられる。同862は持送り石と思われ、こちらは琉球石灰岩をやはり丁寧に加工・装飾している。いずれも往時の御内原の姿を想起させる資料である。

〈参考文献〉

上原静 2004.3「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』p371-400今帰仁村教育委員会

金城亀信 2007.7「31節 石製品・石器」『渡地村跡 –臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告–』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集p199-202 沖縄県立埋蔵文化財センター

知念隆博・新垣力 2004.3「第2節　遺構」『首里城跡 –城郭南側下地区発掘調査報告書–』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集p109-111 沖縄県立埋蔵文化財センター

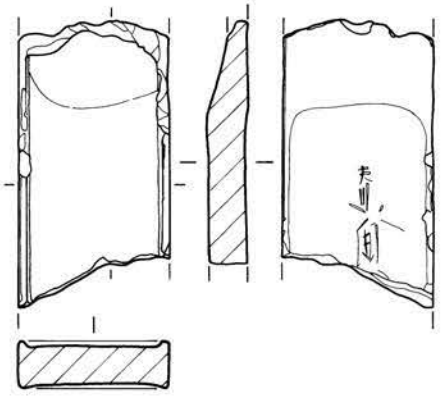
当眞嗣一 1994.12「火矢について」『南島考古』第14号p123-152　沖縄考古学会

当眞嗣一・上原静 1986.3『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会

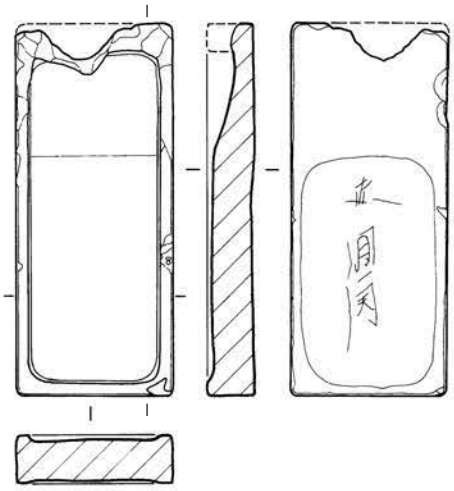
山本正昭 2001.3「第32節 石球」『首里城跡 –下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書–』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集p144-147 沖縄県立埋蔵文化財センター

第78表　石製品・石造製品観察一覧　　（　）は破損

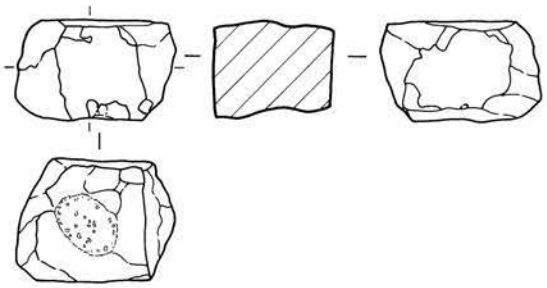
図 図版 番号	素材	石材	法量(cm・g) 縦 横 高〔厚〕	法量(cm・g) 重量	観察事項	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第126図 図版109 850	硯	赤色頁岩	(11.4) 6.0 1.6	(224.24)	一般的な形状の硯。石材からおそらく本土からの搬入品と思われる。背面に「赤間」と刻まれている。	11	J−8 茶褐色灰混層
第126図 図版109 851	硯	赤色頁岩	14.8 6.3 1.9	(349.11)	一般的な形状の硯。表面中心に長軸方向に線条痕が無数に残る。背面に「赤間関」と刻まれる。	11	撹乱
第126図 図版109 852	砥石	流紋岩	4.0 6.4 4.9	200.0	方形状の砥石で、表裏の他に2側面も滑面を有する。背面は敲打によって凹みができており、滑面は僅かに残る。	19	撹乱
第126図 図版109 853	砥石	砂岩	(7.5) 6.8 3.85	(240.2)	多角形状の砥石で、表裏の他に1側面も滑面を有し、線条痕も確認できる。側面には母岩の切り取り面も残る。	19	E−3 5層
第126図 図版109 854	砥石	頁岩	(6.4) (3.1) 1.1	(23.17)	札状の砥石で、表面をはじめ残る2側面にも滑面を有する。滑面には線条痕が残り、短軸側側面には溝状に残る。	19	撹乱
第126図 図版109 855	砥石	細粒砂岩 (ニービ)	(21.6) (13.3) (7.4)	(2180.0)	表面に滑面をもち、側面には整形のための粗割が残る。大きさから固定砥石と思われる。	19	撹乱
第126図 図版109 856	石球	細粒砂岩 (ニービ)	6.4 6.3 (2.5)	(129.01)	全周にあばた状の敲打痕が覆っている。半分に割れているようにみえるが、大きな加撃痕がないことから破損によるものではないと思われる。	11	撹乱
第127図 図版110 857	七厘	凝灰岩 (島尻層?)	12.2 − 2.8	(460.0)	七厘片。激しい被熱によって全体的に脆くなっているほか、内面には直火による変色や炭化物が付着。858と同一個体の可能性。口径19.0cm。	11	撹乱
第127図 図版110 858	七厘	凝灰岩 (島尻層?)	12.4 − 2.8	(980.0)	七厘片で、接合によって約半分ほどに復元。激しい被熱によって全体的に脆くなっているほか、内面は直火によって変色して褐色を呈する。また部分的に炭化物が付着。口径19.0cm。	11	撹乱
第127図 図版110 859	七厘	久米島 グリーンタフ	− − 3.6	(460.0)	七厘の底部片。激しい被熱によって全体的に脆くなっているほか、直火の部分は変色して褐色を呈する。また部分的に炭化物が付着。	11	撹乱
第128図 図版111 860	勾欄の 羽目板	細粒砂岩 (ニービ)	(16.2) (13.4) 7.0	(2080.0)	表裏とも彫刻がなされ、丁寧に研磨されている。	11	撹乱
第128図 図版111 861	勾欄の 部材？	細粒砂岩 (ニービ)	(19.8) 10.2 8.5	(3720.0)	表面と片側側面の側縁に彫刻が施され、明確に表と裏が意識されている。また表面部には3cm大の穴が残る。	11	撹乱
第128図 図版111 862	持送り石？	琉球 石灰岩	(17.0) (12.9) (10.9)	(1820.0)	平坦に切られた表面に懸垂文形に彫刻が施されている。また下面も弧状に切られ、表面下端にも彫刻がみられる。形状から持送り石と思われる。	19	撹乱



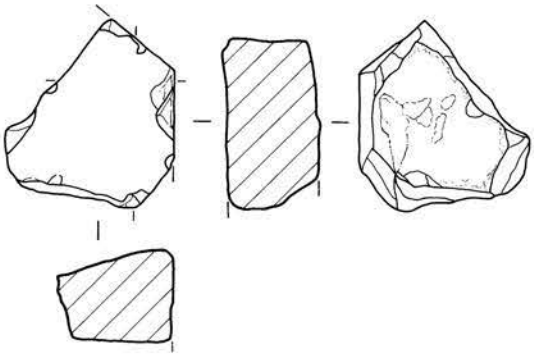
850



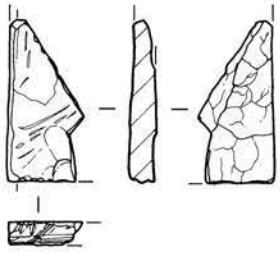
851



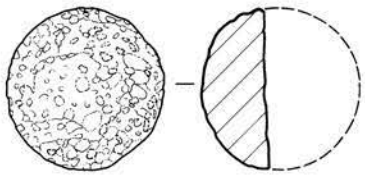
852



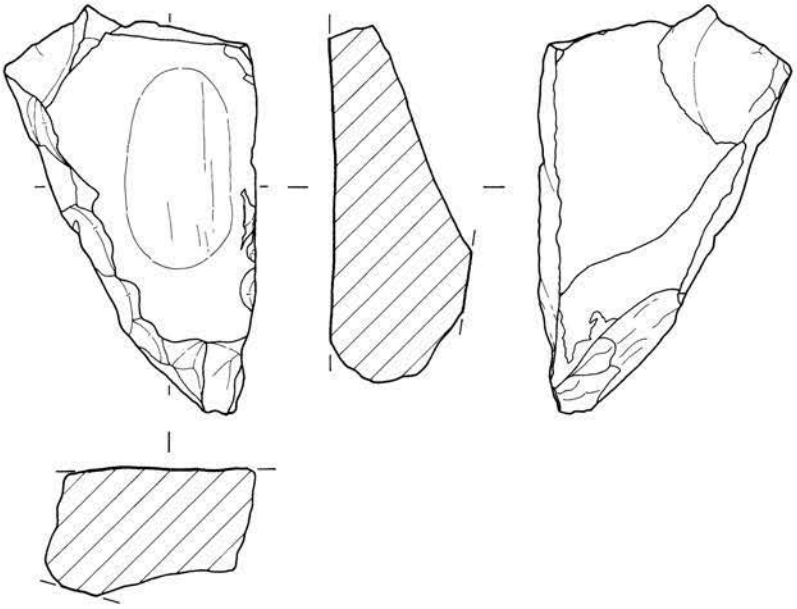
853



854



856



855

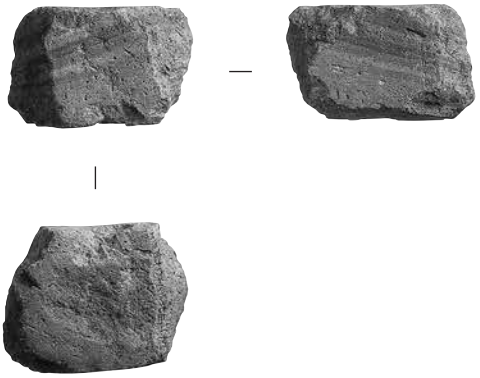
0 10cm

0 10cm

第126図　石製品１

850

851

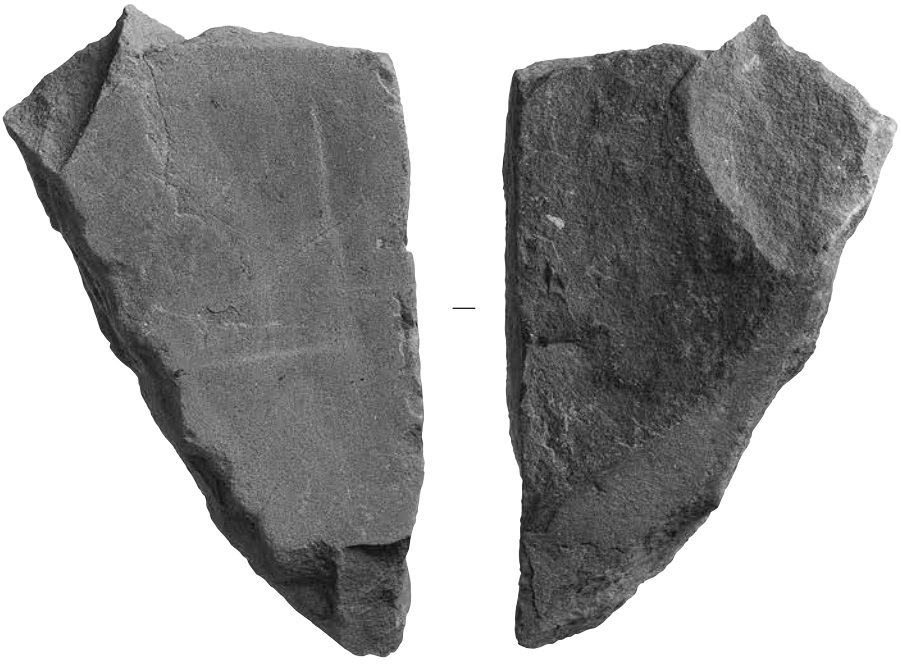


852

853

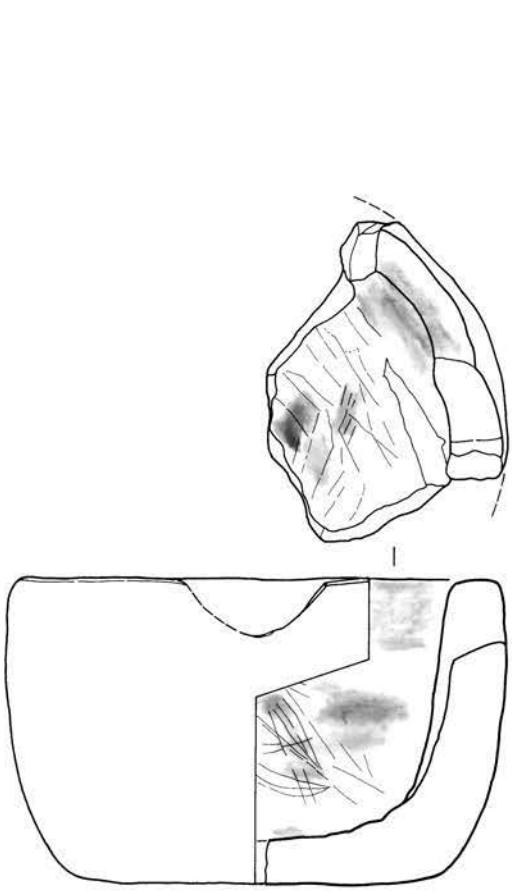
854

856

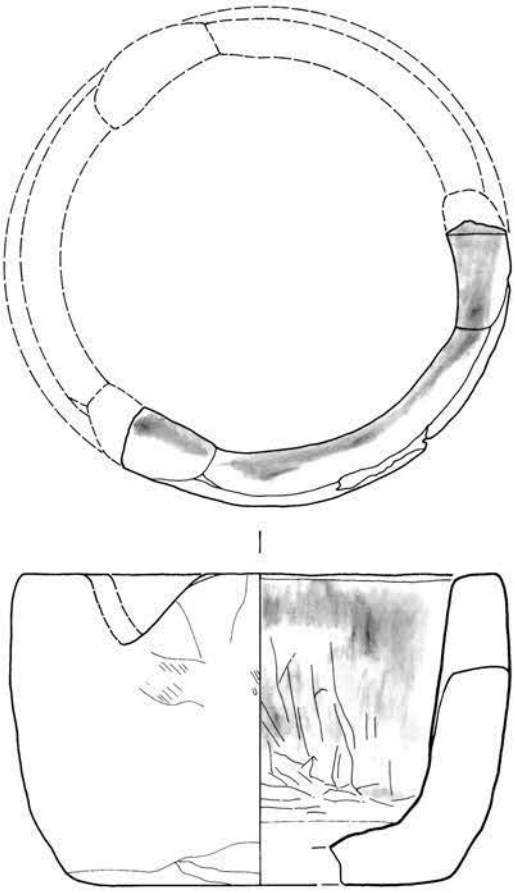


855

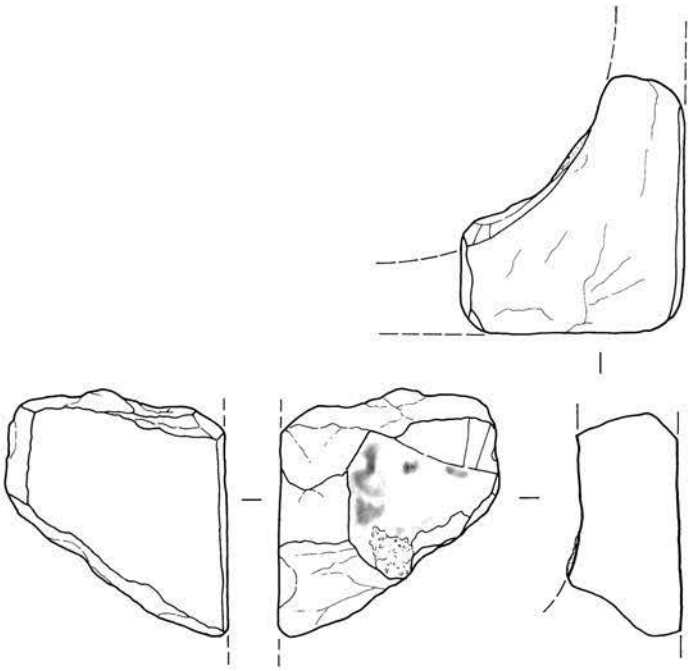
図版109　石製品１



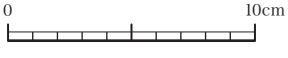
857



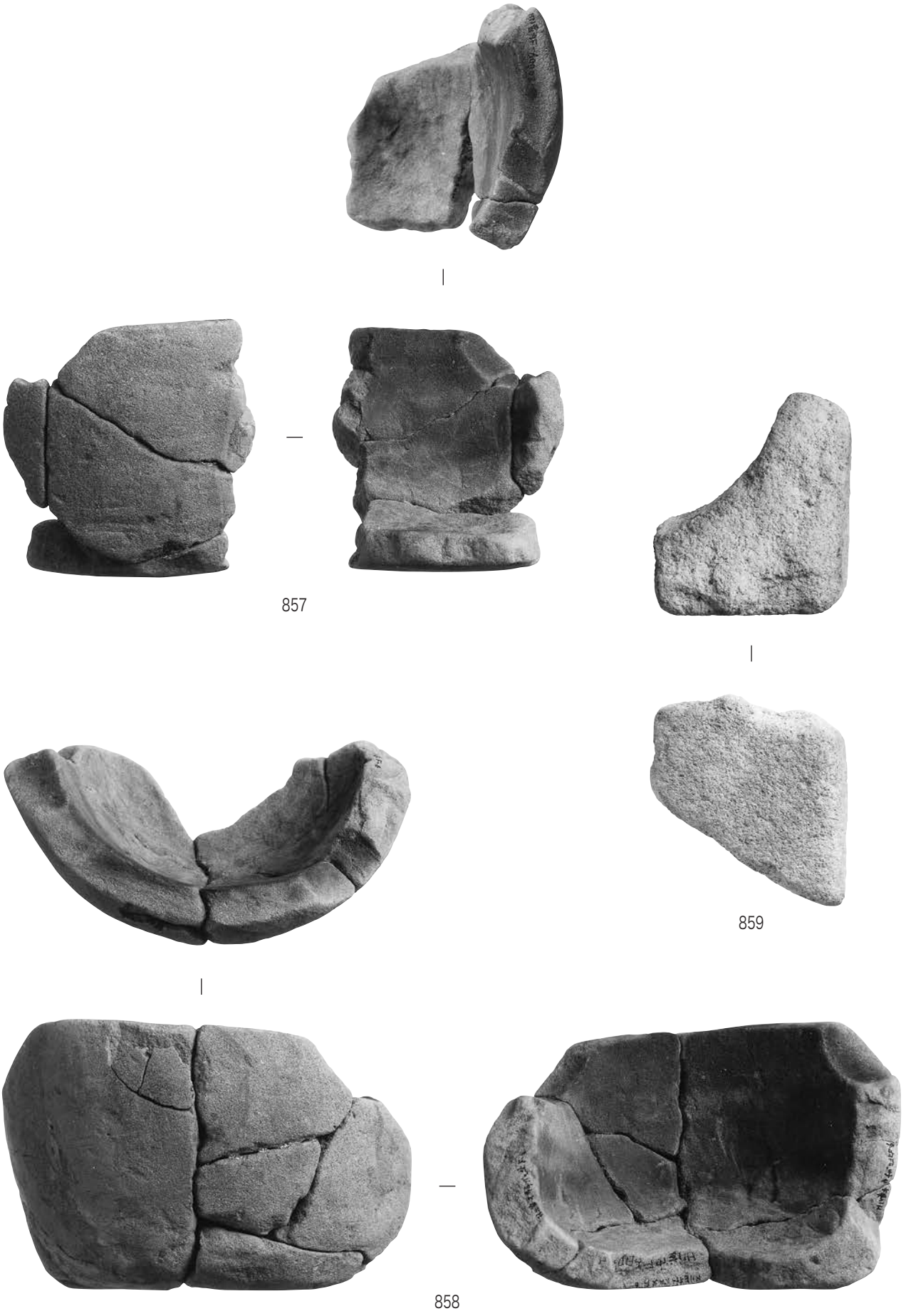
858



859



第127図　石製品２

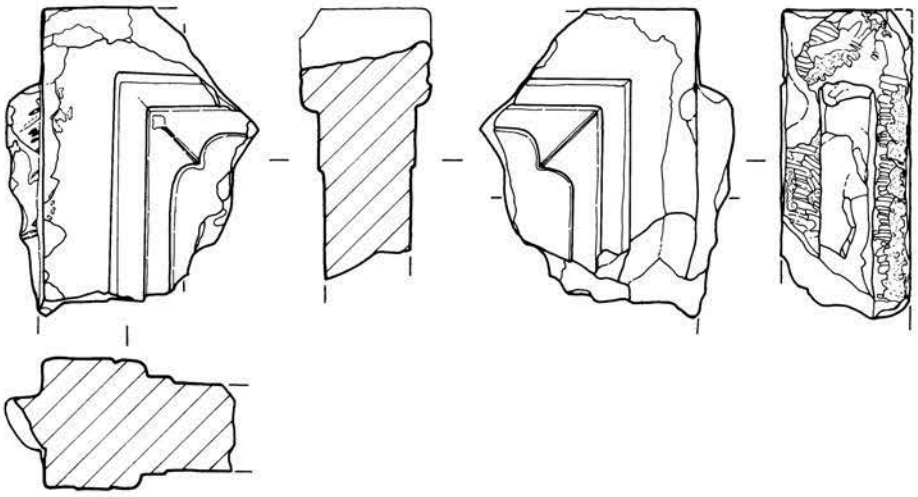


857

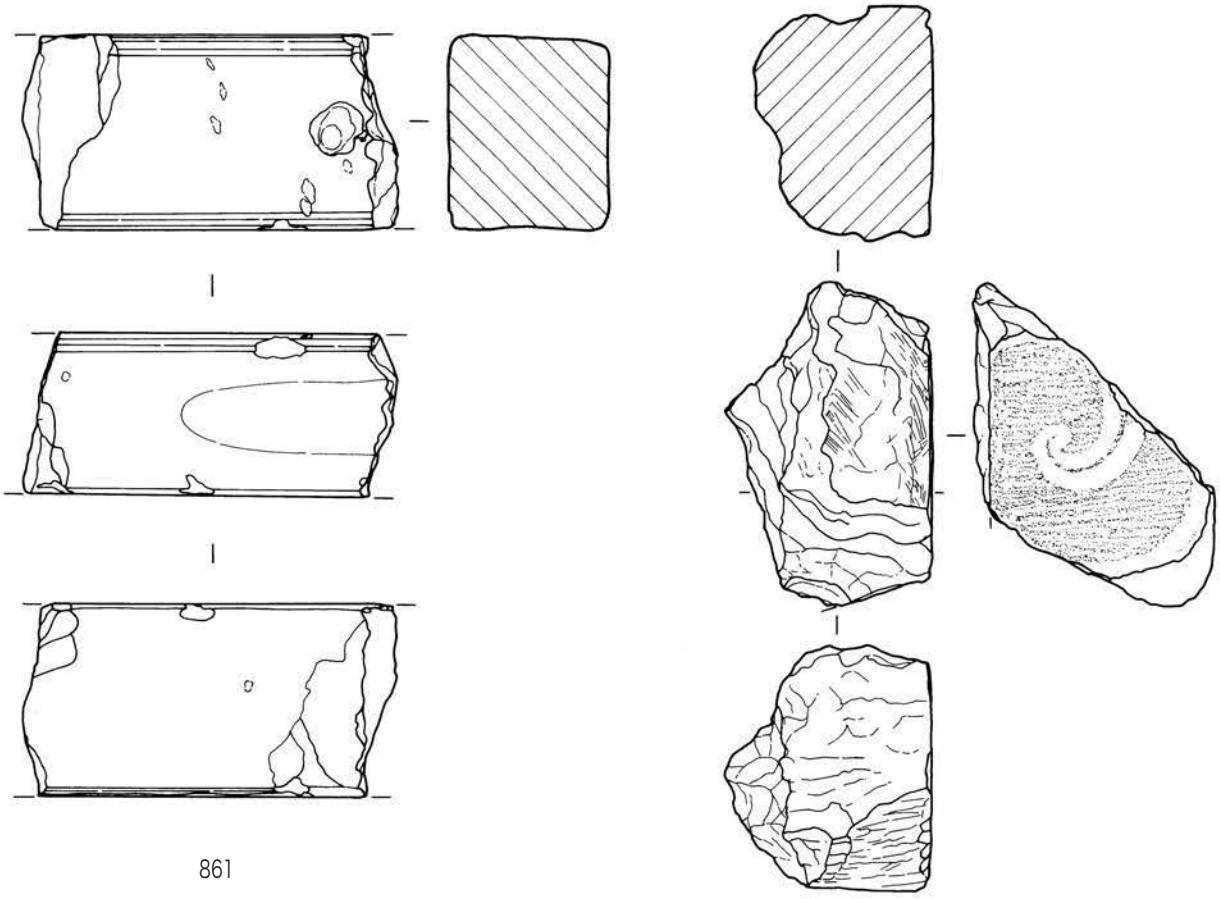
859

858

図版110　石製品２



860

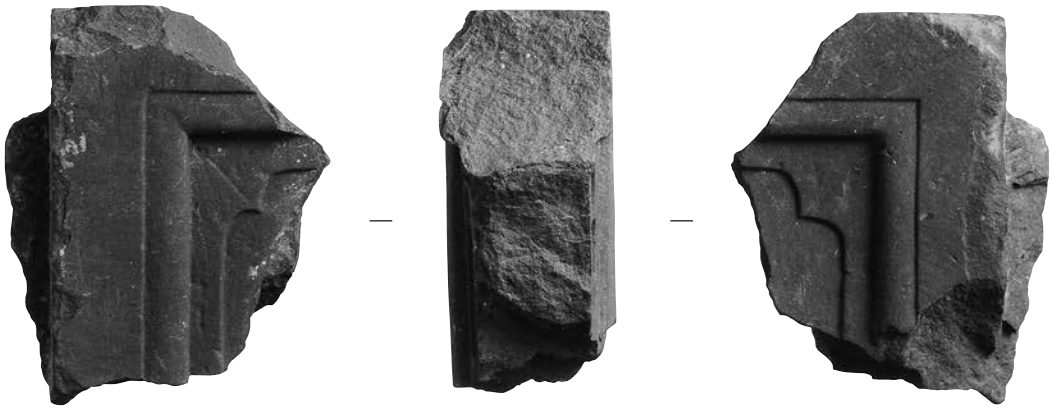


861

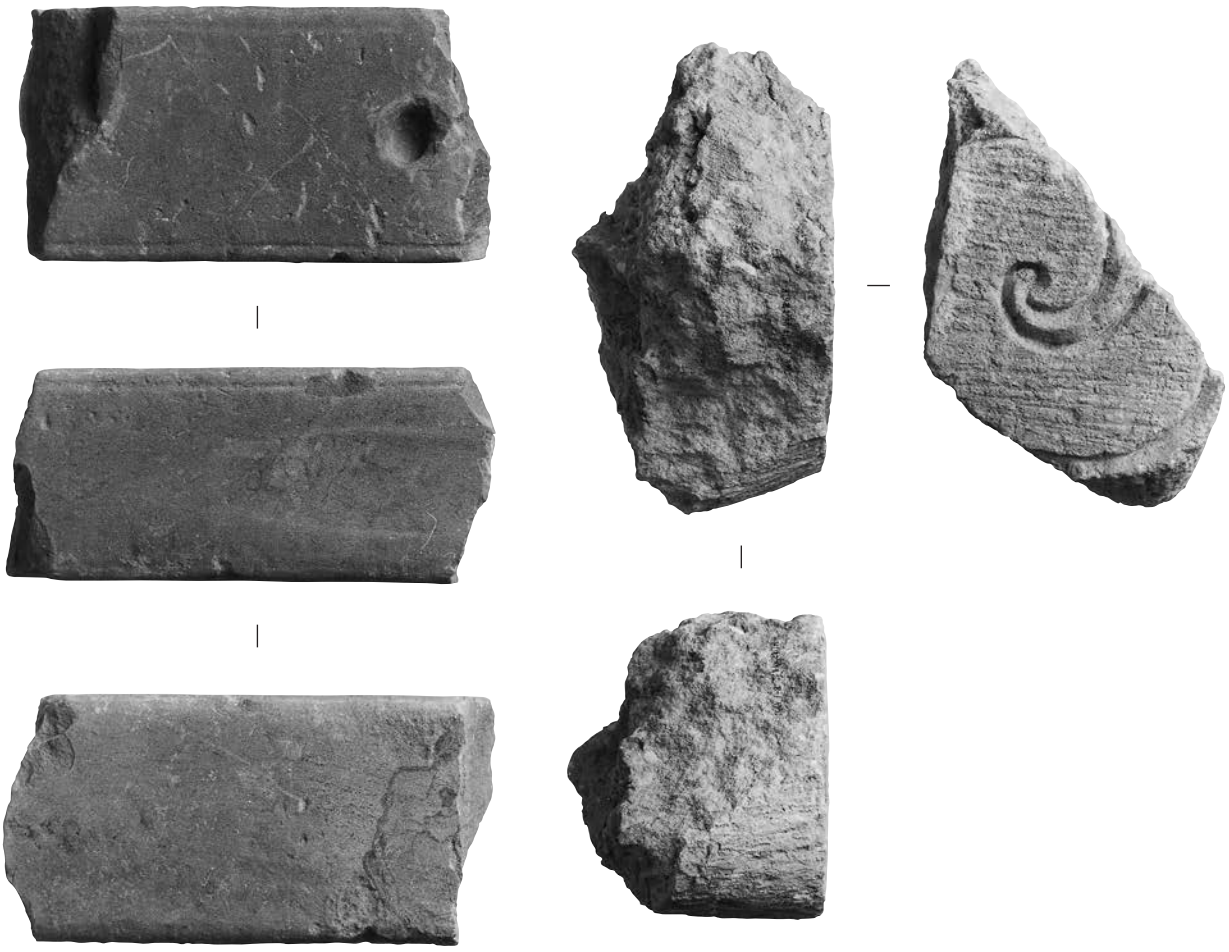
862

0 10cm

第128図　石造製品



860



861　　862

図版111　石造製品

第22節　木製品

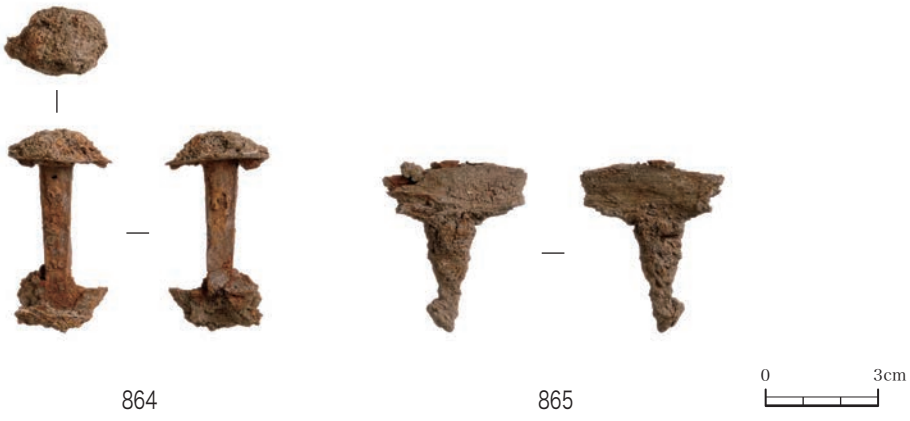
木製品は平成19（2007）年度に検出したシーリ遺構内から出土している。遺構内からは、膨大な量の動物骨とともに糞石も出土している。これは第４章６でも報告したように、遺構上面が粘土層により蓋がされたことにより内容物がパックされ、これらの有機物が残存したことが考えられる。

製品は総数で57点が得られ、全て破損しており、全形を窺うことはできないが、板状になると思われる木材に、竹製と思われる釘が貫かれた形で残る。木材は竹釘の両端に残る資料も見られ、竹釘は複数の木材をつなぎ留める目的で打ち込まれたことが考えられる。図版112−864の資料は竹釘の残りが良好な資料で、そのサイズは長さ50㎜、幅５～８㎜、断面は角部が明瞭な正方形である。幅は両端で異なることから、太い部分が頭部になると思われる。色調は暗茶褐色を呈し、細部を観察すると、竹の繊維と思われる組織が縦位に走る状況が確認できる。

図版112−865は、全面に木材が付着した状態で得られた資料である。破損部位から竹釘が確認できる。竹釘のサイズは、長さ45㎜、幅５×３㎜の断面が扁平な形状を有する。

釘部の残りがいいのに対し、木材部分は残りが悪く、本来の加工面は腐食により確認できない。しかし、両資料とも竹釘が打ち込まれる角度に対し、横位に木材の繊維が確認でき、色調は茶褐色を呈する。出土した木製品の大半は、この部位に限られ、先述したように製品の原型を想定するには資料不足であるが、伝世する琉球漆器として15世紀頃の製品も現存しており、かつての首里城ではさかんに漆器や木製品・木器が利用されていたことは想像に難くない。

遺構からの出土遺物は多岐にわたるが、生活に密接な器物類や食物残滓が中心であることからすると、この木製品も何らかの生活用具であったことが考えられる。



図版112　木製品

第23節　屋 瓦（第79～90表、第129～156図、図版113～137）

上原　静（沖縄国際大学）

はじめに

屋瓦は御内原北地区から6,111点が出土した。これらはほとんど破片で後述の明朝系丸瓦に一部接合して全体の形をみたのみである。ただ、これらの破片に残された特徴から造瓦技術別に大別するとグスク時代の高麗系瓦、大和系瓦、近世以降の明朝系瓦、近世大和瓦の４種類になる。出土量は高麗系瓦が0.4%（26点）、大和系瓦が39.9%（2,440点）、明朝系瓦が59.6%（3,645点）となり、この地区における建物や造成の変遷を示している。以下に、種類別に内容を紹介する。なお個々の特徴については第82～90表の観察表に記載した。

A. 高麗系瓦

高麗系瓦は冒頭にも述べたように出土量は僅かで、種類も軒平瓦、丸瓦、平瓦の3種類と少なく、軒丸瓦やその他の種類は得られていない。

A-1. 軒平瓦：軒平瓦は全体の形を示すものではなく、僅かに瓦当部片の一部である（第132図866）。高麗系瓦の軒平瓦は瓦当形態が幅広長方形タイプと長方形タイプの2種類存在することが確認されているが、その後者の破片に相当する。瓦当の文様は蔓と蕾が描かれている。同笵文様が浦添城跡にも出土している。

A-2. 丸瓦：玉縁を有する丸瓦で、高麗瓦特有の羽状打捺文様が凸面にみられる。全部で２点である。

A-3. 平瓦：平瓦片は23点出土している。平面形がほぼ長方形を呈し、凸面側の羽状打捺文様のみをみせる細片である。なお当該面に「癸酉年」文字銘などスタンプ刻銘部分を残す破片は含まれていない。

B. 大和系瓦

大和系瓦は高麗系瓦と異なり、造成遺構からまとまって得られた一括資料とそれ以外の堆積層から出土している。種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦、隅瓦の６種類で、明らかに建物で葺かれた構成で揃っている。

B-1. 軒丸瓦：軒丸瓦は６点得られるが、瓦当文は三巴文が１点認められるのみである。

B-2. 軒平瓦：軒平瓦は瓦当文様を中心に分析すると、唐草文様の1種類を確認することができた。ただ全体を残すものがみられず、いずれも破損資料が多いことから、瓦当部と平瓦部分に分けて、集計を試みた。総数10点である。

B-3. 丸瓦：丸瓦の破片は429点を数え、代表的なものを図化した。丸瓦の特徴を明らかにするため色調、大きさ、凸面の文様、凹面の処理、個体数の視点から分類した。

a．色調：色調は灰色と褐色の2種類に大別される。その比率は170対259である。破損資料が多いため、玉縁部、端部、筒部の三部分に分けた。個体数をみるため端部角が総数42点で、１個体につき左右の角を1つとして、２で割ると、おおよそ21点の個体が推定される。

b．大きさ：身の大きさの違いが認められ検討すると、玉縁の長さが小：４㎝未満、中：4.1～5.0㎝、

大:5.1㎝以上の三種に分けてみた。また、端部凹面の面取りの長さも1～7㎝までの8段階に分けて観察した。

c．**文様：**丸瓦の凸面に認められる叩き文様の種類は、羽状文、縄目文、その他に分けられる。また、基本的には撫で消し作業が行われ、いずれも消えかかり不明としたものが多い。

d．**凹面痕跡：**出土資料にみる圧痕はすべて刺網状の資料である。この網状の縦紐間の長さを測り、その状況を観察した。1.5㎝以下のものから4.1㎝のものの7段階に分けられる。

e．**端部処理：**端部面取りは1㎝以下から7.1㎝以上の8段階に分けた。

f．**個体数：**玉縁の数では74個体、端部角からの推算では21個体が推定される。

B-4. 平瓦：平瓦は1,782点の破片を確認した。器面は総て無文である。

a．**色調：**平瓦は色調が灰色と褐色を帯びるものがある。量的には881対901で、ほぼ同比率を示している。

b．**大きさ：**平面形はほぼ縦長の四角形で復元資料から横約29.4㎝の大きさになる。また、平瓦はその厚みは差がみられ3種類に分類される。

c．**厚み：**平瓦の大きさに反映していると推定され、3種類に分類した。基準は次の薄手:1.1～1.4㎝、中手:1.5～2.5㎝、厚手:2.1～2.5㎝である。

d．**側面：**側面の形態的な違いがあり、a～dの4種類に分類した（第79表）。

e．**端部処理：**端部にもその面取りの長さの違いがあり、1㎝以下から7.1㎝以上の間に8段階に分けられた。個体数をみるため角のみを集計すると総数246点で、完全形に4個体の角があることから、4で割った結果61点の個体数が推定される。

f．**文様：**平瓦は基本的には撫で整形が全体になされているが、わずかに叩き文様がみられる。文様は第136図896に示したX状の叩き痕である。

g．**個体数：**端部角からの推算では61個体が推定される。

第79表　大和系平瓦側面部の種類と説明

形態＼分類説明 記号		説　　明
	a	側面のナデ整形時に余りの粘土を凹面側に押し上げたもの。
	b	側面が二面の様になるもの。下面側に削り取り痕が残されている。
	c	側面の全ての角がナデ調整され、スムーズな曲面をなすもの。
	d	側面のコーナーが削りのままに近い稜をつくるもの。

B-5. 雁振瓦：雁振瓦はその大きさと形態から2種類に分けられる（第129図）。Ⅰ型（小形）は丸瓦部が小さく、その両側に平坦な平瓦が付く形の瓦である。総点数は200点である。第137・138図では代表的なものを図化した。Ⅱ型（大形）は丸瓦部が大きく、また、両側に付く平瓦は大きく湾曲した造形の瓦で、13点得られた。凸面の文様は羽状叩き文である。裏面の整形も特徴的でⅠ型とはその造形方法では異なり、形式的な推移を想定される。

第129図　雁振瓦の分類

B-6. 役瓦：わずか一例であるが玉縁状の破片である。ただし、その整形や破損面から丸瓦ではなく、瓦当部の一部に付いていた可能性もある。今後の追加資料がまたれる（第138図912）。

C. 明朝系瓦

明朝系瓦に属する種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、役瓦の５種が得られた。軒丸、軒平両瓦の分類基準として上原（註）を参照した。

C-1. 軒丸瓦

色調別には灰色系瓦と赤色系瓦に区分できる。文様は以下の３種類に大別される。草花文側視１型、側視２型、正視型である。さらに、側視花文１型は文様の系統によりA、B群に細分される。側視２型は４種類、正視型は１種類になる。色調と文様との関係をみると、灰色系瓦は牡丹文様と菊文様があり、草花文側視１型Ａ群、Ｂ群、草花文正視型に分類され他方、赤色系瓦も牡丹文様系に限定され、草花文側視１型Ｂ群、草花文側視２型に細分される。

以下、それぞれ細分した瓦の状況について紹介を進める。

Ａ群は７種類、Ｂ群は10種、側視２型は４種に、正視型は１種に分け、都合22種になる。

草花文側視１型	Ａ群 914	オウチＩＡａ01 (913)	オウチＩＡａ02 (914)	
		オウチＩＡｂ01 (915)		
		オウチＩＡｃ01 (916)	オウチＩＡｃ02 (917)	
		オウチＩＡｄ01 (918)		
		オウチＩＡｅ01 (919)		
	Ｂ群 922	オウチＩＢａ01 (920)	オウチＩＢａ02 (921)	
		オウチＩＢｂ01 (922)	オウチＩＢｂ02 (923)	オウチＩＢｂ03 (924)
		オウチＩＢｃ01 (925)		
		オウチＩＢｄ01 (926)		
		オウチＩＢｅ01 (927)	オウチＩＢｅ02 (928)	オウチＩＢｅ03 (931)
草花文正視型	938	オウチＩＡ01 (937・938)		
草花文側視２型	936	オウチＩａ (932)		
		オウチⅡａ (933)		
		オウチⅢａ (934)	オウチⅢｂ (936)	

C-2. 軒平瓦

文様は牡丹とその他の花の２種類から構成されている。軒丸瓦と同様に色調で灰色系瓦と赤色系瓦に分類される。瓦当文様は側視1型と側視2型がある。前者はＡ群、Ｂ群、Ｃ群の３種に、後者はＡ群、Ｂ群の２種に分けられる。色調との関係では草花文側視１型Ａ～Ｃ群に灰色瓦が集中し、同1型のＣ群の一部を草花文側視２型に赤色瓦が偏在する。

草花文側視１型	939 941	A群	オウチⅠA1 (939)	オウチⅠA2 (940)
		B群	オウチⅡ1 (941)	
		C群	オウチⅢA01 (942)	
	942 945		オウチⅢBa1 (943) オウチⅢBb1 (944) オウチⅢBc1 (945) オウチⅢBd1 (947) オウチⅢBe1 (950)	 オウチⅢBc2 (946) オウチⅢBd2 (948)
草花文側視２型	952 953		オウチⅠA1 (952) オウチⅡA1 (953)	

C-3. 丸瓦

a．個体数：出土瓦は破片化していることから、部位別に分類し、それぞれ特徴を明らかにした。部位別に玉縁部629点、端部281点、筒部240点の3種類に分ける。

b．大きさ：玉縁部はその形態、大きさ、整形で細分を実施した。玉縁の長さの基本的な大きさは、指本数と添える指の形に関係するものと思われる。以下の３タイプに分けることができる。短いタイプ＝4.0㎝未満、中タイプ＝4.0～5.0㎝、長いタイプ＝5.0㎝以上である。平面的な形態と断面に特徴があり、玉縁の頂部をやや面を成すもの、なさず斜面をとるものと長さは共通するが、形状に差があり、長短とグループ分けが難しいものも認められる。

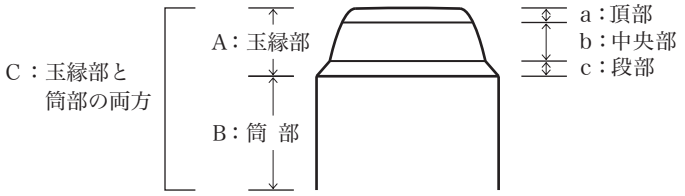
c．端部整形：端部は面取りの有無で大別し、面取りの有るものはその幅の長さで６種類に細分し観察した。1㎝未満、1～2㎝未満、2～3㎝未満、3～4㎝未満、4～5㎝未満、5～6㎝未満である。

d．面取り：面取りの現状は、4～5㎝未満、5～6㎝未満のものは殆どみられない。幅のある面取りは概して浅くなされている。他方、1㎝未満、1～2㎝未満のものは急傾斜で深くなるものも認められる。面取りされないタイプも概して多くみられる。そして、その端部側は面取りがなされないものの、布などで1～2㎝未満に押し広げられ、やや広めになっている。面取りが浅く、弱くしたものが認められ、その多くが幅広にされ、一見すると施されていないように見られる。

e．付着物の状況：漆喰、セメントの使用が顕著である。漆喰は白黄色を呈し、セメントの色は暗灰色で色調からも区別される。セメントは漆喰の上に重ねた状態になるもので、その後の補修と解せる。マンガンが塗布された丸瓦も絶対的に少ないものの存在する。マンガンの塗布される範囲は凸面側全体である。ただし、玉縁の上面は行われない。

ヘラ描き印について

粘土成形時に鎌や金属のヘラで、手書きした印である。丸瓦の玉縁部分、玉縁と筒部の境にある段部、さらに筒部側の３カ所に記す例が認められる（第130図）。この組み合わせでバリエーションを広げ、機能していたものとみられる。印はヘラによる線描で、点、横線、縦線、斜線、交差線、曲線などがある。これらはさらに線の数や形状により細分されるが、いずれにしても丸瓦の上半部（玉縁側）に多く施文する。便宜上、玉縁側に施すものをA群、筒部側に記すものB群、両側に記すものC群とする。A群14種類、B群７種類、C群１種類で、計22種類となった（第131図）。記号の形状について第80表と、詳細は第81表に示す。



第130図　ヘラ描き印の位置

第80表　丸瓦のヘラ描の種類と説明

形態＼分類説明	記号		説　明	刻印位置			形態＼分類説明	記号		説　明	刻印位置		
点	1点	丶	左上から右下方向へ打ち込んだ短い線描	Ab			斜線	3本線	///	右上から左下方向への三本の斜め線描	Ab		
横線	1本線	―	水平方向の線描	Ab	Ac		交差線	2本線	×	二本線をバツ状に交差した線描	Ab		B
縦線	1本線	丨	垂直方向の線描			B			メ	二本線を交差した線刻で、先の×形と異なり、左側に大きく傾く線描			B
	3本線	丨丨丨	垂直方向の平行する三本線の線描	Ab					ㄨ	三角状に二本線の一部が交差した線描			B
斜線	1本線	＼	左上から右下方向への斜め線描	Ab		B		3本線	≠	やや垂直方向の二本線にやや水平方向の一本線が交差した線描	Ab		
		／	右上から左下方向への斜め線描	Ab					≒	右上から左下方向への斜め線の二本線に対して、一本線を交差した線描			B
	2本線	＼＼	左上から右下方向への斜め線の二本線描	Ab		B		4本線	≢	垂直方向の三本線に対してやや水平方向の一本線が交差する線描	Ab		
		／／	右上から左下方向への斜め線の二本線	Ab		B	曲線	2本線	㇀	水平方向の二本線であるが、下方線が長く弧状の線描	Ab		

第81表　丸瓦の色調とヘラ描

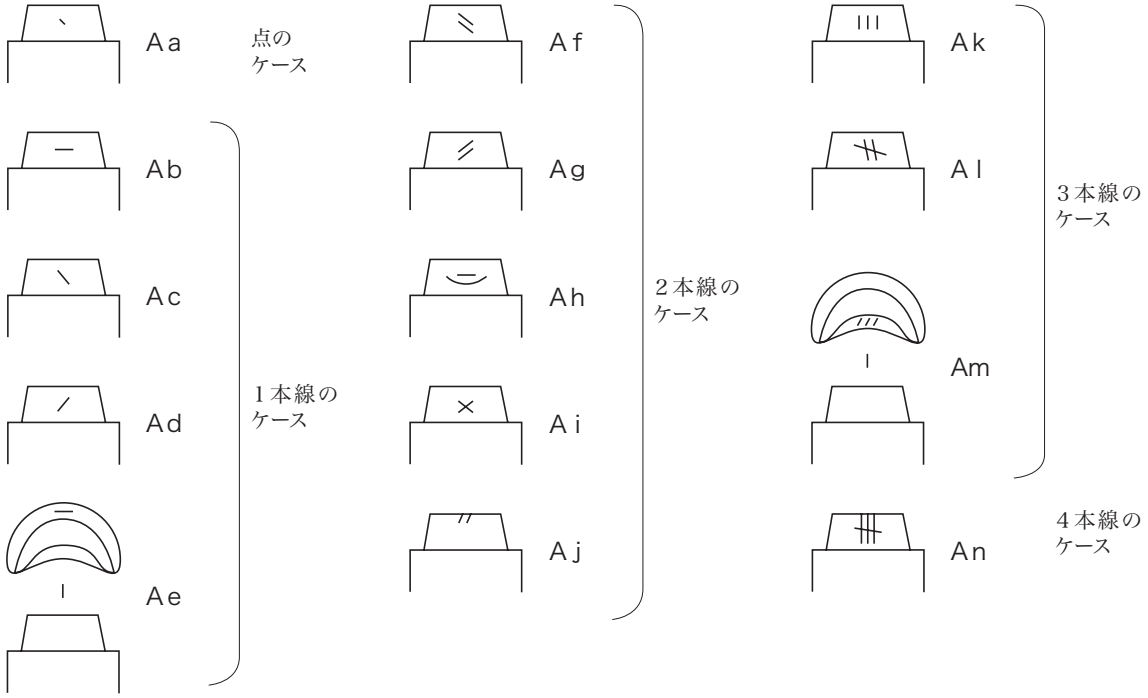
色調＼分類	位置		点	横線	縦線		斜線					交差線						曲線	判別不可	計
			1点	1本	1本	3本	1本		2本		3本	2本			3本		4本	2本		
			丶	―	丨	丨丨丨	＼	／	＼＼	／／	///	×	メ	ㄨ	≠	≒	≢	㇀		
灰色瓦	A	a																		0
		b		1			4	1	2	3		3								14
		c																		0
	A群不明																		7	7
	B						1					1		1						3
	B群不明																		5	5
	計		0	1	0	0	5	1	2	3	0	4	0	1	0	0	0	0	12	29
褐色瓦	A	a									1									1
		b		2		1	1		2			1					1	2		10
		c		1																1
	A群不明																		3	3
	B												2							2
	B群不明																		1	1
	C(Ab+B)			1																1
	計			1※																19
			0	3	0	1	1	0	2	0	1	1	2	0	0	0	1	2	4	
赤色瓦	A	a		0																0
		b	2	5			6	2	6	2		1			1					25
		c		2																2
	A群不明																		7	7
	B								9	6						1				16
	B群不明																		3	3
	計		2	7	0	0	6	2	15	8	0	1	0	0	1	1	0	0	10	53
赤褐色瓦	A	a																		0
		b																		0
		c																		0
	A群不明																			0
	B																			0
	B群不明																		1	1
	計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合　計			2	1		1	12	3	19	11	1	6	2	1	1	1	1	2	27	102
				11	0															

※1個体にAbは横線、Bに縦線の2種類のヘラ描あり。

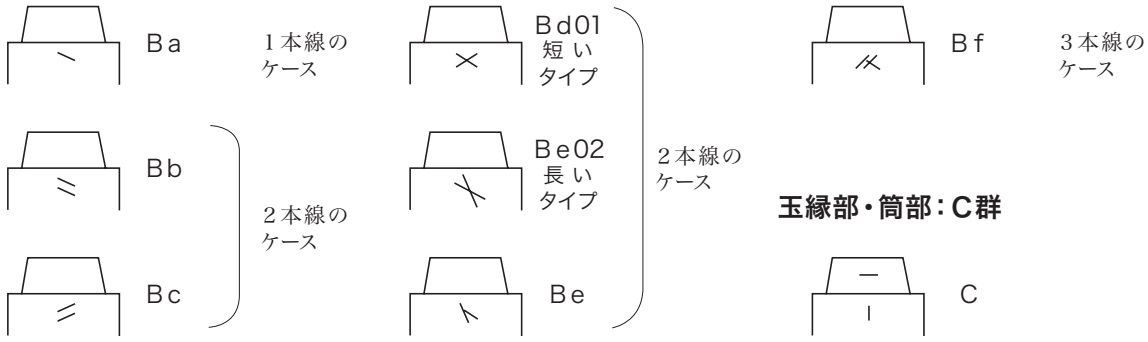
この記号の特徴として、①ヘラ描は粘土が生乾きの時に行われている。②ヘラ描きの部位は屋根葺き時には基本的に見えない部分になる。つまり、瓦同士が重なり合う所や漆喰で塗り込められる所にある。基本的には外部には露出しない。③明朝系瓦の特徴で、赤色瓦に54点、灰色瓦に48点みられる。いずれも漆喰の付着がある。

これらは状況から推して、製作段階に機能していたことが分かり、屋根葺き時には役割を終了していることを示すものであろう。この生産段階における意図に関しては少なくとも工人の作業分担や、それに関わる製作量などの帰属に関する印、封印、認証・検定印などの意図が推定される。分配など違いを示すなど、今後製作地やその他の消費地の比較からより真相に迫れるものとみられる。

玉縁部・A群



筒部・B群



玉縁部・筒部：C群

第131図　明朝系丸瓦（印あり分類表）

C-4. 平瓦

a．大きさ：凹面に撫でを施す平瓦で、赤色瓦に限定されるが、凹面に縦位方向の撫でが行われている。ただし、大和瓦の様な光沢があり、全面に徹底するものではない。方向は広端から狭端側方向に幅約３㎝の道具で撫で、布目が消えている。この瓦のもう一つの特徴としてマンガン釉が使われている。

b．付着物の状況：マンガン釉の塗布される平瓦は、その殆どが狭端側の半分にみられる。大形の篦で内面と外面に施す。そのため内外面のレベルの差がわずかにみられる。この狭端側の凹面両側には丸瓦の載った跡である漆喰の付着があり、マンガンの範囲が、丁度中空にさらされている範囲と重なる。マンガンの施されない平瓦においても、漆喰は狭端側の両側に残る。重ねが正殿の場合は二枚重ねである。

c．整形：凸面の撫での特徴。赤色瓦では狭端側の撫では概して強く撫でるものと、極めて弱くなされるものがある。あるケースは指が２本程度である。一方、灰色瓦の場合は指撫での強いものはきわめて少ない。広端面側は赤色瓦の場合は指が3本程度の強い横撫でがなされ、3条の凹線が走る。灰色瓦の場合に行われ、道具により、同様の幅で一定の幅広の断面がみられる。

d．整形痕：広端側の凸面にはとくに赤色瓦の場合、指３本の撫で溝が横走している。それが灰色瓦になると、道具の様な幅の広い帯状に凹みとして横走する。

e．その他：平瓦の凸面側に整形時の規則的な擦痕（ヒッカキ痕）や恣意的な線描が行われている。また、マンガンの施釉時に筆書きしたものが認められる。

C-5. 役瓦

雲形など漆喰の付着した製品、大形丸瓦、特殊な丸瓦などからなる。ことに前者の漆喰に貼り付けて使用するものは手造ね整形である。

a．雲形：製品はその大きさにより小形、中形、大形の３種類に分類される。得られた量は小形が２点で、渦巻きの数は不明であり、焼成別には赤色が占める。中形は5点、破損が著しいため巻きの数は確定することができない。赤色が２点、灰色が１点。大形は６点確認された。他は不明。色調は灰色が１点、赤色５点ずつ及び、その他不明破片からなる。

造形は総て手づくねであり、細かい凸状の襞を作りながら描いている。しかし、その造形を反転した凹状の線で描く製品もみられる。試みに粘土をもって写しとると、明らかに凸状襞になるもので、昭和初期の修理時に応急処置として、現存製品をかたどって製作したものとみられるもので、当然ながら1932（昭和７）年時の製品として断定されるものである。

当製品の利用は大棟や降り棟の側面部分に貼り付けられたもので、その使用を窺わせるように裏面及び側面の半分までが漆喰の付着痕を留めている。

b．花形ほか：牡丹の花、茎、葉か龍の角などをデザイン化したものである。３種類を確認することができる。いずれも褐色系と灰色系からなる。

量的には僅かではあるが、明らかに瓦質に造形された粘土製品である。

これら製品も雲形製品同様に裏面や側面の半分以上が漆喰の付着痕を留め、壁状の部分に張り込めたものであることが理解される。

小 結

当該地区からは製作時期、技術の異なる３種類の屋瓦が得られた。グスク時代に属する高麗・大和系両瓦のなかで、とりわけ大和系瓦は種類が豊富で、14世紀後半から15世紀前半にあたるE-4グリッド第５層からほぼまとまって得られたのは特筆すべき成果であろう。これまでも城内において同様の数値のデータが得られていたが、ここにおいてほぼ城内における大和系瓦の終焉年代が押さえられたものと考えられる。続いて、琉球王府時代の明朝系瓦は灰色瓦と赤色瓦が出土したが、灰色瓦が17世紀前半のシーリ遺構内から出土している点である。これも当該瓦の廃棄年代を示す指標になるものであると同時に首里城における使用年代を示すメルクマールになろう。また、後続する赤色瓦は18世紀頃の撹乱とされる第２層や瓦の出土しない17世紀前半から18世紀初頭の遺構からみて、赤色瓦の初期段階のものもみられ、さらに20世紀まで連続していることが分かった。明朝系瓦にマンガンを施釉する時期について正確な年代をおさえるまでには至っていないが、軒瓦や丸瓦の製作技術、セメント塗布状況から少なくとも近世後半の後葉段階にあることが判断できた。

註）上原静 2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『総合学術研究紀要』第11巻第２号

第82表　屋瓦観察一覧１

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第132図 図版113 866	高麗系瓦	軒平瓦	瓦当	褐色系	幅広瓦当型。板状の破片で、瓦当面の右上方へ蔓と蕾の文様が描かれている。また、同文様とともに箆傷としての条痕が4～5本鮮明にみられ、素材が木板であった可能性がある。瓦当裏は丁寧な撫でがなされる。また、側面には漆喰の付着が認められ、使用方法の一端が窺える。瓦当面の厚み約2cm。	11	撹乱
第132図 図版113 867		平瓦	側面部	褐色系	平瓦片。凸面には羽状打捺文様があり、凹面には糸切痕と布目痕が認められる。側面は撫で整形があり、恐らく軒平瓦の平瓦部をなしていたものとみられる。厚み約2.1cm。器面は褐色を呈するが胎土中央は灰色をおびる。	19	撹乱
第132図 図版113 868		平瓦	側面部	灰色系	平瓦の破片。凸面には羽状打捺文様が鮮明に残る。文様の打捺具の重なりは大きく、羽状文様も太い。凹面には糸切り痕以外に細い紐圧痕が一条認められる。側面は分割面になる。厚み約2.4cm。	19	E－4 5層
第132図 図版113 869		平瓦	筒部	灰色系	筒部破片。凸面には羽状打捺文様が鮮明に残る。角なし。胎土中央は灰色を帯びる。比較的薄手で厚み約2.0cm。	11	撹乱
第132図 図版113 870		平瓦	端部	褐色系	端部破片。凸面には羽状打捺文様が鮮明で、打捺具の重なりが認められる。端部の凹面側は幅約3cmの面取りがみられる。表面は赤色であるが、胎土中央は灰色を帯びる。厚み約1.6cm。	19	E－4 5層
第132図 図版113 871	大和系瓦	軒丸瓦	瓦当	灰色系	瓦当部の細片。残された瓦当面に僅かに巴文の一部を認める。瓦当面には白砂が付着。また、中央の巴表面には糸切り痕も残る。瓦当裏は当初の器面は残らず剥離している。	19	撹乱
第132図 図版113 872		軒丸瓦	瓦当	褐色系	瓦当裏の顎部だけの破片である。顎の深さは約4cm。器面の指撫は良好。破片面に集中して白砂がみられる。器面は褐色をおびるが破損部の素地は灰色を呈する。	19	E－4 5層
第132図 図版113 873		軒丸瓦	瓦当	褐色系	前記872と同じく瓦当面がはずれた裏の顎部のみの資料。器面整形の指撫で良好。端部に切り込みのためヘラ削りも認められる。	19	撹乱
第132図 図版113 874	大和系瓦	軒平瓦	瓦当	灰色系	軒平瓦の瓦当部破片で、左側の瓦当面とその角である。中心飾は一部破損しているが5枚の花弁をもつ花文で、左右の蔓は既報告からみると左側へ5個を数える資料に相当する。顎は貼り付けで、顎裏は縦位の方向に幅の短いヘラ撫でを行っている。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第132図 図版113 875		軒平瓦	瓦当	褐色系	前資料874と同じタイプの文様で、中心飾りが5枚の花弁を有する花である。両側は破損しているため唐草文様の展開は不明。瓦当面には多数の細かい白砂が付着する。平瓦に顎を貼り付ける技法である。顎の裏はヘラによる縦撫である。	19	E－4 5層
第132図 図版113 876		軒平瓦	瓦当	灰色系	軒平瓦の瓦当細片である。瓦当文様の唐草か蔓が立体的表現で、断面形が三角状に尖る。顎の粘土厚みは約3cmで、接合部分から脱落している。剥離部分には接合時の×状の掻き痕が残る。	19	E－4 5層
第133図 図版114 877	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	褐色系	端部側を大きく欠いた丸瓦製品。凸面には羽状文があり、左から右方向に押しつけたことが復元できる。玉縁裏は面取りがなされている。凹面には刺し網状の紐圧痕があり、縦5cm、横4cmの形状がみられる。玉縁長さ4.3cm。筒部幅約13.8cm。	19	C－3 野面石積み 南側栗石
第133図 図版114 878		丸瓦	玉縁部	褐色系	玉縁部の上端の資料である。玉縁の長さ約4cm。凸面には撫でが行われているが羽状の打捺文が認められる。玉縁部の角1欠け。凹面には刺し網状圧痕があり、縦4.5cm、横5cmを計測する。筒部幅13.8cm。	19	E－4 5層
第133図 図版114 879		丸瓦	玉縁部	褐色系	上記877、878と同じ欠落製品である。玉縁の端部破損のため長さは不明。凸面は撫でが行われているが、僅かに羽状文の叩き痕がみられる。玉縁部の角は両端欠ける。凹面には刺し網状圧痕があり、縦3.5cm、横4cmを計測する。筒部の幅約13.8cm。	19	E－4 5層
第133図 図版114 880		丸瓦	玉縁部	灰色系	玉縁側の破片。打捺文様の羽状文は太く、鮮明である。玉縁頂部は平坦である。刺し網状の圧痕はあるが、その大きさは破片のため計測不明。筒部幅13.5cm。	19	E－4 5層
第133図 図版114 881		丸瓦	玉縁部	褐色系	玉縁側の破片。ただ、玉縁そのものは欠落している。器厚は約1.5cmと薄手。凸面の縄目は鮮明。凹面には刺し網状圧痕の一部が残り、横4cmを計測する。	19	E－4 5層
第133図 図版114 882		丸瓦	筒部	灰色系	筒部の凸面に羽状文がみられる。凹面には刺し網状圧痕があり、縦4～4.5cm、横4.5cmを計測する。器壁の厚み約2cmである。	19	E－4 5層

第83表　屋瓦観察一覧２

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第134図 図版115 883	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色系	丸瓦の筒部片。凸面の表面は撫で消しがされているが、羽状文と重郭文が認められる。重郭文を構成する線の数は6本である。凹面には刺し網状圧痕があり、縦3.5㎝、横4㎝を計測する。器壁約1.7㎝である。	19	E−4 5層
第134図 図版115 884		丸瓦	筒部	褐色系	筒部側片。凸面には重郭文あり。郭の数は5本を数える。凹面には刺し網状圧痕があり、縦4㎝、横3.5〜4㎝を計測する。器壁の厚み約2㎝。	19	E−4 5層
第134図 図版115 885		丸瓦	筒部	褐色系	筒部破片。凸面には重郭文あり。郭の数は7本になる。凹面には刺し網状圧痕がみられるが、細片のため計測不可能。器壁厚み1.5㎝である。	19	E−4 5層
第134図 図版115 886		丸瓦	筒部	褐色系	筒部破片で、凸面は撫でが丁寧になれさ、叩き文様はみられないが、さらに深い円文様が線彫りで表現される。凹面には刺し網状圧痕があり、縦4㎝、横4.5〜5㎝を計測する。器壁厚み1.5㎝。	19	E−4 5層
第134図 図版115 887		丸瓦	端部	褐色系	玉縁側を欠いた端部の大形片。端部側に羽状文が鮮明、筒部中央付近はナデで強く消えているが重郭文がみられる。郭の線数は5本になる。端部の面取り幅は6㎝。凹面には刺し網状圧痕があり、縦5㎝、横4㎝を計測する。	19	E−4 5層
第134図 図版115 888		丸瓦	端部	褐色系	端部破片。凸面の羽状文は鮮明。端部に角あり。凹面には刺し網状圧痕がみられる。端部面取り幅6㎝。	19	E−4 5層
第135図 図版116 889		丸瓦	端部	褐色系	端部資料で、丸瓦幅約15.5㎝を計測する。凸面には羽状文あり。凹面の刺し網状圧痕は縦3.5㎝、横5㎝を計測する。面取り幅8.5㎝と長い。器壁約約3㎝。	19	E−4 5層
第135図 図版116 890		丸瓦	端部	褐色系	凸面に縄目文を施す筒部破片。角なし。器壁約2㎝。凹面には刺し網状圧痕があり、縦4.5㎝を計測する。端部面取り6.5㎝である。	19	E−4 5層
第135図 図版116 891	大和系瓦	平瓦	側面部	灰色系	平瓦破片。側面は面取りがなされ、形態的にはａタイプに分類される。表裏面ともに無文である。器壁約1.6㎝である。	19	D−4 5層
第135図 図版116 892		平瓦	側面部	褐色系	平瓦の大形破片。側面はｂタイプ。平瓦の凸面には大量の白砂が付着。厚み約2.4㎝と厚手。表面には糸切り痕のみで文様はみられない。側面は面取りがなされるが半分のみになり、稜線が残る。	19	C−3 野面石積み 南側栗石
第135図 図版116 893		平瓦	側面部	褐色系	平瓦の筒部片で、ヘラ取りされた側面が認められる。形態は側面ｃタイプである。無文。胎土中央は灰色を呈する。厚み約2.0㎝。	19	E−4 5層
第135図 図版116 894		平瓦	側面部	褐色系	平瓦の筒部破片。成形した側面を残す。側面ｄタイプである。凸面に白砂付着。胎土中央は灰色。厚み約1.8㎝である。	19	E−4 5層
第136図 図版117 895		特殊・平瓦	−	褐色系	側面のみの平瓦細片。側面形態は2面になり側面分類でｂタイプに該当する。厚み約2.0㎝である。	19	E−4 5層
第136図 図版117 896		特殊・平瓦	側面部	褐色系	平瓦の側面のある細片。側面形態は垂直面で、側面ｄタイプ。×状の叩き文様が認められる。厚み約2.2㎝である。	19	C−3 野面石積み 南側栗石
第136図 図版117 897		特殊・平瓦	側面部	褐色系	側面の細片。叩きによる強弱によるのか、平面には側面側に併行した段差が残る。厚み約2.6㎝、平瓦の中央部で2.3㎝を計る。	19	C−3 野面石積み 南側栗石
第136図 図版117 898		特殊・平瓦	側面部	褐色系	垂直になる側面破片。形態は側面ｄタイプ。僅かながら布目痕が確認される。厚み約2.0㎝。	19	E−4 5層
第136図 図版117 899		平瓦	端部	灰色系	比較的大きな端部破片で、角も認められる。表面には白砂がみられる。凹面端部には幅約3.5㎝の面取りがなされている。厚み約1.7㎝。	19	E−4 5層

第84表　屋瓦観察一覧３

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第136図 図版117 900	大和系瓦	平瓦	端部	褐色系	大きめの端部破片で角も存在する。端部面取り幅2.6㎝。全体に白砂が付着する。厚み約1.6㎝である。	19	E−4 5層
第136図 図版117 901		平瓦	端部	褐色系	平瓦の端部で角を残す。削りはなし。ただし、平面分部は当初の糸切り痕が斜めに走っているが、この端部側のみ幅1.5㎝の横撫でをしている。表面は赤色を帯びるが胎土は黒色を呈する。器面には白砂が付着する。厚み約1.8㎝。	19	E−4 5層
第136図 図版117 902	大和系瓦	特殊・平瓦	端部	灰色系	平瓦の筒部細片。釘穴が凹面側から凸面側に穿たれる。口径約1.3㎝。器厚約1.9㎝。器面に白砂付着。特殊瓦	19	C−3 野面石積み 南側栗石
第137図 図版118 903		特殊・平瓦	端部	灰色系	平瓦の側面破片で角も有する。厚み約が3.2㎝と厚い。側面は2面をみせる。表面に白砂が大量に付着。	19	撹乱
第137図 図版118 904		特殊・平瓦	側面部	灰色系	極めて薄手の平瓦破片。厚み約1.8㎝。表面には白砂が付着。	19	E−2 5層
第137図 図版118 905		特殊・平瓦	端部	灰色系	上記904と類似する極めて薄手の平瓦破片で角を残る。厚み約1.8㎝。器面には白砂が付着している。	19	E−4 5層
第137図 図版118 906	大和系瓦	雁振瓦	平瓦部、 端部	灰色系	平瓦部分で端部角が残る。型式的にはⅠ型。平面に無文の叩きを使用した条が認められる。器の表面には白砂が多くみられる。厚み約1.7㎝。	19	撹乱
第137図 図版118 907		雁振瓦	平瓦部	灰色系	平瓦部分の破片である。凸面側に僅かに文様の一部で単線が併行して三条確認できる。側面は垂直になる。厚み1.6㎝。	19	B−5 シーリ内木炭層
第137図 図版118 908		雁振瓦	丸瓦部、 端部	灰色系	丸瓦部分が大きく占める破片で、端部を残している。端部は瓦当面的に幅約6.4㎝の縁をつくる。型式的にはⅡ型。凸面側には太目の羽状文が確認される。凹面側には布目痕と縦方向の強い撫で痕が観察できる。厚み約2.7㎝。	19	E−4 5層
第137図 図版118 909		雁振瓦	平瓦部、 端部	褐色系	平瓦部分の破片で、端部に角を残す。この型式では平瓦部の湾曲が小さく、この型式にもバリエーションが存在することを示唆する資料である。Ⅱ型。凸面には羽状文がみられる。厚み約2.0㎝。	19	E−4 5層
第138図 図版119 910		雁振瓦	平瓦部〜 丸瓦部、 端部	褐色系	丸瓦部と平瓦部のみられる端部側の資料である。型式はⅡ型。凸面には羽状文が残る。凹面の丸瓦端部には幅約8㎝の削りがなされている。厚み約2.4㎝。	19	C−3 野面石積み 南側栗石
第138図 図版119 911		雁振瓦	平瓦部〜 丸瓦部、 端部	褐色系	上記910と同じ丸瓦部と平瓦部の接合部分の破片である。凸面にはこれまで確認されていない羽状文と重郭文の組み合わせ文になる。厚み約2.8㎝。	19	C−2 野面石積み 南側栗石
第138図 図版119 912		役瓦 (特殊)	瓦当	灰色系	厚み約0.9㎝を呈する筒形の板状破片で、鳥襖瓦の瓦当縁の一部のようであるが、崎山御嶽出土例とは異なり、正確には種を特定できない。筒状になるとその幅は約5.9㎝である。	19	E−4 5層
第139図 図版120 913	明朝系瓦	軒丸瓦	オウチⅠ Aa01	褐色	瓦当が半分欠落した製品。器面は風化する。瓦当文様は牡丹文様で、文様の彫りが浅いためぼんやりとした印象である。瓦当面と丸瓦との接合角度は垂直。粘土バリが外周でみられる。瓦当径は約15㎝をはかる。	19	B−1 石積み6 西側上層
第139図 図版120 914		軒丸瓦	オウチⅠ Aa02	灰色	瓦当の残り良い資料である。瓦当径約15㎝。花文様の彫りは浅いが、複雑な文様を表現し、珠文も細かく多くみられる。瓦当と丸瓦との接合角度は100度である。瓦当裏の整形はナデがなされ、とくに同心円的な調整がみられる。瓦面や丸瓦凸面に漆喰が付着する。	11	撹乱
第139図 図版120 915		軒丸瓦	オウチⅠ Ab01	灰色	瓦当径約17㎝とやや大きめの資料である。一部欠落。瓦当裏のナデは外周は回転なで、また、中央部には指跡も残る。顎の縁は厚みがあり、平面をなす。	11	撹乱
第139図 図版120 916		軒丸瓦	オウチⅠ Ac01	灰色	瓦当のみの破片であるが、瓦当中が剥離し文様の花芯が欠落した状態になる。瓦当裏には3本の指跡が縦位に残る。瓦当面は煤けた様に黒い。	11	撹乱
第139図 図版120 917		軒丸瓦	オウチⅠ Ac02	灰色	瓦当の残りが良い資料。瓦当周辺に粘土バリが認められる。瓦当径約14㎝。瓦当と丸瓦との接合角度は垂直。瓦当裏は撫でによる凹凸がみられ、外周に向かいおちついた撫でになる。顎部の縁は平坦になる。丸瓦部には漆喰が大量にみられる。	11	撹乱

第85表　屋瓦観察一覧４

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第139図 図版120 918	明朝系瓦	軒丸瓦	オウチⅠ Ad01	灰色	ほぼ当初の瓦当面を残す資料で、中央から上下面にわずかな折り曲げがみられる。簡略化が進む線表現の牡丹文様で、器面の風化のため、鮮明でない。瓦当径約14㎝。裏は凹凸面になり撫でがさなれている。顎部分は厚く、同心円的な撫でをおこなう。	11	撹乱
第139図 図版120 919		軒丸瓦	オウチⅠ Ae01	灰色	僅かに瓦当部の残る資料。兎の耳状に花弁が上に向いた一部が認められるが、数少ないタイプの文様である。細片ながらも取り上げた理由がある。瓦当外周に粘土バリがあり、それを潰した作業がみられる。	11	撹乱
第139図 図版120 920		軒丸瓦	オウチⅠ Ba01(灰)	灰色	顎部分以外は全体に外縁まで剥離した瓦当製品である。文様は鮮明。瓦当裏には撫での作業時についた指3本の縦位の痕跡が鮮明に残る。顎部の縁は細くなる。	11	撹乱
第139図 図版120 921		軒丸瓦	オウチⅠ Ba02(褐)	褐色	丸瓦部から剥離した瓦当資料である。文様は彫りが浅く不鮮明。裏面に文字ともつかない「干」の様な印あり。裏のナデは粗く、縦位の指跡が3～4本残る。顎の縁は極端に細くなる。	11	撹乱
第139図 図版120 922		軒丸瓦	オウチⅠ Bb01	灰色	瓦当上半の縁がはずれた資料である。丸瓦がそのままとれた形を残している。瓦当径約14㎝。文様は鮮明である。瓦当裏は不鮮明ながらも縦の指撫で痕が残り、凹凸面となる。厚み約3.8㎝である。	11	撹乱
第139図 図版120 923		軒丸瓦	オウチⅠ Bb02	灰色	瓦当面の完全形の資料。瓦当径約14㎝。文様全体の様子も認識されるが、中央の花芯が剥離している。瓦当面と丸瓦部との接合角度は100度である。瓦当裏は撫で整形で、3本の縦位置の指跡が残る。瓦当断面はレンズ形。顎の縁は薄くなる。	11	撹乱
第139図 図版120 924		軒丸瓦	オウチⅠ Bb03	灰色	一部に欠落部分があるが、ほぼ全体を知ることができる製品。瓦当径約14.5㎝。瓦当断面は凸レンズ形。顎分部は薄くなる。瓦当裏は指撫でがなされ、縦位の指痕が残る。また、煤状に真っ黒である。	11	撹乱
第140図 図版121 925	明朝系瓦	軒丸瓦	オウチⅠ Bc01	灰色	瓦当裏は丸瓦部分が欠落しているため残らない製品である。全体に文様の輪郭があまくぼんやりした印象がある。瓦当径約14㎝。瓦当裏のナデは粗く残り、縦指なでの作業が認識される。断面は凸レンズ形になる。	11	撹乱
第140図 図版121 926		軒丸瓦	オウチⅠ Bd01	灰色	瓦当部の細片である。模様に新しいタイプであることから掲載している。器面に漆喰の付着あり。瓦当裏の撫では顕著に残る。器面は風化が進んでいる。	11	撹乱
第140図 図版121 927		軒丸瓦	オウチⅠ Be01(灰)	灰色	瓦当径約14.5㎝。断面が凸レンズ形。瓦当面と丸瓦との接合角度104度である。瓦当裏のナデは比較的良い。外周は同心円的になでる。	11	撹乱
第140図 図版121 928		軒丸瓦	オウチⅠ Be02(灰)	灰色	瓦当径約14.5㎝。外周に粘土バリあり。断面は凸レンズ形。瓦当裏面はうねる様に撫で痕が残る。器面に漆喰付着。	11	撹乱
第140図 図版121 929		軒丸瓦	オウチⅠ Be類	灰色	瓦当面の一部の資料である。ただ瓦当文様が珠文無しは初見であることからとりあげた。胎土中央は黒色。瓦当裏の外周部分をみると同心円的に撫でがなされている。	19	撹乱
第140図 図版121 930		軒丸瓦	オウチⅠ Be02(赤)	赤色	瓦当面が完全形の資料。瓦当径約14.3㎝。断面が凸レンズ形。瓦当裏は横撫で、外周は同心円的撫で。明らかに木版であることがわかる資料。器面に漆喰を認める。	11	J－8 10～20
第140図 図版121 931		軒丸瓦	オウチⅠ Be03(赤)	赤色	顎部分の破片資料。文様は鮮明。断面は扁平に近い薄さ。器面にはマンガンが残る。裏は撫でがみられる。	11	撹乱
第140図 図版121 932		軒丸瓦	オウチⅠ a	赤色	瓦当部破片。文様部分に残る筋目から木笵を使用。断面形は凸レンズ形をなす。瓦当裏は撫で調整良好。	11	撹乱
第140図 図版121 933		軒丸瓦	オウチⅡ a	赤色	外縁がとれた瓦当資料。文様は彫りが深く肉厚である。瓦当そのものも厚手である。瓦当裏の撫でも良い。漆喰の付着を認める。	11	撹乱
第140図 図版121 934		軒丸瓦	オウチⅢ a	赤色	瓦当面を殆どよく残す資料。瓦当径約14.3㎝。文様は鮮明。瓦当面と丸瓦との接合角度は傾斜がある。瓦当裏の整形は撫でがなされ、顕著な指跡は残っていない。瓦当面から裏にマンガン釉が塗布される。	11	撹乱

第86表　屋瓦観察一覧５

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第141図 図版122 935	明朝系瓦	軒丸瓦	オウチⅢ a	赤色	瓦当面は顎周辺を欠くが、その上半部と丸瓦がほぼ当初の形を残した資料である。瓦当径約15㎝、丸瓦部の直軸約28.0㎝、玉縁約4.5㎝。筒部凸面の玉縁側に漆喰が大量に残る。瓦当裏の撫では比較的粗く、指撫で跡が顕著。玉縁裏の側面は一回の面取りである。	11	J－9 遺構上西
第141図 図版122 936		軒丸瓦	オウチⅢ b	赤色	軒丸瓦資料で、丸瓦部の玉縁側を欠く程度で全体の状況を理解できる。瓦当径約15㎝。丸瓦部の凸面には大量漆喰がみられる。瓦当面と丸瓦との接合角度は約115度である。瓦当は薄型で、裏面は粘土の混入物のためか、ナデが粗くなる。また、外周は同心円的に行われている。	11	J－9 遺構上西
第141図 図版122 937		軒丸瓦	オウチⅠ A01	灰色	外周が残らず中央の瓦当面のみの資料で風化がみられる。瓦当は厚手、瓦当裏には縦位の3本指が押し当てるように残り、凹凸面を呈する。顎も当然欠落しているが、全体の断面形は凸レンズ形を呈する。	11	撹乱
第141図 図版122 938		軒丸瓦	オウチⅠ A01	褐色	上記の937資料と同じ文様の製品で、より風化が進み文様は薄くなる。厚手で、断面形は凸レンズ形。瓦当裏には軽くおしているが、明らかに縦位の4本指の押し当てが認められる。	11	撹乱
第141図 図版122 939		軒平瓦	オウチⅠ A1	灰色	瓦当面の上部外縁は欠落している。平瓦部が剥離する際にともに損じたもの。器面全体に風化進行。瓦当面裏は、左上から右下方向に丁寧な撫でがなされている。顎部分は厚みがあり、側面が形成されている。	11	撹乱
第141図 図版122 940		軒平瓦	オウチⅠ A2	灰色	彫りの浅い僅かに文様が残る瓦当細片である。瓦当厚みはやや薄い。瓦当裏は撫でがなされるが、凹凸は少ない。表面のみ色調が褐色に変化がみられる。	11	撹乱
第141図 図版122 941		軒平瓦	オウチⅡ 1	灰色	瓦当細片。僅かに平瓦部残る。瓦当は厚手。瓦当裏には縦方向の撫でなされている。	11	撹乱
第141図 図版122 942		軒平瓦	オウチⅢ A01	灰色	瓦当が3分の2以上の残りがいい資料。平瓦部も残る。瓦当裏のナデは左右に行われている。顎部分は側面に稜がなく湾曲面になる。色調が表面のみ褐色味をおびる。	11	撹乱
第142図 図版123 943	明朝系瓦	軒平瓦	オウチⅢ Ba1	灰色	瓦当面と平瓦のそれぞれの一部を残す破片である。平瓦部の桶板綴り紐圧痕を粘土で埋めている。瓦当は薄手である。	11	撹乱
第142図 図版123 944		軒平瓦	オウチⅢ Bb1	灰色	瓦当の右半分を残す資料。文様は彫りの深いもので鮮明。瓦当は厚手。瓦当裏は左右の撫でが観察される。平瓦部の桶板綴り厚痕は窪みとしてそのまま残る。器面は全体に風化している。	11	撹乱
第142図 図版123 945		軒平瓦	オウチⅢ Bc1	灰色	瓦当は完全で、平瓦部も全面部分を残す。平瓦部の桶紐綴り圧痕は丁寧に埋められている。顎先端は欠落しているが、中厚手である。瓦当裏は粘土の凹凸が著しく粗い撫でになる。漆喰の付着を認める。弦幅2.8㎝。	11	撹乱
第142図 図版123 946		軒平瓦	オウチⅢ Bc2	赤色	瓦当面の上部を残す破片である。瓦当部は薄手。瓦当裏は横方向の撫で痕がみられる。平瓦部の桶紐綴り圧痕はそのままに窪みなんら埋める作業はされていない。	11	撹乱
第142図 図版123 947		軒平瓦	オウチⅢ Bd1	灰色	細かな部分で欠落しているが、全体を残した資料。平瓦部の桶紐綴り圧痕は丁寧に埋められている。顎先端は欠落しているが、中厚手である。瓦当裏は粘土の凹凸が著しく粗い撫でになる。漆喰の付着を認める。弦幅2.4㎝。	11	撹乱
第143図 図版124 948	明朝系瓦	軒平瓦	オウチⅢ Bd2	赤色	瓦当面はほぼ完全形。瓦当は中厚。文様は木笵が使用されている。整形は全体に粗い仕上げである。瓦当裏のナデは左側から右側下になでるが全体に粗い。弦幅2.2㎝。	11	J－9 遺構上西 ＋撹乱
第143図 図版124 949		軒平瓦	オウチⅢ Bd2	赤褐色	瓦当の右側隅の破片。瓦当裏のナデは粗く、凹凸面をなす。出土地不明。焼成良好で硬質。胎土は赤色。喜名焼古窯に類似する。平瓦部の桶板綴り紐圧痕はそのまま窪みとして残る。漆喰の付着あり。	11	撹乱
第143図 図版124 950		軒平瓦	オウチⅢ Be1	赤色	一部に剥離が認められるがほぼ完全形の軒平瓦。平瓦部の桶板紐綴り厚痕は埋められている。瓦当裏の撫で良好。マンガン釉を施す。弦幅約20.5㎝。垂れ長約11.5㎝。	11	J－9 遺構上西
第143図 図版124 951		軒平瓦	オウチⅢ Be1	赤色	瓦当文様はシャープ。平瓦部の整形も良好。瓦当裏も撫で良好。無釉である。弦幅20.5㎝である。	11	J－9 遺構上西
第143図 図版124 952		軒平瓦	オウチⅠ A1	赤色	瓦当の上部資料。肉厚の文様。瓦当は中厚手タイプ。粘土バリはみとめられない。撫で整形は良好で、その線状痕もみられない。無釉である。	11	撹乱
第143図 図版124 953		軒平瓦	オウチⅡ A1	赤色	瓦当の細片である。表裏面にマンガン釉が塗布されている。瓦当裏は丁寧な撫でがおこなわれている。	11	撹乱

第87表　屋瓦観察一覧６

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第144図 図版125 954	明朝系瓦	丸瓦	玉縁部～ 端部	灰色	ほぼ全体形の窺える製品。凸面には特徴的な撫でによるくぼみはみられない。大量の漆喰の付着痕あり。凹面は布目痕が覆う。端部には面取りがなされていない。長軸全長約30.5㎝、玉縁長約5.5㎝、厚み約1.8㎝。重量約1.36kg。	19	B－４シーリ内黒褐色土 ＋B－５シーリ内木炭層(畦)
第144図 図版125 955		丸瓦	玉縁部	灰色	玉縁の状況を残す破片。残された筒部の凸面には大量の漆喰が付着している。玉縁裏は一回の面取りがなされている。玉縁の頂部は平坦に成形され、玉縁の長さは4.0㎝と短い。	19	B－５ シーリ内上層 (黄色土・畦)
第144図 図版125 956		丸瓦	玉縁部	褐色	玉縁側の細片。筒部側には横位の幅広い撫でによるくぼみが走る。その下位は縦撫で痕。玉縁裏は一回の面取りがなされている。湧田系(古いタイプ)。	19	B－４ シーリ内炭混 粘土層
第144図 図版125 957		丸瓦	玉縁部	赤色	ほぼ玉縁側を残した破片。玉縁長さ約4.5㎝。筒部面は全体に撫で仕上げされ、その後の風化でとくに観察される痕跡はみられない。玉縁裏は一回の面取り。一条の布目糸綴り痕が走る。約2.6㎝の厚手である。	11	撹乱
第144図 図版125 958		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側の筒部破片。玉縁の長さ4.0㎝。側面の破断面は撫でが丁寧になされる。おそらく軒丸瓦の破片とみられる。筒部面に黒色のマンガン釉を塗布。その上に漆喰の付着あり。玉縁の裏は2～3回の面取りが行われる。ヘラ描きの印ありＡａタイプ。	11	J－９ 遺構上西
第145図 図版126 959	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁側の筒部破片。玉縁は長く約6.0㎝。器面全体に風化進む。玉縁は一回の面取り。布糸綴じ圧痕が一条走る。印ありＡｂタイプ	11	撹乱
第145図 図版126 960		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側の破片。灰色漆喰付着。玉縁長さ6.0㎝。裏の面取りは一回。印ありＡｂタイプ。破損部に印の一部があるので全面拓本。破損の為、分類表(C群)には加えない。	11	撹乱
第145図 図版126 961		丸瓦・ 印あり	完形	灰色	破損しているが接合して全体が復元できる資料。玉縁側から端部に向かい筒部の径が広がる形態。凸面には多数の漆喰が付着している。玉縁裏は一回の面取り、端部は面取りが行われていない。印ありＡｃタイプ。接合可重量約1.74kg。全長約30.4㎝、玉縁長さ約5㎝である。	11	撹乱
第145図 図版126 962		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側破片。全体が爪形様に湾曲した平面形。断面形も湾曲し玉縁頂部に平面はみられない。面取りは複数回がみられる。漆喰の付着あり。印ありＡｃタイプ。玉縁長さ約4.5㎝である。	11	撹乱
第146図 図版127 963	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	完形	灰色	完全形の資料。玉縁長さ5.5㎝。全長33.6㎝。縁側に漆喰の付着がある。玉縁裏の側面は一回の面取り。端部は約2.5㎝の面取りあり。印ありＡｄタイプ。重量約1.94kg。	11	I－９ 瓦溜まり
第146図 図版127 964		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁の状況を残す破片。玉縁長さ約5.5㎝。残された筒部の凸面には大量の漆喰が付着している。玉縁裏は一回の面取りがなされている。一条の布糸綴り痕が残る。玉縁の長さ6.5㎝は長い。印ありＡｅタイプ。	11	撹乱
第146図 図版127 965		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の細片。筒部側には横位の幅広い撫でによる２条のくぼみが走る。玉縁裏は１回の面取りがなされている。器面は全体に風化が進む。ヘラ描き印は並行する２本の斜線である。Ａｆタイプ。	11	撹乱
第146図 図版127 966		丸瓦・ 印あり	完形	褐色	完全形の資料。玉縁長さ約5.5㎝。全長約31.6㎝。縁側に漆喰の付着がある。玉縁裏の側面は一回の面取り。端部には幅約2.5㎝の面取りあり。ヘラ印はＡｆタイプ。重量約1.64kg。	11	撹乱
第147図 図版128 967	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁側片。筒部の凸面は横撫で痕が確認される。玉縁の凹面の側面は２回面取りがなされている。刻線は鮮明で、Ａｇタイプ。玉縁長さ約4.1㎝。	11	J－８茶褐色 灰混層
第147図 図版128 968		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁側片。筒部凸面の撫では縦方向が主である。玉縁裏の側面は１回面取り。凹面には３条の糸綴り痕がみられる。印ありＡｈタイプ。玉縁長さ約6㎝。	11	I－７ 10～20
第147図 図版128 969		丸瓦・ 印あり	玉縁部～ 端部	赤色	ほぼ完全形の丸瓦。玉縁長さ約5.5㎝。全長約31.0㎝。漆喰の付着痕あり。筒部凸面の玉縁側は横位の撫で痕が二条確認される。凹面の端部は約1㎝幅で面取りが行われている。印ありＡｉタイプ。重量約1.82kg。	11	撹乱

第88表　屋瓦観察一覧７

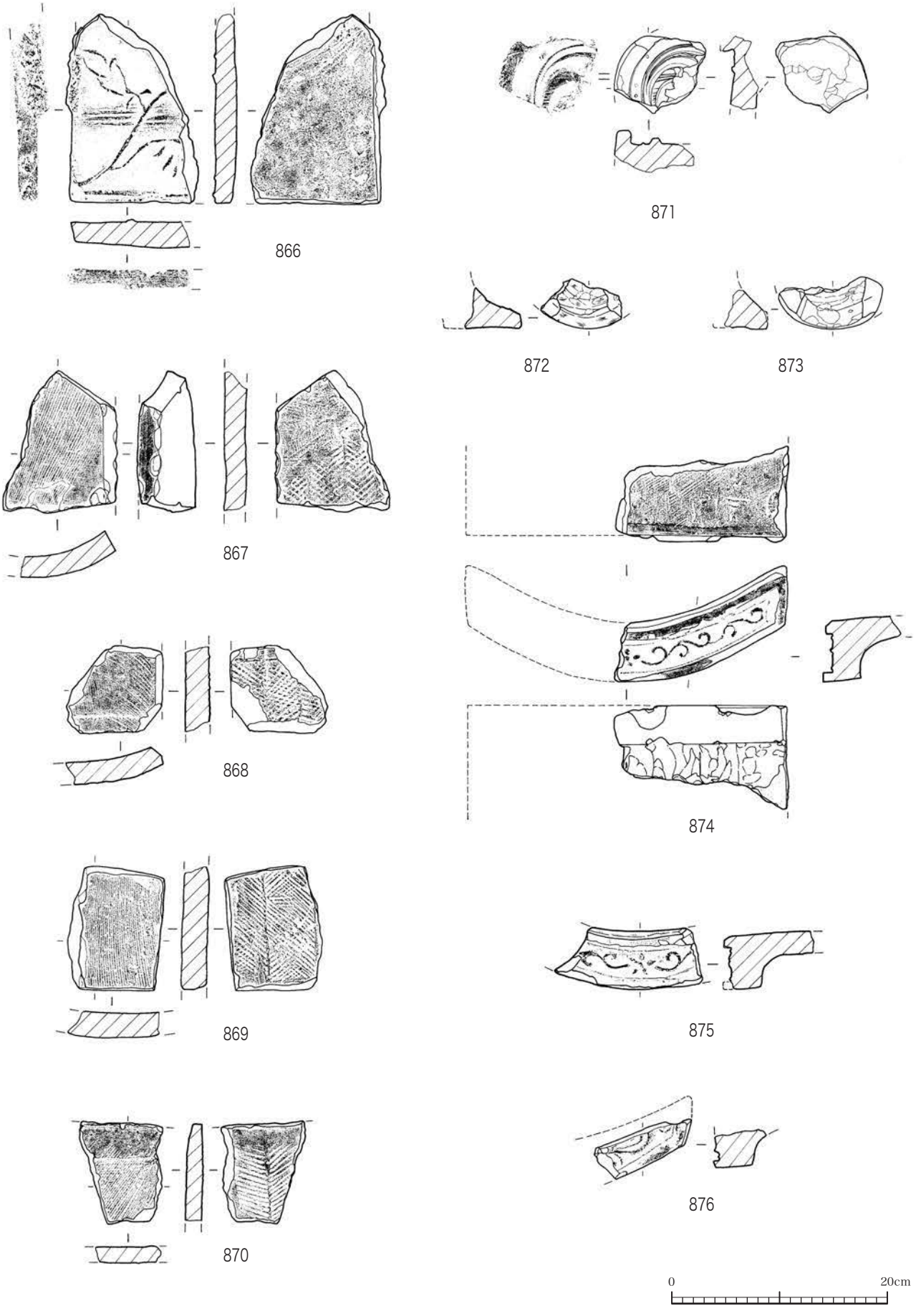
図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第147図 図版128 970	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の破片である。玉縁裏の側面は1回の面取り。また、凹面側に1条の布縫い取り痕が確認される。玉縁の長い約6.7㎝の資料。ヘラ印はＡｊタイプである。	11	撹乱
第147図 図版128 971		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁の細片。筒部凸面には撫で痕が鮮明である。玉縁長さ約5㎝。焼成良好。ヘラ印はＡｊタイプである。	11	Ｊ−9 遺構上西
第147図 図版128 972		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	丸瓦の玉縁側二分の一資料。玉縁頂部は平坦。筒部凸面には横位の横撫で。漆喰付着。玉縁裏の側面は２回の面取り。玉縁長さ約4㎝。印ありＡｋタイプ	11	撹乱
第148図 図版129 973	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁裏の側面は１回の面取り。凹面には幅広の糸綴り痕が明瞭。玉縁の頂部は斜面を形成する。セメント漆喰付着。玉縁長さ4.3㎝。ヘラ印はＡｌタイプである。	11	Ｊ−9 遺構上西
第148図 図版129 974		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁側細片。玉縁裏の側面は1回の面取り。器全体が風化している。玉縁頂部は平坦面をつくる。玉縁長さ約4.5㎝。印ありＡｍタイプである。	11	撹乱
第148図 図版129 975		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	丸瓦の玉縁側二分の一破片。漆喰の付着あり。玉縁の長さ約4.5㎝。全体に風化が進む。玉縁頂部が平坦。玉縁裏には２条の糸綴り痕がみられる。ヘラ印はＡｎタイプである。	19	Ｂ−4 シーリ内清掃中
第148図 図版129 976		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁の長い破片資料。長さ5.5㎝。筒部面には横撫でをみる。玉縁裏には２条の糸綴り痕がある。印はＡ群不明である。	19	Ａ−1 石積み6 西側上層
第148図 図版129 977		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁のみの細片。玉縁頂部は湾曲した面からなる。印ありＡ群不明。玉縁長さ約5㎝。	19	撹乱
第148図 図版129 978		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁が約6㎝と長い丸瓦破片。玉縁裏は側面が1回面取りされている。また、1条の細い布糸綴じが横位走る。玉縁の頂部は平坦であるが、やや傾斜を呈する。凸面の外周に白漆喰が残る。刻線の印が玉縁側の筒部面にある。Ｂａタイプ。	11	撹乱
第149図 図版130 979	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部〜 端部	赤色	側面に大きく欠落部はあるが、ほぼ全体をみることができる丸瓦である。玉縁の頂部は湾曲している。筒部の両端は横撫で、中央部は縦撫でがなされる。とくに端部の横撫でには細かな線状痕が無数にみられる。凹面の特徴として、玉縁裏は2回の面取り、端部は約3㎝幅の面取りが行われている。玉縁長さ約4.8㎝、全長約30㎝。ヘラ印ありＢｂタイプ。	11	Ｉ−9 瓦溜まり
第149図 図版130 980		丸瓦・ 印あり	玉縁部〜 端部	赤色	ほぼ完全形の資料である。玉縁長さ約29.5㎝、全長約4.5㎝。玉縁の頂部は傾斜した面が残る。筒部の凸面におけるとくに玉縁側は強い横撫でがあり窪みをつくる。玉縁裏は２回の面取り、端部は面取りなし。ヘラ印はＢｃタイプである。	11	撹乱
第149図 図版130 981		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の筒部破片で、刻線による印あり、Ｂｄ01タイプである。漆喰が多数付着している。器厚み1.3㎝。	11	Ｊ−9 西側
第150図 図版131 982	明朝系瓦	丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁は長さ約6㎝と長い。玉縁裏は1回の面取り。横1条の布糸綴り痕が走る。縁に当初の形を残すように漆喰が付着。筒部凸面に深い刻線があり、Ｂｄ02タイプ。器厚み1.5㎝。	11	Ｉ−8 10〜20茶褐色灰混層
第150図 図版131 983		丸瓦・ 印あり	玉縁部	灰色	玉縁側の丸瓦片。玉縁裏の面取りは長く1回である。布糸綴り痕が1条横位に走る。凸面のなでは顕著な窪み線を残さない。筒部側に印ありＢｅタイプ。器厚み1.4㎝。	11	Ｊ−8 茶褐色灰混層
第150図 図版131 984		丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	筒部の破片で、凸面側に刻線がある。Bfタイプ。漆喰の付着あり。焼成良好。器厚み1.4㎝。	11	撹乱
第150図 図版131 985		丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	平面形が四角の玉縁側の破片。玉縁頂部は平面を有する。筒部の凸面は撫でがあり、端部側は深い横線となる。玉縁の裏は布糸綴り痕が1条と他に縫い目が平行した沈線条に残る。漆喰の使用を示す痕跡がある。印ありCタイプ。	11	撹乱

第89表　屋瓦観察一覧８

図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第151図 図版132 986	明朝系瓦	平瓦	完形	灰色	平面形が台形。凸面の狭端側には幅広の撫でによる凹線がみられる。凹面の両側に屋根葺き時の白い漆喰が付着する。広端側に桶紐綴り圧痕がみられる。狭端長約17.5㎝、広端長約22㎝、長軸約21.5㎝、厚み約1.5㎝。重量約1.34kg。	11	撹乱
第151図 図版132 987		平瓦	完形	灰色	平面形が縦長の台形。凸面の両端側には幅広の浅い撫でによる凹みがみられる。白い漆喰が付着する。広端側に浅い桶紐綴り圧痕が7個みられる。狭端長約16㎝、広端長約21.5㎝、長軸約24㎝、厚み約1.2㎝。重量約1.22kg。	11	I−8 20〜30茶褐色灰混層
第151図 図版132 988		平瓦	広端〜狭端部	褐色	二分の一程の破片。凸面の両端側には幅広の浅い撫でによる凹みがみられる。広端側に浅い桶紐綴り圧痕がみられる。厚み約1.5㎝。長軸約24㎝。	19	B−4シーリ内木炭層 +B−5シーリ内木炭層
第152図 図版133 989	明朝系瓦	平瓦	完形	灰色	平面形が台形。凸面の狭端側が浅い撫でによる凹線が走る。凹面の広端側には紐綴り紐圧痕が6個確認される。また、桶板の圧痕も比較的鮮明にみられる。白い漆喰が確認された。文様が凸面の広端側に波状の線を描く。狭端長約17.5㎝、広端長約22㎝、長軸約23㎝、厚み約2.0㎝。重量約1.48kg。	11	I−8 20〜30茶褐色灰混層
第152図 図版133 990		平瓦	広端〜狭端部	灰色	二分の一程の破片。凸面の中央に大きな×状の線描きがある。凹面側には狭端側に１条横位の糸綴り圧痕がみられる。また、広端側には桶板綴り紐圧痕が確認される。厚み約1.6㎝。長軸約23.5㎝。	11	撹乱
第152図 図版133 991		平瓦	狭端部	灰色	平瓦の破片である。凸面全体に縦位の太く、深い描き線が無数に引かれている。丁寧な平行したものではなく、雑な観をみせる。凹面には狭端側に横位の糸綴り圧痕がみられる。また、桶板綴り紐圧痕も確認される。厚み約1.3㎝。	11	撹乱
第152図 図版133 992		平瓦	完形	赤色	平面形がほぼ四角形をする。狭端側に僅かな撫でによる凹線が走る。凹面の桶板紐綴り圧痕は5個みられる。漆喰の付着あり。狭端長約20.5㎝、広端長約22.5㎝、長軸約21.5㎝、厚み約1.2㎝。重量約1.42kg。	11	J−8 茶褐色灰混層
第153図 図版134 993	明朝系瓦	平瓦	広端〜狭端部	赤色	三分の二ほど残存する資料。凸面の狭端側に横なで痕がみられる。また、その下には斜め方向の長い削り痕が平行して残る。凹面には桶板紐綴り圧痕が不鮮明でやや横線状の線呈する。両側に僅かに白漆喰の付着痕がみられる。狭端長さ15.5㎝、長軸約23.6㎝。厚み約1.2㎝。	11	撹乱
第153図 図版134 994		平瓦	広端〜狭端部	赤色	ほぼ完全形に近い台形製品。凸面の広端側に大量の漆喰が付着。漆喰の下面には3本の撫でによる横線がみられる。狭端長約16.5㎝、長軸約21.5㎝、厚み約1.5㎝。重量約1.12kg。	19	撹乱
第153図 図版134 995		平瓦	筒部	赤色	筒部細片で、凸面に僅かにマンガン釉による文字状の部分がある。厚み約1.5㎝。	19	撹乱
第153図 図版134 996		平瓦	広端部	赤色	凸面の中央部に円や点の様な墨書きが残る資料。マンガンを使用している。凹面の広端側にマンガンが塗布されている。厚み約1.4㎝。	11	撹乱
第154図 図版135 997	明朝系瓦	役瓦	軒丸瓦	赤色	瓦当破片であるが、残る部分から径が大きくなる特殊(大型)製品と推測される。瓦当裏は撫でがなされているが、起伏のある表面を形成している。花弁の平面形はハート形を呈する。	11	撹乱
第154図 図版135 998		役瓦	隅瓦	灰色	破損品であるが、凸面側が屋根形で、降り棟の端部を呈するような製品。凹面には抉りや段部分が作られ、他のものとの組み合わせを考えられている。材質や成形をみると、塼の可能性もあり、屋根瓦とは断定できない。今後検討を要する資料である。厚み約3.0㎝。近世大和瓦風にもみられる。	11	撹乱
第154図 図版135 999		役瓦	不明	褐色	残された側面の断面がＬ字形をした瓦。側面は丁寧な仕上げ面。胎土中央は灰色。厚み約1.5㎝。	11	I−9 南側

第90表　屋瓦観察一覧９

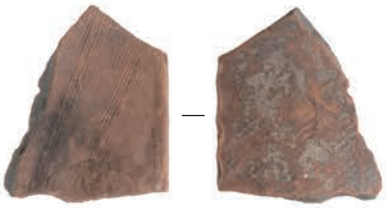
図 図版 番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第154図 図版135 1000	明朝系瓦	役瓦	瓦当	灰色	細片であるが、無文の瓦当片。全体の形状が雲形か。裏面は剥離している。一部に漆喰の付着痕確認。	19	撹乱
第154図 図版135 1001		役瓦	宝珠形	褐色	全体観がおむすび形の宝珠である。最大厚み約4.4㎝で、基本的には平面的なものである。底面は水平に成形。表面には同心円的に凸帯文が２条あり、側縁にも縁取りがなされている。裏面は平坦で、製品をくくるためのほぞがつくれらている。裏面に漆喰痕が確認。高さ約16㎝、最大幅4.5㎝。重量1.16kg。	11	撹乱
第154図 図版135 1002		役瓦	雲形・ 小形不明	赤色	小形の破片で、表面の凹凸の鮮明な手ずくね細工をほどこす。裏面は平坦、小形製品。裏に漆喰が付着。厚み約3㎝。明褐色。	11	撹乱
第154図 図版135 1003		役瓦	雲形・ 小形不明	赤色	雲形の破片。サイズは中形。文様は凹凸を明瞭につけた雲形。側面には裏面から三分の二まで漆喰の付着痕がおよんでいる。裏面は平坦。焼き込んだ赤色を呈し、堅い。厚み約3.0㎝。明褐色。	11	撹乱
第155図 図版136 1004	明朝系瓦	役瓦	雲形・ 中形1巻	赤色	雲形の部分と尾の部分の中央破片資料。手づくねによる彫りは大きく深い。裏面は平坦。厚み約4.3㎝。明褐色。	11	撹乱
第155図 図版136 1005		役瓦	雲形・ 中形不明	褐色	雲形の尾部破片資料。本製品には径約1.2㎝の穿孔がみられる。2孔である。裏にはバリがなく、表には漆喰の付着が残る。厚み約4.6㎝。	11	撹乱
第155図 図版136 1006		役瓦	雲形・ 大形不明	灰色	厚み約7㎝と厚み約のある雲形である。細片である。裏面は平坦。胎土は黒色をおび、焼成は甘い。	11	撹乱
第155図 図版136 1007		役瓦	雲形・ 大形不明	赤色	雲形の細片である。彫りが深くなされ鮮明。裏は平坦で、中央部に当該製品を縛るためのほぞが作られている。厚み6.2㎝。明褐色。	11	撹乱
第155図 図版136 1008		役瓦	不明	赤褐色	表面が湾曲した製品で破損のため全体観は明らかでない。表面には細かいひび割れがあり、自然釉の光沢がみられる。裏は凹面し、大量漆喰が塊として残る。厚み約1.6㎝。	11	I−9 南側
第156図 図版137 1009	明朝系瓦	役瓦	雲形・ 大形不明	赤色	雲形部分の破片で、尾の部分が欠落している。製品自体は大形。厚み約4.5㎝。明褐色。	11	撹乱
第156図 図版137 1010		役瓦	雲形・ 大形不明	赤色	大形の雲形で、おおかた破壊されている。裏面は平坦で漆喰の付着が認められる。厚み約7.7㎝。明褐色。	11	撹乱
第156図 図版137 1011		役瓦	獅子 (シーサー) 形	褐色	陶器製品、渦は立体的で、その窪み線の中には赤褐色のガラス質化した釉薬が残る。シーサーの巻ひげであろうか。胎土は肌色で、石英粒子を大量含む陶器製品である。	11	撹乱
第156図 図版137 1012		役瓦	不明	褐色	表面に鳥の羽状の凸文が施された役瓦。動物以外となると植物の造形を示しているのか明らかでない。表面の撫で調整は良好。厚み約3.0㎝。	19	撹乱
第156図 図版137 1013		役瓦	龍の角	褐色	棒状の製品で、龍の角か植物の茎をイメージしたのであろうか。計測は貼り付けた状態(しっくいの付着を見る)ので、厚み約は最大2.3㎝～最小2.1㎝を測る。	19	C−3 野面石積み 南側栗石
第156図 図版137 1014		役瓦	龍の角	灰色	上記の製品同様に棒状の製品で、龍の角か植物の茎をイメージしたのであろうか。計測は貼り付けた状態(しっくいの付着を見る)ので、厚み約は最大2.1㎝～最小1.6㎝を測る。	19	撹乱



第132図　屋瓦１　高麗系軒平瓦・平瓦、大和系軒丸瓦・軒平瓦

866

871



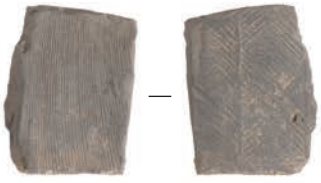
867

872

873

868

874



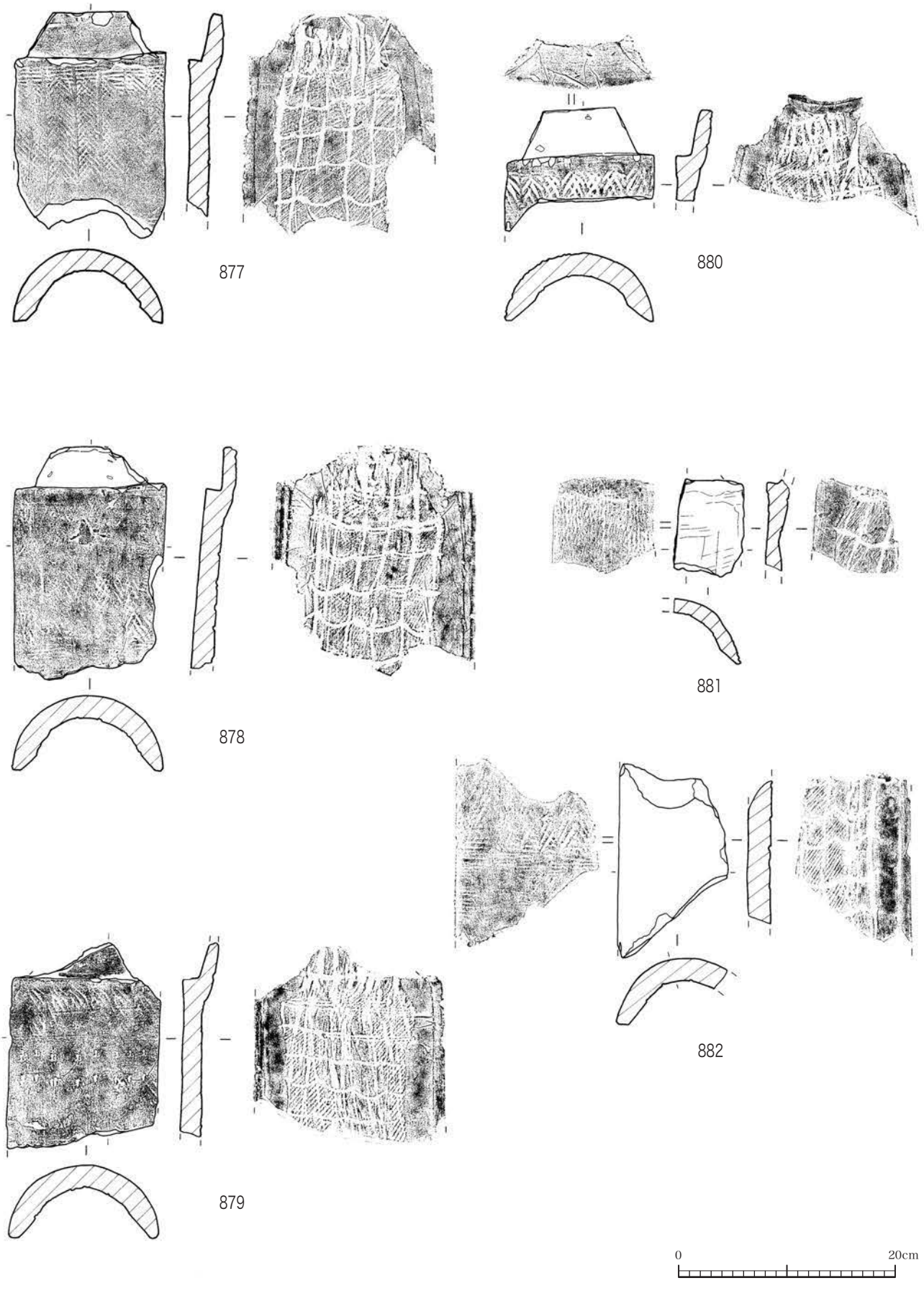
869

870

875

876

図版113　屋瓦1　高麗系軒平瓦・平瓦、大和系軒丸瓦・軒平瓦



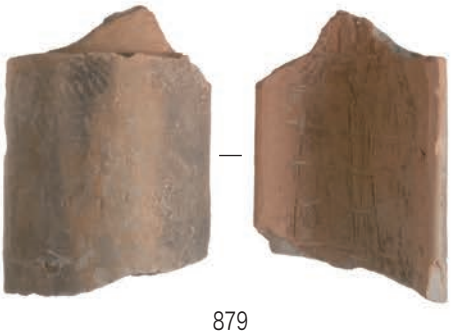
第133図　屋瓦２　大和系丸瓦（１）

877

880

878

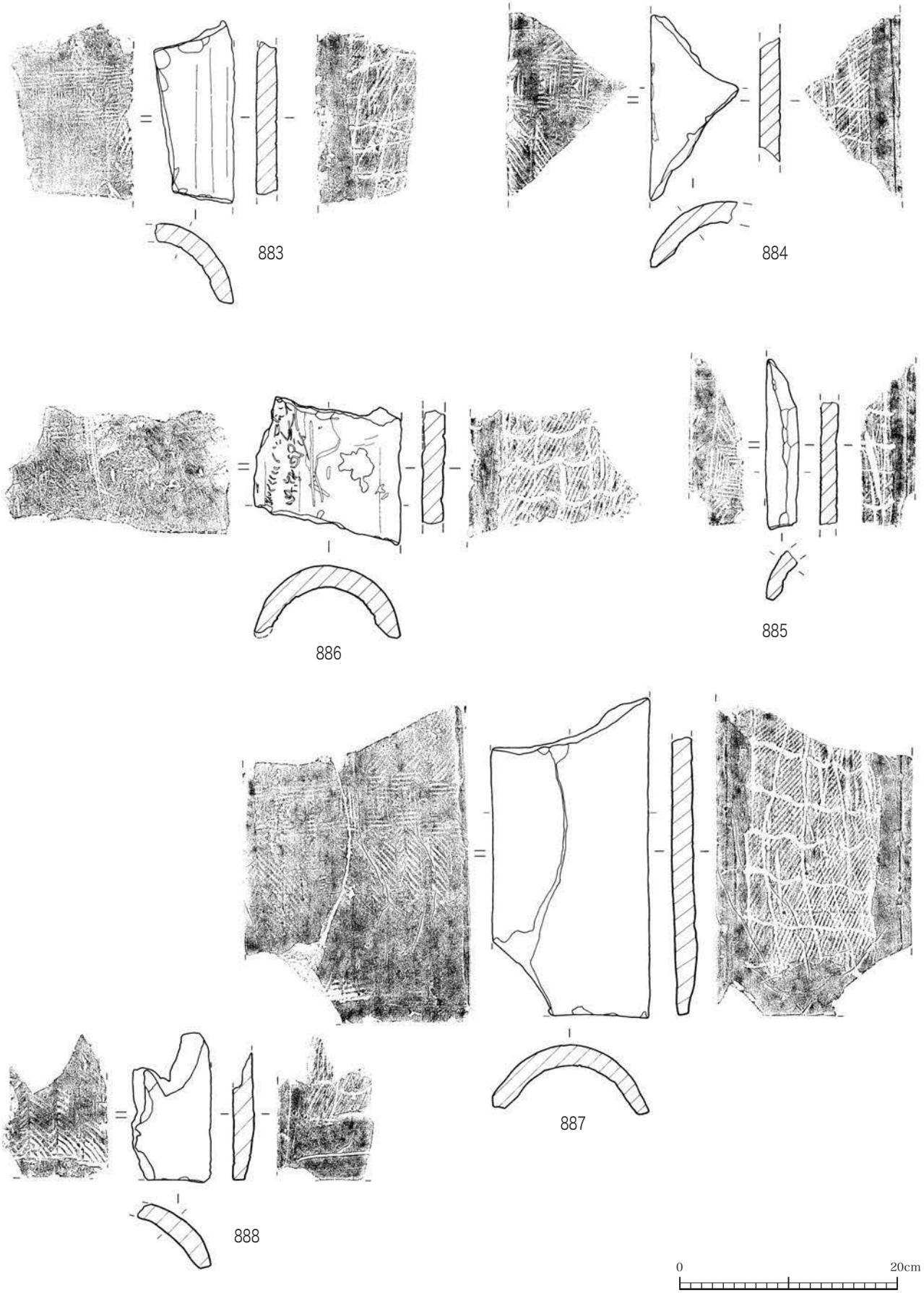
881



879

882

図版114　屋瓦２　大和系丸瓦（１）



第134図　屋瓦３　大和系丸瓦（２）

883

884

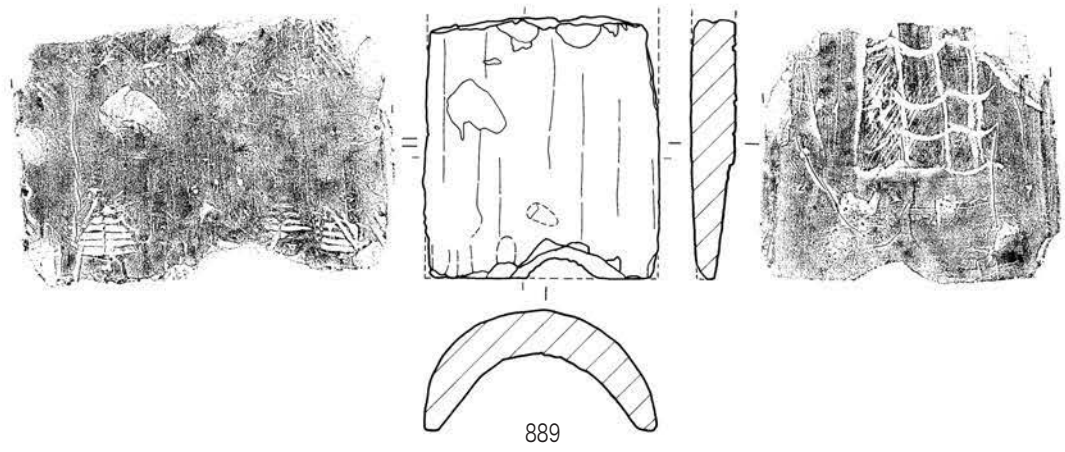
885

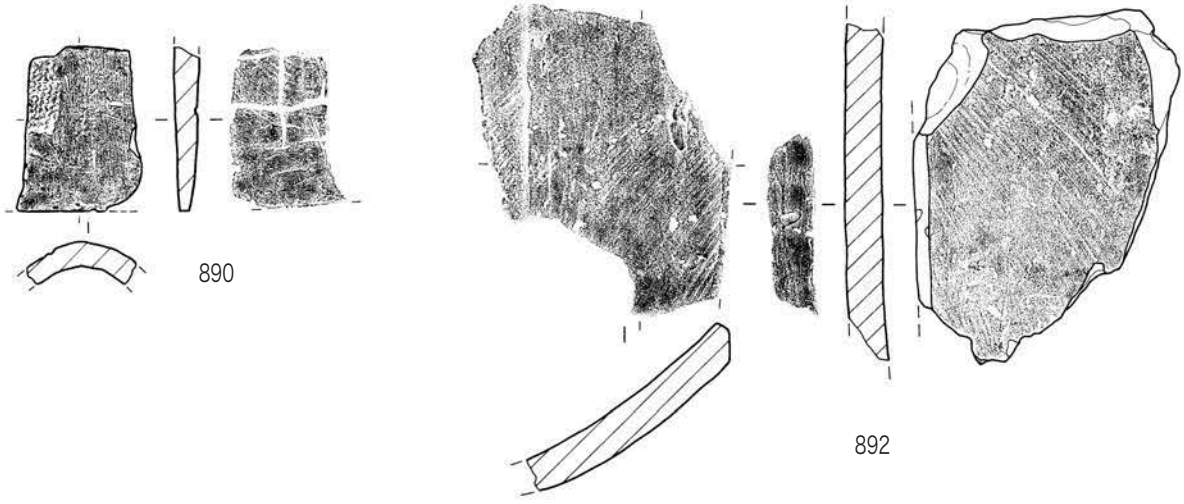
886

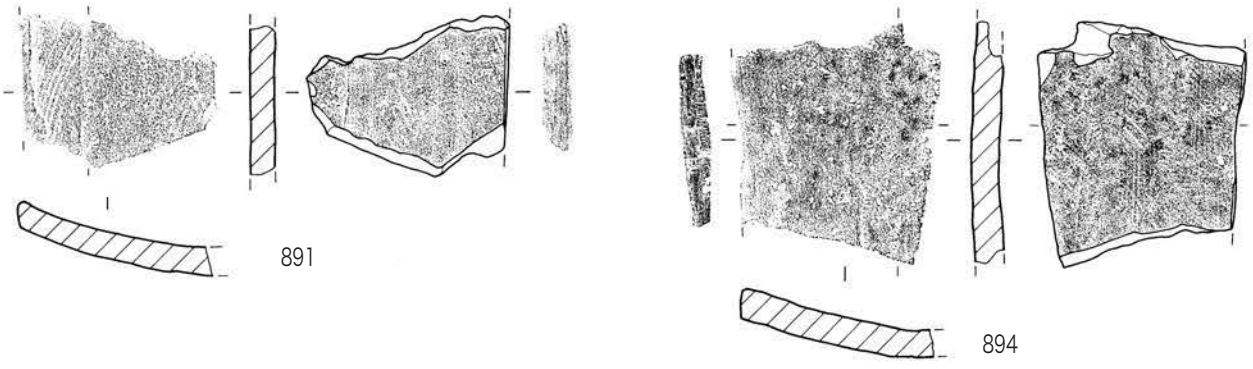
887

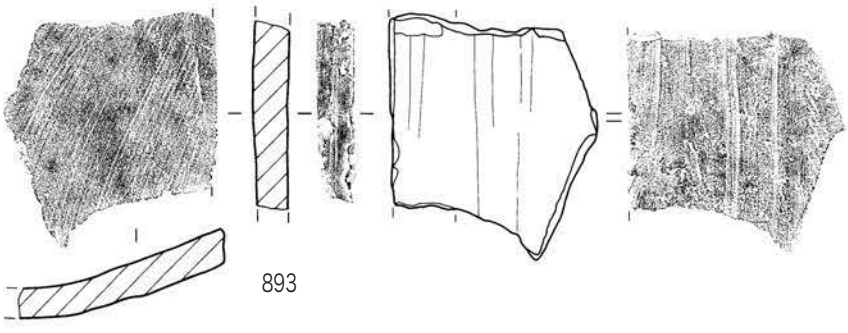
888

図版115　屋瓦３　大和系丸瓦（２）





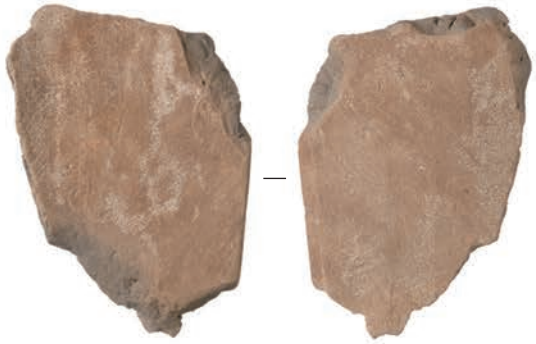




第135図　屋瓦４　大和系丸瓦（３）・平瓦（１）

889

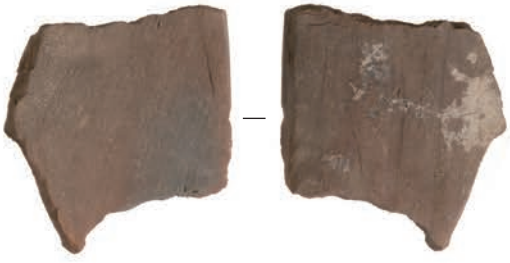
890



892

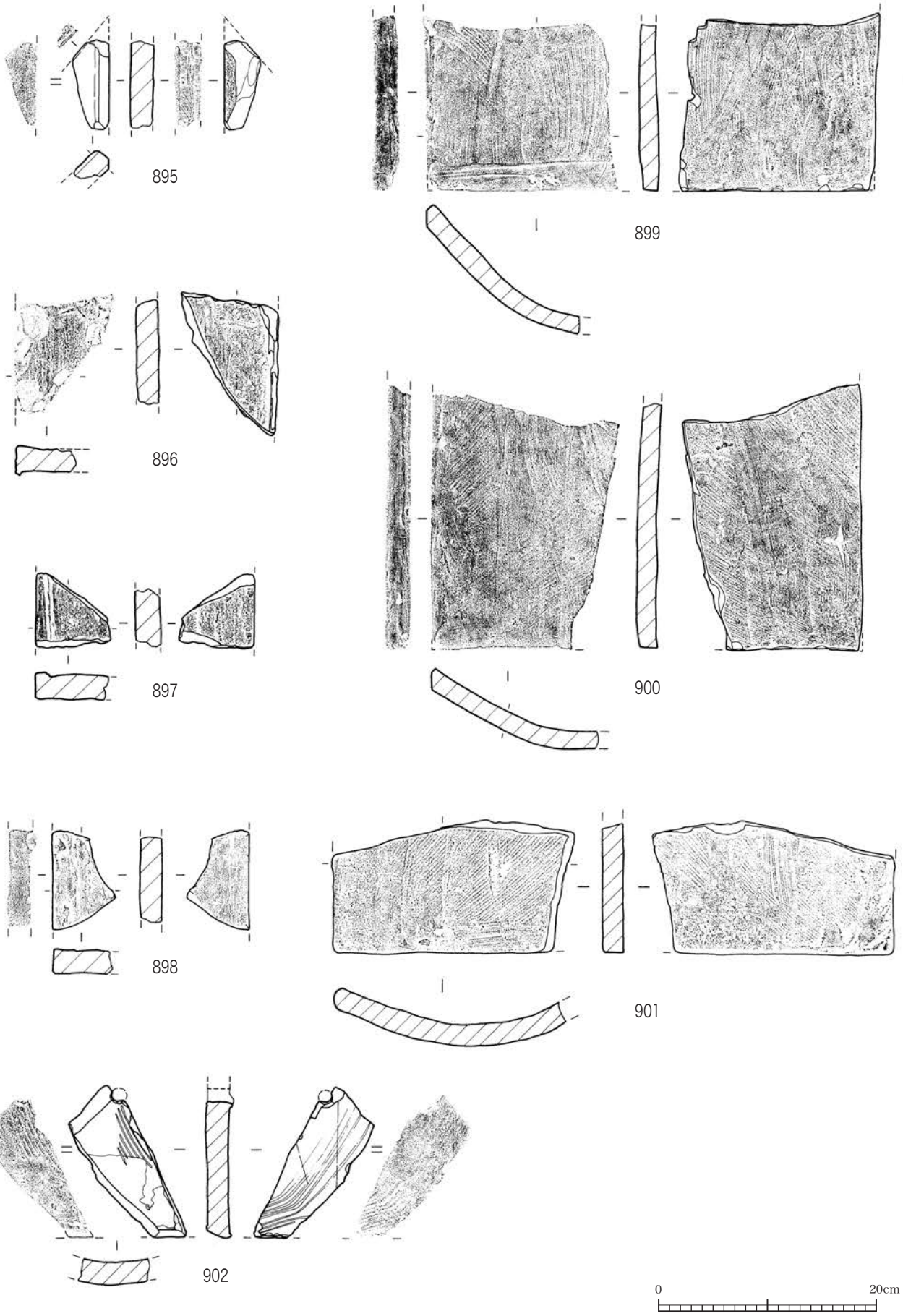
891

894



893

図版116　屋瓦４　大和系丸瓦（３）・平瓦（１）



第136図　屋瓦５　大和系平瓦（２）

895

899

896

900

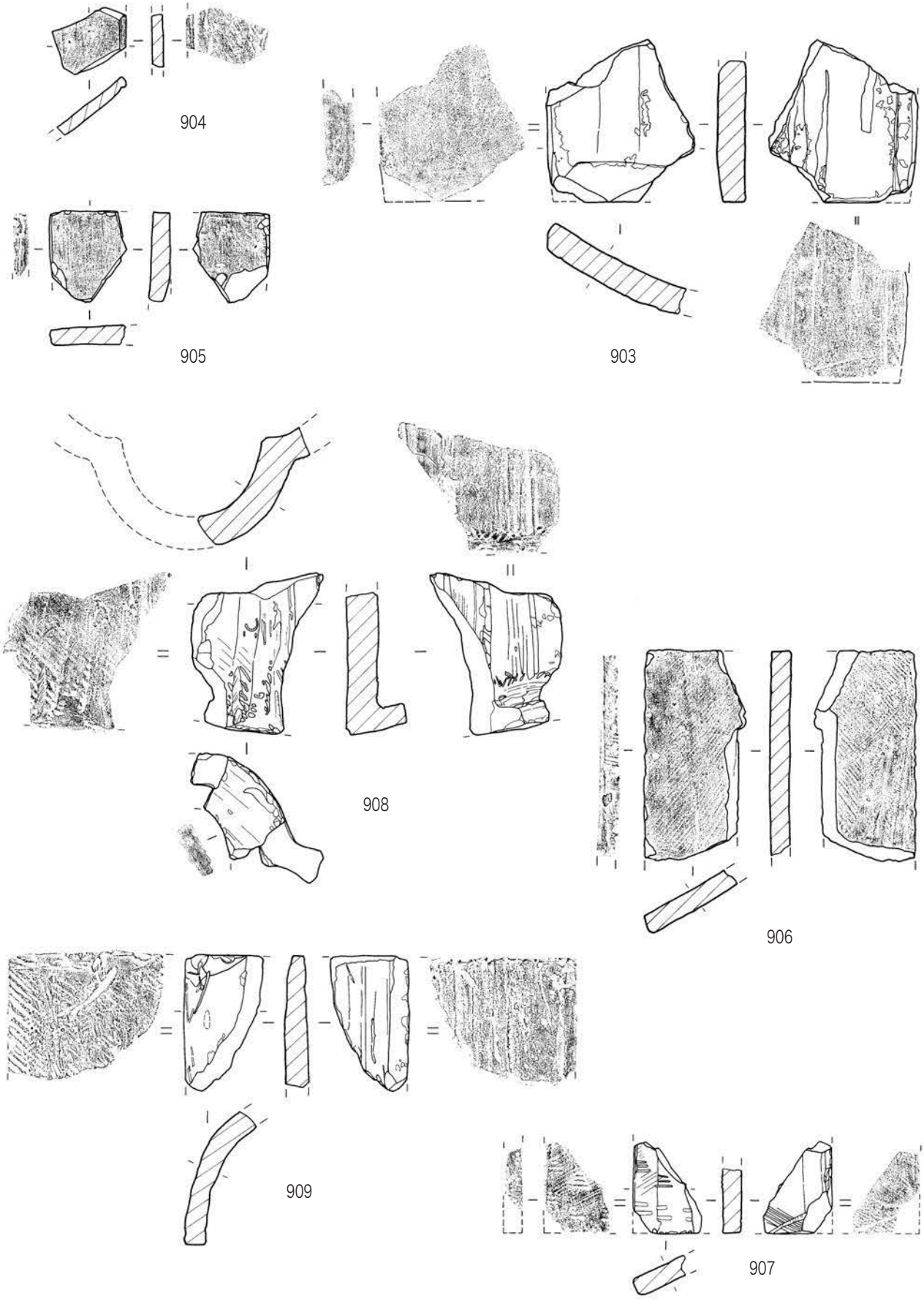
897

898

901

902

図版117　屋瓦５　大和系平瓦（２）



第137図　屋瓦６　大和系平瓦（３）・雁振瓦（１）

904

903

905

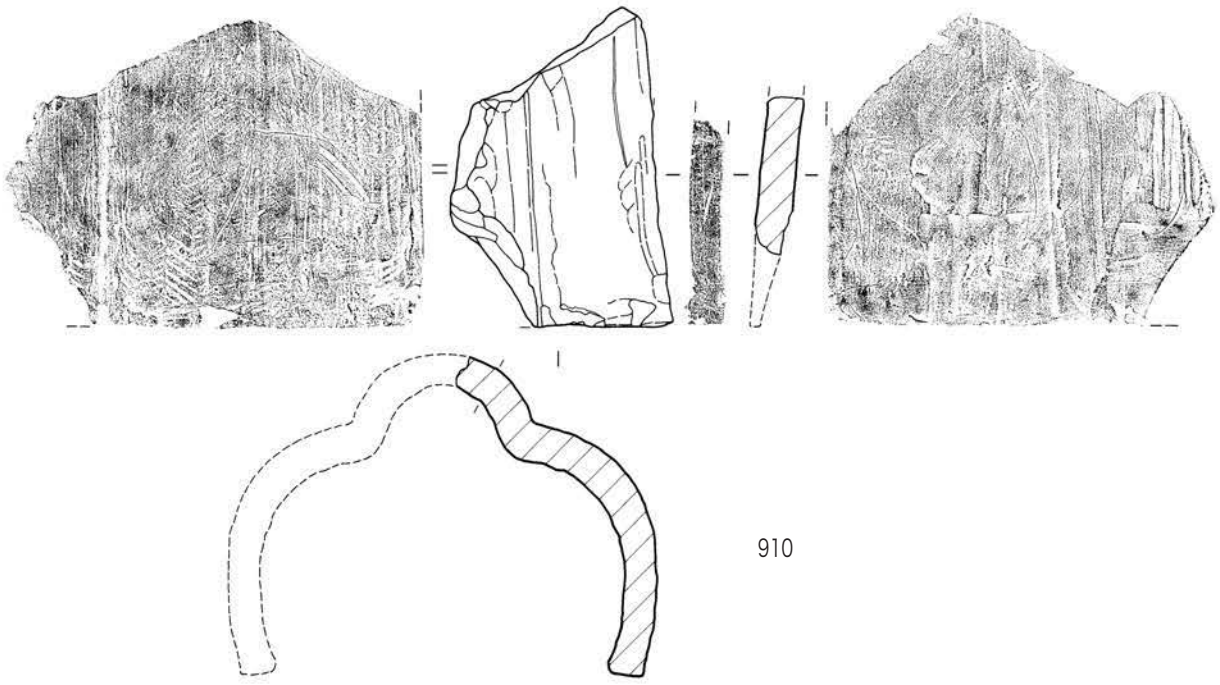
906

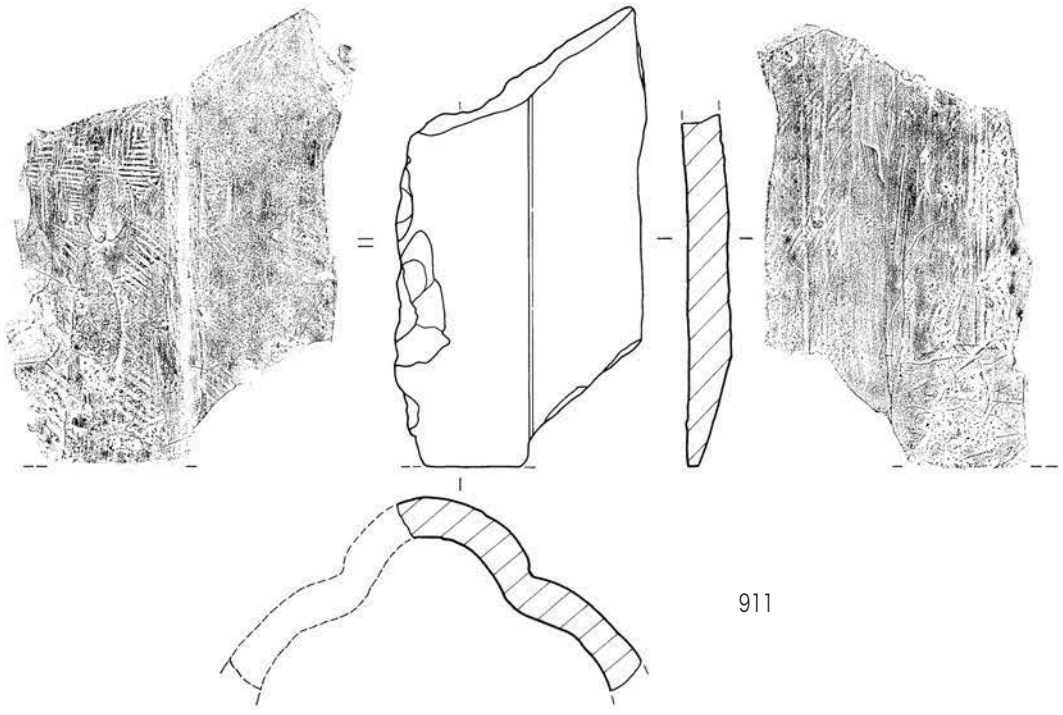
908

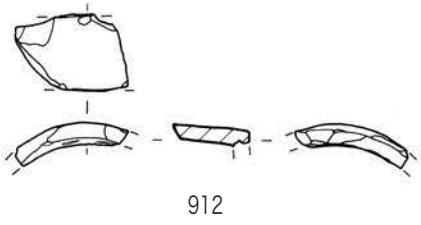
909

907

図版118　屋瓦6　大和系平瓦（3）・雁振瓦（1）

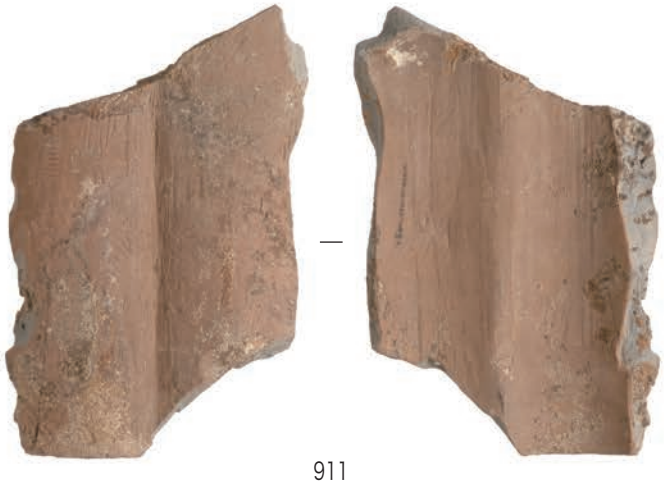






第138図　屋瓦７　大和系雁振瓦（２）・役瓦

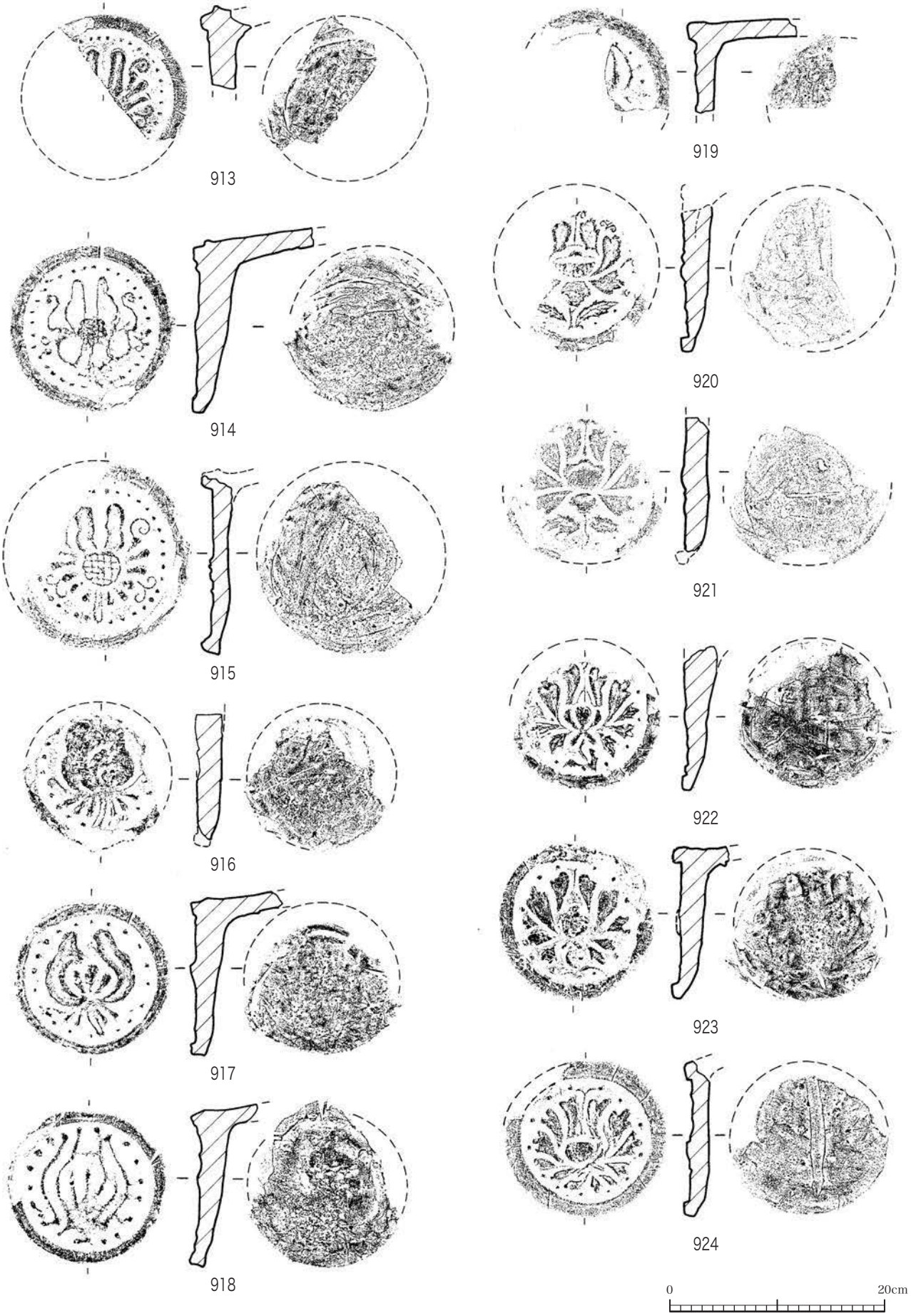
910



911

912

図版119　屋瓦７　大和系雁振瓦（２）・役瓦



第139図　屋瓦８　明朝系軒丸瓦（１）

913

914

915

916

917

918

919

920

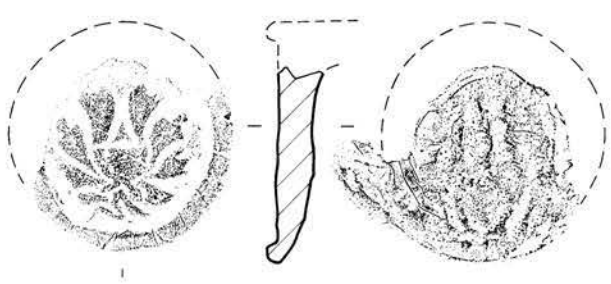
921

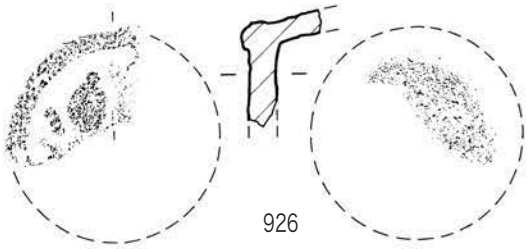
922

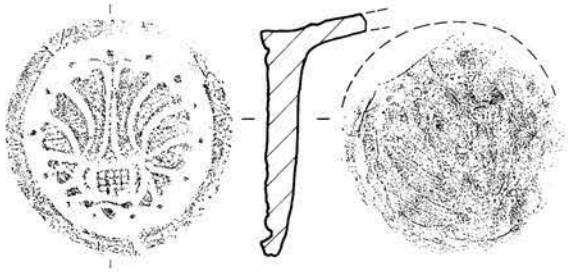
923

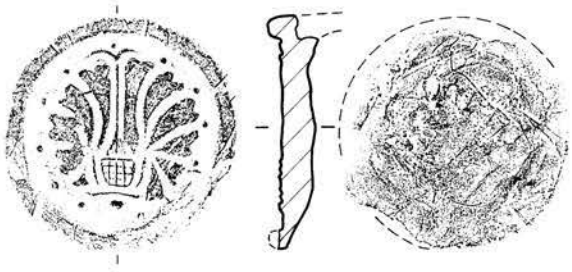
924

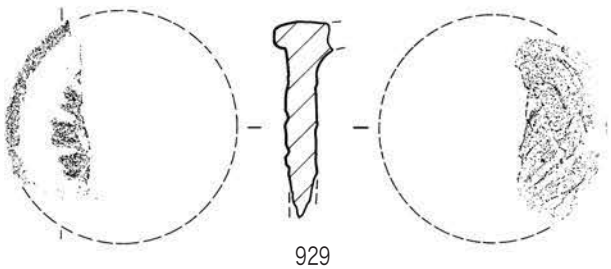
図版120　屋瓦８　明朝系軒丸瓦（１）

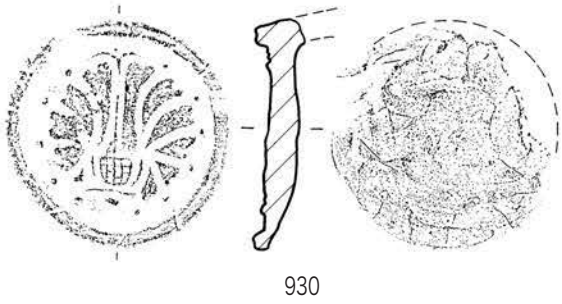

925

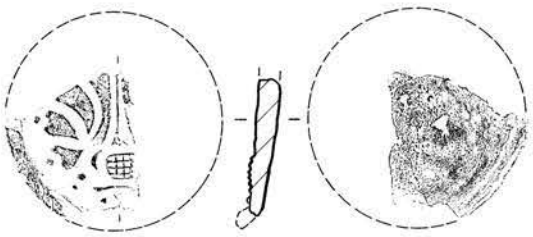

926

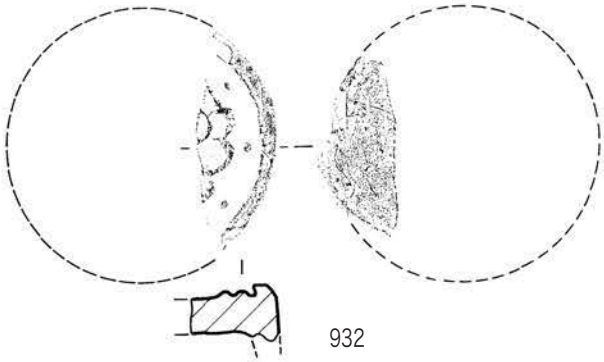

927

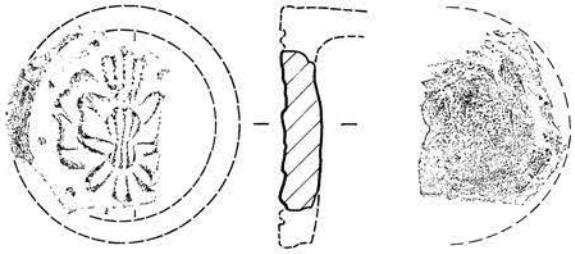

928

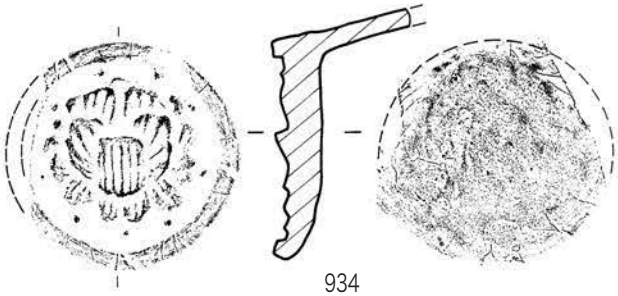

929


930


931


932


933


934

第140図　屋瓦９　明朝系軒丸瓦（２）

925

930

926

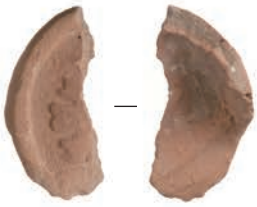
931

927

932

928

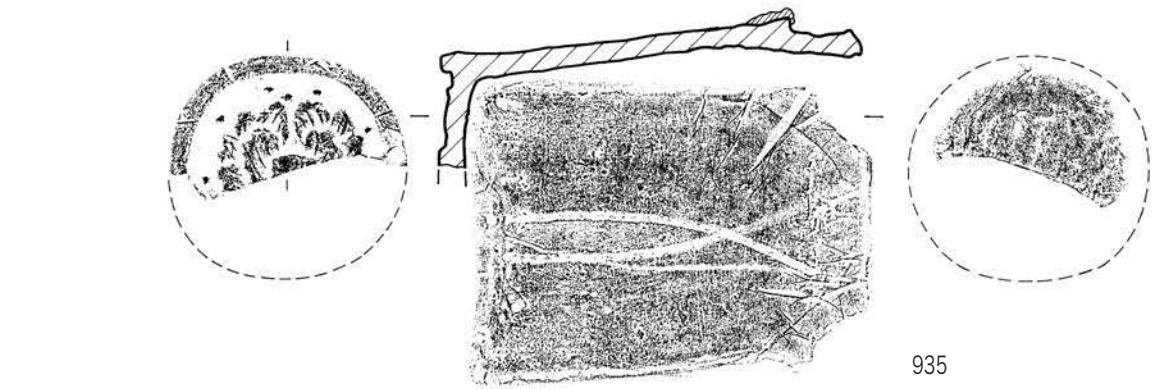
933

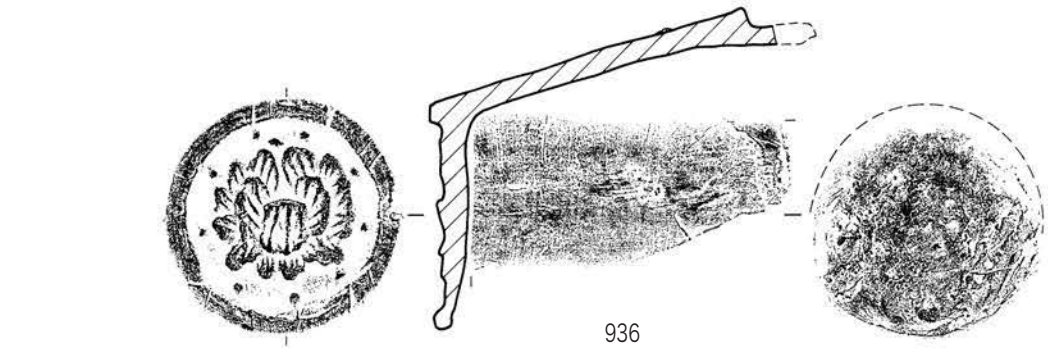


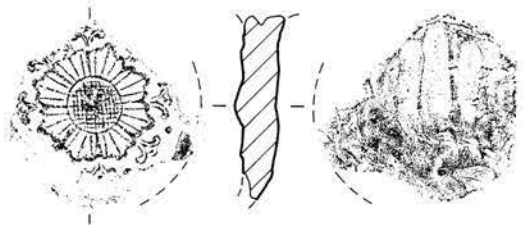
929

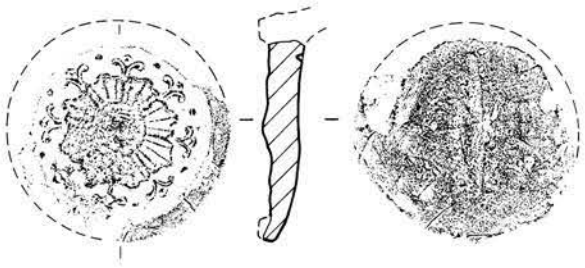
934

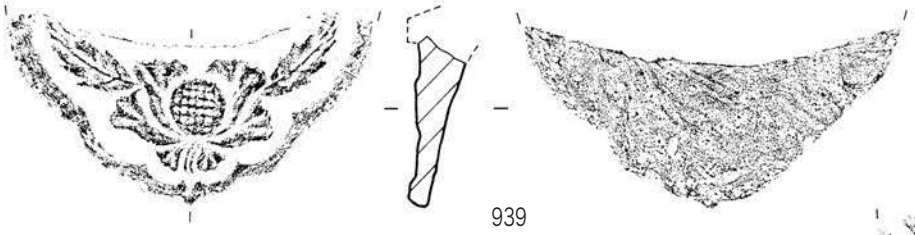
図版121　屋瓦９　明朝系軒丸瓦（２）

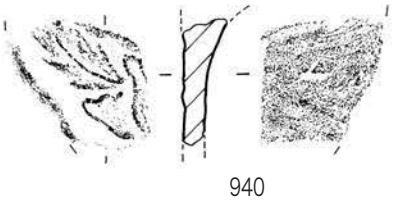


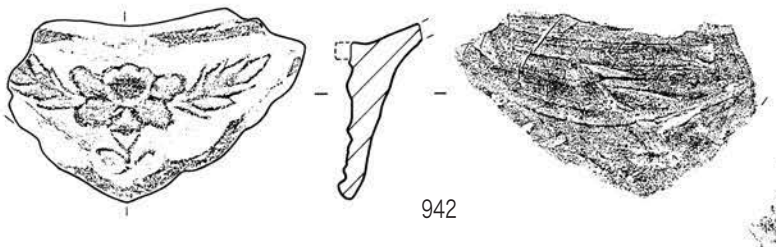


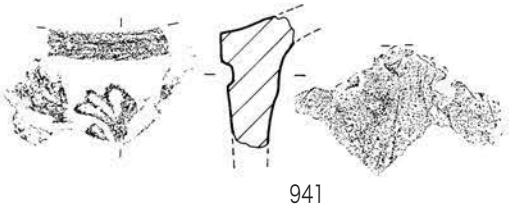






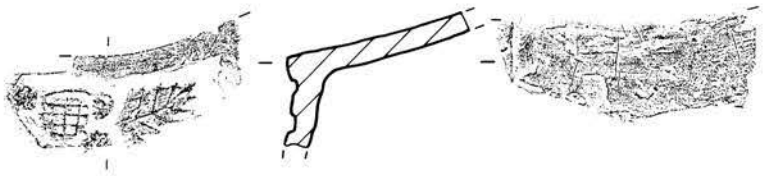




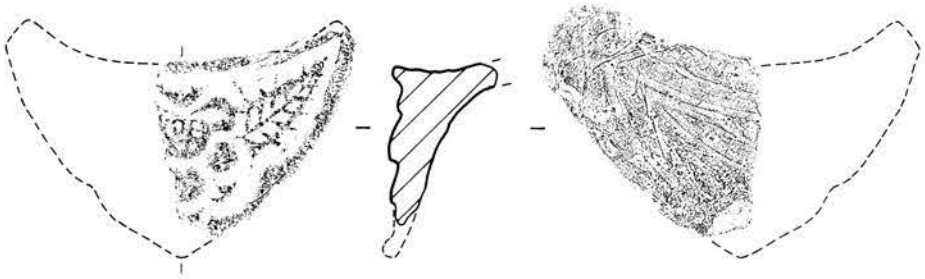


第141図　屋瓦10　明朝系軒丸瓦（3）・軒平瓦（1）

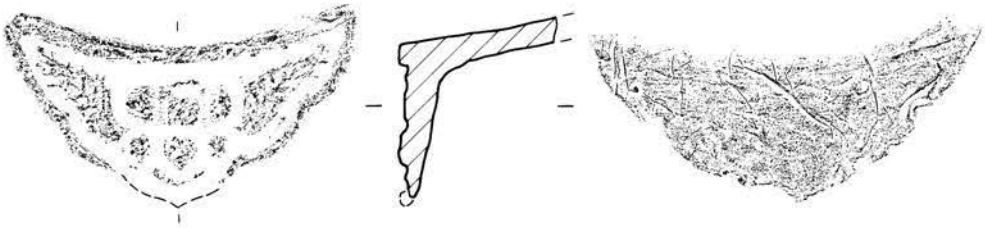
図版122　屋瓦10　明朝系軒丸瓦（3）・軒平瓦（1）



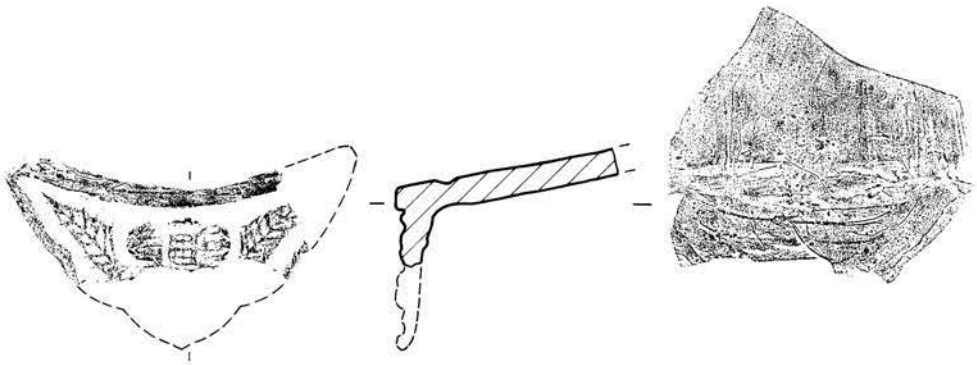
943



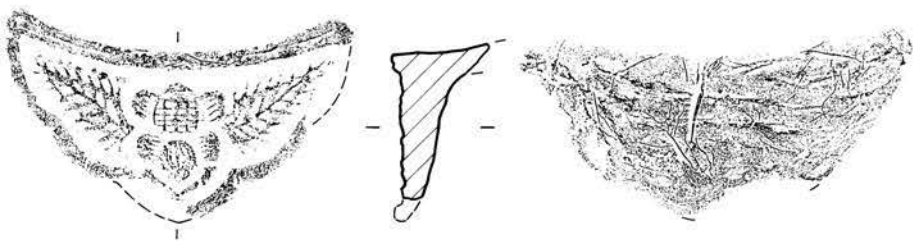
944



945



946



947

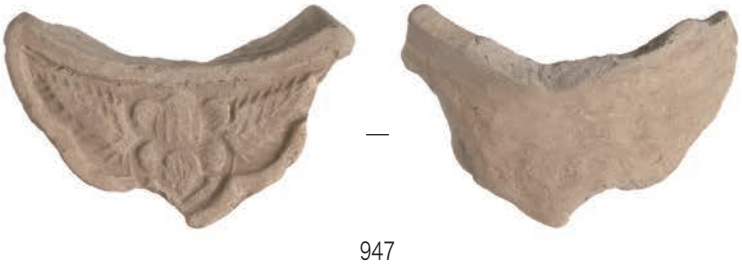
第142図　屋瓦11　明朝系軒平瓦（2）

943

944

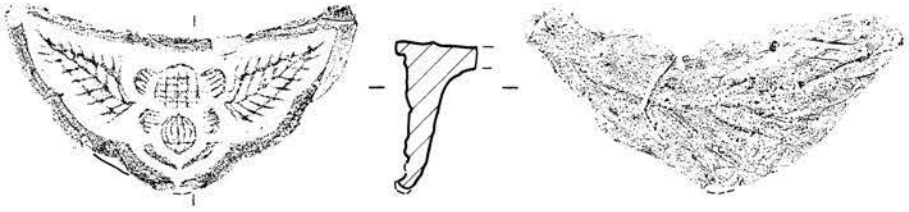
945

946

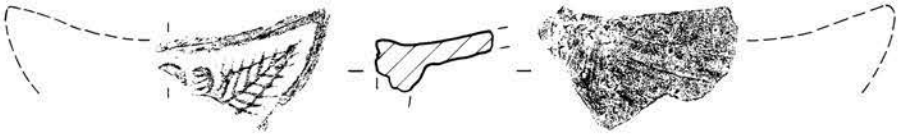


947

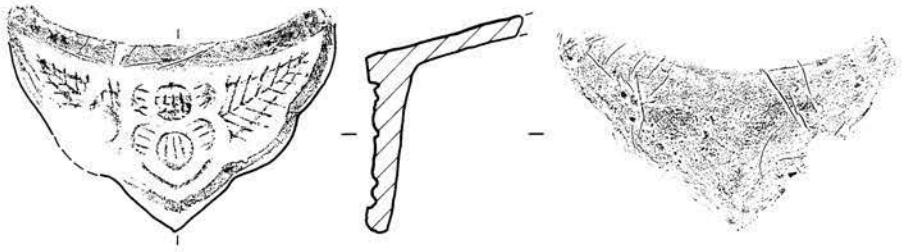
図版123　屋瓦11　明朝系軒平瓦（2）



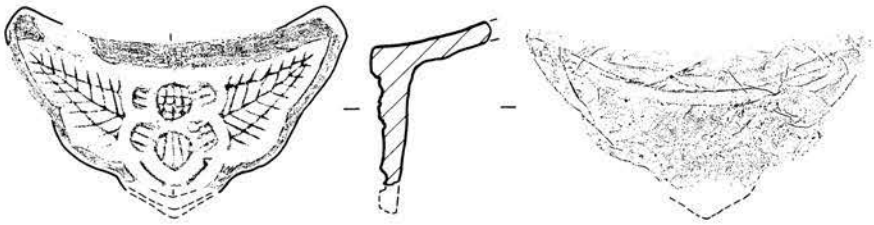
948



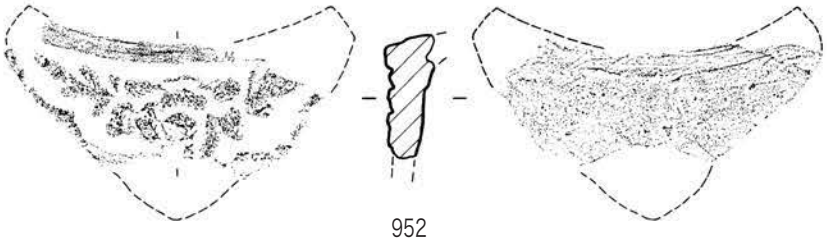
949



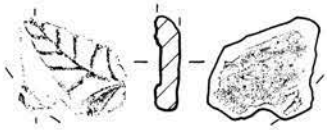
950



951



952



953

第143図　屋瓦12　明朝系軒平瓦（3）

948

949

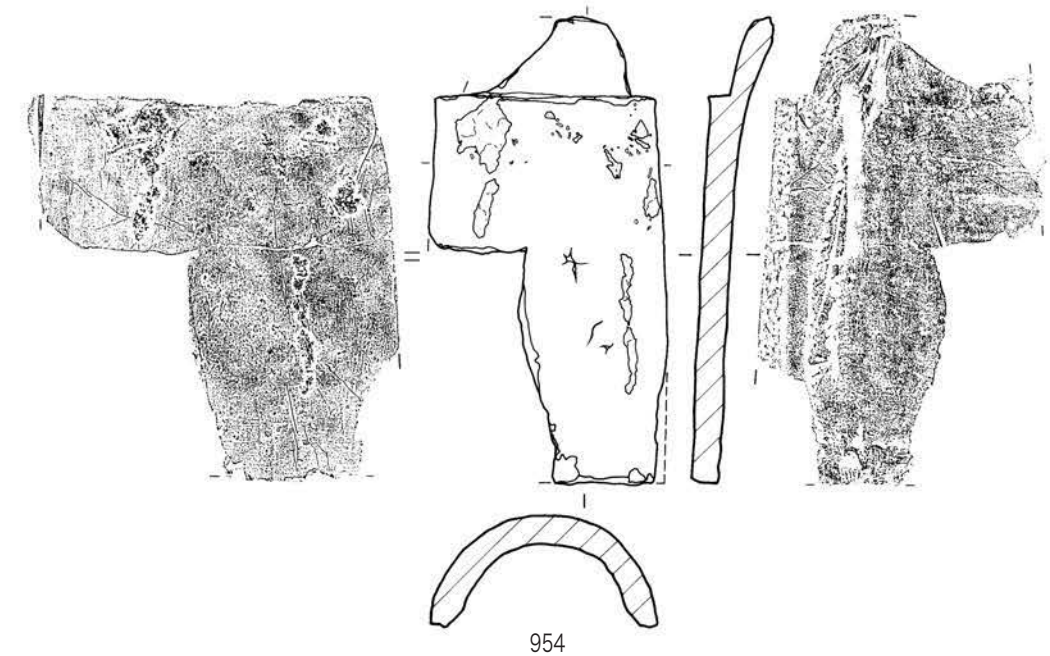
950

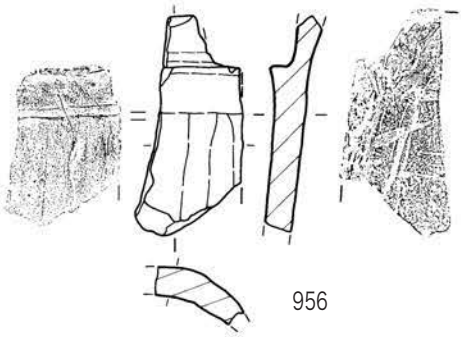
951

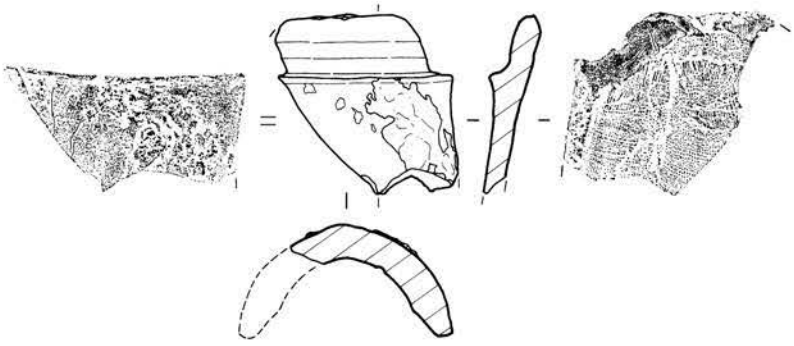
952

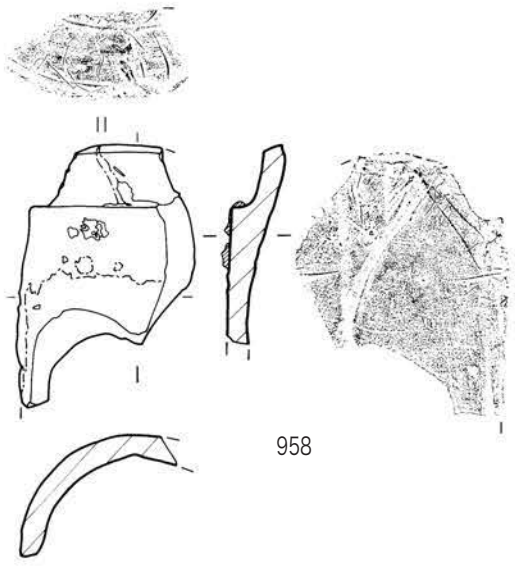
953

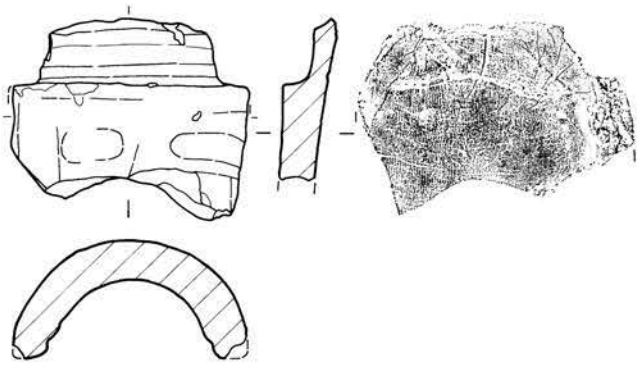
図版124　屋瓦12　明朝系軒平瓦（3）









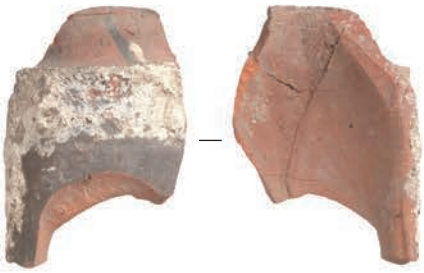


第144図　屋瓦13　明朝系丸瓦（1）

954

956

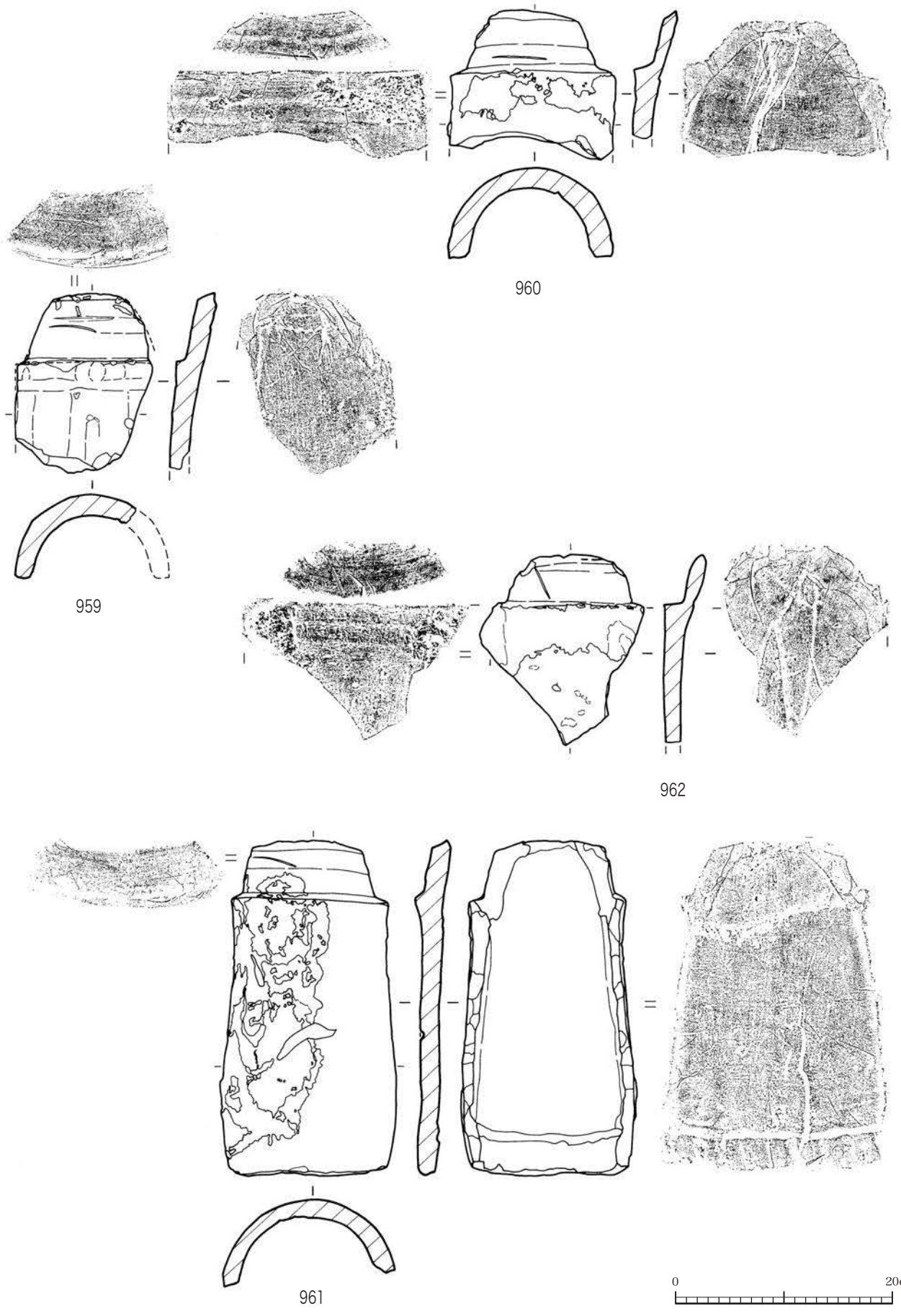
955



958

957

図版125　屋瓦13　明朝系丸瓦（1）



第145図　屋瓦14　明朝系丸瓦（2）

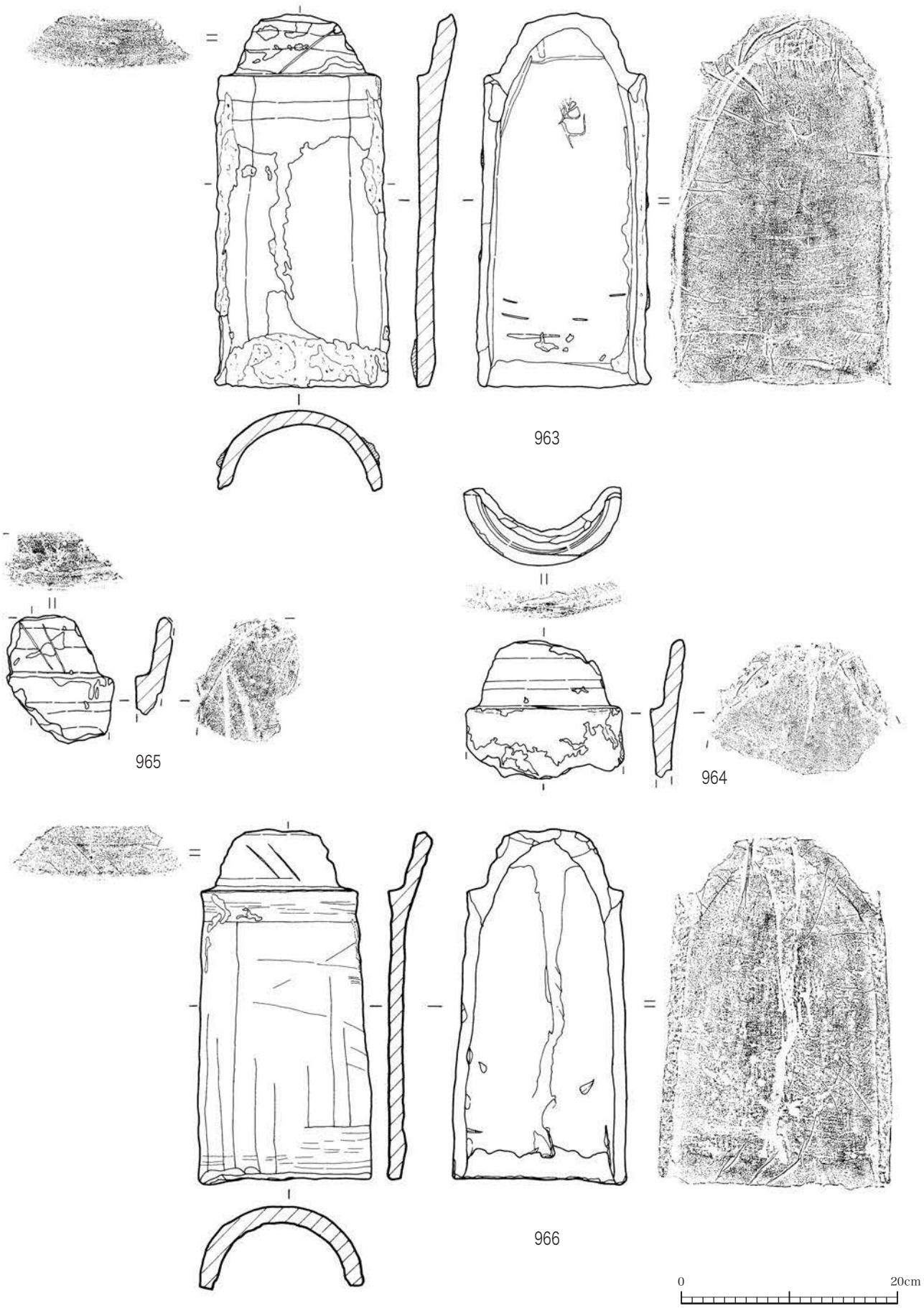
960

959

962

961

図版126　屋瓦14　明朝系丸瓦（2）



第146図　屋瓦15　明朝系丸瓦（3）

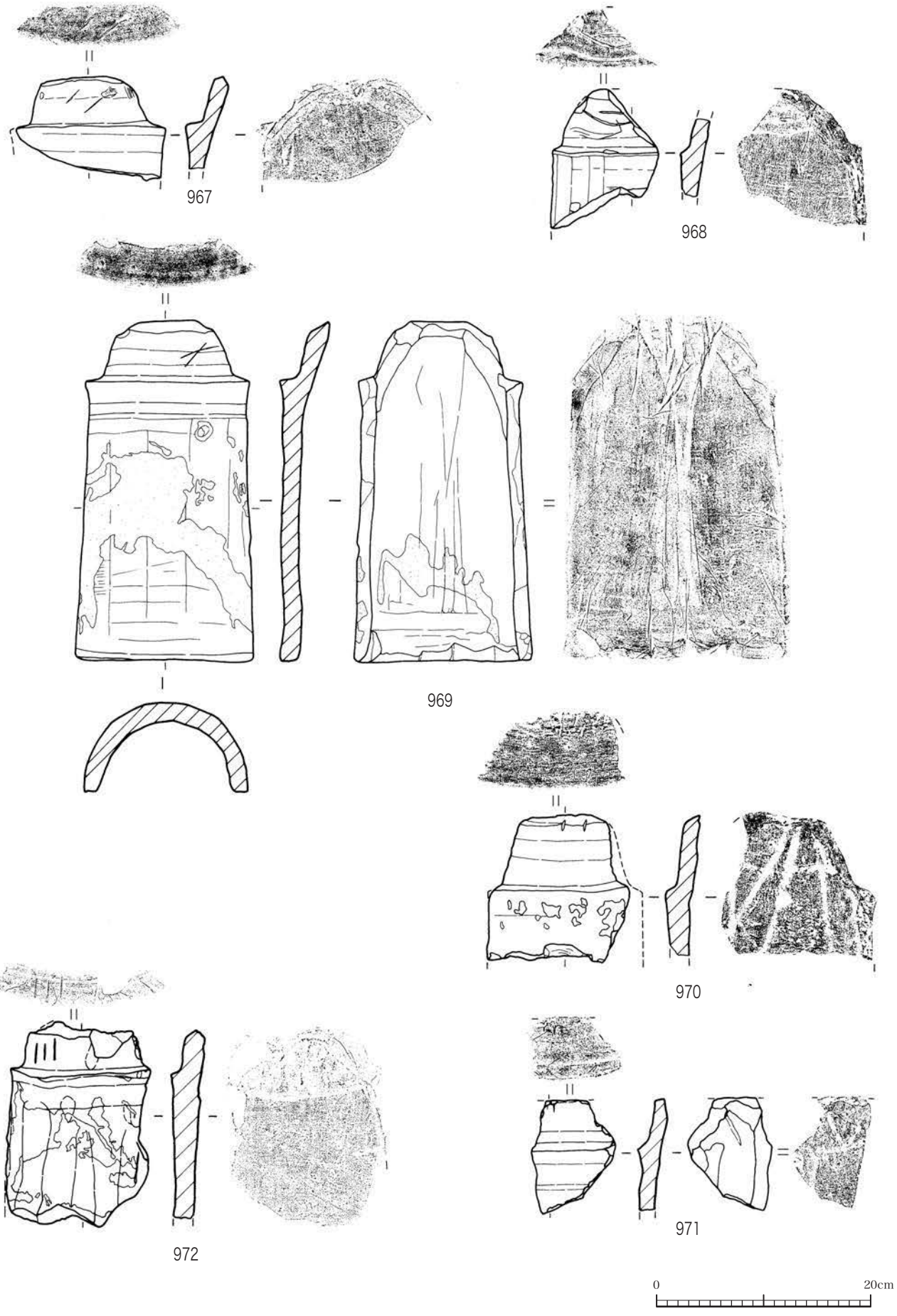
963

965

964

966

図版127　屋瓦15　明朝系丸瓦（3）



第147図　屋瓦16　明朝系丸瓦（4）

967

968

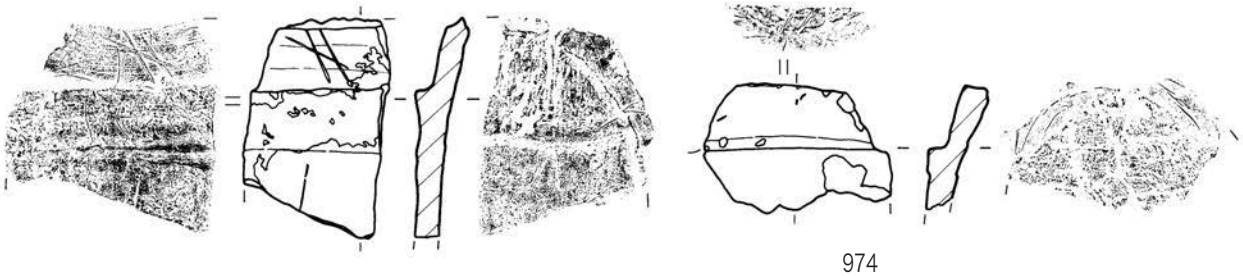
969

970

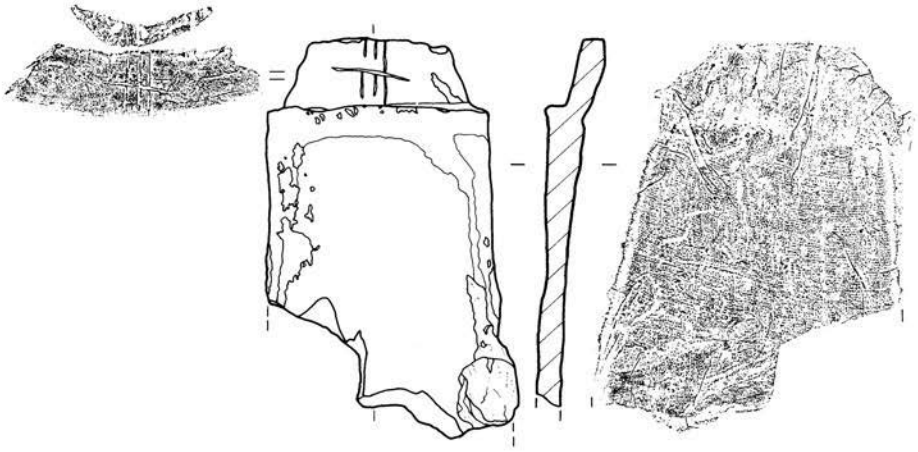
972

971

図版128　屋瓦16　明朝系丸瓦（4）

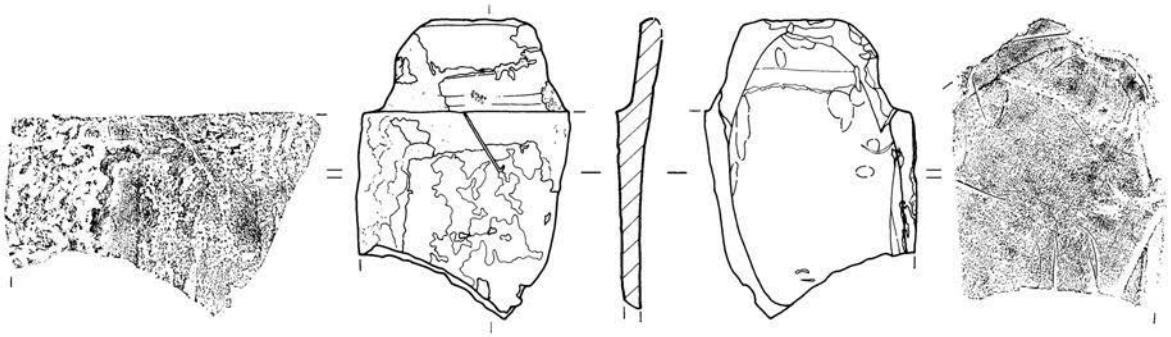


973　974



975

976　977



978

第148図　屋瓦17　明朝系丸瓦（5）

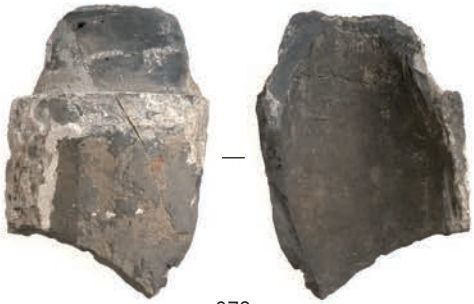
973

974

975

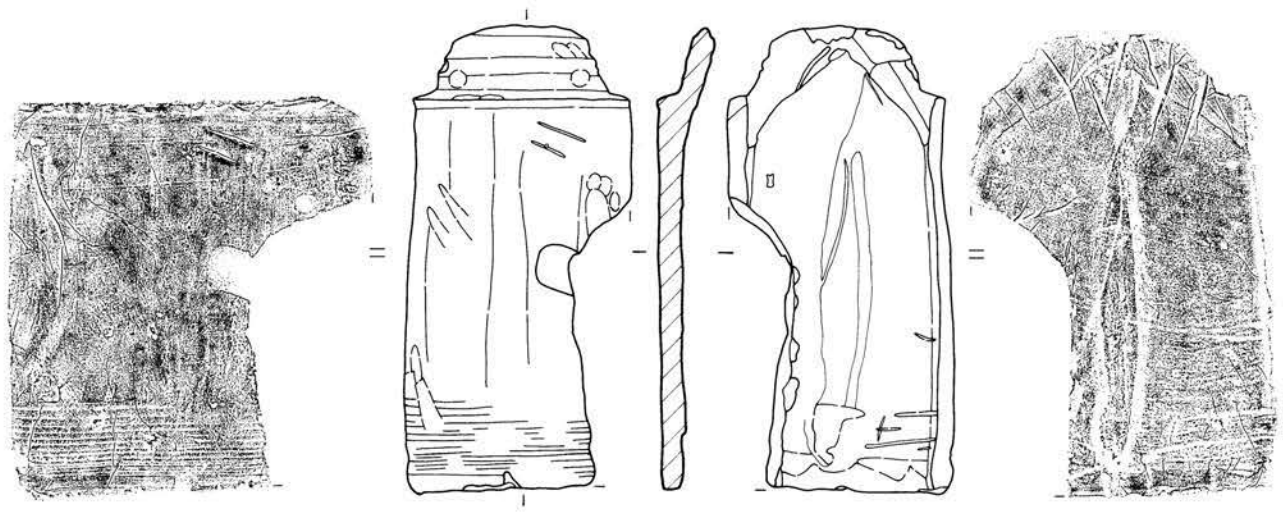
976

977

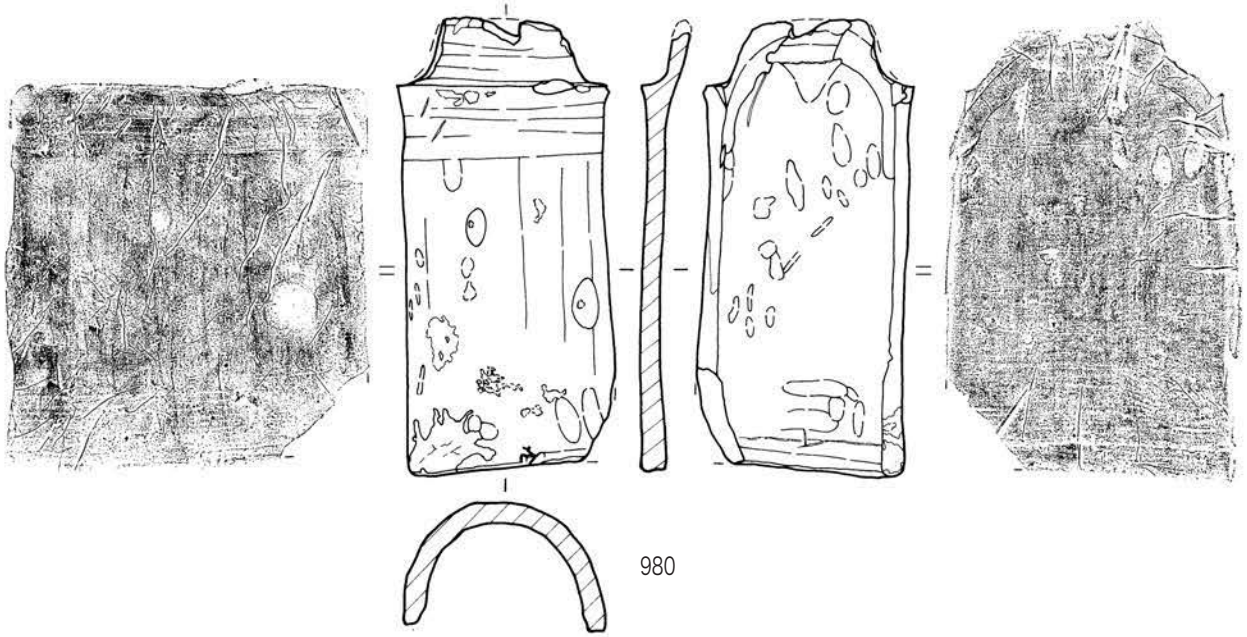


978

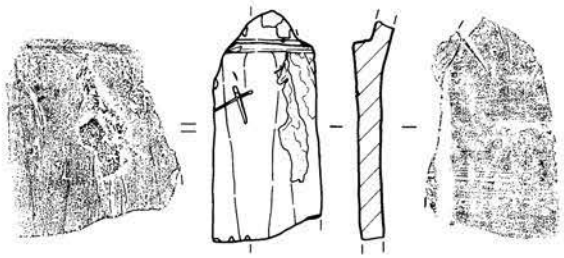
図版129　屋瓦17　明朝系丸瓦（5）



979



980



981

0 20cm

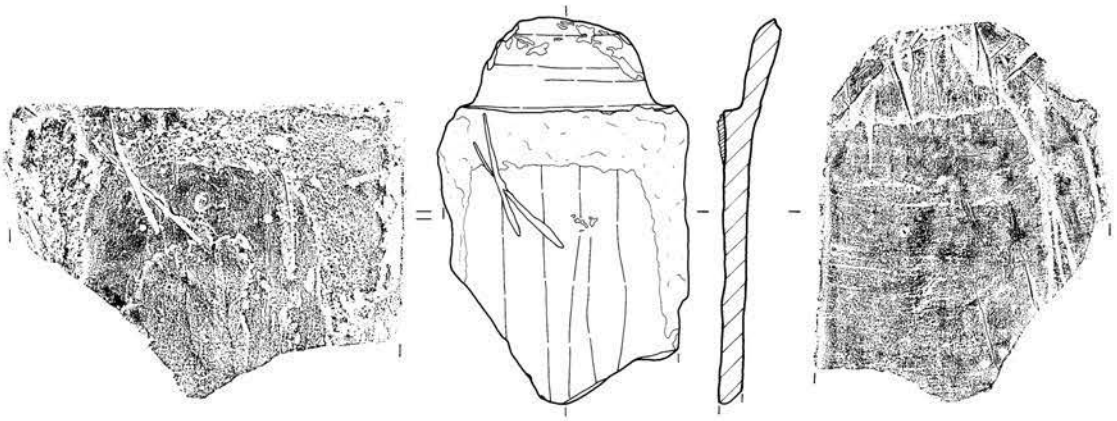
第149図　屋瓦18　明朝系丸瓦（6）

979

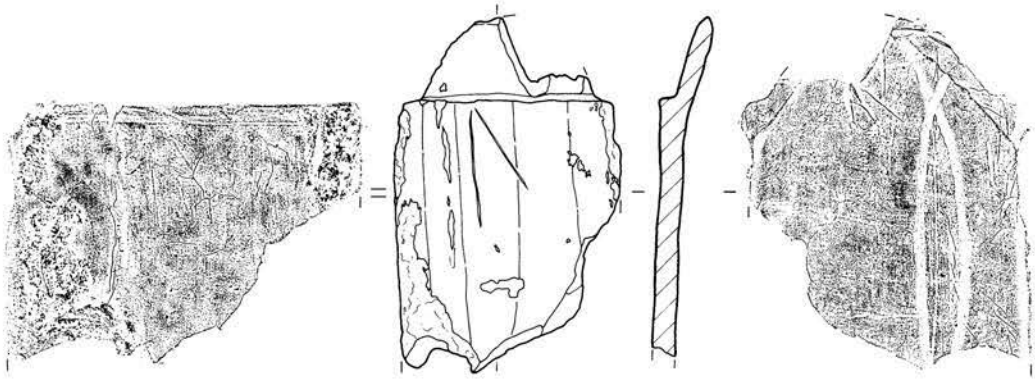
980

981

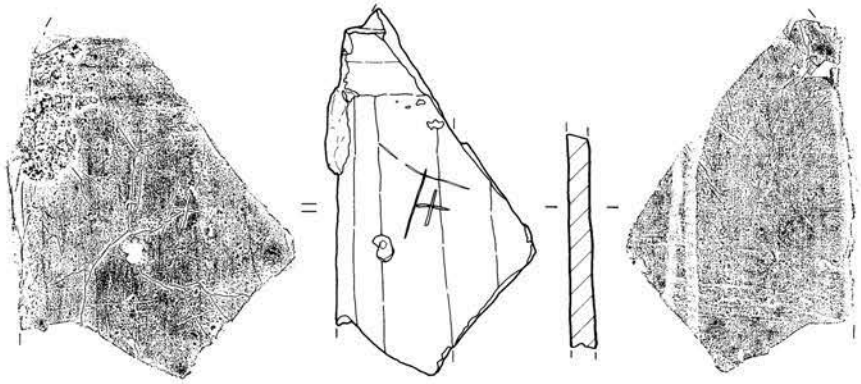
図版130　屋瓦18　明朝系丸瓦（6）



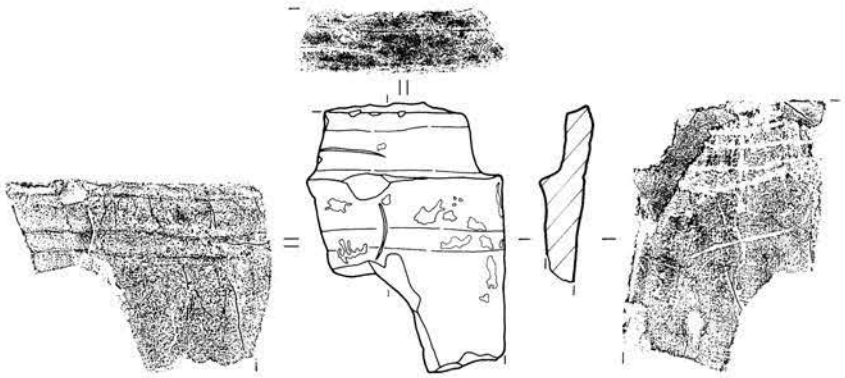
982



983



984



985

0 20cm

第150図　屋瓦19　明朝系丸瓦（7）

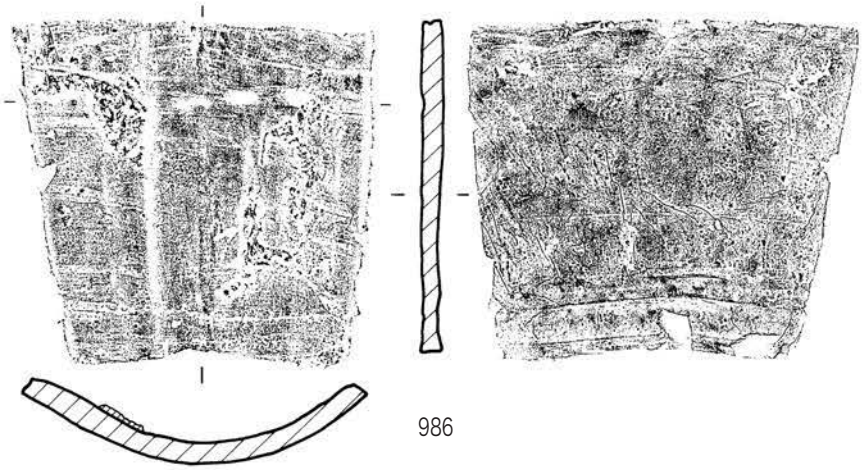
982

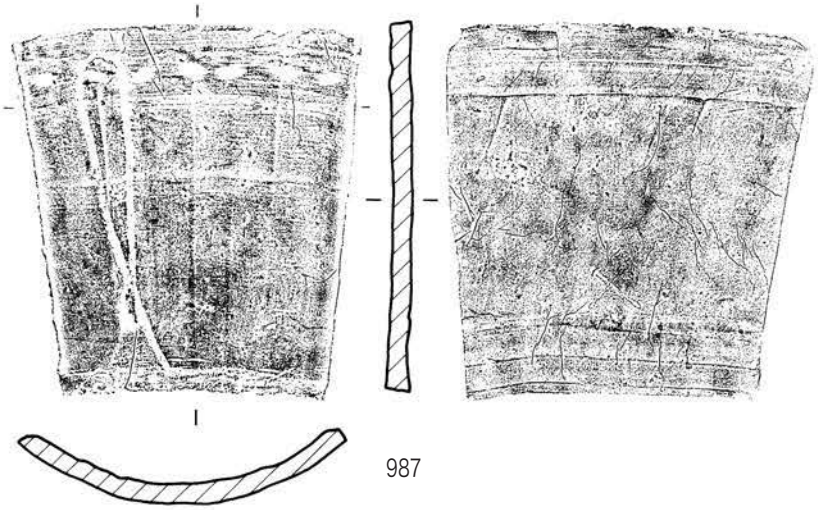
983

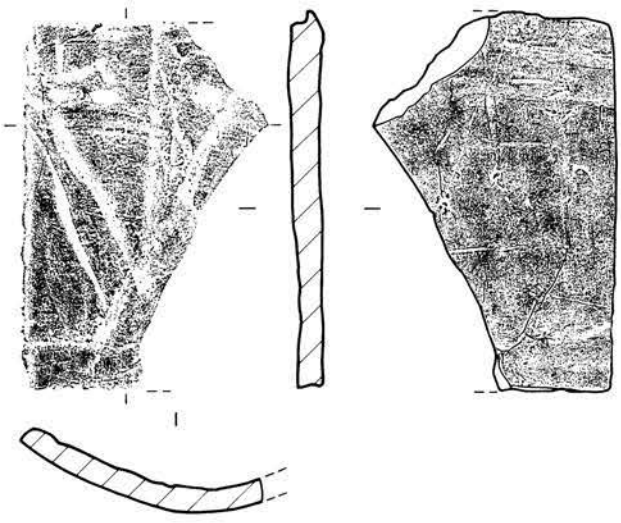
984

985

図版131　屋瓦19　明朝系丸瓦（7）







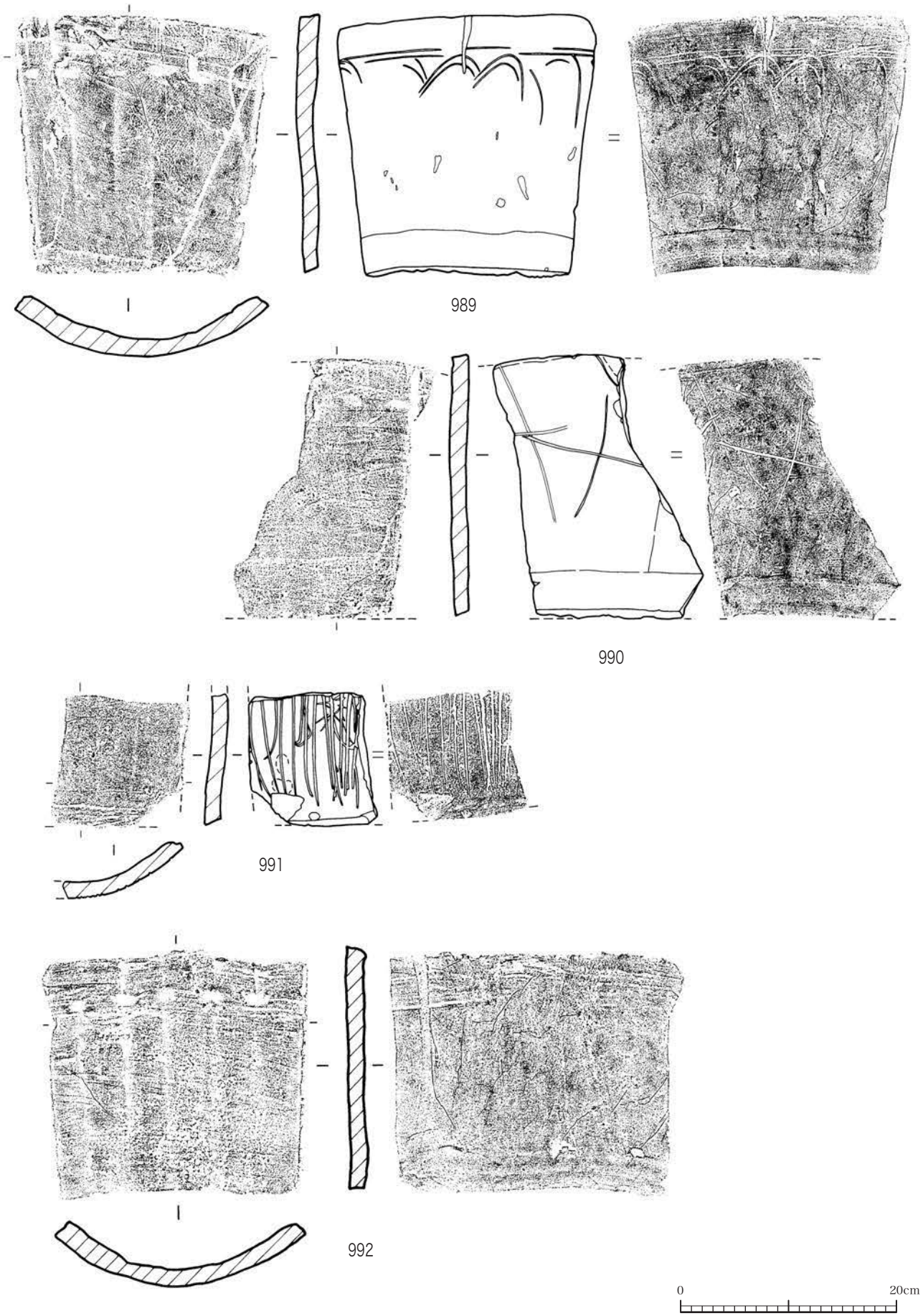
第151図　屋瓦20　明朝系平瓦（1）

986

987

988

図版132　屋瓦20　明朝系平瓦（1）



第152図　屋瓦21　明朝系平瓦（2）

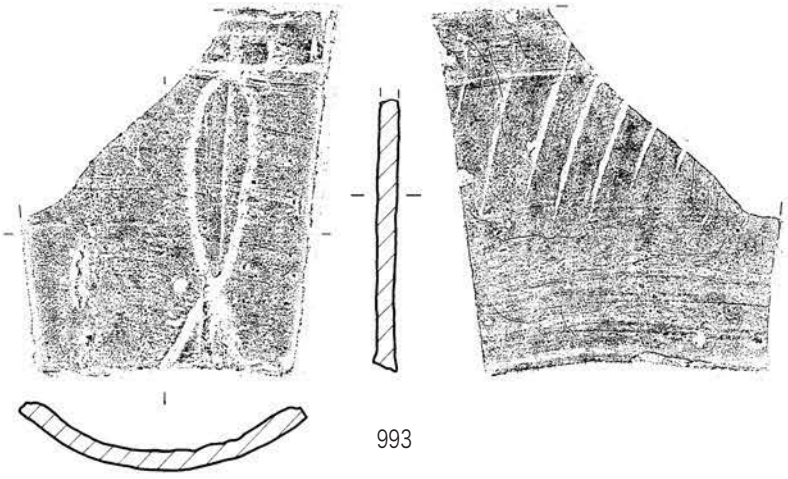
989

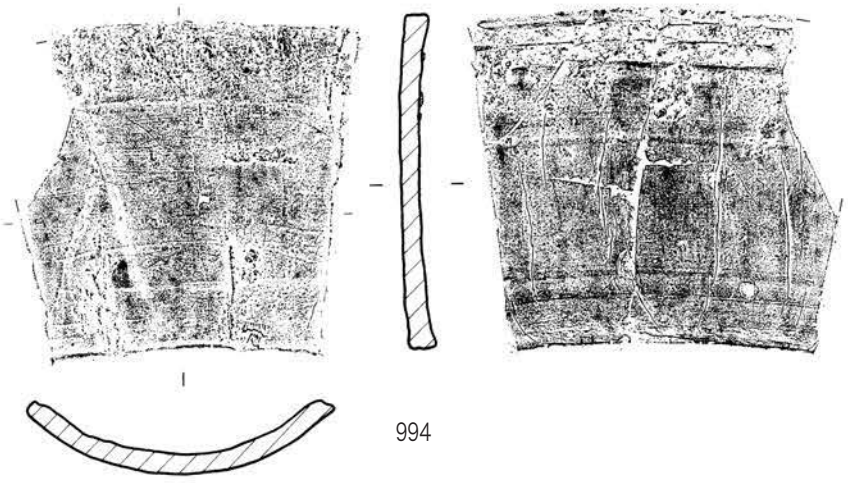
990

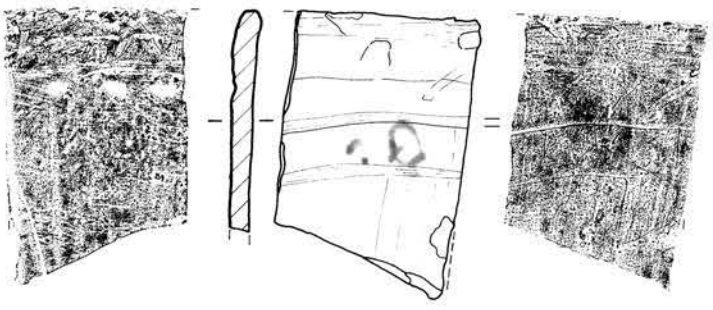
991

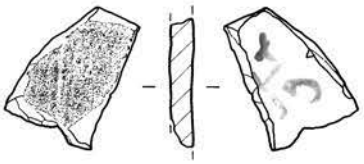
992

図版133　屋瓦21　明朝系平瓦（2）









第153図　屋瓦22　明朝系平瓦（3）

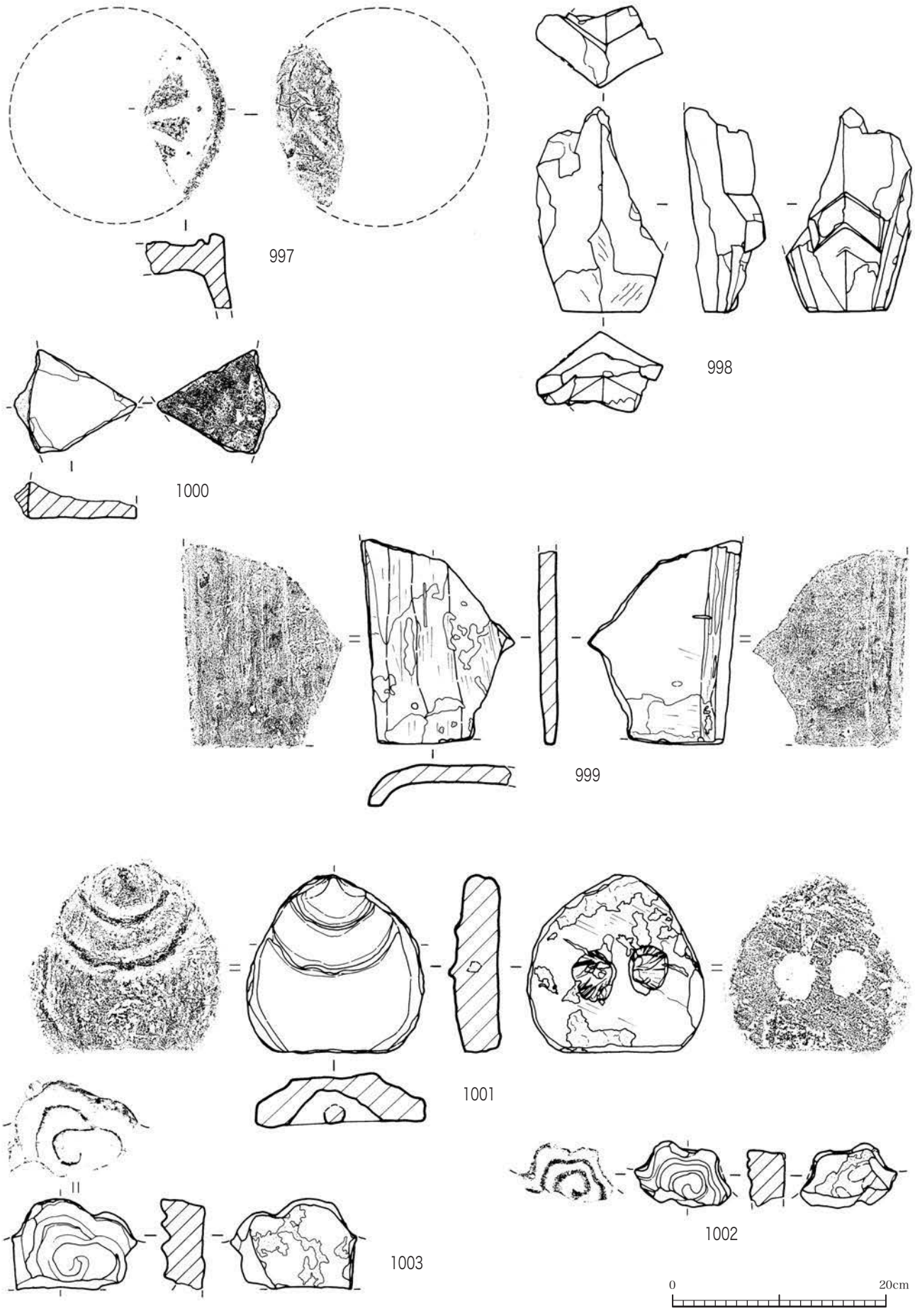
993

994

996

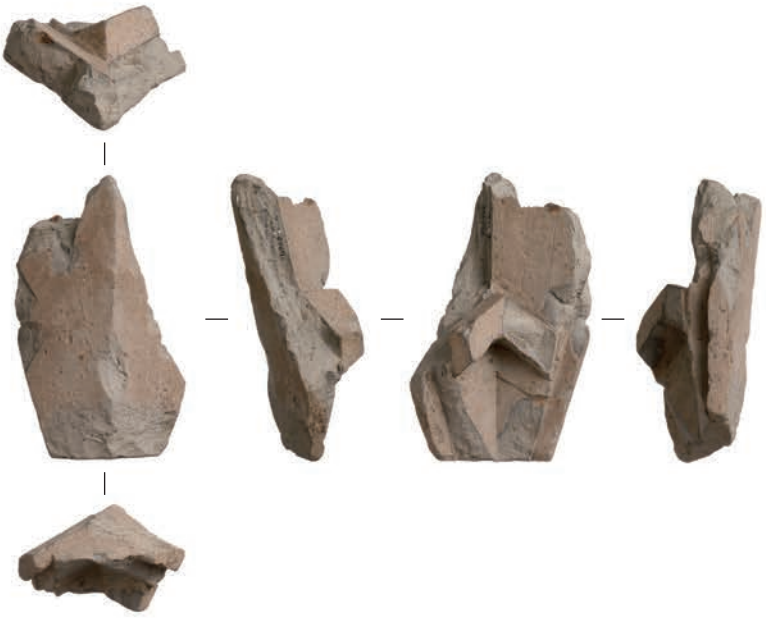
995

図版134　屋瓦22　明朝系平瓦（3）

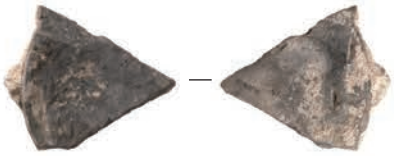


第154図　屋瓦23　明朝系役瓦（1）

997



998



1000

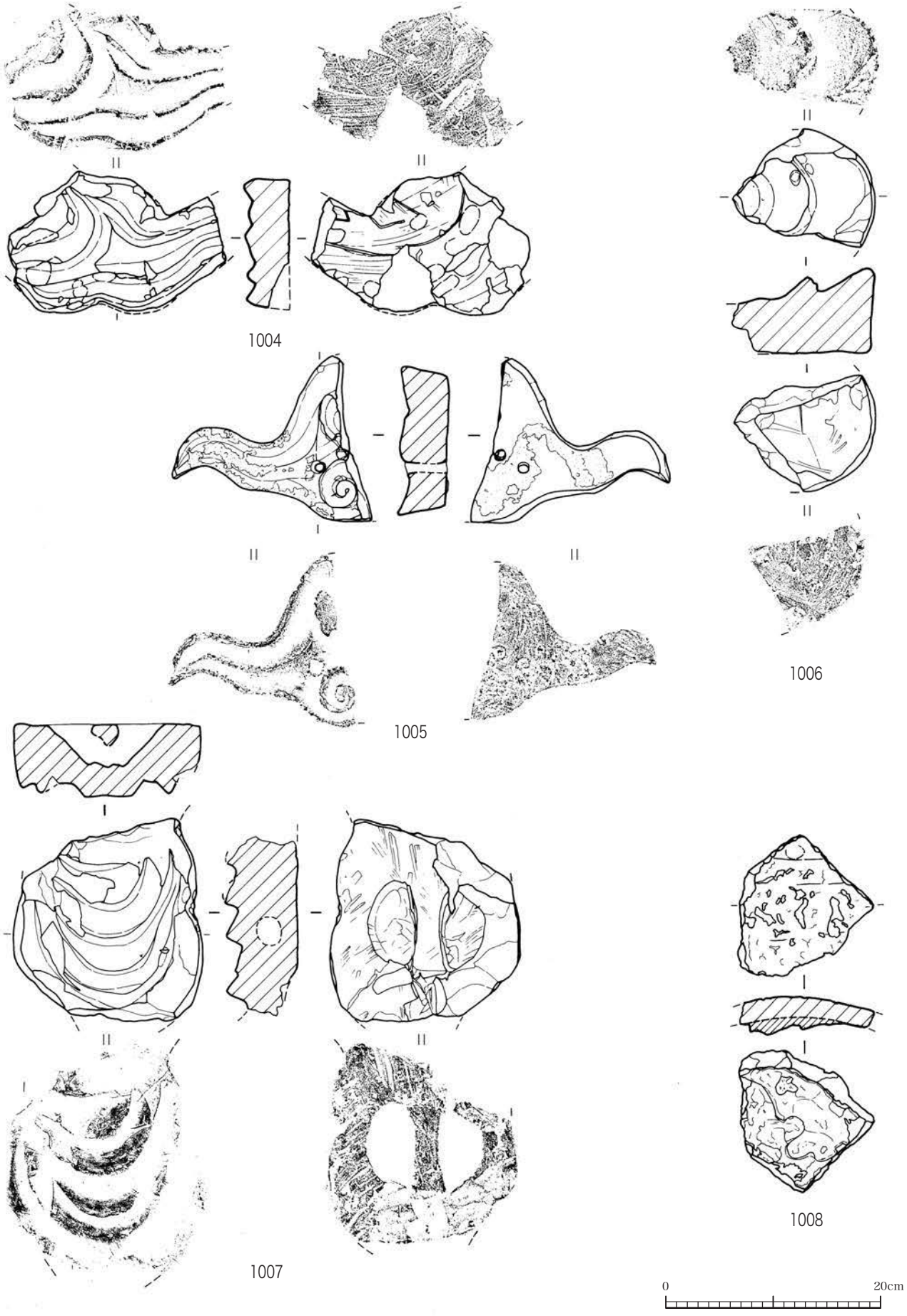
999

1001

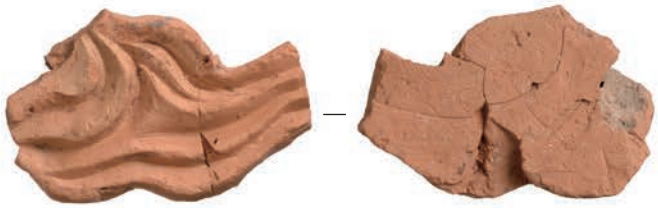
1003

1002

図版135　屋瓦23　明朝系役瓦（1）



第155図　屋瓦24　明朝系役瓦（2）



1004

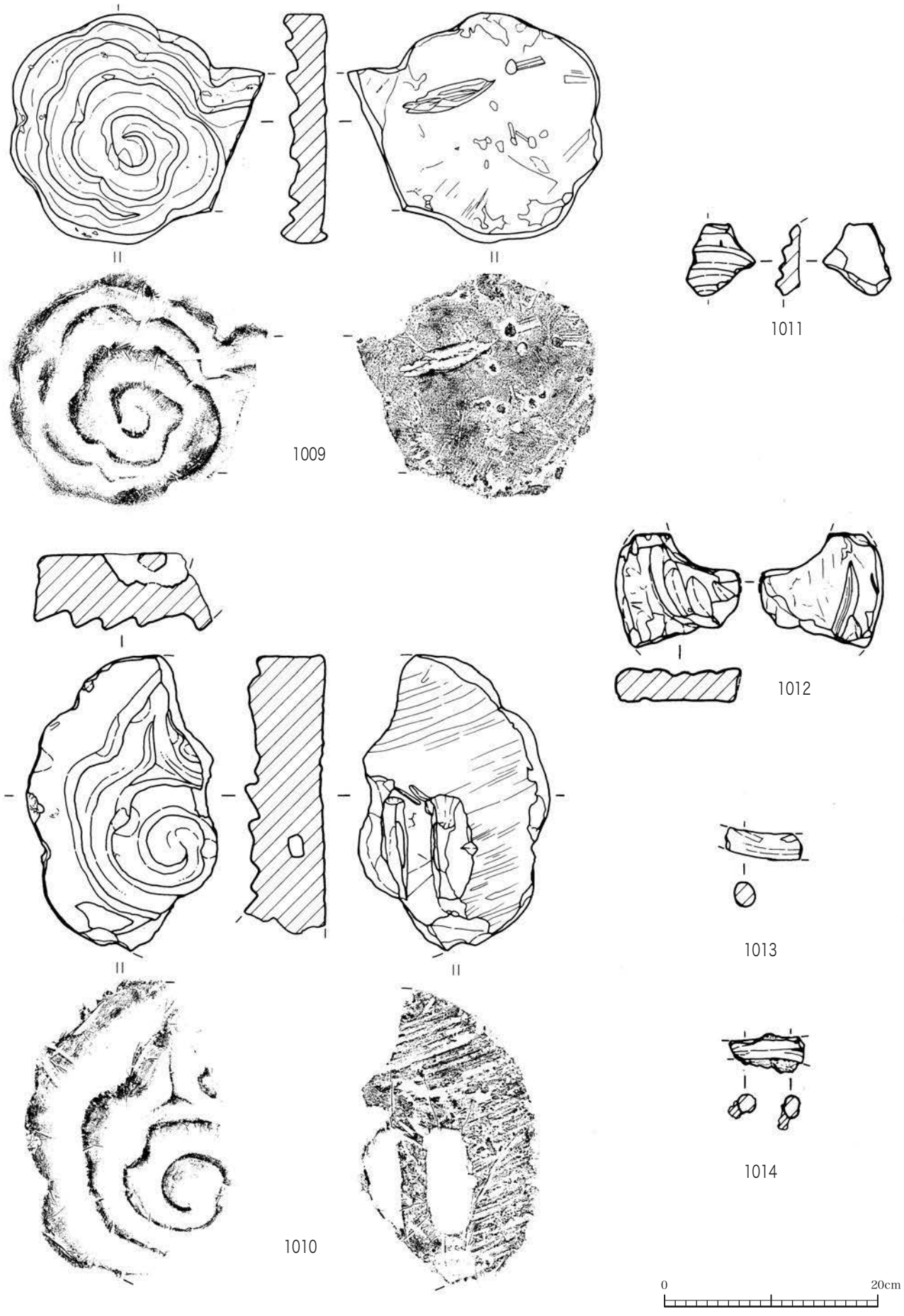
1006

1005

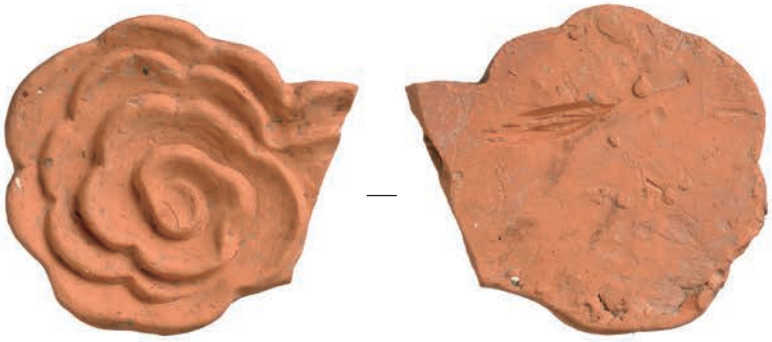
1008

1007

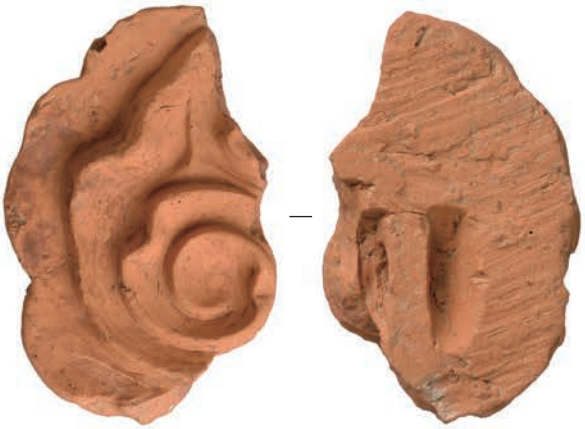
図版136　屋瓦24　明朝系役瓦（2）



第156図　屋瓦25　明朝系役瓦（3）

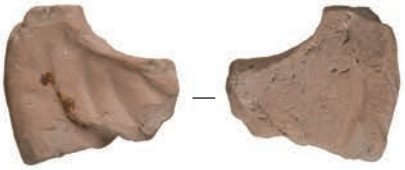


1009



1010

1011



1012

1013

1014

図版137　屋瓦25　明朝系役瓦（3）

第24節　塼（第91～94表、第157～163図、図版138～143）

上原　静（沖縄国際大学）

はじめに

塼は総数480点出土した。その機能と平面形態からⅠ～Ⅳの４タイプに大別される。Ⅰは平面形が長四角形で、複数組み合わせて使用するもので、噛み合わせの凹凸面の違いからA～Cに分けられる。Ⅱは下駄状の突起を成形するもので、一つ独立して説明する。Ⅲは平面的に敷いて機能するもので、平面形が正方形と三角形の２タイプが存在する。Ⅳは平面形が長方形で漆喰などの接合材を併用して積み上げて使用するタイプである。以上これらはさらに色調により違いが認められた。以下に分類別に概観する。

A．分類

Ⅰ．端部噛み合わせタイプ

平面形が一般的に長方形で、長軸の側面か短軸の両側面に段を成形し、それぞれをかみ合わせて使用される。当該製品はその他の製品に比較し概して厚く、還元焼成の灰色製品に偏在する。その用途として地下に埋設される暗渠などとして使用するものがみられる。

A．長方形：蓋としての機能が窺われる。

B．長方形：底に敷かれる用途が推測される。

C．長方形：暗渠の側面を構成するものである。

D．特殊？

Ⅱ．下駄状タイプ

平面形が長方形をなし、厚手はみられない。最大の特徴は下駄状に歯がつくもので、その端部にかかりを造るものとそうでないものがある。このタイプには還元炎焼成のみで、酸化炎焼成のものはみられない。色調は灰色を呈する。下駄状のかかりを成形している点から、傾斜部分や蓋の様な用途が推測される。

Ⅲ．平面敷き用タイプ

平面形が正方形と三角形を呈するのが基本形態である。還元炎焼成の灰色系製品と、酸化炎焼成の赤色系製品の二群に分け、その厚み、その他成形で細分した。

①灰色製品

１．正方形

Ａａ類：一辺の長さが約24㎝のタイプで、4.5～6㎝台の最も厚いタイプからなる。

Ａｂ類：３～4.4㎝の薄手のタイプである。側面に×状の線書きを残すものがある。

２．三角形

Ｂａ類：4.5～6㎝台の厚みのあるタイプで、成形には基本的に四角塼を対角線から切り取って二枚にしたもので、切り取った側面に横方向の線状痕がみられる。表面に「大」のスタンプを残すものがある。スタンプは明瞭でいずれも目立つ表面になされている。スタンプは複数ある。基本的には灰色であるが、酸化のためか褐色をおびるものも含まれる。側面に２本の平行する線描がみられる。

Ｂｂ類：3～4.4㎝台の薄手をこのタイプとした。対角線の切り取り側面に手書きによる「×」状の線書きをみとめる。

Ｄｂ類：打割する等して二次的に使用したと思われる製品。

②赤色製品

1．正方形

Ａａ類：4.5～6㎝台の厚みのあるタイプである。この類は灰色製品の酸化製品の可能性もある。量的には極めて少ないため、今後の資料検討により、当類を削除することもある。

Ａｂ類：3～4.4㎝台の極めて一般的なもので、出土量の多いものである。薄手である。

2．三角形

Ｂａ類：4.5～6㎝台の厚みのあるタイプ。

Ｂｂ類：3～4.4㎝台の薄手。側面に右上から左下の斜め方向に2本の線書きをするものがみられる。

Ⅳ．積み重ね用タイプ

専ら重ねて使用するために造形された塼である。上記の塼と形状、大きさに違いがあり、まず漆喰が表裏面に大量に付着し、一部の資料に２枚重なった状態で出土をみたものもある。明らかに積み上げて壁状にしたとみられる製品である。平面形が長方形の板状で、色調により赤色と灰色があり、また、その大きさ、厚みなどから数タイプに分けられる。

①灰色製品

還元焼成焔の灰色製品で、大きくＡ～Ｃ の 3 タイプになる。そしてそれぞれに厚みによる違いが認められる。

Ａ類：横12㎝、縦23.8㎝、厚み3.4㎝のもので、現時点では小形である。

Ｂ類：横16～18㎝、縦29～34.2㎝、厚み3.3～4.1㎝。この種類は長軸の一側面に削りがあり、湾曲した側面を特徴とする一群がある。それで、Ｂａ１・Ｂｂ１にわけられる。

Ｃ類：横22～22.5㎝、縦32.5～34.5㎝、厚み4.0～4.4㎝の厚いものと、大きさはほぼ類似する横22～22.5㎝、縦32～34㎝、厚み3.5～3.8㎝の薄いものでそれぞれをCa1・Cb1に細分してみた。

②赤色製品

酸化焼成焔の赤色である。Ａ、Ｂの2タイプに分類される。このタイプにも灰色瓦同様に厚みや大きさによりサブタイプに細分される。

Ａ類：横11㎝から11.5㎝。縦31㎝。厚み4.0～4.5㎝である。灰色側よりやや縦長の形をなしている。

Ｂ類：明らかに厚みに違いがあることから二分される。ａ類は横15.5～17.0㎝、厚み3.5～3.8㎝の薄手と、ｂ類の横17㎝、縦33～34㎝、厚み4.2～4.4㎝の厚いものがある。このグループには側面の角を取り除いて丸くしたものがある。

Ｃ類：大きさは灰色群にはみられないものである。この種類にも厚みに2タイプに分けられる。ａ類は横18～18.5㎝、厚み3.0～3.6㎝と薄いものと、ｂ類の4.0～4.5㎝の厚いものがある。なお、前者のａ類には僅かであるが、厚み2.8㎝と極薄の種類もみられた。

Ｄ類：このタイプは保存状態が悪く完形は得られてない。横が19.8㎝、厚みは3.2㎝、もう一つは横が20.5㎝、厚みが4.3㎝となるもので、この種類にも2種類みられることが分かる。

B．整形状態と保存状況

一様に漆喰の付着があり、積み重ねて使用したことが推測される。なお、表面にマンガンが塗布されるものもある。

C．刻印及びヘラ描き

塼には、文字や記号を彫り込んだ刻印と手描きによる記号が残されている。まず、刻印は第91表に示した3種類で、表面と側面に施文されている。灰色瓦に偏在する特徴が認められる。ヘラ描きは線の数や方向、交わり状況などから12種類を確認できる。その多くが側面に単純な線で印したものである。灰色に17種、赤色で8種に分けられ、これも灰色瓦に多くみられる傾向がある。

第157図　塼の刻印位置（側面模式図）

第91表　塼の刻印・ヘラ描の種類と説明

形態＼分類説明	記号		説明	刻印位置 表	側	裏	形態＼分類説明	記号		説明	刻印位置 表	側	裏
刻印	記号	⊗	正円とその内に斜格子模様を描く		○		ヘラ描	3本線	///	斜方向の三本線		○	
		○	小さな小円、複数押印する		○				⊬	アルファベットのH字状		○	
		⧖	砂時計形の押印、大小有り	○	○				⫫	長い横位の二本線に、斜めの短い一本線が加わる		○	
ヘラ描	1本線	—	長い横位の一本線を描く		○				⊬	横位に方位記号線の様に描く		○	
	2本線	=	長い二本線を描く		○				⊬	横位に長手のアルファベットのA字状		○	
		×	二本線をバツ状に交差させる		○	○		その他	✳	記号ではない。平面にチェス盤状	○		
		//	斜方向の二本線		○				⫴	横位に三本線。斜め方向に細かい六本の線		○	
		⫫	長い横位の一本線に、斜めの短い一本線が加わる		○								

第92表　塼の色調と刻印・ヘラ描

色調＼分類説明	位置	刻印 記号 ⊗	○	⧖	ヘラ描 1本線 —	2本線 =	×	//	⫫	3本線 ///	⊬	⫫	⊬	⊬	その他 ✳	⫴	計
灰色（褐色）	表面			1													1
	側面	1	1	1	2	6	2		1	1	1	1	1	1		1	20
	裏面						1										1
	計	1	1	2	2	6	3	0	1	1	1	1	1	1	0	1	22
赤色	表面														1		1
	側面				1			1									2
	裏面																0
	計	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3
合計		1	1	2	3	6	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	25

小　結

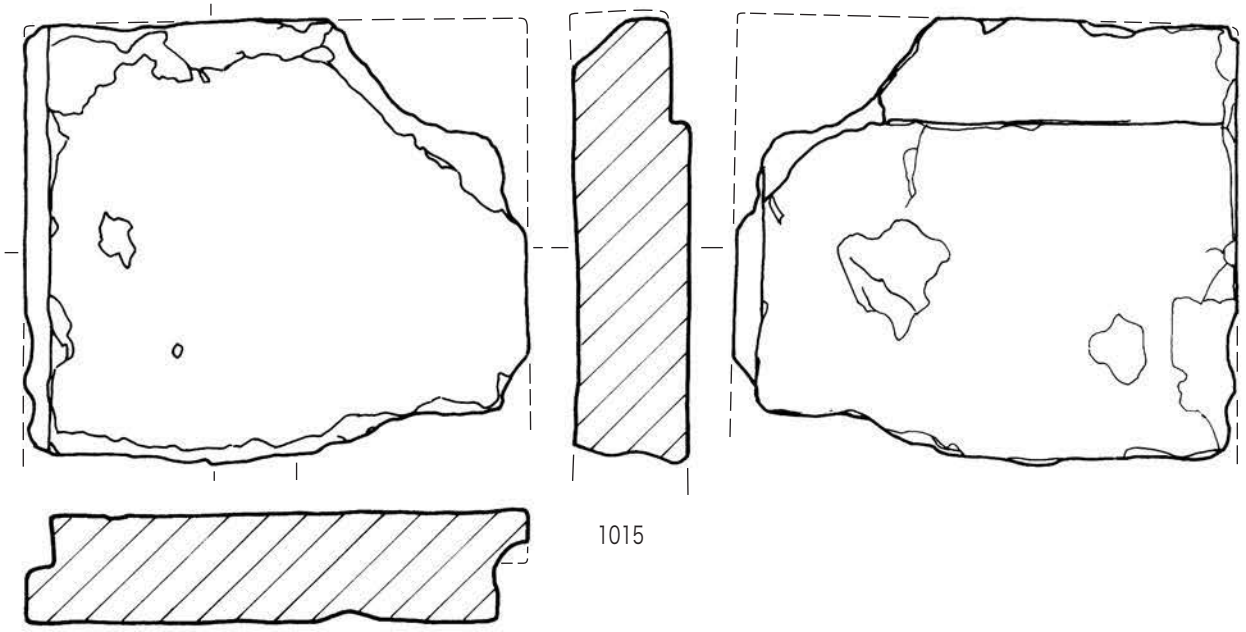
出土した塼は、形態的特徴から４種類に大別したが、その用途や使用の在り方から、組み合わせて立体的に使用するもの、平面的に敷き並べて使用するもの、さらに、平面を積み重ねて使用したものに分けることができ、使用の多様性をみることができた。また、焼成、製作技術の違いが認められ、主として灰色系と赤色系に区別することができた。17世紀前半以降の製作年代を反映していることがみられる。また、出土資料はいわゆる消費遺跡に属するものであるが、生産と関わる刻印やヘラ記号も確認され、生産遺跡における工人の動きや、流通システムを検討する貴重なデータを追加することができた。刻印やヘラ記号は基本的には、a.帰属、b.封印、c.認証・検定、d.権威の象徴としての印などの機能が考えられる。今後、隣接する首里城正殿建物など主要建物（消費建物）の資料追加を待って、さらに周辺地区の出土資料との関連を検討することで、よりその性格がみえてくるものと考えられる。

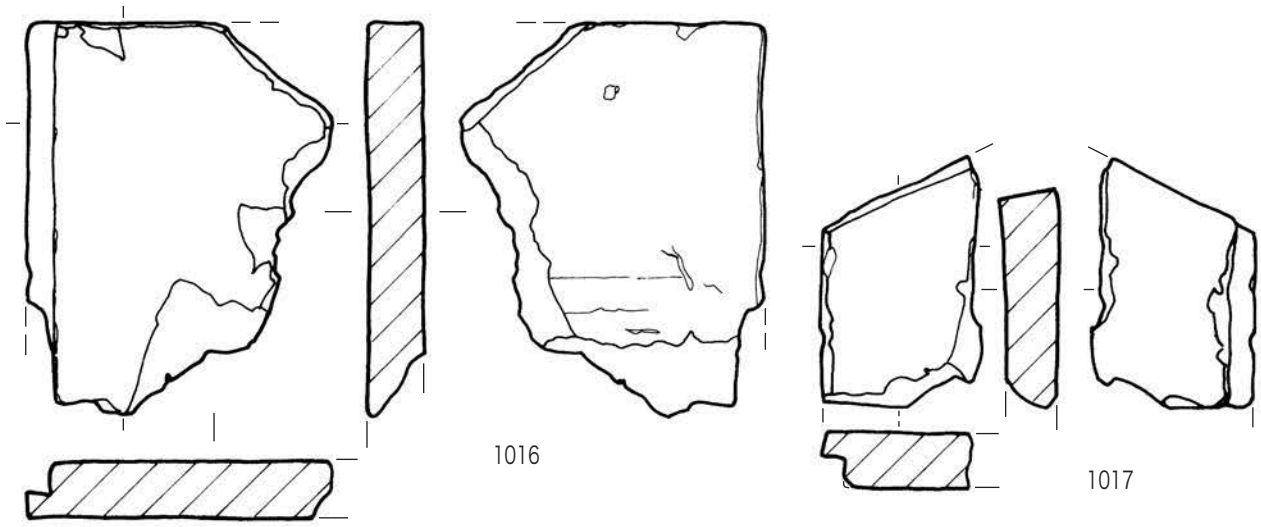
第93表　塼観察一覧１

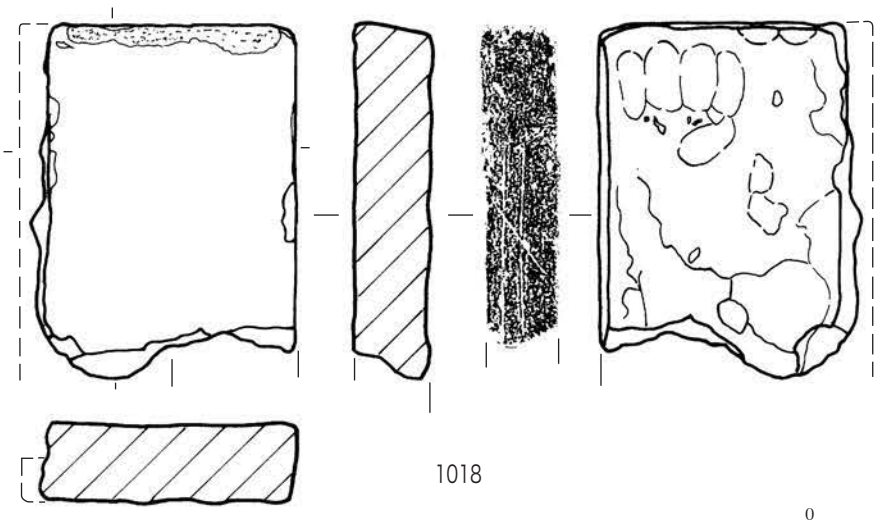
図 図版 番号	種類分類		残存 部位	色 調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第158図 図版138 1015	Ⅰ類 端部噛み合わせ式	A	角２ 有り	灰 色	表面はややナデが良好で滑面になり、３㎜ほど凹面する。裏面はやや粗面を呈しほぼ平坦面になる。長軸の半分を欠落しているが、側面と端部に各々大きさの異なる組み合わせの段をみることができる。横26.5㎝。器厚み5.8㎝。	11	J－10 20～30
第158図 図版138 1016		C	角１ 有り	赤 色	表面の調整は良好で光沢があり、僅かに凹面する。裏面は型枠の様な面跡が筋として残り、やや粗面になり、特段の整形は行われていない。細工として端部側に組み合わせの段が施される。器厚み3.0㎝。湧田系塼。	11	撹乱
第158図 図版138 1017		C	角１ 有り	灰 色	隅の角度が四角ではなく、約120度の鈍角を呈する破片で、組み合わせの段がみられる資料。風化が進んだ表面はやや凹面を呈し、裏面は製作時の掻き傷が残り、苔状の付着物がみられる。厚み2.7～3.1㎝。湧田系塼。	11	撹乱
第158図 図版138 1018		D	角２ 有り	灰 色	平面形が長方形を呈する。抉りの施された一側面側は欠落、逆の側面は平面を造形し対象的でない。当該面にはヘラ描きによる刻線がある。側面は全体に裏面側に向かい内傾する。表面は凹面する撫で面で、裏面は凹凸のある粗面になる。長軸の一端の表側に目詰めのような漆喰が付着する。器の厚み約4.0㎝。	11	撹乱
第159図 図版139 1019	Ⅱ類 下駄状式	－	角２ 有り	灰 色	平面形長方形の資料。横幅24.1㎝、厚み3.2㎝。長軸に対して垂直方向に下駄状の突起が付けられている。この高さを含めると7.2㎝を測る。表面は光沢がある撫でがなされる。裏面は製作時の削り面が残る。また、裏面における長軸の一端は斜めに薄く削りがなされている。下駄部分の側面にもみられ、いずれもはめ込みの利便を考えての造作とみられる。	11	撹乱
第159図 図版139 1020	Ⅲ類 平敷式	Aa	角３ 有り	灰 色	平面四角形の大形破片。僅かに一角のみを欠落する。表面は撫で良好。同面に細かな魚骨や炭火物の混じりあったものが付着する。裏面は製作時の面のままで特段の整形跡はみられない。縦横ともに25.5㎝。器厚は約5.9㎝。	11	J－11 20～30
第160図 図版140 1021		Ab	角１ 有り	赤 色	平面が四角形の側面を残す破片。表面は風化が進み混入物が露出する。裏面は製作の型枠の板痕が残る粗面になる。色調はやや生焼け褐色。側面に破損しているが、弧状のヘラ書きの刻線が残る。側面の上半部には水垢が水平方向に汚れとしてみられる。厚み4.2㎝。	19	B－1 石積み6 西側上層
第160図 図版140 1022		Ab	角１ 有り	赤 色	平面形が四角形の４分の1の破片。上面は平滑に撫で仕上げされ、その面にチェス盤の様な手書きによる線書きがなされている。裏面は製作時の粗面のままになる。焼成良好。器厚は約3.3㎝。湧田系塼。	11	撹乱
第160図 図版140 1023		Aa	角３ 有り	灰 色	一部角を欠落するが、平面四角形の大形資料。表面は平滑に仕上げられるが、やや凹面する。製作時にとくに整形した痕跡はみられない。焼成良好。器厚は4.6㎝。	11	撹乱
第161図 図版141 1024		Ab	角１ 有り	灰 色	表面は滑面になる。破片であるが、裏面には粘土製品を重ね置いた様に平行する凸線が認められる。厚み4.2㎝。	19	撹乱
第161図 図版141 1025		Ba	角１ 有り	赤 色	平面形が三角形の製品で、45度の隅部分がいずれも破損している。表面は撫で良好。裏面は粗面。斜めの面は内側に傾斜する。焼成良好。器厚み約4.5㎝。	11	J－10 20～30
第161図 図版141 1026		Bb	角２ 有り	灰 色	平面形が三角形の製品で、45度の1隅が破損している。焼成良好。上面は風化と使用のためであろうか器面の剥離が進んでいる。裏面は粗面のまま。一辺が約24.6㎝。器厚み約4.4㎝。	19	B－1 石積み6 西側上層
第162図 図版142 1027		Db	角２ 有り	灰 色	四角形の塼を２分割するように打割した二次製品である。その使用は重ねるためであろう表面に漆喰の付着が多数認められる。一辺の長軸約25㎝、幅約13.6㎝、厚み4.3㎝。	11	撹乱

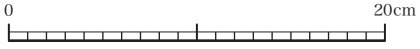
第94表　塼観察一覧２

図 図版 番号	種類分類		残存 部位	色 調	製作技術、形態的特徴、文様、法量など	調査 年度 (平成)	グリッド 層
第162図 図版142 1028	Ⅳ類積み重ね式	Ba1	角２ 有り	灰色	長軸の一端が破損した製品であるが、平面形が長方形を呈する。特徴的な点は長軸の一つの側面が角取りが行われている。幅約17.0㎝、厚み約3.9㎝。表側面のみに漆喰の付着あり。	11	撹乱
第162図 図版142 1029		Cb1	角２ 有り	灰色	上記資料よりさらに大きい長方形を呈する資料。しかし、長軸の一端が破損している。長さは幅約22.0㎝、厚み約4.0㎝。表面に厚み1.5㎝を測る漆喰痕をとどめる。側面などに面取は認められない。	11	撹乱
第163図 図版143 1030	不明片		破片	灰色	幅約14㎝の製品、両端が欠落しているため本来の長さは不明。厚み最大4.4㎝。表面に雲形の粘土紐で描く文様があり、これまで首里城３例目である。注目されるのはこの文様面に大量の漆喰が載っている点から、破損後に再利用されたものと考えられる。	11	J－8 茶褐色灰混層
第163図 図版143 1031	Ⅲ類平敷式	ABb	破片	褐色系 灰色	側面に鞠状の平面形が丸く、内部が格子状をなすスタンプ文である。鮮明である。厚み約3.4㎝。湧田系塼。	19	B－5 シーリ内木炭層(畦)
第163図 図版143 1032		Ab	角２ 有り	褐色系 灰色	側面に竹状のｽﾀﾝﾌﾟで２点施文したもの。円文の直径約1㎝と極めて小さい。厚み約3.5㎝。	11	撹乱
第163図 図版143 1033		Ab	角３ 有り	灰色	25㎝×25㎝の方形塼。目立つ平面の中央にｽﾀﾝﾌﾟが押されている。ただし、印は小さい。砂時計形をしている。当該スタンプの長軸長さ1.4㎝。	11	J－10 20～30
第163図 図版143 1034		ABb	角１ 有り	灰色	側面に砂時計形の線書きをしたものである。砂時計形の長軸長さ約2.3㎝。塼の厚み約3.3㎝。	11	撹乱
第163図 図版143 1035		ABb	角１ 有り	灰色	側面に長い一本の線書きをした印である。厚み約3.3㎝。	19	A－1 石積み6 西側下層
第163図 図版143 1036		Ab	角１ 有り	褐色系 灰色	側面に横位方向に長い沈線を印すもの。厚み約3.7㎝。湧田系塼。	11	I－8 10～20茶褐色灰混層
第163図 図版143 1037		Ab	角１ 有り	灰色	裏面のほぼ中央にヘラの様な道具による引っ掻く線で、大きく×状に印す。厚み4.2㎝。	11	撹乱
第163図 図版143 1038		Ab	角１ 有り	灰色	側面にさほど大きくない×状の線書きを残す。厚み約3.6㎝。	11	撹乱
第163図 図版143 1039		ABb	破片	灰色	側面に×状の線書きをした印。厚み約4.3㎝。	19	撹乱
第163図 図版143 1040		Aa	角１ 有り	灰色	側面に縦位の平行する三本線を印す。厚み4.8㎝。	11	撹乱
第163図 図版143 1041		Ab	角１ 有り	赤色	側面に平行した斜めの二本線で印す。厚み約3.3㎝。	11	撹乱
第163図 図版143 1042		ABb	破片	灰色	側面に横位の一本線に斜めから一本交差させた印である。厚み約3.6㎝。	19	B－5 シーリ内木炭層(畦)
第163図 図版143 1043		Aa	角１ 有り	灰色	側面に縦位の平行する二本線に垂直方向から一本交差する線書きである。Hの線にみられる。厚み4.6㎝。	19	B－1 石積み6 西側上層
第163図 図版143 1044		ABb	破片	灰色	側面に横位の長い線に斜めから交差する線、さらにその両方にかかる垂直方向の短い線の計３本の線で構成される。Aの字を横にした様にみられる。厚み約3.6㎝。	19	B－5 シーリ内木炭層(畦)
第163図 図版143 1045		ABb	角１ 有り	灰色	側面に極めて細い線で、横位に３本、斜め方向から６本交差させた線描。厚み約3.3㎝。	19	撹乱



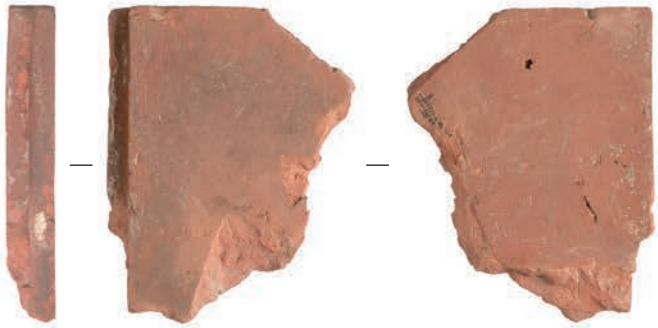






第158図　塼1

1015

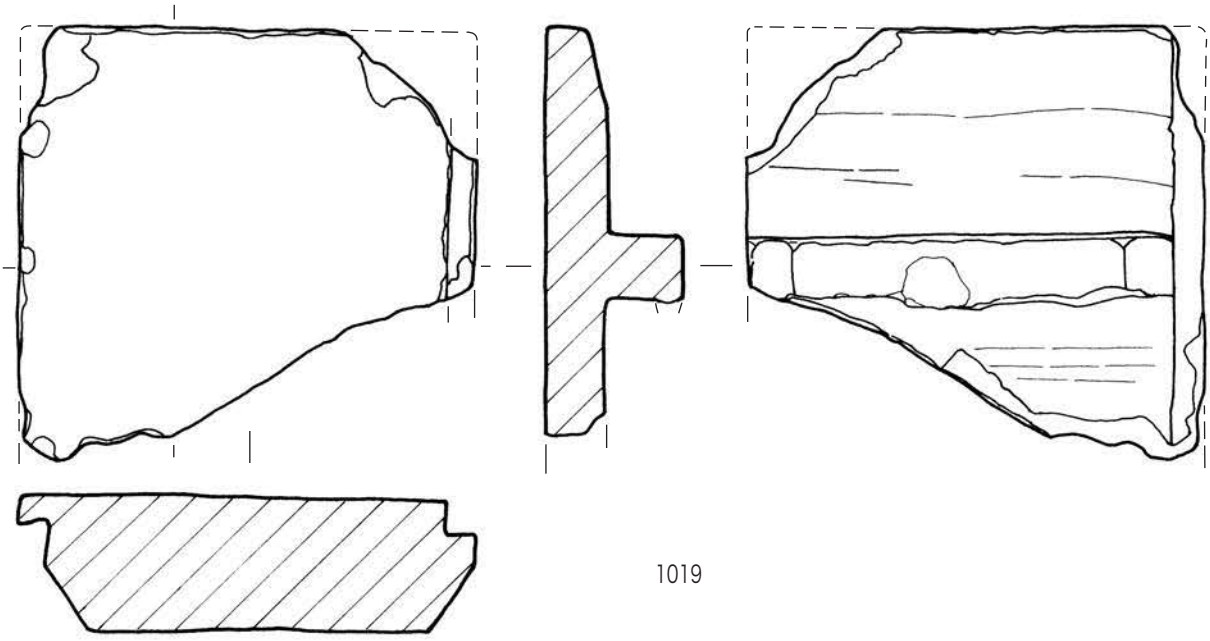


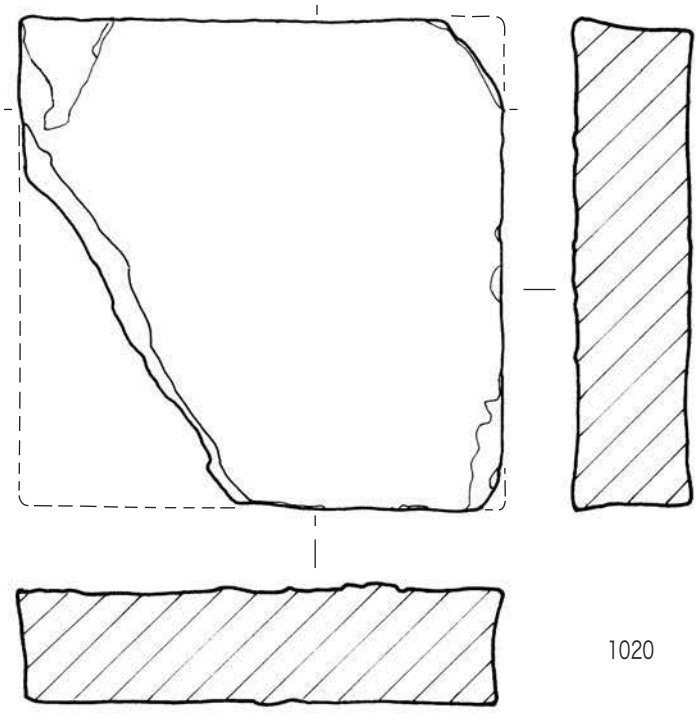
1016

1017

1018

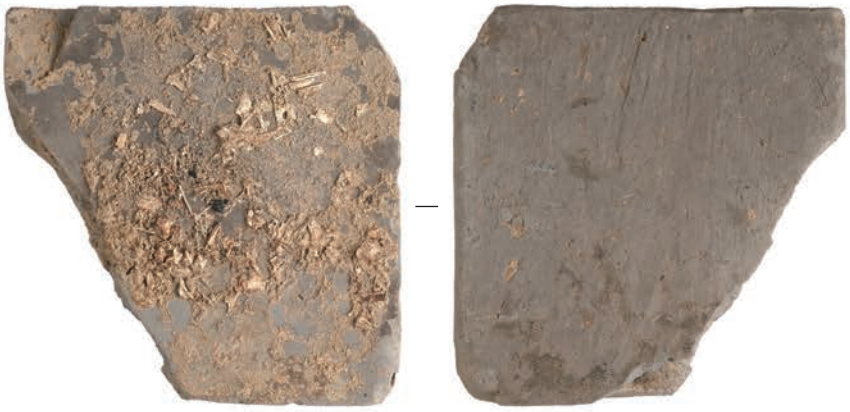
図版138　塼1





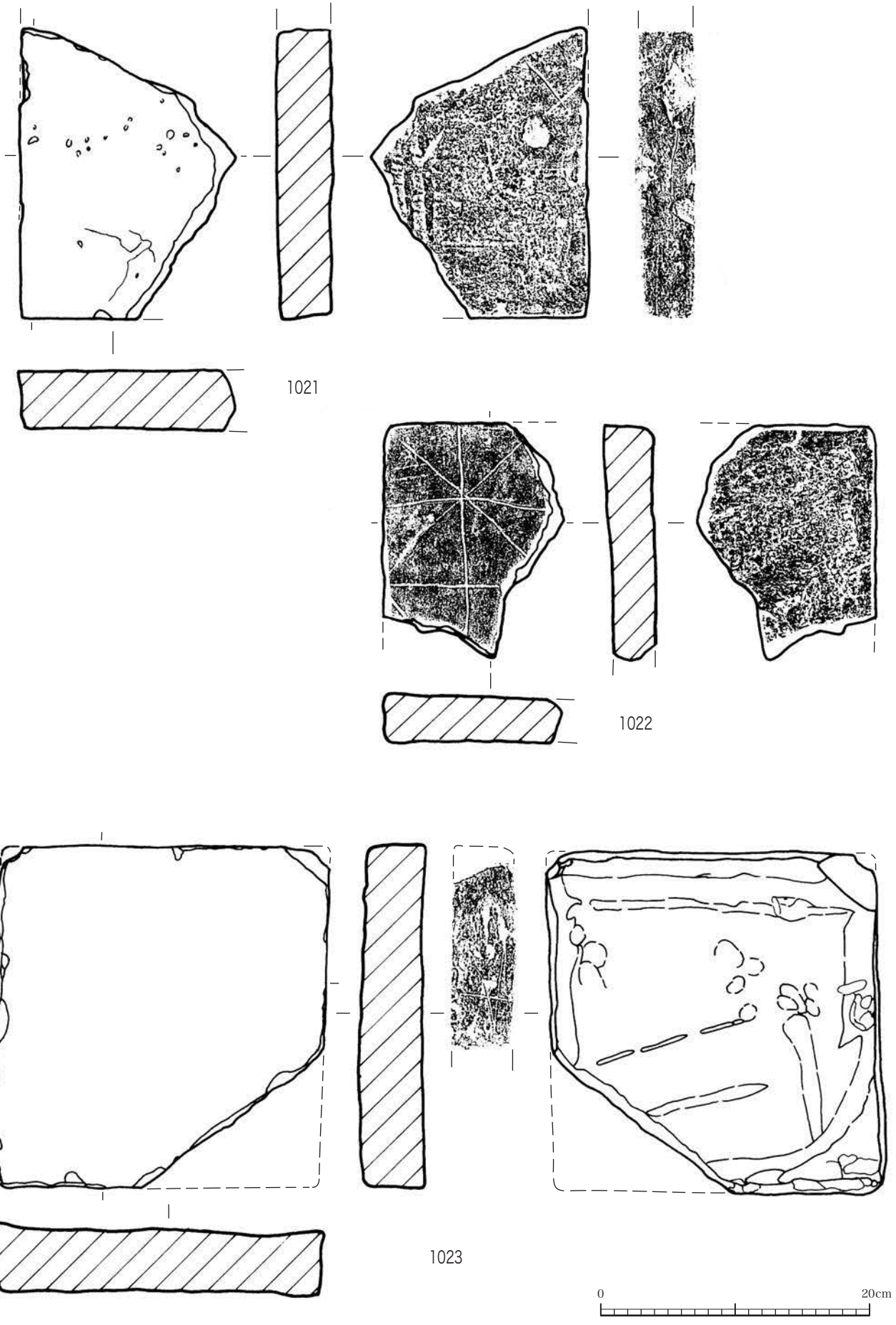
第159図　塼2

1019

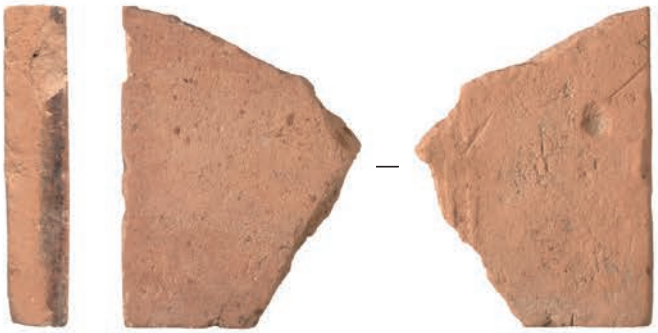


1020

図版139　塼2



第160図　塼３

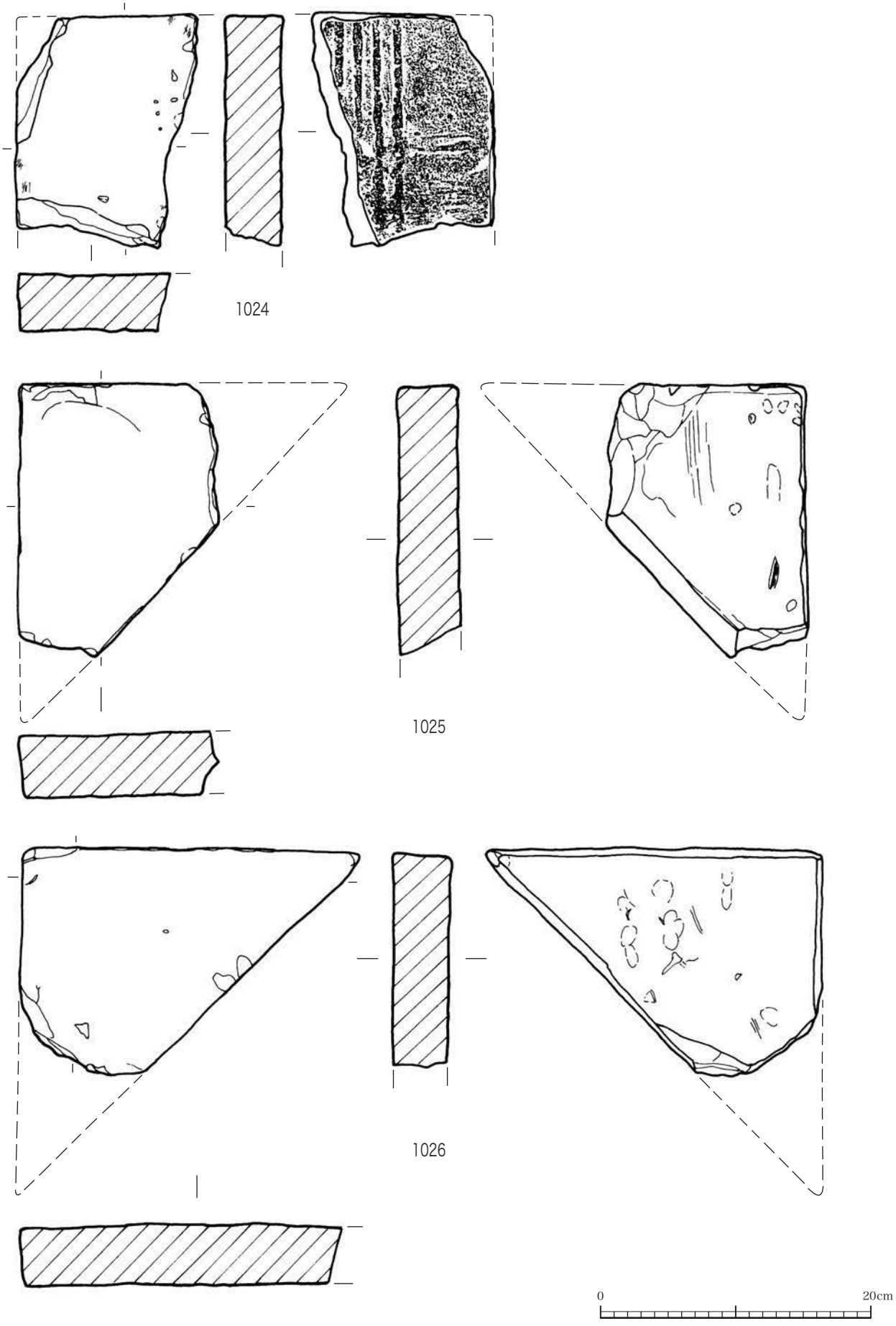


1021

1022

1023

図版140　塼３



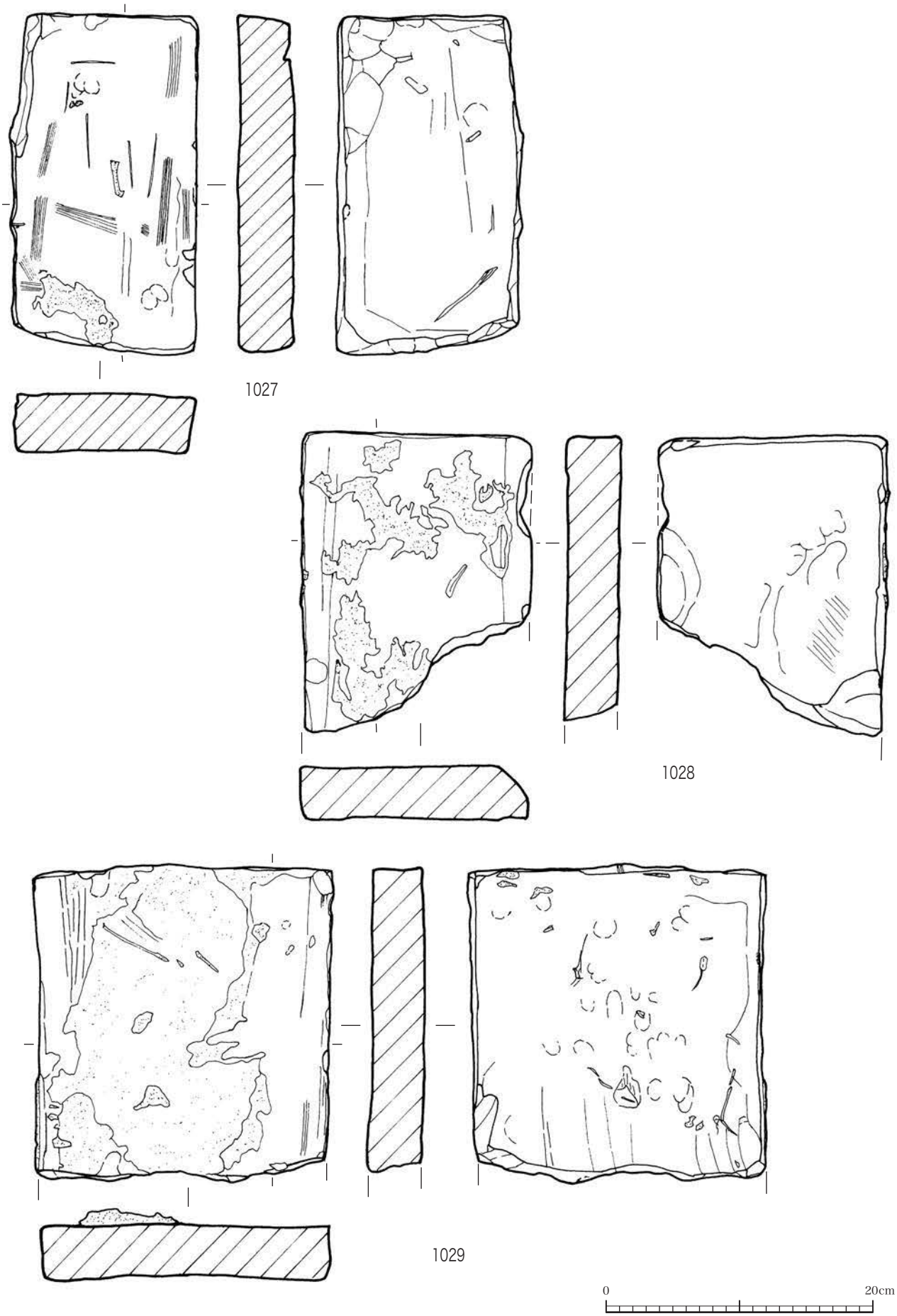
第161図　塼４

1024

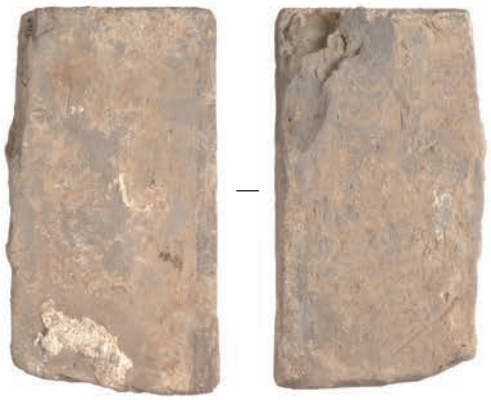
1025

1026

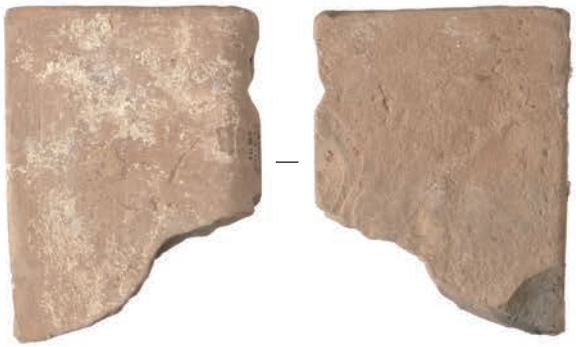
図版141　塼４



第162図　塼５



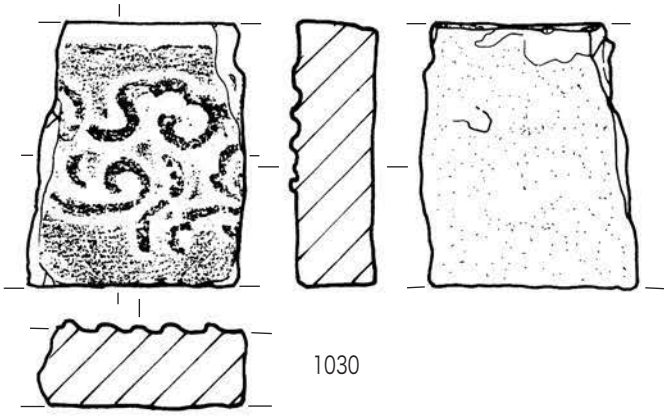
1027



1028

1029

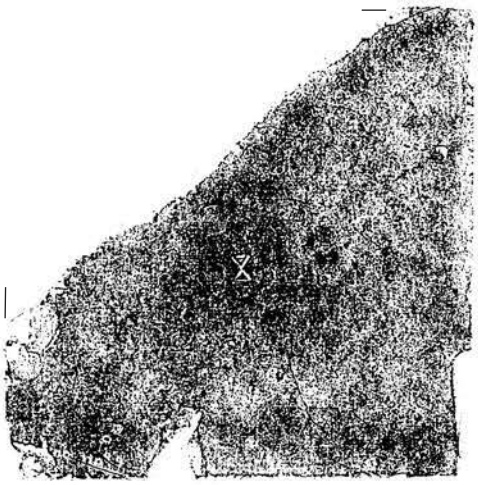
図版142　塼５



1030

1031

1034

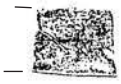


1033

1032

1035

1038

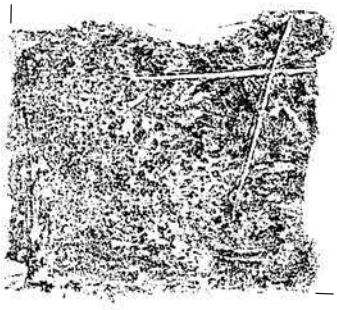


1042

1036

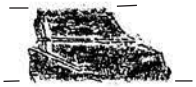
1039

1043



1037

1040



1044

1041

1045

第163図　塼６

1030

1031

1034

1033

1032

1035

1038

1042

1036

1039

1043

1037

1040

1044

1041

1045

図版143　塼6

第25節　貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

ここでは、平成11（1999）年度と平成19（2007）年度調査のピックアップ法で得られた貝類遺体について、大半は撹乱層の出土であるが、今回は一括して報告する。なお、シーリ遺構内から出土した貝類を含む自然遺物は、第27節シーリ遺構内の自然遺物としてまとめて報告する。

1．出土の詳細

第95表及び別添CD-ROMに、平成19（2007）年度調査のピックアップ法で得られた遺体の詳細及び、平成11（1999）年度調査分の出土状況詳細を示した。

両年度分の調査あわせて、全体として少なくとも海産腹足類22科73種、海産二枚貝類18科45種、陸産腹足類5科7種が確認された。その中には、平成11（1999）年度調査のキスジニクタケ・オキナワスレ等の僅かではあるが復帰後と考えられる工事用土砂に含まれる海底堆積物由来の種や、太平洋戦争中の移入カタツムリであるアフリカマイマイが含まれ、いわゆる“混入”も認められたが、その割合はきわめて低いものであった。なお、タニシ類を含む淡水産腹足類は確認されなかった。

2．優占種とその生息場所

両年度の優占種を第164図に示した。平成19（2007）年度ではカンギクが約30％と最も多く、アラスジケマン・イワカニモリが10％程度と続いていた。平成11（1999）年度では、アラスジケマンが約20％と最も多く、カンギク・ヤコウガイ・チョウセンサザエが10％程度となっていた。

これらを生息場所類型で見てみると（第165図）、平成19（2007）年度では約半数がカンギクやイワカニモリの生息する内湾−転石域のもので占められており、アラスジケマンの河口干潟−マングローブ域が約15％と続き他のものはおよそ5％以下であった。平成11（1999）年度では、内湾−転石域が最も多いものの、河口干潟−マングローブ域も20％、他のサンゴ礁域も10％程度であった。

両者の相違は、取上げ方法に起因する部分も想定されるが、詳細な地点ごとの違いによるものかもしれない。ただ、全体としてみると、内湾のカンギクと河口干潟のアラスジケマンが多いという沖縄本島全体のグスク時代の貝類遺体組成を反映していると言えよう。グスク時代になるとカニモリガイ類等の塔型の小形巻貝類が増加する傾向が知られ（例えば黒住・金城1988）、首里城跡においても、イワカニモリやリュウキュウウミニナが優占種となっており、この傾向が認められる。

3．首里城跡としての特徴

優占種とその生息場所では、他のグスク出土貝類遺体と類似した傾向を有していたことを指摘した。首里城跡内の他地点やその他のグスクとの詳細な比較検討は今後の課題であるが、いくつかの注目される点について示しておきたい。

ひとつ目は、カンギクやアラスジケマンが優占するものの、その割合は低く、平成11（1999）年度調査で顕著であったが、5〜10％程度の割合を占める優占種が多く、その生息場所も比較的多岐にわたっていた。

第95表　ピックアップ法で得られた貝類遺体リストと最少個体数

腹足類	平成19年調査				平成11年調査			
	完形	殻頂	体層/破片	MNI	完形	殻頂	体層/破片	MNI
ニシキウズ	1	1	8	9	1	4	6	7
ムラサキウズ	0	1	1	1			3	3
ギンタカハマ	0	0	3	3		2	8	8
サラサバテイ	0	10	67	67	1	22	66	67
オキナワイシダタミ	2	1	0	3	1		1	2
サラサダマ	2	0	0	2				
ヤコウガイ	1	18	344		5	55	630	
ヤコウガイ（フタ）	79	40	84	119	129	116	197	245
チョウセンサザエ	44	31	50	75	124	136	112	260
チョウセンサザエ（フタ）	49	13	1		77	8	1	85
コシダカサザエ		3		3				
カンギク	404	136	53	593	162	70	30	262
カンギク(フタ)	14	1	2		2			
コシダカアマガイ	2			2				
キバアマガイ					1			1
マルアマオブネ	5	1	1	8	3			3
アマオブネガイ	2	2		4	3			3
ニシキアマオブネ	1			1				
カノコガイ	1			1				
オニノツノガイ		1	3	4	2	7	1	10
コゲツノブエ	1			1				
ヒメクワノミカニモリ		1		1				
イワ（ウミニナ）カニモリ	92	135	32	259	10	30	10	50
クワノミカニモリ	13	40	3	56	2	19	2	23
ナガタケノコカニモリ					1	2		3
ゴマフニナ	3	2		5				
リュウキュウウミニナ	12	69	15	96	7	5	2	14
イボウミニナ	2	19	2	23	2	8	1	11
イトカケヘナタリ			9	9				
カワアイ	1	15	27	43	2	2	5	9
マドモチウミニナ						1	1	2
センニンガイ							4	4
オハグロガイ	15	7	5	27	101	14	23	138
ネジマガキ					1	5		6
マガキガイ	3	56	14	73	58	166	12	236
スイショウガイ		1		1	1			1
クモガイ			3	3		4	5	4
スイジガイ							5	1
アツキクスズメ	6			6		1		1
ヤクシマダカラ		1	2	3		1	1	2
ヒメホシダカラ					2			1
クチムラサキダカラ					1		1	2
ホシキヌタ	1			1	2	1	1	4
ナツメモドキ	3	1		4				
コモンダカラ					5			5
ハナビラダカラ	6	1	5	12	5	1		6
キイロダカラ			1	1	2	1		3
ハナマルユキ	2	2	9	13	5	8	5	18
チドリダカラ	1			1	1			1
トミガイ		1		1				
ヘソアキトミガイ		1		1				
ホウシュノタマ	1			1				
オキニシ			2	2			1	1
ウズラガイ							1	1
ホラガイ							3	1
ウネレイシダマシ		1		1				
レイシダマシモドキ			1	1				
ツノレイシ	1			1	1			1
シラクモガイ					3			3
コオニコブシ	4		4	8	4		1	5
フトコロガイ	1			1				
カニノテムシロ	2			1				
ヒメヨウバイ	1			1				
ノシガイ			1	1				
シマベッコウバイ	16	2	4	22	1	1	3	5
イトマキボラ		1	3	3	1		3	4
ナガイトマキボラ						1		1
リュウキュウツノマタ					1			1
チトセボラ							1	1
ジュドウマクラ					1			1

腹足類	平成19年調査				平成11年調査			
	完形	殻頂	体層/破片	MNI	完形	殻頂	体層/破片	MNI
オオシマヤタテ	1		1	2				
ナンヨウクロミナシ			1	1			1	1
クロザメモドキ		1		1		1	2	3
マダライモ	2	2	2	4		3	3	6
サヤガタイモ	1	1		2	1	1		2
サラサモドキ					1	1		2
ヤナギシボリ		4	1	4		2		2
ハイイロミナシ	2		2	4			1	1
イボカバイモ			1	1		1		1
イボシマイモ	7	1	3	10	1	1	1	3
アジロイモ						4		4
小形イモ		1		2				
中形イモ			1	1				1
ムシロタケ					1			1
キスジクニタケ						2		2
ツヤギセル	25	2	25	52	5	9	9	23
オキナワヤマタニシ	47	9	15	71	1	1	2	4
アフリカマイマイ	1	0	3	4			4	4
シュリマイマイ	4	5	4	13				
オキナワウスカワマイマイ	2	0	0	2				
イトマンマイマイ	1	3	1	5				
シュリケマイマイ	1	1	3	5				

二枚貝類	完形		殻頂				完形		殻頂			
	L	R	L	R	破片	MNI	L	R	L	R	破片	MNI
エガイ								3			0	3
カリガネエガイ								1				1
クロミノエガイ								1				1
リュウキュウザルボウ		1	1	1		2	4	1	1	3	3	5
ハイガイ（ｾｲﾀｶ型）	1	1	1			3	5	8	2	3	1	11
ソメワケグリ				1		1	2	1				2
リュウキュウヒバリガイ												
ミドリアオリ												
カイシアオリの一種												
リュウキュウオウギ？					1	1						
キンチャクガイ類(化石)											1	1
イタヤガイ科（化石）											6	2
メンガイ							1		2		4	3
シマガキ		3		1	7	5	28	1	2	1	39	31
ニセマガキ								1	1		1	2
ウラキツキガイ	2		2	2		4	47	41	26	36	8	77
ヒメツキガイ								1				1
カネツケザル	1					1						
シマザル							1					1
リュウキュウザル							1	2				2
カワラガイ					1	1	5	8	8	6		14
シャゴウガイ							1		2	2	1	3
ヒメシャコガイ					1	1	3	2		2	5	4
ヒレシャコガイ				1	5	2	9	3	10	14	120	19
イソハマグリ	10	11	3	11	1	22	95	107	14	8	3	115
ヌノメイチョウシラトリ							1	1				1
リュウキュウシラトリ					1	1						
モチツギザラ											1	1
マスオガイ											1	1
リュウキュウマスオ								1		1	1	2
フナガタガイ								1				1
シレナシジミ			1		1	1	5	2	5	7	3	10
アラヌノメガイ								1				1
ヌノメガイ		1	1	1	4	2	13	8	4	3	10	17
アラスジケマン	173	172	74	89	15	262	368	357	76	73	37	444
ホソスジイナミ	3	1			1	3	14	15	2	1	2	16
ユウカゲハマグリ	2	3	2	1		4	3	3		1		4
オイノカガミ									3			3
スダレハマグリ							3	5	4	3	3	8
オキナワワスレ								2			1	2
ハマグリの一種	2	1	7	7	11	9	29	37	40	63	58	100
オキシジミ			1			1	15	10	10	10	5	25
二枚貝（化石）							1	1				
その他												
パイプウニ（棘）							3		2		2	5

この傾向は、これまでの首里城跡各地点の結果（例えば大城1988、金城2007、山本2007、羽方・仲座2007等）とも類似しているようであった。これは、貝塚時代の遺跡前面の環境に依存する優占種組成と異なっていると思われる。嗜好される種が“少量ずつ”持ち込まれた、言い換えると比較的幅広い食用貝類の利用があった可能性もあろう。

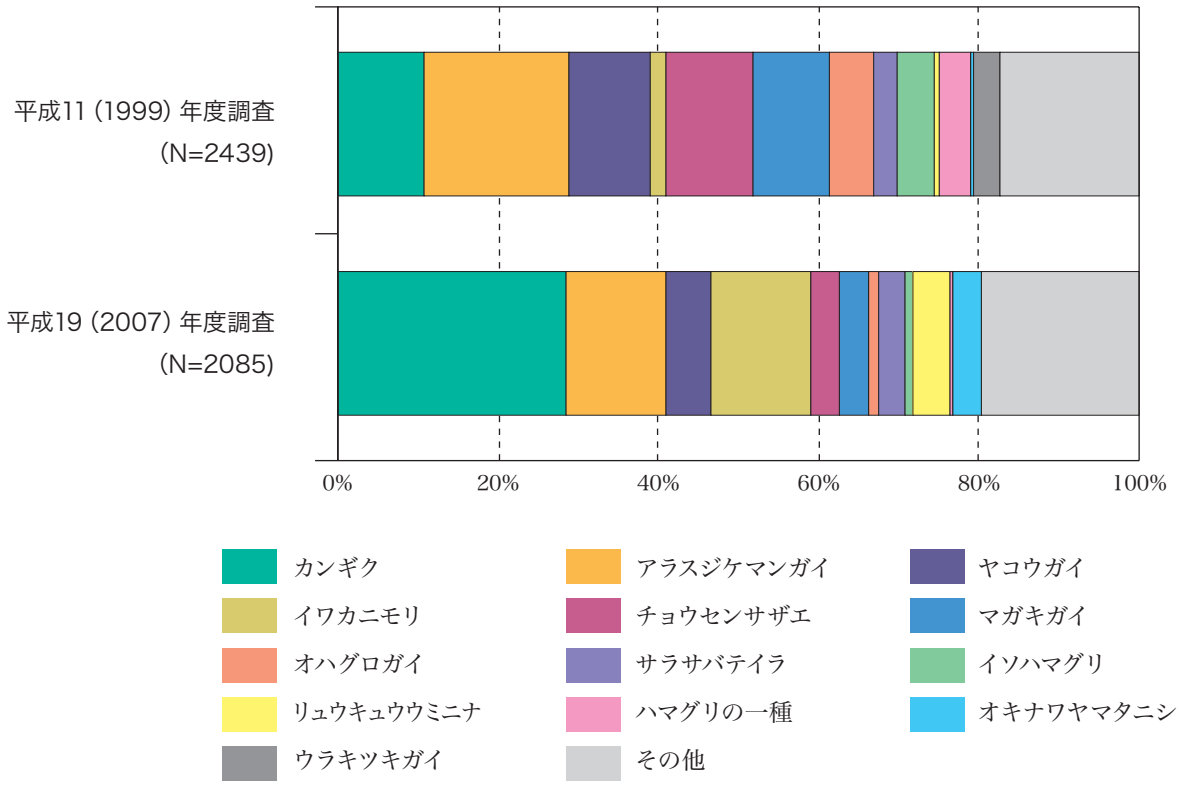
次に、先史時代から現在まで“味の良い貝”として良く利用されるシャコガイ類とクモガイの出土は極めて稀であった。今帰仁城跡では、城外の東斜面で大形のシャコガイ類やサラサバテイラが目立ち、“宴会の残滓”とも考えられている（黒住1991）。また、同様な非日常の廃棄遺体として、近世期の役所跡でもある宮古島住屋遺跡でのチョウセンサザエの極めて優占する組成も知られている（黒住1999）。今回の御内原北地区では発掘面積の広さに対して、出土遺体個体数はかなり少ない。これらのことから、当然のことであるが、大多数の中・大形貝類遺体は城外へ持ち出されたと想定される。ただ、これまでのところ、この持ち出された貝類遺体の処理や再利用に関する情報はほとんどないと思われる。貝灰や敷石としての利用等も想定され、これらがわかることによって、搬出（や再利用？）にかかわっていた人々の生活実態にも貝類遺体から新たな研究の展開があるかもしれない。

また、先史時代に、利器として用いられることも多いホラガイとスイジガイもほとんど確認できなかった。これは、当然金属器等が用いられることに起因すると考えられる。

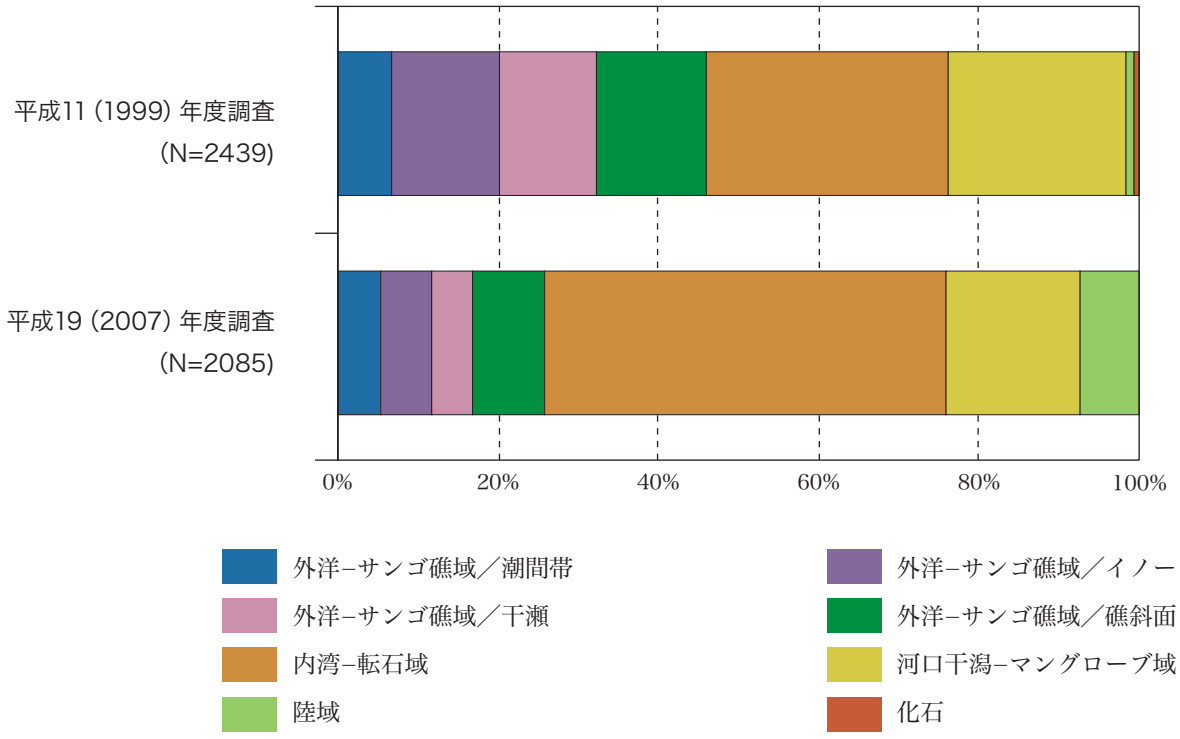
逆に、他遺跡と比較して多く出土した貝類として、ヤコウガイとハマグリの一種が挙げられる。首里城跡におけるヤコウガイの多さは、これまでにも指摘されている（例えば大城1988、上原1989）。当然、隣接したヤコウガイ加工（貝摺）を行った「御細工所跡」では、本種の殻が極めて多く出土し、その利用が想定されている（島袋1991）。前記の“宴会用”に本種の殻に孔を開けて生かしていた例（例えば上原1989）等、多岐の利用が考えられている。しかし、その殻残滓が城内に留められた（後には廃棄されたのではあるが）ことの理由を報告者には想定できない。ただ、近年宮城（2006）は、グスク時代の社会階層ごとの遺物を比較検討し、食料としてのヤコウガイが権力者側に集中していることを指摘している。このような食料残滓以外のヤコウガイ残滓（発掘されるものは軸唇部が多い）の意味付けについても、興味深いものと思われる。

ハマグリの一種は、本州～九州（ヤマト）に分布するハマグリと同種の可能性が高いものの、未だ分類学的な検討が未了な種である。この種を平田ら（1973）はハマグリとして図示・解説している。そのため、首里城跡で発掘されたハマグリ類は、中城湾で得られたものの可能性が高い。ヤマトに分布するハマグリが持ち込まれた可能性も否定できないが、現在までのところ、貝合せ等に利用された個体が認められていないので、その可能性はきわめて低いと思われる。なお、中城湾には、平田ら（1973）がチョウセンハマグリとして図示し、“養殖されたこともある”とした別種のトゥドュマリハマグリも分布していたはずであるが（先史時代等の遺跡からチョウセンハマグリとして報告されている）、報告者が首里城跡から発掘されたハマグリ類を検討させていただいた中には、トゥドュマリハマグリは含まれていなかった。両種をかなり厳密に区別していたことが考えられる。

今回の地点を含め、琉球王国の中枢であった首里城において、これまでに王国外から持ち込まれたと考えられる貝類は、ヤマトの近世に用いられた貝杓子由来と想定されるイタヤガイが得られている程度である。様々な交易の結果として、各地の稀少品のひとつとして貝殻が持ち込まれた可能性も想定されるが、出土遺物としては検証できていない。持ち込まれた個体数が極めて稀なことによるものであろう。



第164図　貝類遺体の種組成



第165図　貝類遺体の生息場所類型組成

このひとつの要因として、当時の中国が稀少貝類を珍重することがなかったためと考えられる。少し時代は下るが、ヨーロッパ人がアジアへ進出してくると、インドネシア等から多数の貝殻が本国へ送られた状況があり、このような状況とは当時の琉球王国は全く異なっていたようである。

〈引用文献〉

上原　静 1989「首里城跡出土の貝殻」『月刊考古学ジャーナル』311号：5-8

大城聖子 1988「貝殻」In 当真嗣一・上原 静(編)『首里城跡 –歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査–』沖縄県文化財調査報告書第88集: 111,121-128.

金城亀信 2007「貝類遺存体」In 金城亀信・伊藝由希(編)『真珠道跡 –首里城跡真珠道跡地区発掘調査報告書(II)–』 沖縄県立埋蔵文化財発掘調査報告書第42集: 73-75,104.

黒住耐二・金城亀信 1988「豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類」In 金城亀信 (編)『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集: 137-155.

黒住耐二 1991「貝類遺存体」In 金武正紀ら (編)『今帰仁城跡発掘調査報告書II』今帰仁村文化財調査報告書第14集: 340-351.

黒住耐二 1999「貝類遺存体」In 砂辺和正 (編)『住屋遺跡 (I)』平良市埋蔵文化財調査報告書第4集: 294-317.

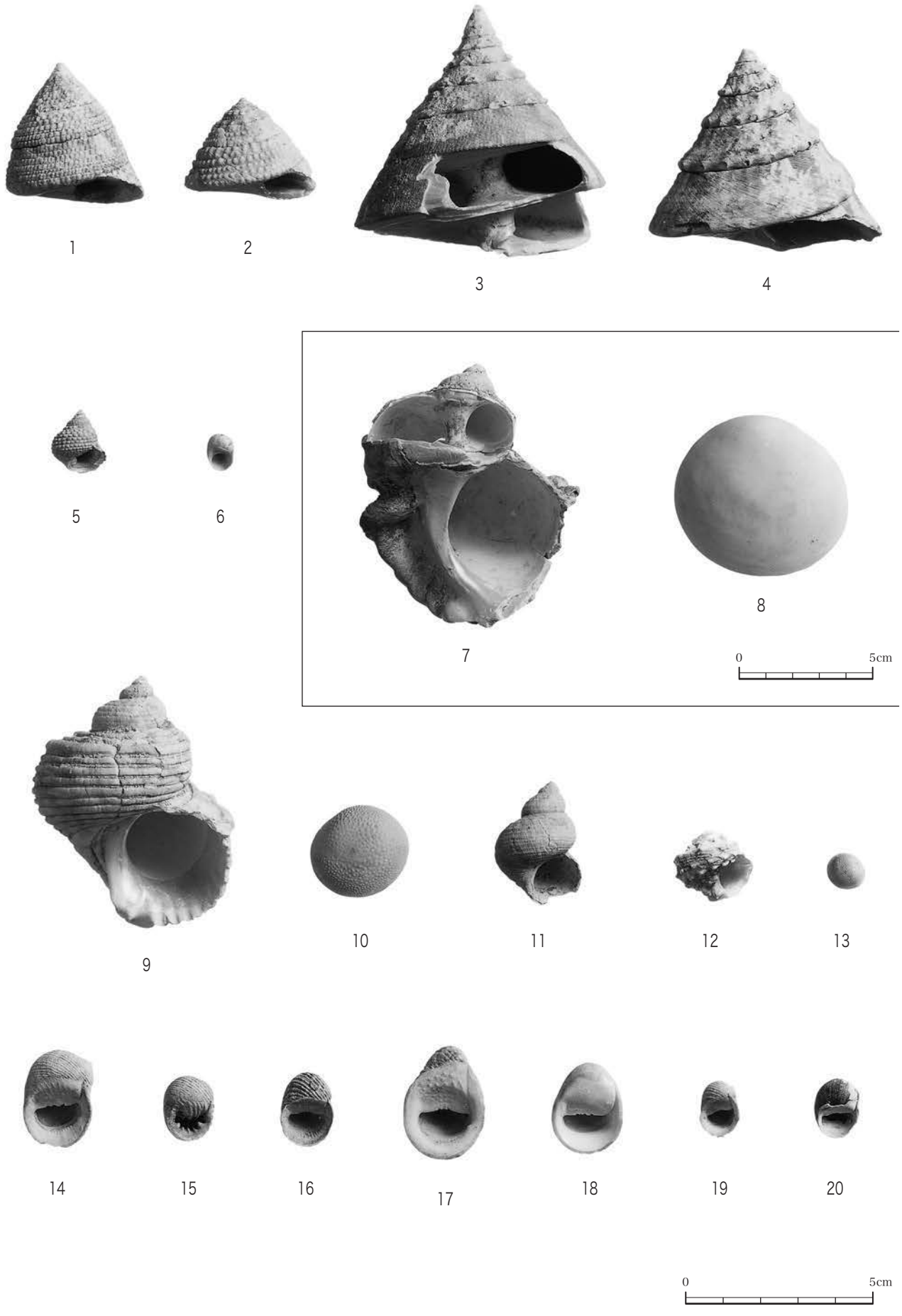
島袋春美 1991「貝類」In 金武正紀・島袋春美 (編)『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集: 123-126, pls. 59, 60.

羽方　誠・仲座久宜 (編) 2007『首里城跡 –黄金御殿地区発掘調査報告書–』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集: 1-275.

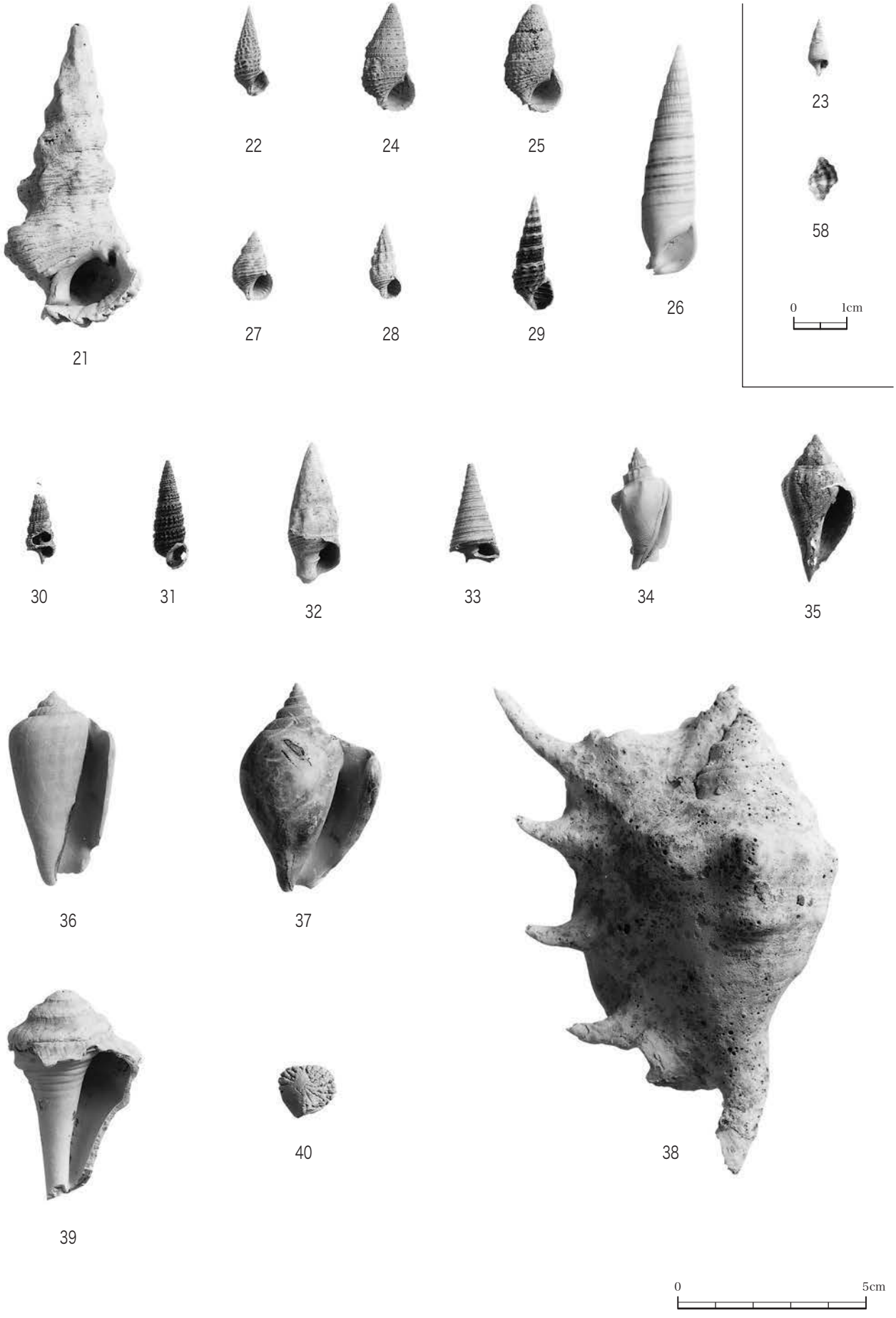
平田義浩・仲宗根幸男・諸喜田茂充 1973『沖縄の貝・カニ・エビ』144 pp. 風土記社.

宮城弘樹 2006「グスクと集落との関係について (覚書) –今帰仁城跡を中心として–」『南島考古』25号: 27-40.

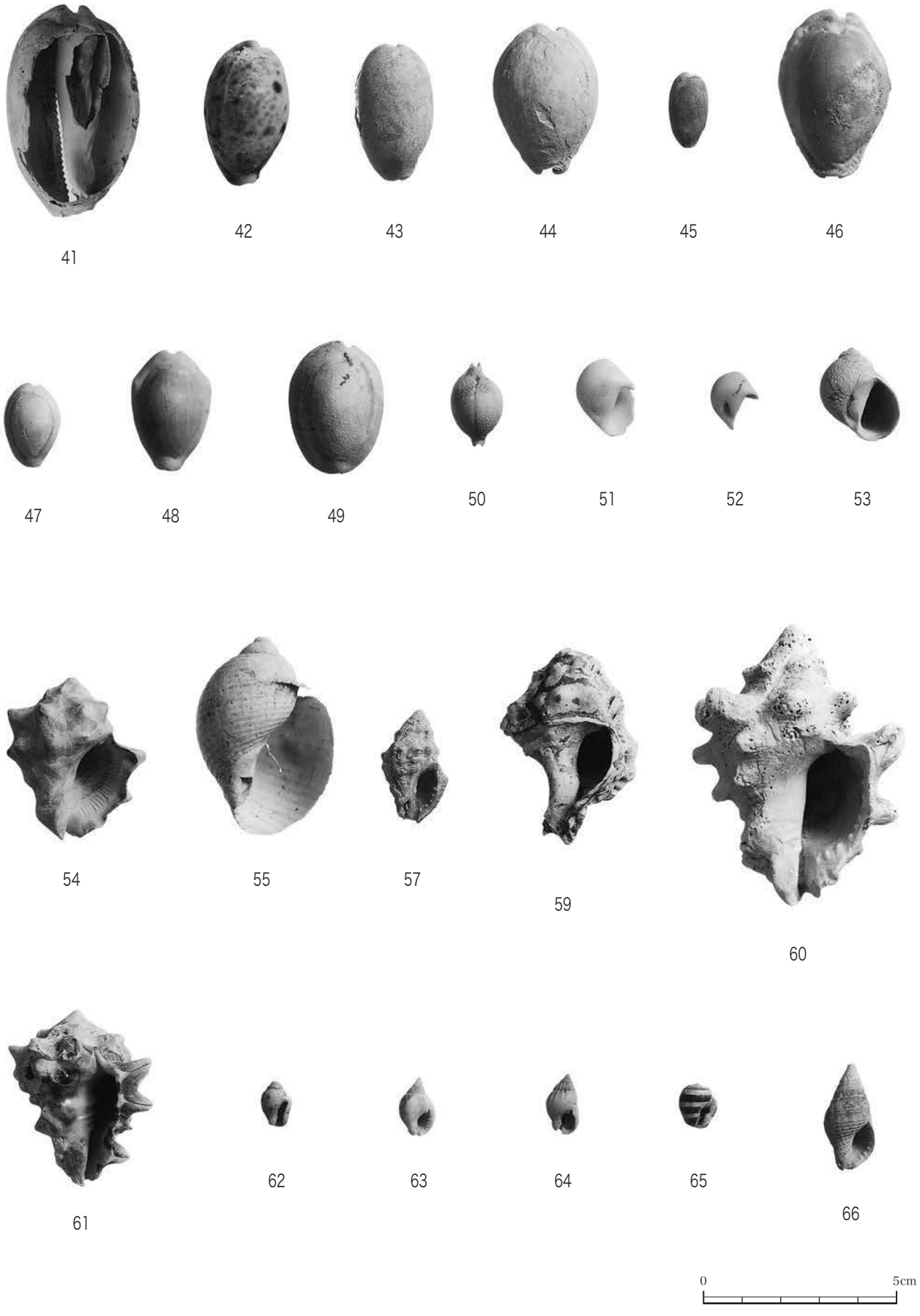
山本正昭 (編) 2007『首里城跡 –御内原西地区発掘調査報告書–』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第44集: 1-212,4pls.



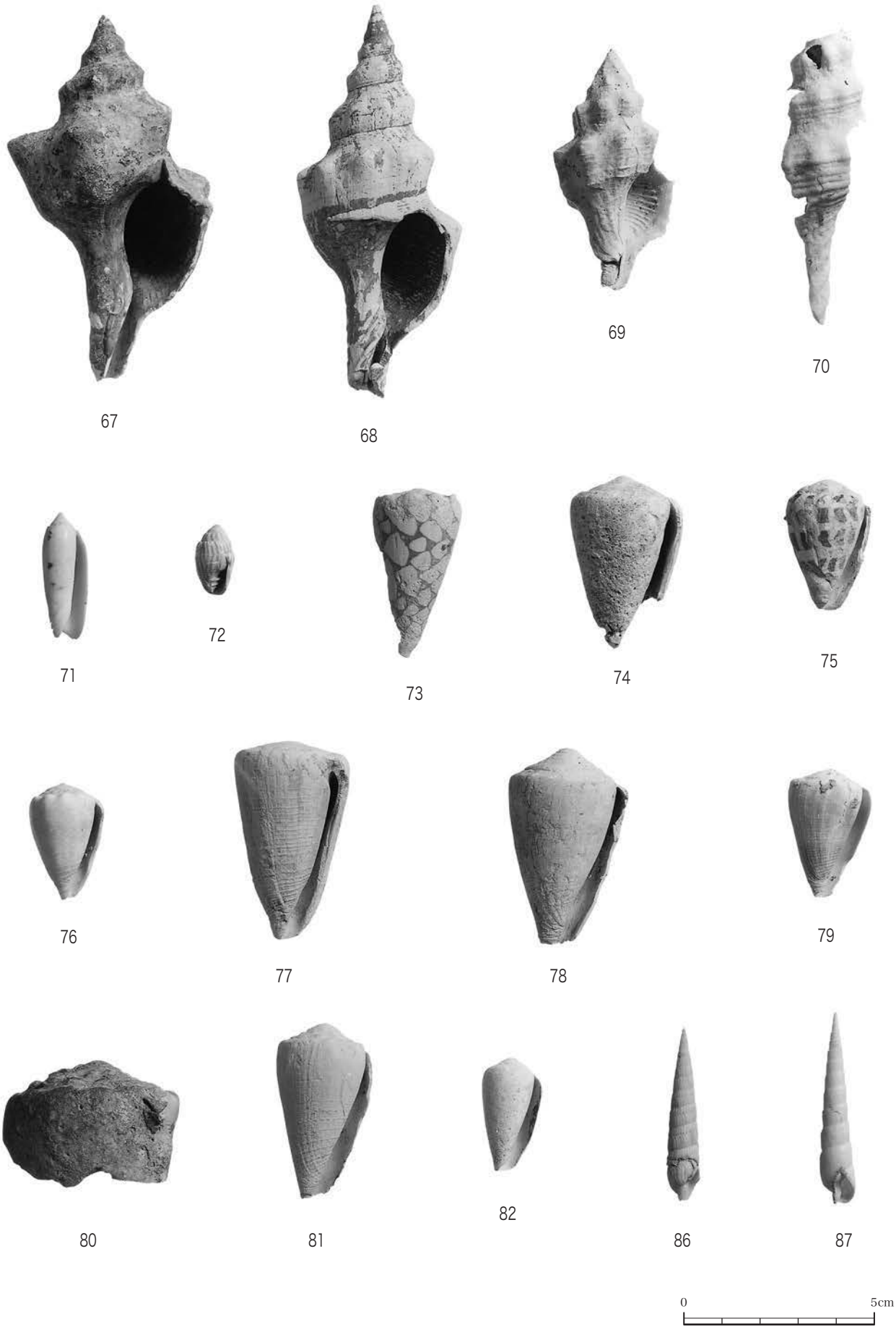
図版144　貝類遺体１　巻貝（番号は表と一致）



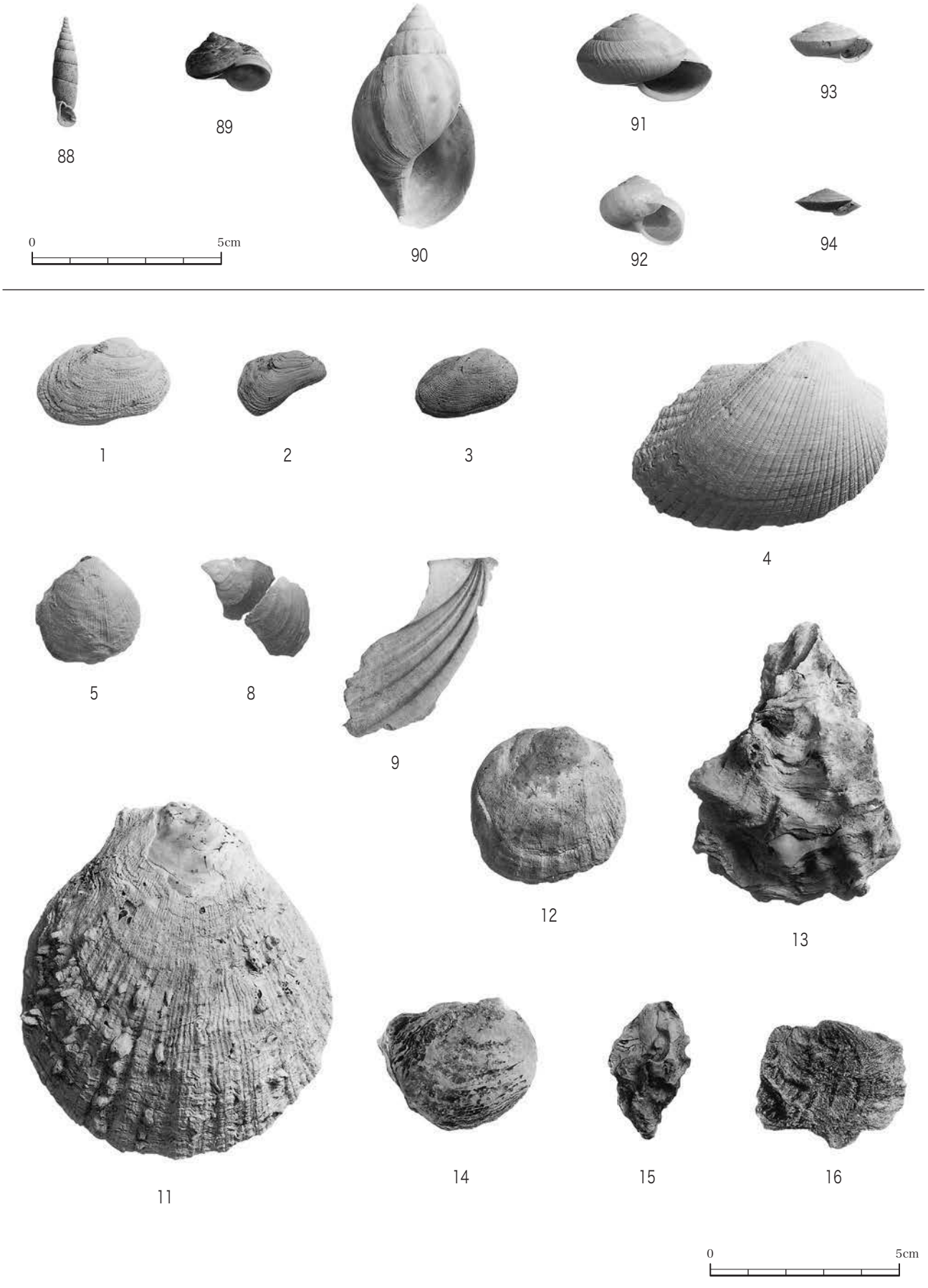
図版145　貝類遺体２　巻貝（番号は表と一致）



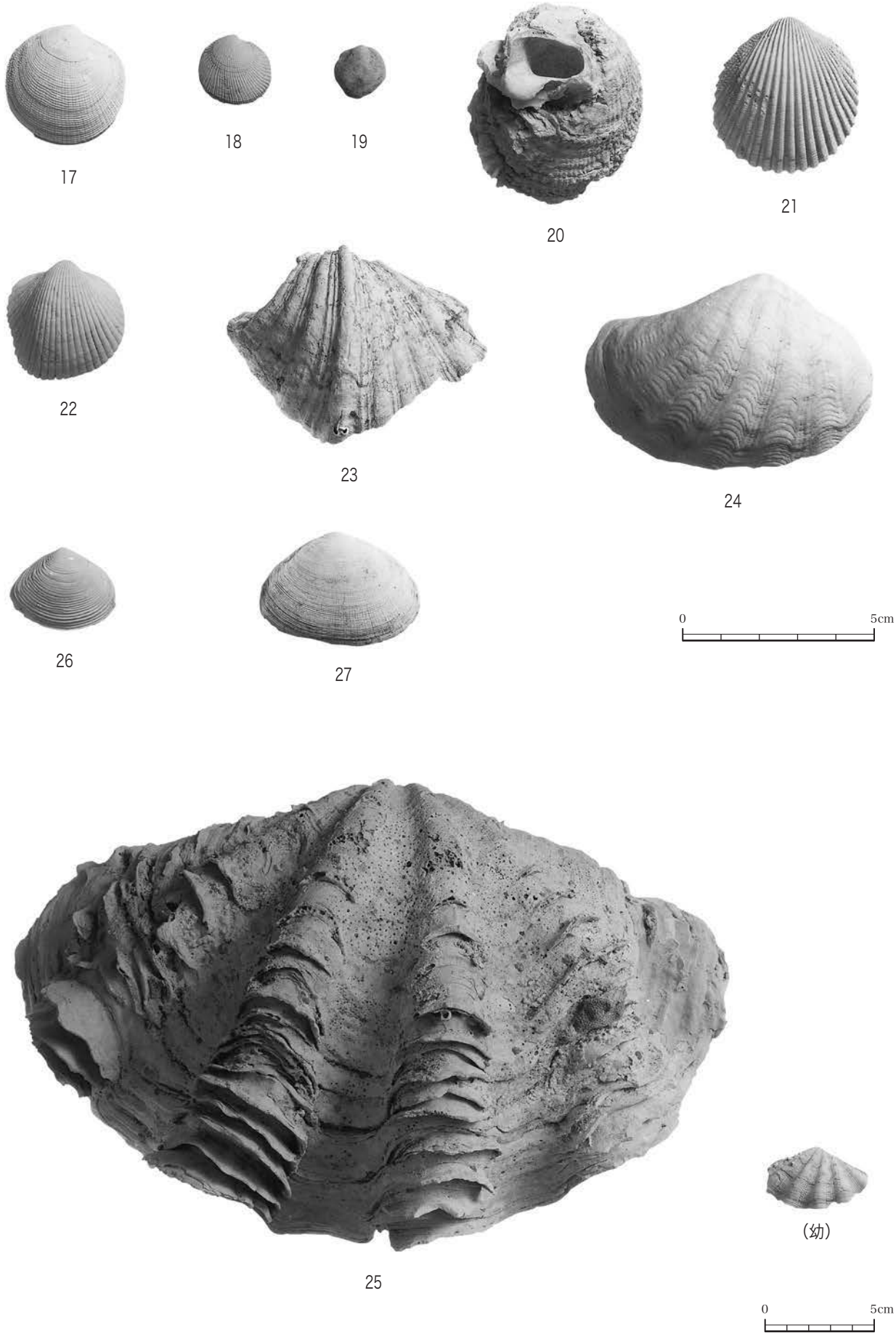
図版146　貝類遺体３　巻貝（番号は表と一致）



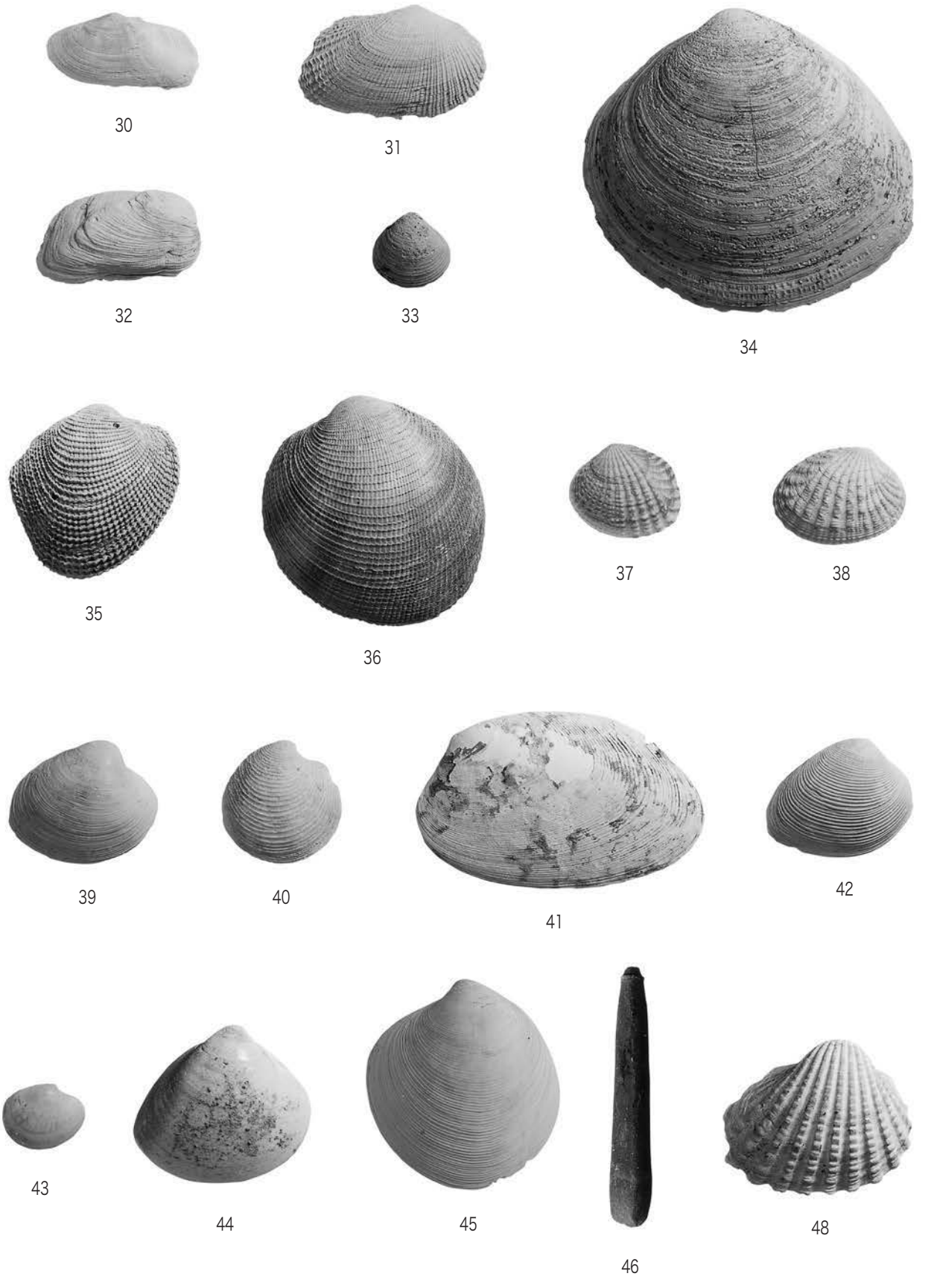
図版147　貝類遺体４　巻貝（番号は表と一致）



図版148　貝類遺体５　上：巻貝　下：二枚貝（番号は表と一致）



図版149　貝類遺体６　二枚貝（番号は表と一致）



図版150　貝類遺体７　二枚貝（番号は表と一致）

第26節　脊椎動物遺体

菅原広史（浦添市教育委員会）

この節では、平成11（1999）年度及び平成19（2007）年度調査においてピックアップ法で得られた脊椎動物遺体について報告を行う。なお、シーリ遺構内から出土した貝類を含む自然遺物は、第27節シーリ遺構内の自然遺物としてまとめて報告する。

1. 資料の概要

本節で対象とする資料は平成11（1999）年度・19（2007）年度の調査によって得られた脊椎動物遺体のうち、平成19（2007）年度に検出したシーリ遺構から出土した分を除いたものである。本資料は基本的に調査現場において取り上げられた遺物（ピックアップ資料＝PU資料）であり、調査年度

第96表　脊椎動物遺体一覧（シーリ遺構出土資料を含む）

軟骨魚綱		CHONDICHTHYES
	サメ類	Lamniformes？
	トビエイ科	Myliobatididae
硬骨魚綱		OSTEICHTHYES
	ウナギ属	*Anguilla* sp.
	ニシン科	Clupeidae
	イットウダイ亜科	Holocentridae
	マツカサウオ科	Monocentridae
	ボラ科	Mugilidae
	サヨリ科	Hemiramphidae
	トビウオ科	Exocoetidae
	ダツ科	Belonidae
	カマス属	*Sphyraena* sp.
	ハタ科（マハタ型）	Serranidae cf.*Epinephelus*
	ハタ科（スジアラ型）	Serranidae cf.*Plectropomus*
	イトヒキアジ属	*Alectis* sp.
	ギンガメアジ属（カスミアジ近似）	Caranx cf.*Caranx melampygus*
	ギンガメアジ属（ギンガメアジ近似）	Caranx cf.*Caranx Sexfasciatus*
	メアジ近似種	Carangidae cf.*Selar crumenophthalmus*
	シイラ属	*Coryphaena* sp.
	フエダイ科	Lutjanidae
	コショウダイ亜科	Pomadasyinae
	クロダイ属	*Acanrhpagrus* sp.
	ヘダイ	*Sparus sarba*
	ヨコシマクロダイ	*Monotaxis grandoculis*
	メイチダイ属	*Gymnocranius* sp.
	フエフキダイ属（ハマフエフキ型）	*Lethrinus cf.L.nebulosus*
	フエフキダイ属（アマミフエフキ型）	*Lethrinus cf.L.miniatus*
	フエフキダイ属	*Lethrinus* sp.
	イシダイ科	*Oplegnathidae*
	ベラ科（シロクラベラ型）	Labridae cf.*Semicossyphus reticulatus*
	ベラ科（B）	Labridae (type B)
	ベラ科（その他）	Labridae (others)
	イロブダイ属	*Balbometopon* sp.
	アオブダイ属	*Scarus* sp.
	スマ	*Euthynus affinis*
	カツオ	*Katsuwonus pelamis*
	ニザダイ科	Acanthrinidae
	アイゴ属	*Siganus* sp.
	モンガラカワハギ科	Balistidae
	ハリセンボン科	Diodontidae
爬虫綱		REPTILIA
	ヘビ類	Ophidia
	ウミガメ科	Cheloniidae
鳥綱		AVES
	ニワトリ	*Galus galus*
哺乳綱		MAMMALIA
	トガリネズミ科	Soricidae
	ネズミ科	Murinae
	イヌ	*Canis familiaris*
	ネコ	*Felis catus*
	ウマ	*Equus Feres*
	イノシシ/ブタ	*Sus scrofa*
	シカ	*Cervus nippon*
	ヤギ	*Capra hircus*
	ウシ	*Bos taurus*
	ジュゴン	*Dugong dugon*
	イルカ・クジラ類	Cetacea

が異なるものの同一地区から出土した資料であるため、ここでは一括して取り扱うこととする。

資料が出土した地点は主に各グリッドの包含層および造成層と撹乱層である。造成がなされたと推測される時期より、造成層出土資料は17世紀に比定されると考えられるが、その他の資料については明確な帰属時期は不明である。

分析の方法は、現生標本との形態比較による同定と計測を中心とするが、その詳細については後述の第27節に記載する内容と同一であるため、ご参照いただきたい。本節で扱う上記資料には魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が含まれており、魚類については同定結果を集計表に集約したが、その他に分類群については項目が多岐にわたるため一覧表に記載するにとどめている。

2. 分析結果

○魚類（別添CD-ROM　自然遺物出土状況　第26節）

同定対象となる大半は平成11（1999）年度に出土したものであり、平成19（2007）年度資料は魚類と認識できるものは少なからずあるものの、多くは本分析において対象外となるものであった。

出土組成としてはフエフキダイ科を第一優占の分類群として、ベラ科及びブダイ科がそれに次ぐ典型的な傾向である。同定された分類群をみると、後述のシーリ遺構出土のそれと共通しているが、群数の上ではやや少ない。現れない分類群は概ね小型の魚類であることから、資料採集の方法がPUのみであるという点がその差の要因として考えられる。逆に遺構外出土資料においてのみ確認され、シーリ遺構に見られない分類群としてシイラ属が挙げられ、尾椎を中心として45点を同定している。

計測値の面では、前上顎骨・歯骨でそれぞれ設定した2ヶ所の計測位置のうち、破損等のため両者を計測可能であった資料は少なく、シーリ出土のそれと比較すると遺存状態が良くないものが目立つ。その中で得られた計測値を同様に比較すると、平均してより大きな値を示す傾向にある。この要因には、HF資料を採集できていないことで結果的に高い計測値へと偏った可能性が疑われる。

○鳥類、爬虫類、哺乳類（第97～99表）

・鳥類

鳥類はその多くがニワトリに同定されると思われるが、検討不十分であるため本報告では具体的な記載は保留した。

・ウミガメ類

爬虫類に同定されるのはウミガメ類がみられ、背甲及び腹甲にあたる部位が多くを占めるが、いずれも破片である。

・イノシシ／ブタ

平成11（1999）・19（2007）年度の調査を通して哺乳類中、最多の出土数を示すのが本群である。四肢骨を中心に全身にわたる各部位が同定されている。

観察の結果、頭蓋にかかわる部位では、形態や骨質の点などから現生イノシシの標本と比較して変異が多くみられる。四肢骨においても上腕骨・橈骨・尺骨・中手骨・中足骨などが他の部位に比べて現生標本との差が顕著にみられる。特に橈骨と尺骨や中手骨・中足骨の骨幹最小幅に対する全長の比率が短い点が目立つほか、骨質が粗いと認められるものも存在する。この点から本分類群にはブタと判断できる資料が多数含まれていると考えられる。ただし、撹乱からの出土も多い上、特に平成11（1999）年度

出土資料には極めて新しい時期のものではないかと思わせる状態の資料が少なからず見られることから、考察資料としての取り扱いには、慎重を期さなければならない。

下顎骨の観察では多くの歯が脱落して残存していないものの、歯槽の状況などから M3の萌出が完了した個体は2点のみで、多くは萌出中もしくはそれ以前である。また、四肢骨などでも骨端が未癒合で脱落しているものが多数みられる。そのため、本分類群に属する資料は、その大半が若齢の個体によるものであると考えられる。

・ヤギ

遊離歯及び四肢骨を中心に同定された。イノシシ / ブタ、ウシに次いで哺乳類中では3番目の出土を数える。平成 11(1999)年度出土の資料中から確認されている。

・ウシ

遊離歯、椎骨、四肢骨が同定され、哺乳類の中ではイノシシに次いで2番目の出土数が確認されている。平成 19(2007)年度資料の出土傾向では第5層からの出土が大半を占めていることがみてとれる。なお、ウシ・ウマのサイズと同等のサイズを持つが破片であるため同定が困難である資料については、いずれかに分類される可能性が高いとして、「ウシ / ウマ」の表記をしている。

・ジュゴン

肋骨が数点確認されたものの、いずれも破片であるため明確な様相は不明である。出土が見られるという点のみ記述しておく。

・その他

上記のほかネコの下顎骨、ウマの遊離歯及び橈骨、イルカ・クジラ類の椎骨などがいずれも1点ずつ同定されている。また、シカの上腕骨が確認されたが、これについては第27節のシカに関する記載を参照いただきたい。

3. 小考

平成19 (2007) 年度資料の出土傾向をみると、哺乳類が注視される。その中でもイノシシ・ブタは第2・3層を中心とした比較的上層で出土したのに対し、ウシは主に第5層から出土する傾向がみてとれる (第99表) 。その傾向から、各層の形成時期において両者の利用がいずれかに集中していた可能性が窺われる。平成11 (1999) 年度出土資料は、前述の通り出土層位が撹乱であることが多いが、平成19 (2007) 年度調査に対比して第2層前後にあたる位置から出土していると思われる。とすればイノシシ/ブタが組成の優占となる傾向は、平成19 (2007) 年度の第2・3層において同分類群が主体となる状況と一致すると言えよう。

組成全体で比較すると (第167図) 、MNIのうち90%以上を魚類が占める点で後述のシーリ遺構の様相と一致するが、イノシシ・ブタやウシ・ヤギ等の家畜の出土数は本節で対象とした遺構外出土資料が圧倒する。遺構の内外それぞれから出土する動物遺体の傾向の差は、そこに投棄されるに至った動物に対する扱い方の差を反映しているものと思われる。

なお、本報告書における脊椎動物遺体の分析の中心は時間等の都合上もあり次節のシーリ遺構出土の内容に重点を置いたため、本節の内容は簡略なものに留めている。また、次節において本節の内容と比較して考察を行っているため、合わせてご参照いただきたい。

第97表　平成11年度御内原北地区出土獣骨一覧表1

分類群	部 位	左右	残存状況	数	出土箇所	層 位
ウミガメ	頭蓋骨?	不明	不明	1	撹乱	—
	烏口肩甲骨	左	一部欠損	1	撹乱	—
	指骨	不明	完存	1	撹乱	—
			完存	1	撹乱	—
	背甲	不明	肋骨版	1	撹乱	—
			肋骨版	1	撹乱	—
			肋骨版	1	撹乱	—
	腹甲(/背甲	不明	不明	1	撹乱	—
			不明	1	撹乱	—
ネコ	下顎骨	左	[P3P4(M1)]	1	撹乱	—
ウマ	M2?	左	歯冠	1	撹乱	—
	橈骨	右	近～幹	1	J–10	20～30
イヌ	頸椎	—	ほぼ完存	1	J–9	灰混層
	上腕骨	左	近幹～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
	寛骨	左	腸骨～寛骨臼	1	J–9	灰混層
		右	腸骨～寛骨臼	1	撹乱	—
	大腿骨	右	(近)～遠幹	1	撹乱	—
	腓骨	右	近幹～(遠)	1	J–9	遺構上西
			近幹～遠幹	1	J–9	灰混層
	踵骨	左	完存	1	撹乱	—
	第三中足骨	左	近～幹	1	撹乱	—
	基節骨	不明	完存	1	撹乱	—
			完存	1	J–8	茶褐色灰混層
			一部欠損	1	J–8	茶褐色灰混層
			完存	1	撹乱	—
			完存	1	撹乱	—
イノシシ／ブタ	切歯骨	左	[I1 (I2) I3]	1	撹乱	—
	前頭骨	左	眼窩周辺	1	撹乱	—
			眼窩周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
		右		1	J–9	遺構上西
			眼窩周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
			眼窩周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
	前頭骨+頭頂骨+後頭骨	—		1	J–9	遺構上西
	頭頂骨+後頭骨+側頭骨	—		1	撹乱	—
	頭頂骨	左		1	撹乱	—
				1	撹乱	—
		右		1	J–9	灰混層
				1	撹乱	—
	頭頂骨+後頭骨	左		2	J–8	茶褐色灰混層
		右		1	撹乱	—
	頭頂骨+後頭骨+側頭骨	右		1	撹乱	—
	頭頂骨+後頭骨	—		1	J–8	20～30
	側頭骨	左	関節結節周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
			関節結節～頬骨突起	1	J–8	茶褐色灰混層
			関節結節～頬骨突起	1	J–9	灰混層
		右	関節結節周辺	1	J–9	遺構上西
			関節結節～頬骨突起	1	撹乱	—
			関節結節～頬骨突起	1	J–10	20～30
	側頭骨+乳突起	左		1	J–9	灰混層
	後頭骨	左	外側部+後頭顆+頚静脈突起	1	撹乱	—
			後頭顆周辺	1	J–8	灰混層
		右	外側部+後頭顆	1	撹乱	—
			後頭顆+頚静脈突起	1	撹乱	—
	後頭骨+側頭骨	右		1	J–9	灰混層
	上顎骨+頬骨+頬骨側頭突起	右		1	撹乱	—
	上顎骨	左	[P3P4M1M2]	1	J–9	遺構上西
			[m1m2m3m4M1(M2)]	1	J–8	茶褐色灰混層
			[M1M2]	1	J–9	遺構上西
		右	[m2m3(P3)m4M1M2]	1	J–9	遺構上西
			[m3m4]	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
			[m3m4]	1	J–8	茶褐色灰混層
			[P3P4]	1	J–9	遺構上西
			[(P3P4)M1]	1	J–9	遺構上西
			[m4?M1M2]	1	J–9	灰混層
	I1(下顎)	左	歯根欠損	1	撹乱	—
			ほぼ完存	2	J–9	灰混層
		右	ほぼ完存	1	J–9	灰混層
		不明	歯根～歯冠根元	1	撹乱	—
	I	不明	歯冠～歯根	1	撹乱	—
	I1/2(下顎)	不明	歯根	1	J–9	遺構上西
	C(下顎)	左	歯冠	1	J–8	茶褐色灰混層
			歯冠	1	撹乱	—
			先端及び歯根欠損	1	I–6	基壇東
		右	歯冠	1	J–10	20～30
	P3(下顎)	右	完存	1	I–9	—
	M1(下顎)	右	一部欠損	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
	M2(下顎)	左	歯根欠損	1	撹乱	—
	M2(下顎)	右	歯冠	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
	M1/2(下顎)	不明	歯冠	1	撹乱	—
	M3(下顎)	左	歯冠	1	J–9	遺構上西
	下顎骨	左	[I2I3C(P2P3P4)M1]	1	J–8	茶褐色灰混層
			[(P3P4)]	1	J–8	茶褐色灰混層
			[P4M1M2]	1	撹乱	—
			[P4M1M2(M3)]	1	撹乱	—
			[M1M2(M3)]	1	J–9	遺構上西
			[M1M2M3]	1	撹乱	—
			[M1M2]	1	撹乱	—
			[M2]	1	J–8	茶褐色灰混層
		左+右	[I1～M2]	1	J–9	白砂混層
		右	[I1I2I3C]	1	撹乱	—
			[I1I2I3]	1	撹乱	—
			[CP2P3P4]	1	撹乱	—
			[P2P3P4]	1	撹乱	—
			[P2P3P4M1M2]	1	撹乱	—
			[P2P3P4M1M2(M3)]	1	撹乱	—
			[(M2)]	1	J–8	茶褐色灰混層
			M3周辺	1	J–9	遺構上西
			M1周辺	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
				1	撹乱	—
			破片	1	J–9	灰混層
		左	破片	1	撹乱	—
		左	M1周辺	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
		左	下顎角	1	J–8	茶褐色灰混層
			下顎角	1	I–9	南側
			下顎角	1	撹乱	—
		右	下顎角	1	J–8	茶褐色灰混層
		左	関節突起	1	J–8	茶褐色灰混層
			関節突起	1	J–9	灰混層
			関節突起	1	撹乱	—
		右	関節突起	1	J–8	茶褐色灰混層
	環椎	左		1	J–8	茶褐色灰混層
	軸椎		軸部欠損	1	撹乱	—

分類群	部 位	左右	残存状況	数	出土箇所	層 位
イノシシ／ブタ	頚椎	—	一部欠損	1	J–9	灰混層
		—	関節面未癒合	1	J–9	灰混層
	胸椎	—	棘一部欠損	1	撹乱	—
		—	横突起欠損	1	J–9	遺構上西
	腰椎	—	椎体	1	J–9	灰混層
		—	椎体	1	J–9	灰混層
	肩甲骨	左	関節周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
			関節周辺	1	撹乱	—
			関節面～肩甲棘	1	J–8	茶褐色灰混層
		右	関節周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
			関節周辺	1	撹乱	—
			関節周辺	1	J–9	遺構上西
	上腕骨	左	(近)	1	撹乱	—
			(近)～幹	1	撹乱	表採
			(近)～遠	1	撹乱	—
			上腕骨頭	1	J–9	灰混層
			近幹	1	撹乱	—
			近幹破片	1	J–8	茶褐色灰混層
			近幹～遠幹	1	撹乱	—
			幹～遠幹	1	I–7	10～20
			幹～遠幹	1	撹乱	—
			幹～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			幹～遠幹	1	撹乱	—
			遠幹	1	撹乱	—
			遠幹	1	J–8	20～30
			幹～(遠)	1	J–9	遺構上西
			<遠>	1	撹乱	—
			<遠>	1	撹乱	—
			<遠>	1	J–9	灰混層
		右	(近)～遠	1	撹乱	—
			上腕骨頭	1	J–9	灰混層
			幹～遠	1	撹乱	—
			幹～遠幹	1	J–8	10～20
			幹～遠幹破片	1	J–9	遺構上西
			遠幹	1	撹乱	—
			遠幹	1	撹乱	—
			遠幹	1	I–7	30～40
			遠幹	1	撹乱	—
			遠幹	2	撹乱	—
			遠幹～遠	1	J–9	灰混層
			遠	1	撹乱	—
			遠	1	J–9	遺構上西
			(遠)	1	撹乱	—
	橈骨	左	近～幹	1	J–10	20～30
			近～幹	1	撹乱	—
			近～近幹	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
			近～近幹	1	撹乱	—
			(近)～幹	1	撹乱	—
			幹	1	撹乱	—
			幹	1	撹乱	—
			幹	1	撹乱	—
			幹～遠	1	J–9	遺構上西
			<遠>	1	J–10	20～30
		右	近	1	I–7	30～40
			<近>	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	J–9	遺構上西
			近～(遠)	1	J–9	灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			(近)～(遠)	1	J–9	灰混層
			近幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			幹	1	撹乱	—
			<遠>	1	撹乱	—
			(遠)	1	撹乱	—
			幹～(遠)	1	撹乱	—
			幹～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
	尺骨	左	(近)～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	J–9	灰混層
			(近)～幹	1	撹乱	—
			滑車切痕～幹	1	撹乱	—
			滑車切痕～幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			滑車切痕～幹	1	I–9	南側
			滑車切痕～幹	1	J–9	遺構上西
			滑車切痕～幹	1	撹乱	—
			滑車切痕周辺	1	撹乱	—
			滑車切痕周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
			幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			遠幹	1	撹乱	—
			遠幹	1	撹乱	—
		右	近幹～滑車切痕周辺	1	J–8	茶褐色灰混層
			滑車切痕～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			滑車切痕周辺	1	撹乱	—
			滑車切痕周辺	1	撹乱	—
			滑車切痕周辺	1	J–9	遺構上西
			幹	1	J–9	灰混層
			幹	1	撹乱	—
			(遠)	1	I–7	30～40
			(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
	第4手根骨	右	完存	1	J–8	茶褐色灰混層
	第2中手骨	左	完存	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	J–9	遺構上南
		右	完存	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	I–9	南側
		左	ほぼ完存	1	J–9	遺構上西
			近	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	J–9	遺構上西
			近～(遠)	2	J–9	灰混層
			近～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
		右	近～幹	1	撹乱	—
			近～幹	1	撹乱	—
			近～幹	1	撹乱	—
			近～幹	1	J–9	遺構上西
			遠～遠幹	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	撹乱	—

第98表　平成11年度御内原北地区出土獣骨一覧表２

分類群	部 位	左右	残存状況	数	出土箇所	層 位
イノシシ／ブタ	第4中手骨	左	完存	1	J–10	20～30
			近～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	J–10	10～20
			近～(遠)	1	J–9	灰混層
			近～(遠)	1	J–9	遺構上西
			近～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
		右	近～幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	J–9	遺構上西
			近～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
	第5中手骨	左	近～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
		右	近～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	J–9	灰混層
			近～(遠)	2	J–9	灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～遠幹	1	J–9	遺構上西
	寛骨	左	寛骨臼周辺	1	撹乱	—
			寛骨臼破片	1	撹乱	—
			恥骨欠損	1	撹乱	—
	腸骨	左		1	J–8	茶褐色灰混層
		右	寛骨臼周辺	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
			寛骨臼周辺	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
	寛骨	不明	破片	1	J–8	茶褐色灰混層
	坐骨	左		1	撹乱	—
	大腿骨	左	(近)	1	J–9	灰混層
			(近)～近幹	1	J–9	遺構上西
			大腿骨頭	1	J–9	灰混層
			(遠)	1	撹乱	—
			<遠>	1	J–8	茶褐色灰混層
			<遠>	1	J–10	20～30
		右	近～幹	1	J–10	20～30
			近幹～遠幹	1	撹乱	—
			大腿骨頭	1	撹乱	—
			大腿骨頭	1	J–9	灰混層
			幹～遠幹	1	J–9	遺構上西
			遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			遠幹	1	撹乱	—
			遠幹～遠	1	J–10	20～30
			<遠>	2	J–9	灰混層
	膝蓋骨	左	完存	1	J–8	茶褐色灰混層
	脛骨	左	<近>	1	I–8	灰混層
			<近>	1	J–9	灰混層
			(近)	1	J–9	遺構上西
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
			近幹～遠幹	1	撹乱	—
			幹	1	撹乱	—
			幹～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
			幹～遠	1	撹乱	—
			遠幹	1	J–9	遺構上西
			(遠)	1	撹乱	—
			<遠>	1	J–9	灰混層
			<遠>	1	J–8	茶褐色灰混層
		右	近～幹	1	J–10	20～30
			(近)～遠幹	1	撹乱	—
			一部欠損	1	撹乱	—
			近幹～(遠)	1	撹乱	—
			近幹～(遠)	1	撹乱	—
			近幹～(遠)	1	撹乱	—
			近幹	1	J–9	遺構上西
			幹	1	撹乱	—
			遠幹～遠	1	J–9	遺構上西
			棘一部欠損	1	J–8	茶褐色灰混層
	腓骨	左	関節周辺欠損	1	撹乱	—
			一部欠損	1	J–9	灰混層
			(近)～遠	1	撹乱	—
			(近)～遠	1	撹乱	—
			(近)～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
			(近)～遠	1	撹乱	—
		右	(近)～遠	1	撹乱	—
			(近)～遠	1	撹乱	—
			近幹～関節周辺	1	撹乱	—
			関節周辺	1	撹乱	—
	距骨	左	完存	1	J–8	茶褐色灰混層
			完存	1	J–9	遺構上西
			完存	1	I–9	南側
			ほぼ完存	1	J–8	茶褐色灰混層
			一部欠損	1	J–9	遺構上西
		右	完存	1	J–9	灰混層
			ほぼ完存	1	撹乱	—
			一部欠損	1	J–8	茶褐色灰混層
	第2中足骨	右	近～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	撹乱	—
	第3中足骨	左	近～(遠)	1	I–6	基壇東
			近～(遠)	1	J–11	20～30
		右	近～幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	J–9	灰混層
	中心足根骨	右	完存	1	J–8	茶褐色灰混層
	第4足根骨	右	完存	1	撹乱	—
			完存	1	J–9	灰混層
	第4中足骨	左	近～幹	1	撹乱	—
			近～幹	1	J–9	遺構上西
			近～遠幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	I–8	灰混層
			近～遠幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	I–8	灰混層
		右	ほぼ完存	1	J–9	遺構上西
			近～幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	J–9	灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
			近～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—

分類群	部 位	左右	残存状況	数	出土箇所	層 位
イノシシ／ブタ	第5中足骨	左	近～幹	1	撹乱	—
		右	近～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	I–8	灰混層
			近～(遠)	1	撹乱	—
	基節骨	不明	完存	1	J–8	茶褐色灰混層
			完存	1	撹乱	—
			完存	1	J–9	灰混層
			近～遠幹	1	J–9	灰混層
			(近)～遠	1	撹乱	—
			(近)～遠	1	撹乱	—
			(近)～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
			(近)～遠	1	J–9	灰混層
			(近)～遠	2	J–8	茶褐色灰混層
			近幹～遠	1	I–8	灰混層
			近幹～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
			近幹～遠	1	撹乱	—
			完存	1	J–9	白砂混層
	中節骨	不明	近幹～遠	1	J–9	遺構上西
	末節骨	不明	完存	1	J–8	茶褐色灰混層
	四肢骨	不明	幹	2	J–8	茶褐色灰混層
			幹	1	撹乱	—
	第2/5中手/中足骨	不明	近～(遠)	1	I–8	20～30 茶褐色灰混層
	第3/4中手/中足	不明	近～遠幹	1	J–9	灰混層
			近幹～(遠)	1	撹乱	—
			幹～(遠)	1	撹乱	—
			幹～(遠)	1	J–8	茶褐色灰混層
			幹～遠	1	撹乱	—
	中手/中足	不明	<遠>	1	J–9	灰混層
		不明	幹	1	J–10	20～30
ウシ	P(上顎)	右	歯根の一部欠損	1	撹乱	—
	M²(上顎)	右	歯根欠損	1	J–8	20～30
	P3/4	左	歯冠	1	撹乱	—
	下顎骨	右	M₃	1	撹乱	—
			[dm₂dm₃dm₄(M₁)]	1	I–7	30～40
	M(下顎)	不明	破片	1	撹乱	—
	M₁(下顎)	右	歯冠	1	撹乱	—
	軸椎	—	椎体および棘の一部	1	I–9	南側
	腰椎	—	椎体および棘の一部	1	撹乱	—
	上腕骨	左	近位端破片	1	撹乱	—
	中手骨	左	近	1	J–8	茶褐色灰混層
		不明	遠幹	1	撹乱	—
	寛骨	左	寛骨臼～坐骨	1	I–9	南側
	大腿骨	左	遠位端破片	1	J–9	遺構上西
	膝蓋骨	右	一部欠損	1	J–9	遺構上西
	脛骨	右	近幹～遠幹	1	J–9	灰混層
			幹～遠幹	1	撹乱	—
	腓骨	左	(近)～遠	1	撹乱	—
	中足骨	左	遠幹	1	撹乱	—
		不明	遠幹	1	J–9	灰混層
	基節骨	不明	完存	1	撹乱	
			一部欠損	1	J–8	茶褐色灰混層
			一部欠損	1	J–9	遺構上西
			一部欠損	1	撹乱	—
			近～幹	1	撹乱	—
	中手骨/中足骨	不明	遠位端破片	1	I–7	30～40
	末節骨	不明	完存	1	撹乱	—
ウシ/クマ	椎体	—	破片	1	撹乱	—
シカ	上腕骨	右	近幹～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
ヤギ	M1(上顎)	左	歯根欠損	1	J–9	灰混層
	M²上顎	左	歯冠	1	撹乱	—
	M(上顎)	右	歯冠	1	撹乱	—
		不明	破片	2	J–8	茶褐色灰混層
	M1/2(上顎)	右	歯冠	1	撹乱	—
	下顎骨	右	[P₂P₃P₄]	1	J–9	遺構上西
	軸椎	—	関節面欠損	2	J–8	茶褐色灰混層
	肩甲骨	右	関節～肩甲棘	2	J–8	茶褐色灰混層
	上腕骨	右	幹～遠幹	1	撹乱	—
			幹～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
			幹～遠	1	J–9	遺構上西
	橈骨	左	近～幹	1	撹乱	—
		右	近～幹	1	撹乱	—
			近～遠幹	1	撹乱	—
	尺骨	左	滑車切痕周辺	1	J–9	灰混層
	中手骨	左	近～幹	1	J–9	遺構上西
			近～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～遠幹	1	J–9	遺構上西
			近幹～遠幹	1	J–9	灰混層
		右	近～幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近～(遠)	1	I–9	南側
	大腿骨	左	遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
		右	近～幹	1	I–7	30～40
			(近)～(遠)	1	撹乱	—
	脛骨	左	近幹～遠幹	1	J–8	茶褐色灰混層
			近幹～遠幹	1	撹乱	—
		右	幹	1	撹乱	—
			幹～遠	1	J–8	茶褐色灰混層
	中足骨	左	完存	1	J–9	遺構上西
		右	近～幹	1	撹乱	—
			近～幹	1	撹乱	—
	基節骨	不明	完存	2	J–8	茶褐色灰混層
			完存	1	J–9	遺構上西
ヤギ?	肩甲骨	右	関節周辺	1	J–9	灰混層
	大腿骨	右	近幹～(遠)	1	J–9	遺構上西
			大腿骨頭	1	J–9	遺構上西
イルカ・クジラ類	椎骨	—	椎体	1	撹乱	—
ジュゴン	肋骨	不明	破片	1	撹乱	—
			破片	1	撹乱	—
			破片	1	撹乱	—

残存状況のうち、近/遠は近位端/遠位端が残存。
幹は骨幹中央、近幹/遠幹は近位側骨幹/遠位側骨幹。
(近)(遠)は、それぞれの骨端が未癒合で脱落していること。
〈近〉〈遠〉は、脱落した骨端であることを示す。

※上顎、下顎骨の歯式のうち、下線は残存歯。( )は萌出中であることを示す。

第99表　平成19年度調査分ピックアップ資料一覧(獣骨)

分類群	部 位	残存状況	左右	出土位置	数
ヘビ類	椎骨	—	—	B－4　シーリ内黒褐色	1
		—	—	B－5　シーリ内木炭層アゼ	1
ニワトリ	頭蓋骨	—	—	B－5　シーリ内黒褐色	1
	第2～5胸椎	—	—	B－5　シーリ内木炭層	1
	烏口骨	—	L	B－5　シーリ内灰白色アゼ	1
		近	R	B－5　シーリ内木炭層	1
	肩甲骨	近～幹	L	B－5　シーリ内木炭層	1
		—	R	B－4　シーリ内黒褐色	1
	上腕骨	遠	L	B－5　シーリ内黒褐色	1
		—	L	B－5　シーリ内木炭層アゼ	1
		骨～遠	R	B－5　シーリ内木炭層	1
	中手骨	完形	L	B－5　シーリ内木炭層	1
		完形	R	B－5　シーリ内黒褐色	1
	大腿骨	近～幹	L	B－5　シーリ内木炭層	1
	脛骨	—	L	B－5　シーリ内木炭層アゼ	1
		遠幹	R	B－5　シーリ内黒褐色	1
		遠	R	B－4　シーリ内炭混粘土層	1
		—	R	B－5　シーリ内木炭層アゼ	1
	中足骨	骨幹	R	B－5　シーリ内木炭層	1
鳥類	部位不明	—	—	B－5　シーリ内黒褐色	3
トガリネズミ科	頭蓋骨	前頭骨まで	—	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
	下顎骨	完形	L	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
		完形	R	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
ネズミ科	頭蓋骨	頭頂骨まで	—	B－5　シーリ内黒褐色土層アゼ	1
	下顎骨	完形	L	B－4　シーリ内黒褐色	1
	寛骨	完形	L	B－5　シーリ内木炭層	1
		完形	L	B－4　シーリ内黒褐色	1
		座骨欠損	L	B－5　シーリ内木炭層	1
		恥骨欠損	R	B－5　シーリ内木炭層	1
		恥骨欠損	R	B－4　シーリ内炭混粘土層	1
	大腿骨	完形	L	B－4　シーリ内黒褐色	1
		近位端～骨幹	L	B－4　シーリ内黒褐色	1
		完形	R	B－5　シーリ内木炭層	2
	脛骨	完形	L	B－5　シーリ内木炭層	1
		完形	L	B－4　シーリ内黒褐色	1
		(近)～遠	R	B－5　シーリ内木炭層	1
イヌ	腰椎	ほぼ完形	—	B－5　シーリ内黒褐色土層	3
	仙椎	ほぼ完形	—	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
	大腿骨	完形	R	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
	脛骨	完形	R	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
ウマ	橈骨	近	L	A－1　石積み6裏込め内	1
	尺骨	滑車切痕～骨幹	L	A－1　石積み6裏込め内	1
イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節	R	E－4　5層	1
	上顎骨	[d m 3 d m 4 M1]	L	B－3　裏込め内(石積み2北側)	1
	P	歯根欠損	L	撹乱	1
	下顎骨	[M1M2（M3）]	L	B－4　黄褐色土	1
	肩甲骨	関節周辺	R	B－1　石積み4裏込め内(黒)	1
	上腕骨	遠位側骨幹破片	L	撹乱	1
	橈骨	近～幹	R	撹乱	1
	尺骨	近～幹	R	B－4　黄褐色土	1
	第3中手骨	近～幹	R	A－1　石積み6西側上層	1
	第4中手骨	遠位端一部欠損	L	B－1　石積み4裏込め内(黒)	1
	大腿骨	近幹	R	撹乱	1
	膝蓋骨	完形	L	B－5　シーリ内木炭層	1
	脛骨	遠幹	L	撹乱	1
		遠幹	R	撹乱	1
	距骨	完形	R	A－1　石積み6　西側上層	1

分類群	部 位	残存状況	左右	出土位置	数
イノシシ/ブタ	踵骨	(近)～遠	R	撹乱	1
		完形	L	A―1　石積み6　西側上層	1
		近幹～遠	L	撹乱	1
		近幹～遠	L	撹乱	1
	第2中足骨	近～（遠）	L	B―4　2層	1
	第3中足骨	近～（遠）	L	B―4　2層	1
	第4中足骨	近～（遠）	L	B－4　2層	1
		近～幹	L	撹乱	1
		近～遠幹	L	撹乱	1
	第5中足骨	近～遠幹	R	A－3　裏込め内	1
	第3/4中手/中足骨	遠	不明	撹乱	1
	基節骨	近～遠幹	不明	B－4　2層	1
	中節骨	完形	不明	C－5　3層表面	1
	末節骨	近位端破片	不明	撹乱	1
イノシシ/ブタ？	上腕骨	近幹～遠幹	R	B－5　シーリ内木炭層	1
	橈骨	—	不明	B－5　シーリ内木炭層	1
	腓骨	—	不明	B－5　シーリ内木炭層	1
シカ	肩甲骨	関節～肩甲棘	L	B－4　シーリ内黒褐色土層	1
	上腕骨	完形	L	B－4　シーリ内黒褐色土層	1
	橈骨	完形	L	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
	尺骨	ほぼ完形	L	B－5　シーリ内黒褐色土層	1
	中手骨	幹～遠	R	B－4　東側炭混粘土層	1
	基節骨	完形	不明	B－5　シーリ内木炭層	1
ウシ	M	破片	不明	D－3　5層	1
	MI（上顎）	歯根欠損	R	E－4　5層	1
	M2(上顎)	歯根欠損	R	E－4　5層	1
	仙椎	椎体破片	—	E－4　5層	1
	肩甲骨	肩甲棘周辺	L	E－4　5層	1
	上腕骨	遠	R	E－4　5層	1
	橈骨	近	L	D－4　5層	1
	尺骨	近～滑車切痕付近	L	E－4　5層	1
	中手骨	完形	R	E－4　5層	1
	大腿骨	骨幹破片	L	E－4　5層	1
	膝蓋骨	完形	L	E－4　5層	1
		一部欠損	R	E－4　4層	1
	脛骨	骨幹	R	E－3　5層	1
		近位端破片	R	E－3　5層	1
	踵骨	ほぼ完形	R	E－4　5層	1
	第4中心足根骨	ほぼ完形	R	E－4　5層	1
	中足骨	ほぼ完形	L	E－3　5層	1
		近幹～遠幹	R	E－4　5層	1
	基節骨	完形	不明	D－3　5層	1
		幹～遠	不明	E－4　5層	1
		一部欠損	不明	E－3　5層	1
	中節骨	完形	不明	E－4　5層	1
		ほぼ完形	不明	D－3　5層	1
	肋骨	関節～骨幹	L	E－4　5層	1
		関節～骨幹	L	E－4　6層	1
ウシ/ウマ	大腿骨	大腿骨滑車破片	R	E－4　5層	1
		骨幹	R	E－4　5層	1
	橈骨？	骨幹破片	L	E－4　5層	1

第100表　イノシシ・ブタ計測値一覧１

部位	LR	計測位置	計測値（㎜）	出土位置	年度
橈骨	R	Bp	22.0	撹乱	H19
尺骨	R	SDO	20.5	B−4　黄褐色土	H19
		DPA	29.3		
第3中手骨	R	B	9.6	A−1　石積み6西側上層	H19
第4中手骨	L	GL	63.4	B−1　石積み4裏込内	H19
		Bp	15.8		
		B	13.7		
距骨	R	GL	l33.6	A−1　石積み6西側上層	H19
		GLm	30.2		
踵骨	L	GL	59.5	A−1　石積み6西側上層	H19
		GB	17.0		
第3中足骨	L	Bp	11.8	B−4　2層	H19
		B	9.0		
第4中足骨	L	Bp	11.0	B−4　2層	H19
		B	8.5		
第4中足骨	L	B	9.5	撹乱	H19
第4中足骨	L	Bp	14.5	撹乱	H19
		B	12.2		
基節骨	不明	SD	9.7	B−4　2層	H19
		Bd	11.7		
中節骨	不明	GL	20.4	C−5　3層表面	H19
		SD	10.9		
		Bd	10.3		
上顎骨	L	m1長	7.2	J−8　茶褐色灰混層	H11
		m1幅	4.0		
		m2長	9.4		
		m2幅	5.3		
		m3長	10.3		
		m3幅	7.5		
		m4長	12.1		
		m4幅	9.9		
		M1長	14.7		
		M1幅	12.3		
M1	R	長	14.9	I−8　茶褐色灰混層	H11
		幅	9.7		
M2	L	長	20.1	撹乱	H11
		幅	13.4		H11
M2	R	長	19.3	I−8　茶褐色灰混層	H11
		幅	12.9		
下顎骨	L	M1長	14.3	撹乱	H11
		M1幅	8.8		
		M2長	17.7		
		M2幅	11.6		
下顎骨	L	M3長	31.0	撹乱	H11
		M3幅	14.0		
下顎骨	L	M1L	13.0	撹乱	H11
		M1B	8.6		
		M2L	17.0		
		M2B	11.6		
下顎骨	R	M2L	17.3	撹乱	H11
		M2B	11.6		
肩甲骨	L	GLP	32.2	J−8　茶褐色灰混層	H11
		GB	22.0		
		SLC	23.3		
肩甲骨	L	GLP	25.6	撹乱	H11
		BG	17.9		
		SLC	16.1		
肩甲骨	L	SLC	24.5	J−8　茶褐色灰混層	H11
肩甲骨	R	GLP	35.6	J−8　茶褐色灰混層	H11
		BG	22.9		
肩甲骨	R	GLP	33.9	J−9　遺構上西	H11
		BG	25.1		
		SLC	23.5		
上腕骨	L	SD	15.7	撹乱	H11
		Bd	36.3		
上腕骨	L	SD	13.3	撹乱	H11
上腕骨	L	SD	12.5	撹乱	H11
上腕骨	L	SD	15.2	J−8　茶褐色灰混層	H11
上腕骨	L	SD	11.1	撹乱	H11
上腕骨	R	SD	13.4	撹乱	H11
		Bd	31.6		
上腕骨	R	SD	13.0	撹乱	H11
		Bd	31.1		
上腕骨	R	BD	38.3	J−9　灰混層	H11
上腕骨	R	Bd	37.7	J−9　遺構上西	H11
橈骨	L	BP	20.6	撹乱	H11
橈骨	L	Bp	22.6	撹乱	H11
橈骨	L	Bp	27.6	I−8　茶褐色灰混層	H11
橈骨	L	SD	15.3	撹乱	H11
橈骨	L	BD	27.8	J−9　遺構上西	H11
橈骨	R	Bp	29.7	I−7　30〜40	H11
橈骨	R	Bp	27.0	撹乱	H11
		SD	15.5		
橈骨	R	Bp	21.9	撹乱	H11
		SD	14.0		
橈骨	R	Bp	28.9	J−9遺構上西	H11
		SD	17.4		
橈骨	R	Bp	23.8	J−9　灰混層	H11
		SD	13.6		
橈骨	R	Bp	24.0	撹乱	H11
		SD	16.0		
橈骨	R	SD	17.0	撹乱	H11
橈骨	R	SD	17.3	撹乱	H11
橈骨	R	SD	16.0	J−8　茶褐色灰混層	H11
橈骨	R	SD	17.5	J−9　灰混層	H11
橈骨	R	SD	15.0	J−8　茶褐色灰混層	H11
尺骨	L	SDO	18.8	撹乱	H11
		DPA	25.4		
尺骨	L	SDO	20.6	J−9　灰混層	H11
		DPA	28.5		
尺骨	L	DPA	24.4	撹乱	H11
		SDO	19.1		
尺骨	L	SDO	25.9	撹乱	H11
		DPA	34.1		
尺骨	L	DBA	25.1	I−9　南側	H11
尺骨	L	DPA	33.7	撹乱	H11
尺骨	L	SDO	27.8	撹乱	H11
		DPA	36.7		
尺骨	L	SDO	28.4	J−8　茶褐色灰混層	H11
		DPA	38.4		
尺骨	R	SDO	26.9	J−8　茶褐色灰混層	H11
		DPA	35.7		
尺骨	R	SDO	28.6	J−8　茶褐色灰混層	H11
		DPA	35.7		
尺骨	R	DPA	36.9	撹乱	H11
第3中手骨	L	GL	65.8	J−9　遺構上西	H11
		Bp	15.5		
		B	12.2		
		Bd	16.5		
第3中手骨	L	Bp	17.3	J−8　茶褐色灰混層	H11
第3中手骨	L	Bp	17.1	撹乱	H11
		B	14.4		
第3中手骨	L	B	14.0	J−9　遺構上西	H11
第3中手骨	L	Bp	16.1		
		B	13.1		
第3中手骨	L	Bp	15.8	J−9　灰混層	H11
		B	12.6		
第3中手骨	L	Bp	13.4	J−8　茶褐色灰混層	H11
		B	11.7		
第3中手骨	R	Bp	14.8	撹乱	H11
第3中手骨	R	Bp	17.9	撹乱	H11
第3中手骨	R	B	11.0	撹乱	H11
第3中手骨	R	Bp	15.9	撹乱	H11
		B	14.7		
第4中手骨	L	GL	60.8	J−10　20〜30	H11
		DP	14.3		
		B	9.9		
		Bd	12.6		
第4中手骨	L	Bp	15.7	J−8　茶褐色灰混層	H11
		B	12.4		
第4中手骨	L	Bp	12.8	J−10　10〜20	H11
		B	9.0		
第4中手骨	L	Bp	16.5	J−9　灰混層	H11
		B	12.5		
第4中手骨	L	Bp	16.2	J−9　遺構上西	H11
		B	12.8		
第4中手骨	L	Bp	13.1	撹乱	H11
		B	10.8		
第4中手骨	L	B	11.0	撹乱	H11
第4中手骨	R	Bp	12.2	撹乱	H11
第4中手骨	R	Bp	16.4	J−9　遺構上西	H11
		B	14.9		
第4中手骨	R	Bp	16.1	J−8　茶褐色灰混層	H11
		B	12.0		
第4中手骨	R	Bp	13.2	撹乱	H11
		B	9.6		
第4中手骨	R	Bp	12.9	撹乱	H11
		B	9.6		
寛骨	L	LA	37.6	撹乱	H11
寛骨	L	SH	16.3	撹乱	H11
		LFo	31.4		
		LA	27.9		
大腿骨	R	Bp	55.2	J−10　20〜30	H11
大腿骨	R	SD	14.1	撹乱	H11
大腿骨	R	Bd	42.8	J−10　20〜30	H11
		BT	21.8		
脛骨	L	SD	16.5	撹乱	H11
脛骨	L	SD	18.4	撹乱	H11
脛骨	L	SD	19.4	I-8　茶褐色土層　20〜30	H11
脛骨	L	SD	17.4	撹乱	H11
脛骨	L	Bd	30.0	J−8　茶褐色灰混層	H11
脛骨	L	Bd	33.1	撹乱	H11
脛骨	R	Bp	44.0	J−10　20〜30	H11
脛骨	R	SD	11.3	撹乱	H11
脛骨	R	SD	19.2	撹乱	H11
		Bd	29.3		
脛骨	R	SD	16.7	撹乱	H11
脛骨	R	SD	16.3	撹乱	H11
脛骨	R	SD	14.3		H11
脛骨	R	SD	17.0	撹乱	H11
距骨	L	GLl	36.1	J−8　茶褐色灰混層	H11
		GLm	33.1		
距骨	L	GLl	36.8	J−9　遺構上西	H11
		GLm	33.1		
距骨	L	GLm	34.9	J−8　茶褐色灰混層	H11
距骨	L	GLm	33.0	J−9　遺構上西	H11

第101表　イノシシ・ブタ計測値一覧２

部位	LR	計測位置	計測値（㎜）	出土位置	年度
距骨	R	GLm	32.9	撹乱	H11
距骨	R	GLm	32.7	J−8　茶褐色灰混層	H11
第3中足骨	L	B	9.3	I−6　遺構東	H11
第3中足骨	L	Bp	13.0	J−11　20〜30	H11
		B	10.1		
第3中足骨	R	Bp	14.0	I−8　茶褐色灰混層	H11
第3中足骨	R	Bp	13.9	撹乱	H11
		B	11.4		
第3中足骨	R	Bp	15.9	J−9　灰混層	H11
		B	12.2		
第4中足骨	L	Bp	14.7	撹乱	H11
第4中足骨	L	Bp	14.4	J−9　遺構上西	H11
		B	14.0		
第4中足骨	L	B	9.5	撹乱	H11
第4中足骨	L	B	12.8	I−8　灰混層	H11
第4中足骨	L	Bp	14.5	撹乱	H11
		B	12.4		
第4中足骨	L	Bp	10.0	撹乱	H11
		B	7.2		
第4中足骨	L	Bp	14.2	I−8　茶褐色灰混層	H11
		B	11.3		
第4中足骨	L	Bp	13.9	撹乱	H11
		B	11.1		
第4中足骨	L	Bp	14.1	I−8　灰混層	H11
		B	12.5		
第4中足骨	R	GL	70.8	J−9　遺構上西	H11
		Bp	13.5		
		B	11.5		
		Bd	13.8		
第4中足骨	R	Bp	14.6	撹乱	H11
第4中足骨	R	B	12.4	J−8　茶褐色灰混層	H11
第4中足骨	R	Bp	14.4	J−9　遺構上西	H11
		B	12.6		
第4中足骨	R	Bp	14.0	撹乱	H11
		B	11.0		
第4中足骨	R	Bp	15.1	J−8　茶褐色灰混層	H11
		B	13.0		
第4中足骨	R	Bp	14.3	撹乱	H11
		B	11.8		
基節骨	不明	GL	27.1	J−8　茶褐色灰混層	H11
		Bp	12.2		
		SD	9.8		
		Bd	10.3		
基節骨	不明	GL	31.5	撹乱	H11
		Bp	16.7		
		SD	13.0		
		Bd	15.3		
基節骨	不明	GL	33.6	J−9　灰混層	H11
		Bp	16.2		
		SD	12.7		
		Bd	15.4		
基節骨	不明	SD	12.2	撹乱	H11
		Bd	15.3		
基節骨	不明	SD	12.2	撹乱	H11
		Bd	13.5		
基節骨	不明	SD	11.5	J−8　茶褐色灰混層	H11
		Bd	13.7		
基節骨	不明	SD	13.9	J−9　灰混層	H11
		Bd	15.6		
基節骨	不明	SD	13.7	J−8　茶褐色灰混層	H11
		Bd	15.8		
基節骨	不明	SD	12.5	J−8　茶褐色灰混層	H11
		Bd	14.1		
基節骨	不明	SD	12.9	I−8　灰混層	H11
		Bd	15.3		
基節骨	不明	SD	9.4	撹乱	H11
		Bd	10.8		
基節骨	不明	GL	32.0	J−9　白砂混層	H11
		Bd	15.7		
		SD	12.2		
		Bd	14.0		
中節骨	不明	SD	6.1	J−9　遺構上西	H11
		Bd	7.2		

第102表　イヌ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値（㎜）	出土位置	年度
仙椎	—	BFcr	20	B−5　シーリ内黒褐色土層	H19
		HFcr	9.7		
		PL	30.8		
大腿骨	R	GL	135.1	B−5　シーリ内黒褐色土層	H19
		Bp	30.4		
		SD	10.7		
		Bd	24.4		
		DC	14.3		
脛骨	R	GL	138.8	B−5　シーリ内黒褐色土層	H19
		Bp	25.8		
		SD	9.8		
		Bd	18.4		
上腕骨	L	SD	8.9	J−8　茶褐色灰混層	H11
寛骨	L	SH	16.1	J−9　灰混層	H11
大腿骨	R	SD	11.1	撹乱	H11
脛骨	R	SD	11.0	J−9　遺構上西	H11
脛骨	R	SD	10.4	J−9　灰混層	H11
踵骨	L	GL	41.6	撹乱	H11
		GB	16.9		
第三中足骨	L	Bp	7.3	撹乱	H11
基節骨	不明	GL	26.1	撹乱	H11
		Bp	9.8		
		SD	5.1		
		Bd	6.9		
基節骨	不明	GL	25.7	J−8　茶褐色灰混層	H11
		Bp	9.6		
		SD	5.2		
		Bd	7		
基節骨	不明	SD	4.1	J−8　茶褐色灰混層	H11
		Bd	6.2		
基節骨	不明	GL	26.3	撹乱	H11
		Bp	10.1		
		SD	4.8		
		Bd	6.7		
基節骨	不明	GL	22.0	撹乱	H11
		Bp	8.8		
		SD	4.8		
		Bd	7.1		

第103表　ウマ計測値一覧

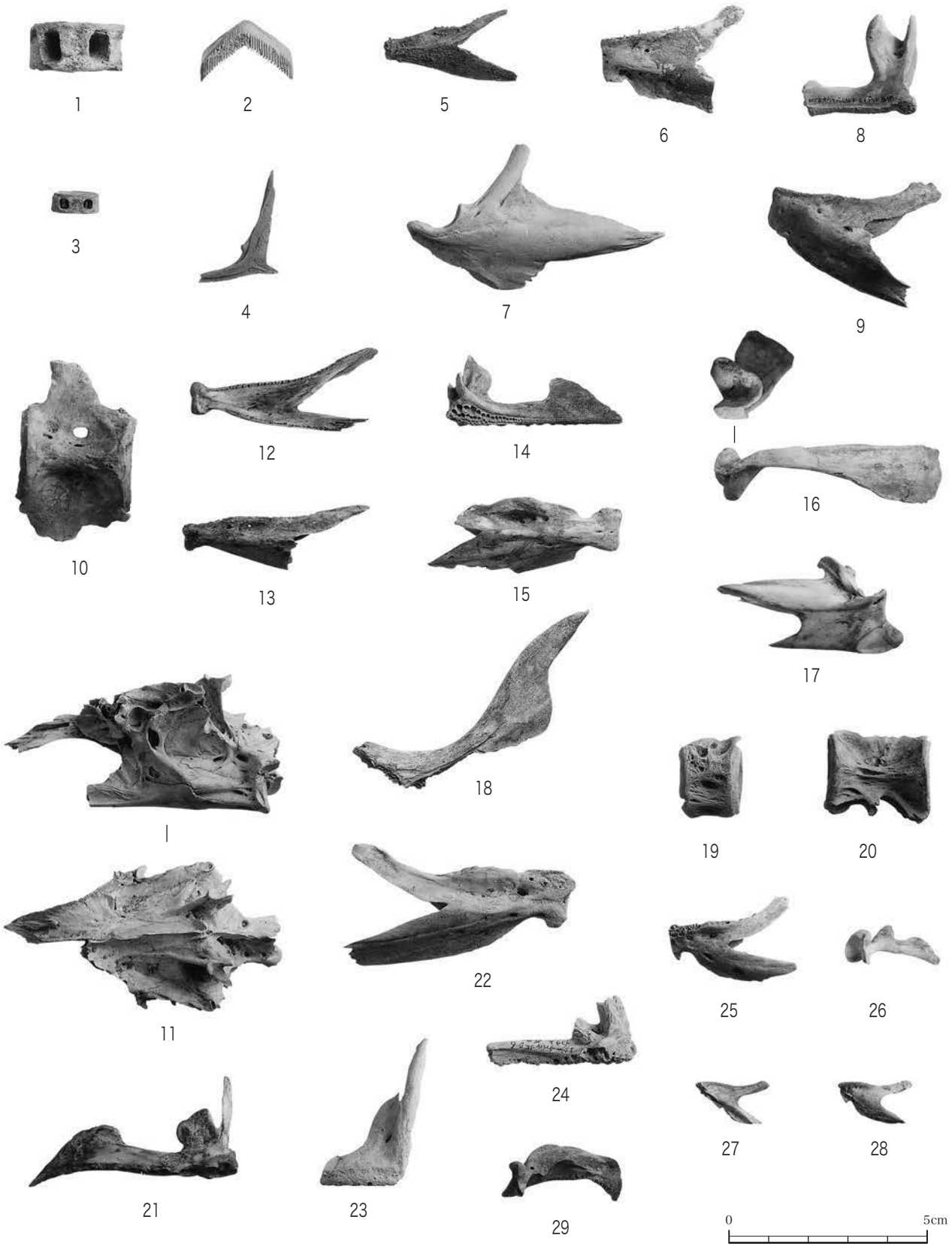
部位	LR	計測位置	計測値（㎜）	出土位置	年度
橈骨	L	Bp	74.1	石積み6　裏込め内	H19
		BFp	65.6		
尺骨	L	DPA	53.4	石積み6　裏込め内	H19
M2?	L	長	24	撹乱	H11
		幅	21.4		
		歯冠高	44.4		

第104表　ヤギ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値（mm）	出土位置		年度
M1(上顎)	L	長	11.7	J−9	灰混層	H11
		幅	9.6			
肩甲骨	R	SLC	14.6	J−8	茶褐色灰混層	H11
上腕骨	R	SD	11.2	撹乱		H11
上腕骨	R	SD	9.3	J−8	茶褐色灰混層	H11
上腕骨	R	BT	23.3	J−9	遺構上西	H11
		Bd	23.7			
橈骨	L	Bp	24.8	撹乱		H11
橈骨	R	Bp	22.2	撹乱		H11
橈骨	R	SD	11.6	撹乱		H11
		Bp	22.7			
尺骨	L	BPC	13.8	J−9	灰混層	H11
		DPA	20			
中手骨	L	SD	11.2	J−9	遺構上西	H11
		Bp	19.5			
中手骨	L	SD	11.1	J−8	茶褐色灰混層	H11
中手骨	L	SD	12.1	J−9	遺構上西	H11
中手骨	L	SD	11.1	J−9	灰混層	H11
中手骨	R	Bp	20.6	J−8	茶褐色灰混層	H11
中手骨	R	SD	11.9	I−9	南側	H11
大腿骨	R	Bp	33	I−7	30〜40	H11
大腿骨	R	SD	13.6	撹乱		H11
脛骨	L	SD	9.7	J−8	茶褐色灰混層	H11
脛骨	L	SD	10.6	撹乱		H11
脛骨	R	SD	11.6	J−8	茶褐色灰混層	H11
		Bd	21.8			
中足骨	L	GL	82.8	J−9	遺構上西	H11
		Bp	16.9			
		SD	9.4			
		Bd	20.2			
中足骨	R	Bp	16.2	撹乱		H11
		SD	9.1			
中足骨	R	Bp	16.9	撹乱		H11
		SD	10.3			
基節骨	不明	GL	27.9	J−8	茶褐色灰混層	H11
		Bp	9.1			
		SD	7.2			
		Bd	9.0			
基節骨	不明	GL	30.8	J−9	遺構上西	H11
		Bp	9.5			
		SD	7.5			
		Bd	9.5			
ヤギ?肩甲骨	R	SLC	11.9	J−9	灰混層	H11

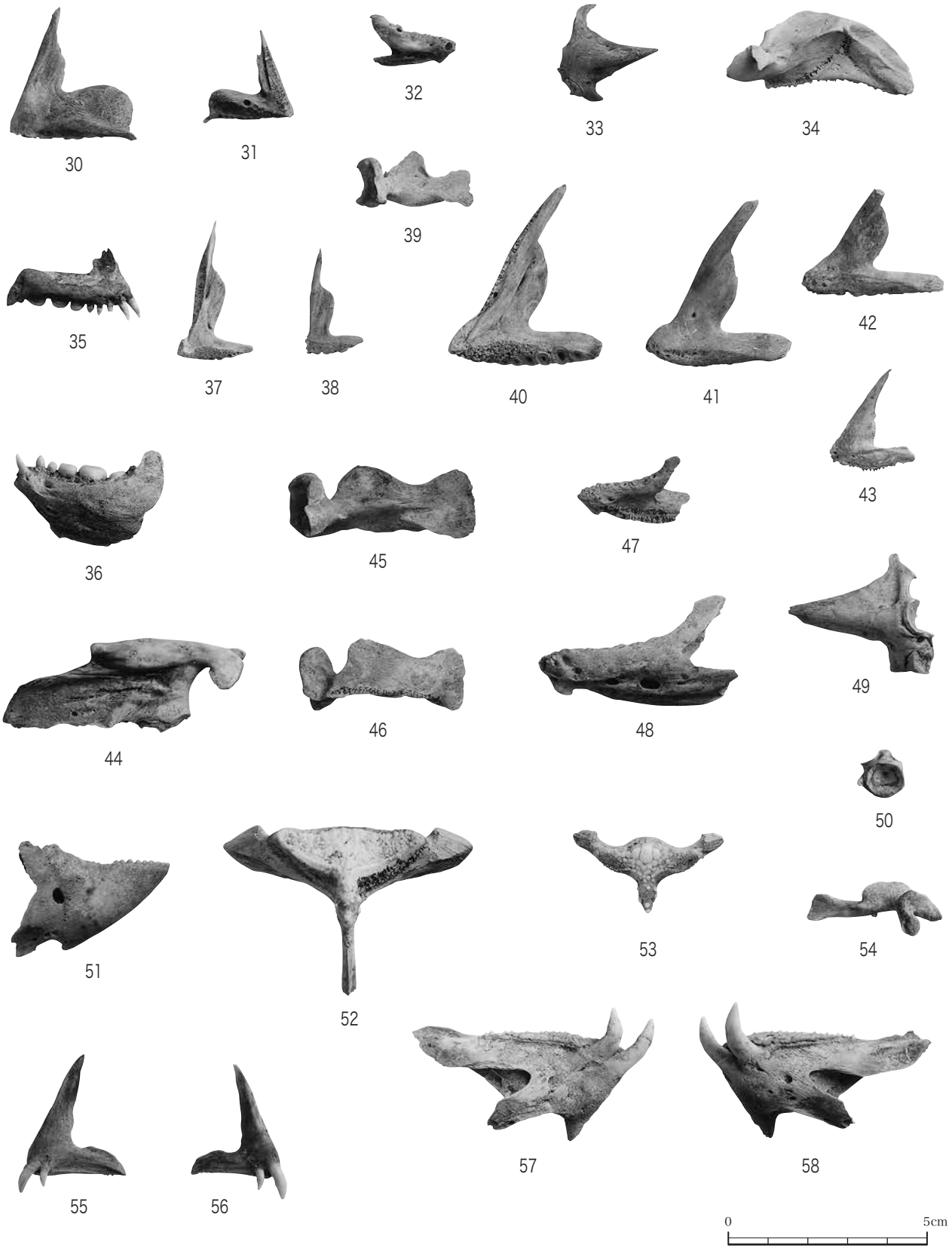
第105表　ウシ計測値一覧

部位	LR	計測位置	計測値（mm）	出土位置		年度
M1(上顎)	R	長	26.9	E−4	5層	H19
		幅	20.8			
M2(上顎)	R	長	31.4	E−4	5層	H19
		幅	22.8			
尺骨	L	SDO	61.3	E−4	5層	H19
		DPA	76.1			
		LO	115.5			
		BPC	49.6			
中手骨	R	GL	188.6	E−4	5層	H19
		Bp	65.2			
		SD	36.3			
		Bd	64.9			
膝蓋骨	L	GL	68.1	E−4	5層	H19
		GB	55.4			
中足骨	L	GL	216	E−3	5層	H19
		Bp	51.9			
		SD	30.2			
		Bd	59			
中足骨	R	SD	23.9	E−4	5層	H19
基節骨	不明	SD	25.9	D31	5層	H19
		Bd	29.6			
基節骨	不明	SD	24.3	E−3	5層	H19
		Bd	26.3			
中節骨	不明	GL	42.1	E−4	5層	H19
		Bp	31.3			
		SD	22.3			
		Bd	22.4			
中節骨	不明	Bp	29.2	D−3	5層	H19
		SD	21.4			
P(上顎)	R	長	15.1	撹乱		H11
		幅	19.9			
		歯冠高	17.8			
M2(上顎)	R	長	30	撹乱		H11
		幅	22.3			
		歯冠高	44.6			
M1(下顎)	R	長	26.8	撹乱		H11
		幅	13			
脛骨	R	SD	36.3	J−9	灰混層	H11
基節骨	不明	GL	61.5	撹乱		H11
		Bp	31.9			
		SD	26			
		Bd	29.4			
基節骨	不明	Bd	29.2	J−8	茶褐色灰混層	H11
基節骨	不明	GL	58.2	J−9	遺構上西	H11
		Bp	32.8			
		SD	26			
		Bd	27.7			
基節骨	不明	GL	59.7	撹乱		H11
		Bp	25			
		SD	21.4			
基節骨	不明	Bp	34.8	撹乱		H11



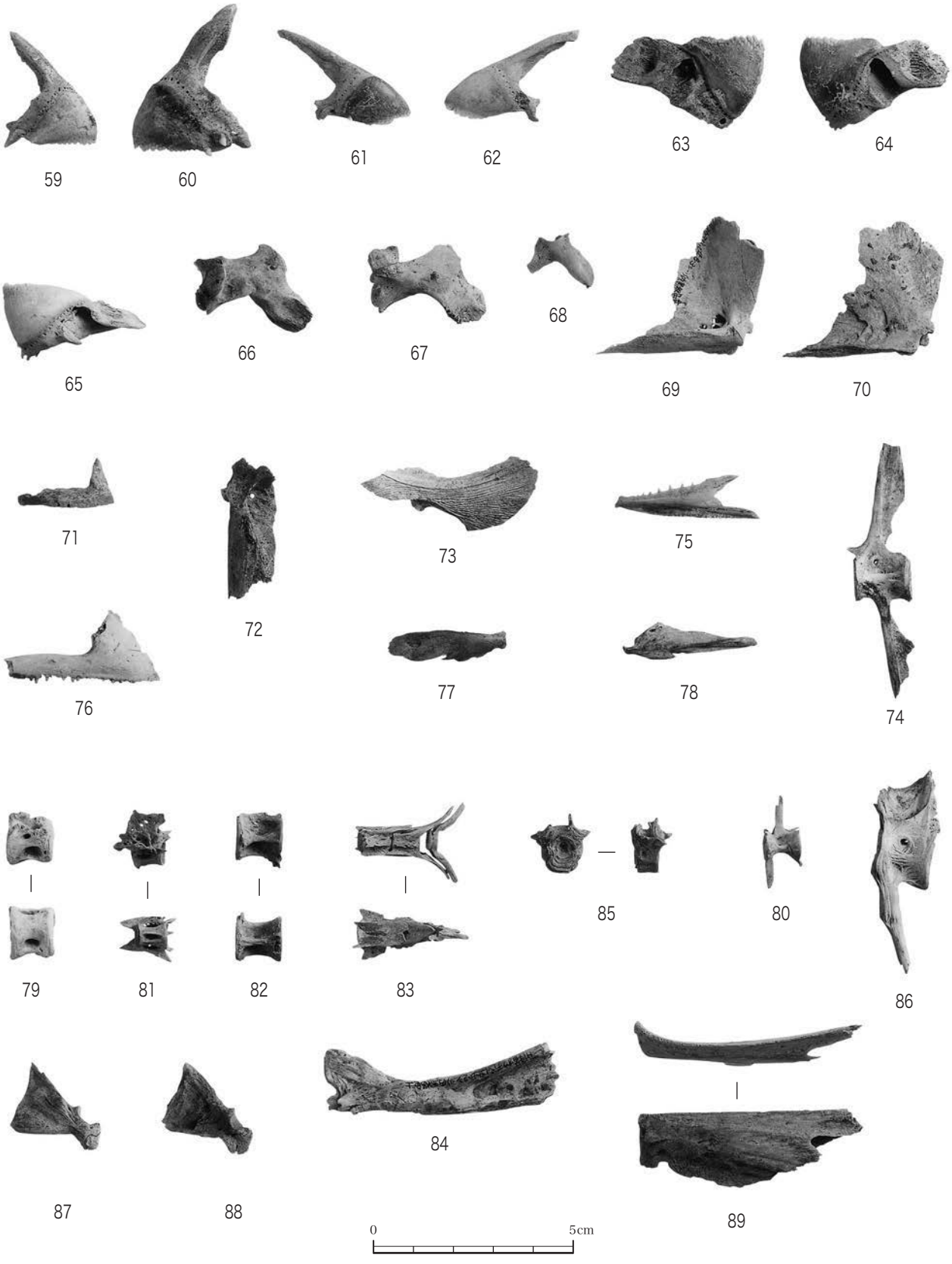
図版151　脊椎動物遺体1　魚（1）

サメ類(メジロザメ科)　1. 椎骨　**トビエイ科**　2. 歯板　**エイ類**　3. 椎骨　**イットウダイ亜科**　4. 左 前鰓蓋骨
マツカサウオ科　5. 左 歯骨　**アジ科(大型)カスミアジ近似**　6. 左 歯骨　**アジ科ギンガメアジ属**　7. 右 角骨
アジ科(大型)イトヒキアジ近似　8. 左 前上顎骨　9. 左 歯骨　**アジ科(大型)**　10. 尾骨
ハタ科　11. 頭蓋骨　**ハタ科マハタ型**　12. 右 歯骨　13. 左 歯骨　**ハタ科スジアラ型**　14. 右 前上顎骨　15. 右 歯骨
ハタ科　16. 左 主上顎骨　17. 左 角骨　18. 左 擬鎖骨　**シイラ属**　19. 腹椎　20. 尾椎
フエダイ科　21. 右 前上顎骨　22. 右 歯骨　**コショウダイ類**　23. 右 前上顎骨　24. 左 前上顎骨　25. 左 歯骨
コショウダイ類似　26. 右 主上顎骨　27. 右 歯骨　28. 左 歯骨　**クロダイ属**　29. 右 主上顎骨



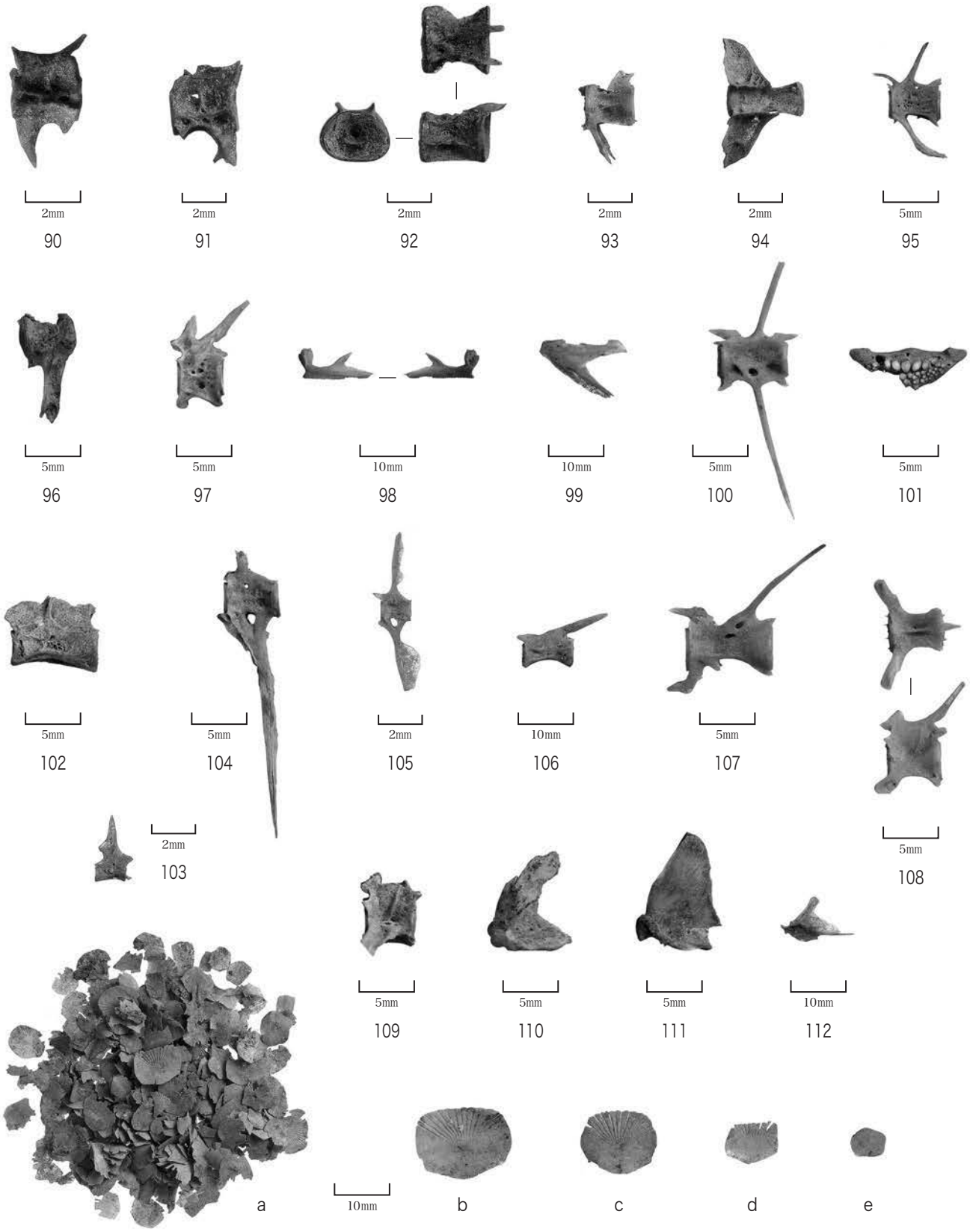
図版152　脊椎動物遺体２　魚（２）

クロダイ属　30. 左 前上顎骨　31. 左 前上顎骨　32. 右 歯骨　33. 右 角骨　　**ヨコシマクロダイ属**　34. 右 主上顎骨
35. 右 前上顎骨　36. 左 歯骨　　**メイチダイ属**　37. 右 前上顎骨　38. 左 前上顎骨
メイチダイ属(近似)　39. 右 主上顎骨　　**フエフキダイ属(ハマフエフキ型)**　40. 右 前上顎骨　41. 左 前上顎骨
フエフキダイ属アマミフエフキ型　42. 左 前上顎骨　　**フエフキダイ科?**　43. 右 前上顎骨　　**フエフキダイ属**　44. 右 口蓋骨
フエフキダイ科　45. 右 主上顎骨　46. 左 主上顎骨　47. 右 歯骨　48. 左 歯骨　49. 左 角骨　50. 第１椎骨
イシダイ科　51. 右 歯骨　　**ベラ科シロクラベラ型**　52. 下咽頭骨　　**ベラ科(B)**　53. 下咽頭骨
ベラ科　54. 左 主上顎骨　55. 右 前上顎骨　56. 左 前上顎骨　57. 右 歯骨　58. 左 歯骨



図版153　脊椎動物遺体３　魚（３）

アオブダイ属A　59. 右 前上顎骨　60. 左 前上顎骨　63. 右 歯骨　64. 左 歯骨
アオブダイ属B　61. 右 前上顎骨　62. 左 前上顎骨　65. 左 歯骨　**ブダイ科**　66. 右 主上顎骨　67. 左 主上顎骨
68. 右 角骨　69. 右 方骨　70. 左 方骨　**ニザダイ科**　71. 右 前上顎骨　72. 右 舌顎骨　73. 左 擬鎖骨
ニザダイ科（テングハギ型）　74. 尾椎　**カマス属**　75. 左 歯骨　**カツオ類スマ**　76. 右 前上顎骨
スマ　77. 右 歯骨　**カツオ類スマ**　78. 右 角骨　**スマ**　79. 腹椎　80. 尾椎　**カツオ類**　81. 腹椎
カツオ　82. 腹椎　**カツオ類**　83. 尾丙部　**モンガラカワハギ科**　84. 腰帯　85. 腹椎　86. 尾椎
ハリセンボン科？　87. 左 角骨　88. 右 角骨　**未同定**　89. 左 歯骨



図版154　脊椎動物遺体４　魚（4）

ウナギ属　90. 腹椎　91. 尾椎　　**ニシン科**　92. 腹椎　93. 尾椎　　**ボラ科**　94. 腹椎　95. 尾椎
トビウオ　96. 腹椎　97. 尾椎　　**アジ科メアジ近似種**　98. 左 前上顎骨　99. 左 歯骨　100. 尾椎
ベラ科(B)　101. 下咽頭骨　　**アイゴ属**　102. 腹椎　103. 腹椎　104. 尾椎　105. 尾椎
カマス属　106. 腹椎　107. 尾椎　　**ダツ目未同定**　108. 腹椎　109. 腹椎
未 同 定　110. 左 角骨　111. 左 角骨　112. 左 角骨　　**a～e**. 鱗

113

114

115

0 5cm

116

117

118

119

120

121

122

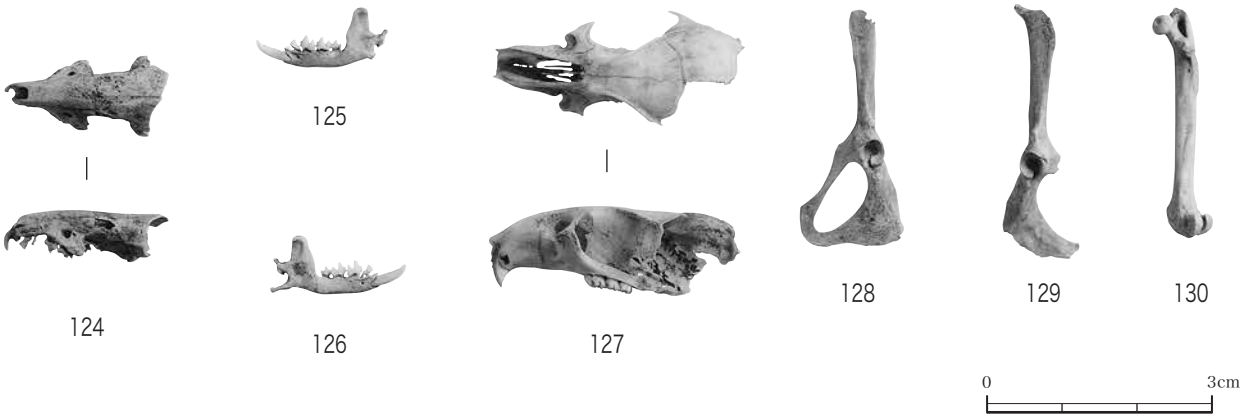
123

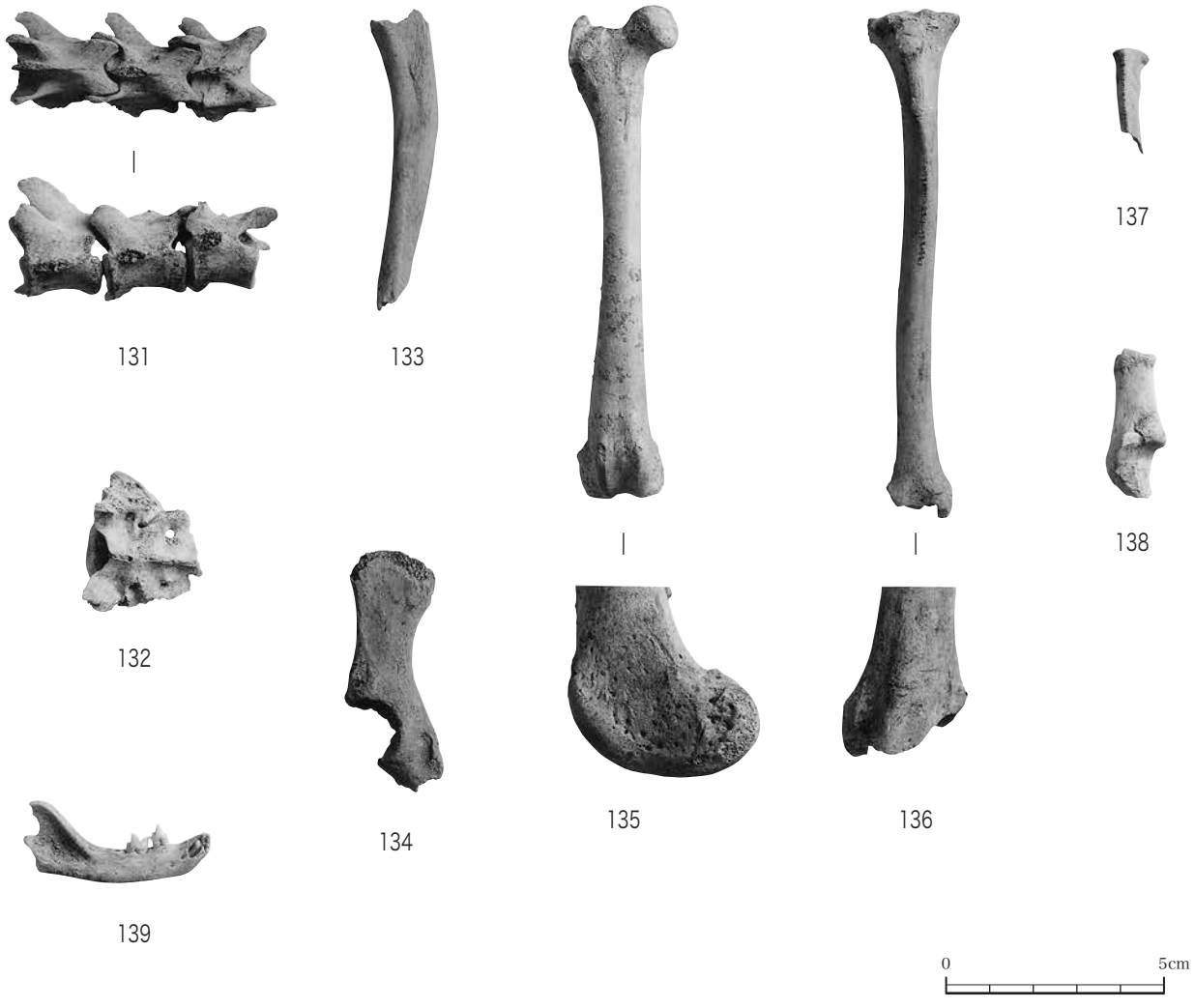
0 3cm

図版155　脊椎動物遺体５

上段　**ウミガメ**　113. 烏口肩甲骨　114. 指骨　115. 助骨板

下段　**ニワトリ**　116. 頭蓋骨　117. 第２～５胸椎　118. 右 烏口骨　119. 左 肩甲骨　120. 右 上腕骨
121. 左 中手骨　122. 左 大腿骨　123. 右 中足骨





図版156　脊椎動物遺体６

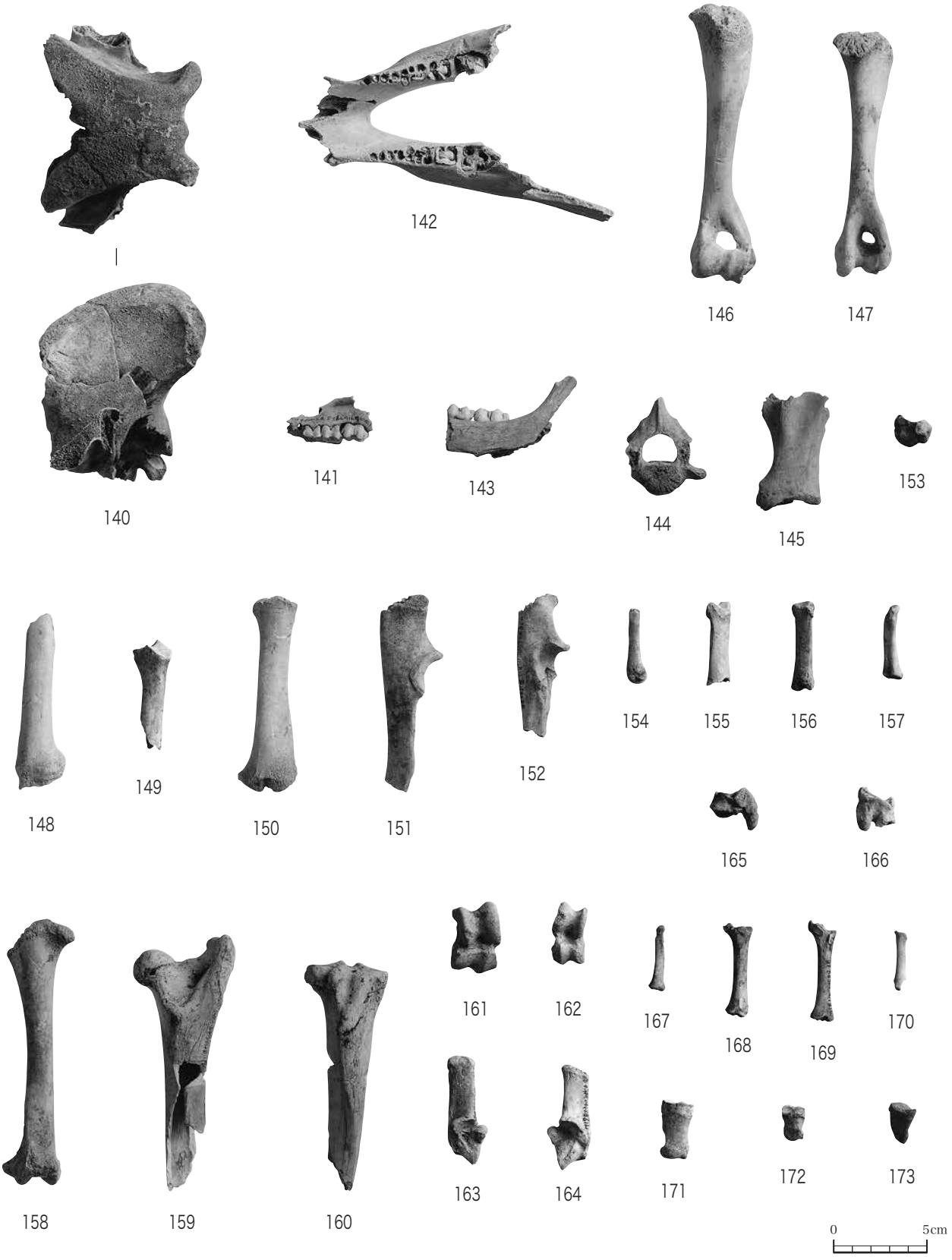
上段　**トガリネズミ科**　124. 頭蓋骨　125. 左 下顎骨　126. 右 下顎骨

　　ネズミ科　127. 頭蓋骨　128. 左 寛骨　129. 右 寛骨　130. 右 大腿骨

下段　**イ　ヌ**　131. 腰骨　132. 仙椎　133. 左 上腕骨　134. 左 寛骨　135. 右 大腿骨　136. 右 脛骨

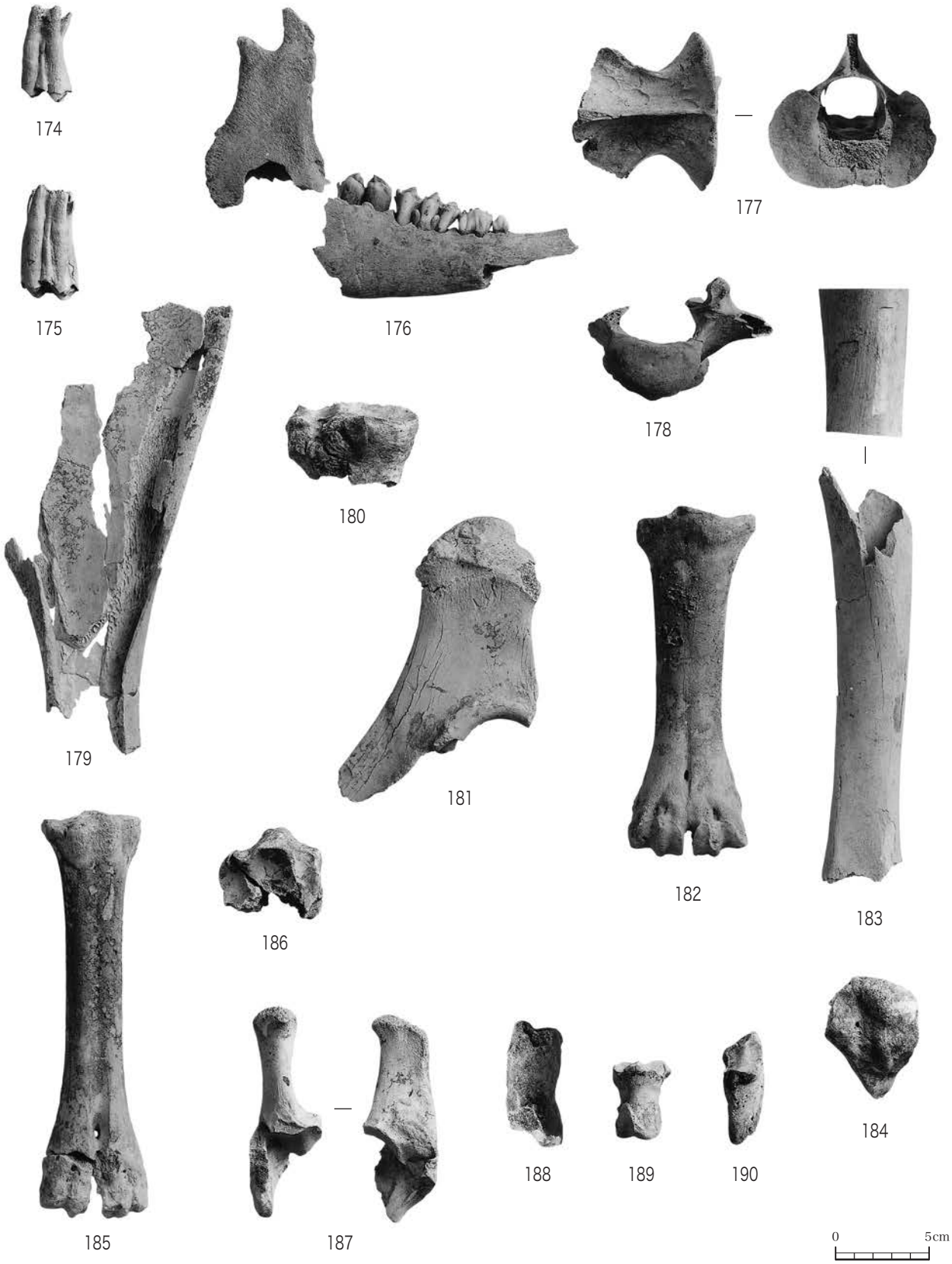
　　137. 左 第３中足骨　138. 左 踵骨

　　ネ　コ　139. 右 下顎骨



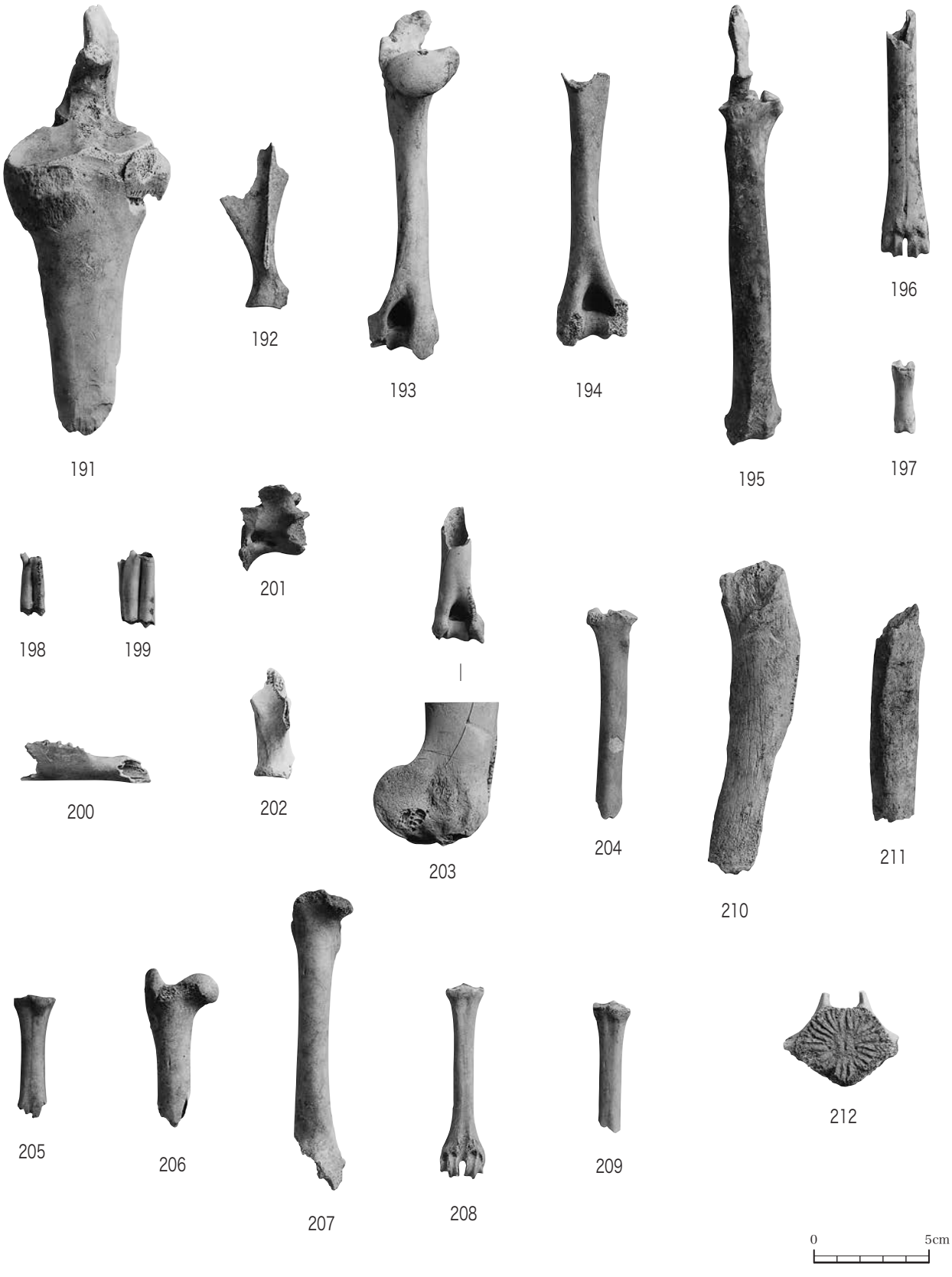
図版157　脊椎動物遺体７

イノシシ/ブタ　140. 頭蓋骨　141. 左 上顎骨　142. 下顎骨　143. 左 下顎骨　144. 頚骨　145. 左 肩甲骨
146. 左 上腕骨　147. 右 上腕骨　148. 左 橈骨　149. 右 橈骨　150. 右 橈骨　151. 左 尺骨
152. 右 尺骨　153. 右 第４手根骨　154. 左 第２中手骨　155. 左 第３中手骨　156. 右 第４足手骨
157. 右 第５中手骨　158. 右 大腿骨　159. 左 大腿骨　160. 右 脛骨　161. 左 距骨　162. 右 距骨
163. 左 踵骨　164. 右 踵骨　165. 右 中心足根骨　166. 右 第４中根骨　167. 左 第２中足骨
168. 左 第3中足骨　169. 左 第4中足骨　170. 右 第5中足骨　171. 基節骨　172. 中節骨　173. 末節骨



図版158　脊椎動物遺体８

ウ シ　174. 右 M1（上顎）　175. 右 M2（上顎）　176. 右 下顎骨　177. 軸椎　178. 腰椎　179. 左 肩甲骨
180. 左 橈骨　181. 左 尺骨　182. 右 中手骨　183. 右 脛骨　184. 左 膝蓋骨　185. 左 中足骨
186. 右 第４中心足根骨　187. 左 踵骨　188.基節骨　189. 中節骨　190. 末節骨



図版159　脊椎動物遺体９

ウ　マ　191. 左 橈骨，左 尺骨
シ　カ　192. 左 肩甲骨　193. 左 上腕骨　194. 右 上腕骨　195. 左 橈骨，左 尺骨　196. 右 中手骨　197. 基節骨
ヤ　ギ　198. 左 M1（上顎）　199. 左 M2（上顎）　200. 右 下顎骨　201. 軸椎　202. 右 肩甲骨　203. 右 上腕骨
204. 右 橈骨　205. 左 中手骨　206. 右 大腿骨　207. 右 大腿骨　208. 左 中足骨　209. 右 中足骨
ジュゴン　210. 肋骨　211. 肋骨
イルカ・クジラ類　212. 椎骨

第27節　シーリ遺構内の自然遺物

1. 資料の概要と処理方法

菅原広史（浦添市教育委員会）・仲座久宜

平成19（2007）年度調査において検出したシーリ遺構内の堆積土には、17世紀前半を中心とする陶磁器に伴い、膨大な量の自然遺物が出土している。特に魚骨の量は多く、調査時にピックアップが困難な状況であったことから、遺構内の堆積土全量を土嚢袋に回収して持ち帰り、分析を行うこととした。本報告では、このシーリ遺構内から出土した自然遺物を一括資料として報告する。

口径110㎝・底径90㎝・深さ60㎝の規模の本遺構からは、土嚢袋32点分の土壌サンプルが採集された。サンプルは採取位置によって３つの種別に分けている。遺構の中心を通るグリッドラインを境に、それぞれB-４グリッド・B-５グリッド側から採取されたものと、グリッドラインに沿って設定されたベルトから採取されたサンプルの３種である。また、これらは更に層位別に細分される。ただし調査の都合上、ベルト採集サンプルは、黒褐色土層、赤褐色土層、木炭層、灰白色土層、底面黒褐色土層の５つに細別することができたが、B-４・B-５グリッド採取のサンプルは、黒褐色土層、木炭層の二細別でのみ取り上げている。これらをもとに、取り上げ種別・層位それぞれにおいて、採集した袋ごと便宜上の番号を付して作業を進めることとした（第106表）。

１．天日干しの状況

２．土砂の計量

３．フローテーションによる遺物の回収

４．遺物の同定作業

図版 160　フローテーションの状況

第106表　シーリ遺構内土壌サンプル一覧

グリッド	遺　構	土　層	日　付	重量(g)	容量(ℓ)	分析量①(ℓ)	分析量②(ℓ)	保存量(ℓ)	備　考
B–4+B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層①	20080219	4270	5.1	2.6	–	2.5	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層②	20080221	3370	4.7	4.7	–	–	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層③	20080221	5660	7.1	2.1	5	–	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層④	20080221	6130	8.3	3.3	–	5	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑤	20080222	3870	4.5	–	–	4.5	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑥	20080222	5460	7.4	2.4	5	–	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑦	20080225	6720	8.3	3.3	5	–	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑧	20080225	5590	7.4	2.4	–	5	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層⑨	20080226	6500	8	4	–	4	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層②	20080221	2870	4.5	4.5	–	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層③	20080225	6180	8.6	3.6	5	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層④	20080225	3250	4.2	4.2	–	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑤	20080225	4830	6.4	6.4	–	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑥	20080225	5030	6.9	1.9	–	5	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑦	20080226	5830	7.1	4.1	–	3	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑧	20080228	4650	6.5	6.5	–	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑨	20080228	5480	7.2	7.2	–	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑩	20080228	5710	8	3	5	–	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層⑪	20080228	3860	5.05	5.05	–	–	
B–5	シーリ遺構内	木炭層	20080214	6300	7.9	–	4	3.9	
B–5	シーリ遺構内アゼ	灰白色土層	20080228	6490	9	–	5	4	
B–5	シーリ遺構内アゼ	黒褐色土層	20080228	2850	4	–	2	2	
B–5	シーリ遺構内アゼ	赤褐色土層①	20080221	5350	7.4	–	4	3.4	
B–5	シーリ遺構内アゼ	赤褐色土層②	20080228	690	1	1	–	–	
B–5	シーリ遺構内アゼ	木炭層①	20080228	6860	8.3	3.3	5	–	
B–5	シーリ遺構内アゼ	木炭層②	20080228	6180	8.6	8.6	–	–	
B–5	シーリ遺構内アゼ	木炭層③	20080228	6000	7.4	7.4	–	–	
B–5	シーリ遺構内アゼ	木炭層④	20080228	3840	5.2	–	–	5.2	
B–5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層①	20080228	7900	9.9	4.9	5	–	
B–5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層②	20080228	5930	9.1	4.1	–	5	
B–5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層③	20080228	5630	8	8	–	–	

※土層の○数字は土嚢１袋に対し、任意に付加したもの
※「分析量①」は沖縄県立埋蔵文化財センターで分析、「分析量②」は黒住氏へ分析依頼した分量

第107表　土壌サンプルの総量および層序別分析量

グリッド	遺　構	土　層	重量(g)	容量(ℓ)	分析量①(ℓ)	分析量②(ℓ)	保存量(ℓ)	備　考
B–4+B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層	4270	5.1	2.6	–	2.5	
B–4	シーリ遺構内	黒褐色土層	43300	55.7	22.2	15	18.5	
B–5	シーリ遺構内	黒褐色土層	47690	64.45	46.45	10	8	
B–5	シーリ遺構内	木炭層	6300	7.9	–	4	3.9	
B–5	シーリ遺構内アゼ	灰白色土層	6490	9	–	5	4	
B–5	シーリ遺構内アゼ	黒褐色土層	2850	4	–	2	2	
B–5	シーリ遺構内アゼ	赤褐色土層	6040	8.4	1	4	3.4	
B–5	シーリ遺構内アゼ	木炭層	22880	29.5	19.3	5	5.2	
B–5	シーリ遺構内アゼ	底面黒褐色土層	19460	27	17	5	5	
合　計			159280	211.05	108.55	50	52.5	

土壌サンプルは、天日による乾燥後（図版160－1）、総重量159.28kg、総容量211.05リットルとなった（第107表）。この中から種別・層位ごとに一定量ずつ保存分を取り分けたのち、残りの土壌について浮遊採取法（フローテーション法）および水洗選別法（図版160－3）による分析の対象とした。対象としたサンプルの大半は沖縄県立埋蔵文化財センターにて分析作業を進めたが、貝類・ムシ類については、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏・荻野康則氏に分析を依頼した。なお、それぞれの分析・保存の量は第107表のとおりである。

沖縄県立埋蔵文化財センターで行った水洗選別には、5㎜・2.5㎜・1㎜メッシュの篩を用いて沈殿した遺物（ヘビー・フラクション＝ＨＦ）を回収している。一方、浮遊遺物（ライト・フラクション＝ＬＦ）の回収には、熱帯魚飼育用の網（0.5㎜未満）を用いた。上記作業によって得られたＨＦ・ＬＦ資料を、資料整理作業員を中心に骨類・植物遺体・糞石・炭化物・ムシ類など種類ごとに抽出した（図版160－4・第113表）。抽出した資料のうち、骨類に関しては菅原広史が同定等の分析を行い、人骨（歯）については片桐千亜紀・土肥直美氏に、種実類・糞石はパリノ・サーヴェイにより同定・分析が行われた。

2．貝類遺体等（シーリ遺構内）

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

①土壌サンプルの内容と処理

このシーリ遺構については第４章第２節６に、サンプル採取状況等に関しては本節１において詳細に記されている。その年代は、およそ17世紀前半頃である。層序の概略は、上部から黒褐色土層・木炭層・灰白色土層・赤褐色土層・底面黒褐色土層に区分されている（第41図3）。

これらの層から、約２リットルの土壌を分割し、第108表に示した合計12サンプルを対象とした。これらを、70℃で２日間以上乾燥させ、計量の後、水洗選別を行い、沈殿部分は最小1.0㎜メッシュまで、浮遊部分は0.25㎜未満のネットで回収するという報告者の従来の方法で処理した。

9.5㎜メッシュに残ったものは、可能な限り分類し、その体積と重量を計測した。浮遊部分でも、貝類遺体以外も分類／カウントした。

第108表　シーリ遺構内の土壌サンプルの詳細

グリッド等 作業コード		灰色土層 B-5／アゼ キ-1	黒褐色土層 B-5／アゼ ク-1	黒褐色土層 B-4 イ-1	黒褐色土層 B-4 ウ-1	黒褐色土層③ B-4 ア-1	黒褐色土層 B-5 エ-1	黒褐色土層⑩ B-5 オ-1	赤褐色土層① B-5／アゼ ケ-1	赤褐色土層① B-5／アゼ ケ-2	木炭層① B-5／アゼ コ-1	木炭層 B-5 カ-1	底面黒褐色土層① B-5／アゼ サ-1
全　体	cc	2200	2000	1850	1850	2000	2000	1950	2000	1950	1750	1900	1900
	g	1550	1220	1290	1370	1460	1350	1370	1360	1420	1360	1430	1410
＞9.5 mm	cc/g	220/220	300/125	150/60	180/95	150/95	200/76	75/38	150/64	180/104	150/105	150/78	200/106
魚骨	no.(鱗:cc)/g	40(3:70)/25	60[2B](3:100)/33	29(60)/18	14(2:15)/5	25[2B](25)/8	39[1B](5:60)/20	17(30)/8	18(30)/8	19(1:40)/8	11(10)/5	8(2:10)/3	24[1B](30)/9
獣骨	no.(cc)/g					?2(1)/–			1(–)/1			1(–)/–	
鳥骨	no.(cc)/g								1(–)/–				
卵殻?	no.(cc)/g					?1(1)/–				2(1)/–			
貝類	no.(cc)/g			2(3)/3	1(–)/–	4(10)/4	1(–)/–	1(–)/–		4(15)/4	2(5)/4		
糞石?	no.(cc)/g	41(129)/47	42(70)/46	9(25)/12	13(50)/36	7(59)/56	18(35)/13	3(8)/6		9(25)/13	18(80)/33	3(2)/4	8(20)/26
炭	no.(cc)/g		10(12)/4	5(5)/2	6(2)/1	14(15)/5	10(8)/2	6(4)/2	4(3)/–	5(10)/6	14(20)/8	21(30)/9	2(2)/–
鉄	no.(cc)/g			?1(–)/2			?1(–)/–	?1(–)/–		2(10)/8	2(2)/4		1(–)/2
瓦?	no.(cc)/g												1(10)/14
焼け土	no.(cc)/g												2(8)/8
枝サンゴ礫	no.(cc)/g												1(–)/3
礫(非石灰岩)	no.(cc)/g	1(2)/6	1(–)/1				4(5)/5	1(10)/16	1(1)/2	3(3)/3		3(10)/14	
礫(石灰岩)	no.(cc)/g		2(5)/8	1(3)/6			2(2)/2			5(50)/41	4(15)/16		6(25)/28
9.5 – 4.0 mm		400/175	400/180	400/182	270/127	290/133	370/166	180/87	350/176	320/149	200/112	200/119	300/146
4.0 – 2.0 mm		400/198	350/194	370/191	440/245	430/250	350/172	320/182	340/170	350/178	250/146	360/234	350/194
2.0 – 1.0 mm		480/250	400/227	385/228	380/244	200/264	385/228	520/318	360/198	370/214	260/184	420/306	360/217

B：焼け

第109表　シーリ遺構内土壌サンプルから抽出された貝類遺体等の詳細

堆積層	灰色土層							黒褐色土層							黒褐色土層⑥							黒褐色土層⑦							黒褐色土層③							黒褐色土層						
グリッド等	B－5／アゼ							B－5／アゼ							B－4							B－4							B－4							B－5						
作業コード	キ－1							ク－1							イ－1							ウ－1							ア－1							エ－1						
						HF/	LF/						HF/	LF/						HF/	LF/					HF/	LF/						HF/	LF/						HF/	LF/
メッシュサイズ等	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI
海産動物																																										
＊カンギク	1f					1		9cr					9		2					2		1	lb,lu				2		2,2b	1b	1b			6			1b				7	
＊カンギク(フタ)									3cr														1							5							7					
＊ハマグリの一種															lu/0					1																2f				1	
＊アラスジケマン																																			0/lu					1	
＊イソハマグリ															0/1					1															lu/0					1	
イワカワチグサ																																										
コオニノツノ?																														1ue			1									
カニモリガイ類																																										
アツキクスズメ	1					1																																				
アワムシロ																																										
海産巻貝(同定不能)																																										
クロミノエガイ																																										
トマヤガイ																																										
オキナワヒシガイ																																										
真珠光沢貝殻片																	1f		P												3f		P				1		P	1
造礁サンゴ片(枝)																																										
＊鱗					2		2											1		1												1		1						
＊魚骨					2		2																																			
海産有孔虫					2		2					1		1				1		1																					
石灰質無脊椎動物片?												3f		3																											
軽石?												2		2																											
陸産動物等 陸産貝類																																										
ハクサンベッコウ類似属					2mj(1c),4sj(3c)		6											1mjc		1												1mjc		1					1lj		1
ヒメベッコウ類似属																																										
ヒメコハクガイ類					1mjc		1											1sjc		1					1lj		1														
ホラアナゴマオカチグサ類												1ljc		1				2ac,1mjc		3											lac,2ljc,1sjc		4					1mj		1
ウスイロオカチグサ																		1lj		1																					
オオオカチョウジ?																		1mjc		1																					
オカチョウジ類似種												1sjc		1											1lj		1					2u,1w		2		1ab		1lj	1	1
オカチョウジ類(卵)					3		3					2		2				3		3					3		3					2		2						
バンダナマイマイ																																										
オキナワヤマタニシ																																										
ヒラシタラ					1u		1																																			
ツヤギセル																							1f			1															
キセルガイ(太)																									2u		2														
陸産貝類(同定不能)																																										
その他																																										
ヤスデ類(体節)			1			1				2	2		4											5		5														
ゾウムシ類					1		1																																			
蛹																		1		1					?1		?1													
貝形虫(陸水産?)					1		1																									1		1						
化石非造礁サンゴ																																										
炭化物(cc)					13		13					25		25				50		50					70		70					70		70					45		45
炭化物(g)					4		4					6		6				13		13					18		18					18		18					12		12
種子					2(1B)		2(IB)																																			
ウリ?					1		1																																			
炭化種子					0		0											0		0					0		0					0		0					0		0
糞石片?																																2		2					1		1
木片/根?																		7		7					1		1					13		13					1		1
根					0		0											0		0					0		0					0		0					0		0

堆積層	黒褐色土層⑩							赤褐色土層①							赤褐色土層							木炭層①							木炭層							底面黒褐色土層①						
グリッド等	B－5							B－5／アゼ							B－5／アゼ							B－5／アゼ							B－5							B－5／アゼ						
作業コード	オ－1							ケ－1							ケ－2							コ－1							カ－1							サ－1						
						HF/	LF/						HF/	LF/						HF/	LF/					HF/	LF/						HF/	LF/						HF/	LF/
メッシュサイズ等	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI	9.5	4.0	2.0	1.0	LF	MNI	MNI
海産動物																																										
＊カンギク	1					1		5					5		4			1.0		4		1					1						2		4					4	
＊カンギク(フタ)		1							2						2(1B)								1						2							3					
＊ハマグリの一種																						1f	1f			1														
＊アラスジケマン																																										
＊イソハマグリ																																										
イワカワチグサ					1cr		1																																			
コオニノツノ?			1jb			1																																				
カニモリガイ類																							1w			1															
アツキクスズメ																																										
アワムシロ																						1cr				1															
海産巻貝(同定不能)										1b			1																													
クロミノエガイ		0/1jue?cr				1																																			
トマヤガイ			0/1j,cr			1																																				
オキナワヒシガイ																							0/1cr			1															
真珠光沢貝殻片																														1		1		P								
造礁サンゴ片(枝)																																				1e					1	
＊鱗																		1f																								
＊魚骨					2		2																																	1		1
海産有孔虫																																										
石灰質無脊椎動物片?																																										
軽石?					12		12																									3		3								
陸産動物等 陸産貝類																																										
ハクサンベッコウ類似属					1mj,2sjc		3					1ljc,1mjc		2				1mjc		1					2mjc,2sj		4				1u		1mj	1	1						
ヒメベッコウ類似属					1sjc		1					1lj		1																	1lj			1								
ヒメコハクガイ類					1sjc		1											1mjc		1																					
ホラアナゴマオカチグサ類					2ac		2					1ljc,1mjc		2																									1sjc		1
ウスイロオカチグサ																							1lj			1												2lj		2	
オオオカチョウジ?																																										
オカチョウジ類似種												1a,4sj		5		1a		2u	1	2					1mj3sj		4					1sjc		1							
オカチョウジ類(卵)												2		2				2		2					2		2														
バンダナマイマイ									3fc				1										1f			1															
オキナワヤマタニシ										2f			1																													
ヒラシタラ																																										
ツヤギセル			1wcr			1																																				
キセルガイ(太)												1sj		1											2sj		2					1mj,cr		1							
陸産貝類(同定不能)																								1b		1															
その他																																										
ヤスデ類(体節)																															5		5					4		4	
ゾウムシ類																																										
蛹																																										
貝形虫(陸水産?)																																										
化石非造礁サンゴ									1f				1																													
炭化物(cc)					26		26					45		45				55		55					130		130					145		145					18		18
炭化物(g)					9		9					12		12				16		16					33		33					40		40					4		4
種子																																										
ウリ?																																										
炭化種子					0		0											0		0											0		0							
糞石片?												4		4				4		4																					
木片/根?																																										
根					0		0											0		0											0		0							

※和名の前の＊は食用種．a：成貝，B：焼け，b：体層，c：色彩のこり，cr：褐色付着物アリ1j：大形幼貝，mj：中形幼貝，sj：小形幼貝

②結果および考察

今回のサンプルからは、少なくとも海産貝類13種、陸産貝類11種と比較的少数の貝類遺体しか抽出されなかった（第109表）。また、淡水産貝類は確認できなかった。以下に、海産貝類と陸産貝類に分けて、その特徴・由来や周辺環境の推定等に関して述べたい。

海産貝類

海産貝類では、食用のカンギクが比較的多かったのみで、他の食用種としてハマグリ類・アラスジケマン・イソハマグリ等の二枚貝類が少数抽出された。第110表には、遺構内からピックアップ法により得られた貝類遺体の組成を示したが、やはりカンギクが極めて多く、他の種としてはチョウセンサザエ（フタ）が目立った程度であり、小形種まで検討できた土壌サンプルでも食用貝類に大きな変化は認められなかった。個体数は少ないながら、ピックアップ法の結果と同様に、詳細な地点と時期が特定できた本遺構でも、カンギクが食用貝類として重要であったと考えられた。そして、出土量は黒褐色土層で多いものの、他の層でもある程度の廃棄が行われていた（第108・110表）。一方、貝類の個体数が極めて少ないことから、この遺構内には貝殻は廃棄しないという規制が明確に存在したこともわかる。これは、9.5㎜メッシュ上の数として、魚骨は多いにもかかわらず、貝類は少数で、陸上脊椎動物はほとんど見られないことからも明らかであった（第108表）。小形貝類もほとんど得られなかったことから、これまでに先史時代遺跡で議論してきた“ダシ的な利用”や“海藻類利用”（黒住2002等）は検討できなかった。むしろ、時代が下り、権力者の居住域であるため、ダシや海藻の利用が認められないということを示している可能性も高いと考えられる。また、他の土壌サンプルを含め種子（詳細は未検討：種子以外も少数含まれる可能性がある）が多数抽出された（第111表）。その中には、穀類はほとんど見られないようであった。つまり、魚類や植物質のものは廃棄するものの、獣骨や貝類は廃棄しないという制約が明瞭に読みとれる。

一方で、水磨を受けた二枚貝を含む小形貝類（イワカワチグサ・オキナワヒシガイ等）も僅かではあるが得られている（第109表）。後代の混入のほとんど認められない堆積物であり、何らかの意図の元に持ち込まれたものと考えられるが、その意図は全く不明である。もしかすると、海岸へ行った折に拾われたものなのかもしれない。また、これらよりも少し大きな1㎝程度のチドリダカラ・サラサダマ等の球形の種で、磨滅した個体もピックアップ法で数個体得られている（第110表）。これらは、以前に“おはじき様の遊具”の可能性も想定されるのではないかと考えたことのある貝である（黒住1993）。今回も、これらの貝はまとまって出土しなかったので、まだこの想定を補強するものとは言えないが、今後も注意深く検討する必要があると思われる。

陸産貝類・ヤスデ類

今回のサンプル中から得られた陸産貝類の種組成変化を第166図に示した。最下部の底面黒褐色土層と最上部の灰色土層では個体数が少なく、全体としての変化は明瞭でなかった。ただ、オカチョウジ類似種・ハクサンベッコウ類似属・ホラアナゴマオカチグサ類等が優占種と言えよう。今回の組成に類似したものは、今帰仁城跡周辺遺跡で知られている（黒住2007）。今帰仁城跡周辺遺跡の場合、移入陸産貝類も認められ、後代のものも含まれていたので、詳細に議論できなかった。今回の組成では、

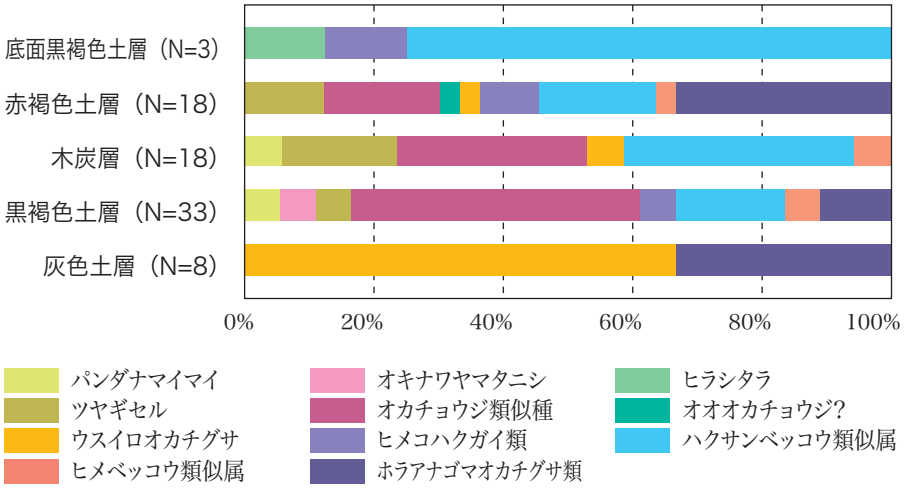
第110表　ピックアップ法で得られた貝類

種類＼層	灰色土層等	黒褐色土層	赤褐色土層	木炭層	底面黒褐色土層
カンギク	1	141	15	2	
チョウセンサザエ	5	20		2	
ツヤギセル	4	3		9	
アラスジケマンガイ	1	2		7	
ヤコウガイ		7	1	1	
イソハマグリ	1	5		2	
オキシジミ	1	3	1		2
オキナワヤマタニシ		4	1		
ハマグリの一種		1		3	
イワカニモリ	1	1	1		
シレナシジミ		2		1	
アツキクスズメ		2			
ウラキツキガイ		2			
サラサダマ				1	
マルアマオブネ		1			
アマオブネガイ		1			
カワアイ	1				
ナツメモドキ				1	
チドリダカラ		1			
オオシマヤタテ				1	
マダライモ		1			
イボシマイモ		1			
ヒメシャコガイ					1
マスオガイ				1	
アラヌノメガイ		1			
スダレハマグリ		1			

第111表　シーリ遺構土壌サンプルから抽出されたヤスデ類体節数及び種実数

No.	出土地区 グリッド	出土地区 層序・土色・レベル	ふるい目	体節数	種実数
1	B－4	黒褐②	1㎜	194	5
2	B－4	黒褐②	5㎜	21	
3	B－4	黒褐③	1㎜	1106	697
4	B－4	黒褐③	2.5㎜	54	
5	B－4	黒褐③	5㎜	2	
6	B－4	黒褐④	1㎜	653	106
7	B－4	黒褐⑥	1㎜	165	26
8	B－4	黒褐⑥	2.5㎜	9	13
9	B－4	黒褐⑦	1㎜	26	24
10	B－4	黒褐⑦	2.5㎜	30	
11	B－4	黒褐⑦	5㎜	4	
12	B－4	黒褐⑧	1㎜	311	10
13	B－4	黒褐⑧	2.5㎜	40	
14	B－4	黒褐⑨	1㎜	517	148
15	B－4	黒褐⑨	5㎜	10	
16	B－4	黒褐色土④	2.5㎜	49	
17	B－4・B－5	黒褐①	1㎜	323	22
18	B－4・B－5	黒褐①	2.5㎜	35	
19	B－4・B－5	黒褐①	5㎜	4	
20	B－5	畦 木炭層①	1㎜	72	22
21	B－5	畦 木炭層②	1㎜	519	
22	B－5	畦 木炭層②	2.5㎜	458	
23	B－5	畦 木炭層③	1㎜	149	21
24	B－5	畦 木炭層③	2.5㎜	5	
25	B－5	黒褐③	1㎜	350	86
26	B－5	黒褐③	2.5㎜	25	
27	B－5	黒褐③	5㎜	9	

No.	出土地区 グリッド	出土地区 層序・土色・レベル	ふるい目	体節数	種実数
28	B－5	黒褐④	1㎜	502	181
29	B－5	黒褐④	5㎜	1	
30	B－5	黒褐⑤	1㎜	1924	527
31	B－5	黒褐⑤	2.5㎜	294	57
32	B－5	黒褐⑤	5㎜	26	
33	B－5	黒褐⑥	1㎜	297	31
34	B－5	黒褐⑥	2.5㎜	8	
35	B－5	黒褐⑥	5㎜	4	
36	B－5	黒褐⑦	1㎜	259	58
37	B－5	黒褐⑦	2.5㎜	7	
38	B－5	黒褐⑦	5㎜	4	
39	B－5	黒褐⑧	1㎜	778	346
40	B－5	黒褐⑧	5㎜	1	
41	B－5	黒褐⑨	1㎜	936	121
42	B－5	黒褐⑨	5㎜		3
43	B－5	黒褐⑩	1㎜	674	373
44	B－5	黒褐⑩	2.5㎜	25	
45	B－5	畦 底面黒褐①	1㎜	86	
46	B－5	畦 底面黒褐①	2.5㎜	30	
47	B－5	畦 底面黒褐②	1㎜	445	124
48	B－5	畦 底面黒褐色②	2.5㎜	2	
49	B－5	畦 底面黒褐②	5㎜	20	
50	B－5	畦 底面黒褐③	1㎜	898	188
51	B－5	畦 底面黒褐③	2.5㎜	632	117
52	B－5	畦 底面黒褐③	5㎜	12	
53	B－5	畦 底面黒褐③	5㎜	8	
54	B－5	畦 木炭層②	5㎜	30	



第166図　土壌サンプル中の陸産貝類種組成

図版161　ヤスデ類

林縁生息種のオキナワヤマタニシやツヤギセル・パンダナマイマイ等は比較的少なかった。また、開けた場所の湿った壁面に生息するウスイロオカチグサもいくつかのサンプルで得られた。ホラアナゴマオカチグサ類に関しては、黒住（2007）でも少し述べたが、類似種は洞窟内にのみ生息する真洞性であり、石灰岩礫中の暗所に生息していたものと考えられる。また、第109・111表に示したように、ヤスデ類（ババヤスデ類）の一部（体節）がきわめて多数認められた（図版161）。

上記の状況から、このシーリ遺構周辺の環境について考えてみたい。まず、林縁生息種の陸産貝類が少ないことから、遺構周辺は開けていたと考えられる。ただ、林縁生息種のオキナワヤマタニシ等が僅かながら認められているので、少数の木立は存在した可能性がある。また、石灰岩礫中に生息すると考えたホラアナゴマオカチグサ類が認められたことから、遺構は石灰岩を掘り込んだ構造物と考えられる。

そして、中形で、活動性が高く、樹上にも登るパンダナマイマイやオキナワウスカワマイマイがサンプル中にほとんど見られなかったことから、遺構は何らかの遮蔽物で覆われていたと考えられる。一方、主に地表徘徊性のヤスデ類が極めて多かったことから、遮蔽物の下部には彼らが通れるだけの隙間が存在したものと思われる。つまり、遺構は壁に囲まれた空間であった可能性が高い。

シーリ遺構は壁に囲まれ、その周辺には人手の入った僅かばかりの木立が存在していたという推定となった。これは、現代でも首里周辺で見られる景観であり、比較的想定しやすい状況ではある。ただ、微小陸産貝類等の遺体群からデータを元に復元できたことには意義があると考えられる。

謝辞：貴重なサンプルの検討の機会を与えて頂いた沖縄県立埋蔵文化財センターの仲座久宜氏と土壌サンプルの処理等でお世話になった浦添市教育委員会の菅原広史氏、ヤスデ類のコメントを頂いた千葉県立中央博物館の萩野康則氏にお礼申し上げる。本報告の一部には、文部科学省科学研究費（課題番号：21101005）を用いた。

〈引用文献〉

黒住耐二 1993 「貝類遺存体」In 中村 愿（編）『玉代勢原遺跡』北谷町文化財調査報告書第13集: 287-293.

黒住耐二 2002 「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」In 木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易−奄美・沖縄の発掘調査から−』pp. 67-86. 熊本大学文学部

黒住耐二 2007 「今帰仁城跡周辺遺跡から得られた貝類遺体（その2）」In 宮城弘樹（編）『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村文化財調査報告書第24集: 283-290.

3．脊椎動物遺体

菅原広史（浦添市教育委員会）

（1）脊椎動物遺体の分析方法

前述の土壌サンプルから得られたＨＦ資料中の骨類及び、発掘調査現場において取り上げられた骨類（ピックアップ資料＝ＰＵ資料）について行った同定など、分析方法の概要を以下に示す。対象とするＰＵ資料については全ての資料を実見したが（第99・112表）、前項で記載したＨＦ資料については分析量・時間等の関係から、ベルト部分の土壌サンプルより得られたうち５㎜・2.5㎜メッシュで回収されたものに分析の焦点を絞っている。なお、1㎜メッシュ資料を概観してみると、同定可能な骨類はそれほど含有していない印象である。また、黒住氏が分析にあたった土壌サンプルについては、水洗選別後に貝類遺体が抜き出された資料から脊椎動物遺体を抜き出し、筆者が行ったサンプル資料と同様に分析を行った。ただし、水洗選別の際に用いた篩のサイズが異なるため、一覧・集計表中では各々を区別して記載している（第115～119表）。

○同定について

動物遺体の種同定は現世標本との比較を基本としている。用いた現世標本は筆者が個人的に所蔵するものに加え、沖縄県立埋蔵文化財センター・西本豊広氏（国立歴史民俗博物館）・樋泉岳二氏（早稲田大学）・栃木県立博物館の所蔵する標本を参照させていただいた。分類群ごとの詳細については以下に述べる。

・魚類

分析対象とした部位は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨を主とした。これに加え、分類群によって頭蓋骨・咽頭骨・口蓋骨・擬鎖骨・腹椎・尾椎なども同定に有効である場合は対象としている。特に、椎骨は他の部位が残存しづらく、椎骨でのみ確認される分類群もあるため注意が必要とされる。しかし、複数の現生標本に類似する形状を持つ例も多く、十分な検討を行いきれていない点も加わり、同定が困難である場合が多い。そのため椎骨については明確に同定できる資料以外は「対象外」として扱っている。また、ブダイ科やハタ科・フエフキダイ科の一部の椎骨は同定可能である場合もあるが、本分析においては「対象外」とした。椎骨以外の部位においても現段階でいずれかの分類群に属するか判断しがたいものは「保留」、参照した現生標本のいずれにも該当しないと判断されるものは「未同定」として記載している。

・爬虫類、鳥類、哺乳類

基本的には部位が特定できる資料を対処としているが、肋骨については除外している。また、ウミガメ類や哺乳類の椎骨などは部位特定が可能であっても、小破片については対象外とした。

○計測について

同定後の資料について魚類の一部及び哺乳類の分類群資料について骨長計測を行った（第100～105表、第169～178図）。魚類はハタ科・クロダイ属・フエフキダイ科・ブダイ科・ベラ科の前上顎骨と歯骨を対象とし（ハタ科は歯骨のみ）、前者は「前上顎骨長、柄状突起長」、後者は「歯骨長、歯骨高」を計測位置とした。また上記以外に椎骨の前関節面上下径をポイントとして、同定した資料を計測対象とした。哺乳類の計測位置については基本的にDriesch1976に従っている。

○集計について

各分類群において集計に際し、最小個体数（MNI）および同定標本数（NISP）を算出している（第114表）。NISPは同定対象資料に加え、「対象外」とした椎骨なども集計表に含めたものについては合算している。MNIはPU・HF資料の別を問わず、資料を遺構内出土で一括して扱い、一方で本遺構外の資料とは区分けして算出した。

（２）シーリ遺構出土資料の分析

種同定に関する記載

ここでは同定された分類群について、同定に際する所見について記載する。なお参考として、各分類群の冒頭に沖縄における一般的な方言名を紹介した。ただし、方言名はその分類群の一部の種を示していることが多く、分類群名称と等しく結ばれるものではない点に御留意いただきたい。

①軟骨魚類

サメ類の椎骨および歯が同定されている。歯はHF2.5㎜資料から検出されており、かなり小型のサイズを呈す。

②硬骨魚類

・ニシン科

ミジュンと呼ばれ、ミズンの標本に近似する資料である。5㎜・2.5㎜メッシュのHF資料から出土しており、ピックアップ資料からは検出されていない。

椎骨のみ確認されている。椎骨を前面からみると腹側面が広い「しもぶくれ状」を呈しており、また椎体中心に通る穴の椎体直径に対する比率が、高い点が特徴である。その他にもいくつかの特徴を有するが、計測値をみると（第178図）椎体前面上下径で0.9～2.3㎜（腹椎N=5・平均1.6㎜、尾椎N=24・平均1.5㎜）程度で非常に小型であるため、観察には注意が必要である。

ニシン科は沖縄において近年報告が確認されるようになった分類群であるが、その要因としては極めて資料が小さく、土壌サンプルを篩にかけることが採集の条件であるためである。本群のほとんどがHF2.5㎜から検出されたことからも窺えよう。水洗選別など微細遺物の採集に調査の視点が置かれるようになったのは最近のことである。本来、普遍的に出土していたものであるかどうか判断しがたい。なお、ニシン科は沿岸及び外洋に広く生息する群であり、漁撈活動域を考察する上でカギになる存在となり得る。本群の取り扱いについては今後重点を置くべき資料である。

・トビウオ科、トビウオ近似

椎骨により同定される分類群である。腹側の前関節突起が左右に開き前方に突出する点、椎体側面の中央上部に神経棘から続くように斜めの隆起線が入る点が特徴として挙げられる。同じダツ目のサヨリ科の椎骨とも類似する形状を有するが前関節の突出方向や、椎体の形状などから判別可能である。計測値（第178図）はいずれも3㎜台を示しており（腹椎平均3.4㎜・尾椎平均3.2㎜）、HF資料でのみ確認されている。

一方で、基本的な形状はトビウオと一致するものの、腹側面の中央に前後に強い隆起線を持つ一群が資料に見られる。この形状が、参照したトビウオの現生標本と一致しないため、これらについては判断を保留し、トビウオ近似として表記した。サイズの点（第178図）では腹椎3.7㎜・尾椎3.5㎜

（いずれも平均）とトビウオ科のそれと近似する。

・サヨリ科

椎骨で同定される群である。椎骨はトビウオ科と類似する特徴を持つが、腹椎の前関節突起が前傾せず横に飛び出す点、椎体がやや細身で丸みを帯びる印象が持たれるなどの差から判別している。計測値（第178図）は2.4㎜～3.8㎜である。

・ダツ目未同定

トビウオ科・トビウオ類似資料と形態的特徴が近似するものの、現生標本と一致するとは言い難い資料が見られるため、これらについては判断を保留する意味で本群を設けた。

・ボラ科

椎骨でのみ同定されている。PU資料ではほとんど見られないものの、HF（5㎜）・HF（2.5㎜）資料から同定される椎骨の中では比較的数が検出されている。計測値（第178図）の平均は腹椎1.7㎜（N=24）・尾椎3.8㎜（N=8）で、尾椎では8㎜程度の値を持つものもあるが、大多数は2㎜前後で占められる。

・カマス属

前上顎骨・歯骨及び椎骨が出土する。歯骨に見られる剃刀状の鋭い歯や細長い椎体などが特徴的であり、比較的同定が容易である。前上顎骨については後端部の数点が同定された。また、本分類群の同定数ではHF（5㎜）から検出された椎骨が最多である。椎骨の計測値（第178図）では2.4㎜～6.5㎜とやや幅があるが、多くは平均（腹椎4.0㎜・尾椎3.9㎜）周辺の値である。

・ハタ科

ミーバイ、イシミーバイ、アカジンミーバイなどと呼ばれる、サンゴ礁に生息する魚類の代表格の一つである。

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・擬鎖骨などが対象部位である。前上顎骨及び歯骨からはそれぞれ形態が近似する現生標本から「マハタ型」「スジアラ型」に細分している。主に歯列がその根拠となり、前上顎骨頬側に比較的大きな犬歯状の歯が並ぶ点、歯骨の前方で歯列が一時途切れる点などがスジアラ型の特徴である。「マハタ型」と「スジアラ型」の同定数をみるとマハタ型の比率が高い。

ハタ科の計測は歯骨のみで実施している（第169図）。前上顎骨は同定可能であっても完存していないことが多く、計測不能資料が多いため除外した。計測値の平均をみるとマハタ型は歯骨長16.6㎜（N=8）・歯骨高7.0㎜（N＝18）、スジアラ型では歯骨長63.6㎜（N=3）・歯骨高8.7㎜（N=26）となっており、スジアラ型がより大きな個体で占められると考えられる。

・アジ科

ガーラと呼ばれるギンガメアジ属などの大型魚と、ガチュンと呼ばれるメアジ属などの小型のアジ科の2つの分類群に同定している。回遊魚であるがサンゴ礁の近縁や港内にも入り込んでくる種類である。

大型のアジ科はギンガメアジやカスミアジなどに近似するギンガメアジ属、イトヒキアジに近似するイトヒキアジ属にそれぞれ同定できる。主上顎骨・前上顎骨・歯骨・椎骨などが同定対象となり、歯列の形状などからギンガメアジ属やイトヒキアジ属などの同定が可能である。

一方小型のアジ科は、主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・腹椎・尾椎が主な同定対象であるが、椎骨がより多くの同定数を誇る。同定にはメアジの現生標本を比較に用いており、いずれの部位も形状が近似している。ほとんどがHF資料から検出されたものでありPU資料からは確認されていない。椎骨

の計測値も1.9～3.8㎜を示しており（第178図）、比較的小型であることがその要因とみられる。計測平均値（第178図）は腹椎2.2㎜（N＝11）・尾椎2.5㎜（N＝85）である。

・シイラ属

回遊魚であり、現在では沖合に漂流物を設置するパヤオを利用した漁法で捕獲されることが多い。カツオなどと同様外洋での獲得活動を示す魚種と言える。

同定されているのは主上顎骨・歯骨・腹椎及び尾椎である。椎骨の椎体側面に細かい隆起線が多数入る点と骨質が脆い点が特徴であり、比較的同定しやすい一群である。平成11年度資料を中心に出土が確認されている。椎骨の計測値は腹椎17.7～20.3㎜（平均19.4㎜・N＝6）、尾椎15.7～23.5㎜（平均20.6㎜・N＝16）であり、他の椎骨のサイズに比べてかなり大きい（第178図）。

なお、これまで首里城の調査報告では本分類群に関する記載はないが、「右掖門及び周辺地区」では「種不明」として図版に掲載されているほか（沖縄県立埋蔵文化財センター2003）、「書院・鎖之間地区」からの出土資料に本分類群の椎骨が含まれていることを、沖縄県立埋蔵文化財センター収蔵資料を実見した上で確認している。

・クロダイ属

チンなどと呼ばれる河口付近の汽水・マングローブ林域に生息する一群である。

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨における形状が特徴的である。角骨はフエフキダイ科などと類似するため注意が必要である。

・フエフキダイ科

タマン、ヤキータマン、タカカジ、ダルマーなどと様々な方言名が存在する一群である。近年、前上顎骨などの形状を詳細に観察することで属以下のレベルでの細分が可能となってきた（樋泉・名島2007）。

フエフキダイ科はヨコシマクロダイ属、メイチダイ属、フエフキダイ属の3属が確認された。これらは前上顎骨長と柄状突起長の比率、前上顎骨歯列の形状、口蓋骨の全体形状などから分類が可能である。さらに前述の通り、フエフキダイ属前上顎骨はアマミフエフキに近似するものと、ハマフエフキに近似するものとに細分できる。フエフキダイ科全体では出土動物遺体群の第一優占種となり、その中でもフエフキダイ属ハマフエフキ型が最多数を占める。ハマフエフキ型が最多数となる事例はそれほど珍しいこともないが、本資料においてはアマミフエフキ型の比率が比較的多いと感じられる。前上顎骨の計測値を比較するため、分布図をみると（第172図）分類群ごとのまとまりが窺え、分類基準の一つである前上顎骨長と柄状突起長の比率の要件が反映されていると言える。なお、各分類群の計測値はメイチダイ属15.0～28.3㎜：27.5～44.5㎜（前上顎骨長：柄状突起長、以下同）、アマミフエフキ型17.8～47.9㎜：25.9～47.0㎜、ハマフエフキ型15.7～50.8㎜：18.5～66.7㎜となっている。また、歯骨は細別を行わず、フエフキダイ科として一括している（第173図）。

その他の同定部位としては、主上顎骨・歯骨・角骨・方骨などである。腹椎・尾椎については本分析においては「対象外」とした。

・ベラ科

沖縄においてはマクブと呼ばれるシロクラベラが代表的なベラ科であるが、海棲魚類の中では大きな分類群であり（上野2005）、相当数の種が存在するため「科」以下のレベルで同定することは困難である。ただし、咽頭骨の歯列面の形状などである程度の細別が可能であり、「シロクラベラ型」「コブダイ型」「ベラ科B」「その他」に分類している（「コブダイ型」・「ベラ科B」の分類については

金子1996に従った）。主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・上下咽頭骨が主な同定部位である。ベラ科もブダイ科同様頑強な上下の咽頭骨を持つが、やはり本遺構からはほとんど出土しない。他の事例との比較においてこの点においても「異様」な特徴である。このベラ科の計測も前上顎骨と歯骨を対象とした（第174・175図）。前上顎骨長は23.1～55.0㎜（平均33.8㎜・N＝20）、柄状突起長は29.3～59.0㎜（平均39.4㎜・N＝23）、歯骨では歯骨長が25.0～53.8㎜（平均36.0㎜・N＝18）、歯骨高が11.3～28.3㎜（平均19.2㎜・N＝26）の計測値を各々示している。

・ブダイ科

ブダイ科はイラブチャーと呼ばれ、サンゴ礁を生息域とする南洋に特徴的な魚種である。

筆者はこれまでいくつかの遺跡資料の分析を行ってきた中で、ブダイ科を主にブダイ属、イロブダイ属、アオブダイ属の３つの分類群に同定してきたが、御内原地区の分析に当たってはアオブダイ属を更に細分する試みを行った。

シーリ遺構を含めて御内原北地区から出土しているブダイ科の前上顎骨及び歯骨・咽頭骨の多くはアオブダイ属に同定される。その前上顎骨と歯骨を観察してみると、大きく二つの形状に分かれる傾向が窺える。そこでアオブダイ属A、アオブダイ属Bとして両者を区別した。ブダイ科は種のバリエーションが豊富であるため、いずれの種に同定されるかは明確でないが、この二分類群を見出すことは可能と言えよう。これを受けて計測データを比較してみると（第176・177図）、歯骨の計測値分布にA・Bごとのまとまりが窺える。Aの歯骨長：歯骨高が26.3～55.8㎜：19.0～31.9㎜、Bは22.6～51.3㎜：12.4～27.8㎜となり、高に対する長の比率でBがより大きい。前上顎骨は計測値分布上差が表れないが柄状突起の角度によって区別が可能である。

また、ブダイ科は前上顎骨・歯骨・主上顎骨・角骨・方骨・腹椎・尾椎などが出土しているが、上下の咽頭骨がほとんど出土しない。ブダイ科の骨格では最も頑強な部位であり、通常の出土資料ではこれが最多数の出土であることが多いが、本資料においては状況が異なるようである（腹椎・尾椎は集計上「対象外」扱い）。

・カツオ・スマ類

カツオ・スマの２つの分類群に同定できた。回遊魚の代表的な魚類であり、サンゴ礁など沿岸での漁撈が中心となる沖縄諸島の遺跡からは出土する事例数が少ない。出土部位は前上顎骨・歯骨・椎骨であり、カツオ・スマ類に同定できると判断している。また、腹椎腹側面の形状や、尾椎の椎体側面の隆起線や神経・血管棘の残存形状からの推定など、よりスマ・カツオの両者に同定できると考えられる。

計測値は両者に大きな差はないため、表中では項目を一括しており（第178図）、腹椎5.8～11.3㎜（平均8.7㎜・N＝4）・尾椎6.0～7.3㎜（平均6.7㎜・N＝12）。

これまでの脊椎動物遺体の同定の中では出土が認識されてはこなかったが、近年報告事例が見られるようになり、沖縄諸島における漁撈活動の外洋への展開が示唆される。加えて、これまでは比較的近縁性の強いスマが出土していたが、今回カツオも確認された点は、注目される。

・アイゴ属

同定された本分類群のほとんどが腹椎および尾椎である。尾椎はニザダイ科や小型のアジ科などと類似するが、棘突起や前関節突起の形状・角度などから区別可能である。

本分類群のうち特に微小な資料がHF（2.5㎜）から検出されている。椎体長が概ね１㎜以下であり、極めて小さいが形状は一致するため本群に同定しており、アイゴ属の幼魚と考えられる。今帰仁城周辺遺跡出土資料において報告事例がみられ、「スク」であろうと言及されている（樋泉2007）。椎骨前関節面

上下径での計測値で比較すると（第178図）、「アイゴ属」腹椎1.7～4.3（平均2.8㎜・N＝6）、尾椎1.8～4.8（平均3.5㎜・N＝16）に対して、「アイゴ属スク」としたものは、腹椎0.5㎜～0.9㎜（N=11）・尾椎0.5㎜～1.0㎜（N=34）で平均は両者とも0.6㎜である。

・その他

このほか、ウナギ属・イシダイ科・モンガラカワハギ科・ニザダイ科・ハリセンボン科などがそれぞれ少数ずつ出土している。また、骨以外に魚類の鱗が多量に検出されている。サイズや形状などから複数の分類群に由来するものが混在しているものと思われるが、比較検討が不十分であるため具体的な同定には至っていない。

・未同定

角骨・方骨・一部の椎骨などで参照した現生標本に近似する形状を見いだせなかった資料については未同定として、今後の検討課題とした。

・保留・対象外

同定対象部位のうち、破損・変形等や複数の分類群に近似した形状を持つものなど、確実性が低いと判断される場合は保留と記載している。また、ハタ科・フエフキダイ科・クロダイ属・ベラ科・ブダイ科とこれらに近似するとみられる椎骨については同定対象外とした。

③鳥類

長管骨の骨幹のみが残存しており同定対象に含めていないものも多いが、同定可能な鳥類はニワトリに同定される。頭蓋骨、頸椎、肩甲骨、上腕骨、手根中手骨、大腿骨、脛足根骨などが確認された。鳥類に関しては比較標本が極めて不十分であることから、明確にニワトリと形状の一致した資料以外は「鳥類」としての分類群に留めている。

④爬中類

爬虫類はヘビ類及びウミガメが僅かに出土しているのみである。ヘビ類は椎骨、ウミガメ類は腹甲もしくは背甲の破片がほとんどであるため、詳細については不明である。

⑤哺乳類

・トガリネズミ科

頭蓋骨および下顎骨が出土している。これまでの首里城の報告で「ジネズミ類」と表記されてきたものであると思われる。食虫の性格を持つことから、本遺構で出土している「ヤスデ類」などを狙い混入してきたのではないかと考えられる。

・ネズミ科

上顎骨・下顎骨・椎骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・寛骨・大腿骨・脛骨を中心に出土している。上顎・下顎の歯列形状などからはネズミ亜科に同定できる。遺構内出土物から想定すると、投棄された「ゴミ」を目的に自然混入した可能性が高いと考えられる。

・イヌ

上腕骨・大腿骨・腰椎が確認されており、各部位にはカットマークが観察される。

・シカ

ニホンジカに同定されると考えられる上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨が確認された。上腕骨には関節に近い骨幹部に多数のカットマークが観察される。沖縄諸島にはニホンジカが生息していなかったとされることから、島外からの持ち込みによるものである。遺構が属する17世紀前半には、薩摩から慶良間諸島へシカを持ち込み、「放した」とされる文献上の記述がみられるため関連性が示唆される。なお、本報告に先立ち首里城他地区及び天界寺から出土した資料と合わせ、シカの出土に関する考察を行っている（菅原2009）ためご参照いただきたい。

・イノシシ／ブタ

遺構内から検出された本分類群の資料は基節骨など、小型のものが僅かに混じるのみである。イノシシとブタにまつわる形質的な問題は前節で述べたとおりであるが、遺構内出土の資料は小型であることからも、より判別は難しい。

・その他

以上のほか、ピックアップ資料からはウマ・ウシ・ヤギ・ジュゴンが同定されている。同定対象外とした資料中に哺乳類骨のものと考えられる破片も多く存在するが、魚類や動物遺体以外の遺物の出土様相に比べ、数においてはとりたてて目立つ要素は見られない。

（3）出土組成について

同定結果をもとにシーリ遺構内を含む御内原北地区出土の脊椎動物遺体組成を示したものが第167図である。このうちシーリ遺構からの出土傾向をみるとMNI、NISPともに、圧倒的に魚類で占められていることが明確である。特にNISPでは今回の分析に含まれない部位なども存在するため、実際には更に多くを占めるものと思われる。以下、分類群ごとに傾向を述べる。

組成を魚類に絞りMNIで比較すると（第168図）、フエフキダイ科が組成中の第一位を占めており、ブダイ科がそれに次ぐ。しかし、それ以外については目立って組成の多くを占める分類群は見られない。優占するフエフキダイ科であっても全体に占める比率は約25%であり、圧倒的多数を占めるとまでは言い難い。NISP資料も同様で、PU資料では約40%、HF資料に至っては約16%で組成の第一位からも外れている。従来、フエフキダイ科やブダイ科・ベラ科といったサンゴ礁域に特徴的な魚種が組成の大半を占める事例が多いことを考えると、本遺構においては出土数が少ない傾向にあると言うことができるとともに、それ以外の魚類の分類群の多様性を窺うことができる。特に、水洗選別によって得られた微細骨の同定結果に着目すると、トビウオ科やアジ科小型種、アイゴ属の幼魚など首里城の調査において、これまで報告されていない分類群が注目される。これらの多くは椎骨であるためMNIに換算すると多くの数になるわけではないが、小型種の魚類がそれなりの数で検出された点に対して、一考する必要があろう。ただし、フエフキダイ科・ベラ科・ブダイ科については椎骨や同定対象外の部位が反映されていないため、実際にはもう少し組成比率が増加すると見込む必要がある点には留意しなければならない。

魚類以外の分類群の組成は極めて少数であるが、カットマークが見られるイヌやシカなどについては、少数といえども検出されている点について留意すべき資料であろう。また、シーリ遺構外の組成比率と比較すると、NISPにおいては哺乳類の傾向が異なるようである。動物遺体の出土傾向から本遺構の利用様相を考える上で、哺乳類の出土が僅少である点が何らかの意義を持つものとして着目される。

第112表　シーリ遺構ピックアップ資料集計表（魚骨）

分類群	部　位		B−4 — 黒褐色	B−4 — 上 層	B−5 — 木炭層	B−5 — 黒褐色	B−5 — 赤褐色	B−5 アゼ 木炭層	B−5 アゼ 黒褐色	B−5 アゼ 灰白色	B−5 アゼ 炭混粘土層	B−5 アゼ 黒褐色	B−5 アゼ 赤褐色	B−5 アゼ 底面黒褐色	合　計
マツカサウオ科	歯骨	L				1					1				2
トビウオ科	腹椎	−	1												1
カマス属	歯骨	L				1									1
	腹椎	−	1												1
ハタ科マハタ型	前上顎骨	L	1	1				1							3
		R			1	1		1							3
	歯骨	L	4					1							5
		R			1			1		1					3
ハタ科スジアラ型	前上顎骨	L				1									1
	歯骨	L						1							1
		R	1												1
	前鰓蓋骨	L				1									1
ハタ科	主上顎骨	L	1		1	1		1			1				5
		R	1			2		1							4
	角骨	L	4			3		1		1					9
		R	1			1				1					3
	方骨	L	1				1								2
		R	1			1		1		1					4
	擬鎖骨	L	1		2										3
		R	1		1										2
アジ科カスミアジ近似	歯骨	L				1									1
アジ科イトヒキアジ近似	歯骨	L		1											1
アジ科メアジ近似	歯骨	L	2												2
フエダイ科	主上顎骨	R	1												1
	前上顎骨	R		1											1
	歯骨	R	2												2
コショウダイ類	前上顎骨	L				1									1
	歯骨	L			1										1
コショウダイ類似	主上顎骨	R				1									1
	歯骨	L	1												1
		R				1									1
クロダイ属	主上顎骨	R	1		1	1									3
	前上顎骨	L	2		1	1		1							5
		R	1	1						1			1		4
	歯骨	L	1					1							2
		R	2			2		1							5
	角骨	L	1												1
		R			1	2									3
タイ科?	前上顎骨	L				1									1
ヨコシマクロダイ	歯骨	L				1									1
メイチダイ属	主上顎骨	R					1								1
	前上顎骨	R	2					1							3
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	L	5		3	4		2							14
		R	5		1			1							7
フエフキダイ属アマミフエフキ型	前上顎骨	L			1	3			1				1		6
		R		1		1							1		3
フエフキダイ属	口蓋骨	L	4		3	3		1	1			1			13
		R	4	1	2	5		1	1			1			15
フエフキダイ科	主上顎骨	L	2	1		4		1	1						9
		R	4			2		1		1		1			9
	歯骨	L	11	2	5	7		1							26
		R	6	2		4	2	1					1		16
	角骨	L	5	1	1	3					1				11
		R	2		2	2	1	1							8
	方骨	L	3					1							4
		R	3		2	2	1								8
	舌顎骨	L				1									1
		R				1									1
	主鰓蓋骨	L				1									1
		R				1									1
フエフキダイ科?	前上顎骨	L						1							1
イシダイ科	前上顎骨	L				1									1
	歯骨	L				1									1
ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	−										1			1
ベラ科B	下咽頭骨	−		1											1
ベラ科	主上顎骨	L	1			2									3
		R		1	1										2
	前上顎骨	L	1	2		2	2	2							9
		R				3	1				2				6
	歯骨	L	4		2	2									8
		R	1	1	1	3				1					7
	顎骨	−			2										2
	角骨	L	2			3									5
		R	1					1							2
	方骨	L				1		1							2
ベラ科?	主上顎骨	L				1									1
		R				1									1
アオブダイ属A	前上顎骨	L	1					1			1				3
		R	1		1			1					3		6
	歯骨	L	1							1					2
		R	3												3
アオブダイ属B	前上顎骨	L			1	4						1			6
		R				2		1				1			4
	歯骨	L	5		1	2	1				1	1			11
		R	4		1	2									7
アオブダイ属	前上顎骨	L	1												1
	歯骨	L				1									1
		R				1									1
ブダイ科	頭骸骨	−				1									1
	主上顎骨	L	1		1	1					1				4
		R	2												2
	角骨	R	2		1										3
	方骨	L	1		1	2		1	1						6
		R	5		2	2									9
スマ	歯骨	R	1												1
	角骨	R	1												1
	尾椎	−	2			1									3
カツオ	腹椎	−	1												1
	尾椎	−	1												1
カツオ・スマ類	尾内部	−	2												2
ニザダイ科	舌顎骨	R								1					1
	腹椎	−	1		1										2
	尾椎	−	6			2		3							11
	循鱗	−	2			1									3
アイゴ属	擬鎖骨	R				1									1
	尾椎	−	1												1
モンガラカワハギ科	腹椎	−						1							1
	腰帯	−	2								1				3
対象外	腹椎	−	28		9	17	7	9			3	1			74
	尾椎	−	122	2	35	51	5	15		1	2	1	1	2	237

第113表　水洗選別資料から得られた遺物の集計

グリッド	層序	メッシュ	脊椎動物遺体 重量(g)	脊椎動物遺体 容量(cc)	魚鱗 重量(g)	魚鱗 容量(cc)	ヤスデ? 重量(g)	ヤスデ? 容量(cc)	種子 重量(g)	種子 容量(cc)	糞石 重量(g)	糞石 容量(cc)	炭化物 重量(g)	炭化物 容量(cc)	石 重量(g)	石 容量(cc)	木片 重量(g)	木片 容量(cc)	備考
		1㎜					0.5	5<	0.1<										
	黒褐②	2.5㎜																	
		5㎜	125.7	290.0	16.7	80.0	0.1<	5<			48.7	110.0	65.8	180.0					
		1㎜					2.1	5.0	3.6	5.0					1.8	5<			イネ?(1点)
	黒褐③	2.5㎜	53.6	90.0	6.6	20.0	0.3	5<	0.1<	5<	10.6	25.0	31.4	75.0					
		5㎜	38.7	80.0	2.7	20.0	0.1<	5<			7.3	20.0	21.6	60.0					
		1㎜					1.4	5.0	0.5	5<									
	黒褐④	2.5㎜	26.3	50.0	7.7	30.0	0.1	5<	0.3	5<	13.0	30.0	18.3	50.0					
		5㎜	50.6	110.0	10.5	60.0					49.4	130.0	38.9	100.0					
		1㎜					0.4	5<	0.2	5<									
B-4	黒褐⑥	2.5㎜	15.9	35.0	2.7	10.0	0.1<	5<			11.1	20.0	8.5	20.0					
		5㎜	83.2	190.0	9.4	50.0					65.9	160.0	24.7	60.0					
		1㎜					0.1<	5<	0.2	5<									
	黒褐⑦	2.5㎜	13.6	30.0	3.3	15.0	0.1<	5<			19.6	35.0	13.3	30.0					
		5㎜	73.2	210.0	10.2	40.0	0.1<	5<			59.6	140.0	30.8	80.0	340.2	300.0			
		1㎜					0.9	5<	0.1<	5<									
	黒褐⑧	2.5㎜	21.2	45.0	3.1	10.0	0.2	5<			13.8	30.0	13.5	30.0					
		5㎜	37.3	65.0	2.9	20.0							28.9	80.0	91.2	100.0			
		1㎜					1.2	5<	0.9	5<									
	黒褐⑨	2.5㎜																	
		5㎜	106.9	270.0	17.3	60.0	0.1<	5<			62.3	110.0	40.5	110.0	598.6	510.0			
		1㎜					0.7	5<	0.3	5<									
B-4･B-5	黒褐①	2.5㎜	31.8	65.0	4.2	20.0	0.1	5<			9.1	15.0	31.5	75.0					
		5㎜	53.6	140.0	3.0	20.0	0.1<	5<			13.4	30.0	48.6	110.0	157.9	220.0			
		1㎜					0.7	5<	0.4	5<									
	黒褐③	2.5㎜	24.4	50.0	3.1	15.0	0.1	5<			11.0	20.0	14.4	35.0					
		5㎜	119.9	310.0	14.8	60.0	0.1<	5<			78.7	180.0	38.6	95.0	0.4	5<	1.1	5<	
		1㎜					1.2	5<	0.7	5<									
	黒褐④	2.5㎜	74.5	135.0	4.8	20.0					42.4	90.0	17.8	40.0					
		5㎜	85.7	240.0	7.4	40.0	0.1<	5<					29.2	80.0	11.9	10.0			
		1㎜					5.4	10.0	2.7	5.0					0.1<	5<	0.1<	5<	
	黒褐⑤	2.5㎜	86.3	140.0	8.3	40.0	0.8	5<	1.1	5<	48.9	100.0	25.9	60.0					
		5㎜	207.2	540.0	19.1	100.0	0.1	5<			57.9	130.0	52.1	140.0	133.1	150.0			
		1㎜					0.9	5<	0.2	5<									
	黒褐⑥	2.5㎜	12.5	25.0	2.5	10.0	0.1<	5<			15.6	30.0	10.8	30.0					
B-5		5㎜	46.8	125.0	3.2	20.0	0.1<	5<			45.5	100.0	24.7	70.0	14.3	10.0			
		1㎜					0.7	5<	0.3	5<									
	黒褐⑦	2.5㎜	16.3	35.0	3.1	10.0	0.1<	5<			21.8	40.0	14.1	30.0					
		5㎜	63.0	180.0	7.1	30.0	0.1<	5<			254.3	470.0	33.7	80.0	82.8	85.0			
		1㎜					1.9	5<	2.4	5.0									
	黒褐⑧	2.5㎜	85.4	170.0	8.5	30.0					51.0	100.0	65.4	160.0					
		5㎜	106.2	290.0	8.1	40.0	0.1<	5<			64.5	150.0	80.5	210.0	23.2	25.0			
		1㎜					1.9	5<	0.6	5<									
	黒褐⑨	2.5㎜	60.7	105.0	4.0	20.0					28.4	60.0	39.5	100.0					
		5㎜	200.4	490.0	13.9	70.0			0.1	5<	66.9	150.0	87.5	240.0	114.3	120.0	0.7	5<	
		1㎜					1.8	5.0	1.5	5<									
	黒褐⑩	2.5㎜	27.9	55.0	2.7	10.0	0.2	5<			7.2	10.0	13.9	30.0					
		5㎜	87.1	230.0	3.0	20.0							21.4	60.0	33.3	20.0			
		1㎜					0.6	5<											
	底面黒褐①	2.5㎜	39.7	70.0			0.2	5<			18.5	40.0	17.8	40.0					
		5㎜	113.4	300.0	8.5	40.0					65.5	140.0	40.9	100.0	728.2	650.0	0.9	5<	
		1㎜					1.1	5<	0.5	5<									
	底面黒褐②	2.5㎜	15.0	25.0	1.5	5.0	0.1<	5<			14.8	30.0	11.8	30.0	0.1<	5<			
		5㎜	232.2	600.0	15.1	70.0	0.1<	5<			75.2	185.0	61.6	150.0	95.6	100.0	2.8	5<	
		1㎜					2.6	5.0	1.3	5<									
	底面黒褐③	2.5㎜	91.6	80.0	16.6	60.0	2.7	5.0	1.9	5<			32.9	90.0					
		5㎜	340.8	820.0	44.4	240.0	0.1<	5<			136.0	300.0	50.3	110.0	9.0	10.0			
B-5アゼ		1㎜					0.2	5<	0.1<	5<									
	木炭層①	2.5㎜	11.4	20.0	0.9	5<					2.9	10.0	21.8	60.0					
		5㎜	32.0	70.0	0.9	5<					6.3	10.0	45.2	110.0	123.5	140.0			
		1㎜					1.4	5.0											
	木炭層②	2.5㎜	85.2	70.0	5.8	20.0	1.5	5.0			48.4	90.0	50.9	110.0					
		5㎜	175.3	450.0	12.2	50.0	0.1<	5<			51.9	110.0	86.6	260.0	163.3	170.0			
		1㎜					0.3	5<	0.1	5<									
	木炭層③	2.5㎜	16.6	35.0	1.8	5.0	0.1<	5<					86.9	210.0					
		5㎜	50.3	110.0	0.7	5<							140.4	390.0	143.3	180.0			
合計			3239.4	7440.0	322.3	1480.0	34.2	45.0	19.8	15.0	1597.4	3400.0	1632.9	4180.0	2865.9	2800.0	5.5	0.0	

※合計値には表中の0.1<（1未満）、5<（5未満）を含まない

第114表　最少個体数および同定標本数

分類群	シーリ遺構内 HF(㎜)								シーリ遺構以外		
	9.5<	5	9.5–4	2.5	4–2	PU	NISP	MNI	H19 NISP	H11 NISP	MNI
エイ・サメ類					1		1	1	7	9	3
トビエイ科							0	–		1	1
ウナギ属		2		3	4		9	1			–
ニシン科		2		21	8		31	1			–
イットウダイ亜科		1					1	1			–
ボラ科	1	9	2	22	2		36	3			–
サヨリ科		9		1			10	1			–
トビウオ科		18	3	2		1	24	1			–
トビウオ近似		44	6	2			52	2			–
ダツ科		1					1	1		1	1
ダツ目未同定		13					13	–			–
カマス属		16		6	2	2	26	2	1	2	1
ハタ科(マハタ型)		4			1	14	19	6	14	13	11
ハタ科(スジアラ型)						4	4	1		8	6
ハタ科	1	10				32	43	10	14	46	11
イトヒキアジ属(イトヒキアジ近似)				1		1	2	1		4	2
ギンガメアジ属(カスミアジ近似)						1	1	1		2	1
ギンガメアジ属(ギンガメアジ近似)		2					2	1		7	1
アジ科(大型)							0	–	2	9	1
メアジ近似種		65	19	35	2	2	123	6			–
シイラ属							0	–	3	42	2
フエダイ科		3				4	7	3	1	4	1
コショウダイ亜科						2	2	1	1	6	4
コショウダイ類似						3	3	1			–
クロダイ属	1	13	1	1		23	39	7	10	14	6
ヘダイ							0	–		1	1
ヨコシマクロダイ		3				1	4	1		6	4
メイチダイ属		1				4	5	3	1	5	4
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	1	12				21	34	22	11	45	29
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)						9	9	6	3	9	9
フエフキダイ属	2	19	1			28	50	26	17	28	17
フエフキダイ科	4	56	4			96	160	31	40	105	30
イシダイ科		1				2	3	1			–
ベラ科(シロクラベラ型)						1	1	1	4	6	8
ベラ科(B)	1					1	2	1	1		1
ベラ科(その他)		2		1			3	3		2	2
ベラ科	1	9			1	48	59	10	18	49	17
イロブダイ属							0	–		3	2
アオブダイ属A		1				14	15	7	9	34	11
アオブダイ属B	2	10				28	40	14	9	13	9
アオブダイ属		1	1			3	5	–	10	4	4
ブダイ科	4	20	1			25	50	15	6	10	4
スマ		13				5	18	2		2	1
カツオ						2	2	1		1	1
カツオ・スマ類		1	1			2	4	–		4	–
ニザダイ科	1	10	4	3		17	35	2	4	10	1
アイゴ属		18	1	5	2	2	28	2	1		1
アイゴ属(スク)				27	9		36	3			–
モンガラカワハギ科		1				4	5	3	2		–
マツカサウオ科						2	2	2	1		–
ハリセンボン科		4					4	2			–
保留		9	4	8	3		24	–	23	21	–
未同定		13		9	4		26	–	5	4	–
対象外	19	539	75	308	72	311	1324	–	112	134	–
ヘビ類		17	2	2	1	2	24	1			–
ウミガメ科							0	–		11	1
ニワトリ		1				17	18	3			–
鳥類						3	3	–			–
トガリネズミ科						3	3	1			–
ネズミ科		4	5	6	2	14	31	4	1		–
イヌ						6	6	1		14	2
ネコ							0	–		1	1
ウマ							0		2	2	1
イノシシ/ブタ	1					4	5	1	30	345	
シカ						5	5	1	1	1	1
ヤギ							0	–		40	4
ウシ							0	–	25	27	2
ジュゴン							0	–		3	1
イルカ・クジラ類							0	–		1	1
哺乳類		4	2	9	4		19				–

第115表　シーリ内遺構水洗選別資料集計表（5㎜）

分類群	部位	LR	B-5アゼ 黒褐層	灰白層	赤褐層	木炭層 ①	②	③	小計	底面黒褐層 ①	②	③	小計	合計
ニシン科	尾椎	–							0	1		1	2	2
ウナギ属	腹椎	–							0	1			1	1
	尾椎	–							0		1		1	1
ダツ科	腹椎	–					1		1				0	1
トビウオ科	腹椎	–							0		7	6	13	13
	尾椎	–					1		1	1		3	4	5
サヨリ科	腹椎	–							0			9	9	9
ダツ目未同定トビウオ近似	腹椎	–				1	4	2	7	4	19	13	36	43
	尾椎	–							0		1		1	1
ダツ目未同定	腹椎	–							0		6	7	13	13
イットウダイ亜科	前鰓蓋骨	L							0	1			1	1
ボラ科	腹椎	–					1		1		1	3	4	5
	尾椎	–					3		3	1			1	4
カマス属	腹椎	–				1	5		6	3	1	4	8	14
	尾椎	–							0		2		2	2
ハタ科マハタ型	前上顎骨	L							0			1	1	1
		R							0			1	1	1
	歯骨	L							0			1	1	1
		R							0			1	1	1
ハタ科	主上顎骨	R							0		1	1	2	2
	角骨	L							0			1	1	1
		R					1		1			2	2	3
	方骨	L							0		1	1	2	2
		R							0		1	1	2	2
アジ科ギンガメアジ近似	歯骨	L							0		1		1	1
		R							0			1	1	1
アジ科メアジ近似	主上顎骨	R							0	1			1	1
	前上顎骨	L					1		1				0	1
		R							0		2		2	2
	角骨	R					1		1	1			1	2
	方骨	L					1		1			1	1	2
	尾椎	–					16	1	17	4	12	23	39	56
	腹椎	–				1			1				0	1
フエダイ科	主上顎骨	L							0	1			1	1
	前上顎骨	L							0			1	1	1
	歯骨	R							0			1	1	1
クロダイ属	主上顎骨	L					2		2	1	1		2	4
		R					1		1			2	2	3
	前上顎骨	L							0	1			1	1
		R							0			1	1	1
	歯骨	L					1		1				0	1
		R							0		1		1	1
	角骨	L							0	1			1	1
		R							0		1		1	1
ヨコシマクロダイ	前上顎骨	R							0	1			1	1
	歯骨	R							0		1		1	1
	方骨	R					1		1				0	1
メイチダイ属	前上顎骨	L							0	1			1	1
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	L					1	1	2	3	1	1	5	7
		R						1	1		1	3	4	5
フエフキダイ属型不明	前上顎骨	L							0			1	1	1
		R							0	1			1	1
フエフキダイ属	口蓋骨	L				1			1	2	4	4	10	11
		R						2	2		1	3	4	6
フエフキダイ科	主上顎骨	L					3		3	1	1	2	4	7
		R						2	2	4	2	3	9	11
	歯骨	L				1	1		2	1	1	1	3	5
		R					1	1	2			2	2	4
	角骨	L						1	1	4		4	8	9
		R							0		2	4	6	6
	方骨	L					1		1	1	1	3	5	6
		R					1		1	1	2	4	7	8
イシダイ科	歯骨	R							0			1	1	1

分類群	部位	LR	B-5アゼ 黒褐層	灰白層	赤褐層	木炭層 ①	②	③	小計	底面黒褐層 ①	②	③	小計	合計
ベラ科その他	下咽頭骨	–				1			1			1	1	2
ベラ科	主上顎骨	L					1		1				0	1
	前上顎骨	L						1	1				0	1
	顎骨	不明						1	1				0	1
	角骨	R					1		1		1		1	2
	方骨	L					1		1			1	1	2
		R							0			1	1	1
ベラ科?	主上顎骨	R							0			1	1	1
アオブダイ属A	前上顎骨	R							0			1	1	1
アオブダイ属B	前上顎骨	L							0	1	1	1	3	3
		R						1	1	1	1		2	3
	歯骨	L				1			1		1		1	2
		R							0			2	2	2
アオブダイ属	下咽頭骨	–							0			1	1	1
ブダイ科	主上顎骨	L					1		1		1	2	3	4
		R							0		4	1	5	5
	角骨	L							0	1			1	1
		R				1			1			2	2	3
	方骨	L					1		1		1	1	2	3
		R				1			1	1	1	1	3	4
スマ	前上顎骨	L							0		1		1	1
	角骨	R					1		1				0	1
	腹椎	–					1		1				0	1
	尾椎	–							0			10	10	10
カツオ・スマ類	前上顎骨	R							0			1	1	1
ニザダイ科	前上顎骨	L							0	1			1	1
	擬鎖骨	L					1		1				0	1
	腹椎	–					1		1			1	1	2
	尾椎	–						2	2		3	1	4	6
アイゴ属	腹椎	–				1	4		5		1	1	2	7
	尾椎	–				1	1		2	2	5	2	9	11
モンガラカワハギ科	尾椎	–							0	1			1	1
ハリセンボン科	角骨	L							0		2		2	2
		R							0		2		2	2
魚類保留	主上顎骨	L							0			1	1	1
		R							0			1	1	1
	前上顎骨	R							0	1			1	1
	角骨	L							0		1		1	1
		R							0	1			1	1
	方骨	R							0		1		1	1
	尾椎	–							0		1	2	3	3
魚類未同定	歯骨	L							0			1	1	1
	角骨	L							0		3		3	3
	方骨	L							0	1			1	1
		R							0		1	1	2	2
	腹椎	–					4	1	5				0	5
	尾椎	–						1	1				0	1
魚類対象外	腹椎	–				5	27	30	62	8	31	23	62	124
	尾椎	–				12	109	7	128	29	116	142	287	415
ヘビ類	椎骨	–					10	3	13	2	2		4	17
ニワトリ	脛骨	L						1	1				0	1
ネズミ科	下顎骨	L				1			1				0	1
	上腕骨	R						1	1		1		1	2
	尺骨	R						1	1				0	1
哺乳類	腰椎	–					1		1		2		2	3
	環椎	–							0		1		1	1
合計														981

第116表　シーリ内遺構水洗選別資料集計表(9.5㎜)

分類群	部位	LR	B-5(畦) 黒褐色土層	灰白色土層	赤褐色土層①	木炭層 ①	②	③	小計	底面黒褐色土層 ①	②	③	小計	合計
ボラ科	尾椎	–		1					0				0	1
ハタ科	方骨	L		1					0				0	1
クロダイ属	方骨	R			1				0				0	1
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	L		1					0				0	1
フエフキダイ属	口蓋骨	L							0	1			1	1
		R				1			1				0	1
フエフキダイ科	主上顎骨	R			1				0				0	1
	角骨	L		1					0				0	1
		R		1	1				0				0	2
ベラ科B	上咽頭骨	L			1				0				0	1
ベラ科	前上顎骨	R			1				0				0	1
アオブダイ属B	歯骨	L			1				0				0	1
		R							0	1			1	1
ブダイ科	主上顎骨	L		1					0				0	1
	方骨	L		1					0	1			1	2
		R							0	1			1	1
ニザダイ科	歯骨	L								1			1	1
魚類対象外	腹椎	–			2				0				0	2
	尾椎	–		4	7	5			5	1			1	17
イノシシ/ブタ	中節骨	不明			1									1
合　計														39

第118表　シーリ内遺構水洗選別資料集計表(2.5㎜)

分類群	部位	LR	B-5(畦) 黒褐色土層	灰白色土層	赤褐色土層①	木炭層 ①	②	③	小計	底面黒褐色土層 ①	②	③	小計	合計
ニシン科	腹椎	–							0			2	2	2
	尾椎	–							0		4	15	19	19
ウナギ属	尾椎	–					1	1	2		1		1	3
トビウオ科	腹椎	–					1		1			1	1	2
サヨリ科	腹椎	–					1		1				0	1
ダツ目未同定トビウオ近似	腹椎	–							0		2		2	2
ボラ科	腹椎	–					4		4		1	14	15	19
	尾椎	–							0		1	2	3	3
カマス属	前上顎骨	L					1		1				0	1
		R							0			1	1	1
	腹椎	–				1			1		1	2	3	4
アジ科イトヒキアジ近似	主上顎骨	L				1			1				0	1
アジ科メアジ近似	主上顎骨	R							0		1	1	2	2
	前上顎骨	R						1	1				0	1
	方骨	L						1	1				0	1
	尾椎	–				1	9		10		3	10	13	23
	腹椎	–				1	1		2		1	5	6	8
クロダイ属	前上顎骨	R							0		1		1	1
ベラ科その他	下咽頭骨	–							0			1	1	1
ニザダイ科	腹椎	–						1	1				0	1
	尾椎	–				1		1	2				0	2
アイゴ属	腹椎	–					2		2			1	1	3
	尾椎	–						1	1			1	1	2
アイゴ属(スク)	腹椎	–					6		6				0	6
	尾椎	–					20		20			1	1	21
魚類保留	腹椎	–				3			3			1	1	4
	尾椎	–						3	3			1	1	4
魚類未同定	腹椎	–					1		1				0	1
	尾椎	–						2	2			6	6	8
魚類対象外	腹椎	–				1	22	4	27		9	21	30	57
	尾椎	–				12	62	18	92		42	117	159	251
ヘビ類	椎骨	–							0		1	1	2	2
ネズミ科	切歯	不明						2	2				0	2
	尺骨	R						1	1				0	1
	大腿骨	L						1	1				0	1
	脛骨								0		1		1	1
		R						1	1				0	1
哺乳類	軸椎	–					1		1				0	1
	頸椎	–				1	1	2	4		3		3	7
	腰椎	–					1		1				0	1
合　計														472

第117表　シーリ内遺構水洗選別資料集計表(9.5–4㎜)

分類群	部位	LR	B-5(畦) 黒褐色土層	灰白色土層	赤褐色土層①	木炭層 ①	②	③	小計	底面黒褐色土層 ①	②	③	小計	合計
トビウオ科	腹椎	–							0	2			2	2
	尾椎	–							0	1			1	1
ダツ目未同定トビウオ近似	腹椎	–			6				0				0	6
ボラ科	腹椎	–		1		1			1				0	2
アジ科メアジ近似	前上顎骨	R			1				0				0	1
	方骨	R			1				0				0	1
	尾椎	–		2	13				0				0	15
	腹椎	–				1			1	1			1	2
クロダイ属	前上顎骨	R		1					0				0	1
フエフキダイ属	口蓋骨	L							0	1			1	1
フエフキダイ科	主上顎骨	L		1					0				0	1
		R		1					0				0	1
	歯骨	R		1					0	1			1	2
アオブダイ属	歯骨	L							0	1			1	1
ブダイ科	方骨	R							0	1			1	1
カツオ・スマ類	主上顎骨	L							0	1			1	1
ニザダイ科	尾椎	–		1	2				0	1			1	4
アイゴ属	腹椎	–							0	1			1	1
魚類保留	尾椎	–			4				0				0	4
魚類対象外	腹椎	–		8	9	1			1	2			2	20
	尾椎	–		14	28				0	13			13	55
ヘビ類	椎骨	–			2				0				0	2
ネズミ科	上顎骨	R				1			1				0	1
	肩甲骨	L			1				0				0	1
	肩甲骨	R		1					0				0	1
	上腕骨	L							0	1			1	1
	寛骨	L			1				0				0	1
哺乳類	腰椎	–				2			2				0	2
合　計														132

第119表　シーリ内遺構水洗選別資料集計表(4–2㎜)

分類群	部位	LR	B-5(畦) 黒褐色土層	灰白色土層	赤褐色土層①	木炭層 ①	②	③	小計	底面黒褐色土層 ①	②	③	小計	合計
サメ類	歯	–				1			1				0	1
ニシン科	腹椎	–							0	1			1	1
	尾椎	–		2	1	2			2	2			2	7
ウナギ属	腹椎	–		1					0				0	1
	尾椎	–		2					0	1			1	3
ボラ科	腹椎	–		2					0				0	2
カマス属	歯骨	R							0	1			1	1
	前上顎骨	R		1					0				0	1
ハタ科マハタ型	前上顎骨	L		1					0				0	1
アジ科メアジ近似	尾椎	–		1					0	1			1	2
ベラ科	主上顎骨	R			1				0				0	1
アイゴ属	腹椎	–		1					0				0	1
	尾椎	–		1					0				0	1
アイゴ属(スク)	尾椎	–		5	4				0				0	9
魚類保留	尾椎	–		3					0				0	3
魚類未同定	腹椎	–				1			1				0	1
	尾椎	–		2					0				0	2
	角骨	L		1					0				0	1
魚類対象外	尾椎	–		30	16	7			7	7			7	60
	腹椎	–		3	2	5			5	2			2	12
ヘビ類	椎骨	–							0	1			1	1
ネズミ科	上顎骨	L				1			1				0	1
	尺骨	R				1			1				0	1
哺乳類	頸椎	–		2					0				0	2
	腰椎	–		2					0				0	2
合　計														118

（4）考 察

上記の分析内容を踏まえ、御内原北地区及びシーリ遺構の動物遺体出土様相について考察を述べる。御内原という立地を考慮すれば、動物の持ち込みは大半が食用であり、持込物の選択制など内容に関して強い意識が働いたものと推測され、考察に際して念頭に置かなければならない要素である。また、シーリ遺構内の出土遺物は基本的に御内原地区において利用されたものが最終的に埋没したものであると考える。

HF資料の重量・容量比率を比較すると、動物骨（ほとんどが魚骨）資料が両者において最多を占める結果となった。非常に雑多な種類の「廃棄物」が出土する中で、魚骨が最多である点が着目される。炭化物や糞石などいずれも日常的に排出されるものが併存する状況にあって他群に優占することが、御内原における魚類利用頻度の高さを反映しているのではないかと考えられる。（ただし、出土資料一個の持つ意義は、動物遺体・陶磁器・植物遺体など各々で異なるため、魚類以外の利用が「低調」だと示すわけではない。）

魚類の利用相に言及すれば、その中心はフエフキダイ科・ブダイ科などのサンゴ礁域に特徴づけられる漁撈を反映した結果と考えられるが、その一方でスマ・カツオ類・アジ科など外洋・回遊性や、クロダイ属・ボラ科など河口付近に見られる魚類が含まれる点から、サンゴ礁域に限定されない多様な種類の魚類利用を窺わせる。また、アジ科小型種やニシン科、トビウオ科、アイゴ属スクなどの魚類の出土に注目される。「首里城御内原地区」においても、これらのような「小型」魚種が食性の一端を担っていたと言うことができよう。

分析において前上顎骨の観察からフエフキダイ科は3属が同定される上、フエフキダイ属を二分している。さらにハマフエフキ型とアマミフエフキ型に分けた中には完全には両者に形状が一致しない前上顎骨は便宜上近しい群へ含めている。種間差や個体差かは明確でないものの、雑多な「種」が混在している可能性があると思われる。また、ブダイ科は大半がアオブダイ属に同定され、本分析においては更にA、Bの分類群を設けた。両者の前上顎骨・歯骨の形状における差は比較的明確であるため、いずれの種とするかは不明確であるものの、特定の2群に集中して出土している可能性は指摘できよう。特にB型については個別資料間の差も少ないように感じられる。ブダイ科については持込みに際してある程度の選択が働いた可能性が示唆される。

次に魚類の出土部位に関する傾向についてである。ブダイ科及びベラ科の咽頭骨が頑強である点は先述したが、鱗を含めた両者の全身部位が出土する中で咽頭骨が出土しない状況は「通常」の出土傾向からすれば「異様」な内容である。これは、御内原地区への持込み形態に起因すると考えられる。咽頭骨は通常魚を捌く際、鰓に付属して抜き取られる部位であることがポイントである。即ち、御内原地区へブダイ科・ベラ科の魚が持ち込まれるときには、「鱗が付いたまま内臓が抜かれ、且つ全身が揃った状態に加え、細かく解体されてもいない状態」だったと推測されるのである。

魚類以外の鳥類あるいは哺乳類についてはシーリ遺構内からの出土は極めて少数に留まることから、積極的に利用様相に言及することは難しい。ただし、首里城他地区の調査事例では（沖縄県立埋蔵文化財センター2005ほか）、数多くの出土数をみてとれる。とすれば、本遺構から鳥・哺乳類骨の出土が僅少である点は、利用が薄弱であったというより、遺構に対する投棄がなされない状況を想定すべきだろう。すなわち、御内原地区へ鳥・哺乳類を食用として持ち込む際には、既に骨から取り外された状態であり、結果として本遺構内へ骨の埋没が少なくなると考えることが妥当ではなかろうか。解体された上で骨を取り外す調理方法が用いられたであろうことを示唆する。

（5）まとめ

御内原地区という首里城「最奥」の位置づけにある地区の出土資料を考察することは、琉球王国における最上位層の人々の生活様相に言及することに他ならない。本節で述べた脊椎動物遺体の分析・考察結果が、その一端を示すと思われる。ただし、出土品は上位層と同時に御内原地区に仕えた人々がそこで生活した結果をも含んでいる可能性が十分に考えられるため、データを解釈する際にはこの点にも注意を払う必要があるだろう。

調査で得られた資料中には、未同定資料などの十分に検討しきれなかったものや、時間等の都合上で分析対象外としたものも残されている。これらについては今後、明らかにすべき課題として、更なる検討を続けていきたい。

謝辞：本分析にあたり現生標本を参照させていただくと共に、同定について西本豊広氏・樋泉岳二氏に御助言賜った。また、土壌サンプル処理については、黒住耐二氏にお世話になった。その他関係各所の方々に対して末筆ながら記して御礼申し上げる次第である。

〈引用・参考文献〉

上野輝彌 2005『新版　魚の分類の図鑑　世界の魚の種類を考える』東海大学出版会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『首里城跡―右掖門及び周辺地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡―書院・鎖之間地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告第28集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡―御内原地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第34集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『首里城跡―御内原西地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第44集

樋泉岳二・名島弥生・菅原広史 2009「今帰仁城跡主廓東斜面から出土した脊椎動物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅳ』今帰仁村文化財調査報告書第26集

樋泉岳二 2007「第四節　今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群―Ⅲ区b・東7区・シニグンニ―」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ―村内遺跡発掘調査報告―』今帰仁村教育委員会

仲座久宜 2009「シーリ遺構から見る御内原のくらし」『沖縄埋文研究』第6号

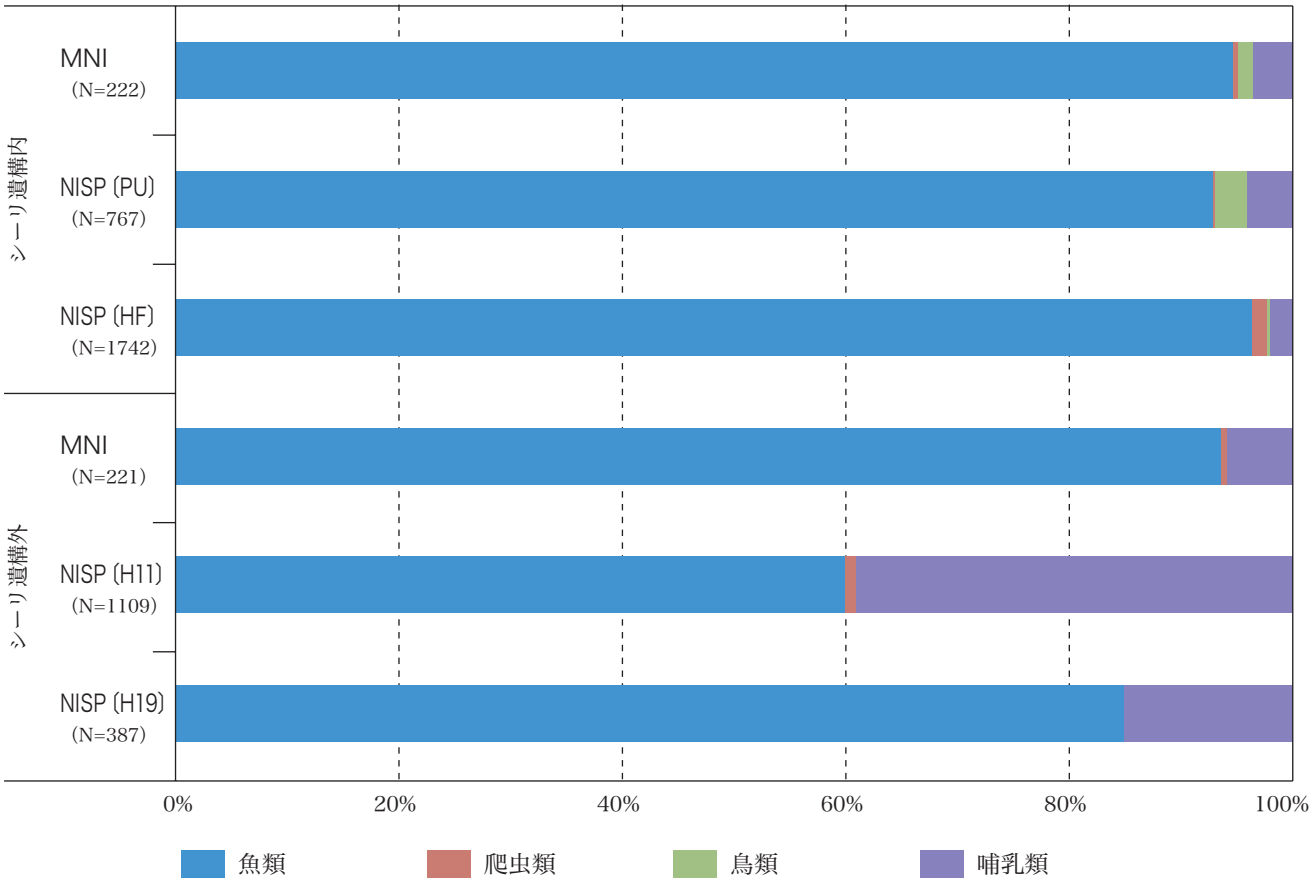
名島弥生 2005「第四節　今帰仁城跡周辺遺跡出土脊椎動物遺体」『今帰仁城周辺遺跡Ⅱ―今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』今帰仁村教育委員会

名島弥生・樋泉岳二2007「南島考古学におけるフエフキダイ科魚類の属レベルでの同定とその意義」『第11回動物考古学研究集会発表資料』

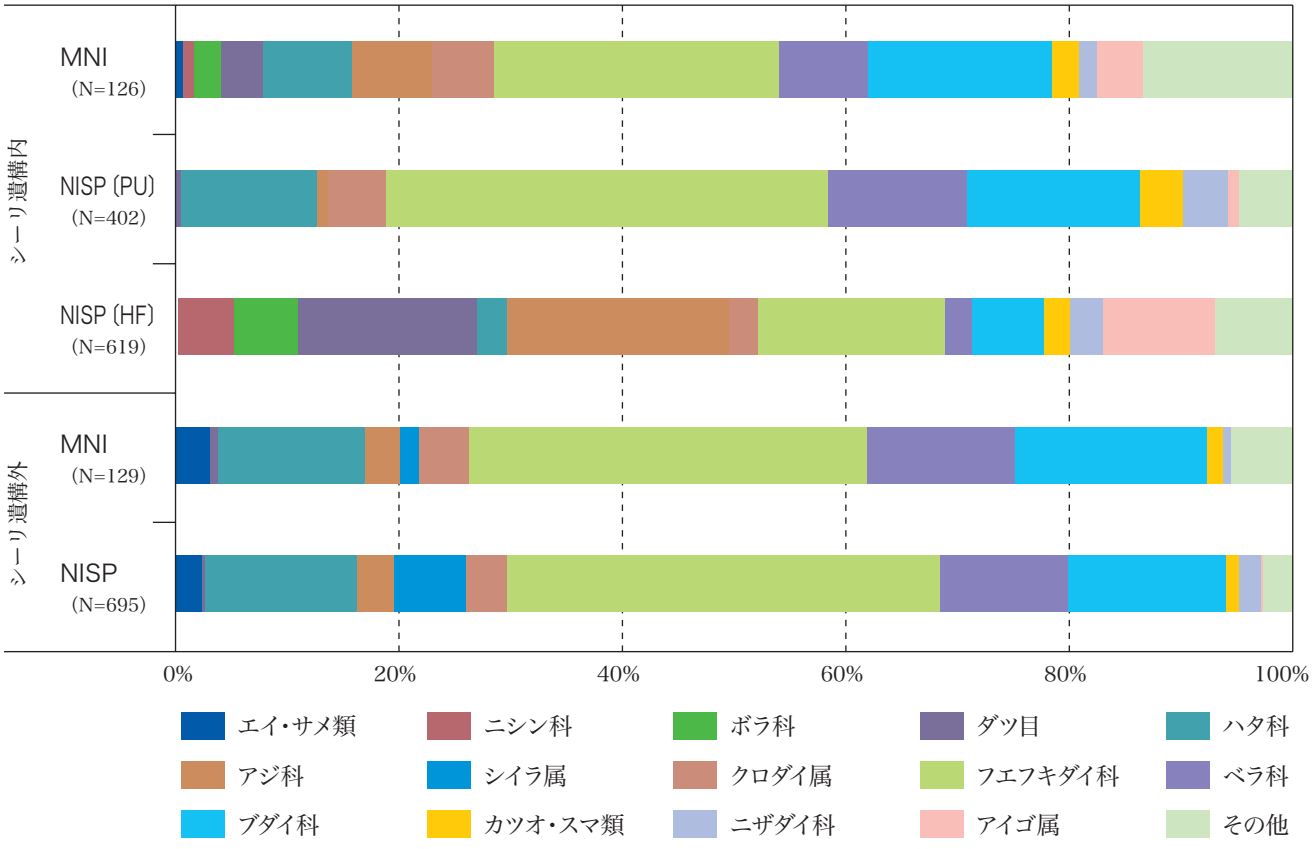
菅原広史 2009a「第5章第2節4．脊椎動物利用にみるアンチの上貝塚の人間活動」『瀬底島・アンチの上貝塚―個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書―』本部町文化財調査報告書第9集

菅原広史 2009b「首里城および周辺遺跡出土のシカに関する考察」『沖縄埋文研究』第6号　沖縄県立埋蔵文化財センター

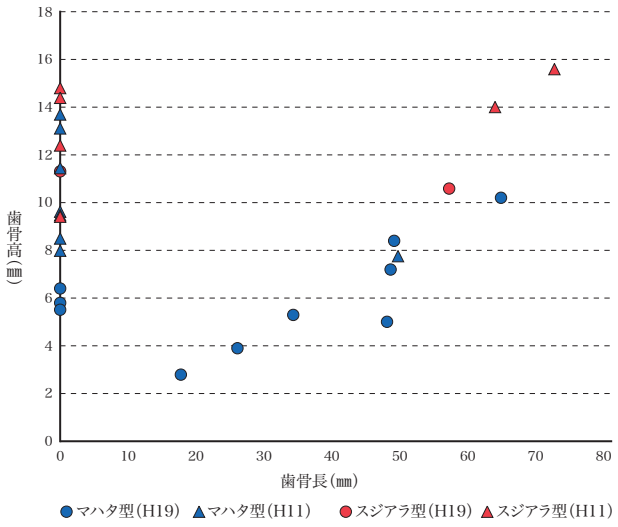
A. von den Driesch 1976 “A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites”　Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University



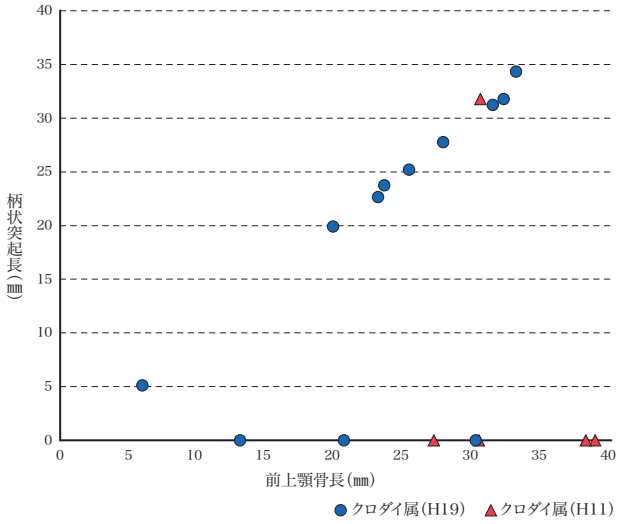
第167図　脊椎動物遺体組成



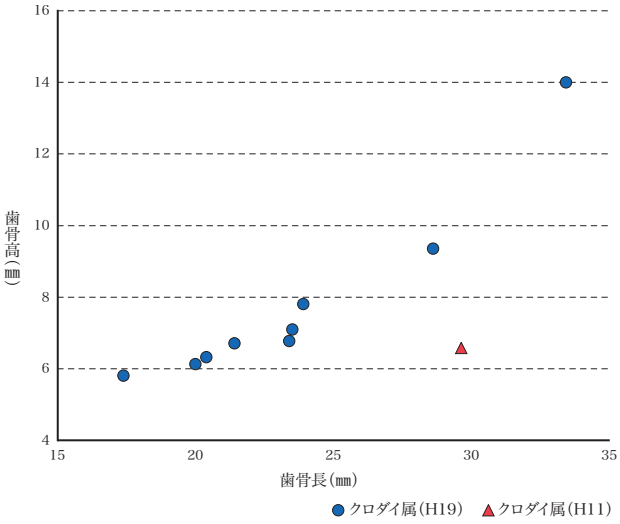
第168図　魚類組成



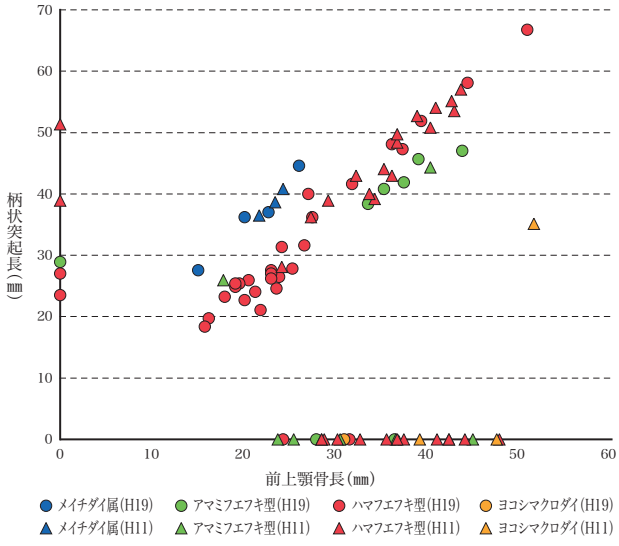
第169図　ハタ科歯骨計測値分布



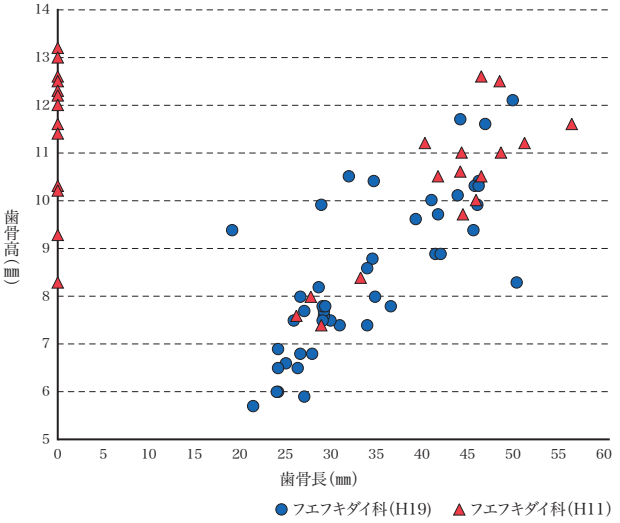
第170図　クロダイ属前上顎骨長計測値分布



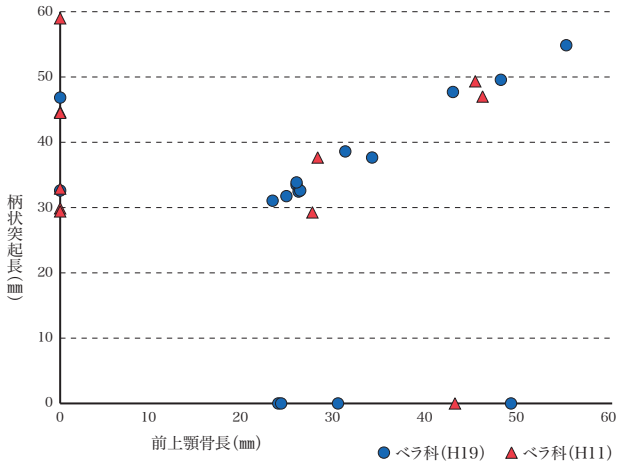
第171図　クロダイ属歯骨計測値分布



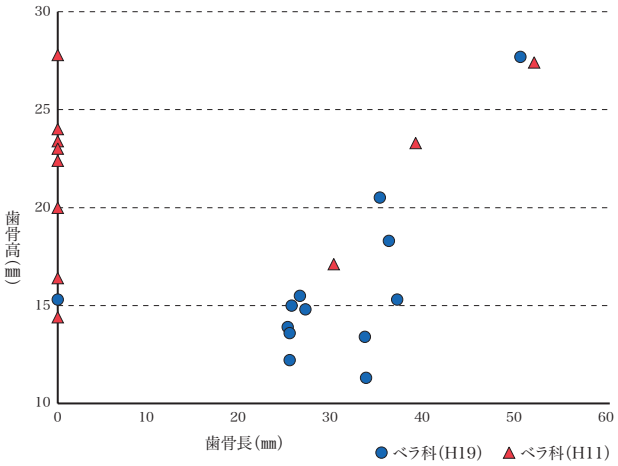
第172図　フエフキダイ科前上顎骨計測値分布



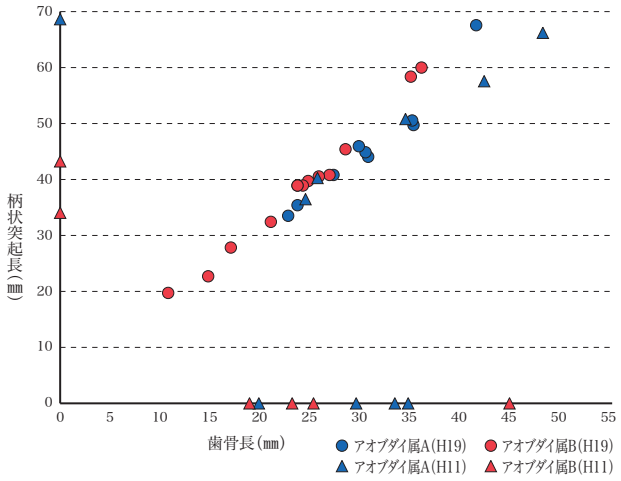
第173図　フエフキダイ科歯骨計測値分布



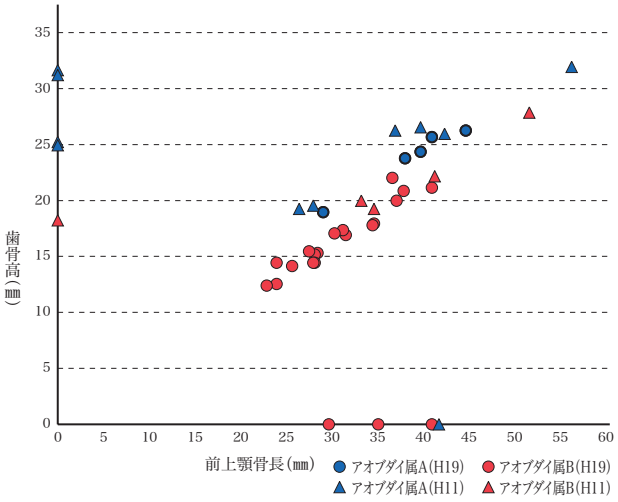
第174図　ベラ科前上顎骨計測値分布



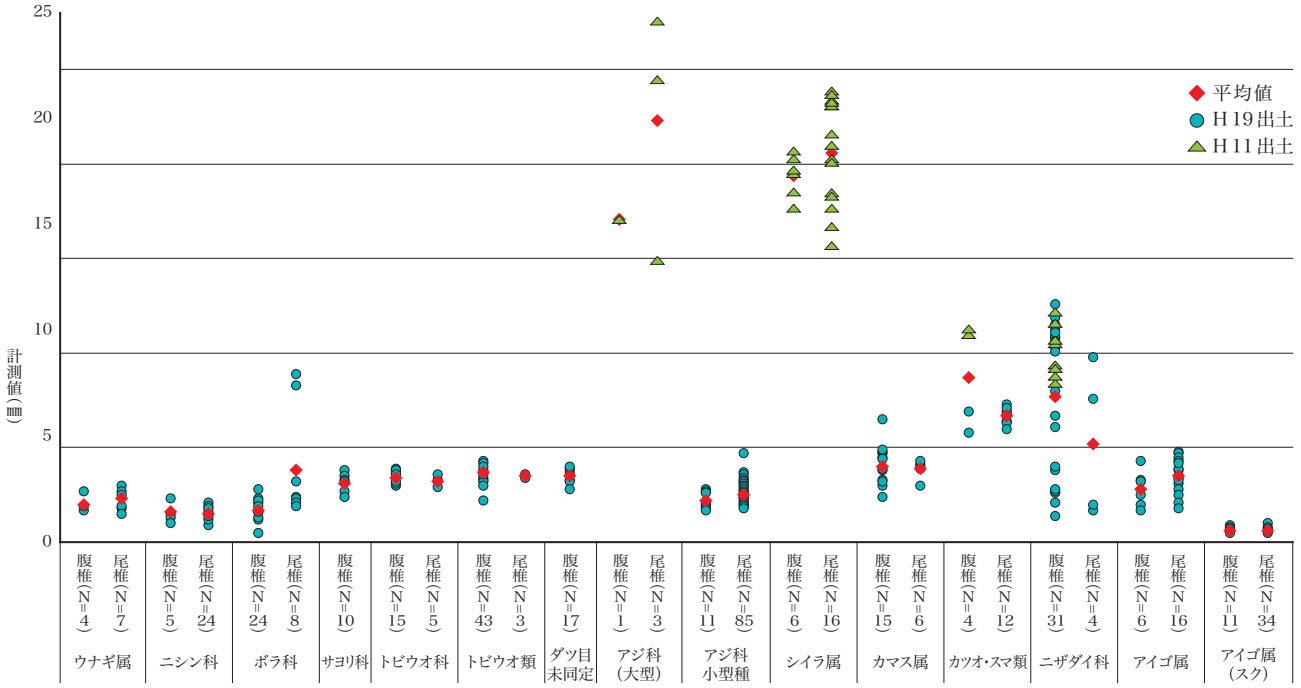
第175図　ベラ科歯骨計測値分布



第176図　アオブダイ属前上顎骨計測値分布



第177図　アオブダイ属歯骨計測値分布



第178図　魚類椎骨計測値分布

４．人骨（シーリ遺構内）

片桐千亜紀・土肥直美（琉球大学）

①はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターが平成19（2007）年度に実施した、首里城跡御内原北地区シーリ遺構より出土した遊離歯（永久歯・乳歯）について報告する（図版162）。

今回出土した乳歯・永久歯の遊離歯は、出土量こそ少ないものの、御内原内で展開された国王やその親族、女官達の生活の一端が推測できる貴重なものである。

②資料と調査方法

シーリ遺構から出土した遊離歯は乳歯４本、永久歯３本の計７本である。それぞれ歯種別の数量を第179図に示す。

歯の鑑定の際に用いた年齢区分はKnussman（1988）を参考にした。年齢の推定はUbelaker（1989）を参考に歯の放出状態から、Brothwell（1981）を参考に咬耗度から行った。

乳歯の数量

E	D	C	B	A	A	B	C	D	E
						2	1		1
E	D	C	B	A	A	B	C	D	E

永久歯の数量

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
											1				
							1							1	
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

第179図　歯種別数量

③歯の所見

それぞれの歯の所見について、第120表に示す。

第120表　歯の観察一覧

名　称	歯　種	年　齢	所　見
1号人骨	乳　歯　上顎左乳側切歯	7歳前後	歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。
2号人骨	乳　歯　上顎左乳側切歯	7歳前後	歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。舌側面の摩耗が著しい。
3号人骨	乳　歯　上顎左乳犬歯	10歳前後	歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。
4号人骨	乳　歯　上顎左第二乳臼歯	10歳前後	歯根部吸収、空洞化。自然脱落の可能性が高い。近心面にC４段階の齲歯。
5号人骨	永久歯　下顎右中切歯	成　人	舌側面に多量の歯石。
6号人骨	永久歯　上顎左第一小臼歯	成　人	遠心面歯根部中央付近まで歯石。
7号人骨	永久歯　下顎左第二大臼歯	成　人	遠心面エナメル質境界面を中心にC４段階の齲歯。

④まとめ

歯の数量と状態によって最小個体数を推定すると４体となる（第120表）。しかし、遺跡が通常人骨が検出される「墓」ではなく、住居空間の生活ゴミ廃棄施設であるシーリ遺構という性格を考えると、一個人の歯が同時にいくつも脱落したとは考えにくく、１本１本が別々の個人のものである可能性が高いと考えるほうが妥当かもしれない。

年齢を推定すると少なくとも７歳前後の小児２名、10歳前後の小児、成人が存在した（第120表）。乳歯については、歯根部がじゅうぶん吸収されており、内部が空洞化していることから、成長にとも

なって自然に脱落したものと考えられる。シーリ遺構は女官達によって使用されたと推定されていることから（仲座2009）、成人の永久歯は女官のものである可能性が示唆されるが、6歳～10歳の小児も存在したことは、御内原の実態が垣間見えるようで、注目される。歯の健康状態を観察すると、4・7号人骨にC４段階の激しい齲歯が認められ、6号人骨は齲歯こそ見られないものの、歯根部中央付近にまで多量の歯石が認められることから、持ち主は歯周ポケットが形成されるような重い歯周病を患っていた可能性がある。以上のことから、これら3本の永久歯の持ち主は、激しい齲歯や歯周病等の口内環境の悪化によってその歯が脱落、もしくは抜歯を行ったと推定される。

シーリ遺構に廃棄された歯の存在意義を考えると、御内原に暮らす人々は、成長に伴って脱落した乳歯であれ、口内環境の悪化に伴って脱落・抜歯した永久歯であれ、生活ゴミと同様の扱いをする思考があった可能性がある。首里城御内原で生活する人々でさえそうならば、近世初頭の琉球王国内の習俗には、脱落した歯を大切にする意識が存在しなかったのかもしれない。

今回確認された事例は首里城御内原だけでなく、琉球王国時代の習俗を推定する上で極めて貴重である。今後、遊離歯のような小さい遺物も注意深く遺跡から回収することによって、さらに様々な事実がわかるだろう。

本稿をまとめるにあたり、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に歯の鑑定や所見についてご教授たまわった。沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査嘱託員の徳嶺里江氏には整理の御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

仲座久宜 2009「シーリ遺構から見る御内原のくらし」『紀要沖縄埋文研究6』 沖縄県立埋蔵文化財センター

Knussman R.1988 Martin/knussman Anthropologie.Band1,Stuttgart,Gustav Fischer Verlag.

Ubelaker.1989 Human Skeletal Remains.2nd ed.Taaraxacum Press, Washington,D.C.

Brothwell.D.R1981 Digging up Bones.

図版162　遊離歯（1．4号人骨の齲歯、2．6号人骨の歯石、3．7号人骨の齲歯）

5. 種実類（シーリ遺構内）

シーリ遺構内からは、植物の種子や実と思われる遺物も多数出土している。これらは、調査中にピックアップした資料と、フローテーションにより得られたものとがあり、数種が認められた。これらの種実類は、他の資料とともに自然科学分析委託の中で種実同定を行い、詳細は第６章自然化学分析の章で報告するが、ここではシーリ遺構内から出土した自然遺物の一部として概要を報告する。

栽培種は、木本1分類群（常緑小高木〜高木のシュロ属?）1個、草本7分類群（イネ、マメ類、メロン類、トウガン、カボチャ属?、ウリ科、センダングサ節）112個が検出されたほか、種類・部位不明の双子葉類の種実２個、種実の可能性を含む不明物質47個、炭化材13個が確認された。検出された種実は全て硬化しており、これは炭酸カルシウムにより置換されているためと推定される（図版165）。

栽培種では、イネの胚乳４個（B-５シーリ遺構内）、マメ類の種子15個（各地点）、メロン類の種子83個（B-4シーリ遺構内より１個、B-5シーリ遺構内アゼより63個、シーリ遺構内より19個）、トウガンの種子１個（B-５シーリ遺構内）、カボチャ属?の種子６個（B-5シーリ内アゼ）が確認された。特に、B-５シーリ内アゼの底面黒褐1と黒褐４からは、メロン類の種子が多く検出され、種皮表面に胎座や内果皮が付着した個体も確認されている。

これらの種実の内、シュロ属とセンダングサ節については、遺構周辺に生育していた植物である可能性がある。それ以外の種実類に関しては、食材として利用された植物の可能性が高く、当時の食材の一端を知ることができる。なお、この成果は、土壌及び糞石内の花粉分析結果と合わせ、周辺の植生等の環境復元の参考になるものと思われる。

6. 糞石（シーリ遺構内）

①出土状況及び回収法

平成19年度の調査では、糞石が多数出土している。糞石とは字のごとく、動物の排泄物が形状を保ったまま化石化したもので、国内では福井県鳥浜貝塚の例が著名である。

通常、動物の糞は分解するため残りにくいが、シーリ遺構は精緻な石組みで築造されており、その上面が粘土質の土砂に覆われていたため遺構内がパックされ、原形を留めていたことが考えられる。また、糞石は遺構内堆積土からまんべんなく出土しており、当時は生ゴミ等とともに、糞便も恒常的に廃棄していたと思われる。さらに、遺構内部の堆積状況から、繰り返し掻き出して使用していたことが想定できる。

この糞石は調査時において、その色や形状をリアルに保っていたことから、発見当初からその可能性がある遺物として取り扱ってきた。今回は遺構内の全堆積土を土嚢袋32点に回収し、将来的に、より詳細な分析を行うための保存用土壌を一部残し、その他はフローテーション後に浮いた遺物と、５㎜、2.5㎜、１㎜のメッシュにより採取した遺物を種類ごとに仕分け、分析を行った。そのため遺物は、①発掘作業中に回収、②土壌採集後フローテーション直前に回収、③フローテーション後に選別、の３通りの回収法で得られたことになり、糞石は①及び②の回収法では形状をほぼ保っているが、③の回収法においては、事前に回収が困難な破片が多い。

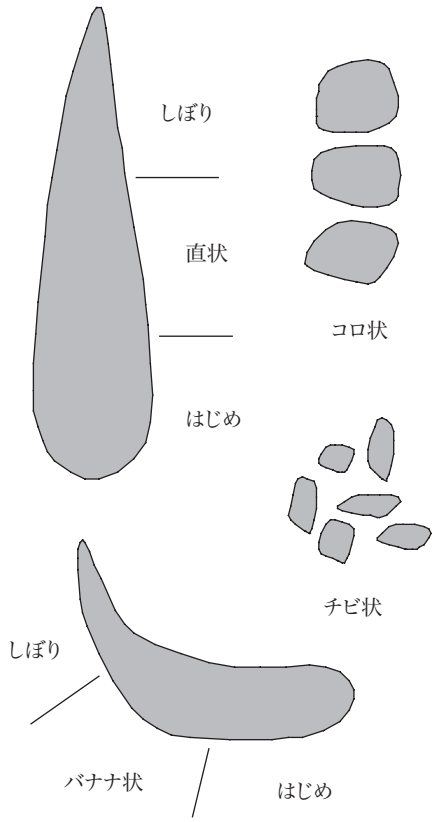
②形状・色調

糞石の形状及び部位・状態については、鳥浜貝塚報告の中で大別されており（千浦1979）、これに準じて行うことにする（第180図）。この中で糞石の部位名称として、排便のはじめの部分を「はじめ」、まっすぐな棒状の部分を「直状」、最後にしぼり出されて尖った部位を「しぼり」としている。また、全体の形状として、錬成度が高いバナナの形状を「バナナ状」とし、強度の便秘の便は丸いことから「コロ状」、軟便や崩れた形状を「チビ状」として分けている。

首里城から出土した糞石は、表面に付着物が多く、当初の形状が明瞭でないものも含まれるが、鳥浜貝塚分類に現れる形状を網羅しており、バナナ状の糞石に関しても、はじめ、直状、しぼりの区分が認められる資料が含まれる（図版163）。なお、今回は小破片が多いことから計量のみを行い、総計で3317.3gの糞石が得られている。

その色調は、調査時においては潤いのある茶褐色を呈し、とても何世紀もの年月を経たものと思えないほど、その色調を保ったままでいたが、乾燥するとやや白色に変色する傾向にある。

この出土した糞石１点について、自然化学分析を委託した。分析内容は、①微細遺物分析・種実同定、②花粉・寄生虫卵分析、③実体顕微鏡観察、④薄片作成・鑑定、⑤X線回折分析の５件である。この総合的な成果は、第６章の自然科学分析にて詳細に報告するが、寄生虫卵分析により、線虫及び便虫卵が多数検出されており、ヒトの糞石であることが判明している。この事例により、首里城内ではゴミ穴に排泄物を廃棄していたことがわかる。



第180図　糞石の部位及び名称
（千浦1979をもとに作成）

〈引用・参考文献〉

千浦美智子 1979「糞石」『鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査―』福井県教育委員会

図版163　糞石

第６章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平成19（2007）年度の調査において自然化学分析を委託した。今回の分析は、火災面と考えられる堆積層及び、ゴミ穴の可能性が指摘されるシーリ遺構を対象に、その性格及び年代推定を目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、寄生虫卵分析、微細遺物分析、種実同定、昆虫同定を実施した。また、同じシーリ遺構から検出された糞石と思われる土塊についても、実体顕微鏡観察、薄片作成・鑑定、X線回折分析、微細遺物分析、花粉分析、寄生虫卵分析を実施した。

なお、本章で報告する分析業務は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。以下に分析結果を報告する。

１．試料

試料は、E-５グリッド第６層焼土層、C-５グリッド第３層表面の焼土面、B-４グリッドのゴミ穴とされるシーリ遺構の３箇所から採取したものである。

このうち、E-５およびC-５グリッドについては、採取された炭化物を用いて年代測定を行う。シーリ遺構は、中部および下部の堆積土を採取し、放射性炭素年代測定１点、微細遺物分析１点、花粉分析、寄生虫卵分析２点も実施し、これとは別に大量の試料を水洗して得られた種実遺体、昆虫遺体についても、それぞれ同定を実施する。また、シーリ遺構より検出された糞石とされる土塊1点について、実体顕微鏡観察、薄片作成・鑑定、X線回折分析、微細遺物分析、花粉分析、寄生虫卵分析を実施する（第121表）。

第121表　分析試料一覧

グリッド	分析対象	試料種別	分析項目*						
			14C	花粉・寄生	微細	種実	X線	薄片	昆虫
E-5	第6層	炭化物	○						
C-5	第3層表面(焼土面)	炭化物	○						
B-4	シーリ遺構	土壌	○	○	○				
		糞石		○	○		○	○	
		水洗済み試料				○			○

２．分析方法

(1)放射性炭素年代測定

試料に土壌や植物根など、目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

この試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）、850℃（2時間）で加熱する。次に、液体窒素と液体窒素＋エタノール

の温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と、鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

続いて、化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12C の測定も行うため、この値を用いてδ13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお暦年較正は RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（2）微細遺物分析・種実同定

シーリ遺構の土壌試料（黒褐色土）は、200cc（312.5g）を、糞石とされる土塊は試料8.7gを水に浸し、粒径0.5㎜のふるいを通して水洗する。ふるい内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材（主に径4㎜以上）などの植物質遺物や動物遺存体を抽出する。

抽出された種実と単体試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。

分析後は、種実等を種類毎に容器に入れて返却する。炭化材は70℃（48時間）で乾燥させたあと、容器に入れ返却する。

（3）花粉分析・寄生虫卵分析

シーリ遺構の土壌試料は、10ccを正確にはかり取る。糞石とされる土塊は、微細遺物分析でふるいを通過した粒径0.5㎜以下の粒子を全て回収し、分析試料とする。これらについて水酸化カリウムによる泥化（糞石とされる土塊はこの行程を省く）、ふるい別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。

結果は、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については1cc あたりに含まれる寄生虫卵の個数として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。

（4）昆虫同定

双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種類を同定する。なお、同定解析は松本浩一氏(東京農業大学)の協力を得ている。

（5）実体顕微鏡観察

分析試料をノギスにて測定し、実体顕微鏡下において表面構造、含有物を確認する。また、カッターを用いて試料を切断し、断面についても同様の観察を実施する。観察後の試料は、薄片作成・鑑定、X線回折分析、微細遺物分析、花粉分析・寄生虫卵分析用使用としてそれぞれ用いる。

（6）薄片作成・鑑定

試料は樹脂による固化の後、ダイヤモンドカッターにより切断して薄片用のチップとした。そのチップをスライドガラスに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1㎜以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03㎜の厚さに調整する。スライドガラス上で薄くなった薄片の上にカバーガラスを貼り付け観察用プレパラートとする。薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察し、試料中に含まれる砂粒、その他の砕屑物を確認する。

（7）X線回折分析

メノウ乳鉢で微粉砕した試料を無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu（Kα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving Slit：0.3㎜
Voltage：40kV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：5～61°

3. 分析結果

（1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第122表に、暦年較正結果を第123表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、E-5グリッド第6層炭化物が530±30BP、C-5グリッド第3層焼土面が640±30BP、B-4グリッドのシーリ遺構の炭化材が350±30BPの値を示す。なお、B-4グリッドシーリ遺構出土の炭化物については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施し、ヒイラギ?に同定された。

次に、暦年較正結果を第123表に示した。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動及び、半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正が

あった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差をσとして計算させた結果、E-5グリッド第6層炭化物がcalAD1333-1430、C-5グリッド第3層焼土面がcalAD1305-1397、シーリ遺構黒褐色土はcalAD 1482-1629である。

第122表　放射性炭素年代測定結果

グリッド名 遺構名	層　位	試料種別	種　類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
E–5 グリッド	第6層	炭化材	—	530± 30	-27.46±0.65	570± 30	9962-1	IAAA-73057
C–5 グリッド	3層表面(焼土面)	炭化材	—	600± 30	-27.14±0.71	640± 30	9962-2	IAAA-73058
B–4 グリッド シーリ遺構	堆積土(中層)	炭化材	ヒイラギ?	350± 30	-25.52±0.38	360± 30	9962-3	IAAA-81422

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の 68% が入る範囲）を年代値に換算した値。

第123表　暦年較正結果

グリッド名 遺構名	層　位	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
E–5グリッド	第6層	534± 28	σ	cal AD 1333 - cal AD 1336	cal BP 617 - 614	0.032	9962-1
				cal AD 1398 - cal AD 1430	cal BP 552 - 520	0.968	
			2σ	cal AD 1321 - cal AD 1349	cal BP 629 - 601	0.215	
				cal AD 1391 - cal AD 1438	cal BP 559 - 512	0.785	
C–5グリッド	3層表面 (焼土面)	604± 30	σ	cal AD 1305 - cal AD 1331	cal BP 645 - 619	0.393	9962-2
				cal AD 1338 - cal AD 1364	cal BP 612 - 586	0.408	
				cal AD 1385 - cal AD 1397	cal BP 565 - 553	0.199	
			2σ	cal AD 1297 - cal AD 1406	cal BP 653 - 544	1.000	
B–4グリッド シーリ遺構	堆積土 (中層)	350± 26	σ	cal AD 1482 - cal AD 1523	cal BP 468 - 427	0.425	9962-3
				cal AD 1572 - cal AD 1629	cal BP 378 - 321	0.575	
			2σ	cal AD 1459 - cal AD 1530	cal BP 491 - 420	0.432	
				cal AD 1539 - cal AD 1634	cal BP 411 - 316	0.568	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2σは 95% である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

（2）微細遺物分析・種実同定

微細物分析結果を第 124 表に示す。植物質遺物では、主に炭化材が検出され、一部を同定し、放射性炭素年代測定の対象とした。種実は、同定可能な個体が検出されず、可能性がある不明個体1個（灰褐色、長さ 1.7 ㎜、幅 0.7 ㎜程度の偏平な非対称狭倒皮針体。表面は粗面）が確認されたのみであった。そこで、試料 600cc (959.2g)を追加し、計 800cc(1271.7g)を分析したが、同定可能な種実は検出されなかった。

動物遺存体は比較的多く検出され、大分類の結果、巻貝、二枚貝、魚類（椎骨、その他内臓骨、鰭棘、鰓条骨、前上顎骨、歯骨、歯、その他、鱗）、鳥類（頭部）、大型獣（脊椎）、獣類（頭部）などが確認された。

糞石とされる土塊の洗い出し分析の結果、径1.5㎜程度の炭化材2個、径1.5㎜程度の魚骨（鰭棘）1個、径2㎜程度の分類群・部位不明の動物遺存体が検出された。

一方、洗い出し済み試料の種実同定結果を第125表に、栽培種の種実計測値を第126表に示す。栽培種は、木本1分類群（常緑小高木～高木のシュロ属?）1個、草本7分類群（イネ、マメ類、メロン類、トウガン、カボチャ属?、ウリ科、センダングサ節）112個が検出されたほか、種類・部位不明の双子葉類の種実2個、種実の可能性を含む不明物質47個、炭化材13個が確認された。検出された種実は全て硬化しており、これは炭酸カルシウムにより置換されているためと推定される。

第124表　微細遺物分析結果

試料 / 分析量 / 種類・部位　抽出対象	シーリ遺構 黒褐色土 200cc 312.5g 植物・動物	600cc 959.2g 種実のみ	備　考
植物			
炭化材(径4㎜以上)	>50(4.3g)	43.2g	最大径4.5㎝程度
種実?		1	種類・部位不明
動物遺存体			
巻貝	>2		径2㎝程度、スガイ?
二枚貝	>1		最大径2.6㎝程度、焼けた破片含む
魚類			
椎骨	>50		最大径4㎝程度。焼骨含む。タイ類?ウナギ?
その他内臓骨	+		
棘	+		
鰓条骨	+		
前上顎骨	>5		最大径3㎝程度
歯骨	+		
歯	>10		径0.2−1㎝程度
その他	+		
鱗	>50		最大1㎝程度
鳥類			
頭部	1		
大型獣			
脊椎	1		半裁、径3㎝程度
獣類			
頭部	1		最大径5.8㎝

1）試料全1477.9gのうち200cc（312.5g）を分析、種実確認されないため600cc（959.2g）を追加、計800cc（1271.7g）分析。
2）試料中に確認される種類・部位をプラスあるいは個数表示している。動物遺存体は概査である。

栽培種は、イネの胚乳4個（B-5シーリ遺構内）、マメ類の種子15個（各地点）、メロン類の種子83個（B-5シーリ遺構内アゼより4個、79個は主に御内原B-5シーリ遺構内）、トウガンの種子1個（B-5シーリ遺構内）、カボチャ属?の種子6個（B-5シーリ内アゼより5個、B-5シーリ内アゼより1個）が確認された。特に、B-5シーリ内アゼの底面黒褐1と黒褐4からは、メロン類の種子が多く検出され、種皮表面に胎座や内果皮が付着した個体も確認された。以下に、各分類群の形態的特徴などを記す。

・シュロ属（*Trachycarpus*）？　ヤシ科シュロ属

種子の破片が検出された。灰黄褐色、長さ7.8㎜、径6㎜程度のやや歪な腎状横楕円体。背面観は長楕円形、側面観は腎形。腹面中央はくびれ、臍がある。種皮は厚く硬く、表面はやや粗面。

・イネ（*Oryza sativa L.*）　イネ科イネ属

胚乳が検出された。淡黄灰褐色、長楕円形でやや偏平。大きさは、最小で長さ5.14㎜、幅2.63㎜、厚さ1.86㎜、最大で長さ5.39㎜、幅3.18㎜、厚さ1.3㎜（いずれもB-5シーリ遺構内）。基部一端にある胚が脱落した斜切形の凹部は不明瞭。表面はやや平滑で、2～3本の隆条が縦列する。

・マメ類（*Leguminosae*）

マメ科種子が検出された。淡黄灰褐色、やや偏平な広楕円体。大きさは、最小で長さ4.86㎜、

幅2.98㎜、厚さ2.28㎜（B-5シーリ遺構内アゼ）、最大で長さ6.62㎜、幅3.54㎜、厚さ3.28㎜（B-4シーリ遺構内）。B-4・B-5シーリ遺構内出土種子には、腹面の子葉合わせ目上に長さ2.63㎜、幅0.89㎜の細長い長楕円形の臍が明瞭に露出している。その他の種子に臍は確認されないが、子葉の中間を占める幼痕がやや突出する個体がみられる（B-5シーリ遺構内アゼ）。種皮表面はやや平滑。

・メロン類（*Cucumis melo L.*）ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡黄灰褐色、偏平な狭倒皮針体。長さ6.19～8.49㎜、幅2.78～3.68㎜。藤下（1984）の基準による中粒のマクワ・シロウリ型（長さ6.1～8.0㎜）に該当する種子が主体で、大粒のモモルディカメロン型（長さ8.1㎜以上）を含む。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。表面に胎座や内果皮の破片が付着した個体も確認された（B-5シーリ遺構内アゼ底面黒褐1、黒褐4）。

第125表　種実同定結果

地区	グリッド	遺構	層位	ふるい	採集日	番号	シュロ属? 種子 破片	イネ 胚乳 完形	マメ類 種子 完形	マメ類 種子 破片	メロン類 種子 完形	メロン類 種子 破片	トウガン 種子 破片	カボチャ属? 種子 完形	カボチャ属? 種子 破片	ウリ科 完形	センダングサ節 果実 完形	双子葉類	不明	炭化材	備考
御内原北	B-4	シーリ内	黒褐3	2.5㎜	08.02.21	2			1	1	1										
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	木炭層2	2.5㎜	08.02.28	1			1		4								1		マメ類:幼根顕著(長さ2.81㎜)
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	底面 黒褐1	2.5㎜	08.02.28	3			2	1	50	5		3	2	2	1		3		メロン類:表面に胎座・内果皮付着個体確認
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐3	5㎜	08.02.25	6													1		径9.93㎜,2箇所食痕
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐4	2.5㎜	08.02.25	33		2		4	15	4						1	2		メロン類:表面に胎座・内果皮付着個体確認
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐8	2.5㎜	08.02.28	4		1													
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐9	2.5㎜	08.02.28	34		1	2	1									3		
御内原北	B-4	シーリ内	黒褐6	2.5㎜	08.02.22															3	種実確認されず
御内原北	B-4	シーリ内	黒褐7	2.5㎜	08.02.25														1		
御内原北	B-4	シーリ内	黒褐8	5㎜	08.02.25	14															種実確認されず
御内原北	B-4	シーリ内	黒褐8	2.5㎜	08.02.25														6		
御内原北	B-4・B-5	シーリ内	黒褐1	5㎜	08.02.19	16															種実確認されず
御内原北	B-4・B-5	シーリ内	黒褐1	2.5㎜	08.02.19					1									8		マメ類:臍露出(長さ2.63㎜,幅0.89㎜)
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	木炭層1	5㎜	08.02.28	12															種実確認されず
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	木炭層2	1㎜	08.02.28	9												1	1	2	不明:長さ5.34㎜,幅2.83㎜,厚さ1.15㎜,表面光沢
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	木炭層3	2.5㎜	08.02.28															5	種実確認されず
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	底面 黒褐1	1㎜	08.02.28	8					4										歯?確認
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	底面 黒褐色2	2.5㎜	08.02.28				1						1				2		
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐3	2.5㎜	08.02.25														1	3	
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐4	5㎜	08.02.25	28													1		径6.24㎜
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐6	2.5㎜	08.02.25																
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐9	5㎜	08.02.28	30							1								
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐10	5㎜	08.02.28	11	1												5		
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐10	2.5㎜	08.02.28														12		

第126表　栽培種の種実計測値

地区	グリッド	遺構	層位	イネ 胚乳 長さ	イネ 胚乳 幅	イネ 胚乳 厚さ	マメ類 種子 長さ	マメ類 種子 幅	マメ類 種子 厚さ	メロン類 種子 長さ	メロン類 種子 幅	メロン類 種子 厚さ	トウガン 種子 長さ	トウガン 種子 幅	トウガン 種子 厚さ	カボチャ属? 種子 長さ	カボチャ属? 種子 幅	カボチャ属? 種子 厚さ
御内原	B-4	シーリ内	黒褐3				6.62	3.54	3.28	6.98	3.09	–						
御内原	B-5	シーリ内アゼ	木炭層2				5.67	3.32	1.87	6.19	3.13	—						
御内原	B-5	シーリ内アゼ	底面 黒褐1				5.78	3.53	2.14	7.26	3.31	1.17				9.27	5.22	1.84
							5.38	3.06	1.88	7.53	3.66	1.97						
										8.49	3.54	1.86						
										7.96	—	—						
										7.33	3.47	1.53						
										8.31	3.26	2.25						
										7.62	3.68	1.82						
御内原	B-5	シーリ内	黒褐4	5.36	3.14	1.91	7.48	4.8	—	6.48	2.78	1.34						
				5.14	2.63	1.86	6.34	4.31	—	6.87	3.41	1.76						
							5.98	3.9	—	6.93	3.14	—						
御内原	B-5	シーリ内	黒褐8	5.37	3.4	1.39												
御内原	B-5	シーリ内	黒褐9	5.39	3.18	1.3	4.76+	3.27	2.02									
							4.43+	3.81	—									
御内原北	B-4・B-5	シーリ内	黒褐1				5.38+	4.77	2.25									
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	底面 黒褐1							7.13	3.21	1.29						
御内原北	B-5	シーリ内アゼ	底面 黒褐色2				4.86	2.98	2.28									
御内原北	B-5	シーリ内	黒褐9										11.69	8.44	3.14			

・トウガン（*Benincasa hispida* (*Thunb. ex Murray*) *Cogn.*）　ウリ科トウガン属

種子が検出された。灰褐色、長さ11.69mm、幅8.44mm、厚さ3.14mmのやや偏平な倒卵体。基部は斜切形で楕円形の臍がある。種子両面の全周の縁には段差があり薄くなる。種皮は厚くやや堅く、表面は粗面。

・カボチャ属（*Cucurbita*）？　ウリ科カボチャ属

種子が検出された。淡灰褐色、長さ9.27mm、幅5.22mm、厚さ1.84mmの偏平な倒卵体。基部は尖り、臍がある。両面全周に走る縁は明瞭で、段差があり薄くなる。種皮はやや薄く表面はやや粗面。

カボチャ（属）は栽培のために持ち込まれた渡来種で、日本で栽培しているカボチャには、16世紀に渡来したニホンカボチャ、19世紀に渡来したセイヨウカボチャ、セイヨウカボチャよりさらに後れて渡来したペポカボチャの3種がある。なお、保存状態が悪く、種までの特定に至らない種子をウリ科（*Cucurbitaceae*）にとどめている。

・センダングサ節（*Bidens Sect. Psilocarpa*）　キク科センダングサ属

果実が検出された。暗灰褐色、長さ5mm、幅0.8mm程度の針形でやや偏平。頂部の両肩から長さ1.7mm程度の下向きの逆刺をもつ針状の芒が伸びる。正中線上は細い縦隆条があり、果皮表面に伏毛が密布する。

（3）花粉分析・寄生虫卵分析

結果を第127表に示す。分析試料からは花粉化石がほとんど検出されず、定量解析が行えるだけの個体数を得ることが出来なかった。わずかに産出した種類をみると、木本花粉では複維管束亜属を含むマツ属、コナラ属アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が検出されている。

一方、寄生虫卵についてみると、シーリ遺構の黒褐色土下部からは1個体も検出されなかったが、糞石とされる土塊からはある程度の産出が認められ、回虫卵が約200個/g、鞭虫卵が500個/g検出された。

第127表　花粉分析・寄生虫卵分析結果

種　類	シーリ遺構 中部	下部	糞石
木本花粉			
マツ属複維管束亜属	1	–	–
マツ属（不明）	6	3	–
コナラ属アカガシ亜属	–	1	–
草本花粉			
イネ科	13	5	3
アカザ科	3	3	2
ナデシコ科	2	1	–
アブラナ科	5	5	4
ヨモギ属	1	5	3
タンポポ亜科	31	9	–
不明花粉	1	3	–
シダ類胞子			
シダ類胞子	13	1	1
合　計			
木本花粉	7	4	0
草本花粉	55	28	12
不明花粉	1	3	0
シダ類胞子	13	1	1
総計（不明を除く）	75	33	13
寄生虫卵（個/g）			
回虫卵	–	–	200
鞭虫卵	–	–	500

1）寄生虫卵については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

（4）昆虫同定

分析した試料のいずれも、各体節に2対の脚を持つ。これは倍脚綱Diplopoda（ヤスデ類）の特徴である。

（5）実体顕微鏡観察

糞石とされる土塊試料の外観は、長さ約4.9cm、幅約2.3cmで、黄褐色（10YR5/2）を呈する。外観的には、高杉（1984）で示された風化形態のひとつである中央縦裂のような形状も認められる。実体顕微鏡観察の結果、黒色斑や褐色斑を有し、石英粒や結晶化したマンガンも表面に付着している。

切断して断面を観察した結果、中心部は褐～明褐色（7.5YR4/3～7.5YR5/6）を呈し、空隙が顕著に認められる。また、空隙の表面を灰色や褐色の物質が薄く覆っている状況も確認された。

なお、実体顕微鏡観察の結果からは、種実・骨・鱗等の動植物遺存体は確認されなかった。

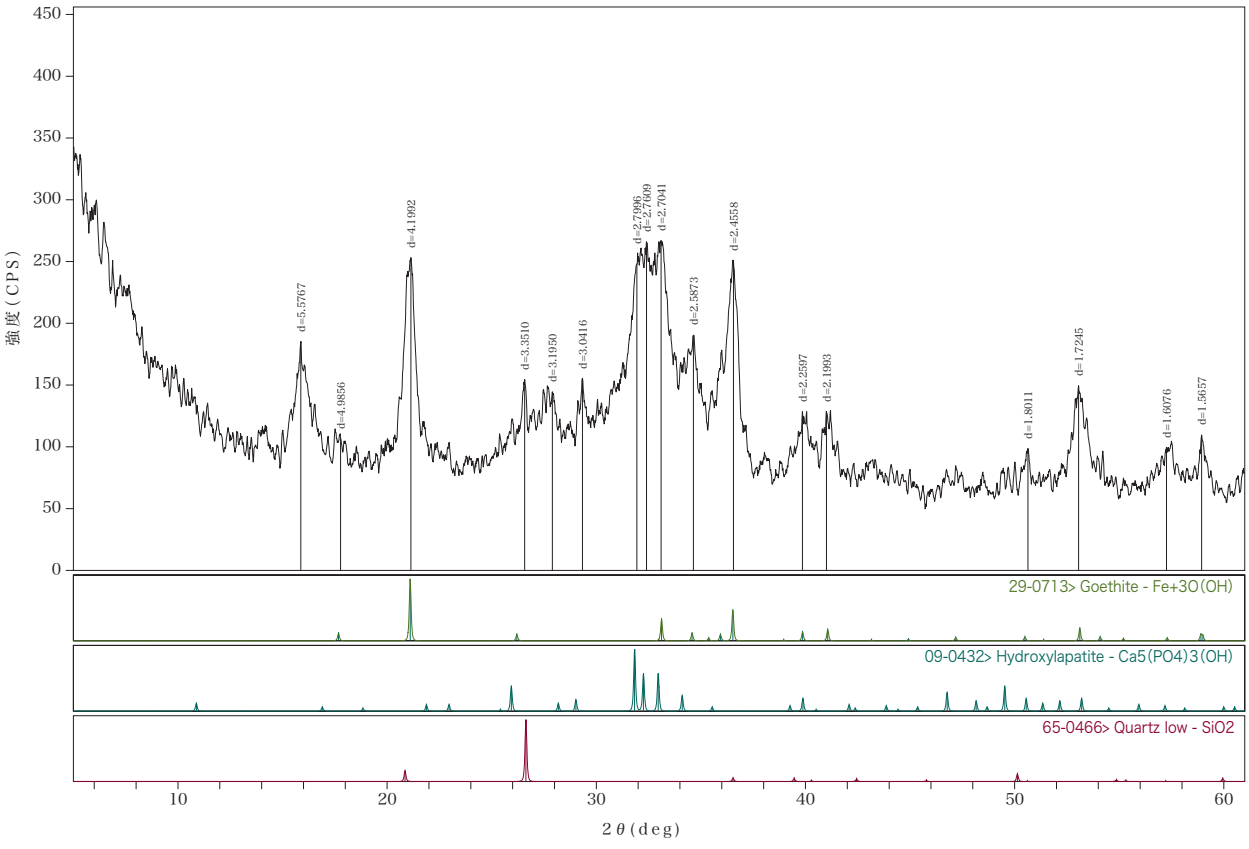
（6）薄片作成・鑑定

鏡下で確認される砕屑物は、極めて微量であり、鉱物としては細砂～極細砂径の石英および長石類の小片が認められたのみであり、他の鉱物や岩石片は認められない。また、その形状から、鉱物あるいは岩石に由来する砕屑物ではなく、生物に由来すると考えられる径0.2㎜ほどの細片も認められた。

基質は、暗赤褐色～赤褐色～黄褐色を呈し、全体的には非晶質であるが、結晶化した部分も認められる。なお、基質の中には、周囲の土壌から試料中に混入した微細なシルトや粘土を構成する鉱物と考えられる部分も認められた。

（7）X線回折分析

X線回折図を第181図に示す。なお、図中下段に参照鉱物の回折プロファイルを掲げている。糞石とされる土塊から検出された鉱物は、針鉄鉱（goethite）、水酸燐灰石（hydroxylapatite）、石英（quartz）である。なお、d=5.5767（Å）にも何らかの物質の存在を示唆する回折線が認められるが、全体的に回折強度が弱く、他に同定に有効な回折が確認されていないことから、特定するに至っていない。



第181図　糞石のX線回折図

4. 小 結

（1）焼土面の時期推定

E-4グリッド及びC-5グリッドから出土した炭化物は、石積みや造成等の状況から、E-5グリッド第6層で確認された火災直後に盛り土が行われ、その整地層上面にあたるC-5グリッド第3層表面の焼土および炭の検出層が、その次の火災の跡と想定され、それぞれ別の時期の火災層と推定されている。

今回の結果を見ると、補正年代で、E-5グリッド第6層の炭化物が、530±30BPで、C-5グリッド第3層表面が600±30BPとなり、上記の調査による所見と年代値の逆転が生じている。放射性炭素年代測定で得られる年代値は、測定試料が木材片の場合、年輪の内と外の使用部位の違いで、年輪分の年代差が生じる可能性がある。また、測定誤差を踏まえた測定年代（補正年代）に大きな差はなく、暦年較正年代においても、ともに14世紀において重複する部分も多い。このことは、2つの火災に時期差がないという推定を考慮すると、誤差の範囲内にある可能性もある。今後、さらにデータを蓄積し、このことを明らかにする必要がある。

（2）シーリ遺構内堆積土について

ゴミ穴とされるシーリ遺構において、種子などの微細物に着目した洗い出し分析を実施した。結果は炭化材と動物遺存体が多く検出されるのみで、当時の食利用を推定できるような種実遺体は検出されなかった。多量確認された炭化材は、周辺域の森林に生育していたものか、あるいは持ち込まれたものに由来すると思われ、何らかの理由により火を受け遺構内に廃棄されたことが考えられる。放射性炭素年代測定の結果では、15世紀後半～17世紀前半（calAD 1482～calAD 1629）の暦年較正年代が得られた。この年代値は、首里城が機能していた年代と調和的であることから、シーリ遺構が使用された年代を示していると考えられる。

その中で、無作為に選択した炭化材について樹種同定を実施した結果、オキナワジイ、ヒイラギ?等の広葉樹に同定された。花粉分析結果からは、複維管束亜属を含むマツ属、コナラ属アカガシ亜属が検出されている。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、他の広葉樹が不適な立地にも生育する極端な陽樹であり、伐採された土地などに最初に進入する代表的な種類である。日本に生育する複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの3種類があるが、アカマツとクロマツは沖縄には自生していない。一方、リュウキュウマツは沖縄特有で、広く生育していることから、今回の試料もリュウキュウマツに由来する可能性が高く、当時の首里城周辺に生育していたものに由来すると思われる。

草本類についてみると、イネ科、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属、センダングサ属、タンポポ亜科が認められた。これらは、いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、当時の首里城内に、これらの草本類が生育していたと推測される。一方、ゴミ穴と考えられているシーリ遺構内より出土した種実遺体には、栽培種のイネ胚乳4個、マメ類種子15個、メロン類種子83個、トウガン種子1個、カボチャ属?種子6個が確認された。特に、B-5シーリ遺構内アゼ底面黒褐1及び黒褐4からは、メロン類の種子が多く検出され、その種皮表面には、胎座や内果皮の破片が付着した個体も確認された。これらの栽培種の可食部である種実は、当時食材として

利用されたものと考えられ、シーリ遺構内より他の遺物とともに出土したことから、食後に廃棄した可能性が考えられる。

栽培種を除く分類群では、シュロ属は、中国より移入した説もある常緑高木のシュロ（*T. fortunei*〔*Hook.*〕*H. Wendl.*）、中国南部原産で栽培される常緑小高木のトウジュロ（*T. wagnerianus Becc.*）と両種の雑種があり、種子が鳥によって散布され、暖地で野生化している。草本のセンダングサ節は、開けた明るい場所を好む「人里植物」である。これらの種は、当時の首里城内および周辺域に生育していたものに由来するものと考えられる

動物遺存体は、巻貝、二枚貝、魚類（椎骨、その他内臓骨、鰭棘、鰓条骨、前上顎骨、歯骨、歯、その他、鱗）、鳥類（頭部）、大型獣（脊椎）、獣類（頭部）が確認され、食用後廃棄されたゴミに由来するものを含む可能性が想定される。また、シーリ遺構より検出された昆虫遺体は、すべてヤスデ類に同定された。ヤスデ類は、森林の林床内落ち葉や倒木、石の下、湿った日陰を好む習性があり、食性は腐植物やコケ類とされる。従って、これらはゴミ穴として利用された遺構内に生息していた可能性が高い。

（3）糞石とされる土塊について

その出土状況及び外観から、糞石の可能性が指摘される試料について分析を実施した。寄生虫卵分析においては、回虫卵、鞭虫卵が検出され、寄生虫卵含量は1gあたり約700個であった。このうち、回虫卵はその形態的特徴を考慮すると、ヒトに寄生する種類の寄生虫卵の可能性がある。寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主に感染する。鳥取県の青谷上寺地遺跡より出土した糞石の寄生虫卵分析では、1gあたり約5～350個程度が検出されており、中でも鞭虫卵が多い傾向が認められている（金原ほか2006）。これと比較すると、今回の寄生虫卵含量は多いと言える。また、検出されたシーリ遺構内堆積土（中部・下部）からは、寄生虫卵が1個体も検出されなかったことから、周囲からの混入の可能性は低い。

一方、X線回折において糞石から検出された鉱物のうち、水酸燐灰石（hydroxylapatite）は生物の骨や歯などに由来する可能性がある。薄片観察結果からも、生物に由来すると考えられる細片が認められたほか、微細遺物分析からも魚骨（鰭棘）、分類群・部位不明の動物遺存体が検出されることから、水酸燐灰石は動物遺存体に由来する可能性がある。糞石のX線回折の事例としては、福井県の鳥浜貝塚や石川県の上山田遺跡から出土した糞石の事例があり、いずれからも水酸燐灰石（本文中ではヒドロキシルアパタイトと表記）が確認されている（辻1984）。糞石断面に骨片が多量に認められることから、この水酸燐灰石は動物骨片に由来するとされている。

また、薄片観察結果では、基質は暗赤褐色～赤褐色～黄褐色を呈し、全体的には非晶質であるが、結晶化した部分も認められる。X線回折では針鉄鉱が確認されており、おそらく、基質の色調は酸化鉄や非晶質の水酸化鉄などに由来すると考えられる。酸化鉄や水酸化鉄は、糞石とされた塊の形状を保っているものであると考えられ、有機質な部分がその後の時間経過により、酸化鉄や水酸化鉄に置き換わった可能性が想定される。

今回の結果は、既存の調査事例とも調和的である。以上のことから判断すると、対象とした試料は

ヒトの糞石である可能性があり、検出された魚骨を含む動物遺存体は、食用されたものに由来する可能性がある。

〈引用文献〉

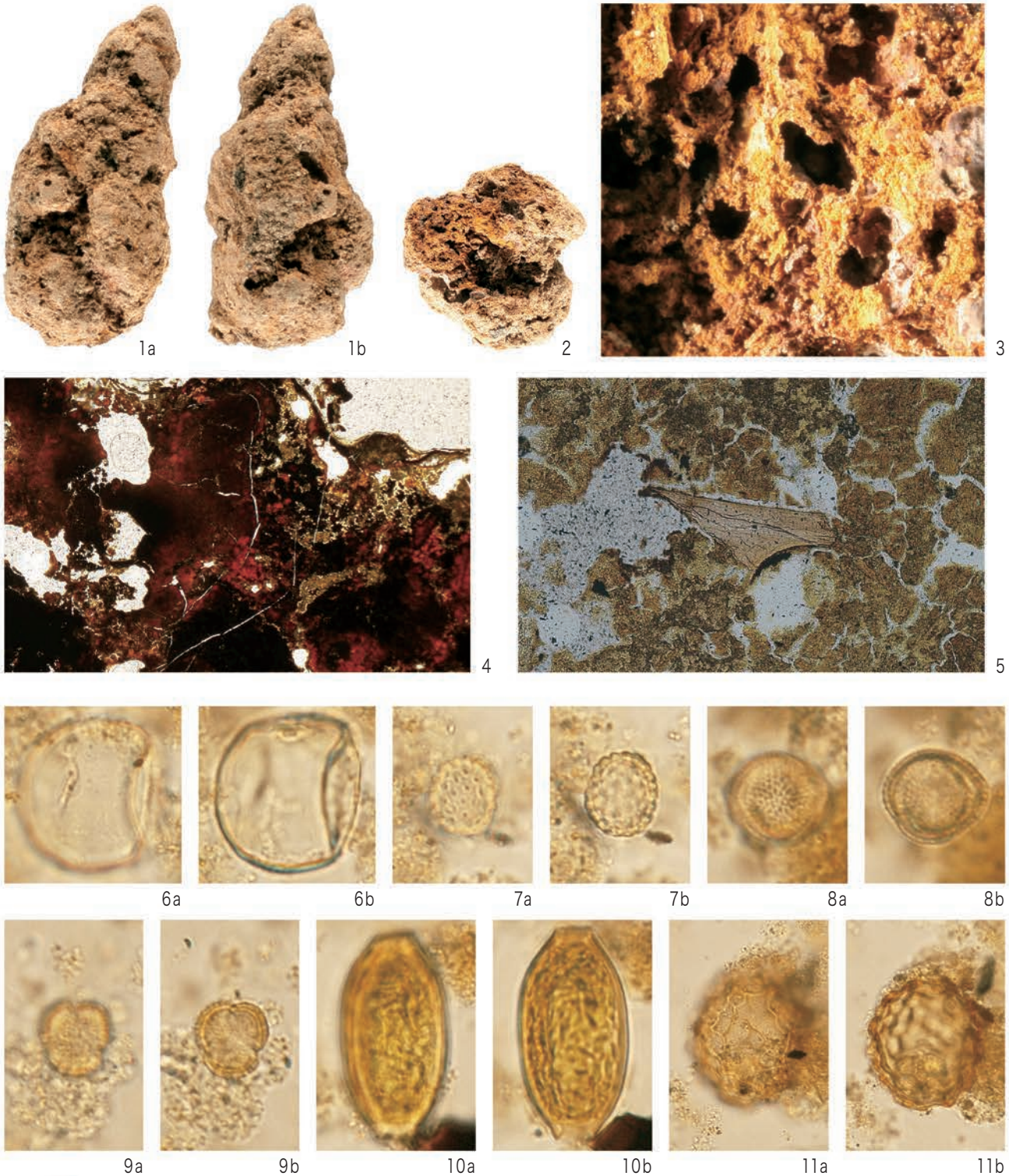
石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図』石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

金原正明、福冨恵津子、金原正子 2006「出土糞石の分析と分析方法の検討」『青谷上寺地遺跡8（第2次～第7次調査区発掘調査報告書）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告10鳥取県埋蔵文化財センター,161-165.

中山至大、井之口希秀、南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会,642p.

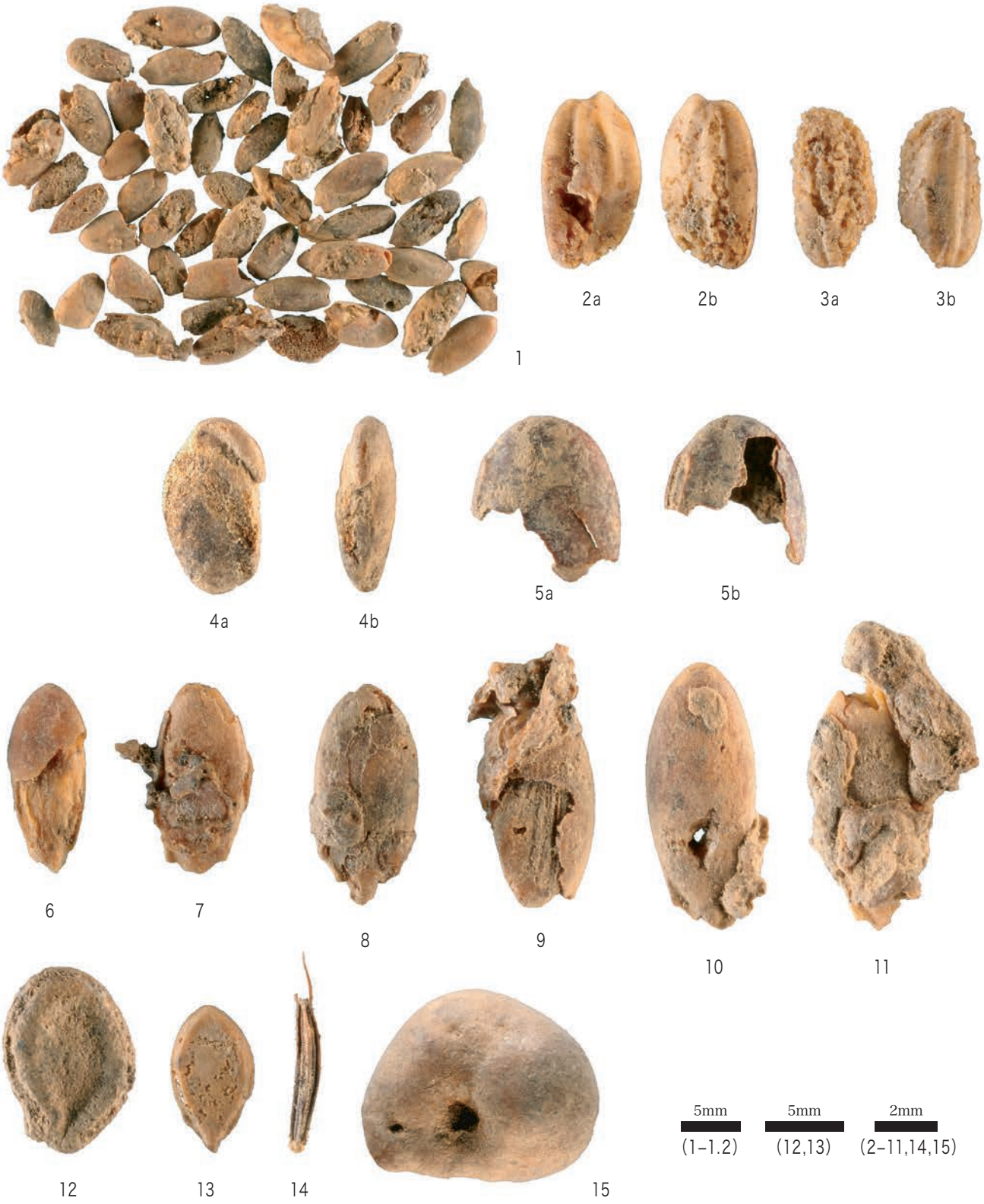
高杉欣一 1984「貝塚出土糞石の2.3の問題」古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎,535-537.

辻誠一郎 1984「糞石の構成物と包含花粉群集」古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎,531-534.



1．糞石
2．糞石（断面）
3．糞石（断面:拡大）
4．糞石薄片の状況1
5．糞石薄片の状況2（生物由来の破片か）
6．イネ科（糞石内）
7．アカザ科（糞石内）
8．アブラナ科（糞石内）
9．ヨモギ属（糞石内）
10．鞭虫卵（糞石内）
11．回虫卵（糞石内）
12．種実（シーリ遺構 黒褐色土）

図版164　糞石・糞石薄片・花粉化石・寄生虫卵・種実遺体



1．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内アゼ)
2．イネ 胚乳(B–5 シーリ内)
3．イネ 胚乳(B–5 シーリ内)
4．マメ類 種子(B–5 シーリ内アゼ)
5．マメ類 種子(B–4・B–5 シーリ内)
6．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内)
7．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内)
8．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内)
9．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内アゼ)
10．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内アゼ)
11．メロン類 種子・果実(B–5 シーリ内アゼ)
12．トウガン 種子(B–5 シーリ内)
13．カボチャ属? 種子(B–5 シーリ内アゼ)
14．センダングサ節 果実(B–5 シーリ内アゼ)
15．シュロ属? 種子(B–5 シーリ内)

図版165　種実遺体

第７章　総　括

１．はじめに

本報告の対象となった御内原北地区には、横内家資料平面図を参考にすると、内郭石積み、女官居室ほか数棟の建物、淑順門南側の階段や仕切りの石積み、そこから連なる通路等が存在していたとされる（第３・４図）。これら記録類との照合を含め、次に遺構・遺物に大別して考察を行うこととする。

２．遺構

首里城跡は、戦前から戦後にかけての度重なる改変のため、特に表層付近に位置する近世以降の遺構や堆積層については、残りがよくない。このような中で、今次調査においては断片的であるが、15世紀前半から戦後にかけての様々な遺構を検出した。

特に平成19（2007）年度調査において検出した遺構は多様で、その状況から造成の工程や、その後の変遷を読み取ることができる。その一方、平成11（1999）年度の調査では、内郭石積みや近代頃まで機能していたと考えられる台形状石組みのほか、両調査年度で共通する基壇・礎石建物跡を検出している。次に、本報告の対象となる遺構の変遷をまとめ、各種文献や絵図・平面図との照合を行う。これに続いて、検出の状況から工程・機能を想定復元できる例として造成遺構を特化し、遺構の考察としたい。

遺構の変遷

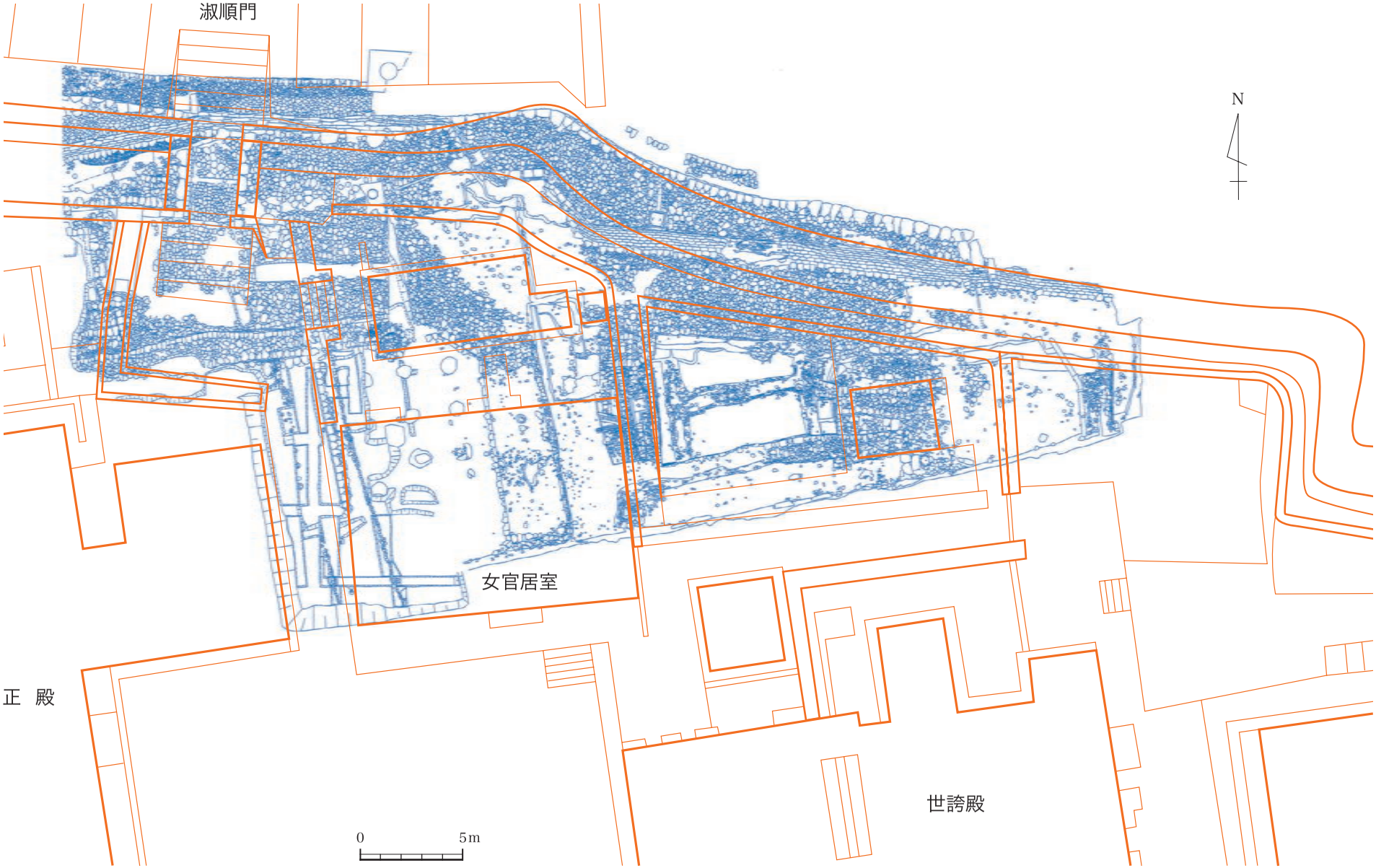
本報告による遺構の時期は、中世から近・現代におよび、その状況から首里城における変遷の一端をうかがい知ることができる。本報告の第４章では、個々の遺構・層序について報告したが、ここでは、下層の古い段階から順に、その変遷を辿ることとする。

今次調査により確認された下層部分には、遺構は確認されないが、木炭を主体とする堆積層が確認されている（第６層）。本層からは、14世紀後半から15世紀前半の陶磁器が出土していることから、この時期の火災面として捉えており、その放射性炭素年代測定の結果は、530±30BP（補正年代）としている。

次に、火災の直後に大規模な造成工事が行われ（造成遺構、第３～５層）、これとほぼ同時期に内郭石積み（石積み1）が築造されたものと思われる。造成後は、基壇や側溝を有し、強固に舗装された礎石建物が再建されている（基壇状遺構・礎石建物跡）。

そして、この再建された建物は、検出した遺構面が被熱を受けていることから、再び火災により焼失したと見られ、その表面には、焼けた遺物が広がる状況が確認できる（第３層表面）。この遺物の年代も、14世紀後半から15世紀前半を指し、先の第6層と時期差が見られないことから、第６層の火災から数年ののちに再建が行われ、その後まもなく火災に見舞われたことが想定できる。なお、本層の放射性炭素年代測定結果は、640±30BP（補正年代）としている。

この結果から、調査区には殆ど時期差のない２枚の火災面が存在し、最初の火災後の再建にあたっては、多量の土砂を用いて造成が行われ、その堆積状況や遺物等の年代から、短期間で施工



第 182 図　遺構平面図と横内家資料平面図の重ね図

されたことが考えられる。

その後は、尚真王の在位期間（1477〜1526）に行われたとされる外郭拡張工事により、御内原から外郭へ通ずる淑順門及び階段が敷設され（階段遺構ほか）、現在の復元対象となるフォルムが形成されることになる。

また、御内原のゴミ穴、廃棄物貯蔵施設と考えられるシーリ遺構のような特異な遺構も確認されている。この遺構内部からは、膨大な量の自然遺物や1620〜1630年代の陶磁器がまとまって出土している点と、350±30BP（補正年代）とする放射性炭素年代測定結果から、遺構の年代は17世紀前半の時期と考えられる。出土した遺物からは、そこでの生活を彷彿とさせるとともに、当時のゴミ処理の一端を明らかにしている。

文献・絵図史料との照合

次に、これらの遺構の性格を類推するにあたり、まずは検出された遺構を横内家資料平面図（第3・4図）、阪谷図（第6図）に重ね、該当する区画が存在するかを確認した。照合の結果、内郭石積み外面（石積み1）、淑順門南側の階段遺構、台形状石組み及びその東側に延びる側溝状遺構が、横内家資料平面図に符合することが判明した（第182図）。これにより、前記した遺構は、平面図の製作時期とされる明治初期まで存在していた可能性がある。しかし、シーリ遺構に関しては、近世に相当するものの、ゴミ穴という性格からか、室内の施設であった可能性があるためかは判然としないが、現時点で文献や絵図等にその姿を見ることができない。

なお、このうち台形状石組みについては、1931（昭和6年）頃製作とされる阪谷図において確認することができない（第6図）。その理由として、首里城内には1924（大正13）年に沖縄神社が創設され、その中で御内原内において大きく改変がされることから、その際に撤去された可能性がある。

その他、中世に相当する造成遺構や礎石建物跡等の遺構は、現存する絵図や平面図に記載が見られない。次に、確認された火災面の遺物及び分析結果等の情報と、文献上に見える正殿の火災年代をすり合わせ、年代特定の参考としたい。

まず、史実上の首里城正殿の火災を挙げると、1453年の志魯布里の乱での焼失（『李朝実録』）、1459年（『明実録』）の火災のほか、1660年（『球陽』）、1709年（『球陽』）の火災があり、最後に1945年の沖縄戦での消失がある。この中で、遺物の年代としている14世紀後半から15世紀前半とする火災面の年代を照合してみると、1453年及び1459年の2件の記録が該当する。この該当する年代は、繰り返すが、第1に出土陶磁器の年代の範囲内にあること、第2に造成の工程が短期間で行われている点、第3に放射性炭素年代測定により得られた両層の年代値（第6層：530±30BP、第3層：640±30BP、ともに補正年代）から見ても大きな狂いはないものと思われ、第6層が記録上の1453年、造成後の第3層表面が1459年の火災面である可能性が考えられる。なお、第6層と第5層における放射性炭素年代測定結果では年代の逆転が生じているが、測定試料が木材の場合、使用部位により、年輪の内と外では年輪分の年代差が生じることがあり、この結果は誤差の範囲内にある可能性がある。

また、火災に関連する事項として、シーリ遺構の上層には木炭層が堆積しており、本層も火災の痕跡を示すものと思われる。遺構内の遺物が17世紀前半で、放射性炭素年代測定の結果も350±30BP

（補正年代）を指している点から、その後の史料上に見える火災年代を照合すると、1660年及び1709年が該当し、そのいずれかの火災により、正殿及び周辺の建物にも延焼し、これに伴い当遺構も廃絶したことが考えられる。

造成遺構の工程・機能

今回検出した２枚の火災面の間には、膨大な量の石や土砂を用いた造成が行われている。この状況は、新たな建物を再建することを見据え、事前に綿密な計画の上で施工されたことをうかがわせている。ここでは、造成遺構及び堆積層の状況から工程を復元し、その機能について考えてみたい。

まず、はじめに造成の工程から復元してみたい（第４章・第10図参考）。第６層の火災直後、土留めとする石灰岩切石、野面石、石灰岩礫に加え、造成土として赤色土、瓦、コーラル（石灰岩粉）、礎石の砂岩（ニービ）を資材として用い造成を開始するが、事前に造成土の流出を防ぐ必要から、台地の縁辺を囲うように、強固な土留め石積みを行う（石積み２）。この土留めとなる石積み２は、検出範囲で長さ15ｍ、高さ170㎝、幅は最大で150㎝を測る両面積みの石積みで、北面は切石、南面は野面石で積まれており、南面は造成土により埋められることを前提に積まれたことがわかる。

続いて、火災面（第６層）を平場にして小礫を敷き詰め根固めとし（第５e層）、石積み２の南面にあたるように、赤色土を南北方向へ高さ約100㎝、幅約250～300㎝のサイズで、細長く数列積み上げて突き固め（第４層）、その傾斜面に石灰岩礫を貼り付け土留めを行う（土留め１・２）。次に両赤色土の間に瓦を投入し（第５層）、最後にその上面を赤色土で覆うことで（第４a層）、表面は赤色土一色となる。

この時点で北側に内郭石積み（石積み１）を積み上げ、石積み２との間を栗石で埋める。そして、ここで一時的な土留めの役割を果たした石積み２の天端を破壊し、基壇の縁石及び側溝を配置し（基壇状遺構・側溝遺構）、この内外を、赤色土上面からコーラルによる舗装を行う（第３c層）。また、その上に石灰岩礫を投入し（第３b層）、次に再びコーラルで舗装を行うが、礎石の沈み込みを防ぐ目的で、その下部のみコーラルを厚く補填し、礎石の形状に合わせてくぼませる（礎石抜け穴・第３a層）。その後礎石を配置し（礎石建物跡）、周辺を堅く突き固める。この一連の造成ののち、建物の柱が据えられることになる。

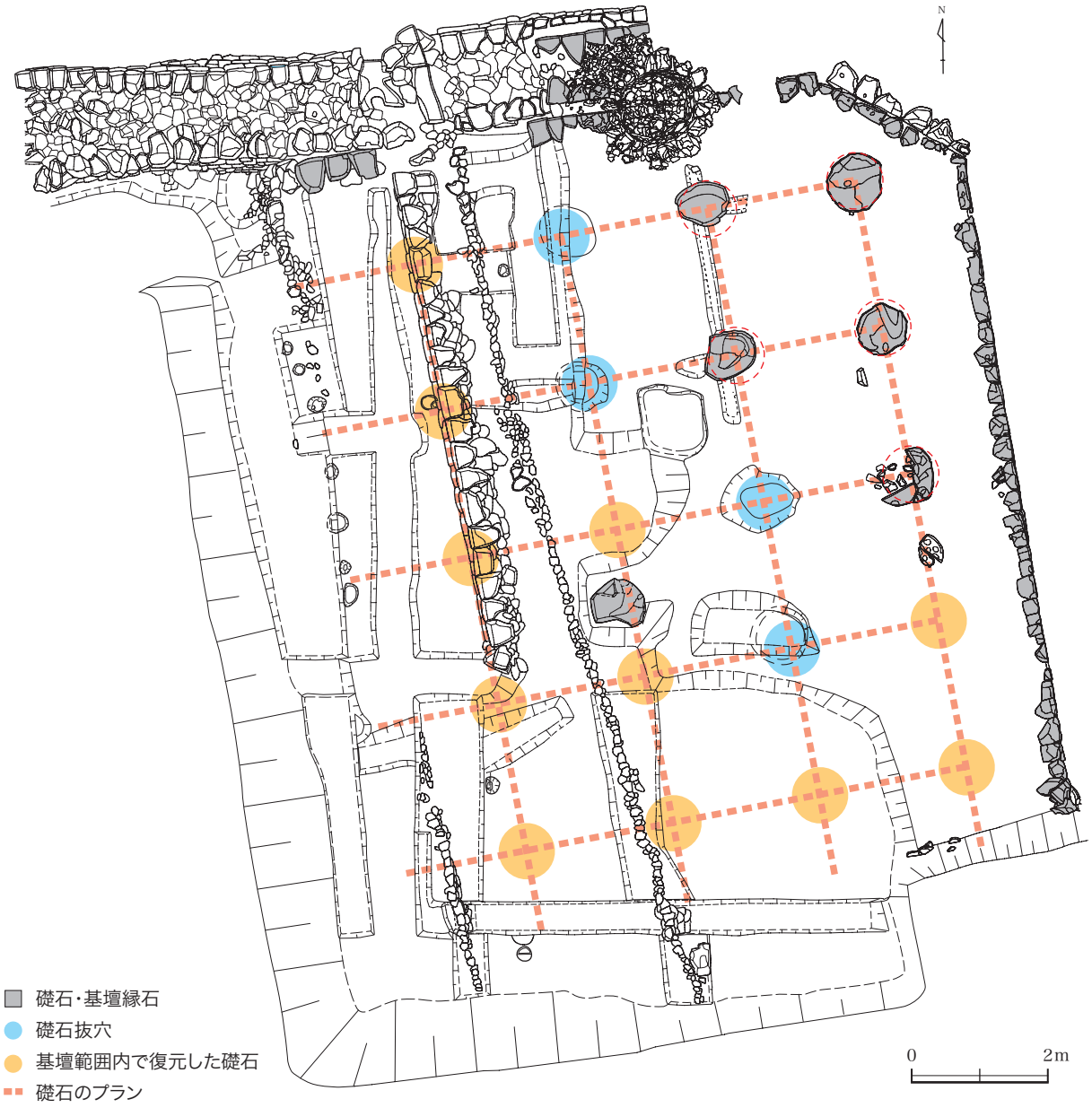
今回確認された規則性を持つ礎石及び礎石抜け穴は、南北に３間、東西に２間の９ヶ所であるが、これに付随する基壇の縁石は、北東角を起点とし、南及び西側に延びていることから、その範囲内において、残存する礎石中央部を結ぶ約220㎝間隔で礎石を配置すると、南北に４間、東西に３間の区画で、合計20ヶ所の礎石の配置が可能である。この類推から、本遺構は第183図のように、少なくとも南北に10m、東西に７mを超える規模であったことが考えられる。

続いて、この中で確認された造成土は、第３層から第５層までで、その厚さは合わせて約130㎝を測る。このうち赤色土（第４層）の層厚は最大で約100㎝にもおよび、造成土の大半を占めるが、この赤色土は分層ができないほど均質なことから、同一地域の赤色土を掘削し、その後すぐに造成土として投入したことが考えられる。このことから、コーラルによる舗装、礎石の配置までが連続して短時間により施工されたことがわかる。

なお、この造成及び土留めの状況は、過去に正殿跡の発掘調査でも確認されている（沖縄県教育委員会1992）。その際には、土留めが少なくとも３条検出され、正殿裏手の井戸から北側へ放射線状に広がっており、今回検出した土留めのラインとも類似する軌跡を辿る。

以上の状況から、この造成土及び土留めの機能を想定してみたい。まず赤色造成土間に多量の瓦が投入されている点及び、土留めが井戸を起点として放射線状に広がるように、石積み２へつながる点から、大雨等により内郭に貯まった水を、瓦間の隙間を通して石積み２及び、内郭石積み裏込めへと逃し、一帯の冠水を防ぐ暗渠の機能が考えられる。また、この石積み２は、西へ行くと北殿下へ潜り込むように延びており、その延長には、寒水川樋川や瑞泉門前の湧泉があることから、石積みや裏込め内を通過した雨水は、これらの井泉や樋川に導かれるとともに、そこからあふれた水は、その地形及び位置的にみて、最終的に円鑑池や龍潭へ至ることが考えられる。

この状況から、首里城では14世紀後半から15世紀前半の時期には、石積み及び、建物等に係る基壇や礎石建物はもとより、その事前に基盤となる大規模な造成や、地下の上下水道とも言える暗渠等を計画的に敷設することが可能な、高度な土木技術を有していたことがわかる。



第183図　礎石建物跡の想定図

3. 遺物

今次調査で得られた遺物の量は、遺物収納ケースで532箱、総点数で59,312点と膨大な数におよぶ。この量は首里城跡の中でも、御内原という特別な場所に起因しているものと思われる。また、その種別も多岐にわたり、とりわけ陶磁器においては器種やサイズ、産地においてバリエーションに富む点でも特徴と言える。ここでは、出土遺物を人工遺物と自然遺物とに分けてまとめを行う。

人工遺物

調査年度別に見た陶磁器の出土傾向からすると、平成11（1999）年度においては、14世紀後半からの碗をはじめとする小～中型の製品から、酒会壺、青磁器台等の大型品も見られるが、総体として近世以降に相当する中国産・本土産の白磁、染付のほか、沖縄産の陶器が多い傾向にある。また、瓦においては、正殿の棟飾りとして貼付されていたと思われる明朝系に属する役瓦等が多量に出土している。これらの遺物は、大半が撹乱層からの出土であることから、戦後に正殿地区の遺物を含んだ土砂を、調査区内に造成土として持ち込んだ可能性が考えられる。その根拠として、平成19（2007）年度調査区は、正殿に近接するものの、近世段階の遺構は一部を除き削平されて残存せず、その撹乱層下からは、遺構に伴って中世の遺物が出土している。中でも輸入陶磁器については、大きく①14世紀後半～15世紀前半、②16世紀後半～17世紀初頭、③17世紀前半の3グループに大別することができる。次にその傾向を一瞥してみる。

まず、①の14世紀後半～15世紀前半に属するグループは、第6層の火災層から第４・５層の造成層、第3層の造成・火災面までの層・遺構から集中して出土している。その種別は、中国産の青磁が最も多く、次いで褐釉陶器、白磁と続くが、青磁では碗・皿類が多く、これらは多くを粗製が占める傾向にあり、その中に酒会壺等の大型品が少量含まれている状況である。

その中で、火災による堆積層と考えている第6層においては、中国産白磁碗、青磁碗とともに骨鏃が得られている。本層の時期は、先述したとおり志魯布里の乱が起きた1453年に比定されることから、この骨鏃の存在は興味深いものがある。

また、第5層においては、膨大な量の大和系瓦とともに、中国産青磁、褐釉陶器、朝鮮産象嵌青磁、タイ産褐釉陶器等が出土している。これらは造成の目的で投入された二次的な遺物と言えるが、その造成工法及び遺物の使用・廃棄年代を考える上で注目される事例と言える。

次に、その上に造成された第３層及び基壇・礎石建物跡の表面には、被熱を受けた多くの遺物が出土している。陶磁器は中国産青磁の碗、鉢類が多く見られる中、トリの餌入れのような珍しい遺物も含まれている。これらはすべて破片での出土であるが、接合率が高いことから、火災により焼け落ちた状態を保っていることが考えられる。

また、本層からは、銭貨をはじめとする金属製品も多く出土している。銭貨は被熱や錆化により、全体的に保存状態が悪いことから、銭文の判読はX線により行った。その結果、洪武通寶（初鋳1368年）や永樂通寶（初鋳1408年）が多数を占め、その中に宋及び元代の銭貨がわずかに含まれることが判明した。この結果は、陶磁器の年代や放射性炭素年代測定の年代値とも大きな齟齬はない。

続いて、②の16世紀後半～17世紀初頭にあたるグループは、淑順門周辺に多く出土し、中でも石積み６前面（西側）の堆積土から多く出土している。中国産白磁、染付、褐釉陶器のほか、華南三彩も含まれ、①の時期より産地及び器種が豊富になる。

最後に、③17世紀前半のグループは、シーリ遺構から出土した一括遺物である。中国産染付・白磁の碗、小碗、小杯が多い傾向にある。その他、沖縄産の陶器で、小型の甕や筒もの、火炉等が含まれており、器種としては一部で現在の沖縄産陶器に通ずるものがあるが、中には口唇や底部に二枚貝を目痕とした製品が見られる。この点及び口縁部ほかの成形法から、これらは沖縄の土を用い、薩摩焼、特に苗代川系の技法により成形・窯詰めされた製品の可能性があるという。この陶器は、これまでナカンダカリヤマの古墓群（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）、首里城跡等で断片的に出土していたものの、今回1620～1630年代とする中国産陶磁器と共伴することから、この17世紀前半の時期に沖縄において陶器が制作され、首里城内で消費されていたことを示していると言える。

自然遺物

自然遺物は貝・骨類のほか、特異な遺物として種実類やムシの類、糞石が得られている。

貝類においては、シーリ遺構及びそれ以外の地点について分析を行い、シーリ遺構以外では、少なくとも海産腹足類22科73種、海産二枚貝類18科45種、陸産腹足類５科７種が確認されている。また、その優占種及び生息域は、内湾のカンギクと河口干潟のアラスジケマンが多いとする結果が得られており、他のグスク時代遺跡と共通している。なお、シャコガイやクモガイ等の大型貝類の出土が少ないのは、城外に持ち出されたことが考えられる。

シーリ遺構内の貝類は、少なくとも海産貝類13種、陸産貝類11種が得られており、海産貝類では、カンギクが比較的多く、その他ハマグリ類・アラスジケマン・イソハマグリ等の二枚貝類が少数抽出されている。この結果から、カンギクが重要な食用貝類として位置付けられるものの、全体に個体数が少ないことから、シーリ遺構内には基本的に貝類を廃棄していなかった可能性が考えられる。このことは、遺構外においても大型の貝類が少ない点及び、シーリ遺構内の堆積状況から、廃棄物が定期的に掻き出されていたとする想定とも調和しており、城内のゴミは一時的にストックするものの、基本的に城外へ持ち出して廃棄していた可能性がある。

次に、陸産貝類では少なくとも11種が認められ、林縁生息種が少ない点や、微小陸産貝類の出土状況から、遺構周辺は壁に囲まれ、人手の入ったわずかな木立が存在していたという環境の推定ができた。調査区となった御内原は、近世以降に製作された各種の絵図や平面図及び、沖縄戦以前の写真においても、特に東側に木立が密集して確認でき、出土した陸産貝の林縁生息種はその環境を示すものと思われる。

また、シーリ遺構については、サンプル中に活動性が高い陸産貝が見られない点からして、遺構は何らかの囲いや壁により覆われていたことが考えられる。さらに、多量のヤスデ類の遺体が含まれることから、隙間のある壁に囲まれた空間であった可能性を示している。このことは地表を掘りくぼめ、円形に石を組んだ遺構の構造や、横内家資料平面図により何らかの建物内に存在していた可能性がある点とも符合する結果と言える。

次に、動物骨・魚骨について、特にシーリ遺構内の遺物に関しては、堆積土全量をフローテーションによる洗い出しを行い、選別後は微小骨に至るまで、膨大な数の標本による詳細な比較同定を行った。その結果、特に魚骨について多くの種を特定することができた。その中で、フエフキダイ科、ブダイ科、

ベラ科、クロダイ属が優占種の上位を占めている。また、サバ科・シイラ・ニシン科・アジ科小型種・ボラ科等の珊瑚礁以外の海域で棲息する魚類も見られ、利用魚種の多様さを示した一方、ブダイ科においては２種が限定して出土しており、持ち込むにあたり選択が行われていた可能性がある。また、ブダイ科、ベラ科の咽頭骨が出土しない点で、内蔵を除去した状態で城内に持ち込んでいた可能性が指摘できる。この分析により、当時の漁撈形態及び魚類の処理方法、食材の一端を復元することが可能と思われる。

そのほか、自然化学分析により土壌分析や糞石の微細遺物分析を実施し、花粉やヒトの寄生虫卵を検出している。この糞石の出土により、城内での排泄は、「冠船之時御座構之図」等の絵図に見られるような「雪隠所」において「糞箱」とする容器に行い、シーリ遺構のようなゴミ穴に生活ゴミとともに破棄していたとする習俗を想定することができるとともに、花粉化石からは周辺の自然環境を読むことができる。

また、ヒトの遊離歯も7点得られており、その内４点が乳歯で、２点が齲歯（虫歯）であった。このことから、御内原内には乳歯が生え替わる７歳前後の子どもが生活していた可能性があり、齲歯になると城内で抜歯を行っていたことが考えられる。また、抜歯後は乳歯を含め、ゴミとともにシーリ遺構内に廃棄している点で、抜歯後の歯の取り扱いに関する習俗についても考えさせる事例となった。

４. おわりに

以上、平成11（1999）年度及び平成19（2007）年度調査分の首里城跡御内原北地区Ⅰの報告を行った。

今回報告の対照となった調査区の内、特に平成19（2007）年度の調査区では、調査の後半から終盤にかけて多くの遺構が検出された。これらの遺構は、首里城の幾多の変遷を物語るとともに、当時の土木技術水準の高さを示した。

また、膨大な数におよぶ出土遺物、特に陶磁器の様相からは、周辺諸国とのつながりや本県における陶器生産のはじまりを垣間見ることができた。さらに、シーリ遺構や出土した自然遺物からは、当時の食生活及びゴミ問題、排泄に関する習俗をも知り得る情報が、多数得られている。今後は、周辺の調査成果及び文献・記録資料の情報を合わせることにより、謎めいた御内原での生活を、よりリアルに復元できるものと考えている。本報告がその端緒となれば幸いである。

最後ではあるが、発掘調査中は多くの方々による助言・指導を賜り、遺構の記録作成に際しては、多くの埋蔵文化財センター職員の協力を得た。また、本報告書は２ヶ年におよぶ整理作業の間、多くの様々な分野の方々による分析・助言を賜り、多くの資料整理嘱託員・作業員の協力によりまとめることができた。ご協力いただいたすべての皆様に対し、末筆ながら記して感謝申し上げたい。

〈参考文献〉

沖縄県教育委員会 1992『首里城跡 首里城正殿跡の遺構調査』沖縄県文化財調査報告書第107集 沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『ナカンダカリヤマの古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第26集　沖縄県立埋蔵文化財センター

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しゅりじょうあと
書 名	首里城跡
副 書 名	御内原北地区発掘調査報告書
巻 次	Ⅰ
シ リ ー ズ 名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第54集
編 著 者 名	仲座久宜、新垣 力、上原 靜、大城 歩、大堀皓平、片桐千亜紀、岸本竹美、黒住耐二、菅原広史、知念隆博、土肥直美、パリノ・サーヴェイ
発 行 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
発 行 年 月 日	2010（平成22）年3月31日

ふ り が な	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
しゅ り じょう あと 首 里 城 跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりとうのくらちょう 首里当蔵町	47201	—	26° 13′ 2″	127° 43′ 10″	1999.09.01 ～2000.03.31 2007.10.29 ～2008.02.28	900㎡ （平成11年度: 約600㎡、 平成19年度: 約300㎡）	国営沖縄 記念公園 首里城 地区整備

所収遺跡名	種 類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首 里 城 跡	城 跡	グスク時代 ～近代	造成遺構 土留め石積み 石積み 基壇状遺構 シーリ遺構 石階段	青磁、白磁、染付 その他輸入陶磁器 褐釉陶器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器 瓦質土器 カムィヤキ、土器 瓦、塼 金属製品 銭貨 煙管 円盤状製品 貝製品、骨製品 木製品、石製品、 石造製品、 貝類・動物遺体 種実類、糞石	各種の遺構・層序に伴って、多くの輸入陶磁器をはじめとする遺物が得られている。 特に、造成遺構や2枚の火災面、シーリ遺構等に係る遺物は、遺構の時期を特定する上で参考になる。 特に、シーリ遺構から出土した沖縄産陶器は、17世紀前半に位置付けられ、薩摩焼の流れを汲む陶器として特筆できる資料である。

要 約	本報告の対象となった御内原は、正殿の裏手に位置する国王及びその親族、女官にのみ立ち入りが許された空間とされる。今回の調査により、内郭石積みの外面が検出されるとともに、この内郭部を造成した痕跡や石積み等の遺構が検出されている。これらの状況から、火災後に大規模な造成を行っていたことが判明した。また、17世紀前半のゴミ穴であるシーリ遺構からは、陶磁器や多くの獣魚骨、種実類のほか、糞石も得られており、当時の生活を復元する上で参考になるものと思われる。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第54集

首　里　城　跡

— 御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）—

発 行 年　2010（平成22）年３月31日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL：098-835-8751・8752

印　　刷　株式会社 尚生堂
〒901-2114 沖縄県浦添市安波茶 1-6-3
TEL：098（876）2232

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2010 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

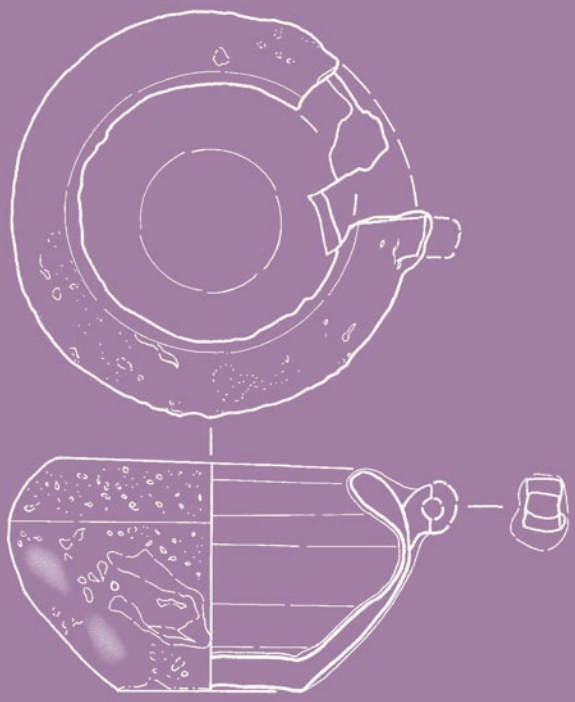


表　紙：B･C-4･5グリッド遺構平面図
裏表紙：中国産青磁餌入れ